

# 沖手遺跡・久城東遺跡

-一般県道久城インター線久城工区地方道路交付金（改良）工事に  
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-

2010年3月

島根県益田市教育委員会

# 沖手遺跡・久城東遺跡

－一般県道久城インター線久城工区地方道路交付金（改良）工事に  
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2010年3月

島根県益田市教育委員会



調査前の遺跡全景（上空南から）

卷頭写真図版2 沖手遺跡



調査区全景（上空北東から）



調査区東側全景（南東上空から）



調査 5・6 区全景（上空から）



調査 7 区全景（上空から）

巻頭写真図版 4 沖手遺跡



調査 8 区全景（上空から）



調査 8 区全景（東から）



7区 墓51土壤墓



8区 墓67出土土師器壊・皿・柄鏡

卷頭写真図版 6 沖手遺跡



7区 墓45出土土師器壺・皿



白磁碗・青磁碗 (47-3・47-13)



竪穴住居跡（SI01）の完掘状況



国産陶磁器類の伴出状況（SD02）

卷頭写真図版 8 久城東遺跡



空中からみた遺跡の全景（南東から）



日本海を臨む鳥瞰風景（南東から）

## 序

本報告書は、益田市教育委員会が島根県益田県土整備事務所から委託を受けて、平成16年度から平成18年度にかけて現地調査を実施した県道久城インター線建設予定地内の沖手遺跡と、平成19年度に同予定地内の久城東遺跡の発掘調査結果をまとめたものです。

沖手遺跡の調査により、平安時代末から室町時代、さらには近世初頭にかけて益田川下流域に大規模な集落跡が存在したことが明らかとなりました。また、久城東遺跡の調査においては、弥生時代中期後葉の堅穴住居跡がみつかり、久城台地における当時の人々の暮らしの一端をのぞくことができました。

島根県教育委員会の益田道路の調査と、益田市教育委員会の都市計画道路中吉田久城線に伴う調査をあわせるとき、高津川と益田川の河口部と久城台地の歴史のみならず、この益田の歴史を語る上で極めて重要な遺跡と考えられ、貴重な資料を得ることができました。また、沖手遺跡については周辺部に遺跡の広がりがあることから、今後も調査・研究が必要となります。

最後になりましたが、発掘調査及び本報告書の刊行にあたり、ご協力いただきました島根県益田県土整備事務所をはじめ、地元の方々並びに関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成22年3月

益田市教育委員会  
教育長 三浦正樹

## 例　　言

1. 本書は島根県益田県上整備事務所から委託を受けて、益田市教育委員会が平成16～19年度に実施した県道久城インター線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査地は以下のとおりである。

沖手遺跡　益田市久城町　　久城東遺跡　益田市久城町
3. 調査主体　益田市教育委員会（調査組織は本文中に記した。）
4. 調査に係る経費は島根県益田県上整備事務所が負担した。
5. 掘図中の方位は測量法による第Ⅲ系座標X軸の方向を指す。また、平面直角座標系XY軸は世界測地系による。レベルは海拔高を示す。
6. 現地調査及び報告書作成にあたって下記の方々からご指導、助言をいただいた。（所属は当時）

小野正敏（国立歴史民俗博物館）、村上　勇（広島県立美術館）、大庭康時（福岡市教育委員会）、中村唯史（三瓶自然館指導員）玉山芳英（文化庁記念物課調査官）、五味文彦（放送大学教授）、大山喬平（京都大学名誉教授）、益田兼房（立命館大学教授）、井上寛司（大阪工業大学教授）、林　正久（島根大学教授）、市村高男（高知大学教授）、穴澤義功（製鉄遺跡研究会代表）、山下信一郎（文化庁記念物課調査官）、松下孝幸（土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム館長）、坂井秀弥（文化庁記念物課調査官）、狭川真一（大谷女子大学非常勤講師）、中西哲也（九州大学総合研究博物館助教授）、沢田正明（島根県埋蔵文化財調査センター）、横山精士（岡山大学大学院・奈良文化財研究所研究員）、田中義昭（島根県文化財保護審議会委員）  
島根県教育庁文化財課、島根県埋蔵文化財調査センター職員
7. 発掘調査及び整理作業には以下の方々に参加していただいた。（順不同）

岩本哲夫、俵　信義、深井一雄、梅津　茂、岡本昌幸、亀山武徳、桐田美知子、田原美代子、藤原　稔、山中伸子、野村紀年、安野和男、長谷田正延、石川一義、三浦春雄、石田　香、佐々岡秀巳、福原勝美、原田利正、両見美鈴、大久保真紀、大谷浪江、岡崎敦子、中村康恵、横山秀美、小島園江、広兼敬子、中村　了、篠原典子、田中　登、町部秀治、河野孝義、寺井和彦、朝山泰廣、糸賀良平、岩本末子、大畑昭恵、大畑和子、岡崎修二、城市　茂、高野京子、俵　章二、新田弥和、廣瀬富士美、福原輝男、三浦いく子、山根春夫、長島幸恵、坂本文江、大畑成子、斎藤俊雄、鳥田大造、寺井フミ子、広兼秀昭、村上弘明、吉本利道、麻生時夫、牧原正明、岩本功一郎、大石常夫、岡本敬子、伊藤松男、糸賀義人、高島淳子、羽板和良、福原美佐江、松澤保義、吉崎住慶、森脇義男

8. 現地及び遺物の実測図・写真は担当調査員、調査補助員が作成した。遺物の実測の一部はいなか倉（代表 田中義昭）、島根県埋蔵文化財調査センターに委託及び依頼した。
9. 本報告書の執筆・編集は益田市教育委員会文化財課職員の協力・助言を得て、木原 光、山本浩之、大野芳典、が行った。
10. 自然科学分析は下記に委託及び依頼し、その結果は第5章に掲載した。  
沖手遺跡、久城東遺跡の土壤分析・樹種鑑定：文化財調査コンサルタント株式会社  
沖手遺跡出土の中・近世人骨：松下孝幸（土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム）
11. 本書に掲載した遺跡出土遺物及び実測図、写真などの資料は、益田市教育委員会で保管している。

## 凡　　例

1. 本書で使用した遺構の略号は次のとおりである。  
SI - 堅穴住居、SD - 溝、SK - 土坑、P - ピット、SX - その他遺構
2. 本文・挿図・写真図版中の遺物番号は一致する。
3. 遺物観察表の色調は「標準土色帖」を参考にした。

## 本文目次

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 遺跡の位置と環境	2
第1節 遺跡の位置と益田市域の地勢	2
第2節 益田平野と周辺部の原始・古代	3
第3節 歴史的都市と農村づくりの時代	8
第3章 沖手遺跡	15
第1節 調査の概要	15
第2節 調査の結果	24
第3節 総括	200
第4章 久城東遺跡	225
第1節 調査の概要	225
第2節 調査の結果	236
第3節 出土遺物	282
第4節 総括	301
第5章 自然科学分析ほか	303
第1節 県道久城インター線8区における出土遺物の数値化報告	303
第2節 益田市沖手遺跡出土の中世人骨	311
第3節 沖手遺跡の理化学的分析	333
第4節 久城東遺跡の自然科学分析	347

# 挿 図 目 次

第 1 図	冲手遺跡と久城東遺跡の位置	1	第 56 図	建物跡 98 ~ 100 矢頭図	89
第 2 図	調査池周辺の遺跡	11・12	第 57 図	建物跡 101・102 実測図	90
			第 58 図	建物跡 103・104 実測図	91
			第 59 図	建物跡 105 実測図	92
			第 60 図	建物跡 106・107 実測図	93
			第 61 図	建物跡 108 実測図	94
			第 62 図	柱列 27 ~ 30 矢頭図	95
			第 63 図	柱列 31 ~ 34 実測図	96
			第 64 図	建物跡 93 ~ 95 出土遺物実測図	98
			第 65 図	建物跡 96・97・99・101・108 出土遺物実測図	99
			第 66 図	溝状追査出土遺物実測図	101
			第 67 図	塗 67 出土遺物実測図	102
			第 68 図	墓 67 実測図	103
			第 69 図	下層確認グリッド上層断面図	105
			第 70 図	遺構に伴わない出土遺物（執事器）実測図	106
			第 71 図	遺構に伴わない出土遺物（土師器）実測図	107
			第 72 図	遺構に伴わない出土遺物（瓦質土器）実測図	108
			第 73 図	遺構に伴わない出土遺物（東播系・慈商・備前）実測図	109
			第 74 図	遺構に伴わない出土遺物（窓戸・滑石製石鍋）実測図	110
			第 75 図	遺構に伴わない出土遺物（白磁）実測図	111
			第 76 図	遺構に伴わない出土遺物（白磁・青白磁）実測図	112
			第 77 図	遺構に伴わない出土遺物（青磁）実測図	113
			第 78 図	遺構に伴わない出土遺物（青磁ほか）実測図	114
			第 79 図	9・10 区西側断面図	117・118
			第 80 図	建物跡 109 実測図	122
			第 81 図	建物跡 110 実測図	123
			第 82 図	建物跡 110 柱穴断面図	124
			第 83 図	建物跡 111・112 実測図	125
			第 84 図	建物跡 113・114 実測図	126
			第 85 図	建物跡 115 実測図	127
			第 86 図	建物跡 116 実測図	128
			第 87 図	建物跡 117 実測図	129
			第 88 図	建物跡 118 実測図	130
			第 89 図	建物跡 119 実測図	131
			第 90 図	建物跡 120 実測図	132
			第 91 図	柱列 35 ~ 38 実測図	133
			第 92 図	石列 7 実測図	134
			第 93 図	井戸 11 実測図	136
			第 94 図	井戸 11 断面図	137
			第 95 図	井戸 12 実測図	138
			第 96 図	井戸 13 実測図	139
			第 97 図	墓 68 実測図	142
			第 98 図	墓 69・70 実測図	143
			第 99 図	墓 72・73 実測図	144
			第 100 図	墓 74 ~ 76 実測図	145
			第 101 図	塗 77 ~ 83 建物実測図	146
			第 102 図	その他の遺構実測図	147
			第 103 図	墓 72・74・75・76 出土遺物実測図	150
			第 104 図	井戸 13 出土遺物実測図	151
			第 105 図	9 区西側石列 7 出土遺物実測図	152
			第 106 図	10 区西側石列 8 出土遺物①実測図	153
			第 107 図	10 区西側石列 9・10 出土遺物②実測図	154
			第 108 図	9・10 区西側遺構出土遺物実測図	155
			第 109 図	遺構出土遺物（瓦質土器）実測図	156
			第 110 図	遺構出土遺物（國産陶器）実測図	157
			第 111 図	遺構出土遺物（瓦質土器・その他）実測図	158
			第 112 図	包含層出土遺物（須恵器・土師器）実測図	159
			第 113 図	包含層出土遺物（瓦質土器）実測図	160
			第 114 図	包含層出土遺物（国産陶器①）実測図	161
			第 115 図	包含層出土遺物（国産陶器②）実測図	162

## 表 目 次

第 116 図	包含層出土遺物（初鮮工朝陶磁器・その他）実測図	162
第 117 図	包含層出土遺物（貿易陶磁器①）実測図	163
第 118 図	包含層出土遺物（貿易陶磁器②）実測図	164
第 119 図	石製品①実測図	165
第 120 図	石製品②実測図	166
第 121 図	10 区東側遺跡図	169
第 122 図	遺跡群 121 周辺図	170
第 123 図	遺跡群 122 周辺図	171
第 124 図	柱列 39 ~ 43 実測図	172
第 125 図	石列 8 ~ 9 実測図	173
第 126 図	北戸 14 ~ 15 実測図	174
第 127 図	墓 78 実測図	175
第 128 図	10 区東側出土遺物実測図	176
第 129 図	铸造関連遺物一覧①	183 ~ 184
第 130 図	铸造関連遺物一覧②	185 ~ 186
第 131 図	铸造関連遺物一覧③	187 ~ 188
第 132 図	铸造関連遺物①実測図	194
第 133 図	铸造関連遺物②実測図	195
第 134 図	铸造関連遺物③実測図	196
第 135 図	铸造関連遺物④実測図	197
第 136 図	铸造関連遺物⑤実測図	198
第 137 図	铸造関連遺物⑥実測図	199
第 138 図	冲手遺跡中央の遺構全体図	203 ~ 204
久城東遺跡		
第 139 図	久城東遺跡調査区位置図	225
第 140 図	グリッド剖全体図	226
第 141 図	調査区全体図	227 ~ 228
第 142 図	調査区北区域の遺構検出状況図	230
第 143 図	調査区南西域の遺構検出状況図	231
第 144 図	遺構全剖配図図	233 ~ 234
第 145 図	堅穴住居 (SI01) の検出状況図	237
第 146 図	堅穴住居 (SI01) の粘土塗覆図	238
第 147 図	堅穴住居 (SI01) の泥炭状況図	239
第 148 図	堅穴住居 (SI01) に付随する遺構図	240
第 149 図	N - 3 ~ 5 区北壁の上層堆積状況図	241 ~ 242
第 150 図	遺構断面状況図①	245
第 151 図	遺構断面状況図②	246
第 152 図	S - 2 ~ 5 区南壁の十層堆積状況図	247 ~ 248
第 153 図	遺構断面状況図③	250
第 154 図	S - 4 区サブペルト東壁の上層堆積状況図	252
第 155 図	遺構断面状況図④	255
第 156 図	遺構断面状況図⑤	256
第 157 図	S - 6 ~ 8 区南壁の上層堆積状況図	257 ~ 258
第 158 図	遺構断面状況図⑥	262
第 159 図	S - 10 区を中心とした遺構配置図	264
第 160 図	S - 10 ~ 11 区北壁の上層堆積状況図	265 ~ 266
第 161 図	S - 10 ~ 11 区南壁の上層堆積状況図	267 ~ 268
第 162 図	N - 6 ~ 7 区北壁の十層堆積状況図	269 ~ 270
第 163 図	S - 7 ~ 8 区北壁の土層堆積状況図	271 ~ 272
第 164 図	調査区北東端の1層堆積状況図	275 ~ 276
第 165 図	再生土器①実測図	283
第 166 図	再生土器②・土器器実測図	285
第 167 図	埴輪器①実測図	288
第 168 図	埴輪器②実測図	289
第 169 図	瓦質陶器類①実測図	292
第 170 図	瓦質陶器類②実測図	294
第 171 図	石製品・石器・瓦質土器・土製品・廃棄物実測図	296

## 写 真 図 版

### 卷頭写真図版

1	冲手遺跡周辺の遺跡一覧表	13 ~ 14
2 表	冲手遺跡建物跡一覧表	206
3 表	冲手遺跡柱列一覧表	207
4 表	冲手遺跡一気観察表	208
5 表	冲手遺跡出土遺物観察表	209 ~ 224
6 表	久城東遺跡遺構計測一覧表	278 ~ 281
7 表	久城東遺跡周辺遺物観察表	298 ~ 300
1	冲手遺跡 調査前の遺跡全景（上空南から）	
2 :	冲手遺跡 調査区全景（上空北東から）	
2	冲手遺跡 調査区東側全景（東南上空から）	
3 1	冲手遺跡 調査 5 ~ 6 区全景（上空から）	
2	冲手遺跡 調査 7 区全景（上空から）	
4 1	冲手遺跡 調査 8 区全景（上空から）	
2	冲手遺跡 調査 8 区全体（東から）	
5 1	冲手遺跡 7 区 墓 51 上部裏	
2	冲手遺跡 8 区 墓 67 出土土器器坏・皿・柄鏡	
6 1	冲手遺跡 7 区 墓 45 出土土器器坏・皿	
2	冲手遺跡 白磁碗・青磁碗（47-3・47-13）	
7 1	久城東遺跡 墓穴丘跡 (S101) の元掘状況	
2	久城東遺跡 回叢陶磁器類の伴生状況 (SD02)	
8 1	久城東遺跡 空中からみた遺跡の全景（南東から）	
2	久城東遺跡 日本海を臨む鳥瞰風景（南東から）	
1	冲手遺跡	
2	冲手遺跡 調査区全景	
3	冲手遺跡 調査 5 ~ 6 区全景（上空から）	
4	冲手遺跡 6 区柱穴群（北から）	
4	冲手遺跡 6 区遺跡 77（北から）	
5	冲手遺跡 6 区遺跡 78・79（東から）	
5	冲手遺跡 7 区全景（上空から）	
5	冲手遺跡 7 区全体（西から）	
6	冲手遺跡	
7	7 区柱穴群（東から）	
8	8 区全景（東から）	
7	8 区全景（上空南から）	
8	8 区全景（上空から）	
8	8 区建物（南から）	
8	8 区建物（南東から）	
9	8 区遺構検出状況全景（西から）	
8	8 区南東部の建物群検出状況（東から）	
10 ト	建物跡 94 P438 建物跡 94 P472	
10 ト	建物跡 94 P478 建物跡 95 P412	
10 ト	建物跡 95 P439 建物跡 96 P356	
11 ト	建物跡 96 P350 建物跡 97 P326	
11 ト	建物跡 97 P320 建物跡 99 P326	
11 ト	建物跡 99 P433 建物跡 99 P640	

12	上	建物跡 101 P244	建物跡 102 P232		中	10 区築造関連遺構（南から）	
	中	建物跡 102 P246	建物跡 103 P241		下	発掘調査風景	
	下	建物跡 108 P451	建物跡 108 P454	35	上	溝跡 34 に重なる近世の集石（西から）	
13	上	9・10 区全景（西から）			中	8 区下層確認グリッド 1 の状況（北から）	
	下	9・10 区全景（東から）			下	8 区下層確認グリッド 2 の状況（北から）	
14	上	9 区全景（北から）		36	上	8 区下層確認グリッド 3 の状況（北から）	
	下	10 区全景（北から）			中	8 区下層の倒木の人さき	
15	上	9 区柱穴群（西から）			下	平成 18 年 5 月 18 日間催開会指導会	
	下	9 区柱穴群（北から）		37	上	平成 18 年 6 月 23・24 日間催開会指導会	
16	上	9 区柱穴群（北から）			中	平成 18 年 7 月 5・6 日間催開会指導会	
	下	9 区柱穴群（北西から）			下	平成 18 年 7 月 9 日開催現地説明会	
17	上	9 区柱穴 P67 (111 - 3)		38	上	6 区墓 41 出土遺物（土師器皿）	
	下	10 区建物 120 周辺（北から）			下	6 区墓 42 出土遺物（土師器皿）	
18	上	10 区東側（土空から）		39	上	7 区墓 44 出土遺物（朝鮮土碗）	
	下	10 区東側（西から）			下	7 区墓 45 出土遺物（土師器坏・皿）	
19	上	9・10 区全景（南西から）		40	上	7 区墓 47 出土遺物（土師器坏）	
	下	9・10 区落ち込み（北から）			下	7 区墓 49 出土遺物（土師器皿）	
20	上	6 区墓 41		41	上	7 区墓 51 出土遺物（土師器坏）	
中	6 区墓 42				下	7 区墓 60 出土遺物（土師器皿）	
下	6 区墓 45		42	上	7 区墓 61 出土遺物（土師器皿）		
21	上	7 区墓 46・47			下	7 区墓 65 出土遺物（土師器皿）	
中	7 区墓 50		43	上	6 区井戸 7 出土遺物（土師器坏）		
	下	7 区墓 51			下	6 区井戸 7 出土遺物	
22	上	7 区墓 54		44	上	7 区墓 57 出土遺物（土師器坏）	
中	7 区墓 55				下	7 区墓 57 (1 - 6)・井戸 (8 ~ 12) 出土遺物	
	下	7 区墓 60		45	上	5 ~ 7 区遺構出土遺物（灰壺器・土師器・瓦質土器・陶器）	
23	上	7 区墓 63			下	5 ~ 7 区遺構出土遺物（貿易陶磁）	
中	7 区墓 66 柏脂出土状況		46	上	5 ~ 7 区包含層出土遺物（須恵器・土師器・瓦質土器・陶器）		
	下	7 区墓 66			下	5 ~ 7 区包含層出土遺物（貿易陶磁）	
24	上	8 区墓 67 の検出		47	上	5 ~ 7 区包含層出土遺物（須恵器・陶器）	
中	8 区墓 67 の墓壁と遺物の出土位置（東から）				下	5 ~ 7 区包含層出土遺物（その他）	
	下	8 区墓 67 の土師器部・皿・柄鏡・木棺材の出土状況（東南から）		48	上	7 区墓 60 出土遺物（半塔婆）	
25	上	7 区墓 65			下	9 区墓 76 出土遺物（半塔婆）	
中	9 区墓 68		49	上	7 区墓 50 出土遺物（鉢珠）		
	下	9 区墓 70			下	井戸 10 出土遺物（鉢珠）	
26	上	9 区墓 71		50	上	8 区足跡 99 出土遺物（土師器坏）	
中	9 区墓 72				中	8 区建物跡 101・108 出土遺物（土師器皿・坏）	
	下	9 区墓 73			下	8 区墓 67 出土遺物（土師器坏・皿）	
27	上	9 区墓 74		51	上	8 区墓 67 出土遺物（土師器皿）	
中	10 区墓 78 柏脂・土師器皿出土状況（西から）				中	8 区墓 67 出土遺物（柄鏡 背面）	
	下	10 区墓 78 人骨・土師器皿出土状況（西から）			下	8 区墓 67 出土遺物（柄鏡 鏡面）	
28	上	9 区墓 76		52	上	8 区包含層出土遺物（瓦質火鉢外面・内面）	
中	6 区井戸 7				中	8 区包含層出土遺物（瓦質火鉢外面・内面）	
	下	7 区井戸 8			下	8 区包含層出土遺物（越前外而・内面）	
29	上	7 区井戸 9		53	上	8 区包含層出土遺物（白磁四耳壺内面・底面）	
中	7 区井戸 10				下	8 区包含層出土遺物（青白磁合子蓋外而・内面）	
	下	9 区非井戸 11				下	8 区包含層出土遺物（青白磁合子蓋外而・内面）
30	上	9 区非井戸 12		54	上	8 区包含層出土遺物（青白磁合子身外而・内面）	
中	10 区井戸 13 検査状況				中	8 区包含層出土遺物（越州窯系青磁合子蓋外而・内面）	
	下	10 区井戸 13			下	8 区包含層出土遺物（中国陶器蓋外而・内面）	
31	上	10 区井戸 14		55	上	8 区包含層出土遺物（中国陶器小壺外而・内面）	
中	6 区撲伏追構 24				中	8 区包含層出土遺物（中国陶器鉢外而・内面）	
	下	7 区溝状追構 8・25・26			下	8 区包含層出土遺物（中国陶器壺外而・内面）	
32	上	8 区溝状追構 28 ~ 30		56	上	8 区包含層出土遺物（中国陶器壺外而・内面）	
中	9 区溝状追構 40 ~ 42 (西から)				中	8 区包含層出土遺物（中国陶器鉢外而・内面）	
	下	9 区右列 7			下	8 区出土遺物（元豈延寶・政和通寶）	
33	上	10 区石列 8・9		57	上	出土遺物（銅鏡）	
中	7 区 SK51 (東から)				下	9 区井戸 13 出土遺物	
	下	9 区柱穴建物		58	上	9 区石列 7 出土遺物	
34	上	10 区溝状追構 28 (SX04 周辺)			下	10 区右列 8 出土遺物	

59	上	9・10区西側遺構出土遺物		83	1	国宝兩面器類(1)
	F	9・10区西側遺構出土遺物			2	回彎陶器類(2)
60	上	9・10区西側遺構出土遺物 (瓦質土器)			3	國產兩面器類(3)
	下	9・10区西側遺構出土遺物 (國產陶器)		84	1	石製品・石器・瓦質土器・磨道具・鐵製品
61	上	9・10区西側遺構出土遺物 (貿易陶器・その他)			2	人形 (拡大)
	下	9・10区西側包含層出土遺物 (瓦質器・土師器)			3	復元された人形
62	上	9・10区西側包含層出土遺物 (瓦質土器)				
	下	9・10区西側包含層出土遺物 (回彎陶器)				
63	上	出土遺物 (朝鮮工物陶器)				
	下	9・10区西側包含層出土遺物 (貿易陶器)				
64	上	9・10区西側包含層出土遺物 (貿易陶器)				
	下	石製品				
65	I.	石製品				
	下	石製品				
66	I.	石製品				
	D	石製品				
67	I.	石製品				
	D	10区東側出土遺物				
68	I.	墓 78 出土遺物				
	F	铸造関連遺物①				
69	I.	铸造関連遺物②				
	F	铸造関連遺物③				
70	上	铸造関連遺物④				
	F	铸造関連遺物⑤				
久城東遺跡						
71	1	調査前状況 (山西から)				
	2	調査区北東域の表土掘削前状況 (南西から)				
	3	土層堆積状況 (N - 3区・北壁)				
72	1	上層堆積状況 (N - 4・5区・北壁)				
	2	土層堆積状況 (S - 3区・SD01 東壁)				
	3	土層堆積状況 (S - 5区・南壁)				
73	1	土層堆積状況 (調査区中央域・北壁及び西壁)				
	2	土層堆積状況 (S - 11区・北壁)				
	3	土層堆積状況 (S - 13区・北壁)				
74	1	調査指導・助言風景				
	2	発掘作業風景				
	3	現地説明会風景				
75	1	土層堆積状況及び杭列の検出状況 (S - 10区)				
	2	弧生土器 Po84 の検出状況 (N - 3区・SI01 内中央部)				
	3	土師器・須恵器の出土状況 (N - 5区)				
76	1	先牛・露の出土状況 (S - 10区)				
	2	須恵器环 Po59-60 の出土状況 (S - 4区)				
	3	堅穴住居 SI01 の検出状況 (N - 3区・北東から)				
77	1	堅穴住居 SI01 の精査状況 (N - 3区・東から)				
	2	木材片・瓦割り検出状況 (S - 3区・北から)				
	3	石組状遺構の検出状況 (S - 4区・北西から)				
78	1	井口 SX04 の表出状況 (S - 3区・北西から)				
	2	水桶 SX05 の表出状況 (S - 3区・西から)				
	3	大甕 SX09 の精査状況 (S - 4区・南西から)				
79	1	近代墓等の横川状況 (S - 2区・南東から)				
	2	水桶 SX05 の検出状況 (S - 3区・西から)				
	3	大甕 SX09 の検出状況 (S - 4区・南西から)				
80	1	調査区北東域の完掘状況 (南西から)				
	2	高木区南西域の完掘状況 (北東から)				
	3	調査区域の完掘状況 (南西から)				
81	1	佛化土器・七輪器				
	2	弧生中期土器の底部				
82	1	須恵器(1)				
	2	須恵器(2)				

## 第1章 調査に至る経緯

山陰自動車道「益田道路」は、一般国道9号線の交通混雑の緩和、円滑で安全な交通の確保及び萩・石見空港へのアクセス強化を目的として建設が進められている高速交通網の一つである。この整備に合わせて、国道191号線の高津地区と益田道路の久城ICを結ぶ延長2,520m、幅員14.0mの道路として計画されたのが、県道久城インター線で、特に中吉田地区的交通渋滞の緩和、暮らしにやさしい道路整備として、また県立鰐龍湖自然公園、万葉公園の観光地へのアクセス向上などを目的としており、益田道路とともに平成10年3月に都市計画決定、平成13年3月に事業者が着手され、平成22年3月に全線開通が予定されている。

この益田道路工事の計画・事業化に伴い、平成10年度の島根県教育委員会による分布調査に同行し、併せて試掘調査を実施した。平成15年9月16日県道久城インター線事業に伴う遺跡の取り扱い協議を受け、平成16年3月に益田土木建築事務所長名で文化財保護法第57条の3（現94条）に基づく遺跡範囲内における土木工事の通知が出され、同年5月13日埋蔵文化財発掘調査に係る書類を島根県教育委員会に提出した。

県道久城インター線に関する埋蔵文化財調査の経過については、次のとおりである。

平成8年度 益田川右岸地区の分布調査により古代から中世にかけての遺物採取

平成10、11年度 益田川右岸計50箇所の試掘調査（国庫補助事業市内遺跡発掘調査）

平成14年度 益田川左岸調査（6箇所）、益田川右岸試掘調査（11箇所）を実施し、沖手遺跡の調査範囲を決定（国庫補助事業 市内遺跡発掘調査）

平成16年度 沖手遺跡発掘調査（5・6・7区）（益田市教育委員会）

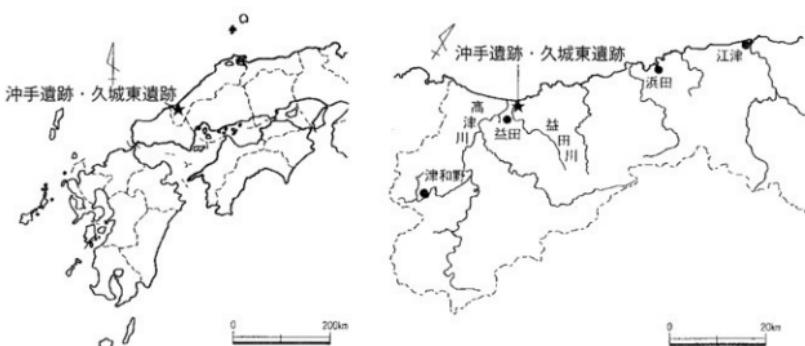
平成17年度 沖手遺跡発掘調査（7・9・10区）（益田市教育委員会）

平成18年度 沖手遺跡発掘調査（8区）（益田市教育委員会）

平成19年度 久城東遺跡発掘調査（益田市教育委員会）

堂ノ上遺跡発掘調査（島根県教育委員会）

平成20~21年度 沖手遺跡、久城東遺跡資料整理



第1図 沖手遺跡と久城東遺跡の位置 (S=1/10,000,000、S=1/1,000,000)

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 遺跡の位置と益田市域の地勢

沖手遺跡は島根県益田市久城町44、45番地ほかに属し、久城東遺跡は久城町1305番地5ほかに属する。

益田市は、県西部に位置し、総面積733.24km<sup>2</sup>、人口49,887人（2009年2月末現在）を有する地域の中核都市である。1km当たりの人口密度は68.0人となっている。地理的には、北は日本海岸に沿い、東は浜田市、西は山口県、鹿足郡津和野町・吉賀町と境を接し、南は中国山地の脊梁部で広島県と境界を分け合う。

地勢を概観するとおよそ以下になる。まず、地形の骨組は北東－南西方向に延びる中国山地とその中に刻まれた断層谷によって形づくられる。南部の広島県境は標高が1000mを超える高起伏山地が帶状に走り、その北側には標高500m～700m、巾8km程度の中起伏山地があり、数条の構造性の崖状急斜面が並走している。さらに中起伏山地の北辺には低起伏山地・丘陵地が巾広く展開し、その北縁は日本海沿岸となっている。沿岸部には、砂丘・砂州が発達する。いずれも新生の堆積とみられるが、上層部は近世のかんな流しによる砂の堆積層の可能性が高い。

高津川・匹見川とその支流、益田川とその支流が、このような横方向の地形を南北方向に分断・削剥する。結果として、東西に帯状の地塊ブロックが形成され、その間隙に小盆地が点在する地勢を生み出したと見られる。益田平野は、高津川と益田川が競合しながら深く刻み込んだ河口谷に分厚い堆積物が積もって誕生したものである。両河川による浸食作用がもっとも進行したのは第四紀更新世の頃で、その後、完新世にかけて起きた世界的な海進現象（繩文海進）によって低丘陵地を岸部とする「古益田湖」が出現する。その後、繩文後期以降に小海退が起こり、沖積作用が活発になって、益田平野の地盤が成立したものと思われる。

平野の周辺を見渡すと、狭い沖積面（高津川・益田川の合成三角州）の周辺には低丘陵地が平野をU字状に囲うように分布している。旧9号線道南沿いの丘陵地は津野津層を基盤とし、その北東と北西に久城の台地や高津松ヶ丘の低丘陵地が広がっている。沖積地の縁辺に存在するこれらの低丘陵地帯は、沖積地とともに長く生産と居住の舞台を提供してきている。久城東遺跡はその一例である。そして、完新世期においては基本的に浅い水域と微高地が織り成すラグーン（潟湖）が展開したと考えられる。今日の益田平野の景観は主として近・現代に形づくられたものである。この間、小海退期には安定した微高地が出現し、そこに沖手遺跡が當まれた。また、記憶に新しいところで1943年、1983年等の大洪水によって平野の全貌の一変したことがあった。こうした事象に端的に見られるように、平野の変遷史には、漸移的変化だけでなく劇的な変貌が含まれていることを忘れてはならない。

## 第2節 益田平野と周辺部の原始・古代

### 1. 地域開拓の始まり・縄文時代

益田平野の周縁で今日もっとも遡りうる人跡は新石器時代としての縄文時代の開始期にある。久城西遺跡から出土した尖頭器がその物証となる。隣接する堂ノ上遺跡でも同期の有茎尖頭器が発見されており、久城地区の低丘陵が初期狩猟・採集民の活動舞台であったことを示している。市域全体でみると、匹見川上流部の道川地区や匹見中央部に旧石器時代後期（新横原遺跡）と縄文時代早・前期の遺跡（蔵屋敷田遺跡・上ノ原遺跡）があり、山間部にも益田市史の冒頭を飾る人跡が認められる。匹見地区では引き続き石ヶ坪遺跡等の中期遺跡が存在していて、この地域が狩猟・採集生活に有利な自然条件を備えていたことが推定される。注目されるのは、中期遺跡からは九州方面の縄文土器（並木式・阿高式）が発見され、後期には山陽瀬戸内の影響が認められることである。

縄文時代後半（後期・晚期）になると気候が冷涼となり、小規模な海退現象が起こる。食料採集民にとって好都合の環境が出現した。この変化とともに東日本縄文文化の西漸の影響で石見地方全域の縄文文化が活気を帯びて来る。匹見盆地には大規模な環状配石遺構をもつ水田ノ上遺跡やヨレ遺跡等の拠点集落が営まれ、大きな繁栄を誇ったと推定される。これは、後期旧石器時代以降、中国山地を縱断する断層谷や南北方向に流れる河川の谷が主要な交通路を形成し、その交差要衝地として匹見盆地に縄文人が集住した結果と考えられる。

沿岸部にあっては「古益田湖」中の微高地と低丘陵に狩猟・漁労を営む採集民集落が出現する。久城丘陵上の若葉台遺跡からは後期前葉の縄文土器が出土し、沖手遺跡では後期のものと判定された丸舟型が検出されている。三宅御土居跡の地に最初の人の居住が見られるのは晚期のことである。

益田川を遡ると、美都町仙道地区的酒屋原遺跡、都茂地区的唐千田遺跡、二川地区的本郷遺跡で後・晚期の縄文土器が検出されている。高津川筋では早く1953年に安富遺跡で後・晚期の土器が出土していて著名な存在となっていた。市域外になるが、津和野川流域にも後・晚期の遺跡があり、後期には九州地方との関連を伺わせる縄文土器が見られる。

これらの遺跡を特徴づける事象として、打製石器が大量に出土することがあげられる。安富遺跡からは楕円形の大型打製石器が採取され、1953年当時から話題を呼んでいた。また、匹見盆地の諸遺跡では打製石器の数々の多さのみならず、いくつかのタイプが出土している。それらは石鋸や石鎌としての用途が考えられ、素朴な農耕が行われた可能性を示唆している。

### 2. 莽原にイネを育てる・弥生時代の動き

【水田稲作の伝来と農耕集落の定着】 紀元前4~3世紀の頃から益田平野とその周辺部の人文的様相は大きく変化する。いうまでもなく、それは水田耕作によるイネの栽培を主とする農業の到来である。浜寄遺跡（高津町）からは弥生時代前期の水田遺構が検出され、注目を浴びた。この水田跡は高津川本流に沿う自然堤防状微高地の後背湿地に営まれている。微高地の緩傾斜に長方形区画を階段状に配し、高手から用水を掛け流す手法を探っている。用水源としては本流からの伏流水が考えられる。そして、微高地末端を小規模に開削して排水を行ったものと推定される。

この排水路は、古墳時代には大規模な水路として掘り直されていた。このような初期の水田経営方式は各地で知られてきているが、浜寄遺跡のそれは山陰地方初の発見として意義がある。近辺には前期後半に属する松ヶ丘遺跡があり、この一帯に外來の弥生人集団が集落を営んでいたことを推定できる。浜寄遺跡は、弥生・古墳の各時代から古代中世の遺物が相当量出土しており、高津川左岸河口部に長期にわたって盤踞した有力な集落遺跡（拠点集落）と考えられる。

また、平野中央部の沖手遺跡では少量ながら前期の弥生土器片が出土しており、ここに初期の農耕集落が存在した可能性を示している。この他、前期遺跡として三宅御土居跡、酒屋原遺跡（美都町仙道）、安富王子台遺跡（安富町）、羽場遺跡（安富町）、井元遺跡（木部町）等がある。益田東部の井元遺跡は沖出川左岸の後背湿地縁に立地し、杭列が発見された。出土土器には口縁内面に突帯をもつものがあり、響灘沿岸部との関連を伺うことができる。2008（平成20）年に調査された丸山遺跡（隅村町）からも前期土器が採集され、この地区にも初期農耕集落が存在したことが明らかになった。この遺跡からは、前期の朝鮮系無文土器が出土しており、石西地方初の発見として注目される。

山間部の匹見盆地ではまとまった弥生時代の遺跡群が存在している。旧石器・縄文時代に交通路となった東西方向の断層谷は、弥生文化東漸のルートとしても継承されている。水田ノ上遺跡発見の細形銅戈はそうした事情を雄弁に物語る。この遺跡の東側には木戸開中遺跡があり、前期弥生土器が出土している。匹見川右岸の塚田遺跡、イセ遺跡等からも前期中葉を降らない土器が採集され、盆地全体でいち早く弥生文化の受容されたことが判明する。

【拡大する稲作と地域社会の形成】 弥生時代中・後期になると平野・盆地で遺跡が増加する。中期遺跡の多くは前期遺跡を継承する形をとるが、中期になって農耕集落が出現するところも少なくない。益田平野東部の久城丘陵に遺跡が出現するのは、久城東遺跡で確認された円形住居址の時期からみて中期中葉以降と考えられる。また、丘陵西縁には専光寺脇遺跡があり、中期後半期の貼石墳丘墓が発見されている。益田川河口部一帯の集落をまとめた小首長の台頭を示すものといえる。

低地の沖手遺跡からは、中期後半から後期の土器が出土しており、前期に引き続き集落の営まれたことが知られる。南方の日赤敷地遺跡等も後半期に登場する低地の集落遺跡である。おそらく、弥生時代の後半期に沖手遺跡は、周辺集落群を併せた地域集団において、拠点の性格を帶びた有力集落に成長していたと推定される。久城丘陵上では、後期以降に多くの小集落群が現れている。堂の上遺跡はその代表的な遺跡で、丘陵には2~3棟を一単位とする家族的集落が群集して地域集団を形成していたことを教える。高津川河口の浜寄遺跡も同様に地域の拠点集落として勢いを増していたと思われる。高津丘陵端にあるサガリ遺跡、廿子遺跡群は浜寄遺跡の分村集落であり、両者は一体になって地域社会を形作っていたのであろう。サガリ遺跡の大型住居址は大家族的集団の中核施設と見られるが、堂ノ上遺跡でもほぼ同規模の大型円形住居址が発見され、隣接して方形の大型住居と布掘り建物跡（倉庫か）が掘り出された。弥生時代後期の大家族的集団の構成を考えるうえでまたとない遺構群といえる。同時に、益田平野の東西に相呼応するかのように、こうした優勢な集団が姿を現していることは大いに注目されることといえる。

益田川筋では、縄文時代終末期から居住が始まった三宅御土居跡で弥生時代後期の土器が採取されている。良好な集落地であることを思えば、ここに拠点的な弥生集落が存在したことを推定

してもよいのではないだろうか。あるいは、小丸山遺跡、万歳山遺跡といった平野を臨む丘陵上でも弥生土器が採集されている。以上のような動向からは、益田平野に石見地方屈指の農耕社会が確立したことを見取れる。

弥生時代中期以降に高津川中流域では安富地区で農耕社会の発展が認められる。羽場遺跡では、この時期に集落域を区画する溝（用水路の可能性もある）や廃棄土坑が多数検出され、出土した弥生土器には防長系統のものがかなり含まれていた。あるいは、中期後葉の塙町式土器が存在することも広域にわたる交流を物語る。隣接する中小路遺跡は安富平野の中央に位置する大規模な集落址であるが、その繁栄期は後期前半から中頃と考えられる。多数の住居址が重なり合って検出され、多くの住居址が中央坑の上に扁平梢円形の大型石を置く独特な構造をもっている。遺跡内には防長系土器棺群の墓地が発見され、注目を集めた。なお、先の丸山遺跡では中・後期の弥生土器があり、ここにも継続して集落が営まれていたことを推測できる。これらの他に、匹見盆地、益田川筋の仙道地区・都茂地区でも中・後期の集落遺跡が発見されており、市域全体で小盆地を基盤とする農耕社会が成立した状況を確認することができる。

### 3. 王墓と群集墳の造営・古墳時代の展開

〔前方後円墳の登場〕 沖手遺跡や堂ノ上遺跡、あるいは中小路遺跡からは弥生時代終末期から古墳時代初期に属する近畿系土器が出土している。これらは前方後円墳を表象とする古墳時代の始まりを予測させる事実と見ることができる。初期の古墳としては東部の小河川・達田川谷頭付近の丘陵上にあって威容を誇る大型前方後円墳の大元1号墳（全長88m）がある。埴輪・葺石をもつ。三角縁神獣鏡が出土した四つ塙古墳群（乙吉町）の一古墳も注目される存在だが、破壊・消滅している。主体部は箱形石棺であったと伝えられる。この2古墳は4世紀代の築造が考えられる。

久城丘陵線に造営された須久茂塚古墳は地域を代表する大古墳として早くから知られている。2段地築成で埴輪・葺石が巡る当代有数の大型古墳として注目してきた。その墳形については、造り出し付きの大型円墳とする説が有力であったが、近時、入念な測量調査が行われ、その結果、全長約100mの前方後円墳として再認識されつつある。だとすれば、県下最大規模の中世型古墳となる。こうした大型の首長墓が前方後円形をとり、久城丘陵上に5世紀前半に築造されていることは、当地域の農耕社会が明確な階級的構成をとるに至ったことを物語る。その基盤をなす地域社会の動向もある程度判明してきた。先の浜寄遺跡では、古墳時代前半期の住居址と大量の土師器が出土している。また、須久茂塚古墳の東にある若葉台遺跡でも中期の小集落が発見された。さらに、沖手遺跡、三宅御土居跡でも少量ながら古墳時代前半期の土師器が採取されている。こうした拠点集落や周辺集落の存在と大型古墳出現は対をなす現象と理解される。

大元1号墳－須久茂塚古墳に續く大型古墳として乙吉の丘陵先端にある小丸山古墳がある。全長52m、周堀や外堤を備えた堂々たる前方後円墳である。副葬品には銅鏡・馬具類・鉄刀・須恵器等があり、有力首長墓として遜色ない。6世紀前半代の築造である。

これらの大型三古墳が益田平野東部の丘陵に代を追って造営されていることは偶然ではない。低地の沖手遺跡、丘陵上の堂ノ上遺跡等の弥生集落が引き続いてその繁栄を保ち、安定した地域農耕社会に成長してきたことが背景をなしていると考えて差し支えないであろう。問題は、なぜ石西益田地方に大型前方後円墳が歴代造営されたかということにある。これら大古墳については、

かつて西征畿内豪族の墳墓とされたこともあるが、先行する弥生時代の地域状況を見る限り、このような憶説を肯定することはできないのではないだろうか。

[群集墳と横穴群] 大型古墳で特徴付けられる古墳時代前半期に対して後半期、とくに6世紀後半から7世紀中頃までは多数の小型古墳が集う群集墳の時代となる。また、平野背後の丘陵地帯には横穴が群をなして造営される。これらも、群集墳の一形態と考えられる。久城丘陵の北縁部には、かつて小池古墳群、高浜古墳群等が存在した。これの中には、古式須恵器（山本I期）を出土した古墳が見られた。群集墳以前にも小型古墳群が存在した可能性がある。遠田町木原古墳は丘陵状に築かれた前半期の古墳と推測される。

日本海に半島状に小さく突き出た鵜ノ鼻台地には約50基の古墳が人々と築かれている。鵜ノ鼻古墳群と呼んでいる。ほとんどは円墳であるが、前方後円墳も4基ある。これらは、台地上の起伏に応じて4群に分けられる。内部主体は自然石を使った横穴式石室で、石西では比較的規模の大きな部類に属する。これまでに出土した遺物としては、須恵器が圧倒的に多く、直刀、鉄族、勾玉、ガラス小玉、耳環等があり、單龍の環頭大刀柄頭は優品として注目される。さて、鵜ノ鼻台地を奥津城とした族集団が問題であるが、前方後円墳の存在や石室の規模・造り、豊富な副葬品から推して、大元1号墳—須久茂塚古墳—小丸山古墳の首長集団に系譜を引く支配者集団の一族であろうと思われる。なお、この集団との関係が取り沙汰される白上古墳（中西町）は、全長8mの大規模な横穴式石室墳である。高津川支流・内田川上流にある小盆地の中央に築かれている。久城・乙吉丘陵を離れた鄺の地に突如現れた理由ははっきりしない。

次に、横穴群として著名な例に南・北長迫横穴群（吉田町）、片山横穴群、多田横穴群等がある。いずれも、6世紀末頃から7世紀後半に掘られたもので、低いドーム状の天井と丸みを帯びた玄室平面が特徴といえる。中には方形プランの家形横穴も見られる。副葬品は、長迫横穴の場合、須恵器類が圧倒的で、直刀、鉄族、耳環、玉類等がある。優品と見られるのは南長迫の一横穴から出土した金銅製の胡蝶帯である。南・北長迫横穴群は総数約60基からなる大群集墳である。墓そのものは簡単な構造であるが、副葬品の量と質は鵜ノ鼻古墳群のそれと引きを取らない。南北長迫横穴群の出現は、從来の久城方面や高津川河口左岸域、三宅御土居跡一帯の有力集団（片山横穴群を含む）の列に吉田原にも新手の農耕集団が形成され、その中で有力な家族集団が台頭してきたことを示している。益田平野と周辺の小谷がさらに開発され、その開拓者達が自己主張をし始めたことが考えられる。

益田市域の横穴について、これを出雲地域の横穴の渦流とする見解が流布していた。しかし、各横穴群に見られる穴の構造、出土須恵器の時期から考えると上記のような推測は成り立たない。ここは、古墳時代後期に横穴が発達した九州方面との関係を模索するのが妥当な途ではないだろうか。

以上のような大群集墳は平野地域に限られる。しかし、市域全体を見渡すと、益田川支流の三谷川筋に三谷古墳群（細長い玄室が特徴）があり、匹見盆地にも江田古墳群、山根古墳群が築かれている。市域東部の土田古墳はその様相から終末期古墳かと推測される。その他、津田・遠田町にも転々と横穴式石室をもつ後期古墳が知られている。

これらの後期古墳に副葬された須恵器は、市域東部の芝・中塚窯跡（西平原町）、本片子窯跡、柴ヶ迫窯跡・杉迫窯跡（津田町）等の窯元群から供給されたと考えられる。いずれも都野津

層に由来する良質の粘土層の存在が立地条件を提供している。なお、本片子窓跡からは丸瓦・平瓦が出土した。三宅御上居跡でも単弁八葉連華文の軒丸瓦が出土した。これらは未発見の古代寺院や官衙の存在を示唆する重要な遺物といえよう。県内では、大田市域の天王平廃寺跡、浜田市域の上府廃寺跡、旧那賀郡域の重富廃寺跡があり、益田市域のみが未確認地域となっている。古墳時代に有力な首長墓が築かれ、群集墳期にも顕著な遺跡が見られた状況から推測すれば、古代寺院の造立は十分ありうることと思われる。

#### 4. 奈良・平安時代の動向

古代の遺跡に関する情報は少ない状況下にあるが、このところ注意を喚起する遺跡がいくつか見つかっている。まず最初に、安富遺跡群の中小路遺跡や家下遺跡について紹介する。前者からは間口7間(12m)、奥行き3間(7m)、軒柱列とともに大きな柱建物跡や方柱根の残る建物跡が検出された。後者では、奈良時代後半～平安時代前半の須恵器が大量に出土しており、有力な古代集落が存在したと推定される。石見空港敷地内にあった大溢遺跡も顕著な古代集落といえる。海岸砂丘背後の緩斜面に階段状に一群の建物があり、内部からは須恵器や製塙土器が出土している。また、小鍛冶遺構が検出されていることも見逃せない。日本海沿岸に営まれた自営的な小集落と考えられる。

奈良・平安時代の中小路遺跡と対比されるのは美都町の酒屋原遺跡・下都茂原遺跡であろう。酒屋原遺跡は益田川右岸の台地上にあり、大量の須恵器と古代末～中世前半の貿易陶磁器類が出土している。遺跡の中心部分は未調査(公民館がある)であるが、周縁部からは道路状遺構や多数の柱穴群が検出されている。須恵質の硯片が少なくないことから官衙的な性格を有する遺跡と考えられる。この遺跡と益田川を挟んだ対岸の低地には下都茂原遺跡がある。低位段丘面から氾濫原に営まれた集落で、酒屋原遺跡とはほぼ同時期的に存続したことが推定される。出土遺物には多数の須恵器・貿易陶磁器に混じって綠釉陶器があり、防長地方からの搬入品とされる。両遺跡が地域の中核的集落として広く内外と交流した事情がうかがえよう。鉢山関連遺跡と見られる大年ノ元遺跡が確かな集落として現れるのも平安時代である。

匹見盆地の長グロ遺跡では奈良末・平安初期の方形堅穴住居址が複雑な重複状態で検出されている。個々の住居址には焼道の長い造り付けの「かまど」がある。これは、当地独特の炊飯施設として注目されている。同類の住居址は盆地の各所で検出されており、絶えることない地域の歴史が確実に刻まれ続けている様子が伝わってくる。

## 第3節 歴史的都市と農村づくりの時代

### 1. 戦国城下町と有力村落の形成・活性化の中世

【三宅御土居跡と沖手遺跡】 古代末から中世にかけての考古学的調査による知見は一にかかって三宅御土居跡・七尾城跡と沖手遺跡、あるいは中須西原・東原両遺跡の成果による他はない。三宅御土居跡については館内的一部分と周囲の濠が調査されている。七尾城跡は、歴史的評価も含めた考察がすでに示されている。河口域の沖手遺跡は略方形様の区画溝で開われており、調査状況と判明した事実については、本報告等で説明を行う。

三宅御土居跡に関しては、1990(平成2)年以来8次にわたり発掘調査が行われている。その結果、12世紀～16世紀末にわたる長期継続型の遺跡と判明した。このおよそ400年以上に及ぶ期間に数次の分期が認められる。すでに述べたように、本遺跡は、弥生時代以来地域拠点集落として存続してきており、おそらく、12世紀頃からは中世的拠点としての性格を帯びてきた、と考えられる。そして、14世紀頃に本格的な居館として築造され、益田氏の地域支配の中核施設として機能したものと推測される。その後、一時的に七尾城に居宅が移動した時期もあったが、16世紀後半には、再度大規模な修築が行われたようである。館内部の構造については、今後の調査に俟つところが大きい。尚、この頃とされるSB303は、5間(10.5m)×4間(8.2m)の総柱建物で規模の大きさは石西地域では群れを抜いている。但し、建物の位置から館内の一付属施設と思われるが、すると主舎の規模ははるかにそれを凌ぐものと推測される。いずれにしても、益田氏が有力国人領主であったことを知ることができる。

ところで、三宅御土居が益田氏の居館として威勢を示した時期には、対岸一帯は中世城下町としての様相を整えつつあったと推定される。このことを立証する考古学的知見は限られているが、三宅御土居・七尾城を結ぶ道路沿いの曉音寺遺跡で注目すべき事実が明らかにされている。この遺跡は、益田川の自然堤防上にあり、古代に有力な集落が存在したとされる。同時に、関心が注がれていた「鍵曲り」遺構については、中世に遡る可能性があると推測され、中世街区の一角が判明したと考える。

三宅御土居の対岸に展開していたと想定される戦国城下町については、近代初頭に描かれた『美濃郡上本郷村水路図』、『美濃郡上本郷村地図』『地籍図』の町図が参考になる。図中には東西南北の道路と三宅御土居・七尾城を結ぶ道路がクロスしており、道路サイドに建物が並んでいる。東西道路の一部には「市」の地名が残っている。このような景観は都市の風貌を伝えるものと考える。

転じて河口付近の遺跡を見ると、すでに触れたように沖手遺跡では、略方形様の溝で開われた建物密集区とその外縁部を発掘している。外縁部では墓地や金屬加工(鑄物)廻を検出している。

沖手遺跡の西、益田川左岸には東・西中須遺跡が発掘されつつある。ここでも、多数の中世建物や関連遺構群が密集状態で検出されつつある。港湾施設かと見られる石畳(礫敷き)遺構や鐵治遺構があり、中国・朝鮮からの伝来陶磁器や国内の中部・北陸方面からの搬入陶器が出土している。以前に調査された、今市船着場遺跡は近世期が中心であるが、その走りはさらに遡り、古代・中世から三宅御土居と河口の交易街を結ぶ中繼点として機能していたと推定されている。

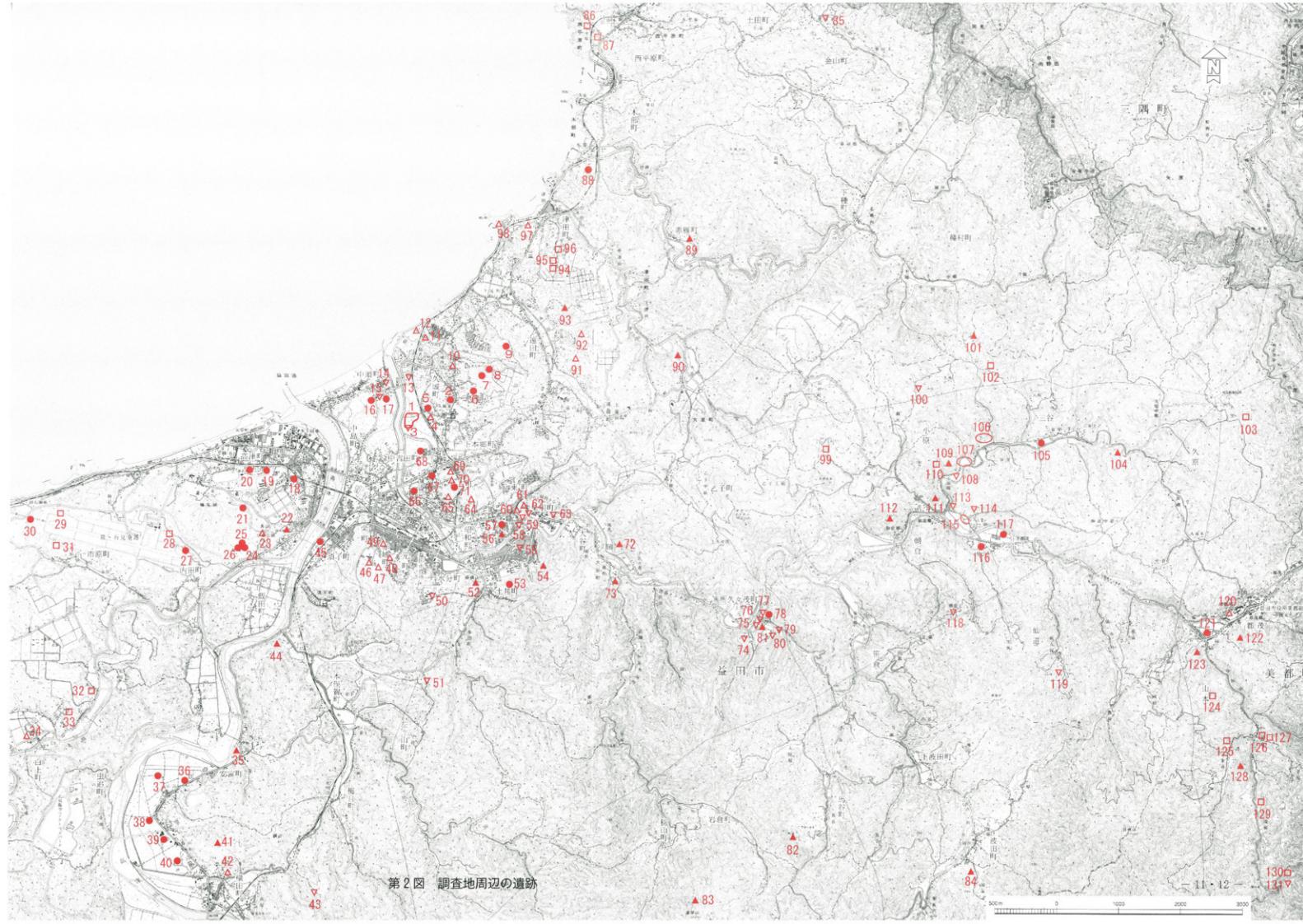
以上で知られるように、中世期には七尾城下の街区(行政・経済・文化の特区)と河口域の手工業・

交易区とが有機的に結合された広大な都市空間が出現したことは疑いない。そして、彼の絵図が示すように、その構造は、益田氏転居後も基本的に維持され、近代を迎えたと想像される。2007年度の調査された石見銀山遺跡温泉津地区の石造物調査では「高津屋」一族の墓地が確認されている。この一族は温泉津を根城に繁栄した有力商人であるが、その家名から見て益田市域との関係が取り沙汰されたところである。沖手遺跡、東・西中須遺跡の様相と相触れ合うところが少なくない、と思われる。

近世・近代益田市域の歴史には未解明な部分が多い。今後、文献史料の涉獣や実在する建造物、地名等を考古学的調査と相合わせて解明しなければならない。そうした作業の積み重ねを通じて、益田市と益田市民の共有財産が明らかになり、「歴史を活かしたまちづくり」という将来への指針が見えてくると考える。

## 参考文献

- (1) 益田市誌編纂委員会 1975 『益田市誌』上巻
- (2) 木原 光 1992 『益田市・羽場遺跡出土の陶磁器』『松江考古』第8号 松江考古学談話会
- (3) 島根県教育委員会 1992 『石見空港建設予定地内遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書』
- (4) 島根県教育委員会 2002 『増補改訂島根県遺跡地図Ⅱ(石見編)』
- (5) 島根県教育委員会 2006 『廿子I遺跡・廿子II遺跡 一般国道9号(益田道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』
- (6) 島根県教育委員会 2006 『浜寄・地方遺跡 -IA・IB・IC・ID・IF・2A・2C・2F・2G区の調査-』一般国道9号(益田道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書2
- (7) 島根県教育委員会 2007 『沖手遺跡 -1区の調査-』一般国道9号(益田道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書3
- (8) 島根県教育委員会 2007 『浜寄・地方遺跡 -IH・II・2B・2D・2E・2A各区の調査-』一般国道9号(益田道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書4
- (9) 増野晋次 2001 『益田・鶴ノ鼻古墳群について』『松江考古』第9号 松江考古学談話会
- (10) 益田市教育委員会 1981 『安富王子台遺跡発掘調査概報』
- (11) 益田市教育委員会 1982 『国営農地開発事業関係埋蔵文化財調査報告書 本片子遺跡・本原古墳』
- (12) 益田市教育委員会 1984 『鶴ノ鼻古墳群発掘調査概報』
- (13) 益田市教育委員会 1986 『益田市達田地区遺跡分布調査報告書I』
- (14) 益田市教育委員会 1986 『益田市達田地区遺跡分布調査報告書II』
- (15) 益田市教育委員会 1987 『益田市達田地区遺跡分布調査報告書III』
- (16) 益田市教育委員会 1990 『小丸山古墳発掘調査報告書』
- (17) 益田市教育委員会 1991 『三宅御土居跡I』
- (18) 益田市教育委員会 1983 『益田氏閑連遺跡群I -勝達寺・七尾城跡-』
- (19) 益田市教育委員会 1994 『益田氏閑連遺跡群II』
- (20) 益田市教育委員会 1995 『益田氏閑連遺跡群III』
- (21) 益田市教育委員会 1998 『七尾城跡・三宅御土居跡 益田氏閑連遺跡群発掘調査報告書』
- (22) 益田市教育委員会 2000 『中世今市船着場跡文化財調査報告書』
- (23) 益田市教育委員会 2001 『身近なまちづくり支援街路事業 歴史的環境整備地区沖田七尾線街路事業に伴う曉音寺発掘調査報告書』
- (24) 益田市教育委員会 2003 『市内遺跡発掘調査報告書I 七尾城跡・三宅御土居跡・沖手遺跡・中世石造物分布調査』
- (25) 益田市教育委員会 2004 『中小路遺跡 -平成15年度ふるさと農道整備事業横田安富地内埋蔵文化財発掘調査報告書』
- (26) 益田市教育委員会 2007 『益田市中吉田平田土地整理区域整理事業に伴う平田遺跡発掘調査報告書』
- (27) 島根県教育委員会 2008 『沖手遺跡・守光寺脇遺跡』



第2図 調査地周辺の遺跡

— 11. 12 —  
1300  
1310

第1表 調査地周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	種類	田石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	JPF以降	遺跡地図
1	沖手遺跡	集落								Q271
2	久城東遺跡	集落跡								Q269
3	寺福寺跡	寺院跡								Q 94
4	豊光寺跡遺跡	墳墓								Q 23
5	雲ノ上遺跡	集落跡								Q270
6	若葉台遺跡	集落跡								Q268
7	久城西丁遺跡	集落跡								Q266
8	久城西II遺跡	散布地								Q267
9	原浜遺跡	集落跡								Q265
10	スクモ原古墳	古墳								Q 24
11	小池古墳群	古墳								Q 27
12	高浜古墳群	古墳								Q 26
13	鳴如坊跡	寺院跡								Q 91
14	安福寺跡	寺院跡								Q 93
15	福工寺石造十三重塔	石造物								
16	中須西原古墳	集落跡								
17	中須東原古墳	集落跡								
18	浜寄・萬方遺跡	集落跡・水田跡								Q274
19	長者原遺跡	散布地								Q107
20	松ヶ丘遺跡	散布地								Q142
21	サガリ遺跡	集落跡								Q259
22	高津城跡	城跡								Q 67
23	砾石横穴	横穴墓								Q261
24	甘子I遺跡	集落跡他								Q283
25	甘子II遺跡	集落跡他								Q284
26	甘子III遺跡	集落跡他								Q285
27	隈ノ子田遺跡	散布地								Q208
28	北ヶ追遺跡	痕跡								Q207
29	仁比山・門山遺跡	痕跡								Q205
30	大淀遺跡	集落跡								Q204
31	相生遺跡	痕跡								Q206
32	吹金原里跡	痕跡								Q207
33	野川遺跡	痕跡								Q318
34	白子古墳	古墳								Q 39
35	安富城跡	城跡								Q 74
36	羽根遺跡	集落跡								Q150
37	中小路遺跡	集落跡								Q347
38	安富遺跡	散布地								Q 1
39	大畠遺跡	集落跡								Q262
40	家下遺跡	集落跡								
41	豊田城跡	城跡								Q 73
42	上野横穴	横穴								Q 38
43	石塔寺堆現經塚	經塚								Q186
44	角井城跡	城跡								Q246
45	原子遺跡	散布地								Q106
46	小堤横穴群	横穴								Q 48
47	南長追横穴群	横穴								Q 47
48	日赤裏横穴群	横穴								Q 49
49	北長追横穴群	横穴								Q 46
50	水分鞍塚	經塚								Q153
51	崩原闕門跡	闕門跡								Q198
52	稻穀城跡	城跡								Q 69
53	万歳山遺跡	散布地								Q100
54	七尾城跡	城跡								Q 57
55	曉音寺山門及び鐘樓	寺院								
56	三宅街土店跡	痕跡								Q136
57	上井後遺跡	散布地								Q215
58	萬福寺庭園	庭園								Q202
59	勝達寺跡	寺院跡								Q 90
60	片山横穴群	横穴								Q 44
61	秋原山古墳群	古墳								Q 32
62	染羽天石椿神社本殿	神社								
63	医光寺庭園	庭園								Q203
64	山の平山頂古墳	古墳								Q187
65	叶屋上山古墳群	古墳								Q 20
66	日赤敷地遺跡	散布地								Q191

番号	遺跡名	種類	旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	江戸以降	道跡地区
67	中臣山古墳群跡	その他								Q200
68	平田遺跡	集落跡								Q143
69	四塚山古墳群	古墳								Q 17
70	小丸山古墳	古墳								Q 64
71	小丸山城跡	集落跡								Q188
72	大谷城跡	城跡								Q137
73	大谷ノ尾跡	城跡								Q184
74	小平古墓	古墓								Q181
75	土井殿の墓	古墓								Q180
76	得利の古墓	古墓								Q179
77	大村古墓	古墓								Q216
78	大村遺跡	散在地								Q182
79	とうのう山古墓	古墓								Q183
80	山根古墓	古墓								Q151
81	上久々茂土居跡	城跡								Q 66
82	高蔵城跡	城跡								Q254
83	佐草山城跡	城跡								Q 83
84	渡田城跡	城跡								Q201
85	大内寺今弘道の墓	古墓								Q 56
86	中坂城跡群	城跡								Q 55
87	芝留新跡	城跡								Q 2
88	丹元遺跡	散在地								Q138
89	赤堀ノ尾跡	城跡								Q 63
90	大草城跡	城跡								Q149
91	大木古墳群	古墳								Q145
92	木原古墳	古墳								Q 59
93	藤城跡	城跡								Q 54
94	柴又道楽跡	城跡								Q 99
95	本片ノ童跡	城跡								Q147
96	杉沢城跡	城跡								Q 51
97	大遺古墳群	古墳								Q 9
98	南ノ島古墳群	古墳								R 24
99	北ノ山城跡	製鉄遺跡								R 46
100	久木城跡	城跡								R 45
101	土井山城跡	城跡								R 25
102	新宅城跡	製鉄遺跡								R 14
103	御田城跡	製鉄遺跡								R 4
104	郡賀城跡	城跡								R 66
105	大石遺跡	散在地								R 3
106	三谷古墳群	古墳								R 5
107	小原古墳群	古墳								R 56
108	栗島原遺跡	古墓								R 47
109	竹城跡	城跡								R 23
110	折所城跡	製鉄遺跡								R 55
111	脇山城跡	城跡								R 21
112	団ノリ城跡	城跡								R 57
113	東仙土上居遺跡	その他								R 52
114	相続城跡	寺院跡								R 59
115	酒屋原遺跡	集落跡								R 67
116	鶴光城跡	散在地								R 73
117	下郡ノ原遺跡	集落跡								R 51
118	正明寺跡	寺院跡								R 29
119	駿明古墓	古墓								R 28
120	星敷平畠穴・遺跡	横穴・散布地								R 27
121	大草ノ元遺跡	集落跡								R 19
122	祇曳城跡	城跡								R 30
123	要吉山城跡	城跡								R 31
124	金ヶ崎城跡	製鉄遺跡								R 50
125	悪谷城跡	製鉄遺跡								-
126	金屋城跡	製鉄遺跡								-
127	火の山城跡	製鉄遺跡								-
128	入船山城跡	城跡								-
129	深野城跡	製鉄遺跡								-
130	化粧城跡	製鉄遺跡								-
131	安養寺跡	寺院跡								-

(第2回 例) ●集落、散在地 ▲弥生墳墓、古墳、横穴墓 ▽古墓、経塚、社寺 ▲城址 □生產遺跡

## 第3章 沖手遺跡

### 第1節 調査の概要

#### 1. 遺跡の概要

沖手遺跡は、益田道路・県道久城インター線・市道中吉田久城線の建設等の大規模な開発事業計画に伴い、益田市教育委員会が実施した分布調査（平成8年度）と範囲確認調査（平成10・11・14年度）により、中世を中心とする遺物・遺構が確認され、その存在が明らかになった遺跡である。遺跡の範囲は東西270m、南北270mの範囲に広がり、総面積は約45,000m<sup>2</sup>に及ぶものと推測する。

平成16年度から県道久城インター線、益田道路、市道中吉田久城線建設に伴う発掘調査が開始された。発掘調査は、益田道路本線部分（1～4区）を島根県教育委員会が、県道久城インター線部分（5～10区）及び市道中吉田久城線部分（第11区）を益田市教育委員会が実施した（第3図）。久城インター線については、第5区～7区を平成16年度に、第7区と9～10区を平成17年度に、さらに第8区を平成18年度に調査した。第11区については、平成16・17年度で発掘調査を実施している。

調査にあたっては、島根県教育委員会・益田市教育委員会の両者で共通するグリッドを設置した。平面直角第III座標系（座標系XYは世界測地系）にのる基点（X=-14810, Y=-29930）を1Aとし、東へ10m間隔で2, 2, 3、南へ10m間隔でA, B, C, D, A', B'という基準点を調査区全体に設け、一遍10mのグリッドを北西側の交点の名称（たとえば6P）で呼称することとした（第4図）。

#### 2. 調査組織

県道久城インター線建設に伴う沖手遺跡の埋蔵文化財発掘調査の体制は、下記のとおりである。

調査主体 益田市教育委員会

平成16年度 沖手遺跡現地調査（第5区～7区）

[事務局] 益田市教育委員会文化振興課

安達正美（課長）、斎藤史和（課長補佐）、河野敏弘（課長補佐）

[調査員] 木原 光（文化財係長）、宇津栄一（副主任主事）、大野芳典（主事）

平成17年度 沖手遺跡現地調査（第7区・9～10区）

[事務局] 益田市教育委員会文化振興課

安達正美（課長）、橋本浩一（課長補佐）、

木原 光（課長補佐兼文化財係長）

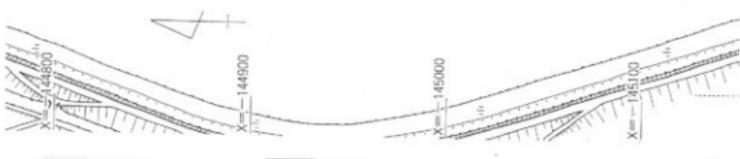
[調査員] 河野敏弘（課長補佐）、大野芳典（副主任主事）

[調査補助員] 吾郷信一、宮本徳昭、寺戸淳二、磯口英行

平成18年度 沖手遺跡現地調査（第8区）

[事務局] 益田市教育委員会文化振興課

安達正美（課長）、橋本浩一（課長補佐）、河野敏弘（課長補佐）

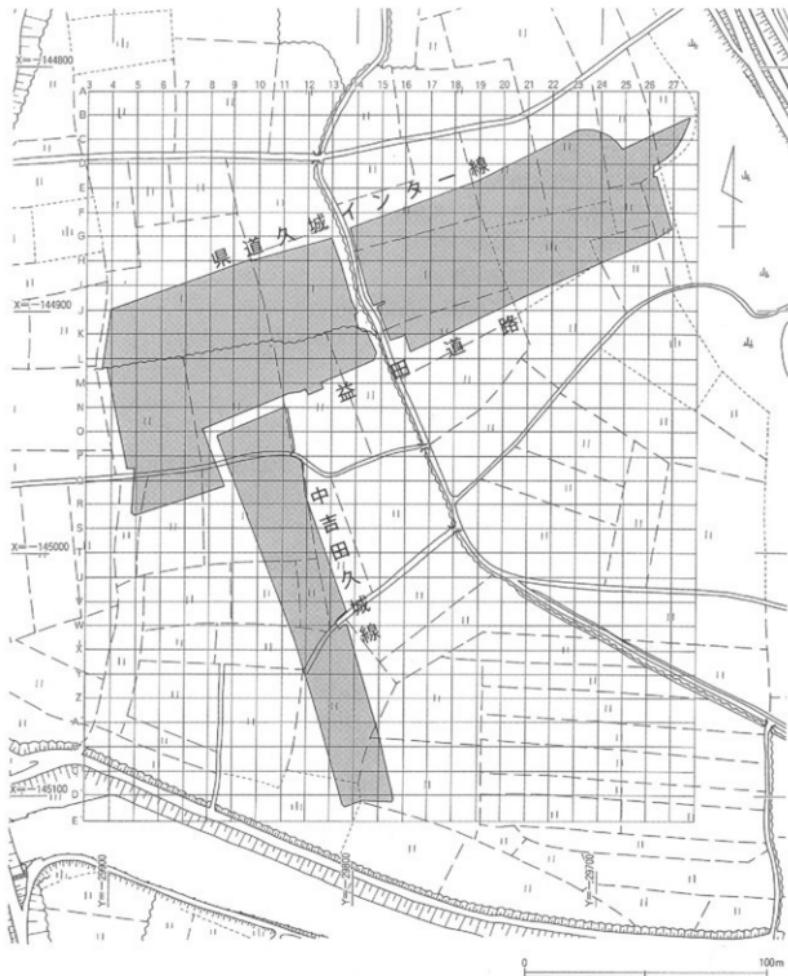


益田道路 県道久城インター線

市道中吉田久城線

0 100m

第3図 沖手遺跡調査区配置図 (S=1/2,500)



第4図 グリッド設定図 ( $S=1/2,000$ )

【調査員】木原 光（課長補佐兼文化財係長）  
【調査補助員】栗田美文、寺戸淳二、世良 啓、樋口英行  
平成 19 年度 久城東遺跡現地調査  
【事務局】益田市教育委員会文化振興課  
安達正美（課長）、野村正樹（課長補佐）、河野敏弘（課長補佐）、  
木原 光（課長補佐兼文化財係長）  
【調査員】山本 浩之（主任）  
【調査補助員】寺戸淳二  
平成 20 年度 沖手遺跡、久城東遺跡資料整理  
【事務局】益田市教育委員会文化振興課  
木原 光（課長）、河野敏弘（課長補佐兼文化財係長）  
【調査員】木原 光（課長）、山本浩之（主任）、大野芳典（主任主事）、  
宇津栄一（主任主事）  
【調査補助員】寺戸淳二、世良 啓、齊藤ゆかり  
平成 21 年度 沖手遺跡、久城東遺跡資料整理  
【事務局】益田市教育委員会文化財課  
木原 光（課長）、河野敏弘（課長補佐）  
【調査員】木原 光（課長）、山本浩之（主任）、大野芳典（主任主事）、  
宇津栄一（主任主事）

### 3. 調査の経過

5・6・7 区については、平成 16 年 4 月 5 日、第Ⅰ期調査委託契約を県益田土木建築事務所と締結し、発掘調査通知を 5 月 13 日に県へ提出し、5 月 14 日から現地調査に入った。Ⅱ期工事として 7 月 8 日に委託契約を締結している。

発掘調査は、表土掘削後、遺物包含層の掘削、遺構検出、遺構の精査を行い、平面図、断面図、写真等で調査状況を随時記録した。調査区全体の平面図はトータルステーションを用いてを行い、遺構ごとの詳細図は手実測により作成した。空中写真撮影は、5・6 区については平成 17 年 2 月 28 日に株式会社ワールド益田営業所（所長渡部徳一）に委託して実施している。

調査状況については、5 区では遺構はほとんど検出されず、7 月で調査を終了し、8 月より 6 区の調査に移った。6 区は、約 500 基の柱穴、墓 3 基、井戸跡が 1 基確認された。

7 区の調査は 11 月から行い、遺構面を検出し柱穴を約 2,000 基を確認したが、完掘することとはならず、次年度の継続調査をすることとして、平成 17 年 2 月 28 日に現地調査を終了した。平成 16 年度の調査面積は約 3,234m<sup>2</sup>である。

この間に 10 月 8 日文化庁正田調査官による現地指導を受けた。さらに 12 月 9・10 日には小野正敏氏（国立歴史民俗博物館助教授）、村上勇氏（広島県立美術館学芸課長）、大庭泰時氏（福岡市教育委員会主査）、中村唯史氏（三瓶自然館サヒメル指導員）並びに県埋蔵文化財調査センターによる指導を受けた。

また、12 月 12 日には 1 区を調査していた鳥取県埋蔵文化財調査センターと共に現地説明会を

開催し、150名の参加者があった。県との遺跡の取り扱い協議は3月に行い、公共性ということで記録保存することとなった。

平成17年度については、5月24日益田土木建築事務所と調査の委託契約を締結し、発掘調査通知を5月13日に県へ提出、7月11日から現地調査に入り、3月24日現地調査を終了した。前年度の7区を含めて7～10区の調査を当初予定し、7・10・9・8区順に実施したが、7・9区の遺構密度が高いことから、8区については表土掘削で終了、次年度に繰り越した。調査面積は約4000m<sup>2</sup>である。

遺構の検出は、機械による表土掘削後人力によって行い、遺構実測システム等の活用により平面実測を行った。遺構の詳細については、人力による実測を主としたが、一部を委託により機械実測で図化した。また空中写真撮影を委託し、7区と9・10区で実施した。出土した遺物については、室内作業員により水洗いを行い、一部実測作業をいなか舍に委託して行った。調査により柱穴跡が約4,000個、掘建柱建物跡25棟以上、竪穴建物跡、井戸跡、幅2mの溝状遺構も確認した。県との遺跡の取り扱い協議は3月に行い、公共性ということで記録保存することとなった。

また12月18日に現地説明会を開催したが、降雪にもかかわらず40名の参加があった。

この間、次のとおり調査指導を現地で受けた。

8月23・24日	松下孝幸氏（土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム館長土井ヶ浜遺跡館長） (10月25・26日、3月13日)
8月25・26日	県（澤田正明氏）
12月7日	坂井秀弥氏（文化庁記念物課、主任文化財調査官）
12月9・10日	大山喬平氏（京都大学名誉教授）、井上寛司氏（大阪工業大学教授）、 林 正久氏（鳥根大学教授）
12月15・16日	小野正敏氏、村上勇氏、大庭康時氏、中村唯史氏
3月6・7日	狭川真一氏（大谷女子大学非常勤講師）
3月13・14日	中西哲也氏（九州大学総合研究博物館助教授） 横山精英氏（岡山大学大学院・奈良文化財研究所研究員）
平成19年 1月15～18日	穴澤義功氏（製鉄遺跡研究会代表）

平成18年度については、県道久城インター線部分の3次調査として8区の発掘調査を実施した。調査面積は1,840m<sup>2</sup>で、現地調査は平成18年4月10日に着手し、平成18年7月3日に終了した。

発掘調査は、表土を重機で掘削した後（17年度実施）、遺物包含層の掘削、遺構出、遺構の精査を行い、平面図、断面図、写真等で調査状況を隨時記録した。調査区全体の平面図はトータルステーションを用いて、遺構ごとの詳細図は手測りで実測して作成した。さらに遺構より下層の土層堆積状況を確認するための部分的な掘削を3箇所で行い、発掘作業終了時に調査区全体の空中写真撮影業務を委託して実施した。

遺跡の取り扱いについては、益田市教育委員会としては記録保存が図られた後の工事実施はやむを得ないと考え方に基づき、7月28日付で鳥根県教育委員会に対して協議を行い、8月4日付の回答を受け、同月7日付で市教育委員会から鳥根県益田県上整備事務所長に対してこの旨を通知した。

調査成果の公開として、7月9日と7月23日に現地説明会を開催し、さらに7月23日に益田市人権センターで開催された島根県埋蔵文化財調査センター講演会「沖手遺跡と石見の中世」で報告した。

#### 4. 土層

##### 7区下層の調査

遺構面の下層の土壤を確認する目的で、グリッドを3箇所に設定して掘削した。

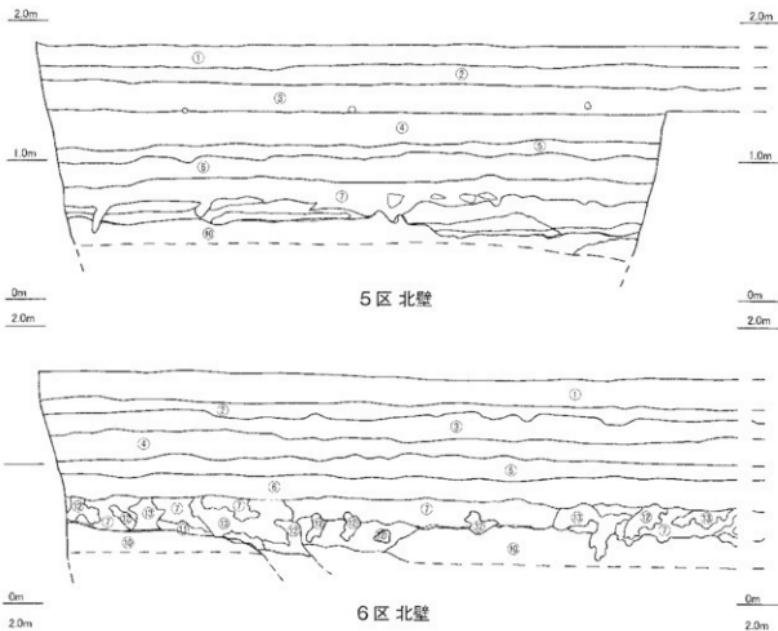
中央トレンチの東側、7層上面（標高0m、地表面からの深さ約1m）から溝状遺構が掘り込まれているのが確認できた。この遺構の覆土は有機質分を含む黒色粘質土である。

最終的には5m×5mを面的に発掘した。

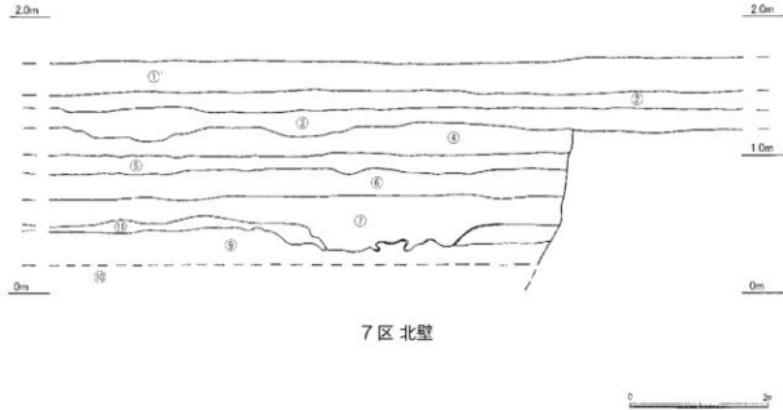
溝状遺構は、幅約1mの南北方向にのびるもので、調査区中央がやや南西側にのびる形をしている。調査区北壁側が幅30cm、南壁側が30cmで、南に行くにつれて深くなっている。北壁側では、断面形は浅い皿状になっている。



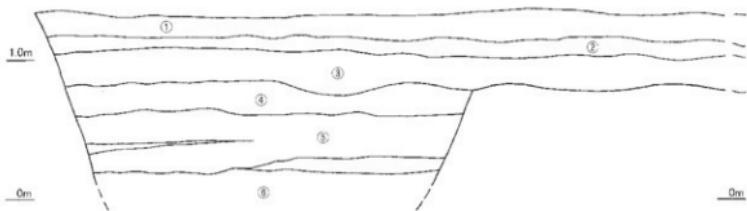
調査風景



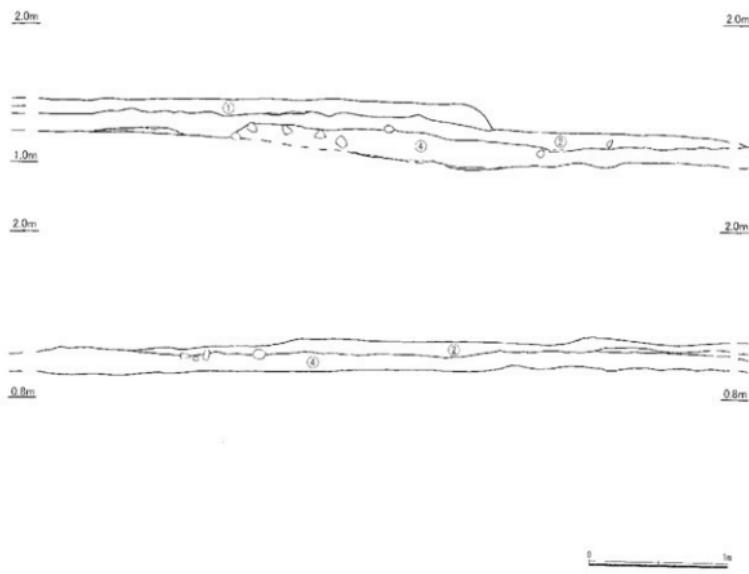
第5図 5・6区土層図 ( $S=1/200$ )



7区北壁



第6図 7区土層図 9・10区西土層図 ( $S=1/200$ )



第7図 10区土層図 ( $S=1/200$ )

## 第2節 調査の結果

沖手遺跡の久城インター線部分は、前述したように5～10区に分けて調査を実施した。現況では、遺跡の中央には南北に伸びるかたちで水路が通っており、水路の西側では5～7区が、水路の東側では8～10区が隣接して位置している。遺構の分布状況を見ると、5～7区、8区、9区と10区西側、10区東側に大きく違いが見られることから、それぞれ分けて記述することとする。なお、建物跡・柱列については、現地調査の終盤に、間尺を用いて建物跡を構成するピットを特定する作業を行った。本報告で掲載したもの以外にも現地調査時点では認識できなかったものも多く、特に遺構密度の高いところでは復元の困難なものもあったが、建物跡の可能性のあるものとして提示することとしたい。

### 1. 5～7区の調査

#### (1) 遺構の分布状況

遺構はいずれも3層上面で検出している。5～7区で確認、復元できた主な遺構は、建物跡16棟、柱列2条、溝状遺構4条、井戸4基、墓28基である。

6区の溝状遺構24の南東側、6区北東部から7区の溝状遺構8の北側にわたる範囲で遺構密度が高く、5区から6区西側にわたる範囲では遺構のあり方はほとんど空白域である。

#### (2) 建物跡・柱列

##### 1) 建物跡・柱列

###### 建物跡77（第11図）

6区西側中央部に位置している。周辺は遺構が極めて希薄な箇所である。2間（5.8m）×4間（6m）の身舎に半間の庇付の総柱建物跡と考えられ、主軸はN-5°-Wの方向を指している。ピットからは土師器の小片が出土している。

###### 建物跡78（第12図）

6区北東部に位置している。北東部にはピット群、井戸7、墓40が隣接し、建物跡79と重複する。2間（4.4m）×2間（6.4m）の総柱建物跡と考えられ、主軸はN-80°-Eの方向を指している。ピットからは土師器の小片が出土している。

###### 建物跡79（第12図）

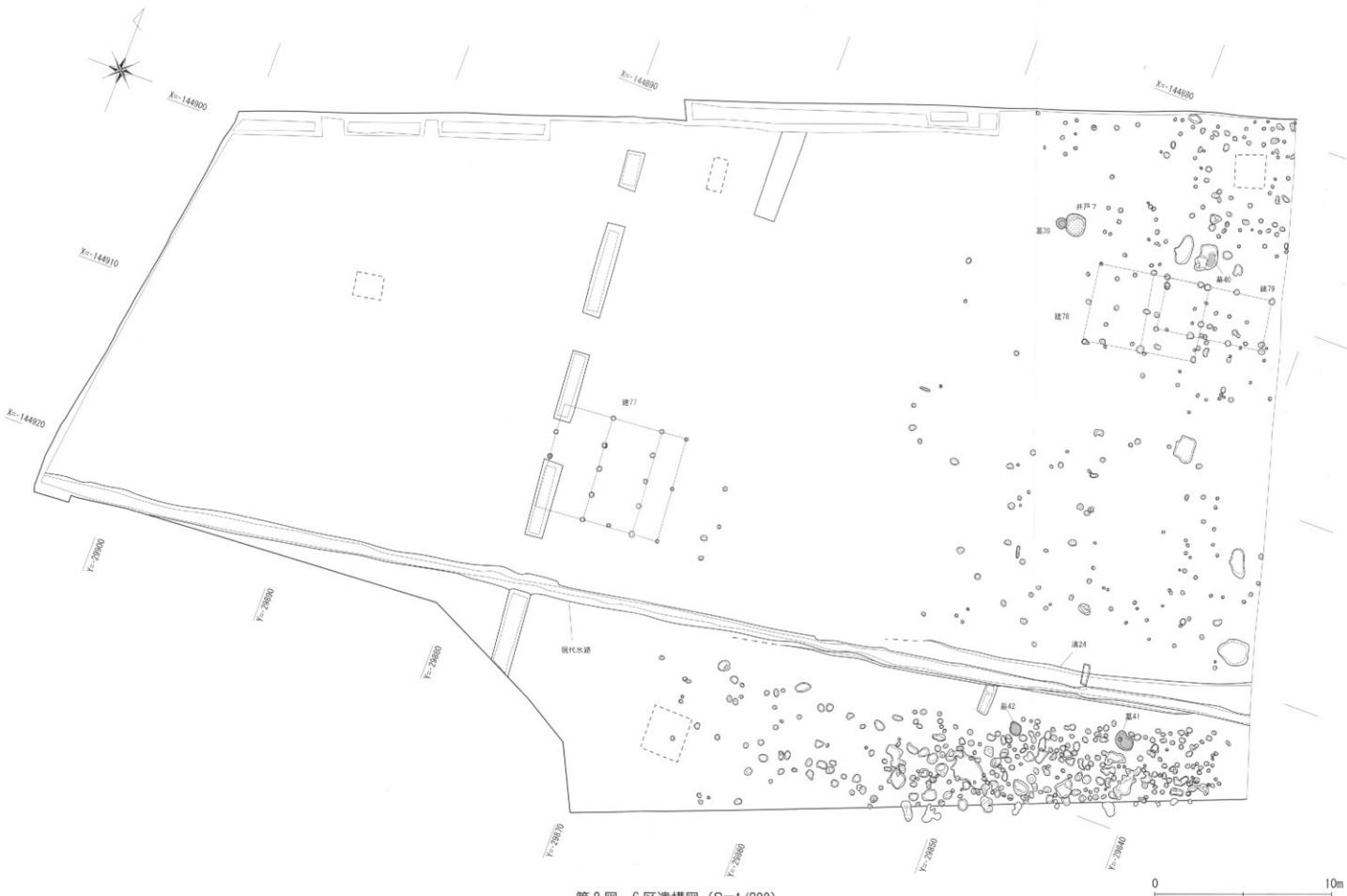
6区北東部に位置している。建物跡78と重複している。1間（3.0m）×3間（6.1m）の側柱建物跡である。主軸はN-83°-Eで、ピットからは白磁碗の小片が出土している。

当初、南側の白磁の小片が出土したピット群を加えて約6m四方の総柱建物跡を想定していたが、南東隅にピットが検出されていないことから、上記の規模としている。

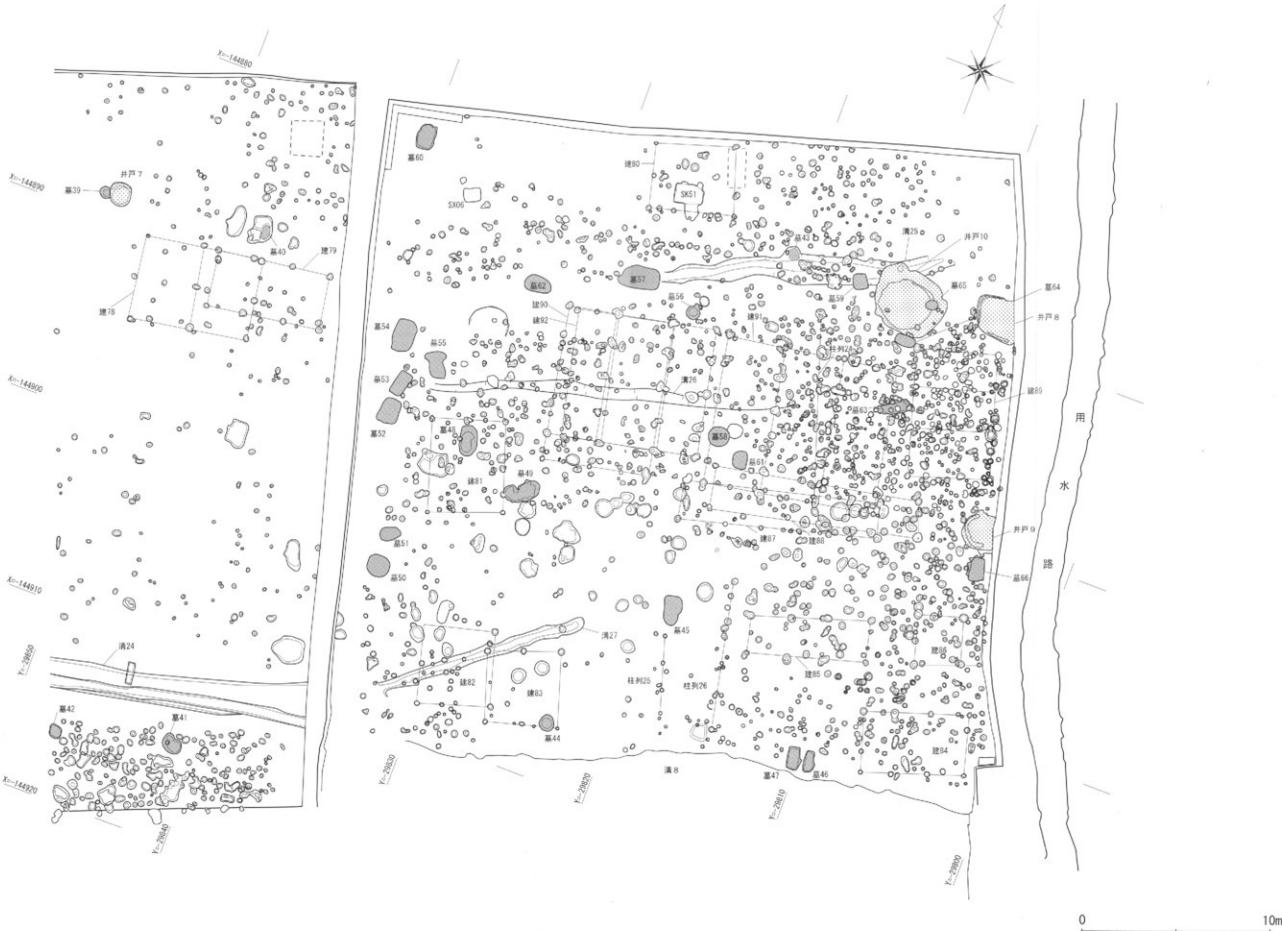
###### 建物跡80（第13図）

7区北側中央部に位置している。2間（3.4m）×1間（4.3m）の建物跡で、主軸はN-72°-Eの方向を指している。平面積は14.6m<sup>2</sup>である。なお、軸が重なるSK51は、竈と推測し、位置関係から付属施設と考えられる。

###### 建物跡81（第13図）



第8図 6区遺構図 (S=1/200)



第9図 7区遺構図 (S=1/200)

6 区東側中央部に位置している。1間（4.0m）×2間（4.0m）に庇付の建物跡と考えられ、主軸はN-17°-E。南東側のP1946は柱根が残っており、上部を墓49に切られている。

#### 建物跡82（第14図）

7区南西部に位置している。2間（4.2m）×1間（3.9m）の建物跡と考えられ、主軸はN-15°-Wである。ピットからは土師器の小片が出土している。

#### 建物跡83（第14図）

7区南西側に位置している。建物跡82と重複する。1間（3.8m）×2間（4.0m）の建物跡で、平面積は15.2m<sup>2</sup>である。主軸はN-20°-W。建物跡82、墓44と重複しているが、前後関係は不明である。ピットからは土師器の小片が出土している。

#### 建物跡84（第15図）

7区南東部、溝8の北側に位置している、1間（3.2m）×3間（5.6m）の建物跡で、平面積は17.6m<sup>2</sup>である。主軸はN-70°-E。ピットからは土師器の小片、割石が出土している。

#### 建物跡85（第15図）

7区南東部に位置している。1間（2.2m）×3間（6.4m）の建物跡で、平面積は13.4m<sup>2</sup>である。主軸はN-68°-Eの方向を指している。ピットからは土師器の小片、割石が出土している。

#### 建物跡86（第16図）

7区南東部、建物跡85の東側に位置している。1間（2.4m）×1間（2.7m）の建物に庇付の建物跡と考えられ、主軸はN-70°-Eの方向を指している。ピットからは土師器の小片が出土している。

#### 建物跡87（第17図）

7区東側中央部に位置している。1間（1.9m）×6間（10.5m）の建物跡で、平面積は20.1m<sup>2</sup>、主軸はN-76°-Eの方向を指している。ピットからは割石、土師器の小片が出土している。

#### 建物跡88（第18図）

7区東側中央部に位置している。1間（2.0m）×4間（11.0m）の建物跡で、平面積は25m<sup>2</sup>、主軸はN-77°-Eの方向を指している。ピットからは土師器の小片が出土している。

#### 建物跡89（第19図）

7区東側中央部に位置している。周辺は遺構が極めて密な箇所である。1間（4.2m）×3間（6.8m）の総柱建物跡と考えられ、平面積は約28.6m<sup>2</sup>である。主軸はN-12°-W。P1962、P2001、P715、P168には約10~20cmの柱根が残っており、P715では根石も伴っている。ピットからは土師器の小片が出土している。

#### 建物跡90（第20図）

7区中央部に位置し、建物跡92と重複する。2間（5.8m）×4間（6.8m）の身舎に庇付の総柱建物跡と考えられ、平面積は39m<sup>2</sup>であるが、庇を含めると47.6m<sup>2</sup>となる。主軸はN-10°-Wの方向を指している。ピットからは土師器の小片が出土している。

#### 建物跡91（第21図）

7区中央部東側に位置している。3間（9.2m）×4間（6.7m）の身舎に半間の庇付の総柱建物跡と考えられ、庇を含めた総面積は72.7m<sup>2</sup>である。主軸はN-12°-Wの方向を指している。ピットからは土師器の小片が出土している。

建物跡 90 と主軸が重なり、3.1m 東側に位置しているため、同一の建物跡である可能性もある。その場合は、東西 6 間（18.0m）×南北 5 間（8.0m）の規模で平面積は 144m<sup>2</sup>となる。

#### 建物跡 92（第 22 図）

7 区中央部に位置している。建物跡 90 と重複する。3 間（7.3m）×4 間（6.8m）の総柱建物跡と考えられ、総面積は 49.6m<sup>2</sup>である。主軸は N - 14° - W の方向を指している。ピットからは土師器の小片が出土している。

#### 柱列 24（第 23 図）

7 区中央部東側に位置しており、建物跡 89 と平行で、柱間は 5 間（10.3m）、主軸は N - 19° - W の方向を指している。ピットからは土師器の小片が出土している。

#### 柱列 25（第 23 図）

7 区南側中央部に位置している。建物跡 82・83・84 とほぼ平行で柱間は 3 間（4.1m）である。主軸は N - 17° - W の方向を指している。ピットからは土師器の小片が出土している。

#### 柱列 26（第 23 図）

7 区南部東側に位置している。柱間は 4 間（7.9m）で、主軸は N - 13° - W の方向を指している。建物跡 85 とほぼ平行で約半間（1.2m）離れたところにあり位置関係から建物 85 に伴う可能性がある。ピットからは土師器の小片が出土している。



発掘風景



井戸 10 発掘風景



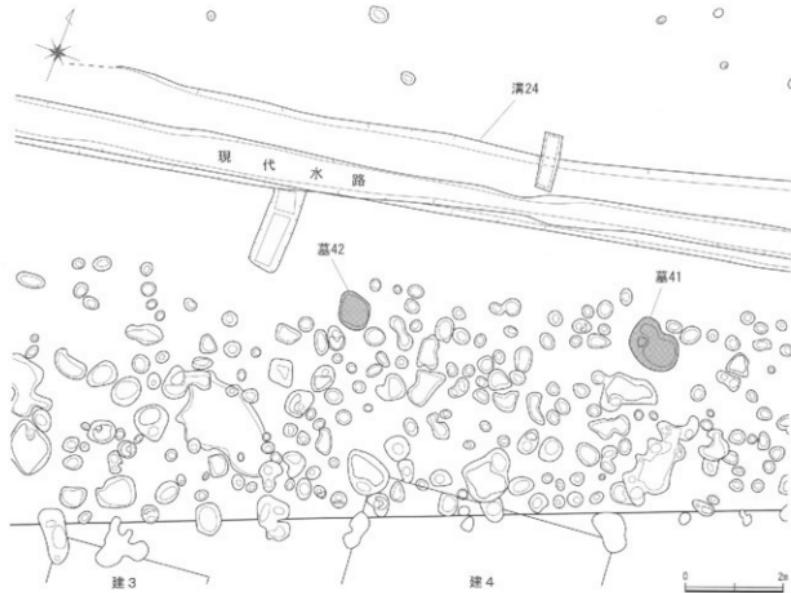
井戸 13 発掘風景



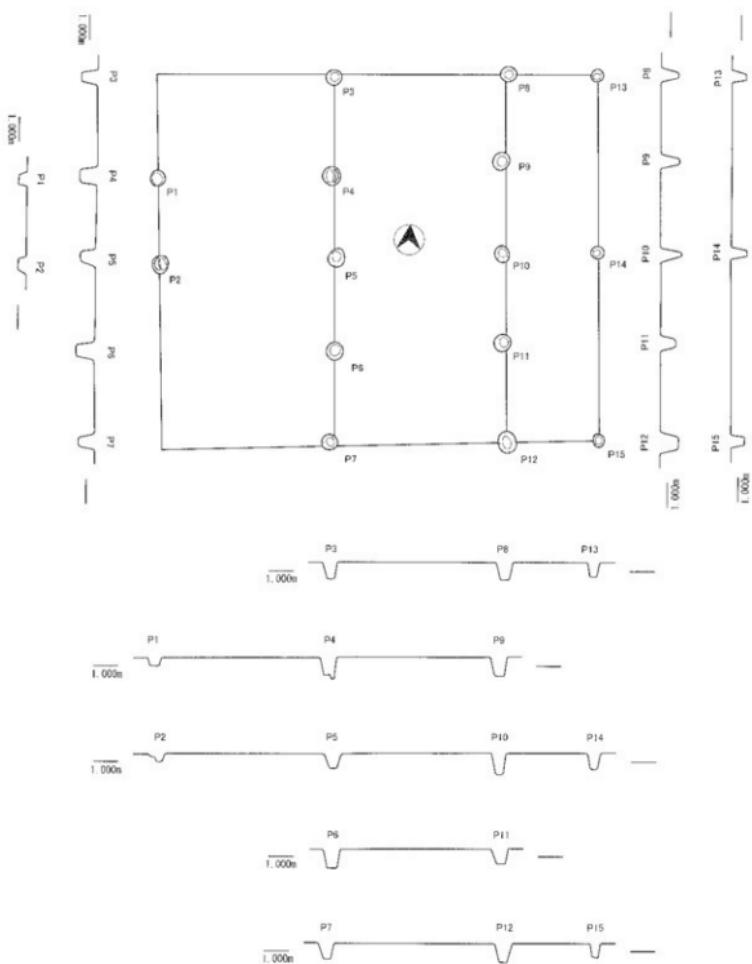
墓発掘風景



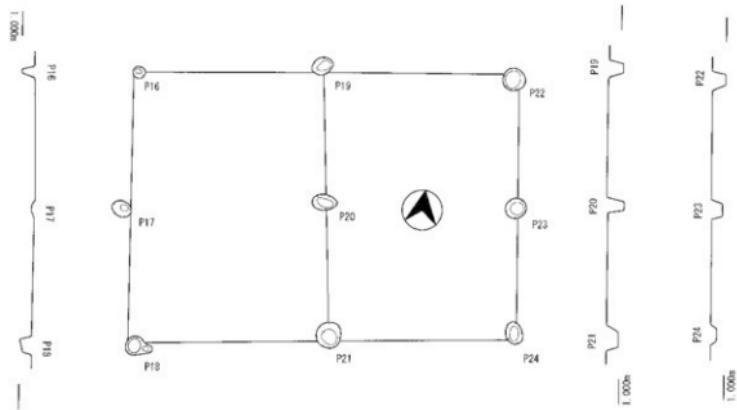
6区 柱穴群（北から）



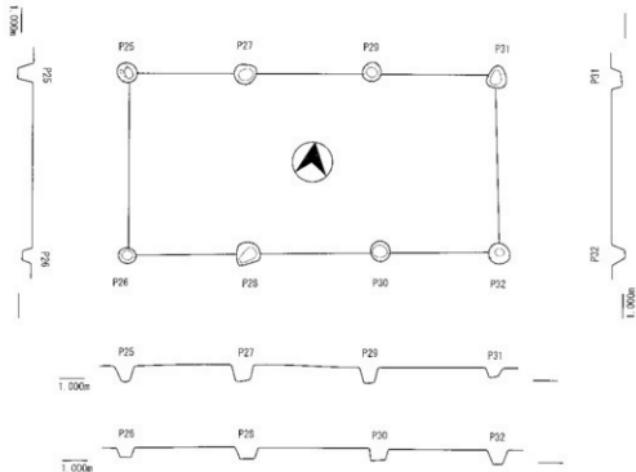
第10図 6区南東部遺構図 (S=1/200)



第11図 建物跡77実測図



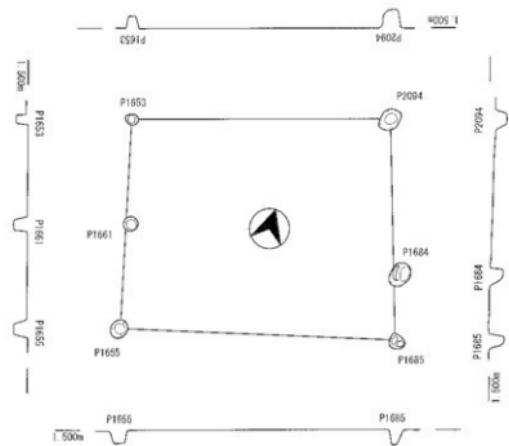
建物 78



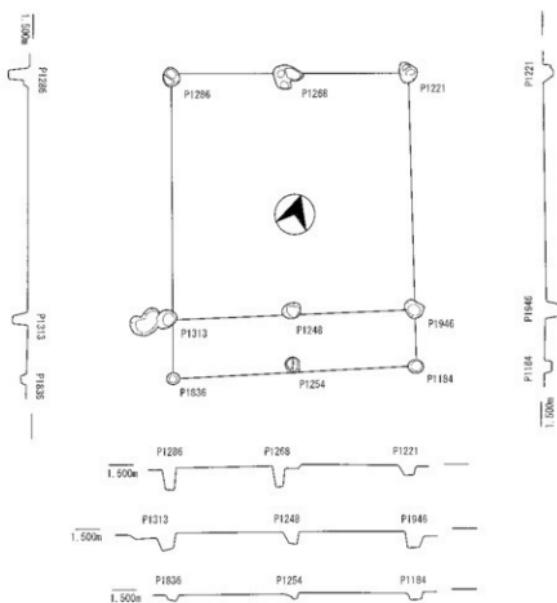
建物 79

第12図 建物跡 78・79 実測図

0 2m



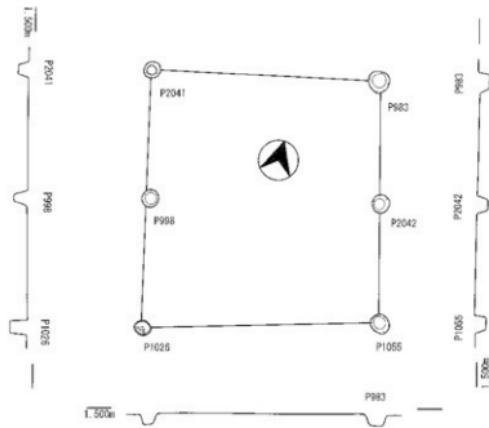
建物 80



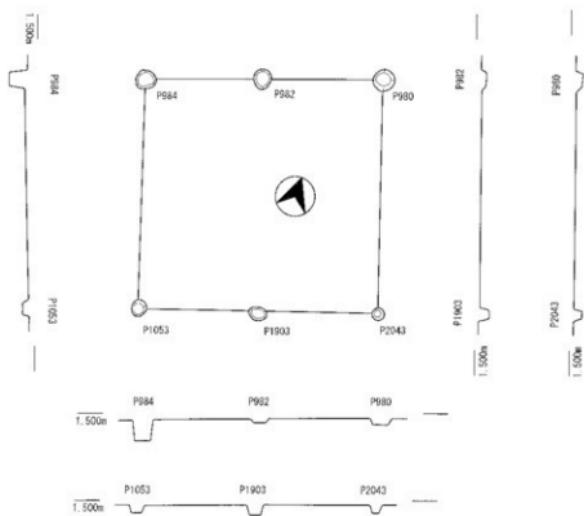
建物 81

第13図 建物跡 80・81実測図

0 2m



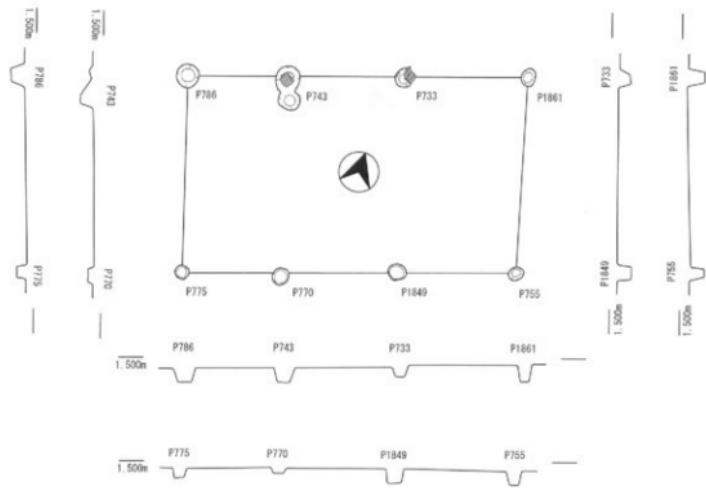
建物 82



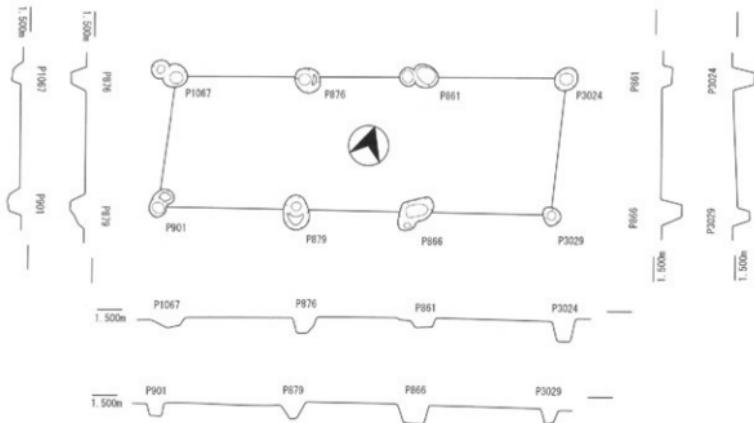
建物 83

0 2m

第14図 建物跡 82・83 実測図



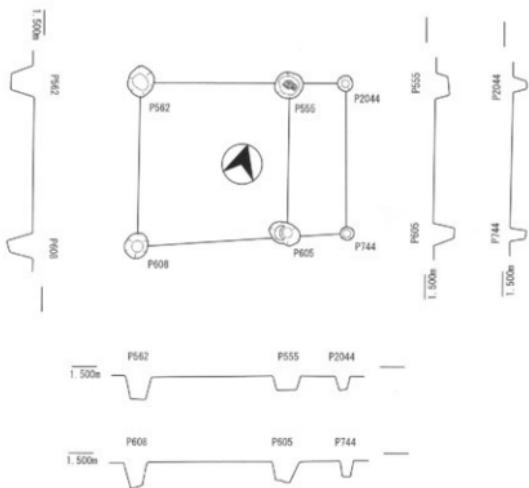
建物 84



建物 85

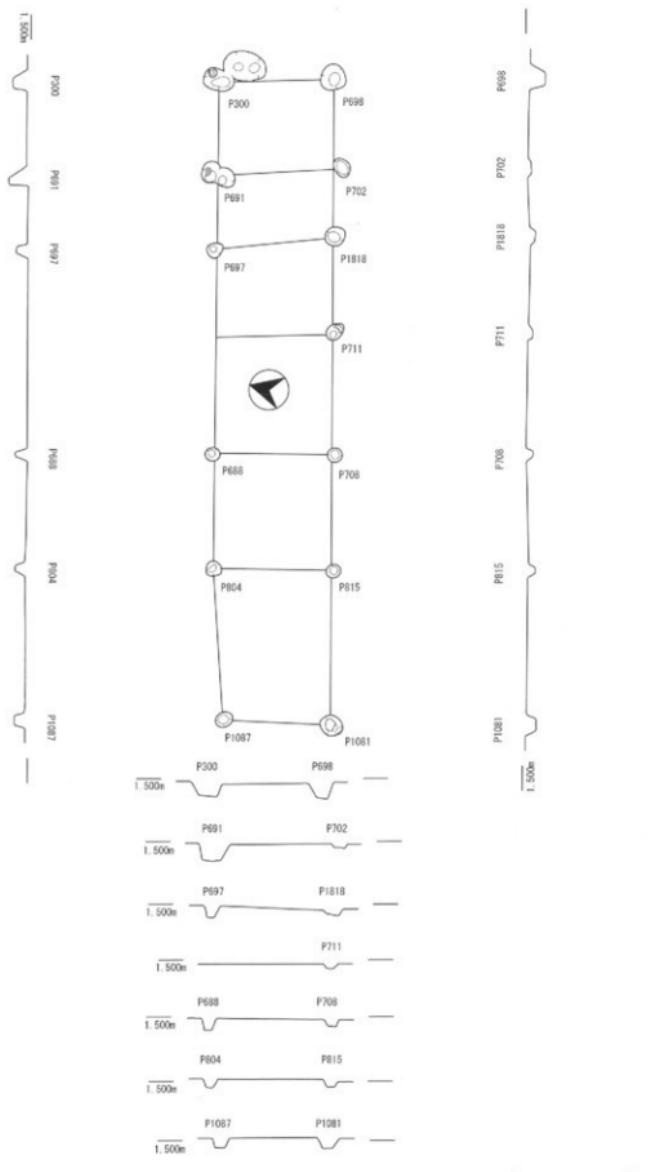
0 2m

第 15 図 建物跡 84・85 実測図

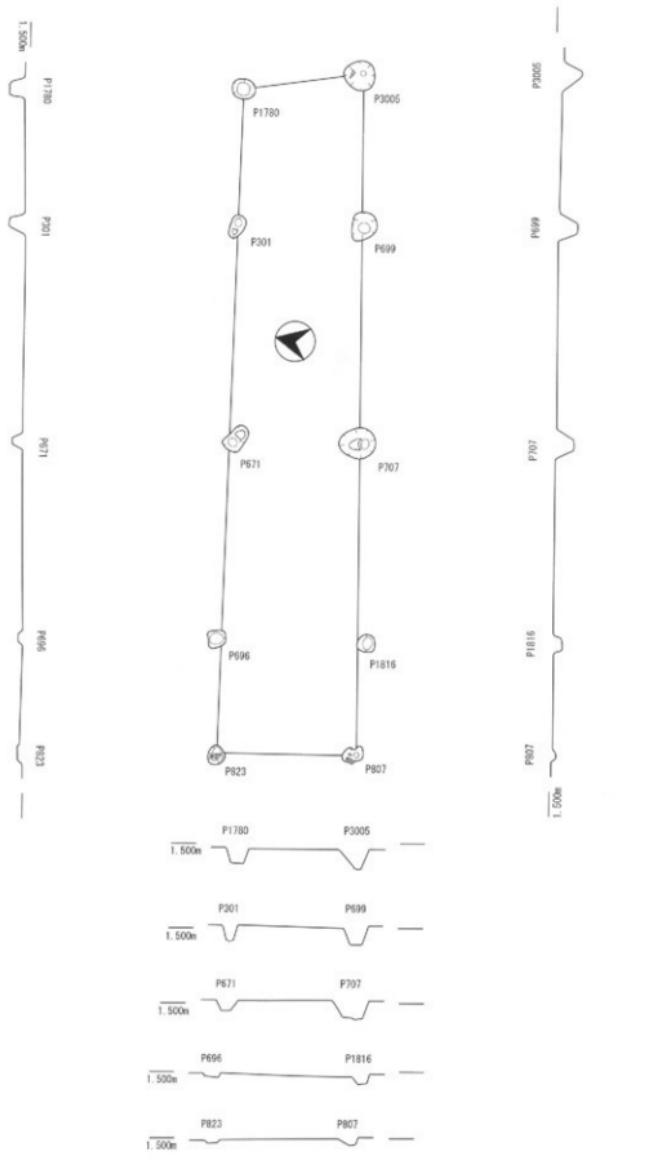


建物 86

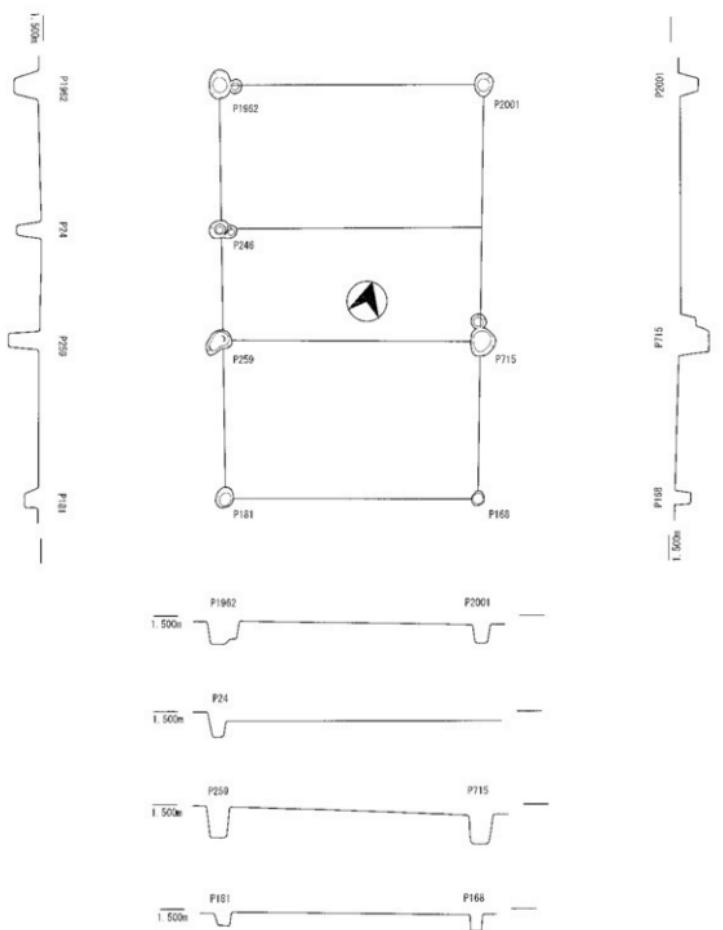
第 16 図 建物跡 86 実測図



第17図 建物跡87実測図



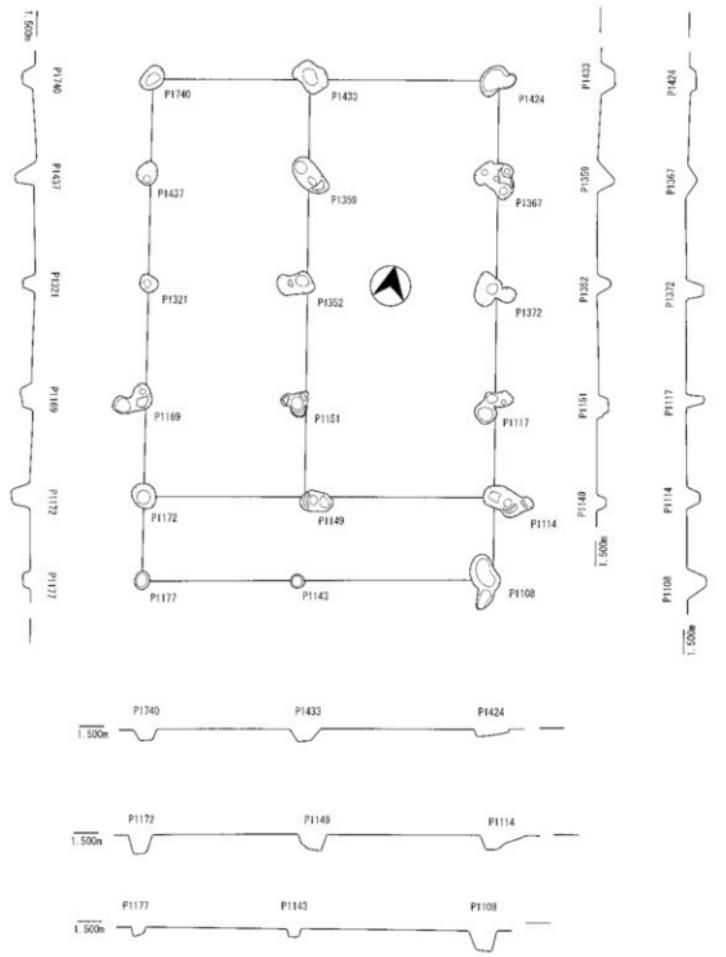
第18図 建物跡88実測図



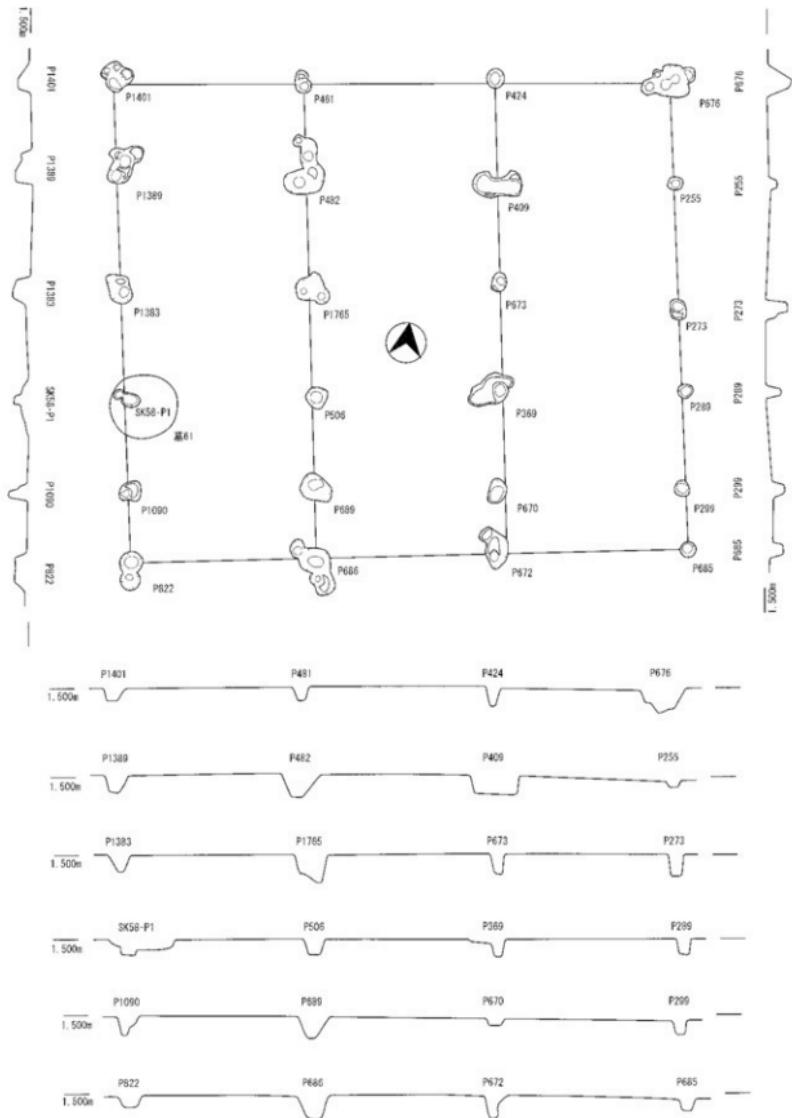
建物 89

0 2m

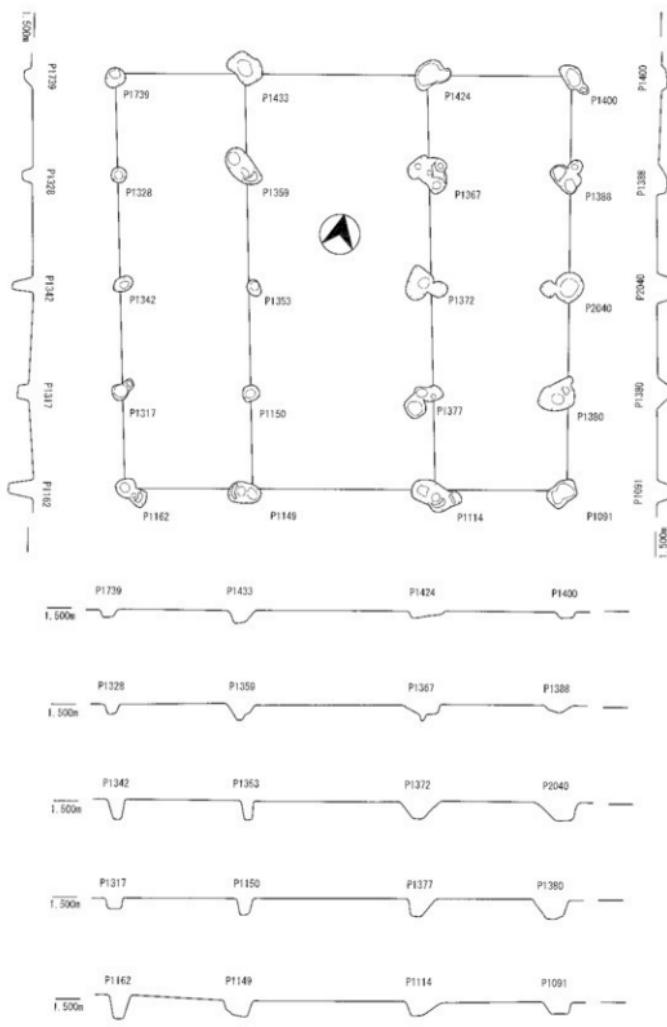
第19図 建物跡89実測図



第20図 建物跡90実測図



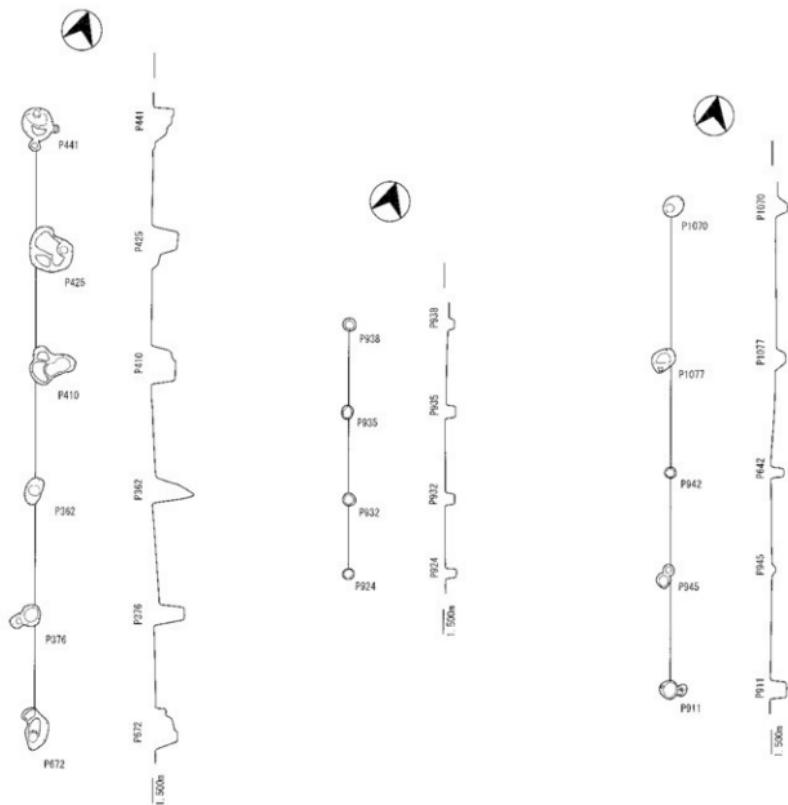
第21図 建物跡91実測図



建物 92

0 2m

第 22 図 建物跡 92 実測図



第23図 柱列24~26実測図

## 2) 井戸

### 井戸 7 (第 24 図)

6 区の北東部に位置する。方形縦板組隅柱横棟型井戸である。掘方は、やや隅丸方形を呈している。掘方の長辺は 110cm、短辺は 110cm、深さは 250cm である。

その中心に一辺約 70cm の方形の井側を据える。底部を水平に加工した隅柱を立て、横棟を 3 段組したものと考えられる。

掘方は、黒色砂質土で埋められ、検出面から約 1m の深さでは礫や木材が投棄された状況が認められ、それらの間から青磁碗が出土した(第 40 図 - 12, 13)。青磁碗 12 は割花文青磁である。13 の内面には、火を受けた痕跡が残っている。井戸を埋める祭祀の痕跡であろうか。約 2m 下の井側内には、自然石が埋められていた。

さらに礫や埋土を取り除き、水が湧き出した中から、ほぼ完形の土師器壺を 2 点取り上げた(第 40 図 - 10, 11)。土師器壺は祭祀に伴うものと考えられる。出土遺物から、この井戸は 13 世紀頃に廃絶したものと考えられる。

### 井戸 8 (第 24 図)

7 区の北東部に位置する。方形縦板組隅柱横棟型井戸である。掘方は、やや隅丸方形を呈している。掘方の一辺は約 200cm、深さは 250cm である。

その中心に一辺約 70cm の方形の井側を据える。底部を水平に加工した隅柱を立て、横棟を 3 段組み、各辺に 3 枚の大きな縦板を立て、その縦目に小さい縦板を立てている。

掘方は地山ブロックの混じる黒色砂質土で埋められ、約 2m 下の井側内には、被熱した自然石が埋められている。井側埋土からは、土師器、青磁の小片が出土している。

### 井戸 9 (第 25 図)

7 区の南東部に位置する。方形縦板組隅柱横棟型井戸である。掘方は、やや隅丸方形を呈している。掘方の一辺は約 200cm、深さは 200cm である。

その中心に一辺約 70cm の方形の井側を据える。底部を水平に加工した隅柱を立て、横棟を 2 段組み、各辺に 3 枚の大きな縦板を立て、その縦目に小さい縦板を立てている。

掘方は地山ブロックの混じる黒色砂質土で埋められ、約 2m 下の井側内には、被熱した自然石が埋められている。

井側埋土からは、土師器、青磁の小片が出土している。

### 井戸 10 (第 25 図)

7 区の北東部に位置する。方形縦板組隅柱横棟型井戸である。掘り方は、円形を呈している。掘方の長辺は 340cm、短辺は 320cm、深さは 200cm である。

その中心に一辺約 70cm の方形の井側を据えたと考えるが、南東部の隅柱のみ残っている。横棟が 2 段差し込まれており、1 枚の大きな縦板を立て、底部を水平に加工した隅柱を立てる構造であると推測される。

掘方は地山ブロックの混じる黒色土や砂、粘土で埋められ、約 2m 下の井側内には、被熱した自然石が埋められている。井側埋土からは、土師器、青磁の小片が出土している。

出土遺物は、白磁、青磁、最下層から中国陶器壺が出土している。(第 41 図 - 8 ~ 12)

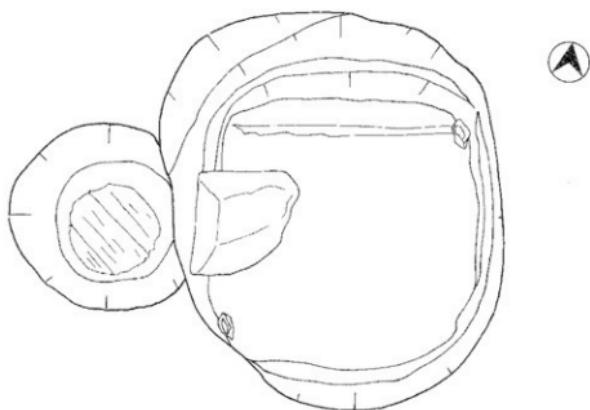
8 は白磁碗 V 類の高台部分で、内面に火を受けた痕跡が認められる。9 ~ 11 は龍泉窯系青磁

碗 I 類である。9 は内面に花文を施す。12 は中国陶器壺で 12 世紀のものである。

出土遺物から、13 世紀以降の廃絶と考えられる。ちなみに上層に墓 65、南側に墓 64 が築かれている。

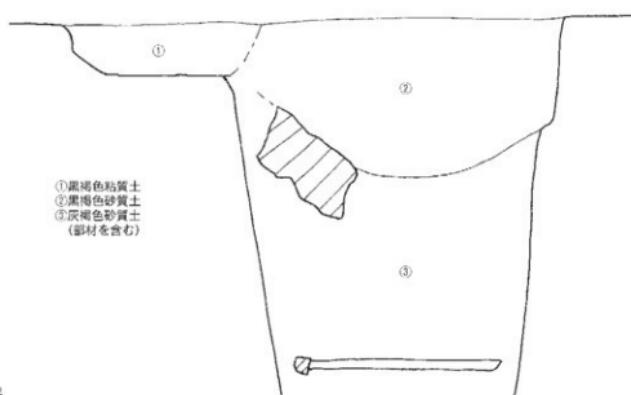


井戸 9 調査風景



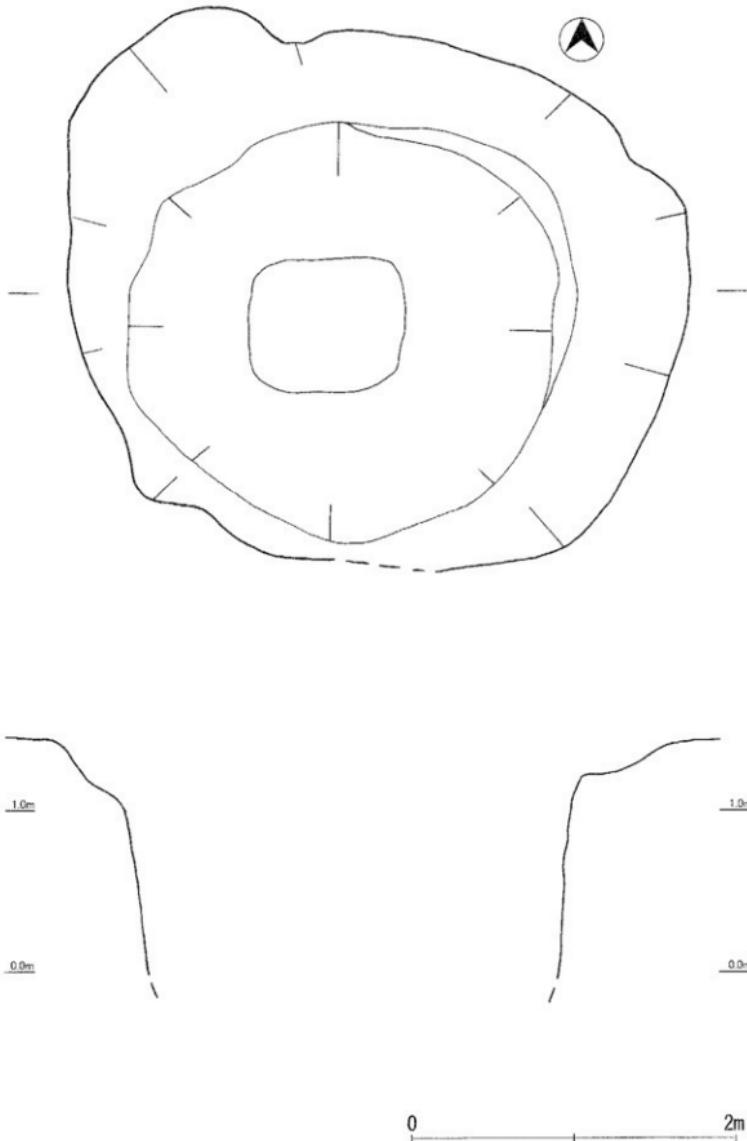
— 1.5m —

— 1.5m —



0 ————— 1m

第24図 墓39・井戸7実測図



第25図 井戸10実測図

### 3) 墓

#### 墓 39 (第 24 図)

6 区の北東部で、井戸 7 の上層を掘り込んで造られていた。

径約 65cm の墓壙内に、桶棺が埋置されていた。桶棺は基底部径が約 35cm 、残存高は約 15cm で、棺蓋として板状の木材が被せられていた。南西付近で人骨が確認されたが、土壌化が著しく取り上げはできなかった。(遺構名 2SK01)

#### 墓 40 (第 9 図)

6 区北東側で、建物 78 、 79 の北側に位置している。

長辺 80cm 、短辺 60cm 、深さ約 30cm の長方形の墓壙をもつ。人骨を取り上げている。(遺構名 2SK08)

#### 墓 41 (第 26 図)

6 区南東側で、溝状遺構 24 の南側に位置している。

長辺約 110cm 、短辺約 80cm 、深さ 25cm の墓壙内に、土師器皿が副葬されている(第 39 図 - 1)。人骨下部で板材が検出されていることから、木棺墓であった可能性がある。東側には頭蓋骨と歯が出土しており、東頭位の埋葬と考えられる。性別・年齢は不明である。(2SK05)

#### 墓 42 (第 26 図)

6 区南東側で、溝状遺構 24 の南側に位置している。

長辺約 65cm 、短辺約 50cm 、深さ約 10cm の墓壙内に、箱型の木棺が確認された。中から人骨が出土している。副葬品と考えられる完形の土師器皿(第 39 図 - 2)と棺内の南東側には歯が出土しており、北頭位の埋葬と考えられる。(2SK02)

#### 墓 43 (第 9 図)

7 区北東部で、井戸 10 の西侧に位置し、溝状遺構 25 を掘り込んで造られている。長辺約 60cm 、短辺 50cm 、深さ 10cm の隅円方形の墓壙をもつ。北側では歯が出土しており、北頭位の埋葬と考えられる。性別・年齢は不明である。(遺構名 3SK07)

#### 墓 44 (第 27 図)

7 区南西部で、溝状遺構 8 の北側に位置している。長辺約 90cm 、短辺約 70cm 、深さ約 25cm の墓壙内に箱型の木棺が据え付けられたもので、朝鮮陶器碗(第 39 図 - 3)が副葬されている。棺内の東側には歯が出土している。歯の鑑定から、被葬者は 5 歳の幼児と考えられる。(遺構名 3SK18)

#### 墓 45 (第 27 図)

7 区中央南側に位置している。長辺約 140cm 、短辺約 55cm 、深さ約 20cm の墓壙内に箱型の木棺が据え付けられたものと推測される。墓壙上面の南側には 5 ~ 30cm の石が集められていた。この集石は、並び方が墓壙の主軸と重なることから、この墓に伴うものとするのが妥当と思われる。墓壙の北側で、歯や風化の進んだ頭骨と思われるものが検出されたほか、土師器壺 1 点、(第 39 図 - 4)、土師器皿 4 点(第 39 図 - 5 ~ 8)が出土した。また、北東側の上層を土坑に切られており、その半裁時に底部から刀子と思われる鉄製品が出土している。出土位置から、これも副葬品と考えられる。

可能性として、土師器の壺と頭蓋骨の出土状況、さらに土坑の位置関係から、一度掘り起こ

した頭蓋骨と土師器壺を、再び納め直したと考えられる。

壺は体部が立ち上がる器形である。皿の内面にはタール状のものが付着しており、灯明皿として使用された可能性がある。出土遺物から屋敷墓と考えられる。性別・年齢は不明である。(遺構名 3SK12)

#### 墓 46 (第 28 図)

7 区南東部で、溝状造構 8 の北側、墓 47 と並ぶように位置している。長辺 115cm、短辺 50 cm の墓壙内に箱型の長辺 100cm の木棺が埋置されていたものと推定する。棺内の北側には歯が出土しており、北頭位の埋葬と考えられる。性別・年齢は不明である。(遺構名 3SK25)

#### 墓 47 (第 28 図)

7 区南東部で、溝状造構 8 の北側、墓 46 と並ぶように位置している。長辺 115cm、短辺 65 cm の墓壙内に箱型の長辺 105cm、短辺 55cm の木棺が埋置されていたものと推定する。棺内の北側には土師器壺 1 点(第 39 図-9)、歯が出土しており、北頭位の埋葬と考えられる。歯の鑑定から、被葬者は成人と考えられるが性別は不明である。なお、棺の蓋の一部が土師器の壺に被さり、壺の底部は原位置を保っていた、つまり棺内部の頭部北側に副葬されていたと考えられる。(遺構名 3SK26)

#### 墓 48 (第 29 図)

7 区中央部西側で、建物 81 の内側に位置している。壙内に木棺が出土してはいないが、北側埋土に人骨の一部が出土したため、墓としたものである。頭位は定かではないが、周囲の墓と比較すると、北頭位と推測される。(遺構名 3SK38)

#### 墓 49 (第 29 図)

7 区中央部西側で、建物 81 と接している。長辺 185cm、短辺 100cm、深さ 17cm の墓壙の北側で、歯や風化の進んだ頭骨と思われるものが検出された。墓壙から土師器皿が 4 点(第 39 図-10 ~ 13) 出土している。(遺構名 3SK39)

#### 墓 50 (第 30 図)

7 区南西部に位置している。径 70cm の墓壙内に、桶棺が埋置されていた。桶棺は基底部径が 55cm、残存高は約 25cm で、棺蓋として板状の木材が被せられていた。棺内の東側では歯が出土しており、東頭位の埋葬と考えられる。人骨の鑑定から、被葬者は熟年の男性と考えられる。遺物は、棺内の土壤化した人骨の周辺から木製の数珠が、桶底板を取り外した埋土直上から卒塔婆が出土した。

木製の卒塔婆で、上端が山形に加工されている。いずれも墨書の文字が見られ、「迷故(以下不明)」、「悟故(以下不明)」、「本来無東西」、「何處有南北」と判読できる。これらは偈頌の文句で、「迷故三界城 悟故十方空 本来無東西 何處有南北」の 1 句ずつをそれぞれに書き記したものと考えられる。

2 区の墓 7 でも同様な卒塔婆が出土している。これには土師器皿が共伴しており、15 世紀後半頃の墓と位置づけられている。これらと同時期のものと考えられる。(遺構名 3SK42)

#### 墓 51 (第 31 図)

7 区西側に位置している。墓壙は、長辺 110cm、短辺 70cm、深さ 20cm で、主軸方向は N - 62° - E である。埋葬形態は土壤である。墓壙内にはほぼ全身の人骨が検出されたが、保存状

態は極めて悪く、取上げは出来なかった。埋葬姿勢は仰臥で頭位は東、右側膝は立膝、左側は屈曲の姿勢で埋葬されたものと考えられる。

右肩部に土師器壺1点(第39図-14)が出土した。器高に対して口縁部が聞くかたちである。出土遺物から13世紀前半の墓と考えられる。被葬者の性別は男性であるが、年齢は不明である。(遺構名3SK43)

#### 墓52(第32図)

7区西側に位置している。長辺135cm、短辺約100cm、深さ27cmの墓壙内に箱型の木棺が据え付けられたもので、主軸はほぼ北を向く。棺内の北側では歯が出土しており、北頭位の埋葬と考えられる。(遺構名3SK44)

#### 墓53(第32図)

7区西側、墓52の北側に位置している。長辺135cm、短辺80cm、深さ25cmの墓壙内に箱型の木棺が据え付けられたもので、主軸はほぼ北を向く。埋葬姿勢は仰臥で棺内の北側では歯が出土していることから、北頭位の埋葬と考えられる。下肢骨の径が大きいところから性別は男性と推定される。(遺構名3SK45)

#### 墓54(第33図)

7区西側、墓53の北側に位置している。長辺180cm、短辺115cm、深さ30cmの墓壙内に長辺117cm、短辺70cmの箱型の木棺が据え付けられたもので、主軸はほぼ北を向く。埋葬姿勢は右を下にした側臥である。人骨は頭蓋、上腕骨、前腕骨等そろっていたがもろくなっていた。北頭位の埋葬で、性別は男性である。(遺構名3SK46)

#### 墓55(第33図)

7区西側に位置している。長辺約145cm、短辺75cm、深さ約35cmの土壙墓で主軸はほぼ北を向く。埋葬姿勢は仰臥で人骨は比較的残っていたがもろく取上げはできなかった。北頭位の埋葬で性別は男性である。人骨の胸部は柱穴で切られていた。鉄剣と皿(第40図-1、2)が副葬されている。(遺構名3SK47)

#### 墓56(第33図)

7区中央部北側、溝状遺構25の南側に位置している。径75cm、深さ約35cmの墓壙に桶棺が据え付けられたものと推定され、主軸はほぼ北を向く。棺内の北側では人骨が出土している。(遺構名3SK56)

#### 墓57(第34図)

7区中央部北側に位置し、溝状遺構25を切って造られている。7区西側に位置している。長辺245cm、短辺約100cm、深さ33cmの墓壙内に箱型の木棺が据え付けられたと考えられる。

主軸はほぼ東を向き、棺内の東側では歯が出土している。東頭位の埋葬と考えられる。

出土遺物は、第41図である。1は土師器の壺で、中世前半期に遡る器形である。2は東播系掘鉢である。3は青磁碗、4は龍泉窯系青磁碗で、蓮弁文を有する。5・6も龍泉窯系青磁碗で、5は内面に花文が6にはスタンプ文を施す。7は、同安窯系の皿である。出土遺物からは、墓は中世前半期のものである。(遺構名3SK52)

#### 墓58(第9図)

7区中央部、建物跡91の柱穴の一部を切って造られている。長辺約82cm、短辺約85cm、深

さ 28cm の墓壙で箱型の木棺の痕跡が確認でき、底板と考えられる木質も一部残存していた。東側に頭骨が検出されている。(遺構名 3SK61)

#### 墓 59 (第 34 図)

7 区北東部、溝状遺構 25 を切って造られている。7 区西側に位置している。長辺 95cm、短辺 80cm、深 25cm の墓壙内に箱型の木棺が据え付けられたもので、主軸はほぼ北を向く。棺内の北側では歯が出土している。(3SK55)

#### 墓 60 (第 35 図)

7 区北西部に位置している。長辺 140cm、短辺 95cm、深さ 18cm の土墓壙と考えられ、主軸はほぼ北を向く。埋葬姿勢は、右を下にした側臥である。人骨の保存状態は著しく悪いが、頭蓋、下頬骨、左側大腿骨等が残っていたが、年齢、性別ともに不明である。北頭位の埋葬である。

南側に皿が 1 点(第 40 図 - 7) 出土している。京都系土師器皿で、16 世紀前半のものである。(遺構名 3SK50)

#### 墓 61 (第 35 図)

7 区中央部、やや東側に位置している。長辺 120cm、短辺 105cm、深さ約 18cm の墓壙内に頭蓋冠の一部が残っているだけで、性別年齢は不明である。土師器皿が 4 点(第 40 図 - 3 ~ 6) 出土している。いずれも器高に対し口縁部が大きく開くかたちである。(遺構名 3SK61)

#### 墓 62 (第 36 図)

7 区中央部やや西側に位置している。長辺約 115cm、短辺 65cm、深さ 15cm の墓壙内の東側では歯が出土しており、東頭位の埋葬と考えられる。歯の鑑定から被葬者は 5 歳前後の幼児と考えられる(遺構名 3SK60)

#### 墓 63 (第 36 図)

7 区中央部東側に位置している。長辺 175cm、短辺 70cm、深さ 15cm の墓壙内の東側では歯が出土しており、東頭位の埋葬と考えられる。埋葬姿勢は仰臥と思われる。人骨は保存状態が著しく悪く、取上げられなかった。墓壙は、柱穴によってかなり破壊されている。人骨の鑑定から、被葬者は成人の女性と考えられる。(遺構名 3SK61)

#### 墓 64 (第 37 図)

7 区東側、井戸 10 の南側に位置している。長さ約 100cm、約 80cm、深さ約 15cm の土壙墓で埋葬姿勢は仰臥と思われる。被葬者は性別、年齢ともに不明である。(遺構名 3SK62)

#### 墓 65 (第 37 図)

7 区東側、井戸 10 の廃絶後に造られている。墓壙の規模は不明で、頭骨と肋骨、土師器皿(第 40 図 - 9)が出土している。埋葬姿勢は不明で、人骨の鑑定から、年齢は 2 ~ 3 歳の幼児と推定される。(遺構名 3SK63))

#### 墓 66 (第 37 図)

7 区東側、井戸 9 の南側に位置している。長辺 140cm、短辺 80cm、深さ 20cm の墓壙内に箱型の木棺が据え付けられたもので、棺蓋と底板が残存していた。棺内の東側側隅に遊離歯が出土している。被葬者は、性別、年齢ともに不明である。(遺構名 3SK66)

## 5) その他の遺構

### SX06 (第38図)

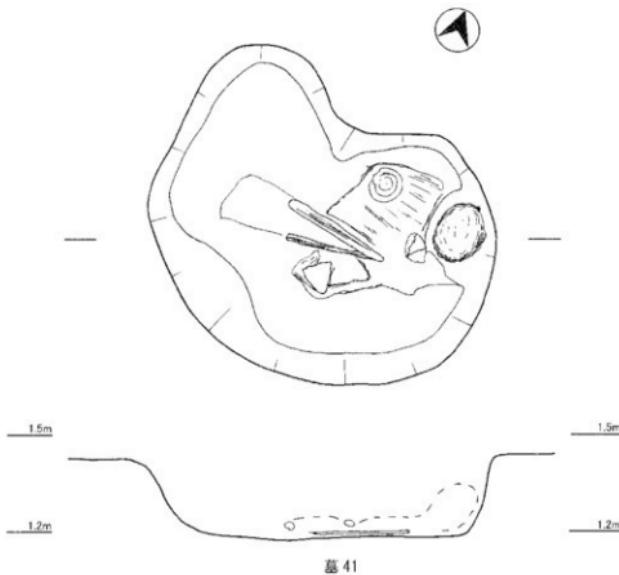
7区北西側に位置している。後述するSK50と類似する遺構と考えている。検出段階での掘り方は確認できていない。同形状の扁平な丸石を敷き詰めている。その一部に高津川水系の砂質岩を含む。その右は比熱しておらず、炭なども認められていない。

### SK51 (第38図)

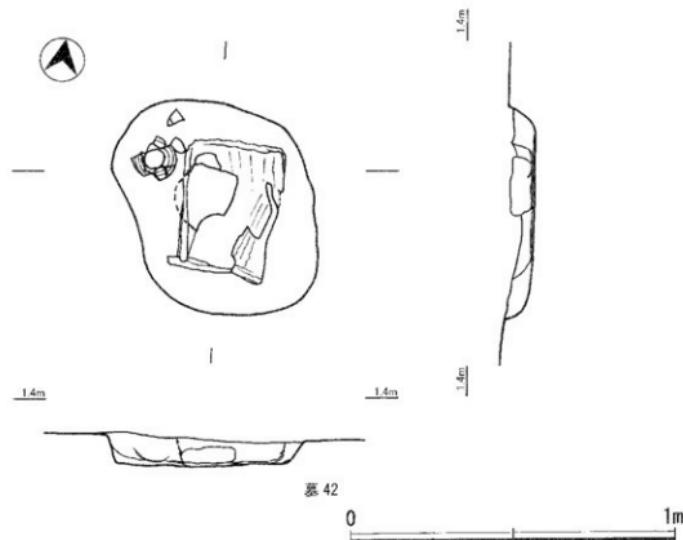
7区北側中央部に位置している。土坑の掘方は、約1.2m×1.0mで、底には角ばった石を敷き詰めている。検出面から石の上面までの深さは、20cmである。なお、SK49との切り合いは判断できなかった。竈跡と考えられる。SK49は、その焚き口などの可能性がある。

### SK66 (第38図)

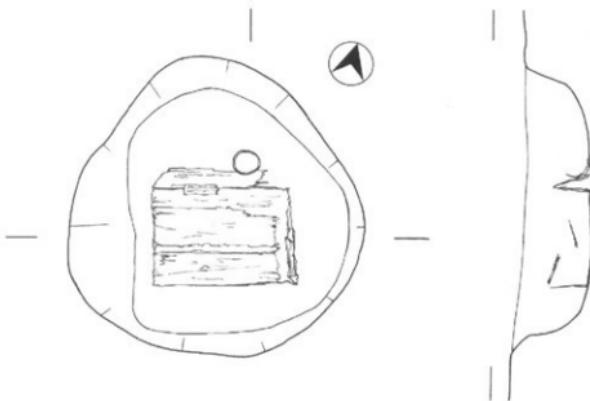
7区西側中央部に位置している。円形を呈し、黒灰粘質土が充填している。折れた細長い木片が多数と瓦質土器が出土した。便所遺構の可能性を考え、寄生虫分析を試みたが、便所遺構ではないという結果であった。性格は不明である。



墓 41



第 26 図 墓 41・42 実測図

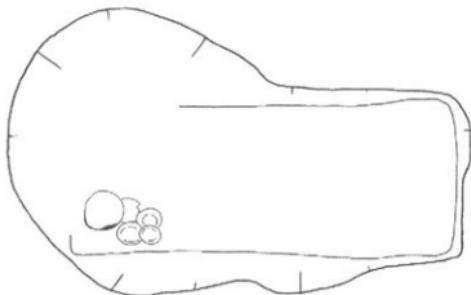


墓 44



0

1m



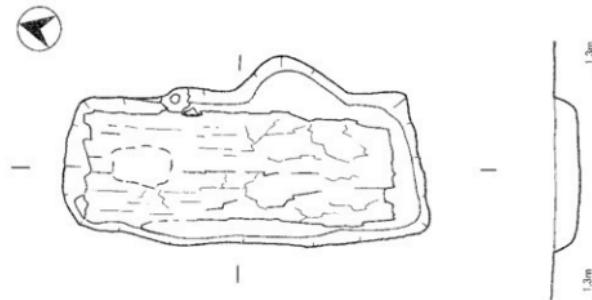
1.3m

1.3m



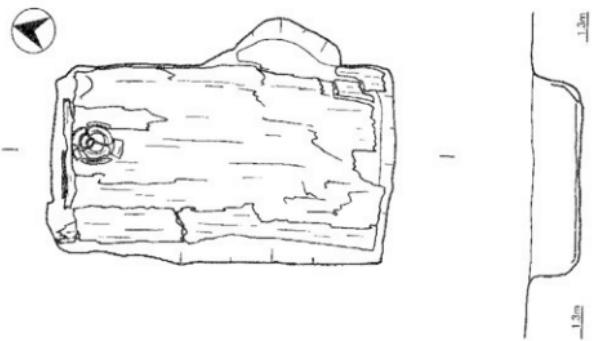
墓 45

第27図 墓44・45実測図



墓 46

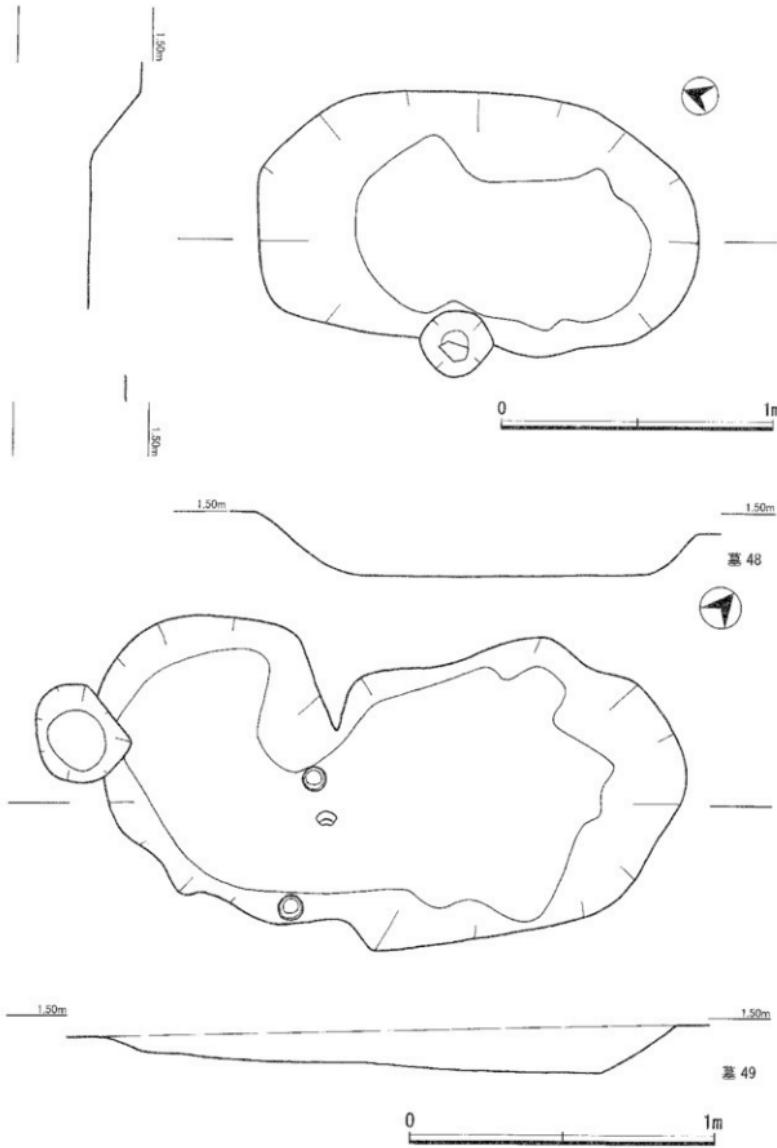
0 1m



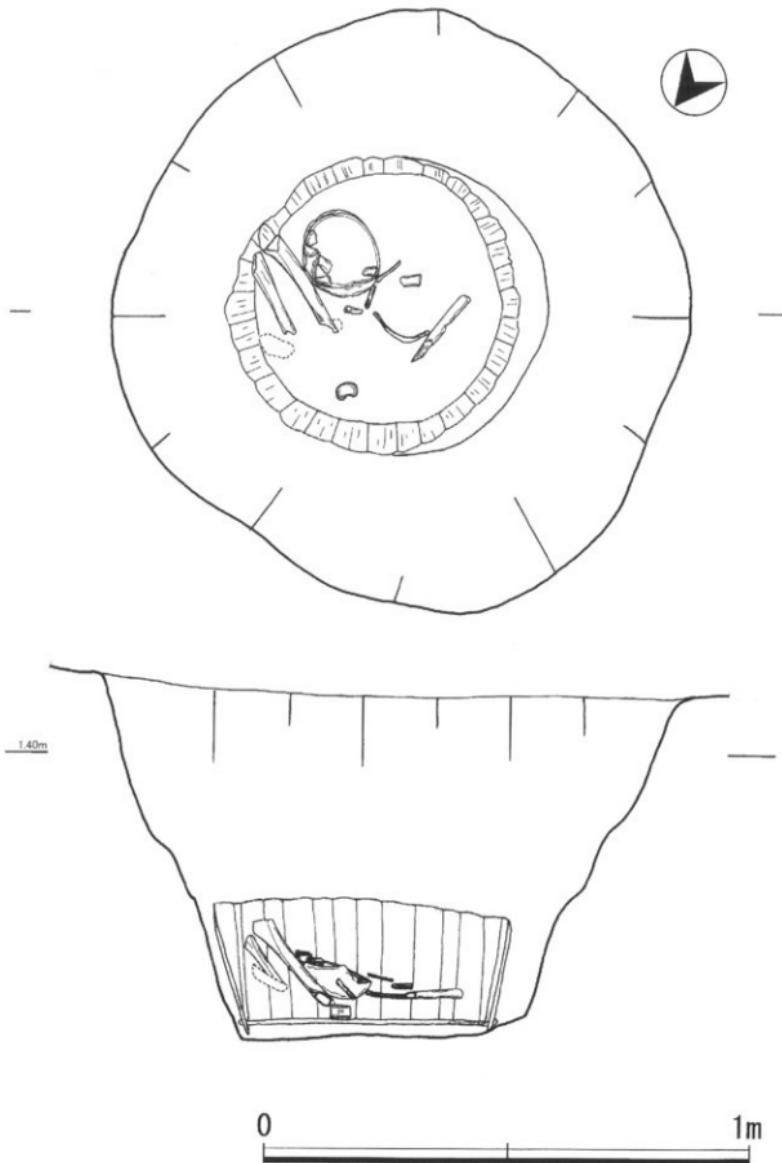
墓 47

0 1m

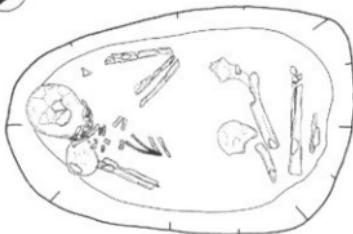
第 28 図 墓 46・47 実測図



第29図 墓48・49実測図



第30図 墓50実測図

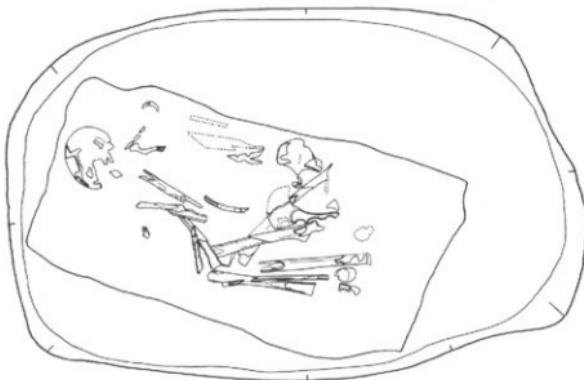


1.30m

1.30m

1.30m

墓 51



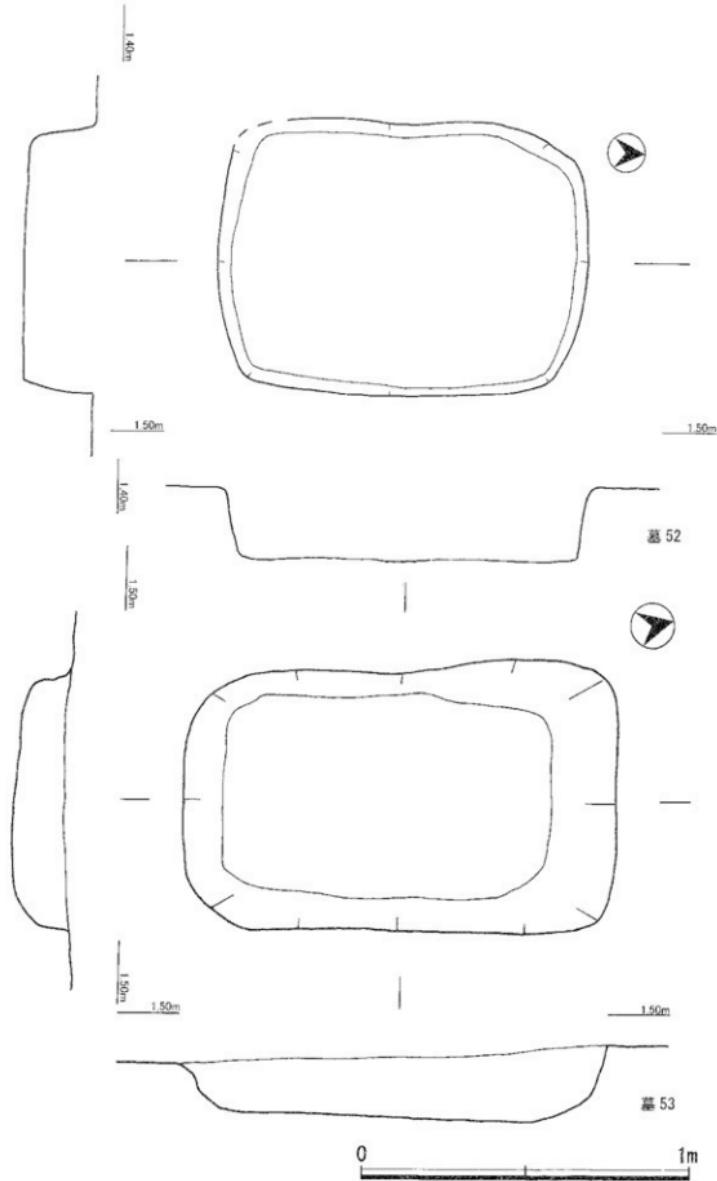
1.50m

1.50m

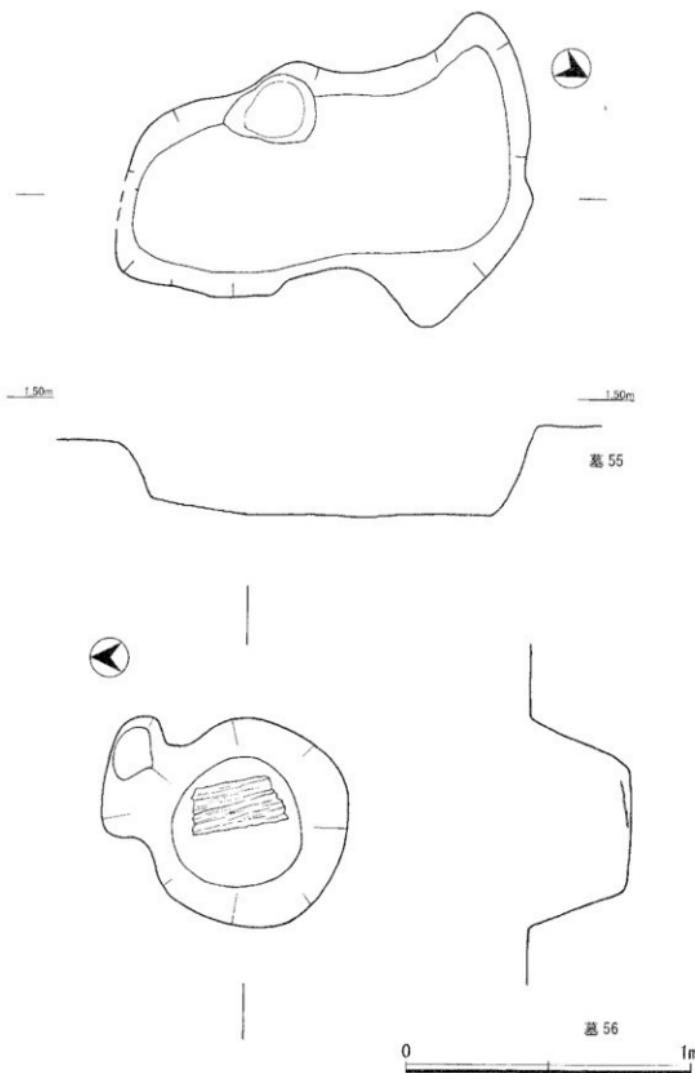


墓 54

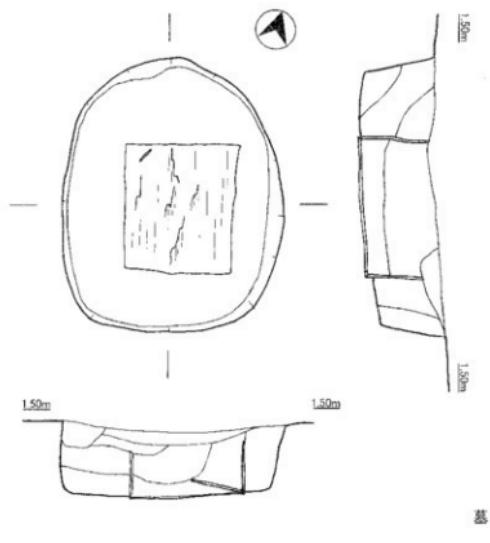
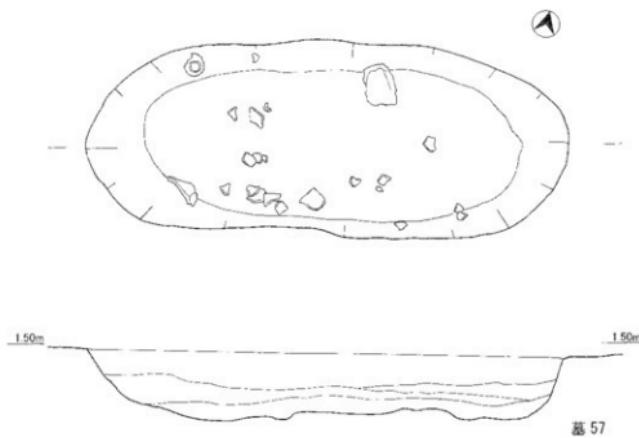
第31図 墓51・54実測図



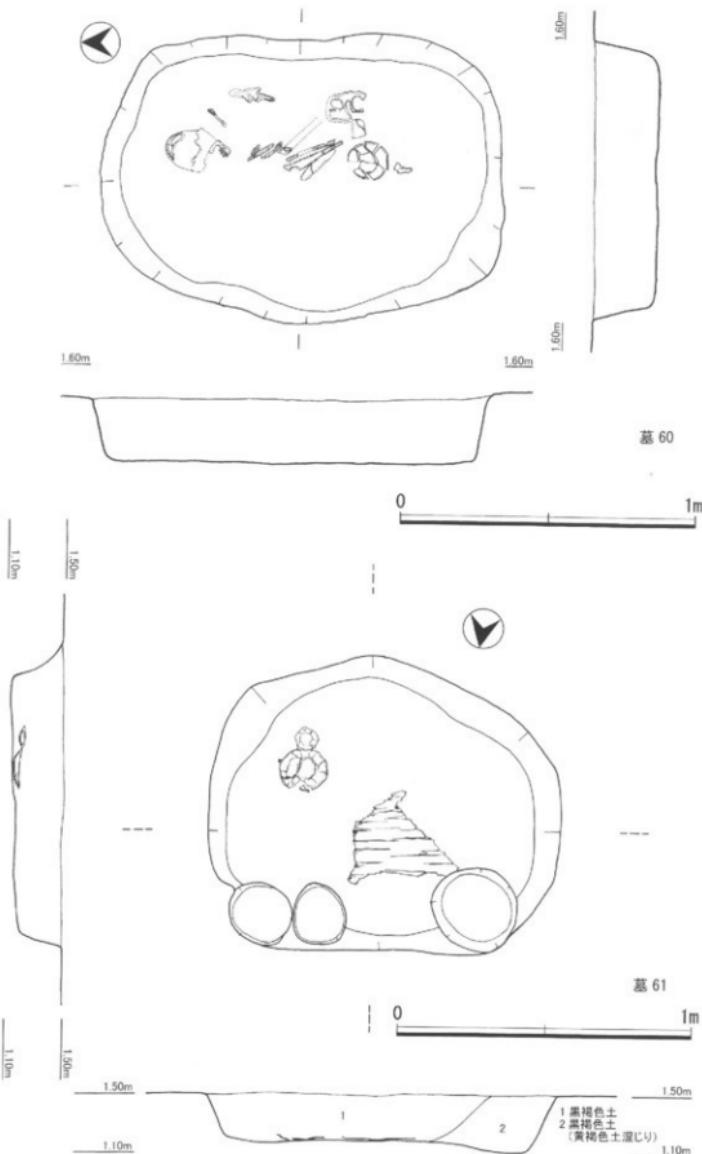
第32図 墓52・53実測図



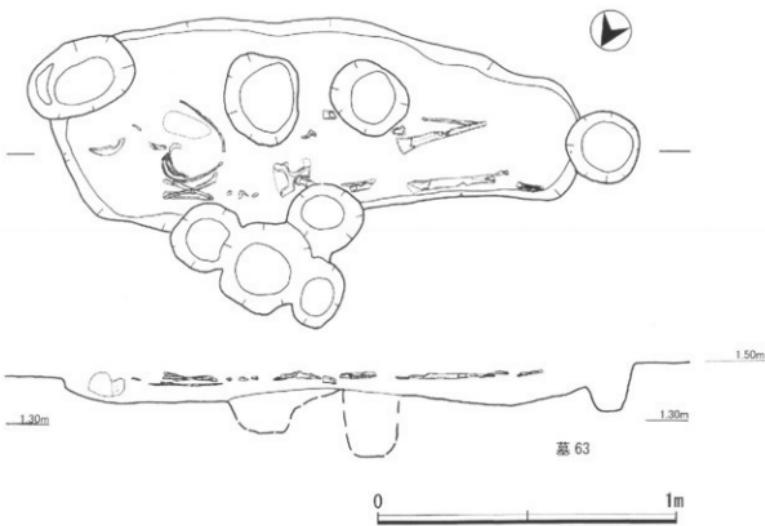
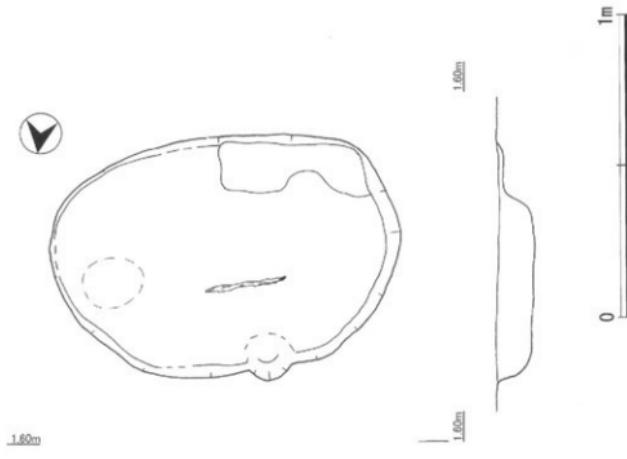
第33図 墓55・56実測図



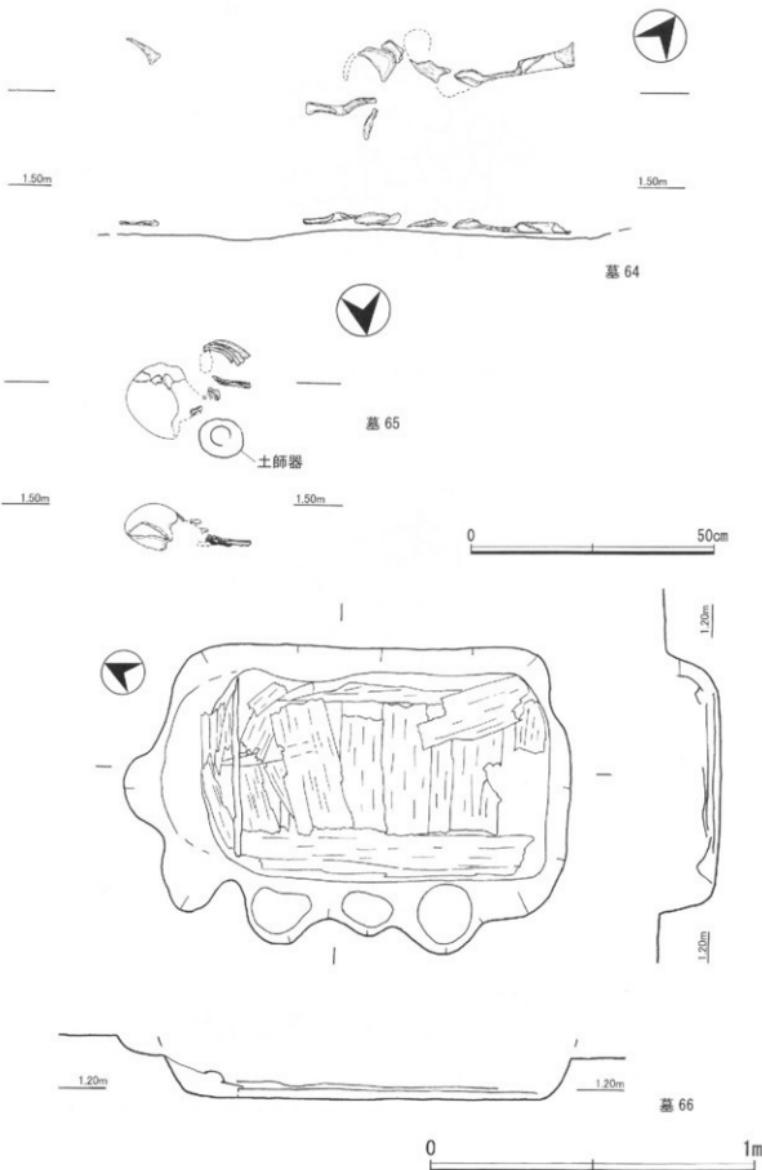
第34図 墓57・59実測図



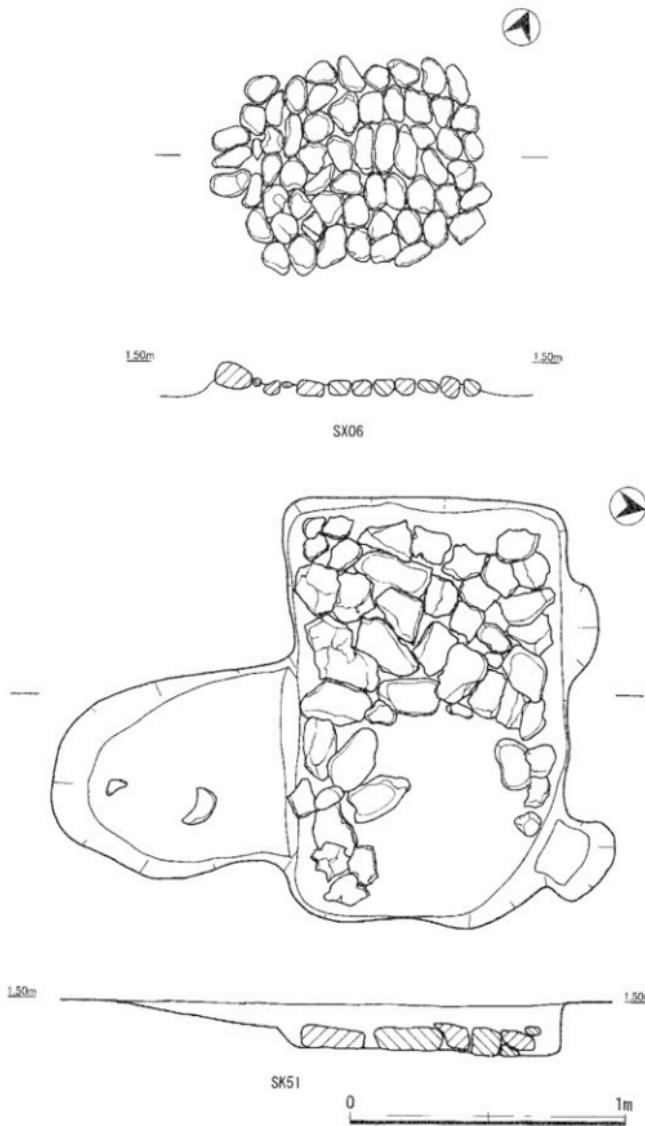
第35図 墓60・61実測図



第36図 墓62・63実測図



第37図 墓64～66実測図



第38図 石敷き遺構実測図

## 5) 遺構に伴う遺物

以下に、ピットや土坑に直接伴うと考えられる遺物やその可能性がある遺物について出土している。ここでは主なものについて概要を記すこととした

### 須恵器・土師器・瓦質土器・陶器（第42図）

1～3は須恵器である。1は壺の高台部、2は鉗状つまみをもつ蓋である。3は東播系須恵器の口縁部で、玉縁で重ね焼きの痕跡が残る。

4は陶器壺の鉢の底部である。5は土師器の皿。6は土師器の脚をもつ皿である。7～8は瓦質土器である。7は羽釜、8は擂鉢の口縁部であり、内側に貼り付けている。

### 貿易陶磁器（第43図）

1～5は白磁碗である。2はV類、2はIX類である。4はIV類の高台部である。6～7は皿である。8～14は龍泉窯系青磁碗である。8は内面に劃花文を施されている。9～11は体部に鑄連弁文を施す。12は無紋のD類でやや外反する。13は雷文帯を施す。14は稜花碗である。15は同安窯系皿I類で内面に櫛描が見られる。16は青白磁合子の蓋である。17は朝鮮王朝陶磁で、碗の高台部分である。

### その他（第44図）

1～4は銭貨である。いずれも宋錢である。

## (3) 遺構に伴わない遺物

主に包含層中より出土した遺物について報告することとする。

### 須恵器（第45図1・2）

1は高壺の脚部である。2は長頸壺の頸部で、2条の沈線を施す。

### 土師器（第45図3・4）

3は土師器の壺で直線的に開く。4は壺の底部で、底部は絞り込まれ、回転糸切痕を残す。

### 陶器（第45図5）

5は、常滑系の壺の口縁部である。

### 瓦質土器（第46図1～6）

1は羽釜で、外面の鋸下にススが付着している。2,3は鉢である。2は防長型瓦質土器の擂鉢で、内側を粘土の貼り付けによって口縁部に広い平坦面が作られている。3は底部外面にヘラ起こし痕が残る。4～6は鍋である。口縁端部が上につまみだされたタイプで、6は口縁部上端で厚みが増すタイプである。

### 白磁（第47図1～10）

1～3は、白磁の碗である。1,2はゆるやかに外反する。3は内面に櫛書きを施す。白磁碗V類。4は徳化窯である。3ヶ所に脚が付く。方押しの形をとる。5は碗のI類で見込みの釉を輪状に搔き取る。6～9は皿。6は見込みにスタンプ紋を施す。7は見込みの釉を輪状に搔き取る。

8,9はE類の小碗で16世紀のものである。10は水注の取手である。

### 青磁（第47図11～19）

11は龍泉窯系青磁碗I類である。内面に劃花文を施す。12はで、端反りの口縁である。

13は鑄蓮弁文、14は細書き蓮弁を有する。15はI類、16は見込みに「天」が読める。D類

である。17は小壺で、体部に花卉文を施す。18は同安窯系の皿で内面にジグザグ文を施す。19は貼り付けの魚文を施す碗の高台部である。

#### 青花（第48図1～4）

1は碗でE群、2は口縁部に雷文帯を施す。3の外面は唐草文、4は葵筋底の皿である。

#### 中国陶器（第48図5～14）

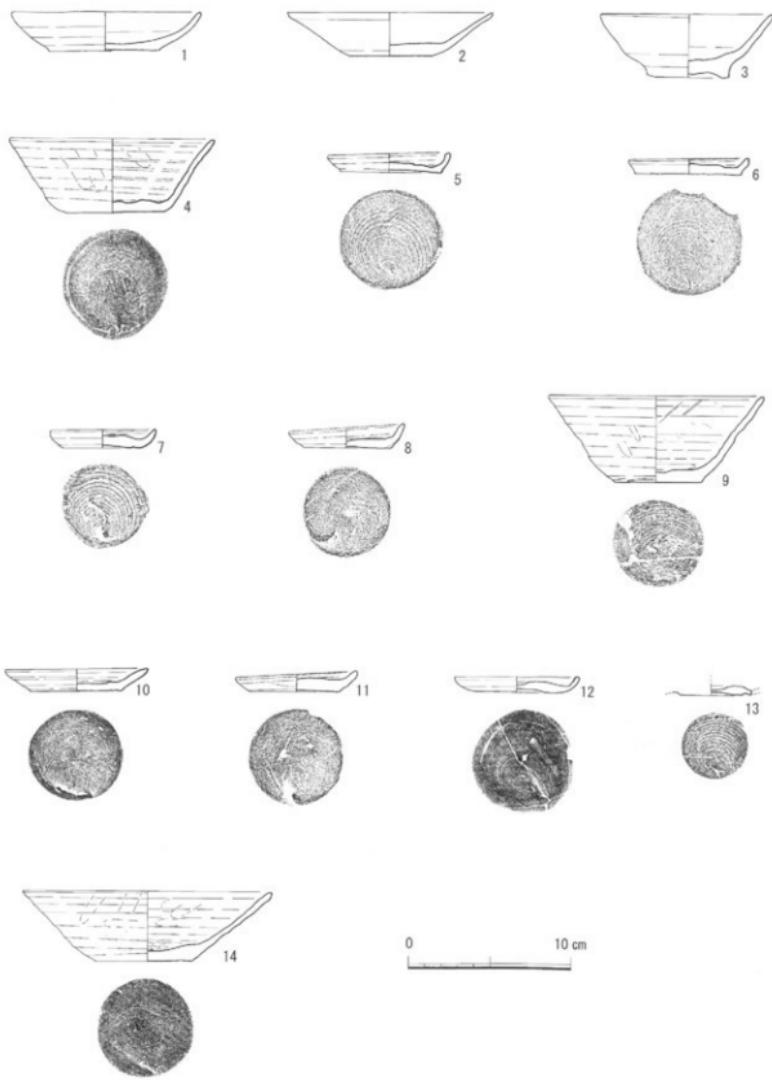
5は鉢の口縁部である。6、7、8、9も鉢である。10、11は壺の底部である。12は華南の壺、13は天目茶碗の口縁部、14は華南の水注（水鳥）の胴部である。

#### 朝鮮陶磁（第49図1～3）

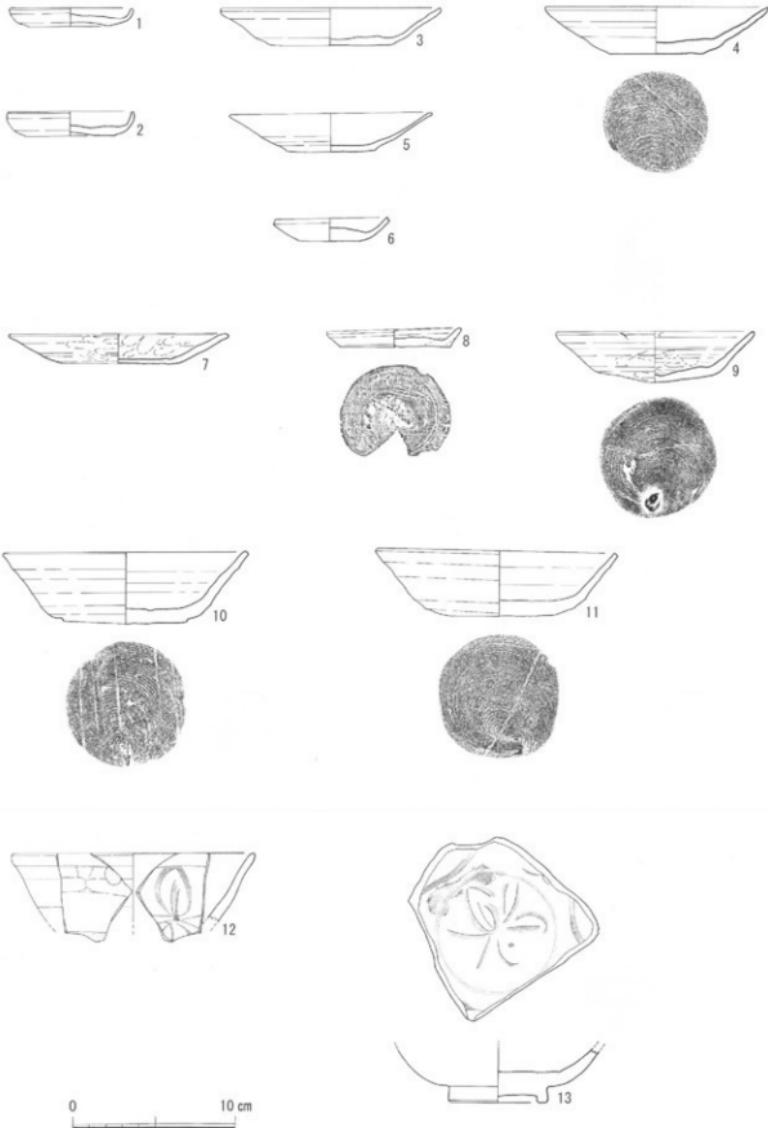
1～3は碗である。いわゆる灰釉陶である。内外面に施釉され、見込みや高台の疊付に目跡が残る。

#### その他（第49図4～8）

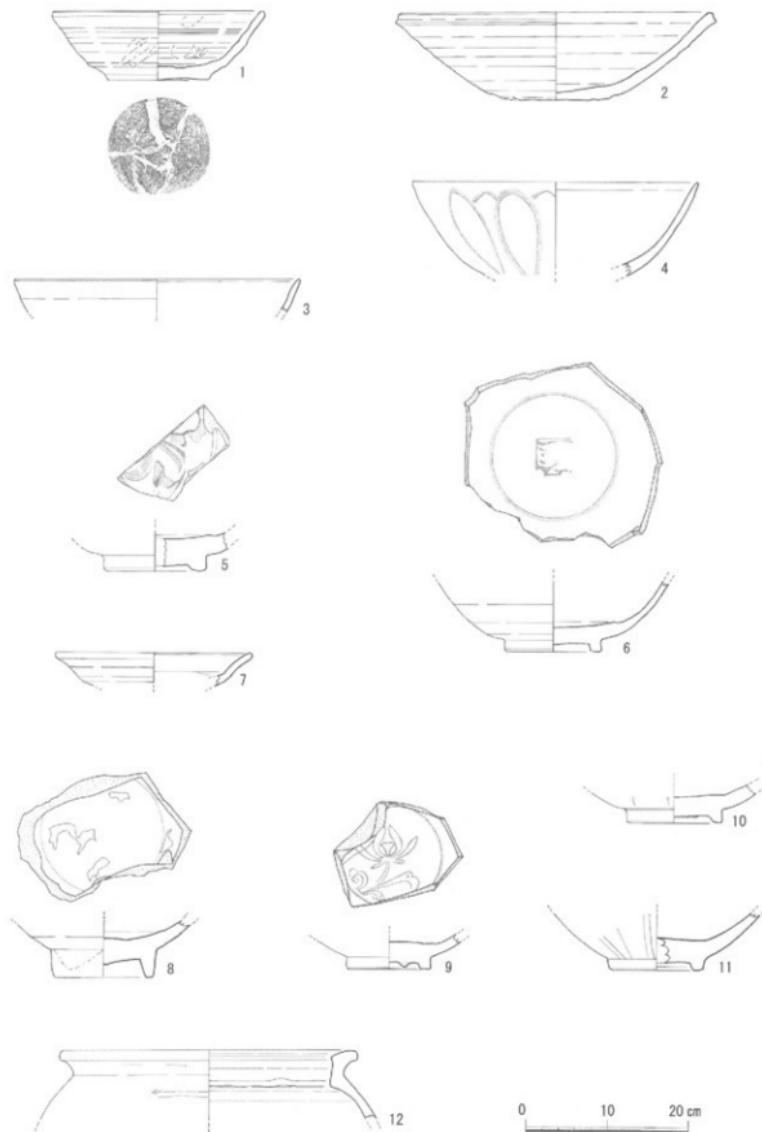
4は赤間硯である。溝が一周刻まれている。何かに転用するため、切り離すため前段階の溝と考えられる。石工の存在を想像させる。5は小柄か、6は銭貨の至道元寶（初鑄年995年）。7は崩形分銅である。「匂」の字が刻まれている。8は勾正である。材質は赤瑪瑙である。



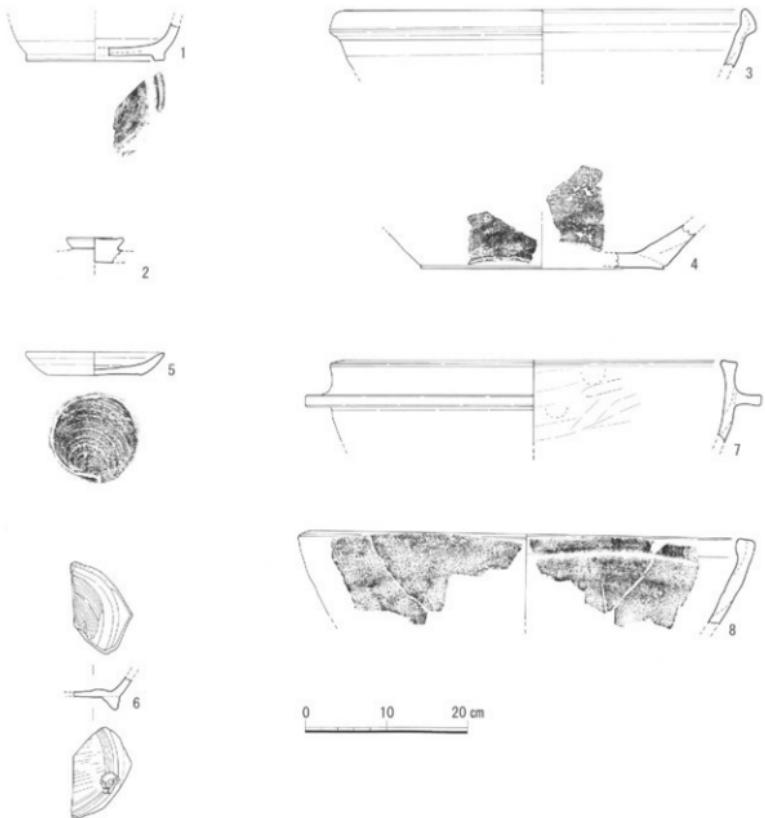
第39図 墓41・42・44・45・47・49・51出土遺物実測図



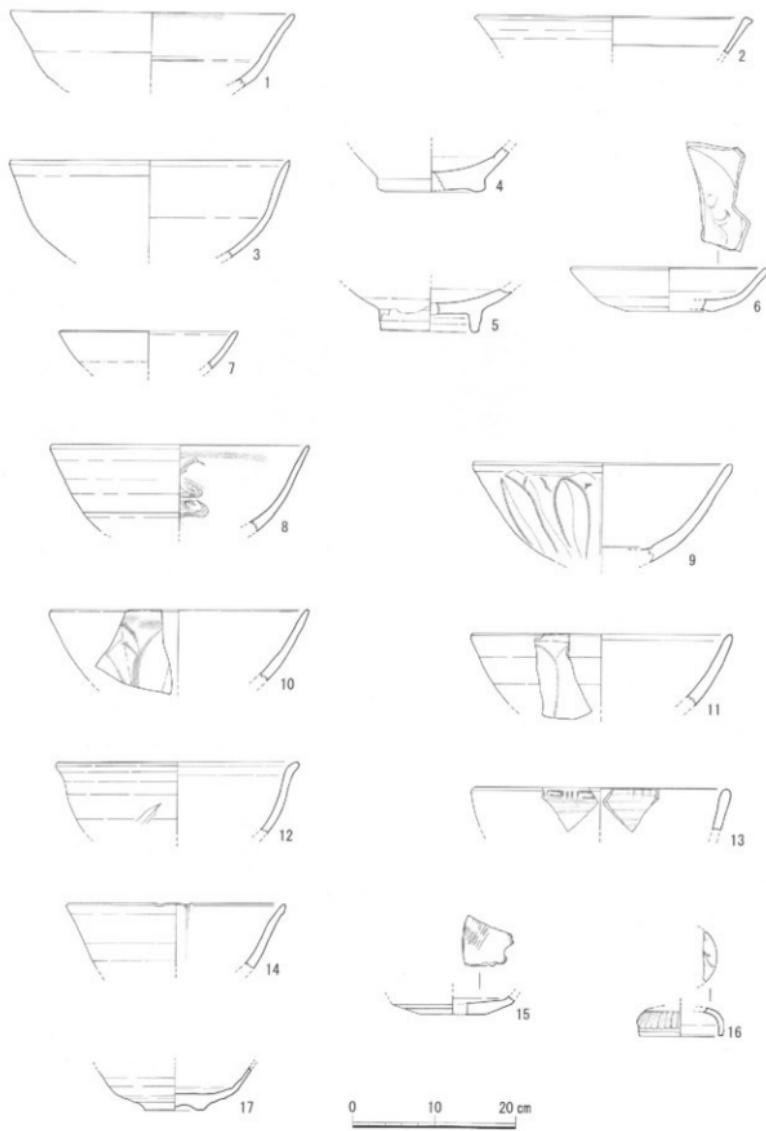
第40図 墓55・60・61・64・65・井戸7出土遺物実測図



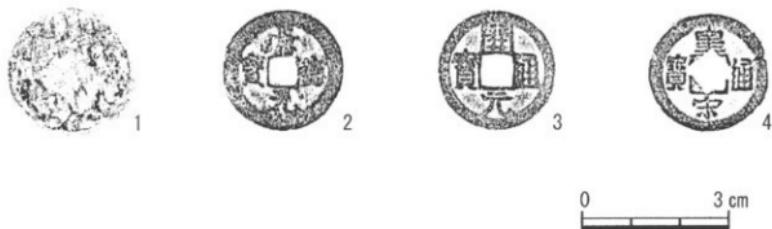
第41図 墓57・井戸10出土遺物実測図



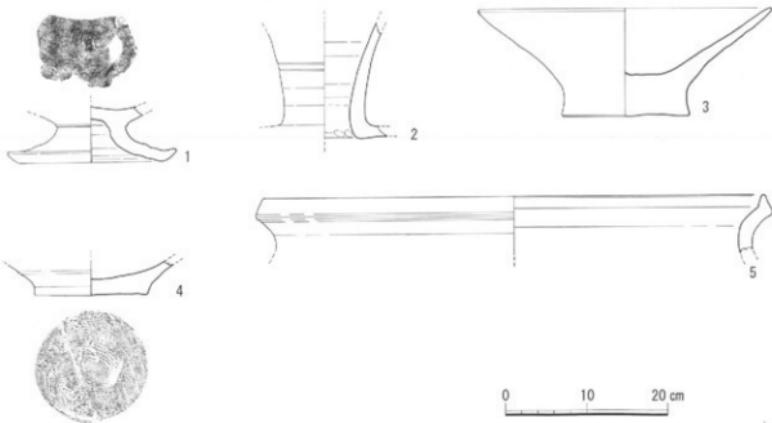
第42図 遺構出土遺物（須恵器・土師器・瓦質土器・陶器）実測図



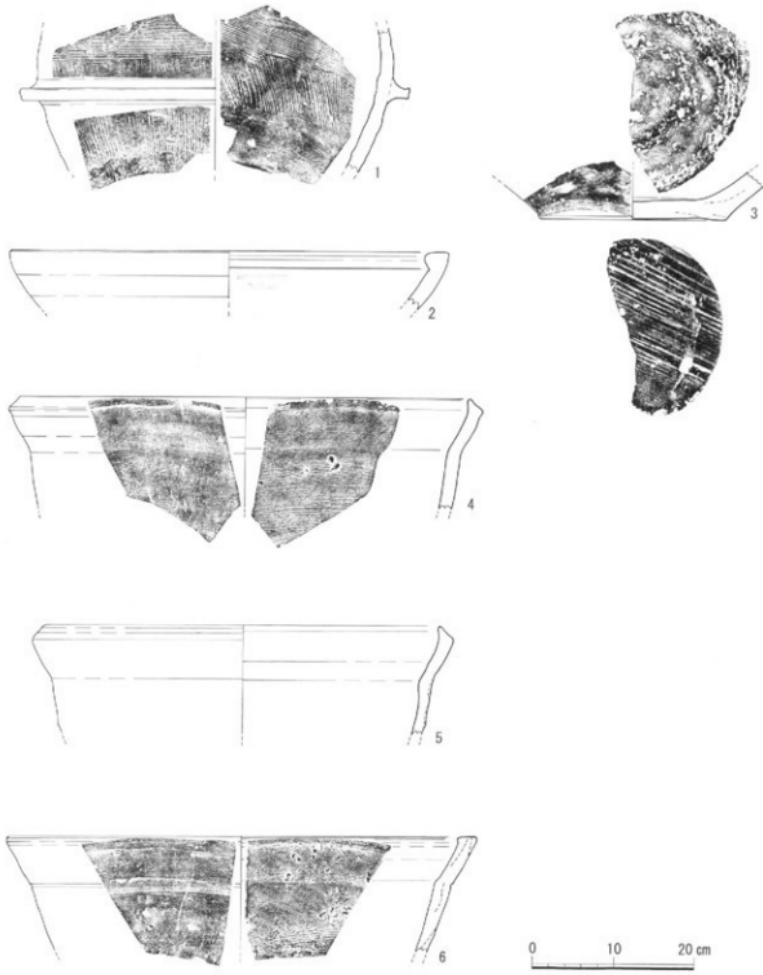
第43図 遺構出土遺物（貿易陶磁器）実測図



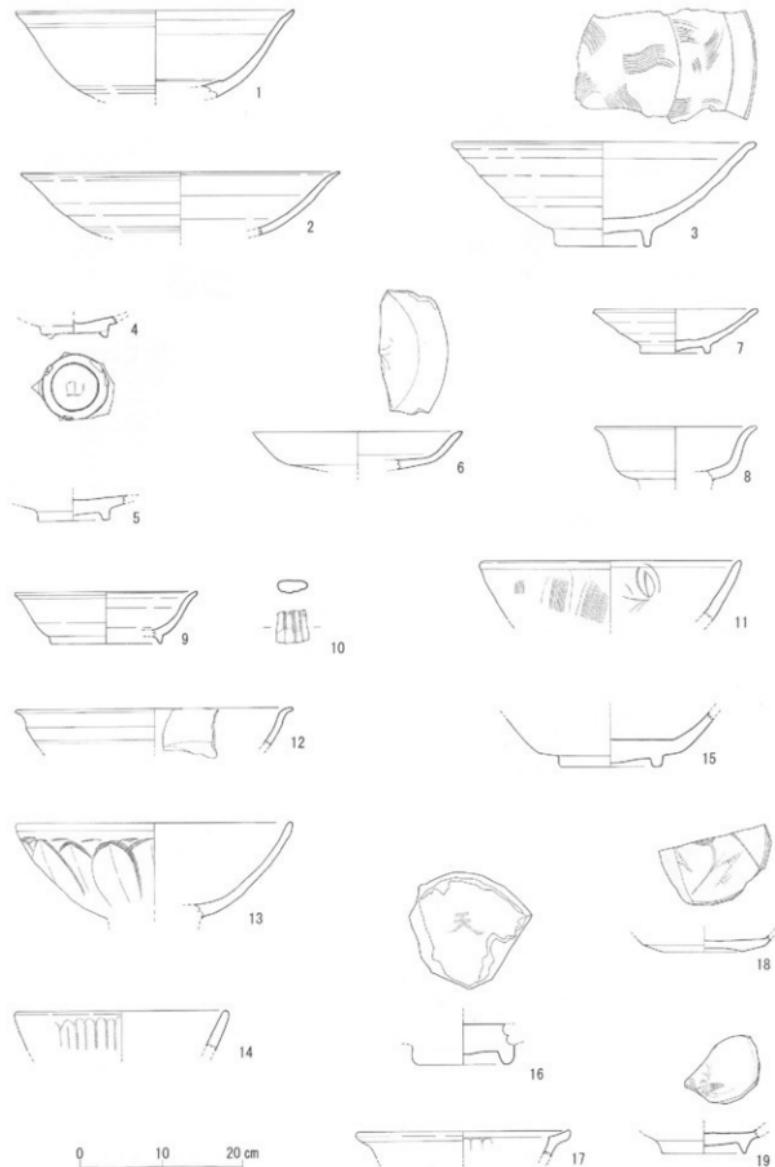
第44図 遺構出土遺物（その他）実測図



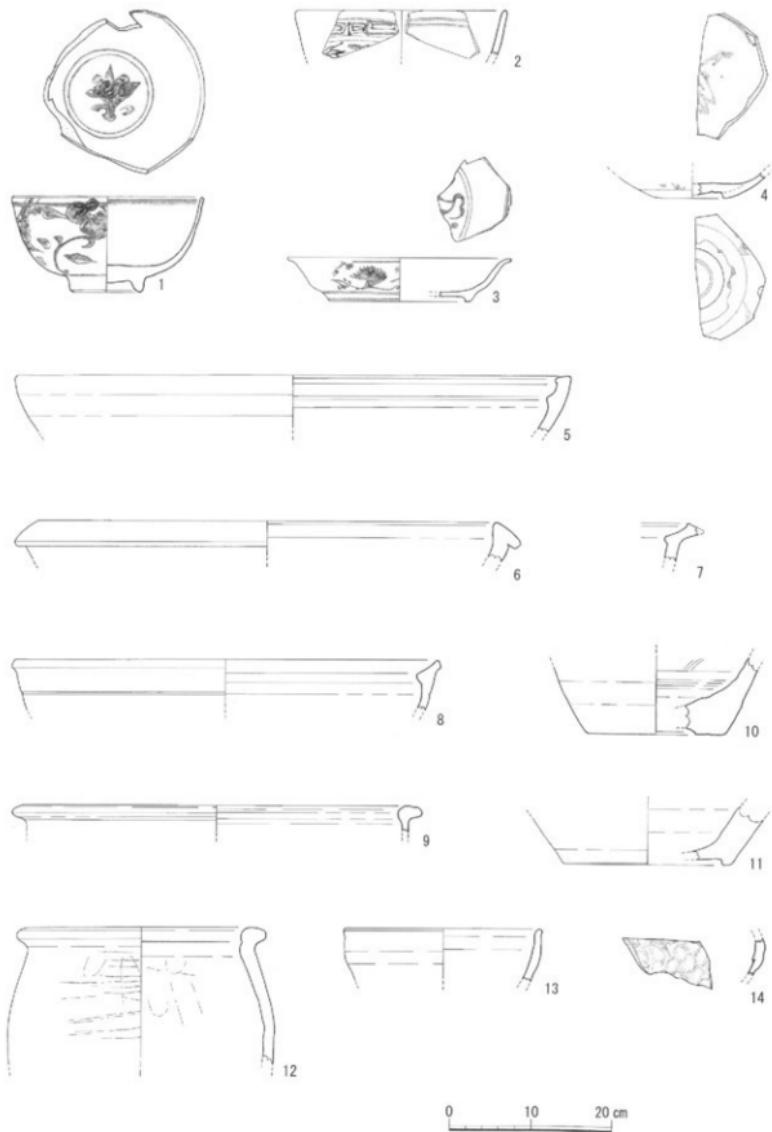
第45図 包含層出土遺物（須恵器・土師器・陶器）実測図



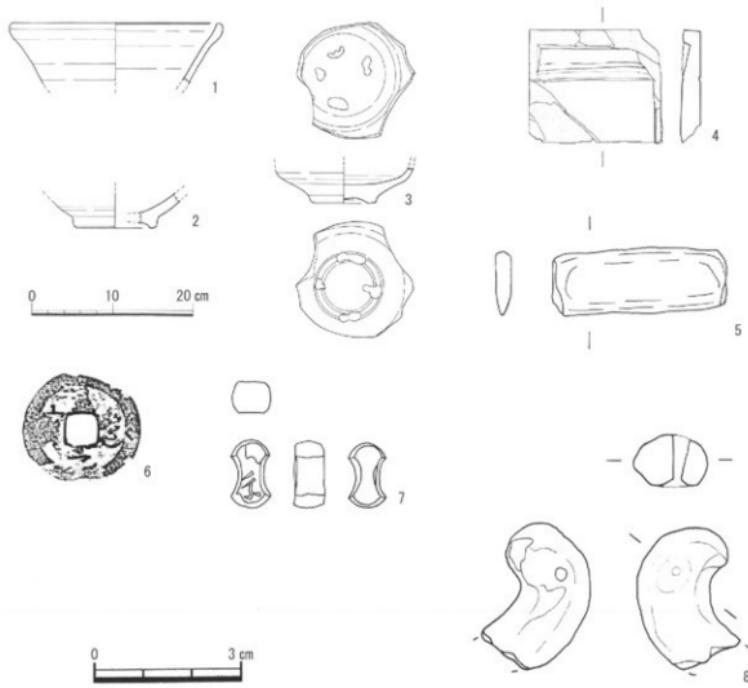
第46図 包含層出土遺物（瓦質土器）実測図



第47図 包含層出土遺物（貿易陶磁器①）実測図



第48図 包含層出土遺物（貿易陶磁器②）実測図



第49図 包含層出土遺物（朝鮮王朝陶磁器・その他）実測図

## 2. 8区の調査

### (1) 調査の概要

平成18年度は県道久城インター線部分の3次調査として8区の発掘調査を実施した。調査対象地は益田市久城町60番地2、61番地2、61番地3で、調査面積は1,840m<sup>2</sup>であった。現地調査は平成18年4月10日に着手し、平成18年7月3日には終了した。

発掘調査は、表土を重機で掘削した後（17年度実施）、遺物包含層の掘削、遺構出、遺構の精査を行い、平面図、断面図、写真等で調査状況を随時記録した。調査区全体の平面図はトータルステーションを用いて、遺構ごとの詳細図は手測りで実測して作成した。さらに遺構面より下層の土層堆積状況を確認するための部分的な掘削を3箇所で行い、発掘作業終了時に調査区全体の空中写真撮影業務を株式会社ワールド益田営業所（所長渡部徳一）に委託して実施した。

遺跡の取り扱いについては、益田市教育委員会としては記録保存が図られた後の工事実施はやむを得ないとの考え方に基づき、7月28日付けで島根県教育委員会に対して協議を行い、8月4日付けの県からの回答を受け、8月7日付けで益田市教育委員会から島根県益田県上整備事務所長に対してこの旨を通知した。

調査成果の公開として、7月9日と7月23日に現地説明会を開催し、さらに7月23日に益田市人権センターで開催された島根県埋蔵文化財調査センター講演会「沖手遺跡と石見の中世」で報告した。また、11月3日～30日に益田市歴史民俗資料館で開催された「秋季特別展／益田市内で発掘された遺跡の速報展」において出土遺物の一部を展示した。

事業実施期間中に、益田道路部分の発掘調査を担当する島根県埋蔵文化財調査センターと共に含め、下記のとおり島根県教育委員会及び研究者による現地指導を受け、調査方法や遺構の評価、資料整理等について助言を得た。

5月18日	西尾克己（島根県教育委員会）、五味文彦（放送大学教授）、益田兼房（立命館大学教授）、小野正敏（国立歴史民俗博物館）、村上 勇（広島県立美術館）
6月23・24日	東森 言（島根県教育委員会）、大山喬平（京都大学名誉教授）、井上寛司（大阪工業大学教授）、林 正久（島根大学教授）、村上 勇、中村唯史（県立三瓶自然館サヒメル）
7月 5・ 6日	卜部吉博（島根県埋蔵文化財調査センター）、小野正敏、村上 勇、大庭康時（福岡市教育委員会）
9月 25日	市村高男（高知大学教授）
11月 11日	山下信一郎（文化庁記念物課）、西尾克己、五味文彦、小野正敏、村上 勇
12月 19日	中村唯史
1月 15日～18日	穴澤義功（製鐵遺跡研究会代表）

さらに、17・18年度調査で出土した土器・陶器類450点の実測図作成をいなか舎（代表田中義昭）に、木片・貝殻試料の年代測定及びピットから出土した種実同定を文化財調査コンサルタント株式会社（代表渡邊正巳）に業務委託して実施した。



第50図 8区構造図 (S=1/200)

## (2) 遺構とその伴出遺物

遺構として掘立柱建物跡、柱列、墓、溝状遺構などを検出した。大半の遺構は中世と考えられたが、溝 34 の東端には近世の集石が重なっていた。遺構面の標高は 1.3 ~ 1.4m である。

柱穴状のピットは、柱根が残るものや根石を持つものを含め約 600 検出され、16 棟の掘立柱建物跡と柱列 8 を復元した。建物跡は、建物 28 を除いて益田道路の 4 区から 8 区の溝 28 の間に集中しており、その向きはほぼ一定している。

柱列に関しても建物の方向に合う柱列 27・28・29 と、それと直交する向きの柱列 31・32・33・34 があった。なお、建物 97 の西、柱列 29 との間には遺構がほとんど存在しない空間がある。

さらに、調査区のほぼ中央を東西に走る 7 本の溝状遺構を検出した。南側の建物群の向きに合わせて東西方向に走るこれら溝状遺構のうち、方向や間隔から溝 28 ないし溝 29 と溝 30 または溝 31 との対応が想定される。

いずれも深さ 15 ~ 20cm 程度の皿状の浅い溝であり、このような溝については道路遺構の類型のひとつと考えられている。溝 28・29・30 は西側で消失しているが、これらの溝を道路遺構とみなすとその幅は 5.0 ~ 6.0m 前後となる。

### 1) 掘立柱建物跡

#### 建物跡 93 (第 51 図)

1 間 (1.44m) × 2 間 (3.70m) の小規模な建物跡である。建物 94、柱列 27 と重複し、主軸方向は N - 70° - E である。

建物を構成するピットからは土師質の鍋 (第 64 図 1) が出土している。

#### 建物跡 94 (第 52 図)

益田道路 4 区 (以下 4 区) の報告では 3 間 (8.60m) × 6 間 (9.42m) の身舎の東西 2 面に廂がつく大型の建物とされているが、柱間の間隔や柱穴列の通りから、本報告では建物 94、95、96 の 3 棟として考えた。

建物 94 は 3 間 (7.12 ~ 7.44m) × 5 間 (7.52 ~ 7.92m) の総柱建物跡で、主軸方向は N - 18° - W である。建物 93・95・98 と重複する。建物面積は約 59m<sup>2</sup> である。

ピットからの遺物 (第 64 図) として、体部が深く中世前期に遡る土師器壺 2・3 と、浅い皿の 4 ~ 6 がある。7 は白磁皿、8 は龍泉窯系青磁碗の底部、9 は土師質の羽釜である。10 ~ 12 は、長さに対して直径の太い大型の土鍤である。

#### 建物跡 95 (第 53 図)

2 間 (5.44 ~ 5.60m) × 5 間 (7.84m) の総柱建物跡で、建物 94 と重複する。主軸方向は N - 20° - W で、建物面積は約 42.6m<sup>2</sup> である。

ピット内の遺物 (第 64 図) として、体部の深い土師器壺 13、土師器皿 14、12 世紀末 ~ 13 世紀初頭と考えられる東播系鉢 15、大型の土鍤 16・17 などが出土している。

#### 建物跡 96 (第 54 図)

1 間 (2.48m) × 5 間 (7.85m) の建物跡である。主軸方向は N - 18° - W で、建物面積は約 19.5m<sup>2</sup> である。

建物を構成するピットからの遺物 (第 65 図) として、1 は土師器壺、2 は瓦質の鍋、3 は口

縁の釉を削り取る白磁碗口類が出土した。

#### 建物跡 97 (第 55 図)

2 間 (6.40 ~ 6.72m) × 5 間 (7.6 ~ 8.0m) の総柱建物跡と考えられるが、柱穴のひとつが確認できなかった。建物の主軸は N - 17° - W で、建物面積は約 19.5m<sup>2</sup>である。

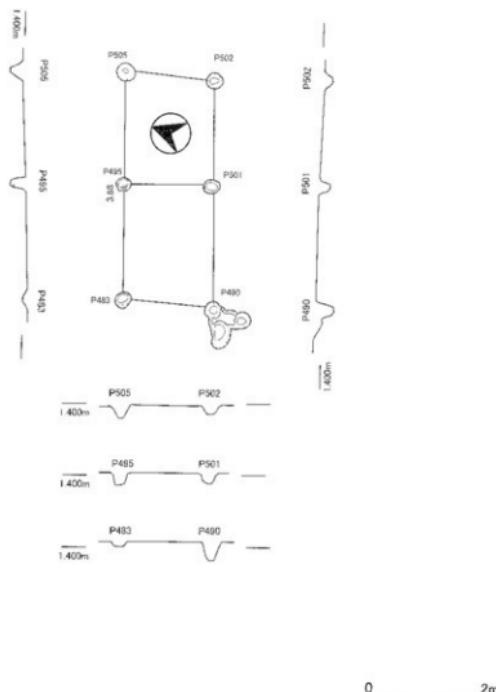
ピットからの遺物（第 65 図）として土師器小皿 4 があった。

#### 建物跡 98 (第 56 図)

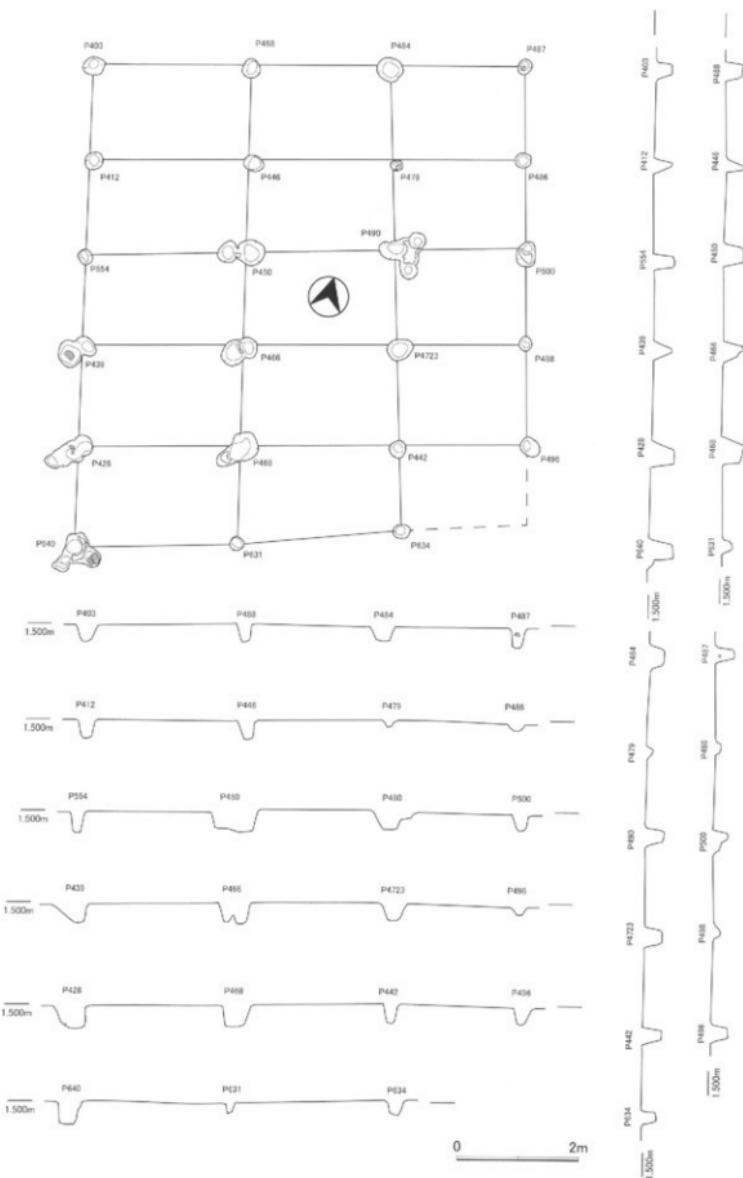
益田道路 4 区（以下 4 区）の建物 62 を構成する柱列である。建物は 3 間 (7.08m) × 3 間 (5.68m) で、中央の柱間のみが広いため、1 間 × 3 間の身舎に南北側に廊がつく建物と考えられている。建物の主軸方向は N - 15° - W で、県報告では柱穴から出土した土師器壺から建物の時期を 12 世紀頃と推測している。

#### 建物跡 99 (第 56 図)

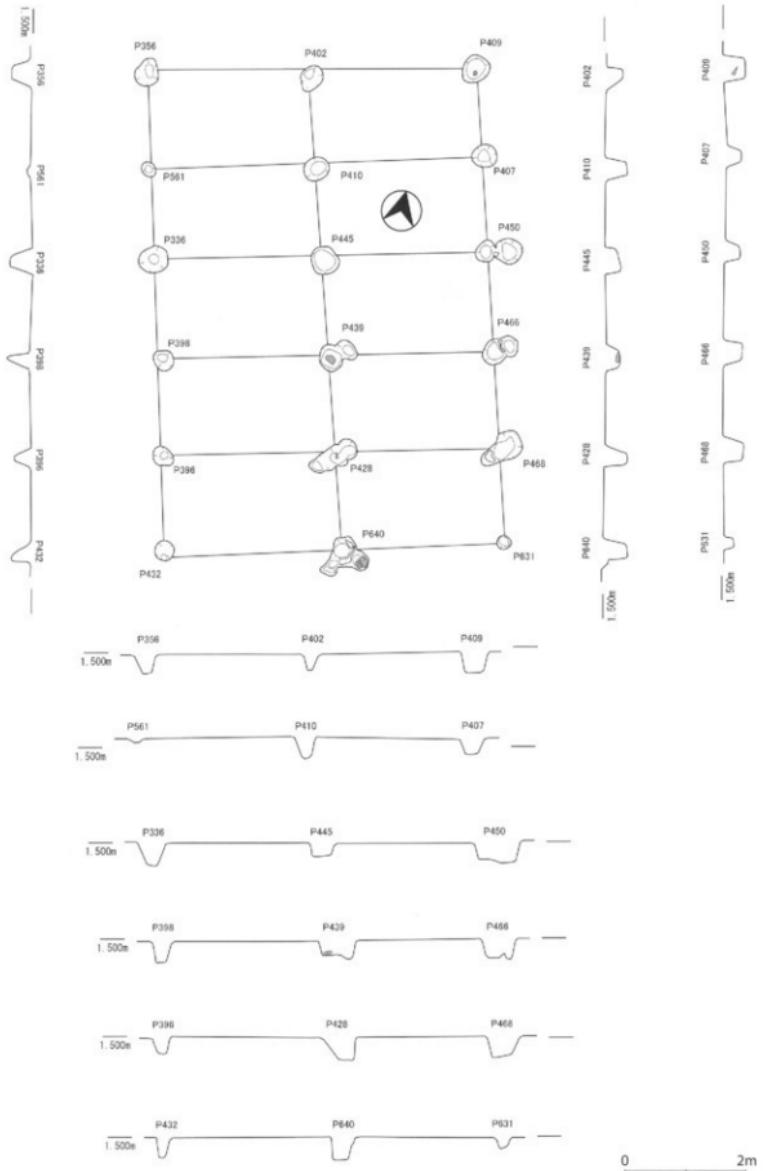
4 区の建物 58 を構成する柱列である。3 間 (7.20m) × 4 間 (6.98m) で、主軸方向は N - 11° - W である。各面の外側の柱間が狭いことから、1 間 × 2 間の身舎の四方に廊がつく構造と推定されている。



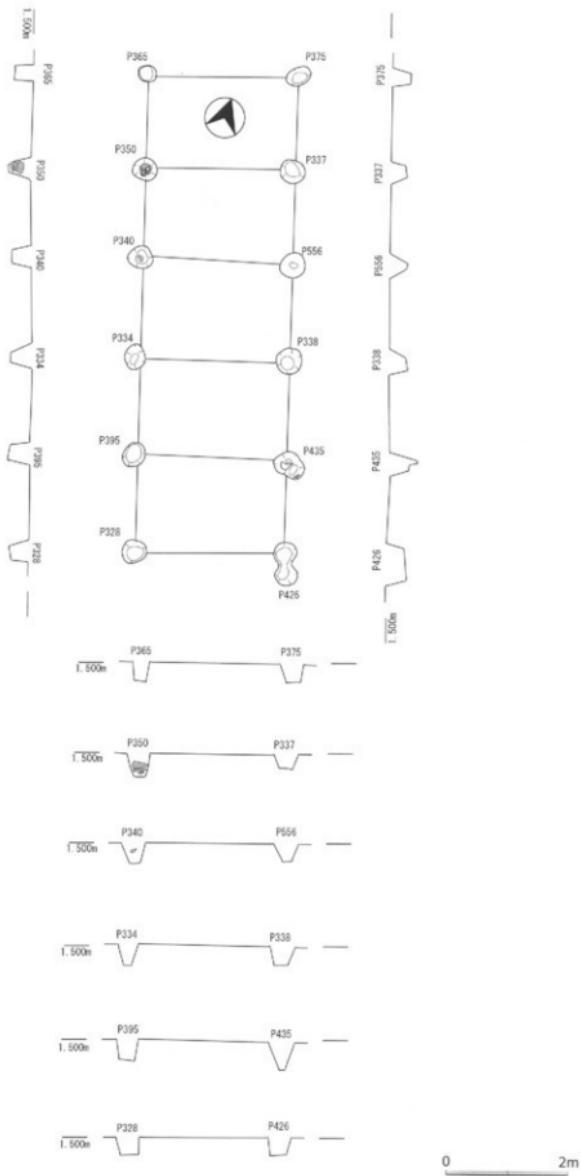
第 51 図 建物跡 93 実測図



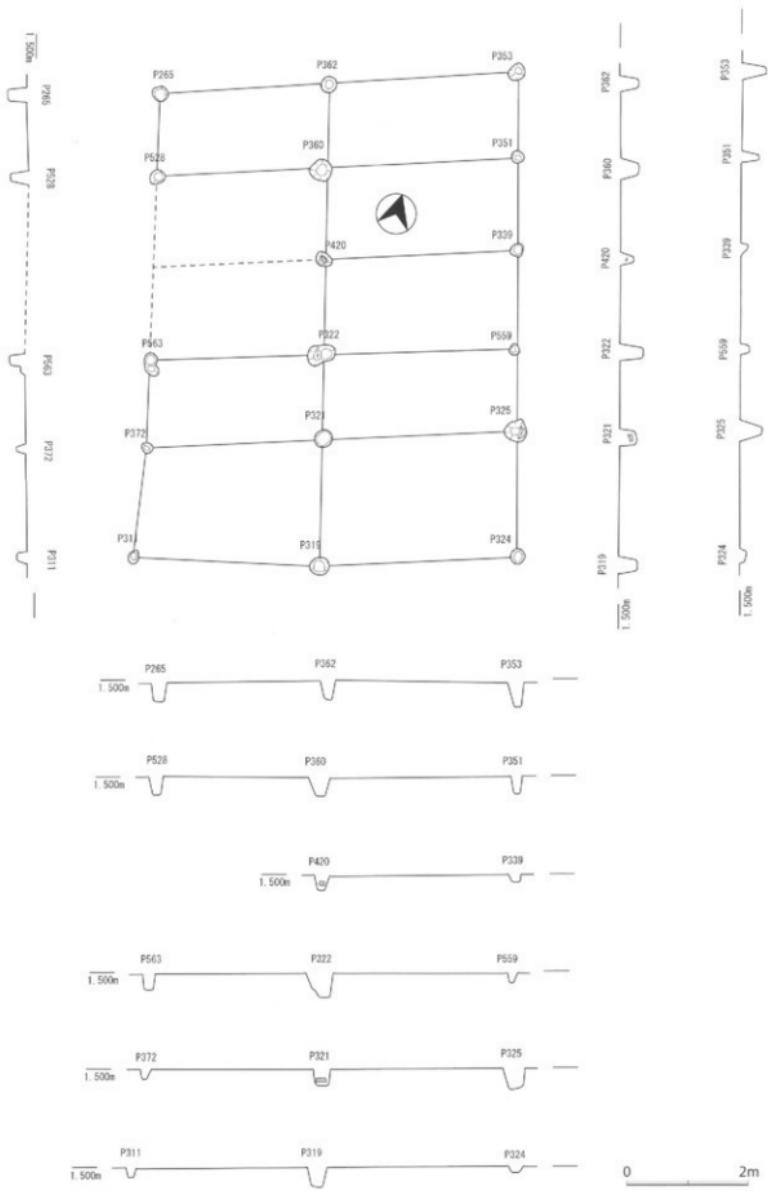
第52図 建物跡94実測図



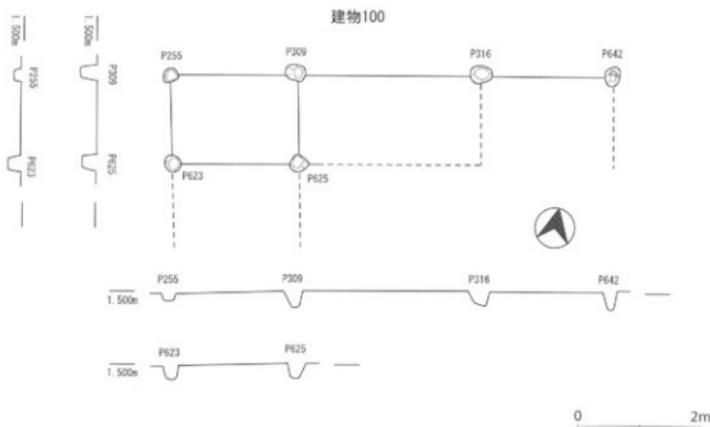
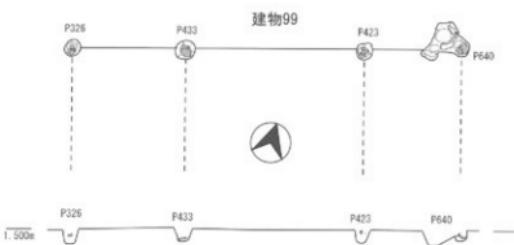
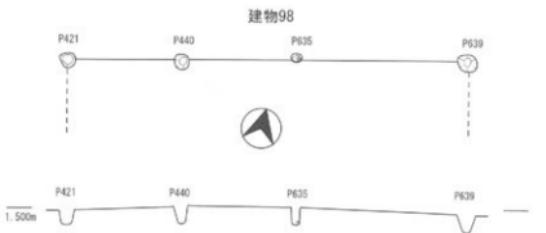
第53図 建物跡95実測図



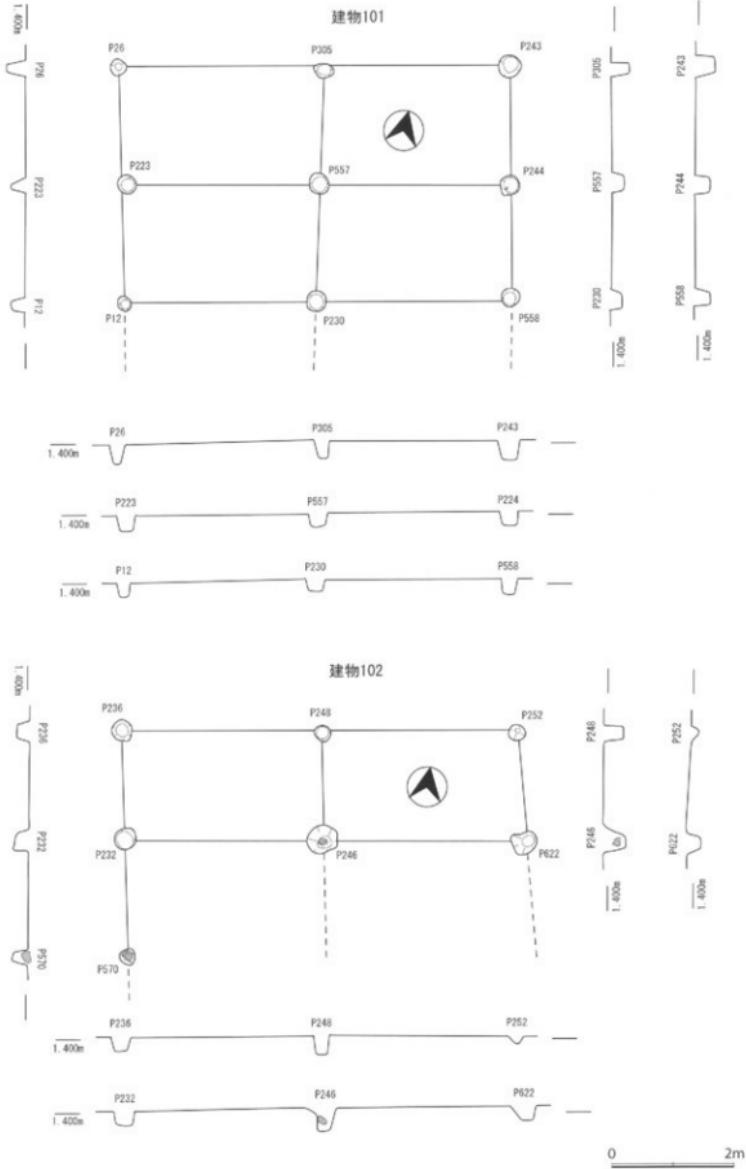
第 54 図 建物跡 96 実測図



第 55 図 建物跡 97 実測図

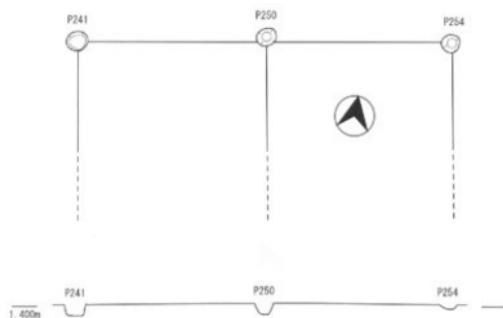


第 56 図 建物跡 98 ~ 100 実測図

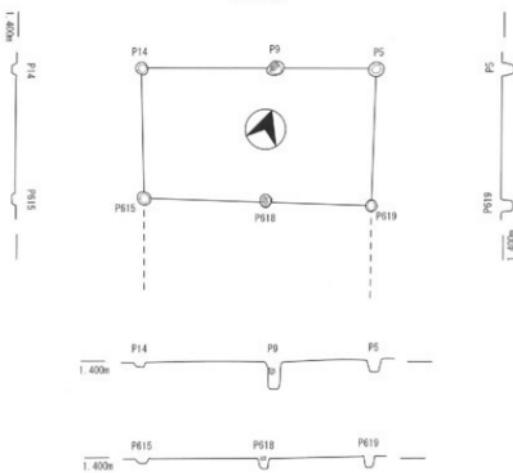


第57図 建物跡101・102実測図

建物103

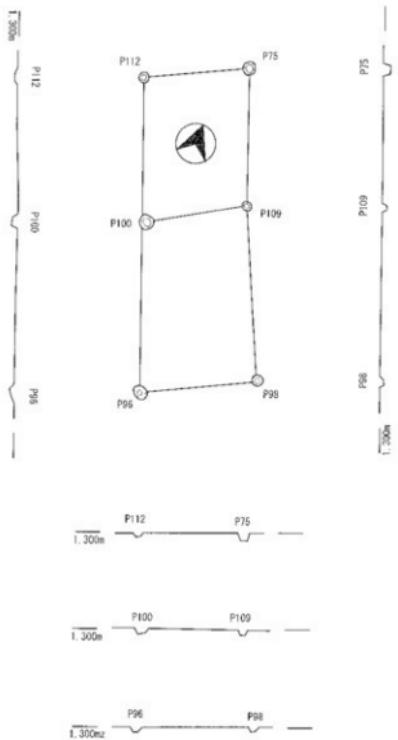


建物104

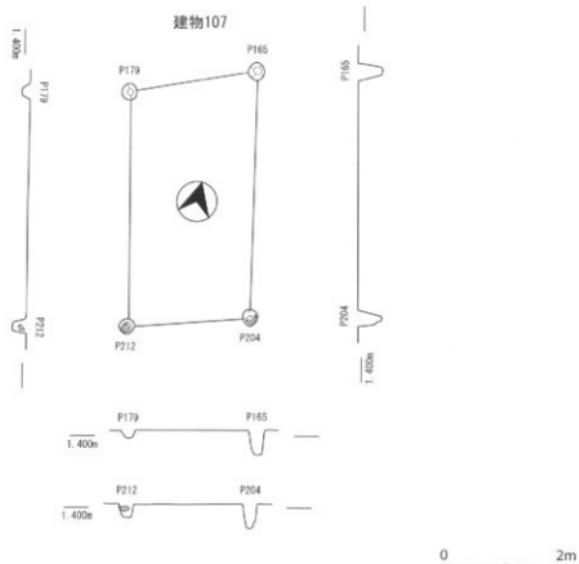
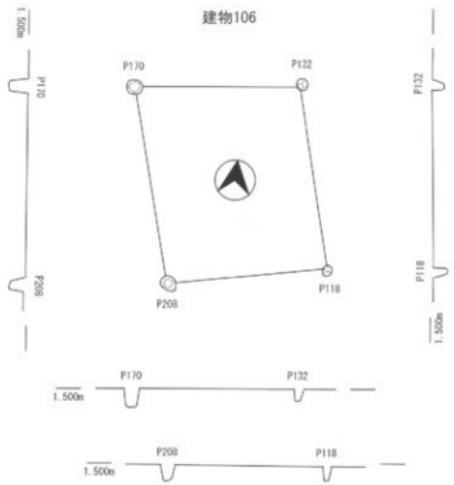


0                        2m

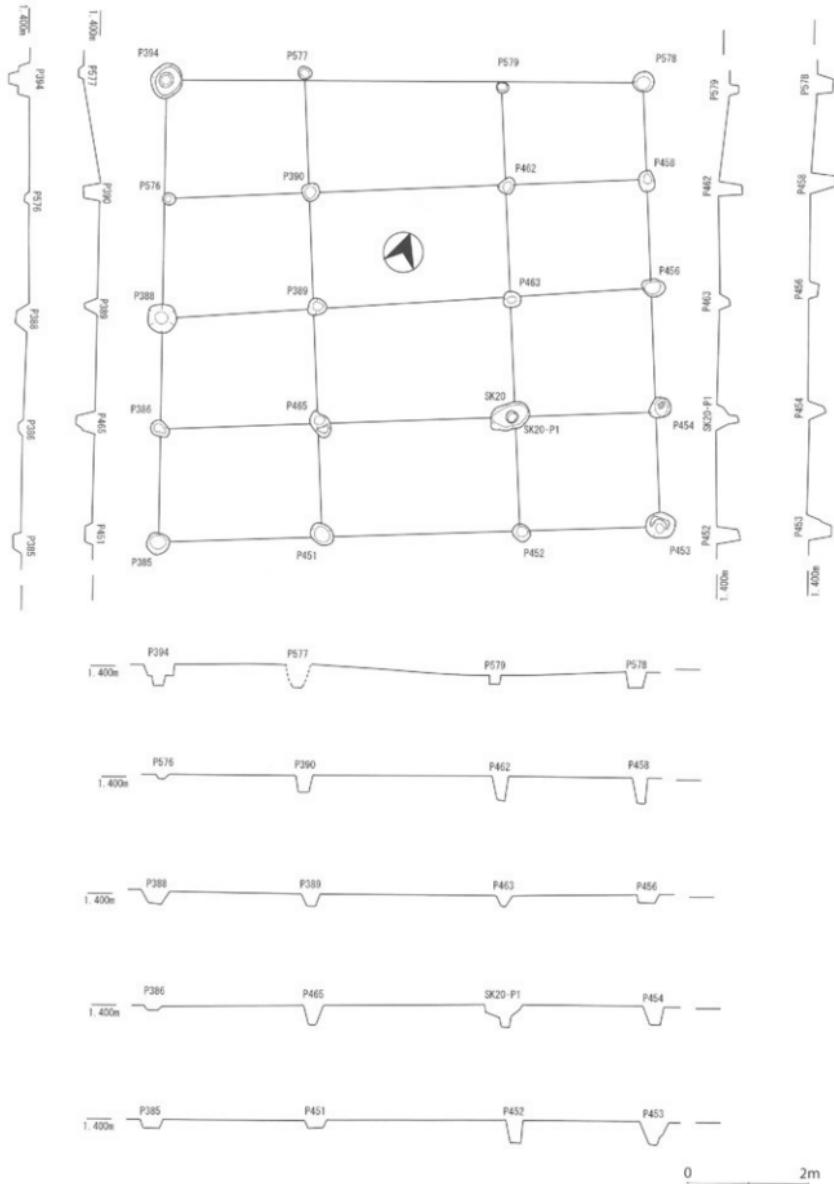
第58図 建物跡103・104実測図



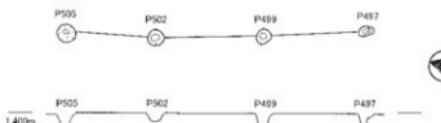
第 59 図 建物跡 105 実測図



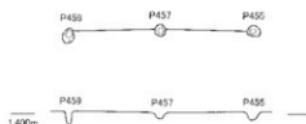
第60図 建物跡106・107実測図



第 61 図 建物跡 108 実測図



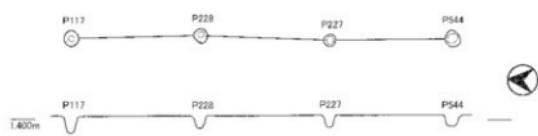
柱列27



柱列28



柱列29

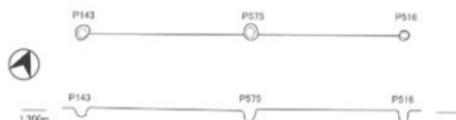


0 2m

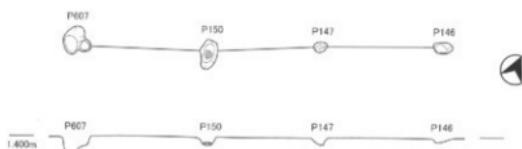
第62図 柱列27～30実測図



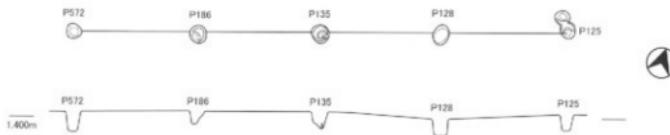
柵列31



柵列32



柵列33



柵列34

0                  2m

第63図 柱列31～34実測図

建物を構成するピットからの遺物（第 65 図）としては、体部がかなり深い器形の土師器壺 5・6 と、これと比較して体部が浅く、後出する器形と考えられる 7～9 があった。7～9 はいずれも底部がかなり薄い。

#### 建物跡 100（第 56 図）

4 区の建物 55 を構成する柱列である。3 間（7.08m）×3 間（5.68m）で、中央の柱間のみが広いため、1 間×3 間の身舎に南北側に廂がつく建物と考えられている。建物の主軸方向は N - 15° - W で、県報告では柱穴から出土した土師器壺から建物の時期を 12 世紀頃と推測している。

#### 建物跡 101（第 57 図）

4 区の建物 50 を構成する柱列である。2 間（6.40m）×4 間（8.26m）の総柱建物跡である。主軸方向は N - 15° - W で、建物面積は約 53m<sup>2</sup>である。

ピットからの遺物（第 65 図）として土師器の小皿 10 が出土している。

#### 建物跡 102（第 57 図）

4 区の建物 54 を構成する柱列である。2 間（6.48m）×4 間（7.75m）の総柱建物跡と考えられ、建物の主軸方向は N - 11° - W、建物面積は約 50m<sup>2</sup>である。

#### 建物跡 103（第 58 図）

4 区の建物 53 を構成する柱列である。2 間（6.14m）×4 間（8.02m）の総柱建物跡と考えられるが、柱穴の一部が確認されていない。主軸方向は N - 10° - W である。建物面積は約 49m<sup>2</sup>である。

#### 建物跡 104（第 58 図）

4 区の建物 51 を構成する柱列である。2 間（3.84m）×3 間（6.64m）の建物跡で、主軸方向は N - 17° - W である。建物面積は約 25m<sup>2</sup>である。

建物跡の西側に、区画溝と思われる細い溝状遺構が、建物の主軸方向に平行して断続した状態で検出されている。

#### 建物跡 105（第 59 図）

調査区の南西隅近くで検出された 1 間（1.84m）×2 間（5.16m）の小規模な建物跡である。主軸方向は N - 20° - W で、他の建物とは離れた位置で検出された。

#### 建物跡 106（第 60 図）

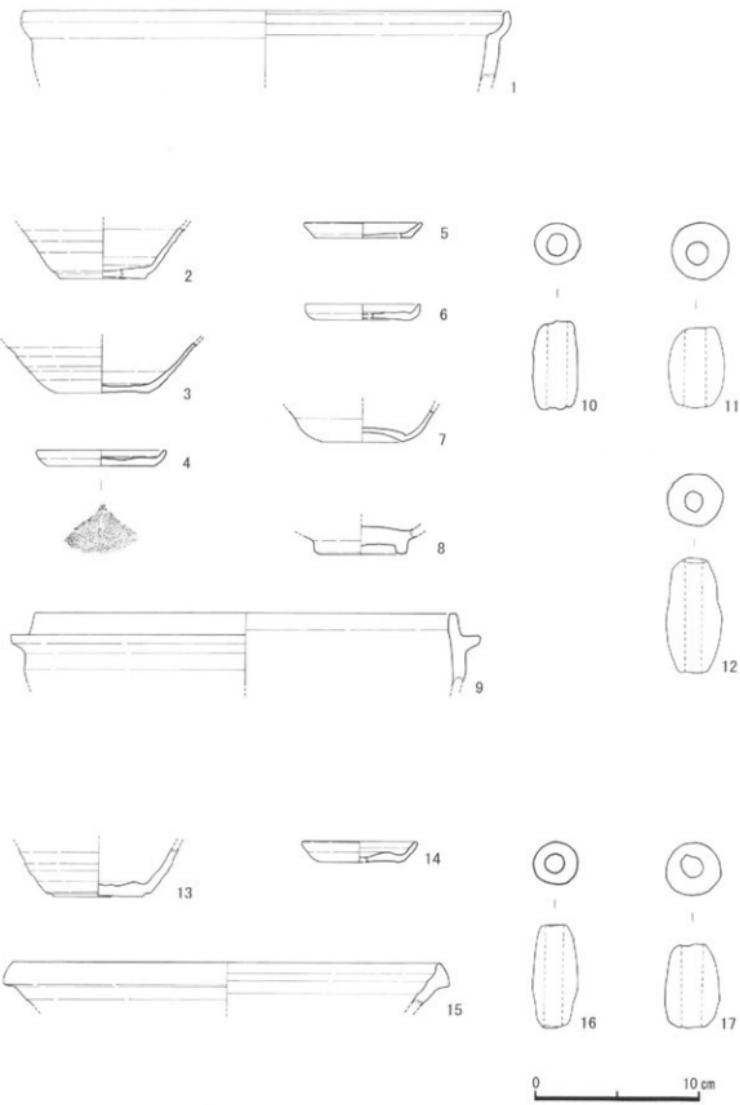
調査区の西端で、溝 31 と溝 34 に挟まれた位置で検出された 1 間（2.64～2.72m）×1 間（3.04～3.28m）の建物跡である。主軸方向は N - 17° - W で、建物 107 と重複する。

#### 建物跡 107（第 61 図）

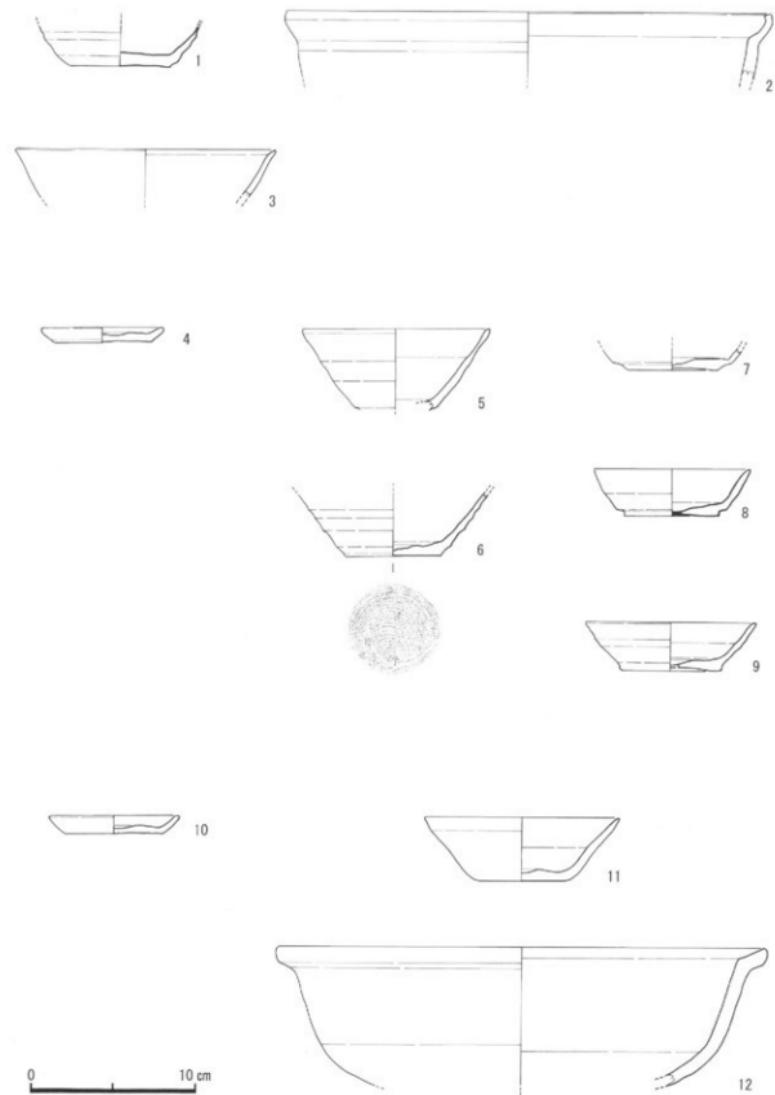
建物 106 と重複する 1 間（2.0m）×1 間（3.84～4.08m）の建物跡で、主軸方向は N - 16° - W である。

#### 建物跡 108（第 61 図）

他の建物と向きはほぼ合っているが、溝状遺構を挟んで北側に単独的に位置する 3 間（7.84～8.24m）×4 間（7.28～7.60m）の建物跡である。建物の主軸は N - 24° - W で、床面積は約 59m<sup>2</sup>、柱列 28 と溝 30・31・32 と重複する。ピット内の遺物（第 65 図）として、体部がやや深い土師器壺 11、口縁が開く瓦質の鍋 12 が出土している。



第64図 建物跡93～95出土遺物実測図



第 65 図 建物跡 96・97・99・101・108 出土遺物実測図

## 2) 柱列

### 柱列 27 (第 62 図)

柱間は 3 間 (4.96m) で、主軸方向は N - 15° - W である。柱穴を建物 93 と共有する。

### 柱列 28 (第 62 図)

建物 108 に重複する柱間 2 間 (3.04m)、主軸方向 N - 15° - W の柱列である。建物 108 の向きと合うが、前後関係は不明である。

### 柱列 29 (第 62 図)

建物 101 の北側に位置する、柱間 3 間 (8.0m) の柱列で、1 間約 2.6m で、等間隔である。主軸方向は N - 20° - W である。

### 柱列 30 (第 62 図)

建物や他の柱列とはやや向きが異なる。柱間は 3 間 (6.24m) で、主軸方向は N - 35° - W である。1 間 2.08m で、等間隔である。

### 柱列 31 (第 63 図)

遺跡の北端を画するような位置、向きで柱列 31・32・33 が列状に並ぶ。

溝 33 と平行して北に位置する柱列 31 は、柱間 3 間 (7.84m) の柱列で、主軸方向は N - 68° - E である。1 間が 2.6m で、等間隔である。

### 柱列 32 (第 63 図)

柱列 31 の延長線上の西側に位置する、柱間 2 間 (5.28m) の柱列である。主軸方向は N - 65° - E で、約 2.65m 間隔である。

### 柱列 33 (第 63 図)

直線上に並ぶ柱列 31・32 とは少し位置がずれるが、ほぼ同じ向きで西側に続く柱列で、柱間は 3 間 (6.08m) で、主軸方向は N - 65° - E、1 間の間隔は 1.84 ~ 2.0m である。

### 柱列 34 (第 63 図)

溝 31 と溝 34 に挟まれ、建物 106・107 に重複する柱列である。主軸方向は N - 70° - E で、柱間は 4 間 (8.08m)、1 間は約 2.0m で等間隔である。

## 3) 溝状遺構

### 溝跡 28・29 (第 50 図)

調査区の南側で検出された建物群の北側で、屋敷地を区画するように東西方向に 40m にわたって検出された溝跡である。方向は N - 67° - E である。

遺物 (第 66 図) としては、土師質の鉢 2、白磁碗 IV 類と考えられる底部の 6、鎬蓮弁文の龍泉窯系青磁碗 8 などが出土している。

### 溝跡 30 (第 50 図)

溝の方向は N - 64° - E で、東側で溝 31 に接する。

建物 108 に重複し、溝 30 と 31 が一体化した位置の埋土から白磁碗 V 類の 4 (第 66 図) が出土した。

### 溝跡 31 (第 50 図)

溝の方向は N - 72° - E で、50m にわたって検出され、建物 108 と重複する。

埋土からの遺物（第 66 図）には、底部が厚く、体部も深い大型の土師器壺 1、白磁碗 IV 類の 3、白磁碗 V 類の 5 などがあった。

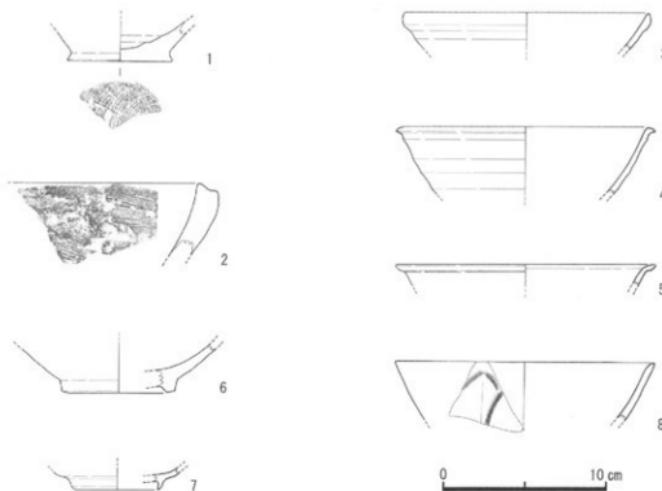
溝跡 32・33（第 50 図）

断続しているが、本来は連続していたのかもしれない。溝の向きは N - 71° - E である。

遺物（第 65 図）として白磁皿 E - 2 類の底部 7 が出土している。

溝跡 34（第 50 図）

溝が広がる東端部分に、近世陶磁器を混入した集石遺構が重なっていた。溝の向きは N - 77° - E である。



第 66 図 溝状遺構出土遺物実測図

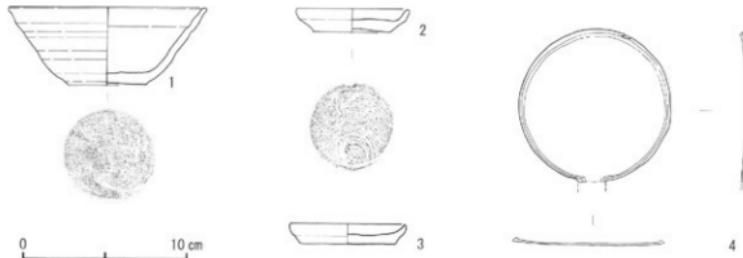
#### 4) 墓 墓 67

調査区の北側で、建物 108 の西、溝 33 との間で検出された。墓壙の掘り方は長辺 1.55m、短辺 0.7m のほぼ長方形で、検出面からの深さは 16cm である。主軸方向は N - 19° - W で、箱型木棺墓と考えられるが、棺の大きさは不明である。

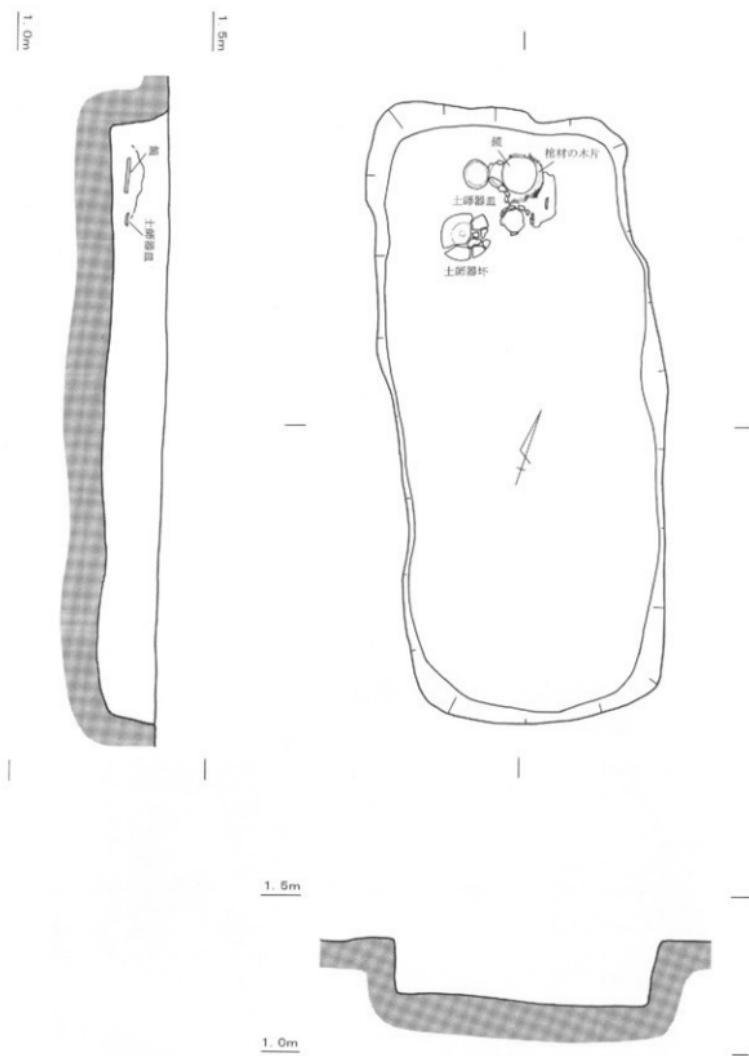
墓壙の北端の下層から土師器の壺、皿が 5 個体分と青銅鏡が出土した。鏡の下には棺材の薄い木片も残存していた。人骨片はなかったが、歯が 1 点出土している。

遺物（第 67 図）のうち 1 は体部の深い壺で、地の遺物よりもやや浮いた位置で、東側に傾いた状態で出土した。中世前期に遡る器形であり、何らかの理由で墓壙内に混入した可能性が考えられる。2、3 は小型で体部の浅い土師器皿で、2 の底部には回転糸切り痕が残る。図化していないが、残る 2 点も同様の器形である。

4 は青銅製の柄鏡で、柄の部分は欠損している。直径 9.4cm、厚さ 0.1cm で、外縁が厚さ 2.5 mm の小さな三角縁を呈し、柄の幅は 1.7cm である。裏面に文様は認められない。中国の宋代に鋳造された湖州鏡の素文鏡と考えられるが、国内で柄鏡の出土例は知られていない。平安時代末期から鎌倉時代にかけて沖手遺跡に搬入され、伝世して最終的に墓に副葬されたと考えられる。



第 67 図 墓 67 出土遺物実測図



第68図 墓67実測図

### (3) 遺構面下層の土壤堆積

遺構面の下層の土壤を確認する目的で、グリッドを3箇所に設定して掘削した。

遺構が掘り込まれている厚さ約60cmの砂混じり土（砂質シルト）は、色調などにより5～7層に分かれるが、中世を遡る遺構面は確認されなかった。

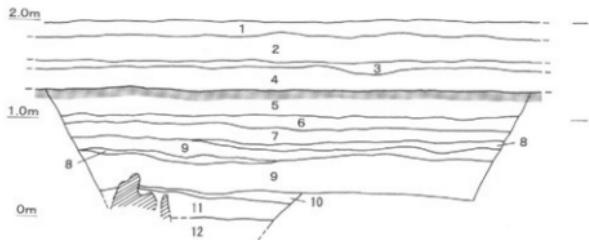
7層より下位は砂混じりの暗黒褐色土8層、植物など有機質を多く含む暗黒褐色粘質土（シルト混じり砂）の9～11層、砂礫層12へと変わる。砂礫層の上面は、グリッド1及び2は標高1m前後、グリッド3では標高-20～40cmであった。

特にグリッド1と3では、暗黒褐色粘質土の中に直径30cm以上のものも含め、倒木が横たわった状態で検出されている。その一部を採取し、また周辺調査区のサブトレーンチで対応する同じ土層から採取した木片も併せて年代測定を行ったところ、 $6160 \pm 30$ 年～ $1640$ 年±25年と幅があつた。分析者は、古い年代については試料が二次堆積したものとの可能性を指摘し、最も新しい年代の古墳時代中期を妥当な年代と報告している。よって、遺構が掘り込まれている砂混じりの砂質シルト（5～6層）は、それ以降に堆積した土壤ということになる。

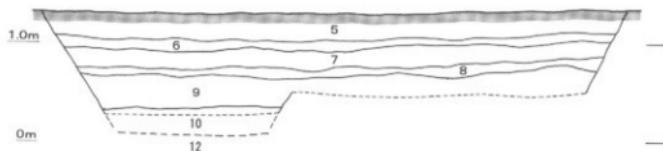
さらに6区で実施した地質調査に伴うボーリングコアから貝（海洋性）殻を採取し、年代測定を行った。地表から7～8m下層の細かい砂混じりの粘質土に混入した貝殻で、年代測定の結果から、この深度の土壤は7100年前に堆積したものと推定された。



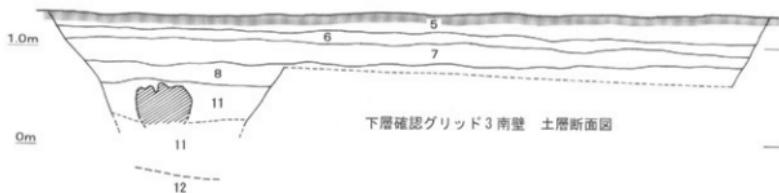
下層確認グリッド3



下層確認グリッド1南壁 土層断面図



下層確認グリッド2南壁 土層断面図



- |                     |                   |
|---------------------|-------------------|
| 1. 灰褐色土（水田耕土）       | 7. 黄灰褐色砂質土        |
| 2. 黄褐色土混じり灰褐色土（客土か） | 8. きめ細かい砂混じり暗黒褐色土 |
| 3. 灰褐色土             | 9. 暗黒褐色粘質土        |
| 4. 明黄茶褐色土           | 10. 暗青灰色砂層        |
| 5. 黄褐色砂質土           | 11. 砂混じり暗黒褐色土     |
| 6. 茶褐色砂質土           | 12. 砂礫層           |

第69図 下層確認グリッド土層断面図

#### (4) 遺構に伴わない遺物

遺物の総量はコンテナ 23 箱で、縄文土器、須恵器、土師器、新しいものとしては近世以降の陶磁器までを含む。

中国製の白磁、青白磁、青磁、青花、天目茶碗、陶器など貿易陶磁に加え、備前、常滑、東播、瀬戸、中世須恵器など国産陶器、在地の瓦質土器、土師器などが多数出土し、錢貨、土錘、石錘なども少量あった。ここでは近世陶磁器を除き、代表的なもののみを示した。

#### 須恵器（第 70 図）

1 は立ち上がりを持つ 6 世紀末から 7 世紀初頭の坏身、5 はかえりが付く 7 世紀前半の坏蓋である。2 ~ 4 は高台の付く坏、6 は端部を下方に折る蓋で、いずれも 8 世紀代のものと考えられる。須恵器の出土はごく少量である。

#### 土師器・土錘（第 71 図）

1~2 は体部が深い坏で、1 の器内は薄い。3~5 はやや小型の坏、皿 4 の底部はかなり厚みがある。

6~7 は浅い皿である。7 は全体的にやや薄いつくりで、口縁をほぼ上方に引き出している。

8 は口縁を外側へ折る鍋、9 は突帯の付く羽釜、10 は端部内側を肥厚させる大型の擂鉢である。

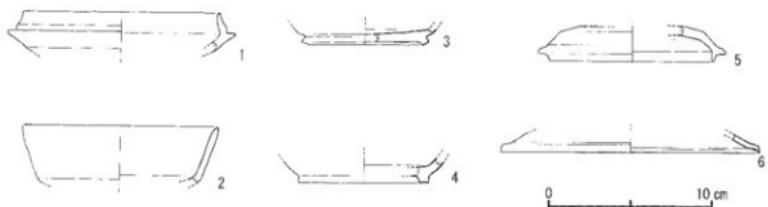
土錘には紡錘型の 11~16 と 21~24、管状の 17~20、長さに対して直径が太く、孔径も大きくなる大型の 25~26 などがあった。

#### 瓦質土器（第 72 図）

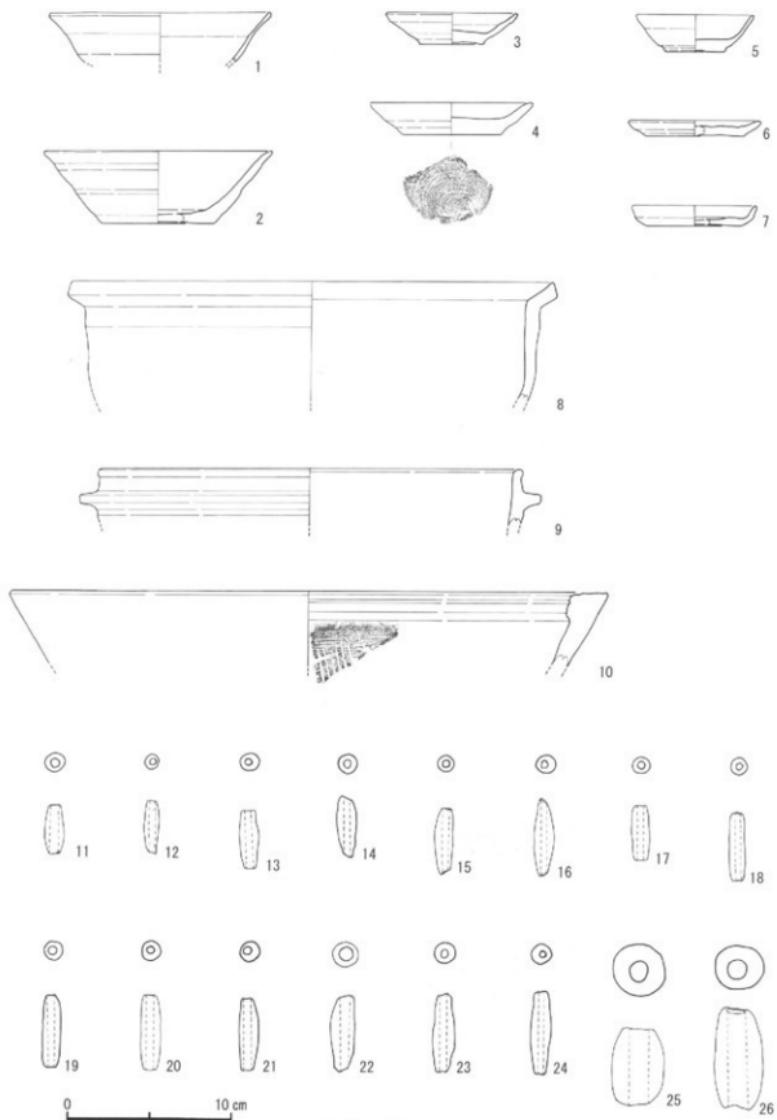
1~4 は鉢である。口縁端部をやや内向きに丸めた 1、端部内側を肥厚させて端面が付く防長系瓦質土器の擂鉢 2、端部の外側が膨らむ 3~4 の器形もある。

5~8 は防長系瓦質土器の鍋の口縁、9~10 は短頸壺である。

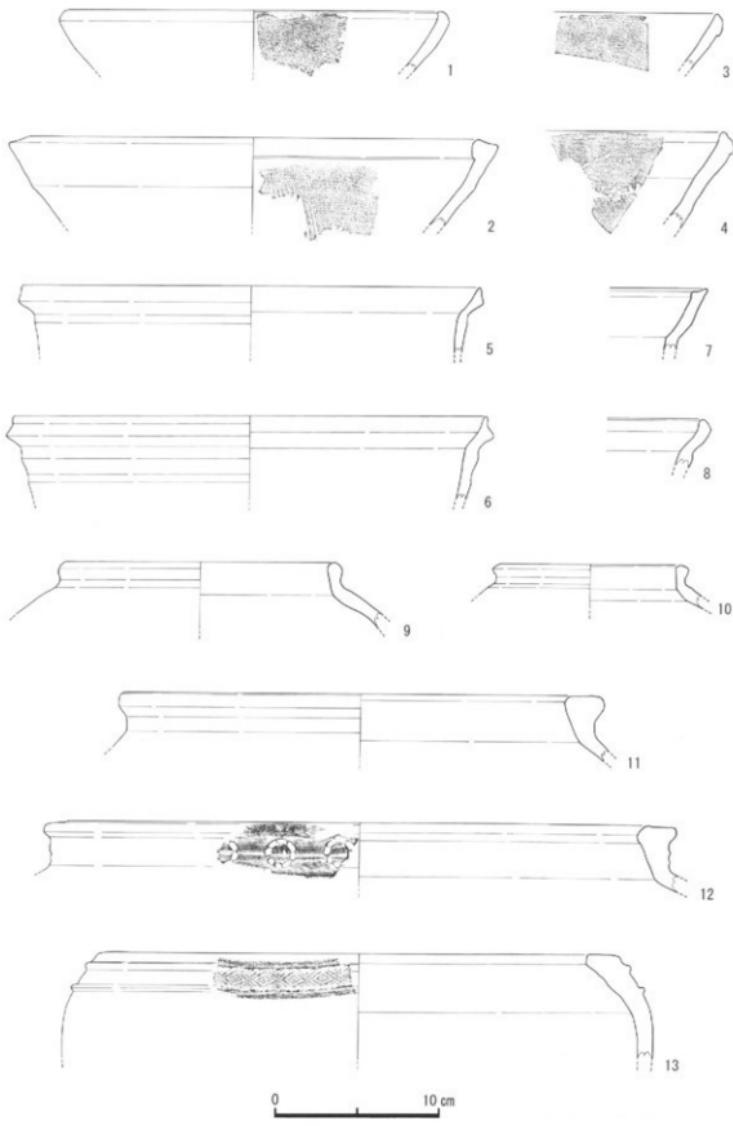
11~13 は火鉢である。11~12 は上部に広い端面を持つ太い口縁の菱形の火鉢で、12 の外側には 8 個の突起による円形の文様を押している。13 は、体部から口縁部にかけて内弯する器形の火鉢である。口縁の上と内側に端面を持ち、外面には二条の突帯を巡らせて、その間に連続菱形文が施される。丁寧な調整で、焼成も堅固であり、14 世紀後半~15 世紀後半の奈良火鉢の浅鉢 V と考えられる。



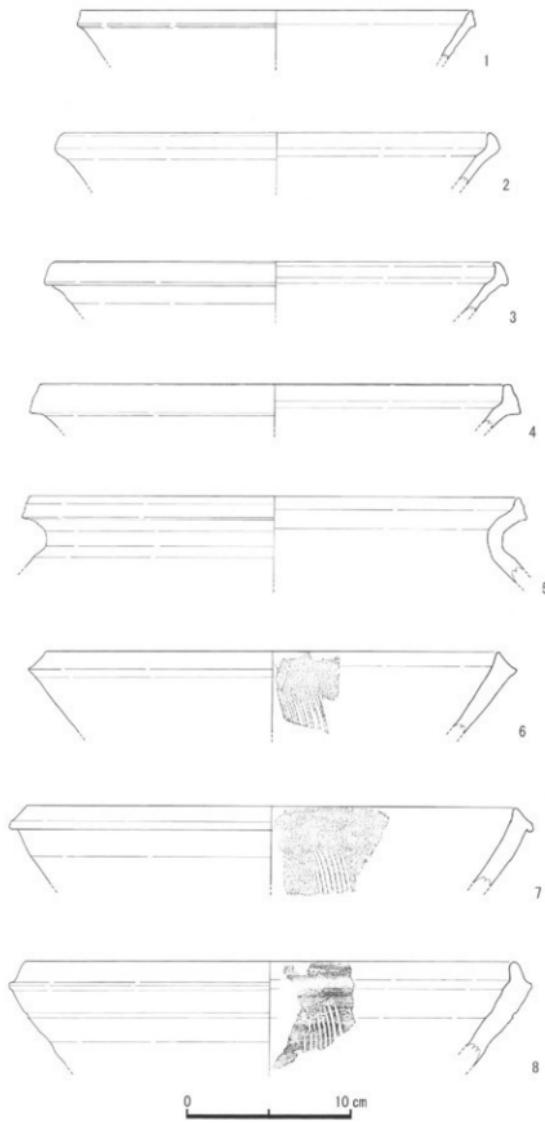
第 70 図 遺構に伴わない出土遺物（須恵器）実測図



第71図 遺構に伴わない出土遺物（土師器）実測図



第72図 遺構に伴わない出土遺物（瓦質土器）実測図



第73図 遺構に伴わない出土遺物（東播系・越前・備前）実測図

### 東播系・常滑系・備前系（第73図）

1～3は東播系と考えられる須恵質の鉢である。1は口縁上端部が上方につまみあげられて、外側の端面が垂直に近い特徴から13世紀代と考えられる。2・3は端部がやや丸みを帯びて内傾するもので、3は口縁外側の端面の下端がわずかに垂下する。4は全体的に器肉が厚く、上部にも端面を持つ。2～4は端部に上下の拡張がみられる「く」の字状の形態で、14世紀前半の時期が考えられる。

5は越前の甕の可能性がある。強く屈曲する口縁外側にやや内傾する端面が付く。

6～8は備前系の擂鉢である。6は端面が菱形で、端面の上角と下角が鋭角的である。擂目は6条で、14世紀中葉～15世紀前葉の時期が考えられる。7・8は15世紀中頃のものと思われ、7は端面の下角が垂下し、擂目は8条である。

### 瀬戸・滑石製石鍋（第74図）

1は瀬戸の天日茶碗である。2は滑石製石鍋で、口縁が直立し、広い端面と断面が正台形状を呈する特徴から12世紀初頭に出現する型式と思われる。

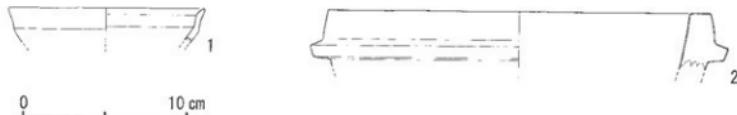
### 白磁（第75図）

1は口縁が小さな玉縁状ではあるが、白磁碗II類よりも古相の碗で、9～10世紀と考えられる。2～5は白磁碗IV類である。6・7は端部を外側につまみだす碗V類、8・9は外反気味の口縁の外面がわずかに肥厚するV(2a)類、11・12は口縁の袖を削り取る碗IX類である。10は内弯気味の体部、13・14は口縁部がやや外反する碗である。

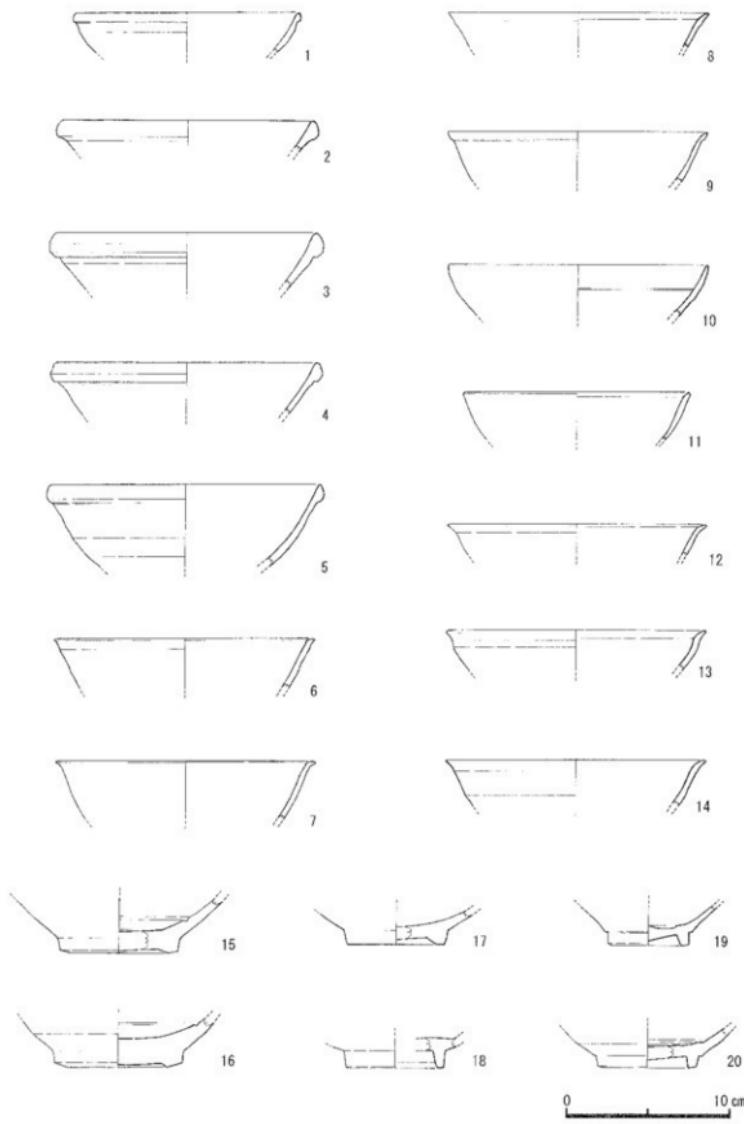
15～17は碗IV類の底部。18はV類の底部と思われ、見込みの袖を環状に搔き取る20は碗VII類である。

### 白磁・青白磁（第76図）

1～8は皿である。1は白磁皿II類、2はやや高い高台の付く皿、3・4は白磁皿VI類、5は底部も施釉される白磁皿IX類、6は端部の袖を削り取る白磁皿IX類、7・8は体部が内弯する白磁皿D類である。9は13世紀の白磁四耳壺III類の底部、10・11は青白磁の合子の蓋、12はかえりの付く合子の身である。型押しによる花弁状の文様を施したこれら青白磁は12世紀中頃～後半のものと考えられる。



第74図 遺構に伴わない出土遺物（瀬戸・滑石製石鍋）実測図



第75図 遺構に伴わない出土遺物（白磁）実測図

### 青磁（第77図）

1・2は同安窯系青磁の碗である。1の内面には範線と櫛点描の文様が、2の外面には細かい綾櫛目がある。3～18は龍泉窯系青磁の碗・皿である。3は碗I類、4・5は鎧蓮弁文のB1類、6・7は内外面ともに無文で端部が丸い端反りの碗D類、8・9は外面に不明瞭な雷文帯を持つ碗である。

10・11は高台が四角形状の碗底部、12は高台が三角形状で、見込に花文状の印文があるが、円形に釉がかからない。

皿の13・14はI類、15は坏、16は底部が厚い器形の皿と考えられる。17・18は厚い施釉で、端部が丸い端反りの皿である。

### 青磁・天目・中国陶器・朝鮮陶磁（第78図）

1は龍泉窯系青磁の坏皿類、2は皿の底部、3是中国の天目茶碗、4は越州窯系青磁の大型の合子の蓋で、11世紀前半のものである。

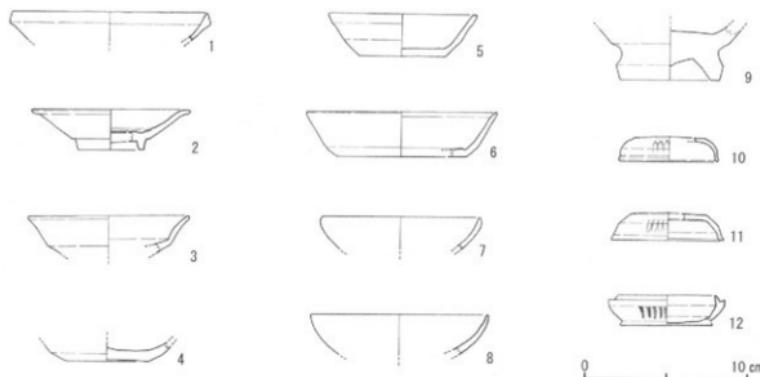
5～9は中国陶器である。5・6は端部が丸い小口径の短頸壺、7・8は陶製の鉢で、端部内側に丸みのある突帯を巡らす7は磁灶窯と考えられる。8は端部を下方に丸めて小さな垂下が付く。この他にも、体部が強く内弯し、口縁端部の内側が三角形状に肥厚して凹線が入る鉢もあった。9は端部が玉縁状で、体部が丸みをもって大きく張ると思われる壺の口縁部である。

10・11は朝鮮の灰青釉陶の碗で、11の見込と高台の疊付けには砂目が付く。

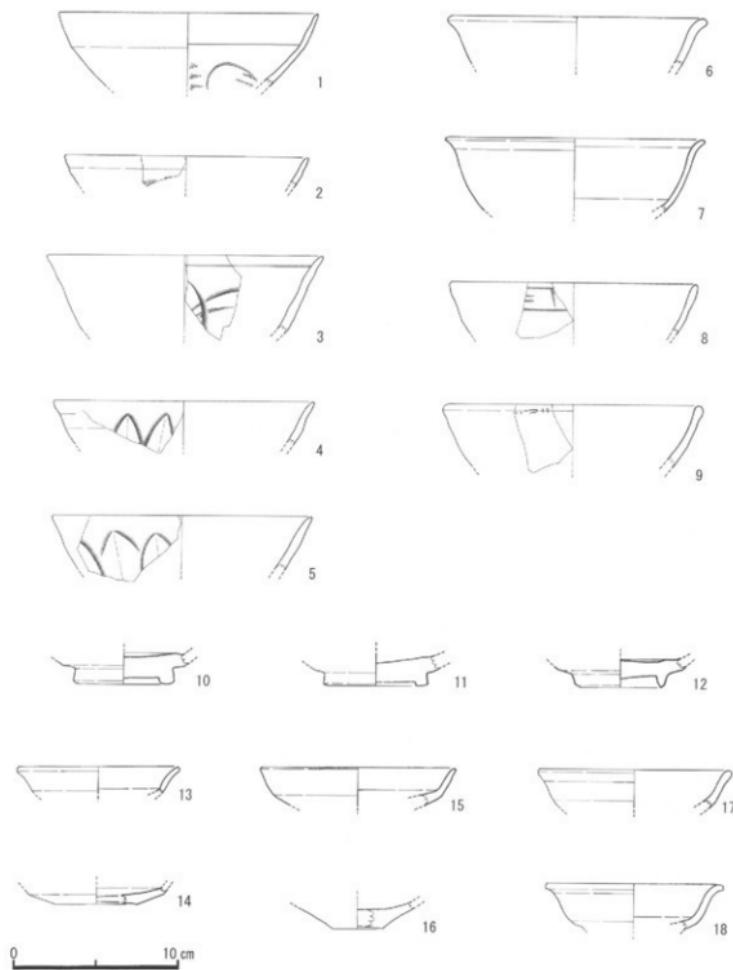
### 錢貨（第78図）

12は遺物包含層から出土した大錢の元豊通寶である。初鑄年は北宋の1078年、直径は3.0cmである。

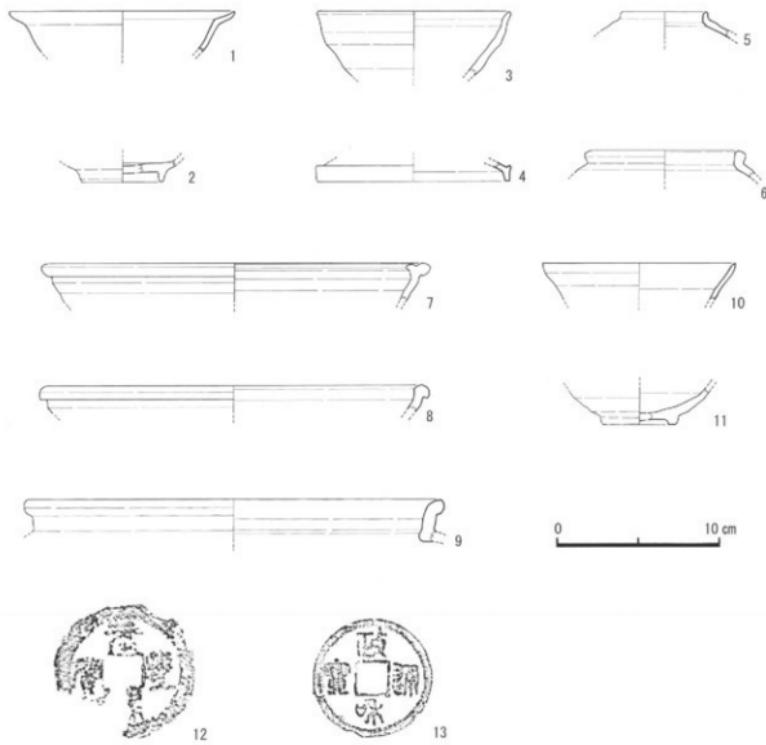
13は性格が不明の土墻（SK20）から出土した政和通寶で、初鑄年は北宋の1111年、直径は2.4cmである。



第76図 遺構に伴わない出土遺物（白磁・青白磁）実測図



第77図 遺構に伴わない出土遺物（青磁）実測図



第78図 遺構に伴わない出土遺物（青磁・天目茶碗・中国陶器・朝鮮陶器・錢貨）実測図

## (5) まとめ

8区では、4区との間にまたがるものも含め16棟の掘立柱建物跡を復元した。3間×5間（建物94）、3間×4間（建物99=4区58、建物108）、3間×3間（建物98=4区62、建物100=4区55）、2間×5間（建物95・97）、2間×4間（建物101=4区50、建物102=4区54、建物103=4区53）、2間×3間（建物104=4区51）など比較的大型の建物が多い。1間×5間の建物96は倉庫と考えられる。なお建物108は他の建物群とは距離を置き単独的に位置している。建物を構成するピットからは土師器片のみであり、重複する溝跡との前後関係も明確ではないが、他の建物群とは時期が異なると推定され、近くで検出された墓67と前後する時期が想定される。

4区東側の建物の検出状況も併せて、この一帯には大型の建物跡が整然と集中する感がある。しかし一方で、他区の建物群は井戸を伴うが、4区から8区西側にかけては井戸が検出されていない。建物群の性格に関連する事象かもしれない。

溝状遺構より北側は、大型建物108が存在するものの、遺構が希薄で、北側の壁際では遺構が全く検出されなかった。道路遺構あるいは溝状遺構、さらに柵列状の柱列が遺跡の北限を画していると考えられた。

さらに8区と9区の遺構との間に約20mの幅で遺構が検出されない部分があり、益田道路4区においても同じような状況がある。空地あるいは遺構空白地としての道路部分とも推定される。

8区における出土遺物の数値化と組成については第5章第1節で樋口英行が報告しているが、貿易陶磁の破片数812点のうち白磁が403点（49%）、次いで青磁が346点（43%）を占め、青花はわずかに1%である。白磁では碗IV類が圧倒的に多く、青磁は同安窯系青磁30点、龍泉窯系青磁314点であった。貿易陶磁からみた最盛期は11世紀後半から13世紀中葉であり、13世紀後半からピーク時の1/3程度に減少し、15世紀中葉以降はわずかな廃棄状況と分析したうえで、時期別の出土破片数の推移を比較し、中吉田久城線11区の中心時期は11世紀後半から13世紀前葉で、4区よりも早く衰退し始めるものの、15世紀中葉以降の存続状態は4区よりも11区が活発と指摘している。

8区の調査では、遺跡の北側縁辺に近い区域の建物群と道、溝状遺構、柵列状柱列の位置関係を確認するとともに、遺跡全体の遺構の分布状況に新たな情報を加えることができた。上記のとおり遺跡の成立とともに拠点的に機能したエリアであるが、13世紀後半から衰退の一途をたどっており、集落全体の中での拠点としての機能とその移動、変遷を考察するうえで良好な資料が得られた。

なお、これまでの調査においても被焼した陶磁器、礫が多く出土しており、集落が火事で罹災したことが明らかである。4区全体で1kg以上の礫が228個出土しているが、このうちの85%にあたる194個が火を受けていた。集落の衰退の一因と考えられる火事の時期については今後検討が必要である。

### 3. 9・10 区西側の調査

#### (1) 遺構の分布状況

遺構として掘立柱建物跡、柱列、墓、溝状遺構などを検出した。大半の遺構は中世と考えられたが、9区西側には近世の集石を伴う土坑が確認されている。遺構面の標高は1.3～1.4mである。

柱穴状のピットは、柱根が残るものや根石を持つものを含め多数検出され、12棟の掘立柱建物跡と柱列4を復元した。建物跡は、北側に集中しており、その向きはほぼ一定している。柱列に関しても建物の方向に合う柱列35・36・37・38があり、これらは建物の一部である可能性もある。

前述したように、9区西側は空白域となっている。調査区の中央では、東西に走る溝状遺構を検出した。いずれも深さ15～20cm程度の皿状の浅い窪みであり、このような溝については道路遺構の類型のひとつと考えられている。

#### (2) 遺構とその伴出遺物

##### 1) 掘立柱建物跡

###### 建物跡 109（第80図）

9区中央部に位置している。建物跡110・111と重複している。3間（4.9m）×4間（6.8m）の掘立柱建物跡と考えられ、主軸はN-80°-Eの方向を指している。ピットからは土師器の小片が出土している。

###### 建物跡 110（第81・82図）

9区中央部に位置している。建物跡の西側には遺構が墓1基のみで、東南側に遺構が特に集中する。規模は南北3間（約10m）×東西7間（約12m）と考えられ、主軸はN-78°-Eの方向を指している。ピットからは土師器の小片が出土している。

###### 建物跡 111（第83図）

9区西側に位置している。建物跡110の一部である。東西2間（3.3m）×南北2間（6.8m）の掘立柱建物跡と考えられる。P971、P967で柱根と思われる木片が出土している。可能性が高い建物跡として建物跡110とは別に記載した。主軸はN-78°-Eの方向を指している。ピットからは土師器の小片が出土している。

###### 建物跡 112（第83図）

9区東側に位置している。2間（約3.2m）×3間（約5m）の建物跡で、主軸はN-17°-Wの方向を指している。ピットからは土師器の小片が出土している。

###### 建物跡 113（第84図）

9区東側に位置している。1間（約2.1m）×1間（約3.0m）の建物跡で、主軸はN-20°-Wの方向を指している。ピットからは土師器の小片が出土している。

###### 建物跡 114（第84図）

9区中央南側に位置している。周辺は遺構が集中している西端である。南北2間（約4m）×東西2間（約4.3m）、平面積は17.2m<sup>2</sup>である。主軸はN-27°-Wを指し、ピットからは土師器の小片が出土している。



第79図 9·10区西侧遺構図

### 建物跡 115（第 85 図）

9 区南東部に位置している。南北 2 間（約 3.2m）× 東西 2 間（約 4.4m）、平面積は 14.1m<sup>2</sup>である。主軸は N - 33° - W を指し、ピットからは土師器の小片が出土している。

### 建物跡 116（第 86 図）

10 区北西部に位置している。3 間（約 5m）× 5 間（約 8.6m）、平面積は 42.8m<sup>2</sup>である。主軸は N - 72° - E を指し、ピットからは土師器の小片が出土している。

### 建物跡 117（第 87 図）

10 区北側に位置している。1 間（約 2.2m）× 7 間（約 12m）、平面積は 26.4m<sup>2</sup>である。主軸は N - 72° - E を指し、建物跡 118 と軸が重なり、柱間も同じであることから、同じ形式の建物、もしくは同一の建物である可能性を含めて、上記の規模とした。ピットからは土師器の小片が出土している。

### 建物跡 118（第 88 図）

10 区中央部に位置している。1 間（約 2.2m）× 7 間（約 12m）、平面積は 27.8m<sup>2</sup>である。主軸は N - 72° - E を指し、建物跡 117 と軸が重なり、同一の建物である可能性もある。ピットから割石が多く出土している。

### 建物跡 119（第 89 図）

10 区北側に位置している。1 間（約 3.1m）× 6 間（約 4m）、平面積は 30.4m<sup>2</sup>である。主軸は N - 74° - E を指し、ピットからは土師器の小片が出土している。P858 は建物跡 117 の P917 を切っており、建物跡 117 から建物跡 119 への立替が確実である。

### 建物跡 120（第 90 図）

10 区南側に位置し、溝 42 の内側に位置している柱穴群で復元した建物跡である。1 間（約 2m）× 3 間（約 6m）に約半間の庇を伴う建物と推定される。その平面積は 18m<sup>2</sup>である。主軸は N - 64° - W を指し、ピットからは土師器の小片が出土している。

## 2) 柱列

### 柱列 35（第 91 図）

建物 110 から約 2.2m 北側に位置する、柱間 4 間（11.9m）の柱列である。1 間約 2.6m で等間隔である。主軸方向は N - 78° - E である。

### 柱列 36（第 91 図）

建物 116 から約 1.7m 北側に位置する。柱間 2 間（3.4m）の柱列である。1 間約 1.7m で等間隔である。建物 116 とはほぼ平行で、何らかの関連があると考えられる。

### 柱列 37（第 91 図）

建物 119 から約 3.1m 北側に位置する。柱間 2 間（3.3m）の柱列である。1 間約 1.6m で等間隔である。建物 119 とはほぼ平行である。

### 柱列 38（第 91 図）

建物 119 から約 3.1m 南側に位置する。柱間 3 間（4.9m）の柱列である。1 間約 1.6m で等間隔である。建物 119 とはほぼ平行である。

### 3) 堪穴建物

#### 堪穴建物（第 101 図）

##### 規模と形態

9 区南東部で検出した平面プラン方形の建物跡である。北側の壁はコンクリート側溝により失われている。規模は南北約 2.8m、東西約 3.0m、壁の高さは約 30cm を測る。覆土は黒褐色土が堆積しており、中央床面では炭化物を検出した。

柱穴は 7 本ないし 8 本構造で、柱穴の規模は径約 20cm、深さ約 30cm 前後のものである。壁帶溝は無く、中央の炭化物は、灯りをとった痕跡であろう。東側が大きく張り出し、その周辺の床面は良く縮まっていることから、出入口と考えられる。

##### 出土遺物

床面から土師器の鉢が出土している（第 108 図 - 11）。覆土及び柱穴からは土師器の小片、炭の少量出土している。

##### 遺構の性格と年代

床面の鉢は底部と口縁部の小片であり、口縁部は 14 世紀頃のものと考えられる。

### 4) 石列

#### 石列 7（第 92 図）

9 区遺構群の西側で、9 区中央部窪地の東側の下端に沿って握り拳大の礫が列状に分布している。北側から南側へ向かって礫の密度が薄くなる。ちなみに 4 区の石列 4 につながり、礫が確認できた範囲は部分的で、密度も散漫になっている。

#### 石列 8（第 93 図）

10 区中央部南側に位置している。10 区中央部の柱穴群から東側の上端に沿って列状分布している。溝状遺構とは直交する位置関係で、南側では石列 5 に繋がる。この石列を境にして次第に傾斜している。

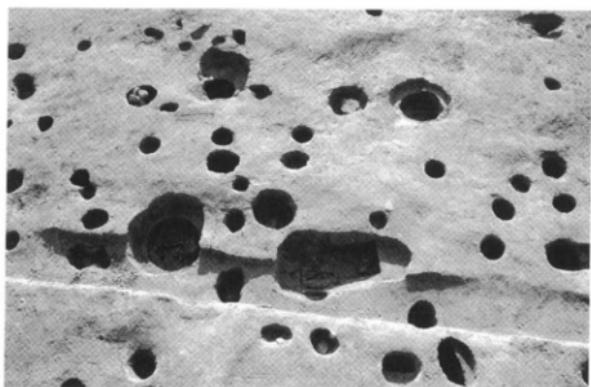
##### 出土遺物

石列及びそれより東側の傾斜地からは第 105 ~ 107 図に掲載した遺物が出土した。

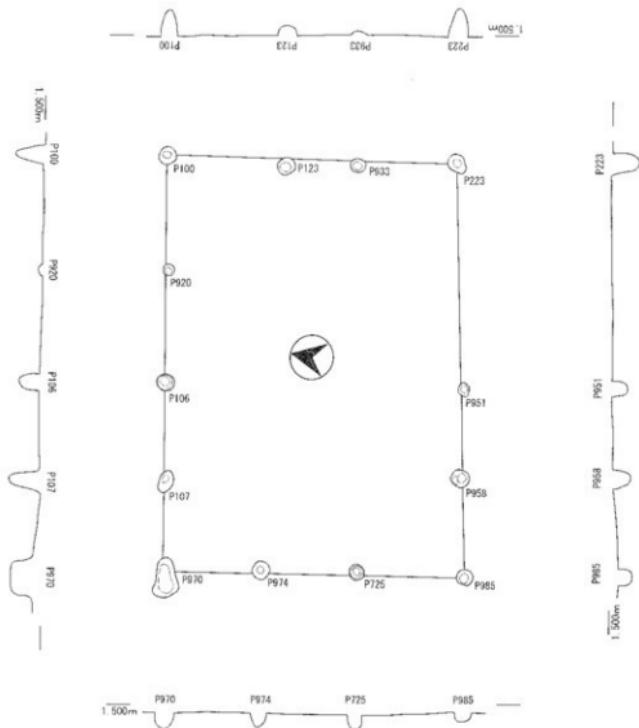
第 105 図の 1 は瓦質土器の擂鉢である。口縁部の内側はやや丸みを帯びている。2 ~ 4 は備前系陶器である。2・3 は擂鉢で 14 ~ 15 世紀頃のものである。4 は壺の玉縁状口縁部である。5 常滑系で壺の底部、6 は信楽の壺の体部で、自然釉が確認できる。

第 106 図の 1 は須恵器で高壺の頸部である。2 は両面にスタンプ文を施す陶器である。4 は鉢、5・6 は防長系鍋である。7 は足鍋の脚部である。8 は湯釜である。

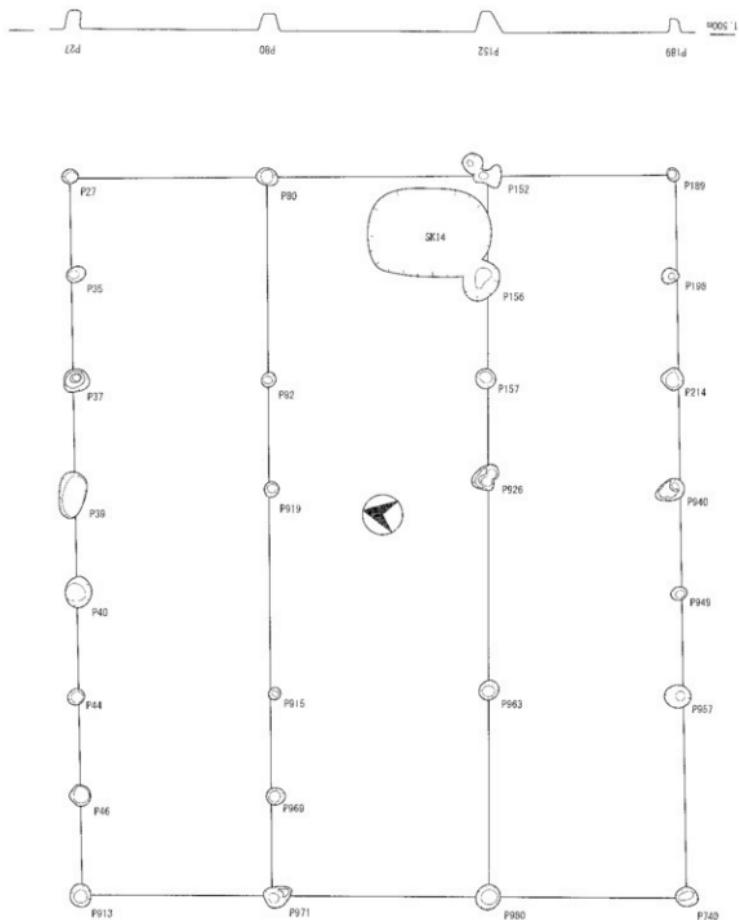
107 図の 9 ~ 12 は備前焼の擂鉢である。口縁部の形態から、9・10 は IVB - 2 期である。11 は VA 期、12 は VB - 2 期である。



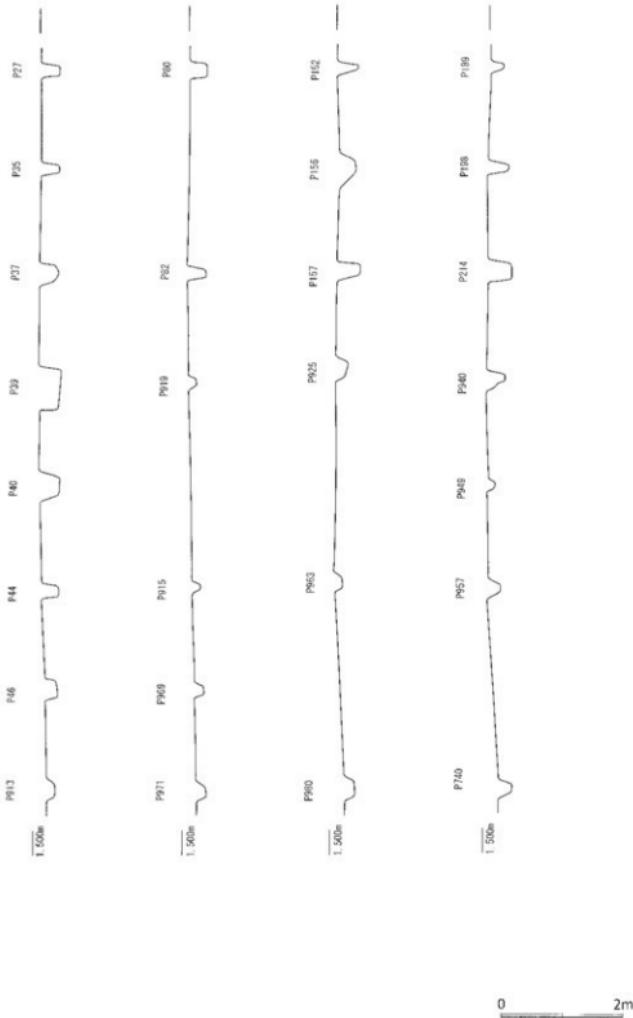
9区 墓73・74



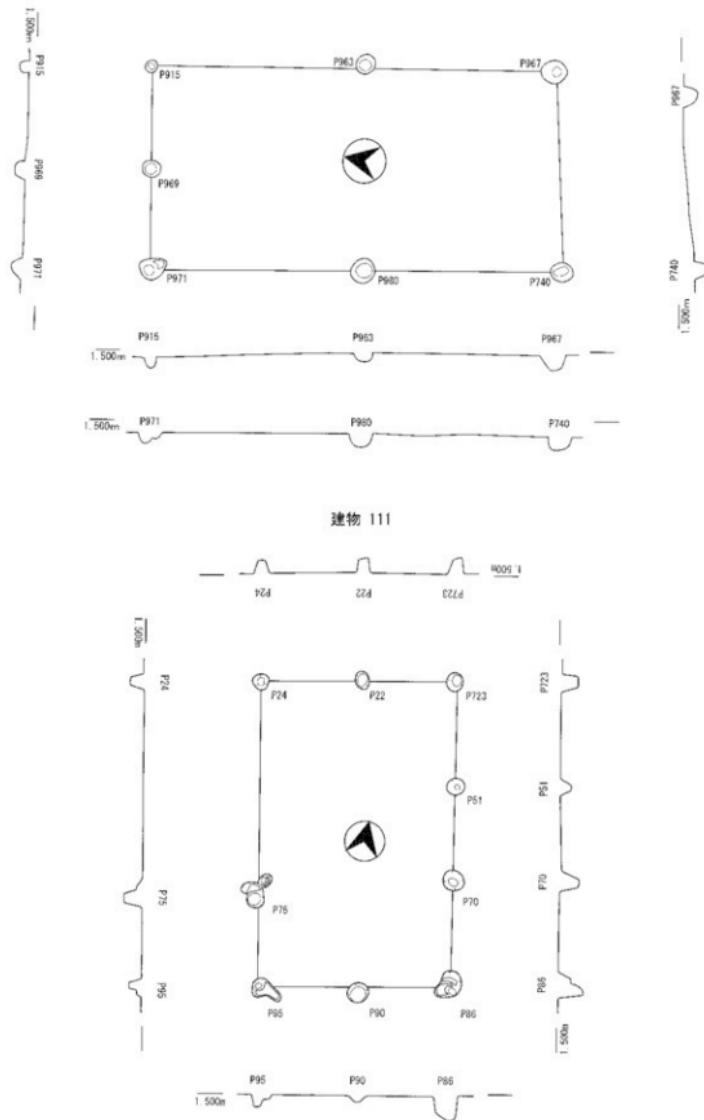
第 80 図 建物跡 109 実測図



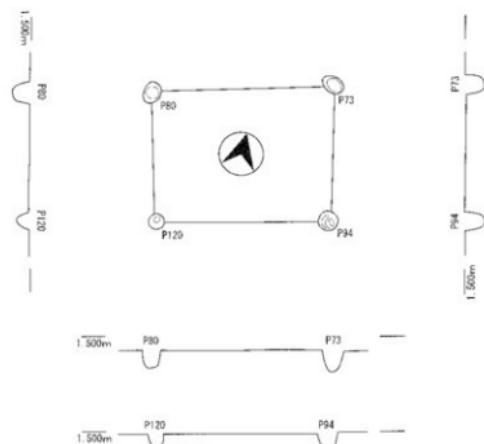
第 81 図 建物跡 110 実測図



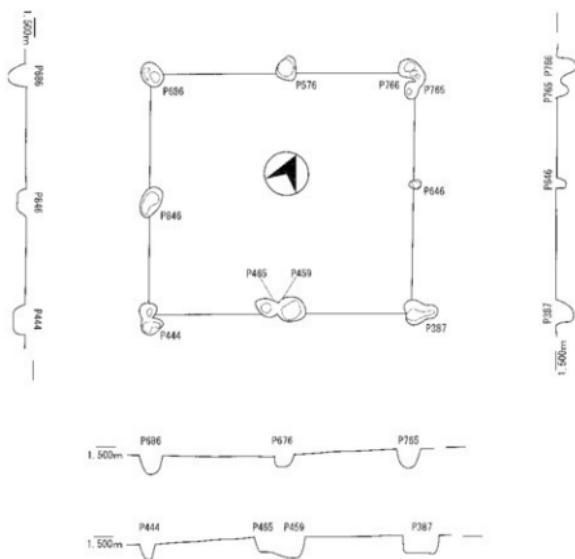
第 82 図 建物跡 110 柱穴断面図



第 83 図 建物跡 111・112 実測図



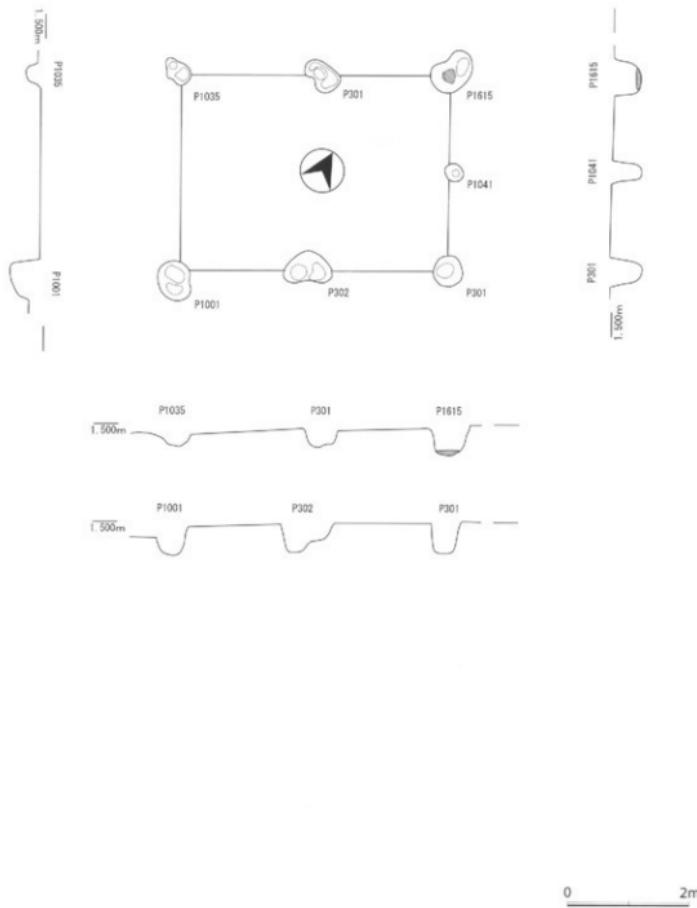
建物 113



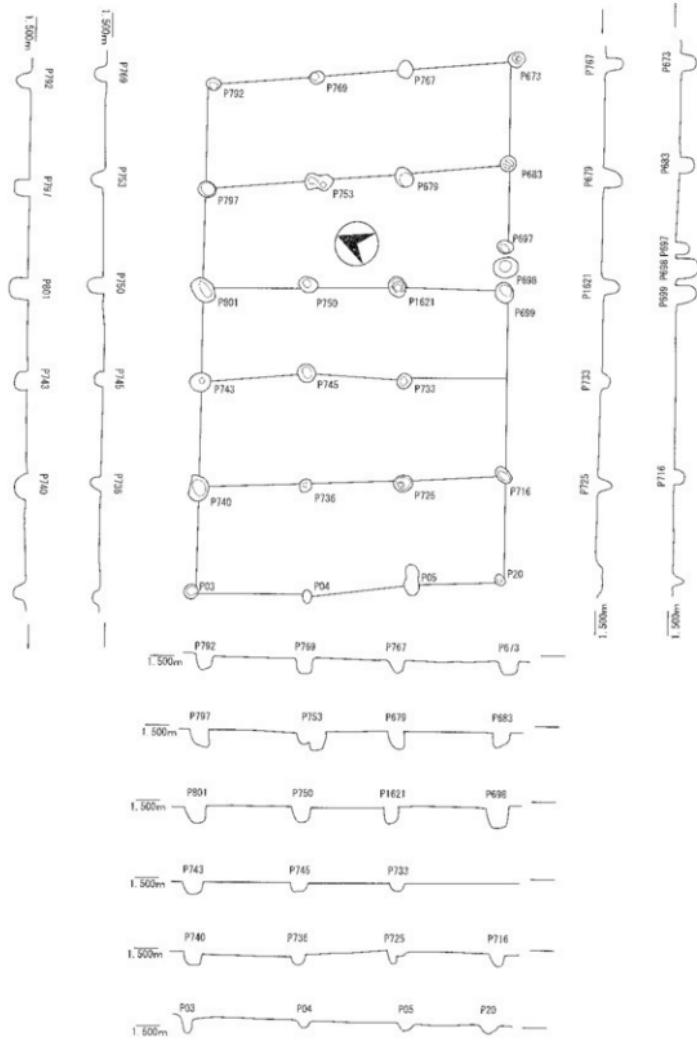
建物 114

0 2m

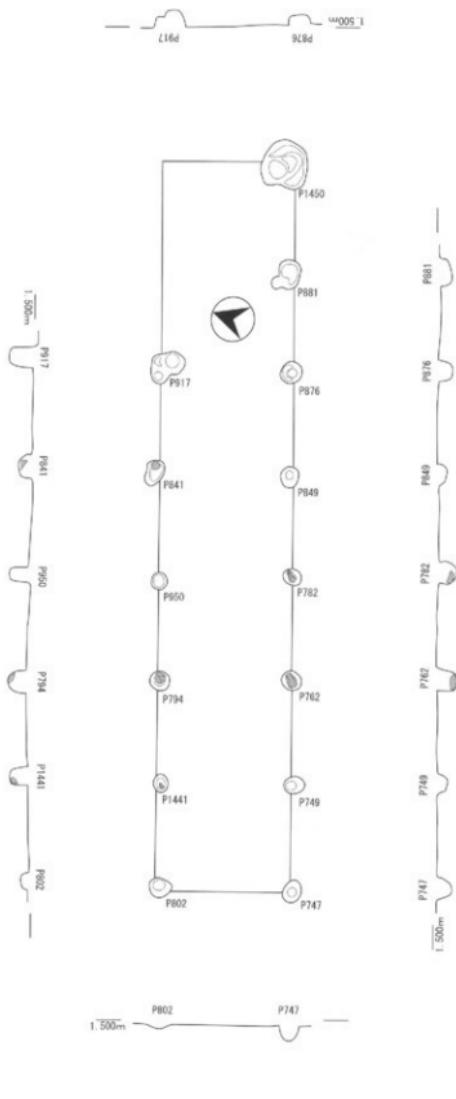
第 84 図 建物跡 113・114 実測図



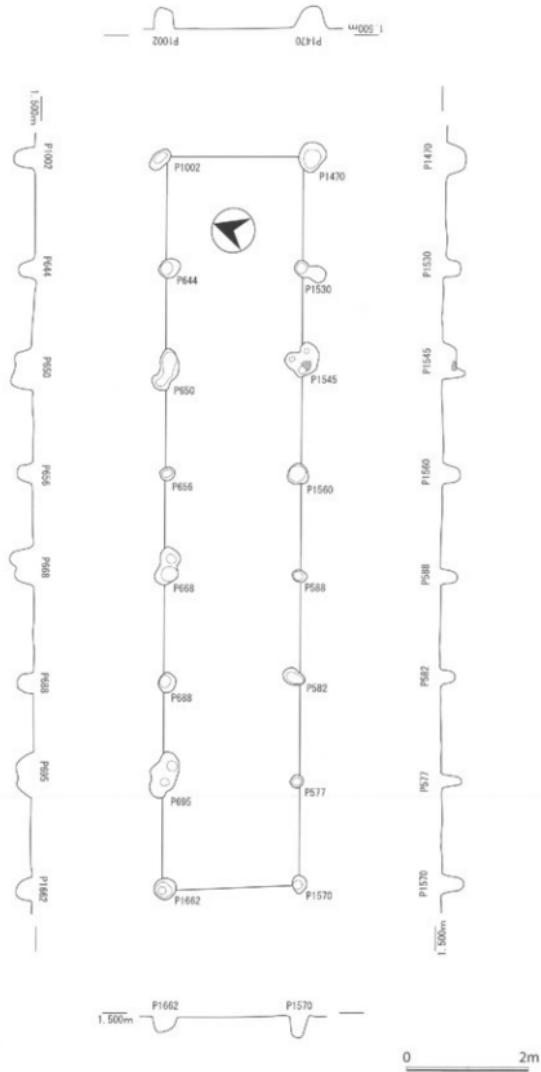
第 85 図 建物跡 115 実測図



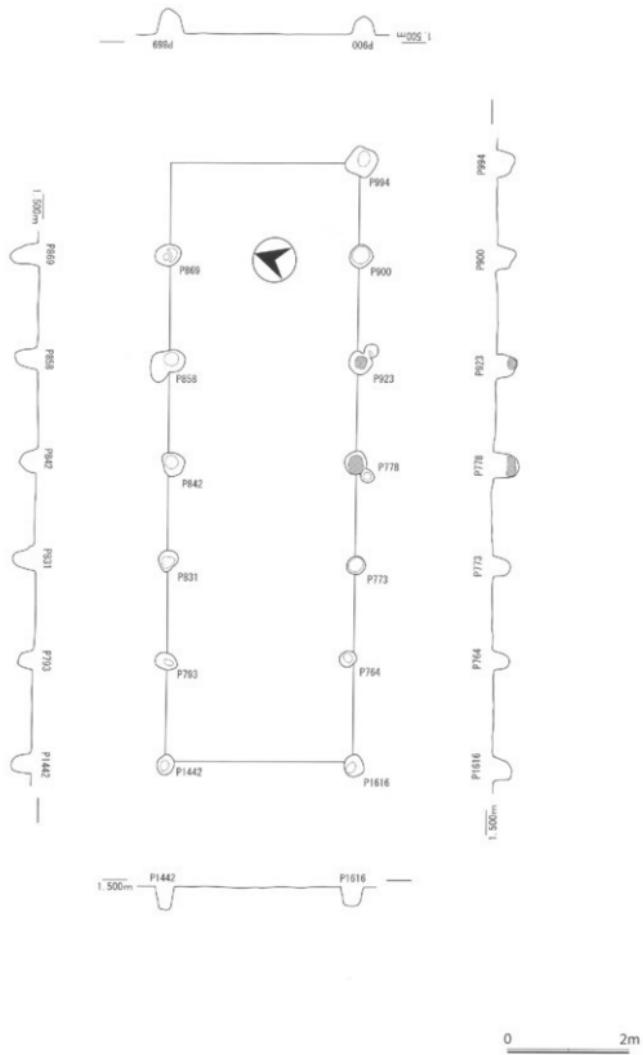
第 86 図 建物跡 116 実測図



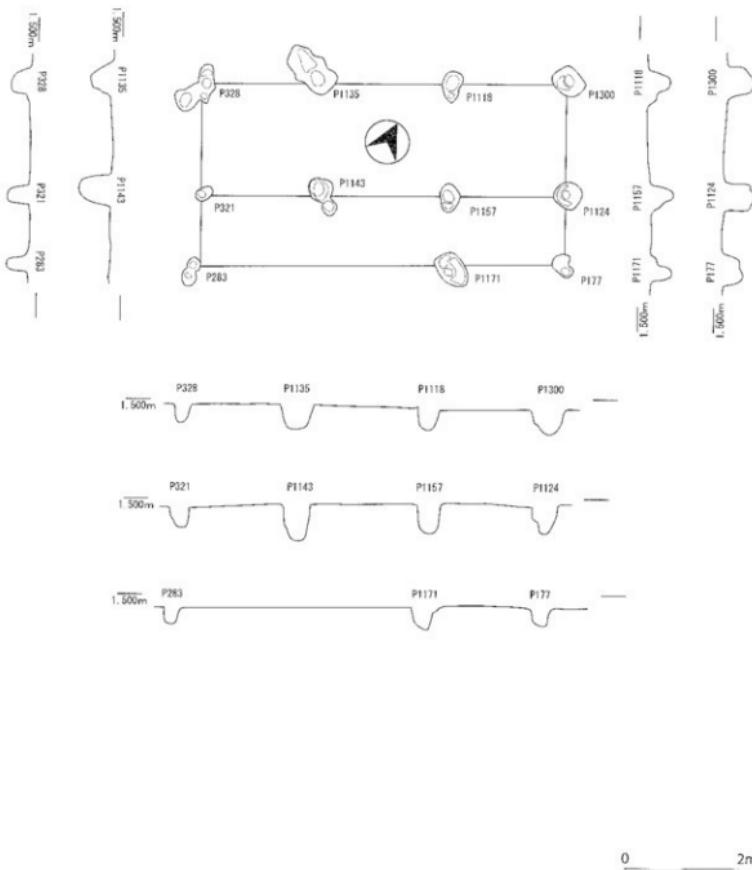
第 87 図 建物跡 117 実測図



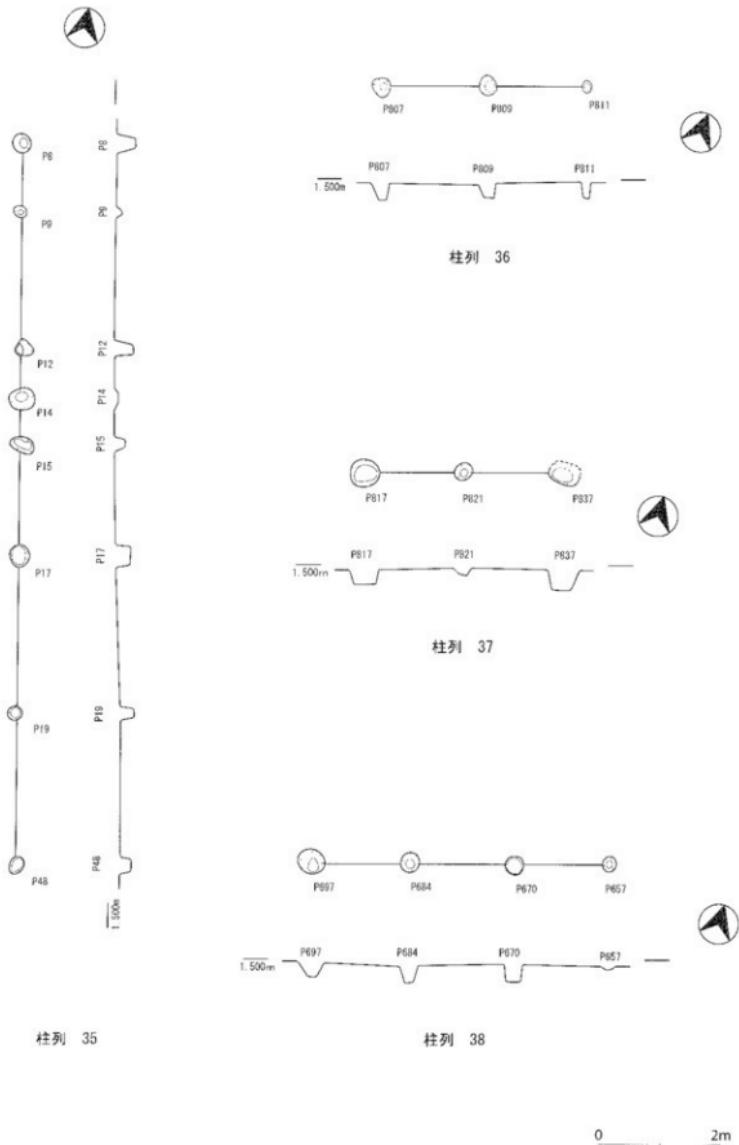
第88図 建物跡118実測図



第 89 図 建物跡 119 実測図



第90図 建物跡120実測図



第91図 柱列35～38実測図



第92図 石列7実測図

## 5) 井戸

### 井戸 11 (第 93・94 図)

9 区南東部、溝 40 の北側に位置している。上面では柱穴が検出されている。

木組方形縦板組横浅支柱型井戸である。井戸が埋められた跡に暗黒色土が堆積しており、さらに柱穴が掘り込まれている。

掘方は径約 2m の隅丸方形で、井戸の底面は遺構面からの深さ約 2m、標高は - 1.5m である。土壤の堆積状況は、遺構面の約 80cm 下で厚さ 20cm の黒色土に変わり、下層では、井戸の枠材の板などが出土した。さらに下層では暗緑灰色砂質土が堆積している。支柱は原位置をとどめている。

出土遺物は土師器の小片少量で、上部の埋土を掘り込んだ柱穴からも土師器の小片少量が出土しているが、時期を特定できない。

### 井戸 12 (第 95 図)

9 区南東部に位置している円形石積井戸である。北側の遺構や井側上部の石材は、溝 40 に切られていることにより、消滅している。

掘方は平面形が円形で、規模が径約 2.0m、井戸の深さは約 1.2m、底面の標高は約 0m である。

石材は内面が円形になるように垂直に日地を合わせて組まれていた。土壤の堆積は、遺構面の下 2.0m まで井戸上部の石材と裏込めの礫が詰め込まれていた。その石の一部は煤が付着している。その底部では、曲物枠と思われる木片が数点出土している。よって井側として、下部に組桶が据え付けられたと考えられる。

出土遺物は、図示していないが、東播系の鉢、白磁碗 IV 類の玉縁口縁の小片が出土している。裏込めの土からは遺物は出土していない。

構築時期は特定できないが、溝 40 が成立したと推定される 15 世紀頃以前に廃絶したと考えられる。

### 井戸 13 (第 96 図)

10 区西側中央部に位置し、溝状遺構 42 から約 2m 北、建物跡 118 の南東に位置する。

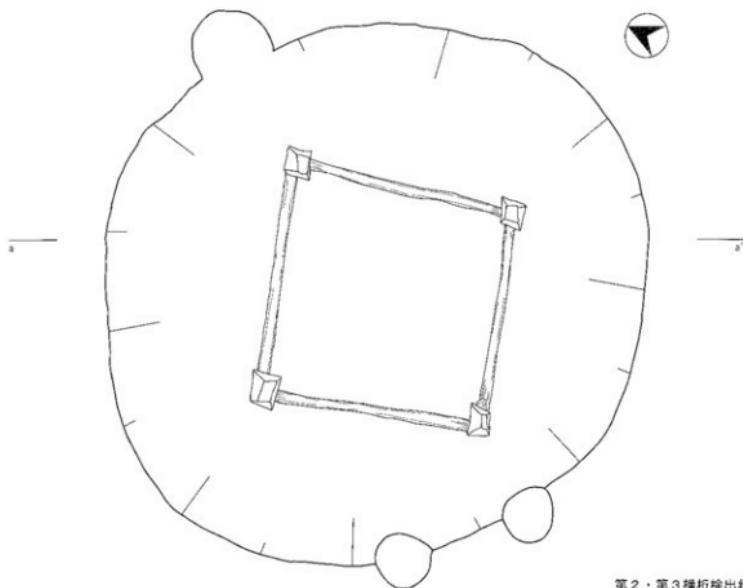
掘方は、ほぼ円形で、径約約 3m、深さは遺構面からの深さは 2.5m である。井戸の上面では、径約 2.5m の円状に大小の礫が破棄された状態で出土した。

方形縦板組隅横棟型井戸である。一辺約 1m の方形の井側を据える。底部を水平にした墨柱を立て、横棟を 2 段組み、各辺に 3 枚の大きな縦板を組み、縦間にさらに小さい縦板を立てている。検出状況では井側内は自然石が詰めて埋められていた。

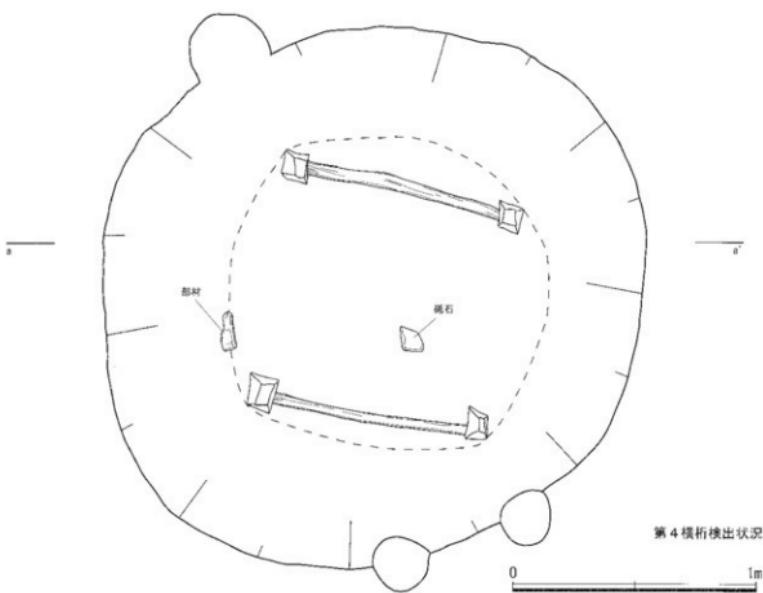
井戸の廃棄後に、廃棄土坑として使われたと考えられる。

出土遺物は第 104 図のとおりである。1 は土師器の壺の底部である。2 ~ 4 は瓦質土器の鉢である。5 は青磁碗 D 類。6 は褐釉陶器壺の体部である。7・8 は朝鮮王朝陶磁の象嵌青磁碗である。

9 は銭貨である。掘形の下部から出土している。この井戸の築造時に伴う祭祀行為の痕跡を残すものと判断される。

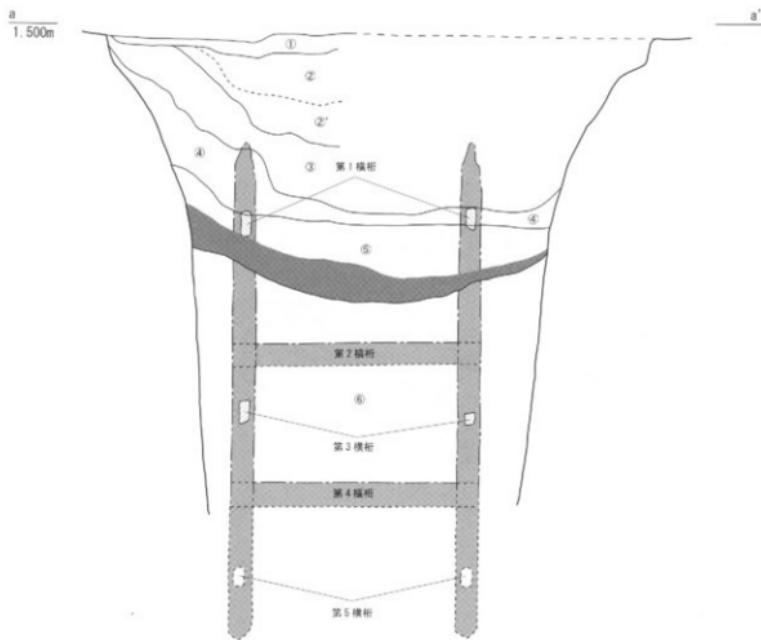


第2・第3横析検出状況

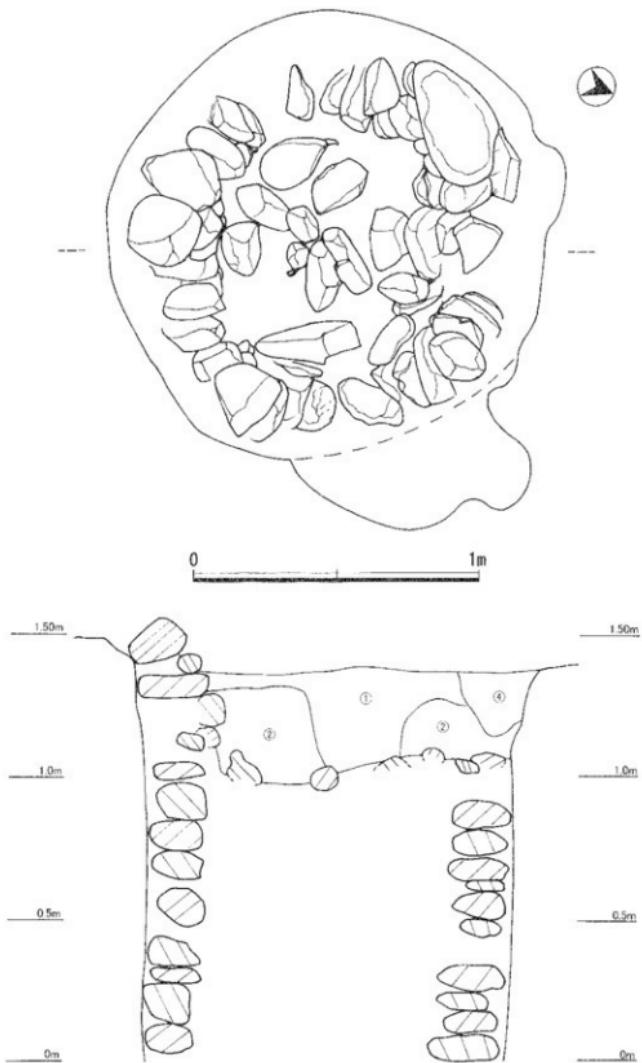


第4横析検出状況

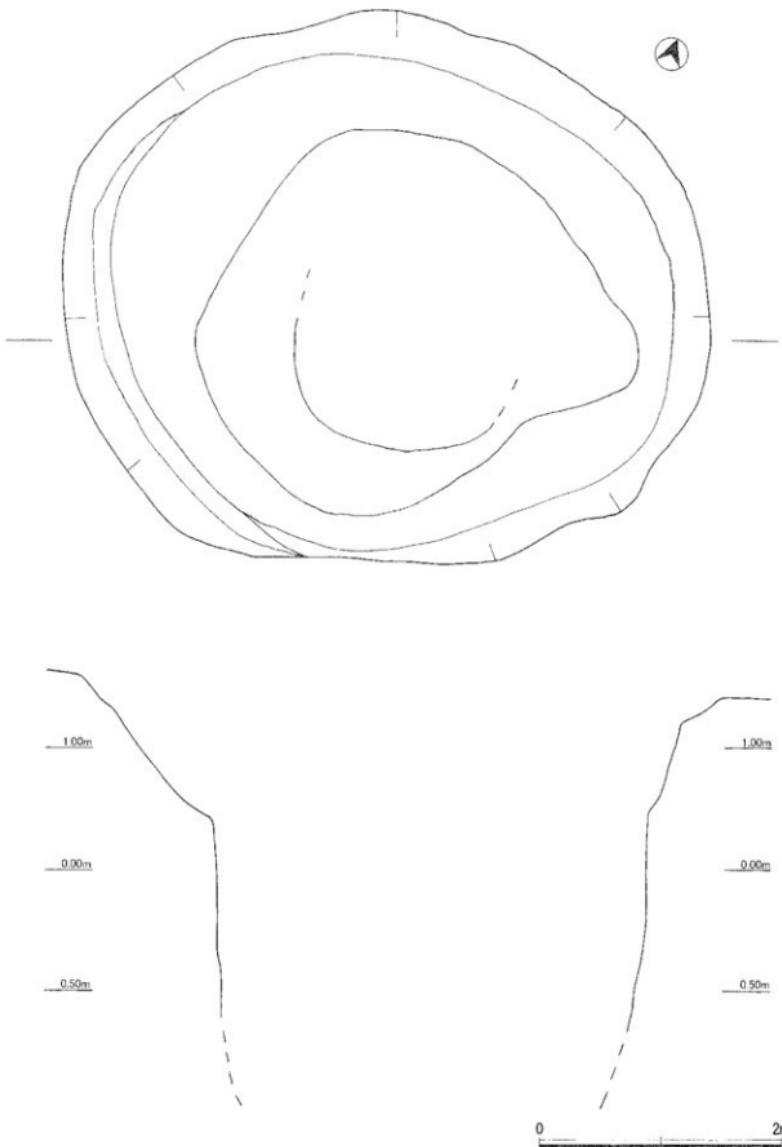
第93図 井戸11実測図



第94図 井戸11断面図



第95図 井戸12実測図



第96図 井戸13実測図

## 6) 墓

### 墓 68 (第 98 図)

9 区の中央部北側で、周囲の遺構から少し離れた位置関係をもつ火葬墓である。長辺約 105cm、短辺約 55cm、深さ約 20cm の墓壙内に火葬骨と焼土塊がまとまって検出された。土坑の壁は赤変し、南側は一部被熱していない箇所がある。検出面から深さ約 10cm 埋土のところから人骨を取り上げた。鑑定の結果、被葬者は壯年と鑑定されたが、性別は不明である。(遺構名 5SK01)

### 墓 69 (第 97 図)

9 区中央部南側で、石列 8 の南側に位置している。長辺 80cm、短辺 50cm の楕円形の土坑で、構造は平らな石 2 個と五輪塔の火輪の部材を用いて平らにし、その直上に骨が乗っておいたことから、遺体を埋置したものと考えられる。頭蓋と四肢骨等が確認され、下頸骨の位置から埋葬姿勢は仰臥と推測される。永久歯冠の形成状況から、幼児 (4 ~ 5 歳) と推定された。

出土した火輪の部材 (第 120 図 1) は、上面は風化し、下面は被熱している。(遺構名 5SK02)

### 墓 70 (第 98 図)

9 区中央部南側で、墓 69 の西側に位置している。長辺 130cm、短辺 85cm、深さ 30cm の墓壙内に、長方形の板を組み合わせて作られた箱型の木棺が安置され、長辺 90cm、短辺 45cm を測る。骨の残存量は少なく保存状態は悪い。埋葬姿勢は仰臥で、頭蓋、歯等北側で出土していることから北頭位である。人骨と歯の鑑定から、被葬者は女性と推定された。(遺構名 5SK03)

### 墓 71 (第 98 図)

9 区中央部南側で、石列 8 の南側、墓 69 の北側に位置している。

墓壙の範囲ははっきりとしないが、長辺約 114cm、短辺約 88cm の推定墓壙内に、副葬品と考えられる完形の土師器皿と人骨が出士した。北側には歯が出土しており、北頭位の埋葬で姿勢は仰臥、肘関節は左右とも強屈状態である。人骨は後世の擾乱により大部分が破壊されていたが、鑑定から被葬者は成人男性と推定された。(遺構名 5SK04)

### 墓 72 (第 99 図)

9 区中央部で、石列 8 の東側、長辺約 72cm、短辺約 57cm、深さ 60cm の墓壙内に、径約 23cm の桶棺が据え付けられている。埋葬姿勢は不明である。鑑定から年齢は 2 歳程度の幼児と推定された。

墓内には土師器皿が副葬されており (第 103 図 - 1)、出土遺物から、15 世紀後半頃の墓と考えられる。(遺構名 5SK06)

### 墓 73 (第 99 図)

9 区中央部で、墓 72 の東側に位置している。径は約 70cm の墓壙内に径約 45cm の小型の桶棺が埋置されている。人骨は、保存状態が悪く取上げられなかつたが、左右の大脳骨の位置から顔は北に向かっていたと推定された。性別は不明、老年であると鑑定された。(遺構名 5SK07)

### 墓 74 (第 100 図)

9 区中央部で、墓 73 の北側に位置している。長辺約 100cm、短辺約 65cm 墓壙内に小型の木

棺が埋置されている。上半身は材木部分に、下半身は網竹の中から人骨が出土した。埋葬姿勢は仰臥で、頭位は北側である。人骨の保存状態は著しく悪く、被葬者の性別、年齢は不明である。

下肢部分に銭貨が副葬されていた(第103図1～6)。1は洪武通寶である。初鑄年は1368年で、被熱している。(遺構名5SK08)

#### 墓75(第100図)

9区中央部に位置している。径約45cmの墓壙内に径約22cmの桶棺が埋置されている。(遺構名5SK09)

#### 墓76(第100図)

9区中央部で、径約70cmの墓壙に径約50cmの桶棺が埋置されていた。人骨が出土しているが、土壊化が著しく取上げられなかった。卒塔婆が桶底板を取り外した埋土直上西側、南側の2ヶ所から出土している。前者は出土状況から東ねてあったものと推定される。それぞれ「迷故三界(以下欠損)」、「悟故十(以下欠損)」、「本来無(以下欠損)」、「何處有(以下欠損)」と判読できる。後者は「□無東西何處有□」と判読できる(□は判読不明)。墓50出土の卒塔婆と同様にこれらは偈頌の文句で、「迷故三界城 悟故十方空 本来無東西 何處有南北」を書き記したものと考えられる。

#### 墓77(第100図)

9区南東部で、井戸13の西側に位置している。長辺約140cm、短辺約85cm、深さ35cmの楕円形の土坑で、周辺のピット群を掘り込んで造られている。覆土の黒褐色土の中に、人骨の小片と銭貨がまとまって出土した(第103図-8・9)。9は不明である。

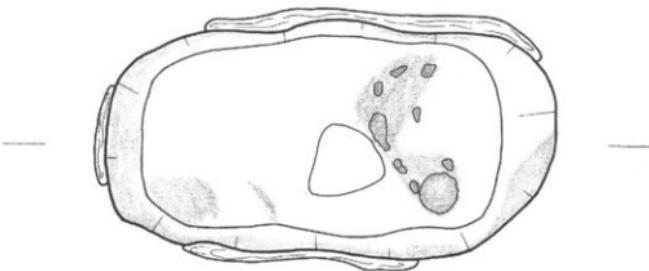
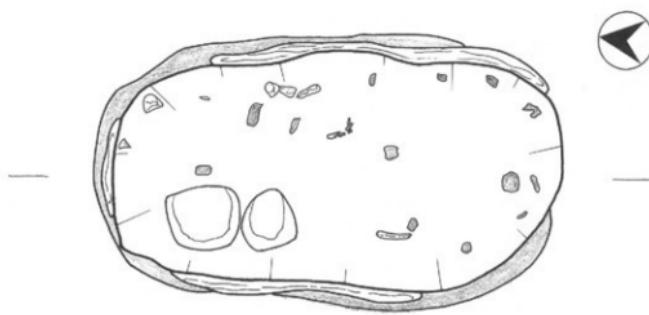
### 7) その他の遺構

#### SK14(第102図)

長辺約200cm、短辺約150cmの大形の土坑である。詳細は不明である。

#### SK15(第102図)

小型の土坑である。詳細は不明である。

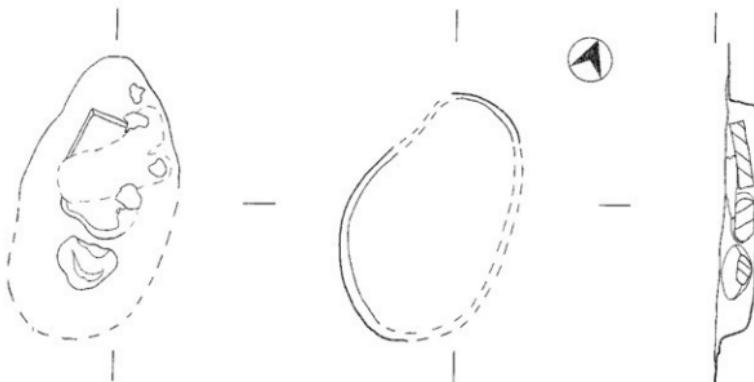


140m

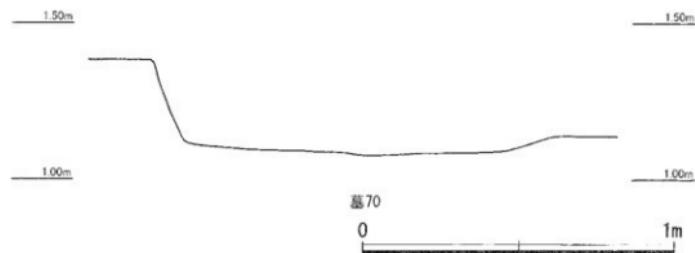
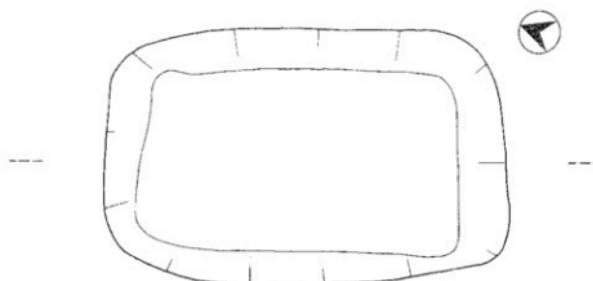


0 1m

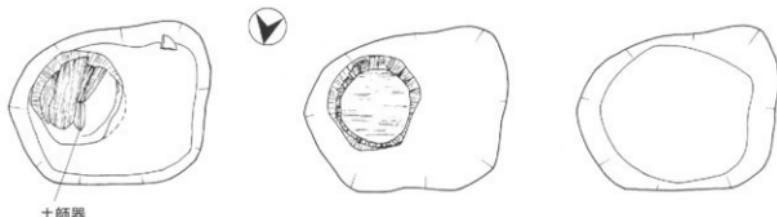
第97図 墓68実測図



墓69



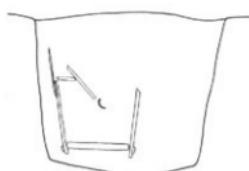
第98図 墓69・70実測図



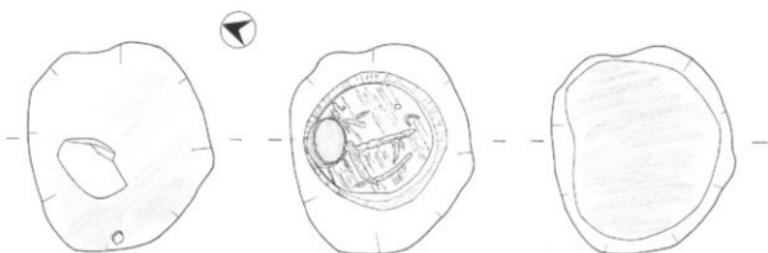
土器器

1.50m

1.50m



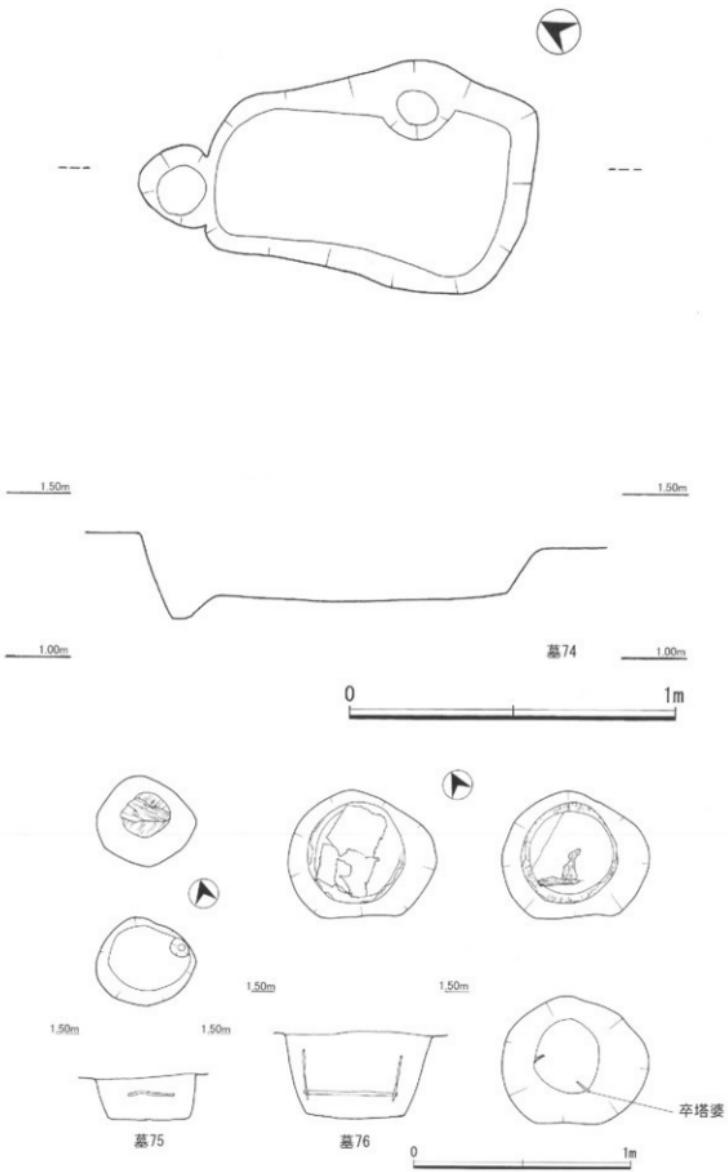
墓72



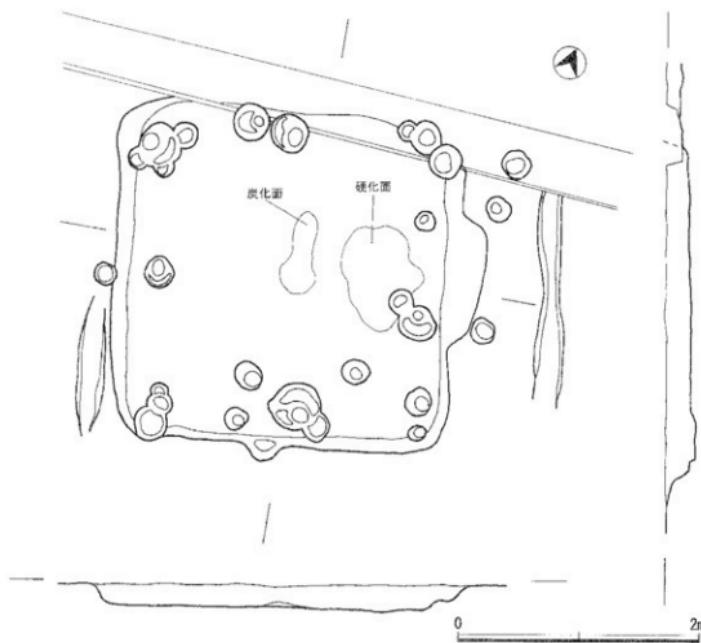
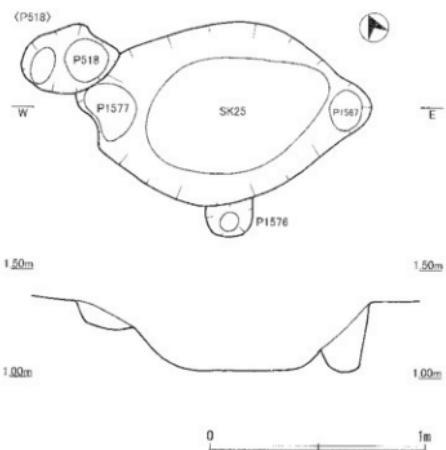
墓73

0 1m

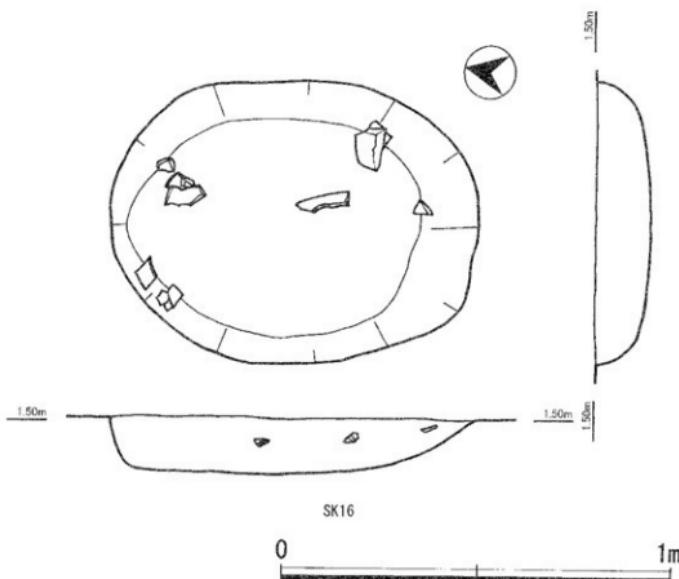
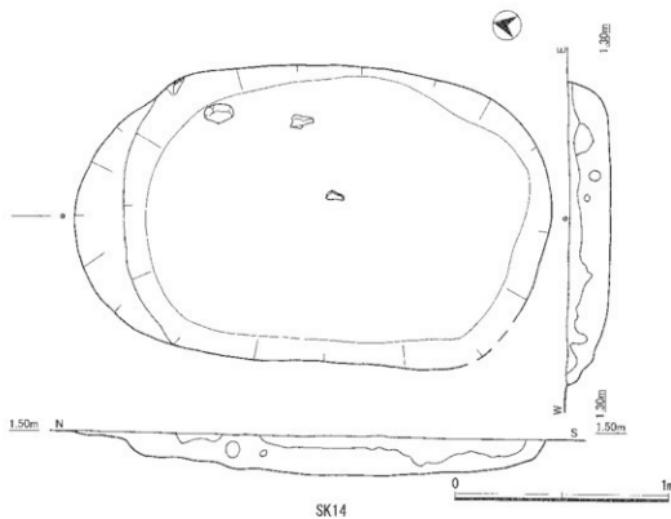
第99図 墓72・73実測



第100図 墓74～76実測図



第101図 墓77・竪穴建物実測図



第102図 その他の造構実測図

## 8) 遺構に伴う遺物

### 土師器（第108図）

1・2は土師器の皿である。同一柱穴から重なって出土している。3は青磁碗D類の口縁部、4は褐釉陶器壺の底部である。5は須恵器の高壺の頭部である。6は土師器皿の完形品、7は土師器壺で内面に漆が全面に付着している。8・9は土師器の皿の完形品である。10は土師器の内面に炭化物が付着している。11は瓦質土器摺鉢の底部である。

### 瓦質土器（第109図）

1・2は防長系瓦質土器の鍋で、1は口縁部が短いタイプ、2は口縁部が1より拡張するタイプである。3は瓦質土器の摺鉢である。口縁端部はやや丸みを帯びている。内面は斜めから縱方向のハケメが密に施され、そこに摺目が入れられている。14世紀代のものと考えられる。4は口縁端部に丸みをもっている。

5・6・7は火鉢である。5は深鉢形で、口縁端部からやや下がった位置に突帶が付けられ、その下に花形のスタンプ文が施されている。6は、連続菱形文が施されている。7は底部で、足が付く可能性がある。

### 国産陶器（第110図）

1は鉢である。2は備前の摺鉢、3は陶器壺の底部である。产地は不明である。4は備前の四耳壺で室町時代のものである。5は大型壺の体部であるが产地不明である。内外面にハケ調整を施す。6は瀬戸の丸皿である。

### 貿易陶磁器・その他（第111図）

1・2は白磁、口禿げのB類である。3～5は青磁の碗で、3は龍泉窯系碗で鎬蓮弁を施すB1類である。4・5はD類である。6・7は青花で碗C群である。8、9は朝鮮王朝陶磁で、印刻文様に白土を埋め込むなどした象嵌が施されている。8は粉青沙器で、9は象嵌青磁である。10は滑石製石鍋である。11は鉄劍である。長さは約30cmを測る。

## 9) 遺構に伴わない遺物

### 須恵器・土師器（第112図）

1～5は須恵器である。1は壺の口縁部、2は長頸壺の高台部、3は壺の高台部である。4・5は壺の体部である。6は土師器の壺の底部で、内面にタール状のものが見られる。

7・8は細長いタイプの土鍤である。

### 瓦質土器（第113図）

1は瓦質土器鍋の口縁部である。2は足鍋の脚部、3・4は鉢である。5は風炉、円孔されている。6は火鉢で、口縁部には「I」字状の刺突文が施され、体部には沈線が巡っている。7・8は茶釜である。9・10は火鉢である。

### 国産陶器①（第114図）

1は東播系須恵器鉢の口縁部である。2は越前系の摺鉢で、ハケ目調整後摺目を施す。3は危山系か、格子が施されている。4は陶器壺の底部で自然釉がかかり、内面は板状工具によるナデを施す。5は備前の摺鉢の口縁部、6は備前系陶器の摺鉢で、外底部まで白灰色の自然釉がかかる。7は備前の徳利の口縁部、8は備前の壺の口縁部で玉縁状である。

9は壺の体部で、内外面ともにハケ調整で、産地は不明である。

#### 国産陶器②（第115図）

1～3は瀬戸である。1は碗、2は鉢の底部、3はおろし皿である。4、5は常滑系壺の口縁部である。

#### 朝鮮王朝陶磁（第116図）

1～5は碗である。施釉陶器である。

6は硯である。7～11は錢貨である。

#### 白磁・青白磁（第117図）

1、3、4は碗IV類。2、5は碗V類である。7、8は皿、9は皿の高台部、10、11は皿類である。12、13、14は水注もしくは四耳壺の体部で、15は高台である。16は青白磁の蓋、17は青白磁合子の身、18は体部である。

#### 青磁（第118図）

1～9、11～14は龍泉窯系青磁碗である。1は細描きの蓮弁文、2、3は雷文を施す碗である。5、6、7は碗D類、8は碗I類である。10は同安窯系皿で、見込みに櫛描文を施す。11は皿で体部にヘラ描き文様があり、12は輪花状の口縁部をもつ盤である。13は小壺である。14は盤の底部である。

#### 青花（第118図）

15は碗の高台部である。

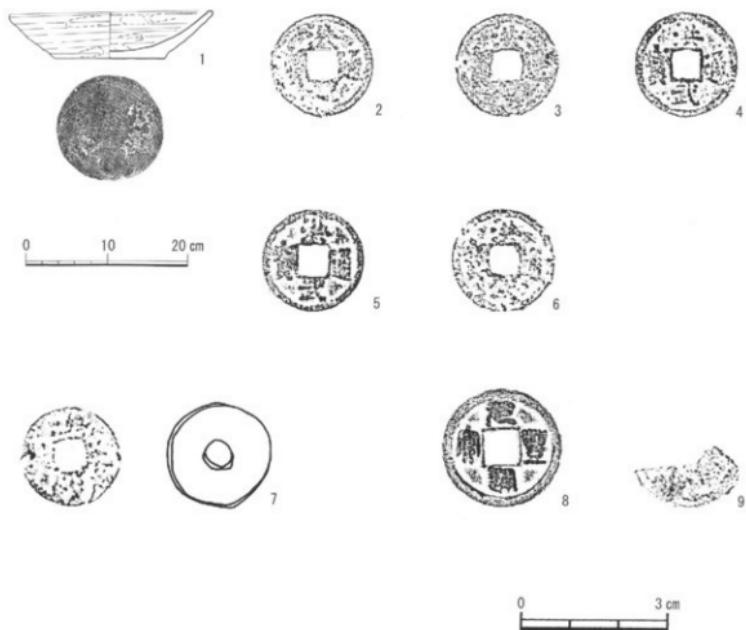
#### 中国陶器（第118図）

16、17は鉢である。18は口縁部をつまみ出す短頸壺。19は壺の底部、20は四耳壺の底部か。21は天目茶碗の体部と思われる。

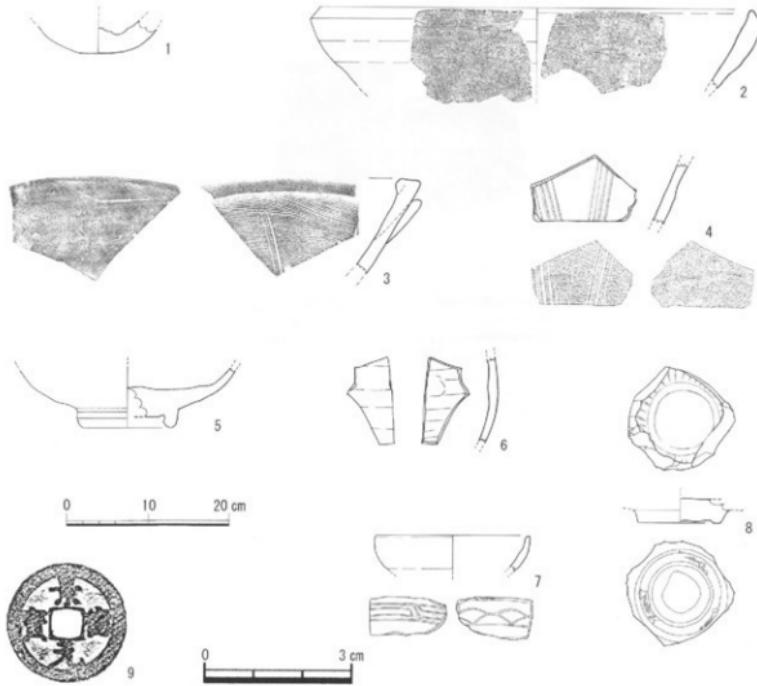
#### その他（第118・119図）

第119図1は手水鉢である。2は臼である。3は茶臼である。

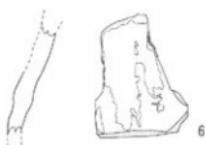
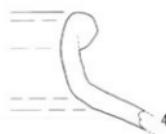
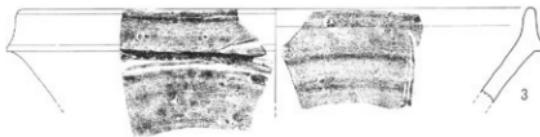
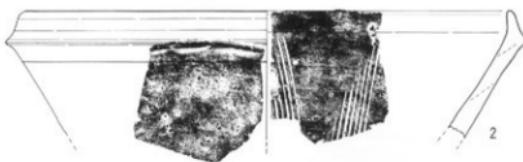
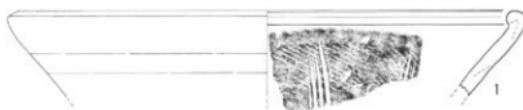
第120図1～3は五輪塔の部材である。いずれも砂岩質の石材である。盤状の工具痕が顕著にみられる。1は火輪で上部は風化し欠損している。2は水輪、3は地輪である。側面は非常に研磨されている。砥石として再利用されたのであろう。



第 103 図 墓 72・74・75・76 出土遺物実測図

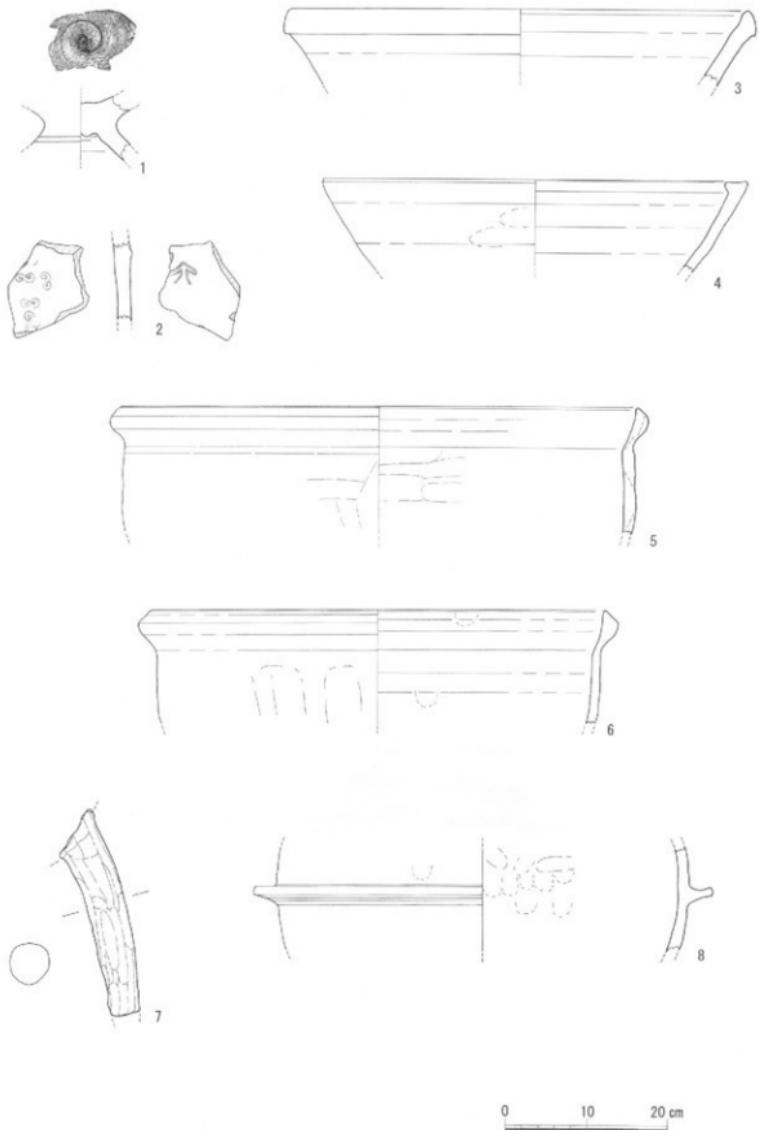


第104図 井戸13出土遺物実測図

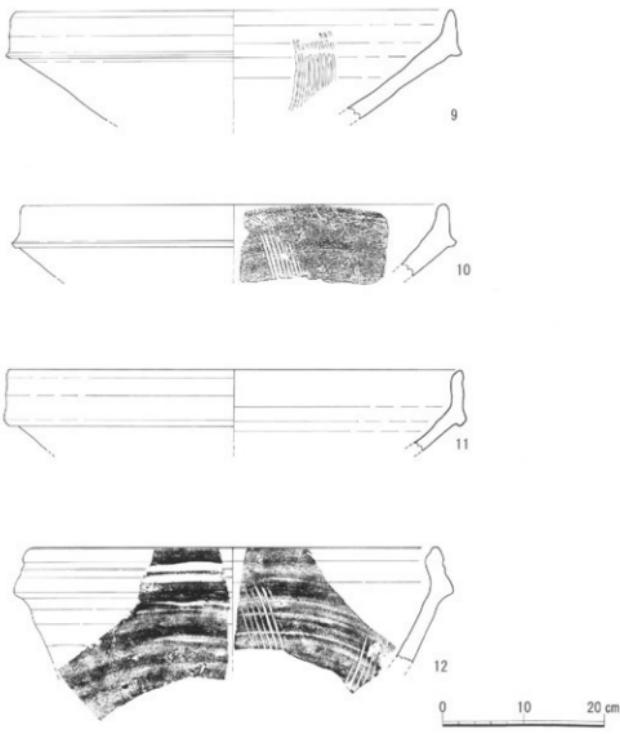


0 10 20 cm

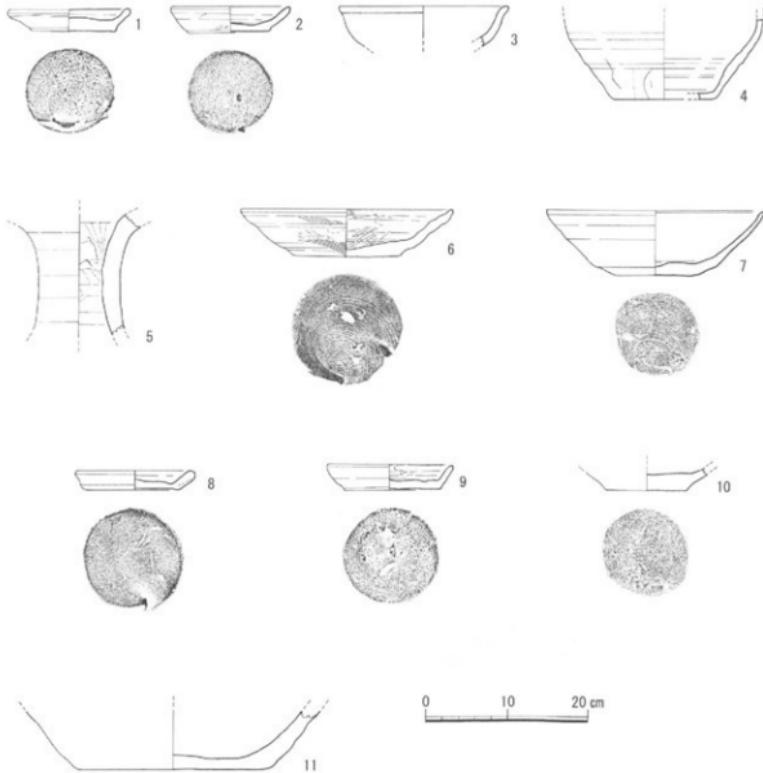
第105図 9区西侧石列7出土遺物実測図



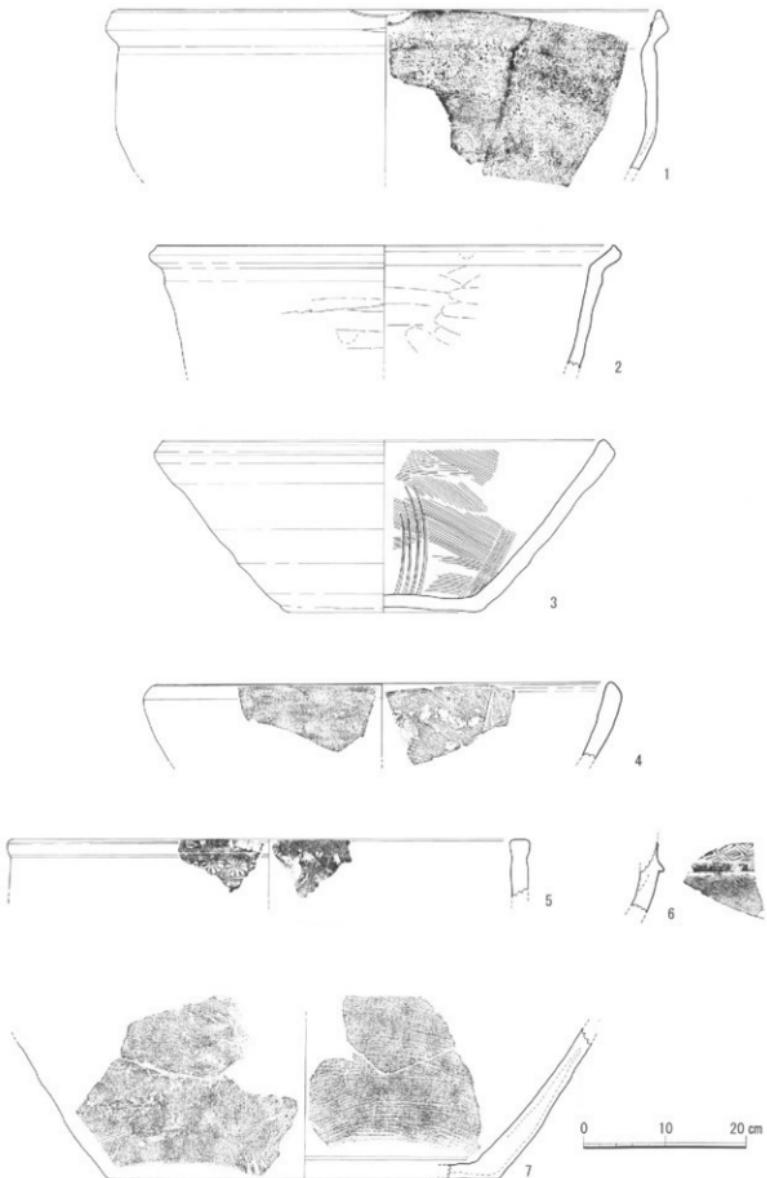
第106図 10区西侧石列8出土遺物①実測図



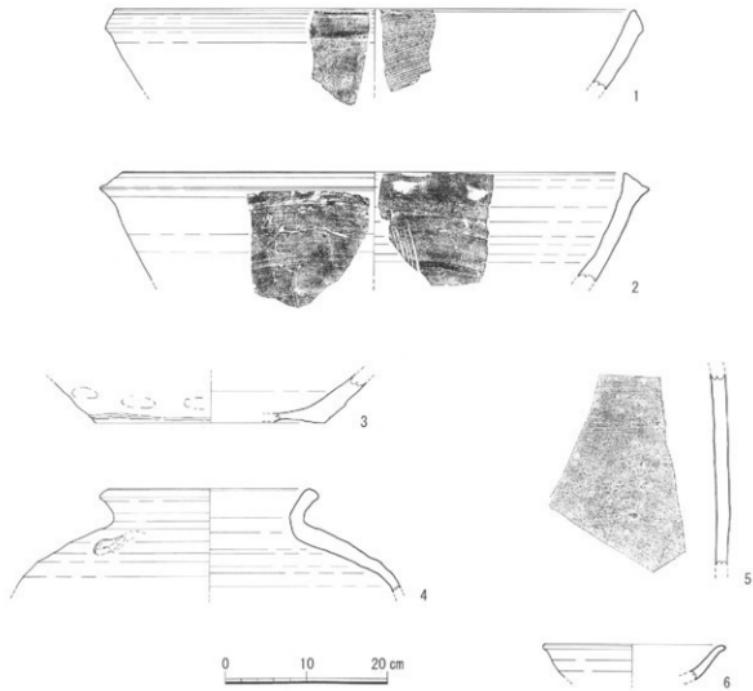
第107図 10区西側石列8出土遺物②実測図



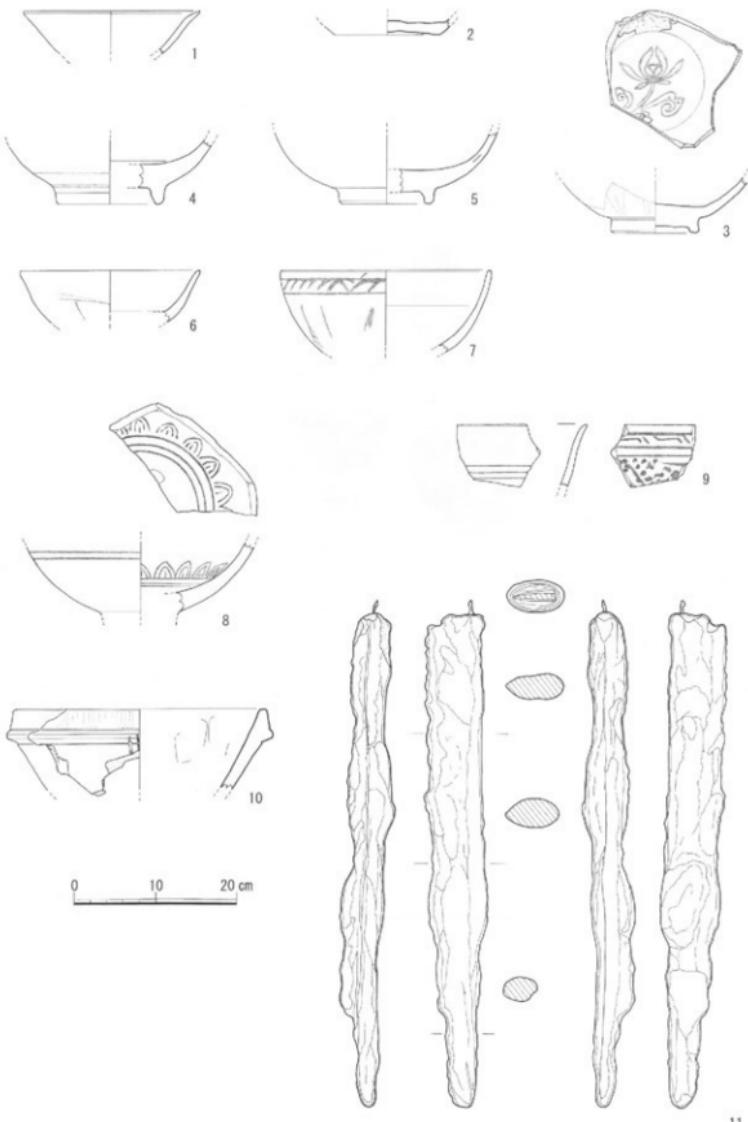
第 108 図 9・10 区西側遺構出土遺物実測図



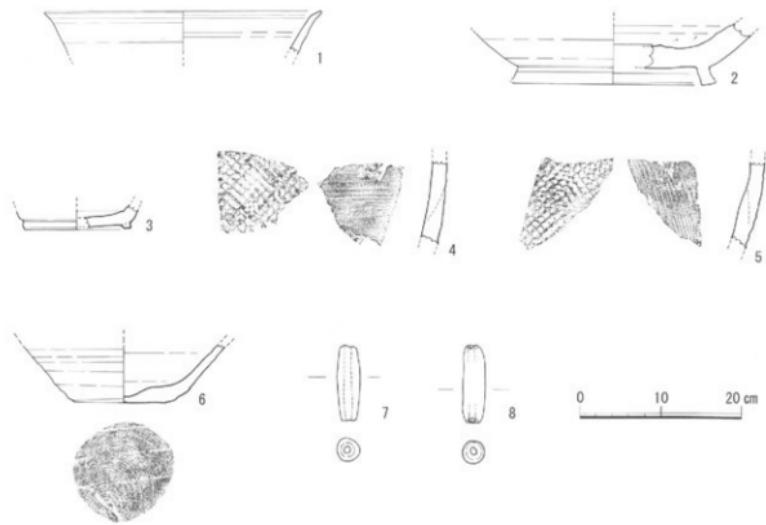
第109図 遺構出土遺物（瓦質土器）実測図



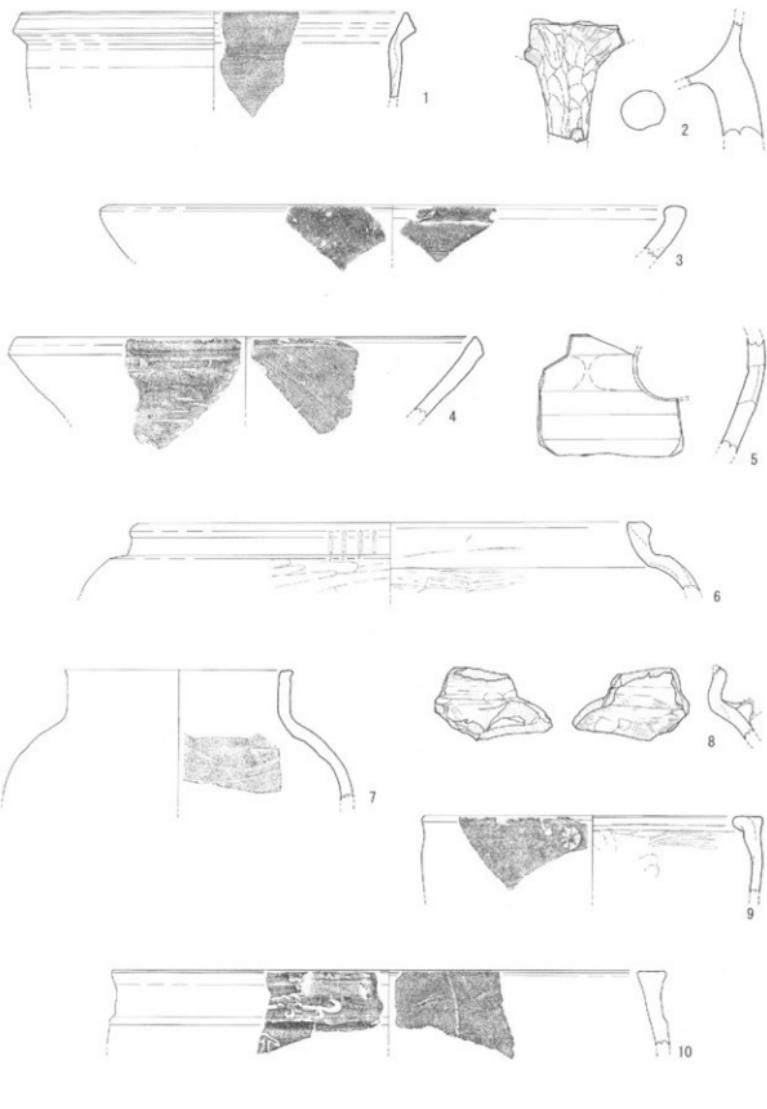
第110図 遺構出土遺物（国産陶器）実測図



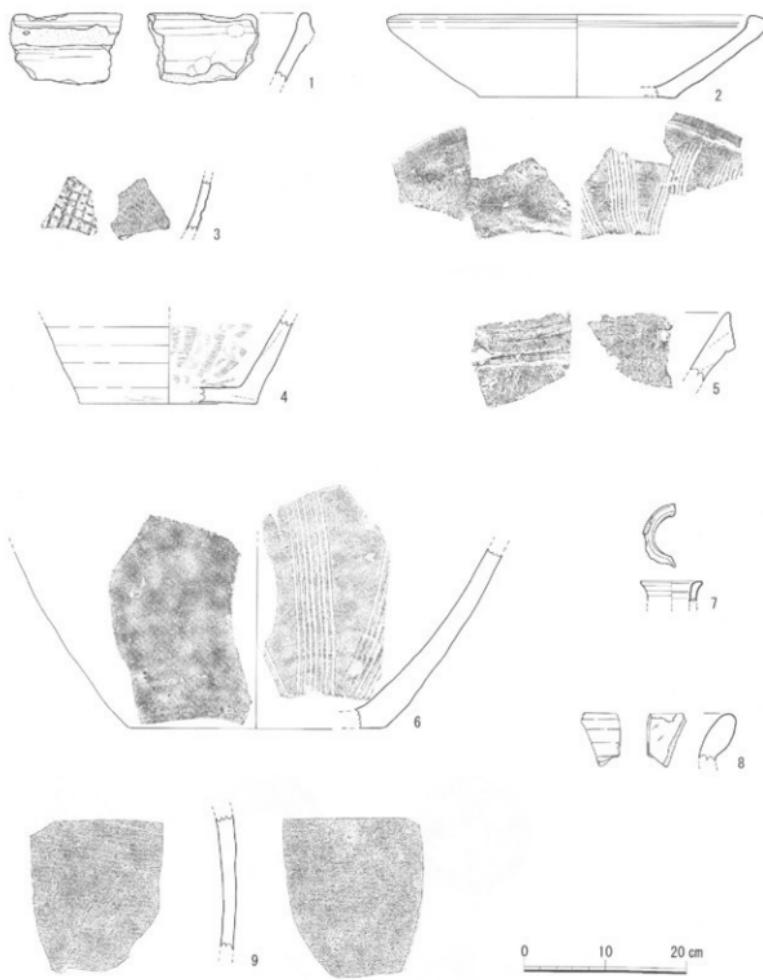
第 111 図 遺構出土遺物（貿易陶磁・その他）実測図



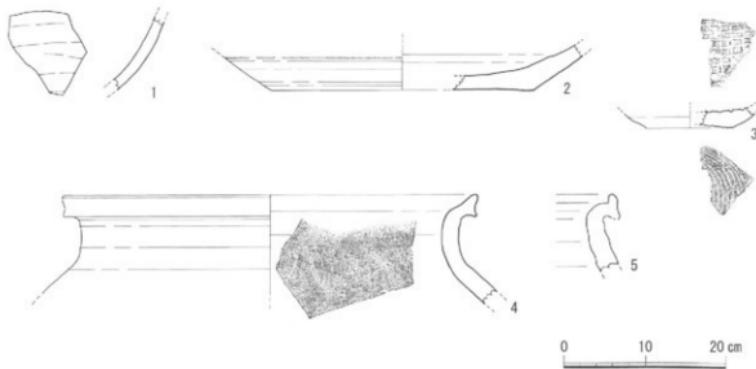
第 112 図 包含層出土遺物（須恵器・土師器）実測図



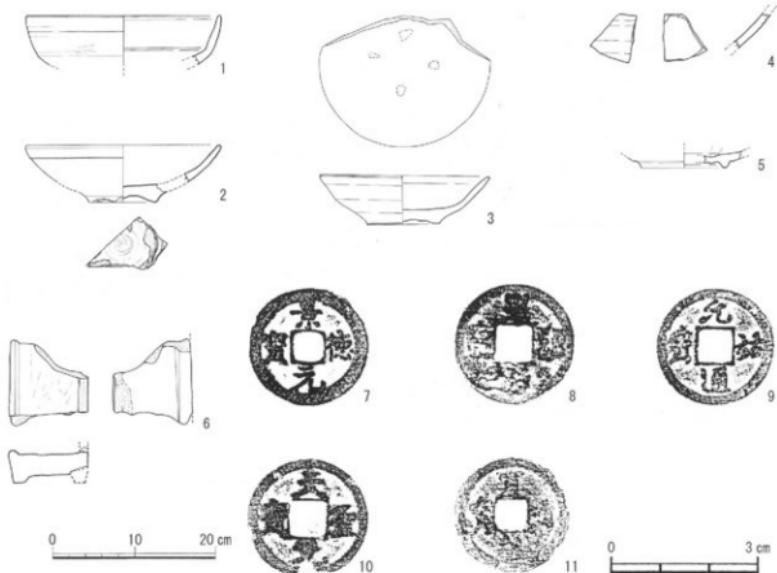
第 113 図 包含層出土遺物（瓦質土器）実測図



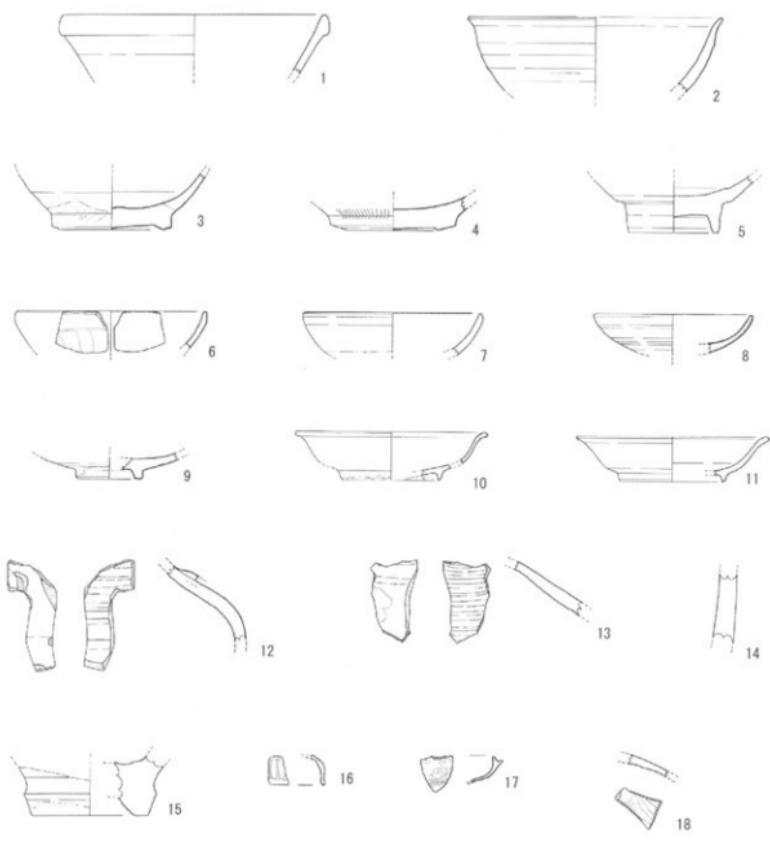
第114図 包含層出土遺物（国産陶器①）実測図



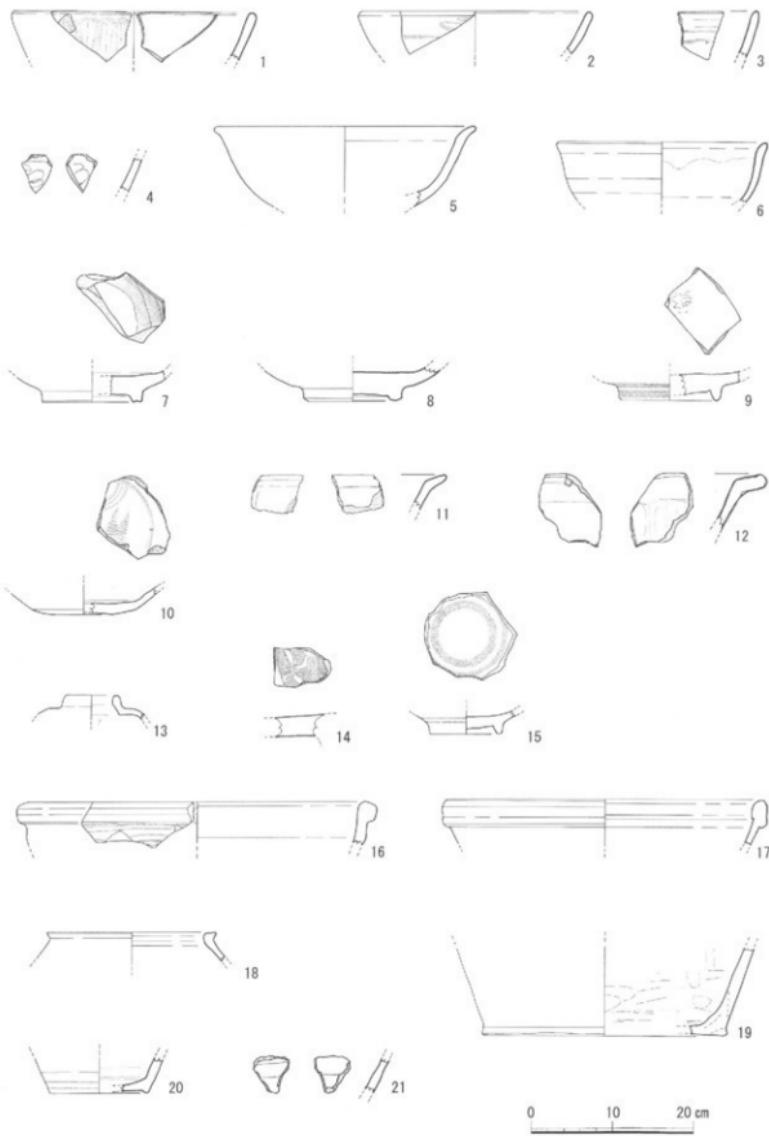
第115図 包含層出土遺物（国産陶器②）実測図



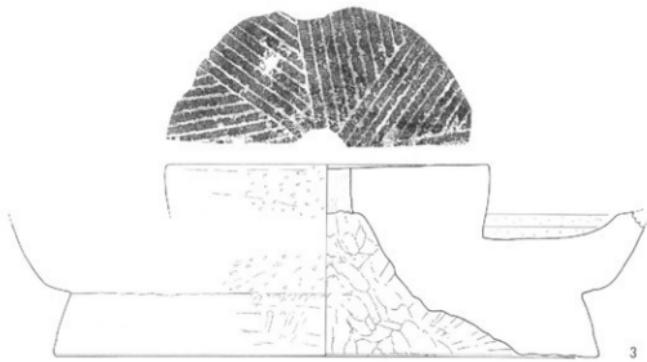
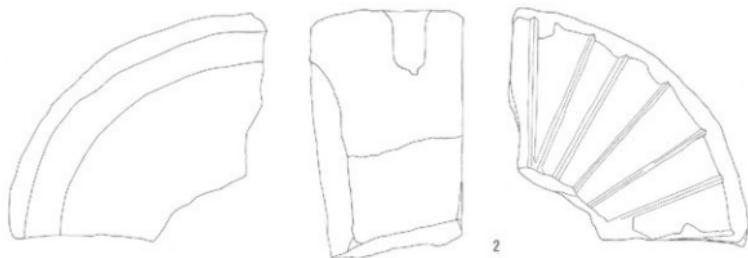
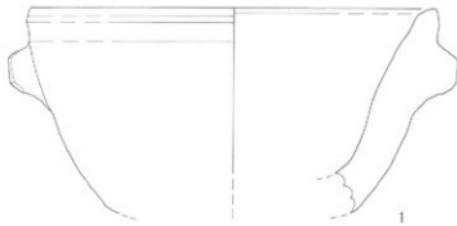
第116図 包含層出土遺物（朝鮮王朝陶磁器・その他）実測図



第117図 包含層出土遺物（貿易陶磁器①）実測図

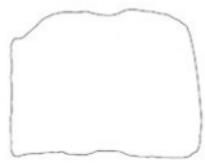
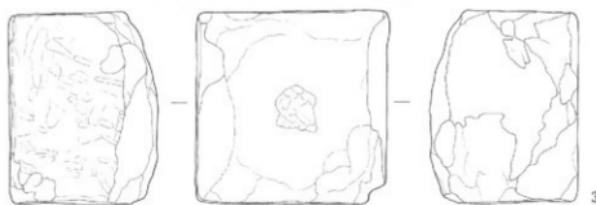
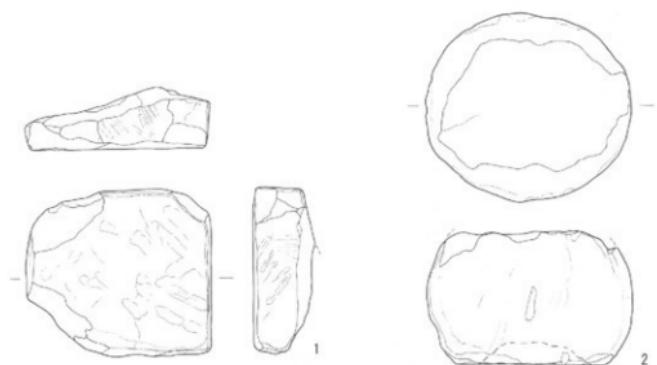


第118図 包含層出土遺物（貿易陶磁器②）実測図



0 10 20 cm

第119図 石製品①実測図



0 10 20 cm

第120図 石製品②実測図

## 4. 10区東側の調査

### (1) 遺構の分布状況

遺構として、掘立柱建物跡、柱列、墓、井戸、溝状遺構、鋳造遺構などを検出した。前述したように、現水田地割によって設定した10区を、落ち込みラインにより西側と東側に分けて記述することとする。

### (2) 遺構とその伴出遺物

#### 1) 掘立柱建物跡

##### 建物 121 (第 122 図)

10区東側の中央部に位置している。1間（1.5m）×4間（8.3m）の掘立柱建物である。南北両側に雨垂溝と考えられる溝を検出した。

この建物を構成するほぼ全てのピットから、溶解炉の炉壁片や羽口片が出土している。

##### 建物 122 (第 123 図)

建物 121 の東側に位置している。1間（2.9m）×1間（3.6m）の掘立柱建物である。

鋳造関連遺物が集中して出土した SX04 を囲んでいる。

SX04 は、SK01 との位置関係から、溶解炉が設置された箇所または作業場と考えられ、それに付随する簡易な建物と考えられる。ピットからは土師器の小片が出土している。

##### 溝状遺構 (第 122 図)

建物 121 の南北側に位置する溝で、前述したとおり、雨垂れ溝と考えられる。この中には滓が出土している。詰まっている状態ではなく、意図的に入れられたとも感じられない。破棄したときのものと考えられる。

##### 柱列 39 ~ 43 (第 124 図)

建物 121 の南東側に位置する柱列群である。いずれも建物 121、溝状遺構と平行、あるいは直交する位置関係であることから、これらに関連する柱列と考えられる。

#### 2) 井戸

##### 井戸 14 (第 126 図)

10区東側の北壁側で検出された素掘りの井戸である。平面は円形で、約 1m の深さで出土した礫は煤が付着していた。さらに礫や埋土を除去すると、深さ 1.4m のほぼ中央部で竹が出土している。水神の息抜きのための祭祀跡と考えられる。

水が激しく湧き出したため、調査を終了した。北壁側は調査をしていない。

##### 井戸 15 (第 126 図)

10区東側の北壁側、井戸 14 の東で検出された方形隅柱縦板型の井戸である。掘り方の平面はほぼ円形で、その一部は調査区外である。

深さは不明であるが、埋められた井側内部に被熱石がぎっしりと埋められ、方形井側と判断し、調査区内の可能な範囲で遺構掘削を行った。よって北壁側は調査をしていない。

出土遺物は、備前の擂鉢の口縁部 (第 128 図 - 3) で、IV B - 2 期のものである。土錐 (第

128 図 - 4) が出土している。

### 3) 墓

#### 墓 78 (第 127 図)

方形木棺墓である。墓の埋土に鉄滓、炉壁の小片が含まれていることから、操業時以降に造られたものと考えられる。

歯が出土していることから北東方向の埋葬と考えられる。土師器皿 2 点 (第 128 図 - 1・2) が重ねられて副葬されている。鑑定から 2 ~ 3 歳の幼児の墓と考えられる。

### 4) その他の遺構

#### 鋳造関連遺構

10 区東側の東端で、被熱し硬くしまった箇所を検出し、その周辺の土坑や溝から鋳型片や溶解炉壁等の鋳造関連遺物が出土した。

#### SX04

長辺約 4m、短辺約 2m の範囲に鋳型片や溶解炉壁が出土している。

そしてこれらを囲むかたちで建物 122 がつくられている。

調査は、遺構を 25cm 方眼で北西から東へ 1a、1b、1c …、を設定し、土袋袋にて遺物を取り上げた。そして、洗浄、ふるいを試みた。

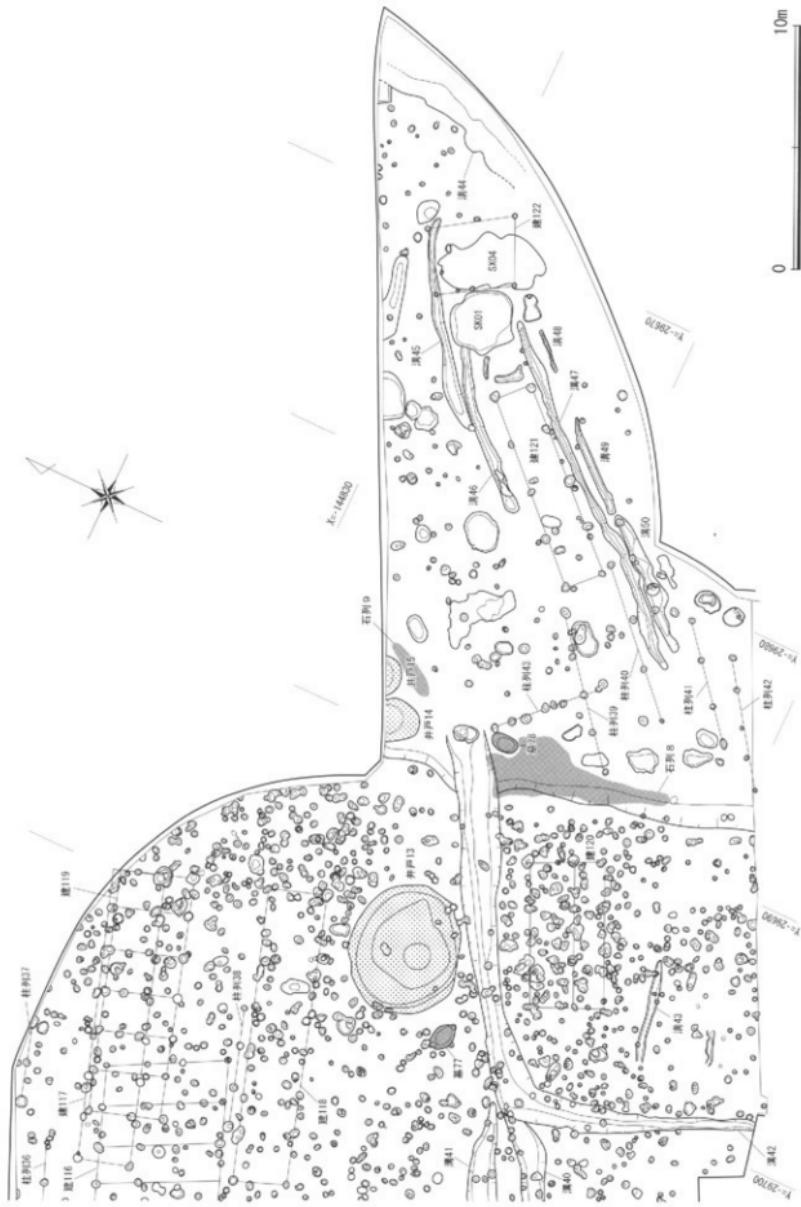
検出当初は、土坑に破棄されたものと考えたが、取り上げた底面全体に粘土を検出し、さらに北西側はぎっしりと詰められた様子であった。

調査の結果、溶解炉を据えるために造られた遺構であると考えられた。上部は削られて失われている。

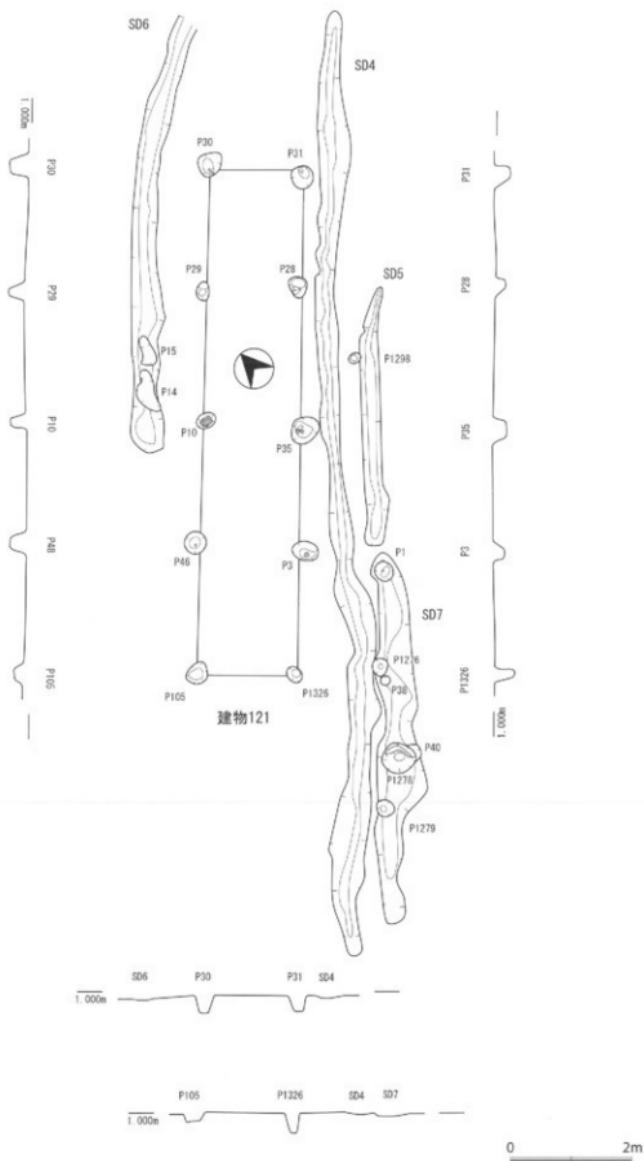
#### SK01

径が約 2.5m、深さ約 30cm の土坑である。埋土は砂に暗灰色粘質土のブロックがところどころ混ざる。出土遺物は、下部から青磁の小壺 (第 128 図 - 5) が出土している。これは 14 世紀の奢侈品である。

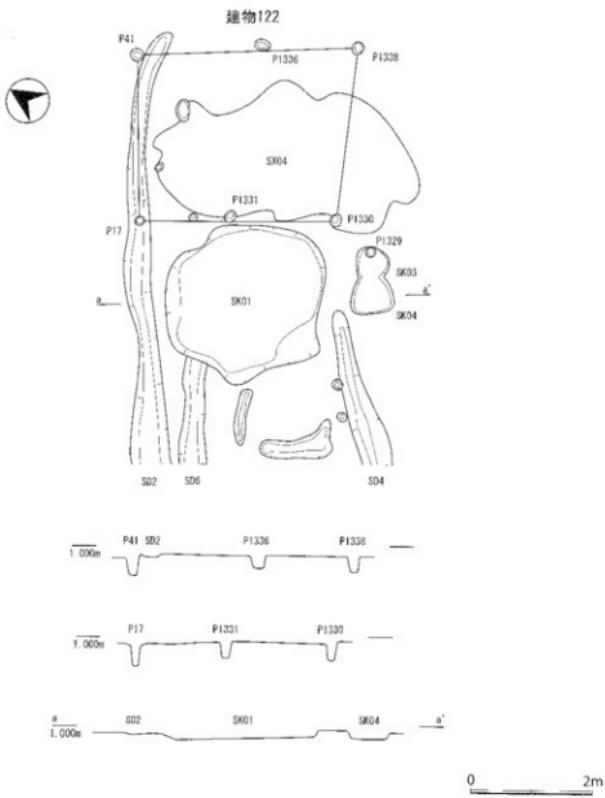
鋳造作業時に、鋳型や坩堝を据える三叉状土製品をこの遺構上部に設置したと考えられる。



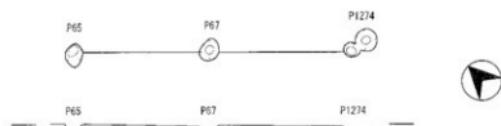
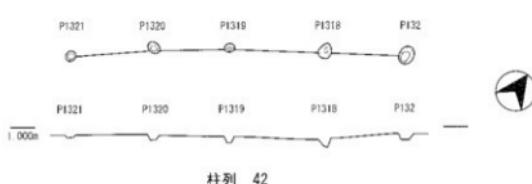
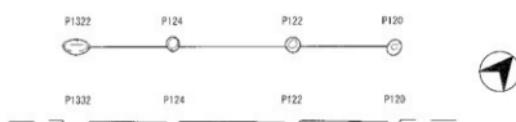
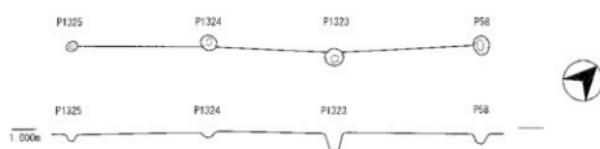
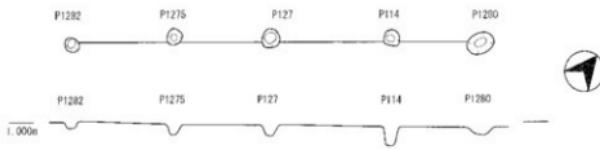
第121図 10区東側遺構図



第 122 図 建物跡 121 周辺図



第123図 建物跡122周辺図

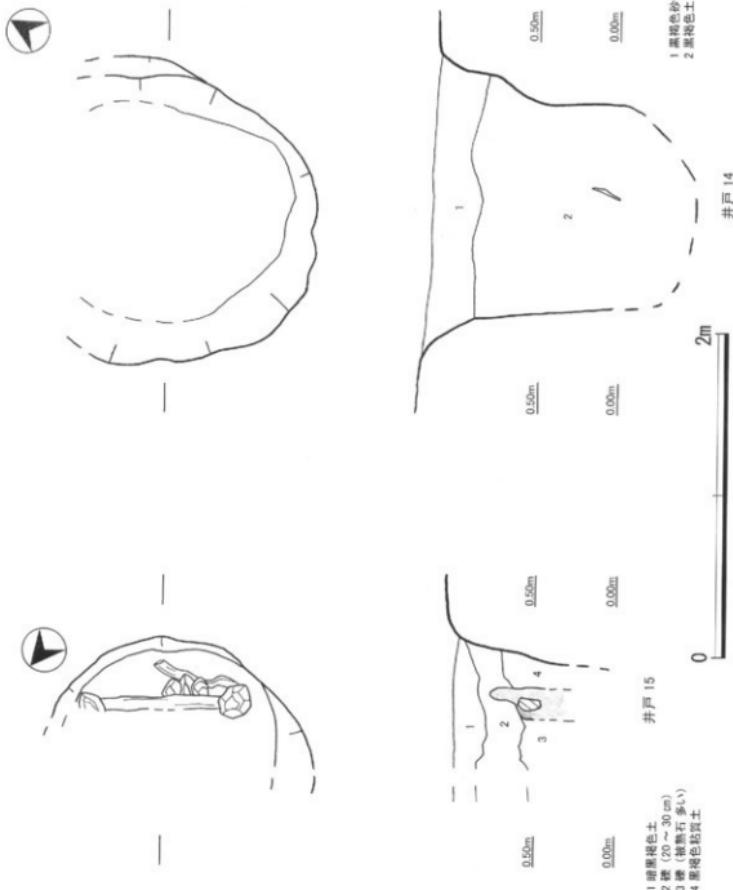


0 2m

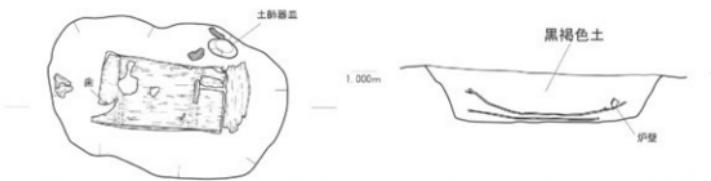
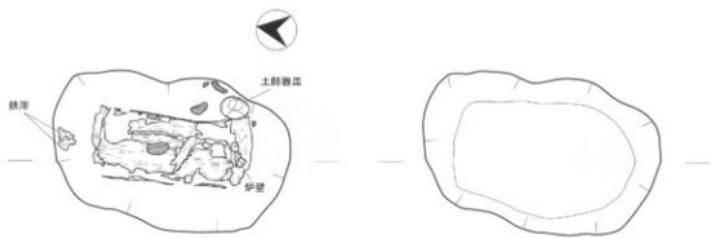
第124図 柱列39～43実測図



第 125 図 石列 8・9 実測図

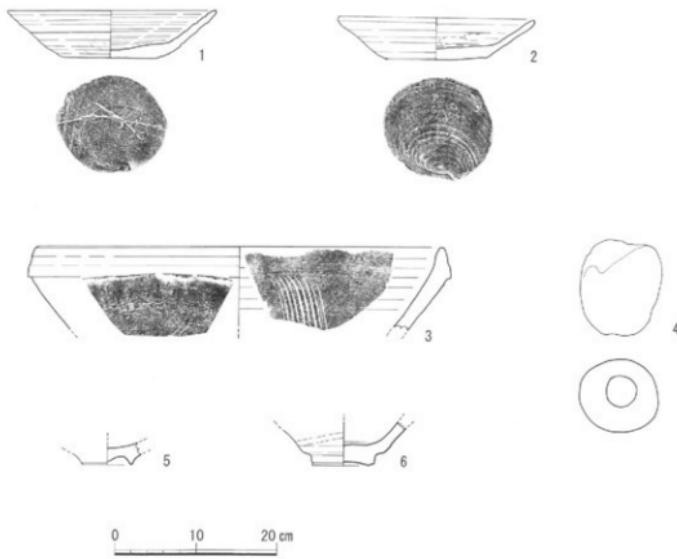


第126図 井戸 14・15 実測図



0 1m

第127図 墓78実測図



第 128 図 10 区東側出土遺物実測図

### (3) 鋳造・鍛冶関連遺物の考古学的観察

#### 1 調査の手法

9区、10区において検出された鋳造・鍛冶関連遺物（以下、関連遺物）に関する考古学的所見について、以下のような手法により記載する。該当する記載項目が存在しない場合は飛び番号となる。資料番号末の（ ）内は構成図のNoによる。

- ① 出土遺構・遺物の種類：遺物の出土遺構（個所）と種別。
- ② 計測値：当該遺物の長さ（実測図の上下）、巾（実測図の左右）、厚さについては、最大部位値の測定値（cm）。重さは総重量値（g）。
- ③ 遺存度：当該遺物の保存状態の記載。
- ④ 磁着度：「標準磁石」への反応度を数値で表示。
- ⑤ メタル度：金属分の残留状況をH（○）・M（◎）・L（●）の3段階で表示。
- ⑥ 表面観察所見：当該遺物の表面観察の所見。上下、左右は実測図による。
- ⑦ 備考：特記事項について記載。

#### 2 鋳造・鍛冶関連遺物の記載

##### I. 9区出土の関連遺物

###### 1) **第132図1**

- ① 鋳型（外型）・SK02。
- ② 長さ（上下）5.4cm、巾（左右）5.1cm、厚さ5.6cm、重さ210g。
- ③ 表面、裏面、側面の一部を残す。他の三側面（上・左右）は欠ける。
- ④ 表面=鋳造物との接触面、平坦である。左右に3条の緩い弧状線、これにクロスするRLの直線が2条、さらにRL線を切る急角度のLR線1条が見られる。側面は接触面と75度の鋭角度で屈折する。面は緩く湾曲し、ナデによる調整。スサ痕が認められる。裏面は側面と120度の鈍角。緩い平坦面をなす。接触面は黄白色、右側面は橙色。断面の中程は黒灰色を呈する。
- ⑦ 特記事項なし。

###### 2) **第132図2**　　欠番

###### 3) **第132図4**

- ① 炉壁（溶解炉）・グリッド・P。
- ② 長さ（左右）12.5cm、巾（上下）11.5cm、厚さ3.5cm、重さ538g。表面と裏面に原状を止める。四側面はすべて破面。
- ③ 表面（内面）、裏面（外面）は原状を止める。側辺は全て破面。
- ④ 2
- ⑤ なし。
- ⑥ 大型の炉壁片。表面は凹凸があり、灰白色部分と黒褐色のガラス状を呈する。小さい気

泡孔が見られる。裏面はわずかに左右に湾曲し、上下方向に強いナデ痕がのこる。明茶褐色を呈する。

- ⑦ 特記事項なし。

4) **第132図5**

- ① 羽口（鍛冶）片・グリッド・遺構面上の暗灰色土。  
② 長さ（羽口長軸方向）6.7cm、巾5.2cm、厚さ3.1cm、重さ102g。  
③ 断面で4分の1程度残存。通風孔と外面の一部に原状が残る。  
④ 1  
⑤ なし。  
⑥ 通風孔の復元内径は2.5～2.8cm程度と推定される。外面には緩い弧状をなす部分が残存している。羽口の径は12cm程度かと思われる。淡白黄色を呈する。羽口の中程の破片と思われる。  
⑦ 特記事項なし。

5) **第132図8**

- ① 白色萍（ガラス質萍）・グリッド・遺構面上の暗灰色土。  
② 長さ（上：下）5.8cm、巾（左右）4.8cm、厚さ2.7cm、重さ44g。  
③ 表面と裏面に原状を残す。  
④ 3  
⑤ なし。  
⑥ 表面は強い凹凸があり、所々にガラス状になった白色部が見られ、小さい気泡孔がある。白黄色から灰黒色を呈する。裏面は凹凸が著しい。黄橙色を呈する。半溶解状の砂利が付着している。  
⑦ 特記事項なし。

6) **第132図9**

- ① 青銅製品（鍋のつり手）・グリッド・10、22F包含層褐灰色土。  
② 長さ（上下）2.6cm、巾（左右）3.5cm、厚さ0.4cm、重さ12g。  
③ ほぼ原状を止めめる。  
④ 1  
⑤ なし。  
⑥ 薄い板状の製品。小型鍵状をなす。半円状の突起部には小さい円孔（直径0.6cm）を穿つ。下辺は片刃状に尖っている。長方形状の突起部先端も尖っている。  
⑦ 特記事項なし。

## II. 10 区出土の関連遺物

### 7) 第133図1

- ① 大口径羽口（溶解炉）・SK05 3R。
- ② 長さ（上下）4.1cm、巾（左右）4.1cm、厚さ3.2cm、重さ38g。
- ③ 裏面に原状を止める。他面は全て破面。
- ④ 1
- ⑤ なし。
- ⑥ 立方体状の破片。原状を残す裏面がわずかに湾曲する。原型は断面が隅円方形をなすと推定される。灰白色を呈する。
- ⑦ 特記事項なし。

### 8) 第133図4

- ① 大口径羽口（溶解炉）・SK10・P61、26D。
- ② 長さ（上下）6.2cm、巾（左右）7.6cm、厚さ5.0cm、重さ158g。
- ③ 表面は弧状の丸味を残す。裏面にも通風孔の一部が残る。他面は全て破面。
- ④ 4
- ⑤ なし。
- ⑥ 大型の羽口の先端近い部分片と思われる。表面は黒灰色、裏面は明茶褐色を呈する。復元直径は30cm程度と推定される。
- ⑦ 特記事項なし。

### 9) 第133図6

- ① 錄型（外型）・SK10・P61、26D。
- ② 長さ（上下）3.0cm、巾（左右）3.1cm、厚さ2.5cm、重さ4g。
- ③ 表面に原状を止める。他面は全て破面。
- ④ 1
- ⑤ なし。
- ⑥ 表面は平坦で明橙色を呈する。上側面の半分は黒灰色を呈する。
- ⑦ 特記事項なし。

### 10) 第133図7

- ① 炉内隕（溶解炉・含鉄）・SK10・P61、26D。
- ② 長さ（上下）2.2cm、巾（左右）2.6cm、厚さ2.0cm、重さ14g。
- ③ 円球に小突起を付したような塊。
- ④ 2
- ⑤ 鎔化（△）
- ⑥ やや歪な玉状部に小さな突起部が付く。裏面には黒色を呈する個所がある。
- ⑦ 特記事項なし。

11) **第133図10**

- ① 炉壁（溶解炉）・SK14。
- ② 長さ（上下）7.2cm、巾（左右）6.5cm、厚さ3.5cm、重さ130g。
- ③ 表面は盛り上がる。裏面はやや平坦をなす。側面は全て破面。
- ④ 3
- ⑤ なし。
- ⑥ 表面は不整梢円形状を呈し、凹凸が激しい。前面漆黒のガラス状をなす。裏面には工具による刺突痕がみられる。灰黒色。
- ⑦ 特記事項なし。

12) **第133図11**

- ① 炉壁（溶解炉）・SK18。
- ② 長さ（上下）4.0cm、巾（左右）4.3cm、厚さ1.6cm、重さ24g。
- ③ 表面と裏面に原状を止める。側面は全て破面。
- ④ 1
- ⑤ なし。
- ⑥ 表面はほぼ平坦。但し、中央に溝状の凹部が上下方向に走る。繊維状のものも見られる。白色の小粒が転々と見られる。灰黒色を呈する。裏面は小さな凹凸がある。多条の繊維痕がLR方向に走る。白灰色を呈する。
- ⑦ 特記事項なし。

13) **第133図3**

- ① 炉壁（溶解炉・炉底）・SK1。
- ② 長さ（上下）3.7cm、巾（左右）5.6cm、厚さ3.2cm、重さ62g。
- ③ 表面と裏面に原状を止める。側面は全て破面。
- ④ 1
- ⑤ なし。
- ⑥ 表面は浅く窪み、凹凸がある。気泡孔も多い。灰黒の還元色を呈する。竹管状の円孔が残る。裏面は楕円形をなし、黄橙色を呈する。
- ⑦ 特記事項なし。

14) **第133図15**

- ① 炉壁（溶解炉・炉底）・P48。
- ② 長さ（上下）2.8cm、巾（左右）4.2cm、厚さ4.5cm、重さ34g。
- ③ 厚みのある小塊で表面と裏面に原状を止める。
- ④ 1
- ⑤ なし。
- ⑥ 資料13と酷似する。表面はほぼ平坦。黒灰色の還元色を呈する。裏面は緩い円弧状

になる。黄橙色を呈する。

⑦ 特記事項なし。

15) **第133図18**

- ① 大口径羽口（溶解炉）・SX01、24C・Dライン。
- ② 長さ（上下）8.8cm、巾（左右）6.8cm、厚さ3.8cm、重さ168g。
- ③ 大型品。表面右側と裏面に原状を止める。
- ④ 5
- ⑤ なし。
- ⑥ 表面は凹凸が激しく、破碎面にはガラス化した漆黒面が見られる。工具の刺突痕が3～4か所ある。全体に気泡孔が広がる。裏面（外面）には赤褐色の凸凹面が残る。緩い円弧状の面で、径約15cmと推定される。左側面はタール状を呈する。羽口の先端部分と思われる。
- ⑦ 特記事項なし。

16) **第134図19**

- ① 炉壁（溶解炉）・SX04、Po18。
- ② 長さ（上下）10.9cm、巾（左右）13.5cm、厚さ5.2cm、重さ460g。
- ③ 大型品。表面と裏面に原状を止める。側面は全て破面。
- ④ 3
- ⑤ なし。
- ⑥ 厚い角材状の破片。表面は浅い凸凹がある。下方に太い刺突痕が見られる。灰橙色を呈する。裏面は平坦で、上下方向に強いナデ痕が見られる。スサ様の状痕が多数認められ、粒の大きい小石が混じる。灰橙色を呈する。
- ⑦ 特記事項なし。

17) **第134図24**

- ① 炉壁（溶解炉・接合痕付）・SX04、Po04。
- ② 長さ（上下）6.7cm、巾（左右）10.1cm、厚さ4.4cm、重さ296g。
- ③ 表面と上部側面に原状を止める。
- ④ 1
- ⑤ なし。
- ⑥ 溶解炉の口縁部かと思われる横長の厚い柱状の破片。左右方向に緩く湾曲（推定外面径約50cmか）している。表面に「V」字状の窪みがある。上側面には横走（左右）する不規則な条線が認められる。これらは炉壁の接合目と考えられる。上下の断面は、表面から裏面に向けて外反状の面をなす。これを切断（破断）面で見ると、先端を薄くした粘土板を裏側の粘土壁に被せるようにして貼り付けたものと思われる。  
表面は灰黄色を呈し、裏面は黄橙色を呈する。

- ⑦ 特記事項なし。
- 18) [第134図37]
- ① 炉壁（溶解炉・補修）・SX04、3dベルト部分。
  - ② 長さ（上下）5.2cm、巾（左右）9.1cm、厚さ3.5cm、重さ138g。
  - ③ 表面、上側面、下側面の一部に原状を止める。
  - ④ 2
  - ⑤ なし。
  - ⑥ 表面（炉壁の内面）には塊状の浅い凸凹があり、破面はガラス状で黒灰色を呈する。大小の気泡孔や赤錆も一部見られる。上側面は緩い弧状の湾曲面（推定径約20cm）をもつ。上下破面に現れた断面を見ると、明らかな2層が看取され、接合面には大きな気泡孔がある。表面側（内面）に厚い粘土板を重ね張り合わせた補修の痕跡と見られる。裏面は灰黒色を呈する。
  - ⑦ 特記事項なし。
- 19) [第134図38]
- ① 炉壁（溶解炉・炉底）・SX04、Po07。
  - ② 長さ（上下）7.1cm、巾（左右）5.1cm、厚さ3.5cm、重さ48g。
  - ③ 表面と裏面に原状を止める。
  - ④ 1
  - ⑤ なし。
  - ⑥ 表面（炉底内面）粗い凸凹を呈し、縛割れ条線がクモの巣状に広がり、刺突痕の孔や気泡孔が見られる。黒灰色で赤錆が点在する。裏面には大粒の石や白色の小粒石が混入している。明灰色を呈する。
  - ⑦ 特記事項なし。
- 20) [第134図42]
- ① 炉壁（溶解炉・クライ）・SX04。
  - ② 長さ（上下）6.1cm、巾（左右）7.9cm、厚さ4.2cm、重さ124g。
  - ③ 表面、上下側面の一部に原状を止める。左右側面は破面。
  - ④ 1
  - ⑤ 鎌化。
  - ⑥ 表面は馬の背状に浅く窪み、塊状の凸凹が見られる。黒灰色を呈し、破面はガラス状になっている。上下側面にも浅い凸凹がある。大部分は黒灰色で、左側面と裏面の一部は黄灰色を呈する
  - ⑦ 特記事項なし。

9区		10区		10区	
SK02	グリッド 鋳型(外型)	SK05 炉壁(溶解炉)	炉内渣(溶解炉・含鉄) 銹化(△)	大口径羽口(溶解炉)	炉壁(溶解炉・接合痕付)
	炉壁(溶解炉)	大口径羽口(溶解炉)	7	12	18
					23
		SK03 炉壁(溶解炉)	炉壁・炉底(溶解炉)		29
		SK10 P61 炉壁(溶解炉)	SK03 炉壁(溶解炉)		37
		8	13		炉壁(炉底)
					30
					38
		羽口(銀冶?)	石列		39
		5	大口径羽口(溶解炉)		炉壁(溶解炉・クライ)
			14		32
		炉壁(溶解炉・クライ)			33
		2	19		34
			P48		35
		9	SK14 炉壁・炉底(溶解炉)		36
			15		40
		3	SK14 炉壁(溶解炉)		41
			10		炉壁・炉底(含鉄・クライ)
		4	SX01 炉壁(溶解炉)		42
			16		
		6	SK18 炉壁(溶解炉)		
		7	11		
			17		
		白色滓	鋳型(外型)		
			5		
			6		
			8		
			9		
		青銅製品(鍋つり手)			

第129図 鋳造関連遺物一覧①

10区				10区				
大口径羽口(溶解炉)	大口径羽口(補修)		三叉状土製品	鋳型(外型)	炉内滓(溶解炉・含鉄)		黒鉛化木炭	被熱石
	43	48			74	81		
44	49	53	58	68	75	82	87	
45	50	54	59	69	M(◎)	83	88	
46	51	55	60	70	L(◎)	84		
47	52	56	61	71	ガラス滓	77		
			62	65	炉内滓	78	85	
			63	66		79	86	
			64	67		80	89	

第130図 鋳造関連遺物一覧②

ピット一括		グリッド各所					グリッド各所					
炉壁(補修)	炉壁	炉壁(クライ)	大口径羽口	鋳型(外型)	ガラス質滓	M(◎)	H(○)				黒鉛化木炭	
90	93	99	107	114 115 116	121 122 128 129	142 143 144	152	158	168	火打石		
鉄製品(鋳造品)	94	100	101	大口径羽口(溶解炉・補修)				159	160	161	162	163
91	95	102	108	109 110 111 112 113	123 124 125 126 127	130 132 134 136 138 139 140 141	145 146 147 148 149 150 151 152	153	164	165	166	167
92	98	106	113	鋳型(外型・孔付き) 三叉状土製品 炉壁(炉底・含鉄) 鋳化(△) 炉壁(接合痕材)	117 118 119	131 133 135 136 137 138 139 140 141	148 149 150 151 152	154	163	164	165	170

第131図 鋳造関連遺物一覧③

21) [第 134 図 53]

- ① 大口径羽口（溶解炉・補修）・SX04、4b。
- ② 長さ（上下）11.5cm、巾（左右）12.2cm、厚さ4.0cm、重さ370g。
- ③ 表面（外面）と裏面（内面）に原状を止める。側面は全て破面。
- ④ 2
- ⑤ なし。
- ⑥ 大型の羽口片。表面は緩い弧状の曲面をなし、タール状の大きな凸凹（一部は工具の刺痕）が見られる。気泡孔多数。黒褐色を呈する。裏面も上下方向に弧状の外湾線を描く。これが通風孔の内面線とすれば、口径は16cm前後の羽口と推定される。
- ⑦ 特記事項なし。

22) [第 135 図 58]

- ① 三叉状土製品・SX04、Po17。
- ② 長さ（交差部から突起先端部の距離）5.3cm、巾（突起部の径）2.7～3.2cm、重さ122g。
- ③ 交叉部は原状を止める。3本の突起部は中程から先端が欠損。
- ④ 2
- ⑤ なし。
- ⑥ 「人」字様の土製品。左右二方向の突起部を結ぶラインは弓状を呈する。この弓状部分の中央に残りの突起部が矢をセットしたような形で付く。突起の断面は円形。表面は黄灰色、裏面は淡橙灰色を呈する。
- ⑦ 特記事項なし。

23) [第 135 図 69]

- ① 鋳型（外型）・SX04、Po12。
- ② 長さ（上下）5.7cm、巾（左右）6.2cm、厚さ4.5cm、重さ118g。
- ③ 表面と裏面に原状を止める。側面は全て破面。
- ④ 3
- ⑤ なし。
- ⑥ 表面（内面）は上下方向にわずかに内湾し、左右方向に間隔の広い平行沈線と、これに直交する上下方向の沈線が見られる。灰橙色を呈する。裏面は平坦でくすんだ橙色を呈する。
- ⑦ 母型と推定される。

24) [第 135 図 74]

- ① 炉内滓（溶解炉・含鉄）・SX04、2d。
- ② 長さ（上下）4.6cm、巾（左右）3.3cm、厚さ2.0cm、重さ28g。
- ③ 表面と裏面に原状を止める。側面は全て破面。
- ④ 2

- ⑤ 鎔化 (△)。
- ⑥ 表面は瘤状の低い凸部が3か所あり、凸部と凸部の間に直径0.9cmの鉄塊（断面偏球状、 $2.0 \times 1.5\text{cm}$ ）が介在している。灰褐色を呈する。裏面は緩く湾曲する。淡褐色を呈する。
- ⑦ 特記事項なし。

25) **第135図85**

- ① 黒鉛化木炭（含鉄）・1e。
- ② 長さ（上下）5.0cm、巾（左右）3.6cm、厚さ0.9cm、重さ10g。
- ③ 表面と裏面は原状を止める。側面は全て破面。
- ④ 2
- ⑤ 鎔化 (△)。
- ⑥ 湾曲する薄い板状の破片に木炭の木目が見られる（推定径10cm）。灰黒色を呈する。表面・裏面とも凸部がある。裏面は灰橙色を呈する。
- ⑦ 特記事項なし。

26) **第135図88**

- ① 比熱石・SX04、3a。
- ② 長さ（上下）17.0cm、巾（左右）12.3cm、厚さ6.8cm、重さ1800g。
- ③ 下部を欠く。
- ④ 1
- ⑤ なし。
- ⑥ やや扁平な大型の凹疊。比熱している。表面は自然面、裏面と側面は破断面。硬質砂岩か。
- ⑦ 特記事項なし。

### III. ピット一括・グリッド各所の関連遺物

27) **第136図90**

- ① 炉壁（溶解炉・補修）
- ② 長さ（上下）8.0cm、巾（左右）7.0cm、厚さ5.7cm、重さ628g。
- ③ 表面と裏面は原状を止める。側面は全て破面。
- ④ 2
- ⑤ なし。
- ⑥ 不定形な大型の炉壁片。表面（内面）には大きな起伏があり、無数の小気泡孔が見られる。黄白色部分と灰黒色（タール状）、さらに灰黄色部分が混在する。裏（外面）面は左右緩い曲線を描き、破断面には明確な2層が識別される。粘土板の重ね張り合わせと思われる。黄灰色を呈する。
- ⑦ 特記事項なし。

28) **第136図91**

- ① 鉄製品（鍛造品）・P897、23c。
- ② 長さ（上下）10.8cm、巾（径）1.0～1.8cm、重さ24g。
- ③ 下部の先端を欠く。
- ④ 6
- ⑤ M（○）。
- ⑥ 釣り針状の鉄製品。上方先端が尖り気味なり、屈曲部の先端を欠く。
- ⑦ 特記事項なし。

29) **第131図97**

- ① 炉壁（溶解炉）・75。
- ② 長さ（上下）6.3cm、巾（左右）5.5cm、厚さ6.7cm、重さ114g。
- ③ 表面と裏面の一部に原状を止める。
- ④ 1
- ⑤ なし。
- ⑥ 断面が三角形状をなす。表面（内面）は急な傾斜面で剥離が見られる。黒褐色を呈し、一部には灰白色の部分も見られる。裏面（外面）は強く湾曲する。黄橙色。
- ⑦ 特記事項なし。

30) **第136図102**

- ① 炉壁（溶解炉・炉底）・64。
- ② 長さ（上下）7.5センチ、巾（左右）7.9cm、厚さ4.9cm、重さ188g。
- ③ 表面と裏面に原状を止める。側面は全て破面。
- ④ 1
- ⑤ なし。
- ⑥ 分厚い炉壁片。表面はわずかに窪み、浅い凹凸が見られる。灰黒色を呈する。裏面は丸く湾曲する。灰白色から黄橙色を呈する。側面の破断面は、表面側がガラス状をなし、中程が灰色、裏面側は黄橙色を呈する。熱の伝わり方の変化と思われる。
- ⑦ 特記事項なし。

31) **第136図104**

- ① 炉壁（溶解炉・炉底）・85、26E 黒色土（包含上層）。
- ② 長さ（上下）4.8cm、巾（左右）4.2cm、厚さ2.7cm、重さ58g。
- ③ 表面と裏面に原状を止める。側面は全て破面。
- ④ 4
- ⑤ 鎌化（△）。
- ⑥ 小型の炉壁片。表面は黒灰色のタール状で凹凸がある。裏面は少し瘤状の膨らみがある。灰橙色を呈する。側面には鎌化した個所がいくつか見られる。

- ⑦ 特記事項なし。
- 32) [第136図118]  
① 鋳型（外型・孔付）・75。  
② 長さ（上下）5.2cm、巾（左右）4.2cm、厚さ2.0cm、重さ46g。  
③ 表面と裏面に原状を止める。側面は全て破面。  
④ 2  
⑤ なし。  
⑥ 表面（内面）は凹レンズ状に浅く窪む。RL方向の細い条線が見られる。裏面（外面）は内面の窪みに対応して丸い曲面をなす。橙色を呈する。裏面と左側面にごく小さな孔（3～4個所）がある。淡灰黒色から灰橙色を呈する。  
⑦ 特記事項なし。
- 33) [第136図120]  
① 羽口（大口径ではない）・26D、SE 黒色土（包含上層）。  
② 長さ（上下）3.2cm、巾（左右）4.6cm、厚さ3.1cm、重さ38g。  
③ 表面と裏面（外面）に原状を止める。側面は全て破面。  
④ 1  
⑤ なし。  
⑥ 小型の羽口片。表面（通風孔面）はほとんど平坦。スサ状の条線が見られる。裏面は強い球面状を呈する。この弧線から推定すると径5～6cm程度の羽口になる。一部に黒灰色、全体は灰黄色を呈する。  
⑦ 特記事項なし。
- 34) [第136図122]  
① ガラス質滓・6区中央。  
② 長さ（上下）6.8cm、巾（左右）6.4cm、厚さ0.8～4.5cm、重さ48g。  
③ 表面・裏面と側面の一部に原状を止める。  
④ 2  
⑤ なし。  
⑥ 海藻様の不定形な滓。表面には板状工具による刺突痕がある。右側面と裏面に気泡状の小孔がある。上側面と裏面にも板状工具痕等が残る。淡黒色を呈する。  
⑦ 特記事項なし。
- 35) [第137図125]  
① 炉内滓（溶解炉）・6区64。  
② 長さ（上下）8.8cm、巾（左右）7.8cm、厚さ6.7cm、重さ316g。  
③ 表面と裏面が原状を止める。側面は全て破面。

- ④ 3
- ⑤ なし。
- ⑥ 楕円形をなす厚い滓。表面は浅く窪み、低い凹凸がある。裏面は球面状を呈する。破断面黒灰色で気泡孔がある。
- ⑦ 特記事項なし。

36) **第137図134**

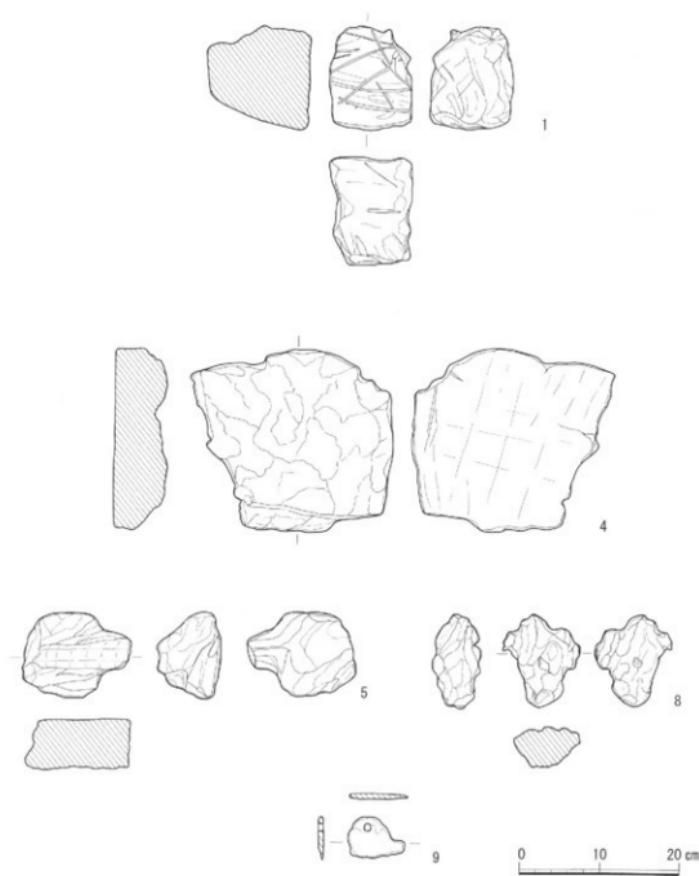
- ① 鉄塊系遺物・6区42、25E。
- ② 長さ（上下）2.1cm、巾（左右）3.7cm、厚さ1.9cm、重さ24g。
- ③ 側面の一部を欠く。保存度良好か。
- ④ 7
- ⑤ 1（●）
- ⑥ 小塊。表面はやや丸みがあり、断面は不整な球形を呈する。椭円状の球体を半裁したような形状。黒色を呈する。
- ⑦ 特記事項なし。

37) **第137図156**

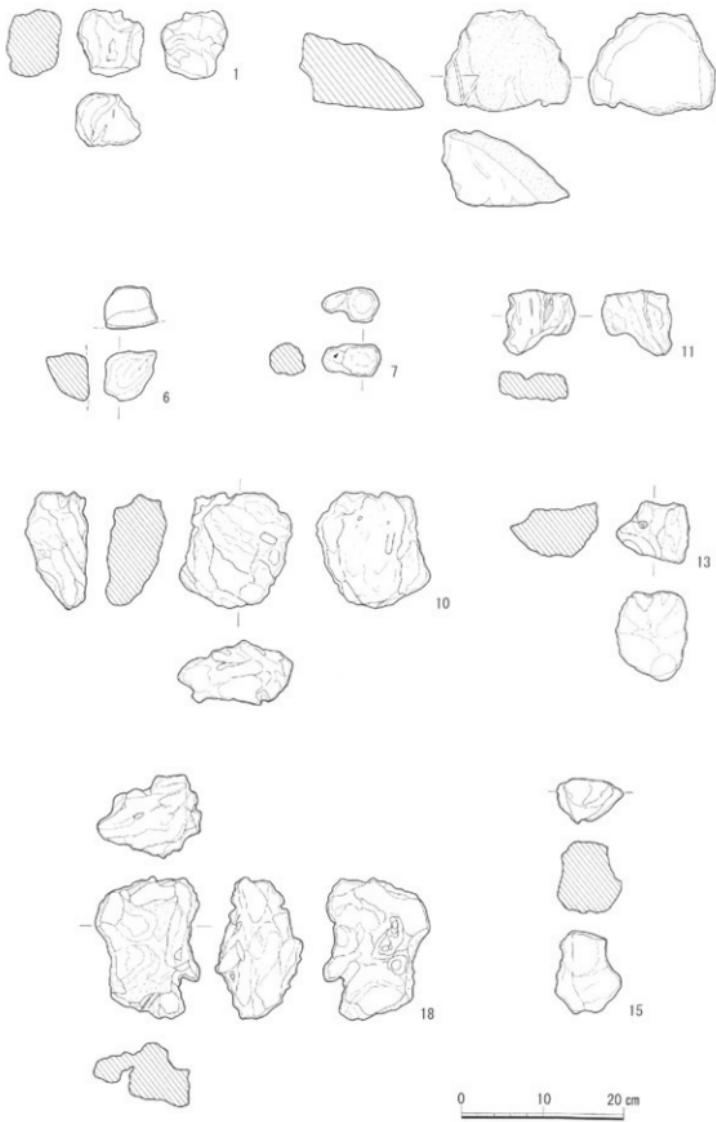
- ① 鉄製品（鋳造品）・6区、24D（遺構検出時）。
- ② 長さ（上下）4.1cm、巾（左右）4.1cm、厚さ1.8cm、重さ28g。
- ③ 表面と裏面に原状を止める。側面は全て破面。
- ④ 5
- ⑤ 鎔化（△）。
- ⑥ 不整な長方形をした小型の鉄製品。表面は浅く窪み、裏面は弧状にをなす。
- ⑦ 特記事項なし。

38) **第137図171**

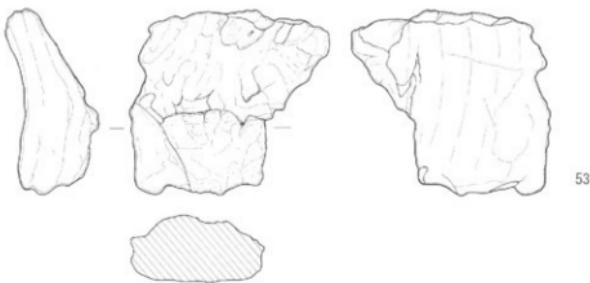
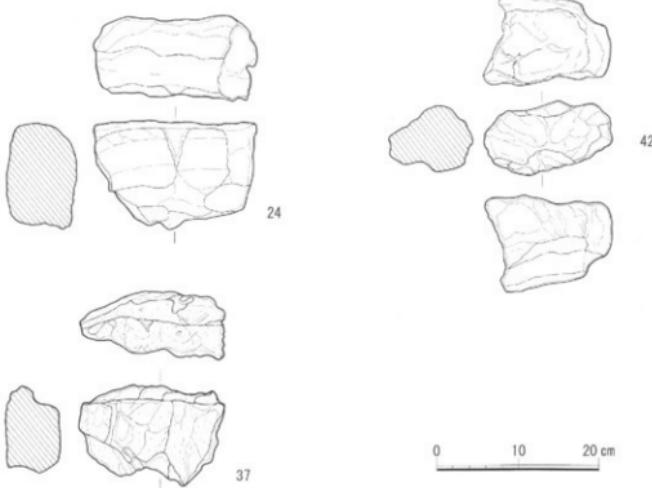
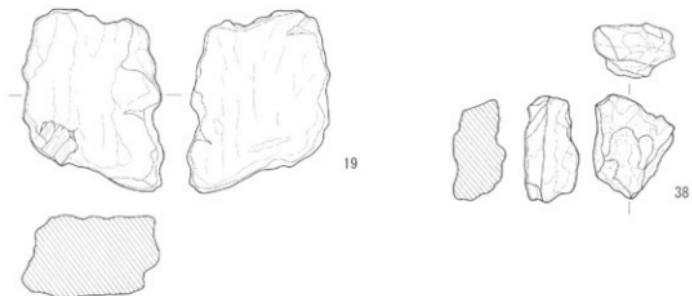
- ① 火打石・6区、東側（黒色包含下層・赤褐色付近）
- ② 長さ（上下）7.0cm、巾（左右）5.3cm、厚さ2.9cm、重さ114g。
- ③ ほぼ完形か。
- ④ 1
- ⑤ なし。
- ⑥ 表面は膨らみ、裏面は平坦。下側面も平坦で、ここが火切面か。
- ⑦ 特記事項なし。



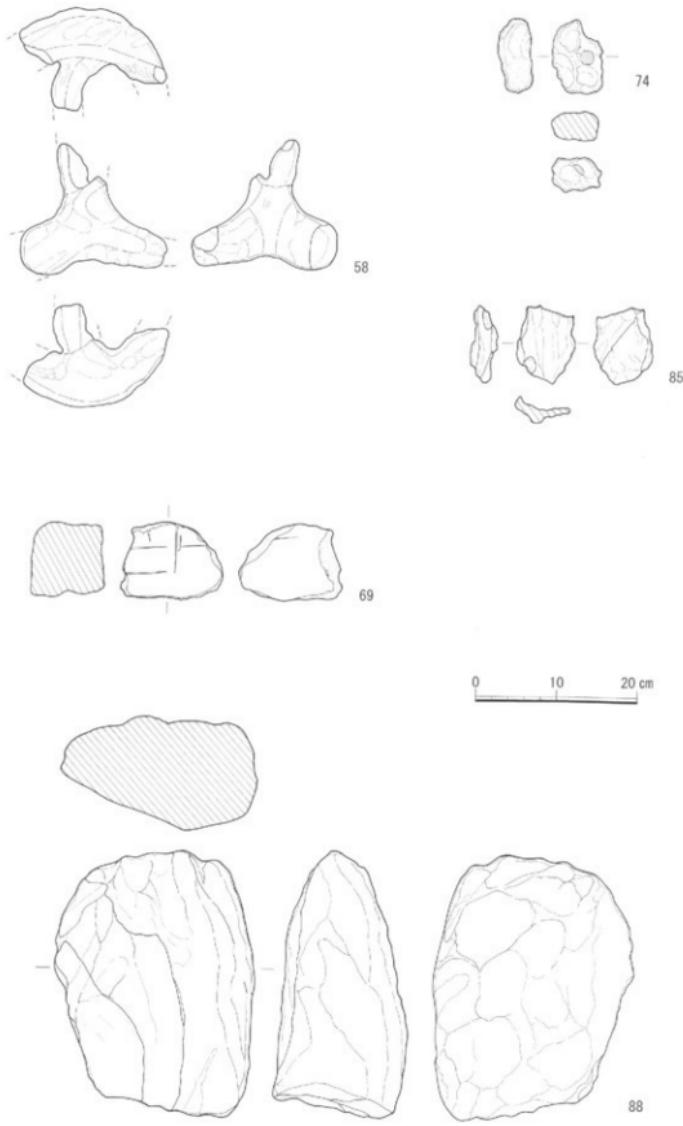
第132図 鋳造関連遺物①実測図



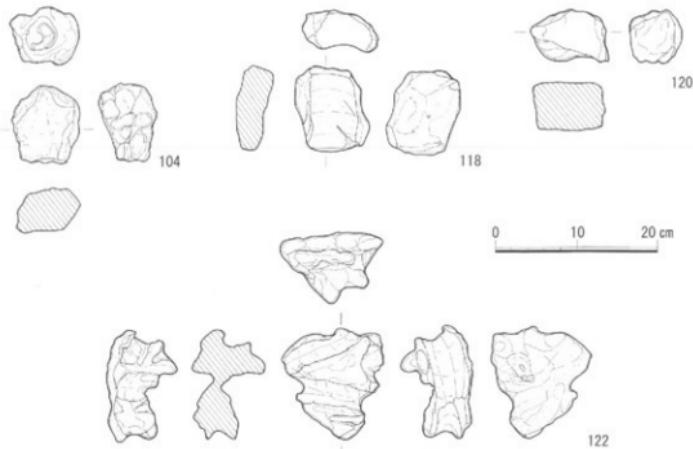
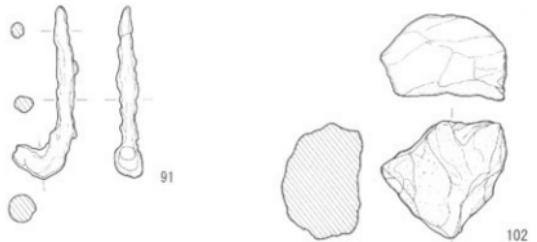
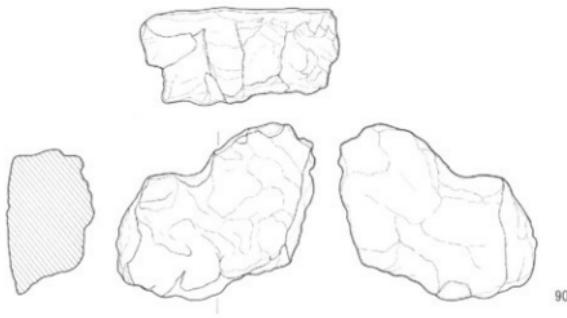
第133図 鋳造関連遺物②実測図



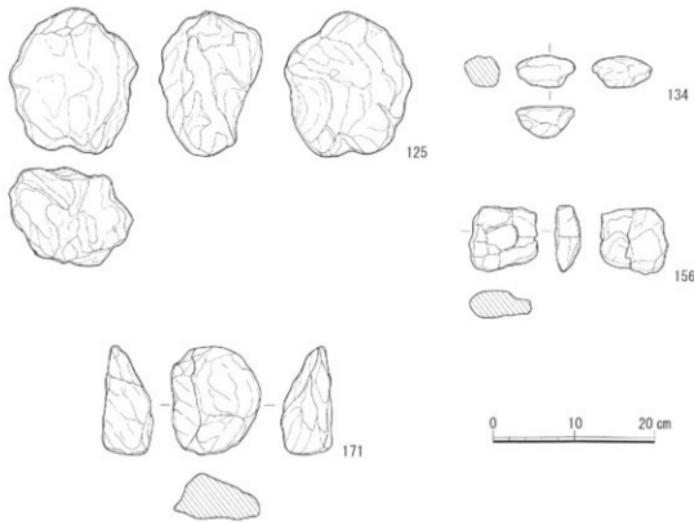
第134図 鋳造関連遺物③実測図



第135図 鋳造関連遺物④実測図



第136図 鋳造関連遺物⑤実測図



第137図 鋳造関連遺物⑥実測図

## 第3節 総括

### 遺跡の立地環境

沖手遺跡をはじめとする縄文時代前期（約6,000年前）の益田平野は、縄文海進期の海面上昇によって益田川流域では三宅一帯まで海に覆われていたと考えられている。

沖手遺跡一体は標高2m以下の低地で、地形的には増水時には冠水するような低地であるものの、洪水時に直接的な侵食や堆積を被らない比較的安定した地盤に立地した。古益田湖に面し、また益田川や高津川も接するという地形的、地理的要因を重視して成立したと考えられる。

### 遺跡の時期と主な検出遺構

集落全体において、方位にはほぼ沿う方向の直線状あるいは方形に巡る側溝を持つ道路、遺構空白地としての道路や柵列などによっての屋敷地が区画されるという計画的な地割の基本的な構造は、出土した陶磁器が示す遺跡の最盛期である11世紀後半から12世紀後半の時期のものと考えられる。

掘立柱建物に関しては、集落全体の中で公的施設あるいは有力者の居宅の可能性がある床面積100m<sup>2</sup>を超える総柱の大型建物が所々に存在している。

しかし、町場をイメージするならば、7区の建物群は短冊状の町屋建物の可能性もある。

9区の建物109、10区における建物118と建物119を同一建物と仮に想定する大型建物は、ある時期の拠点施設である可能性をもちたい。

井戸は、井戸側が方形のもの、円形の石積井戸が検出された。このうち、方形の木組井戸の井戸7や井戸9は、裏込め土に供伴する遺物により14、15世紀と考えられる。

幕は箱型木棺墓、桶棺幕を含め数多くが検出されている。

桶棺墓の副葬品に16世紀の土師器皿と卒塔婆が共伴している。7区の墓50、9区の墓70においても同時期とみてよいだろう。

土師器皿を伴う墓の多くは16世紀後半と考えられるが、この時期に道路遺構部分にも幕が築かれるようになってきた。

墓44は、木棺外から16世紀頃の朝鮮王朝陶器碗、木棺内には幼児の歯が出土し、子どもにも手厚い弔いが見られる。墓72、78においても幼児の歯が出土している。

銭貨も多く出土している。遺構については、墓70から出土した六道銭や、水に対する祭祀行為の可能性がある井戸13（掘り方と井側の間）からの出土例など、経済行為とは別の使用が考えられる出土状況は興味深い。8区では大錢が出土している。

大錢は全国で約200枚出土しており、西日本を中心とする博多などの都市、墓や経塚など、経済行為とは別の付加価値をもって流通している例があるという。鳥根県内では、市内の丸子山遺跡（墓または経塚）、浜田市の古市遺跡に出土例がある。古市遺跡は、中世前半期を盛期とする町的な拠点遺跡で、ピットの下部から出土しており、祭祀に関わる使用と考えられている。

分銅もこの地における商業活動を証明する遺物である。出土した薺方分銅は、博多では16世紀以降のものである。

## 生産・生業関連遺物について

10区東側では鋳造関連遺物が多数出土している。溶解炉の炉壁や、碗型鍛冶滓、含鉄鉄滓、鉄塊系遺物などが出土しており、この遺跡では鉄鉢を用いた鋳造や、鍛錬工程を主体とする鍛冶作業が行われていたと考えられる。益田道路1～4区では鍛冶・鋳造関連遺物は少ないとから、専業の工人が常駐していたのではなく、一時的に小規模な操業が行われていたに過ぎないと考えられている。

SX04では、鋳造炉の炉壁片がまとまって出土している。これらは溶解炉（瓶炉）の可能性が高いと考えられる。瓶炉は、筒型の炉壁を積み上げて炉としたもので、倉吉市の民俗例では三層構造の瓶炉が報告されている。

鋳造の工房には、金属を溶解させる炉を設置する場所と、溶かした金属を鋳型に流し込む場所が近接して存在していると考えられる。また鋳造製品を鍛冶によって成形することもありえるであろう。

溶解炉は断片のみで全形を復元するに至らなかったが、およそ径1m超の樽形を呈した瓶炉と考えられる。瓶炉は分割成形されたものを組み立て、クライによって接着して作る。

本遺跡出土の溶解炉片は、水平方向の縫目のほか垂直方向の縫目もみられる。鋳型・溶解炉壁とも鋳造時の高温に耐えることが必須条件であるため、鋳物師が土や鋳型・炉を持ち込む可能性が想像されるが、胎上に結晶片岩や砂岩・泥岩を含むことから、在地もしくは少なくとも益田川流域で製作したものであると考えられる。

出土した炉壁や大口径羽口には複数の補修痕が残っていることからある一定期間操業していたと考えられる。

鋳造関連遺物の年代であるが、周辺で出土した陶磁器は中世後半のものが多数であり、鋳型に金属を流し込む作業土坑、SK01の埋土中層で出土した青磁小杯が室町時代のものである。また、墓78の埋土は鉄滓を含み、木棺内の土器師皿は室町時代のものである。以上のことから、室町時代頃に、ある一定期間操業していたと考えられる。

鋳物師の操業スタイルは、本拠地を構えて継続的に行う「居吹き」と、現地に出向いて梵鐘などの鋳造を限定された期間で行う「出吹き」がある。県下では今のところ中世の鋳造関連遺跡は発見されていない。鋳造を行うためには溶解炉や鋳型、鞴・踏鞴といった大規模な設備が必要である。定型化した日用品・小型品に関しては、鋳物師の生産拠点で居吹き製造し、流通ルートに載せて商品を動かす方法が経済的であると考えられる。沖手遺跡では鍋や釜といった日用品や小製品に限定して生産していると考えられることから、鋳物師がこれらを現地で生産するメリットや必要性があったと考えられ、利潤を得るためにも小規模な生産にとどめたとは考えにくい。今後の調査、検討が期待される。

## 沖手遺跡の性格と益田下流域の遺跡

沖手遺跡は、遺物の出土状況から、平安時代末期に成立し、中世前期に最も栄え、その後も継続しながら江戸時代前期の17世紀前半をもって終息したと考えられるが、その後は水田として利用され、集落の基本的な地割りが畦畔として名残をとどめたと推定される。

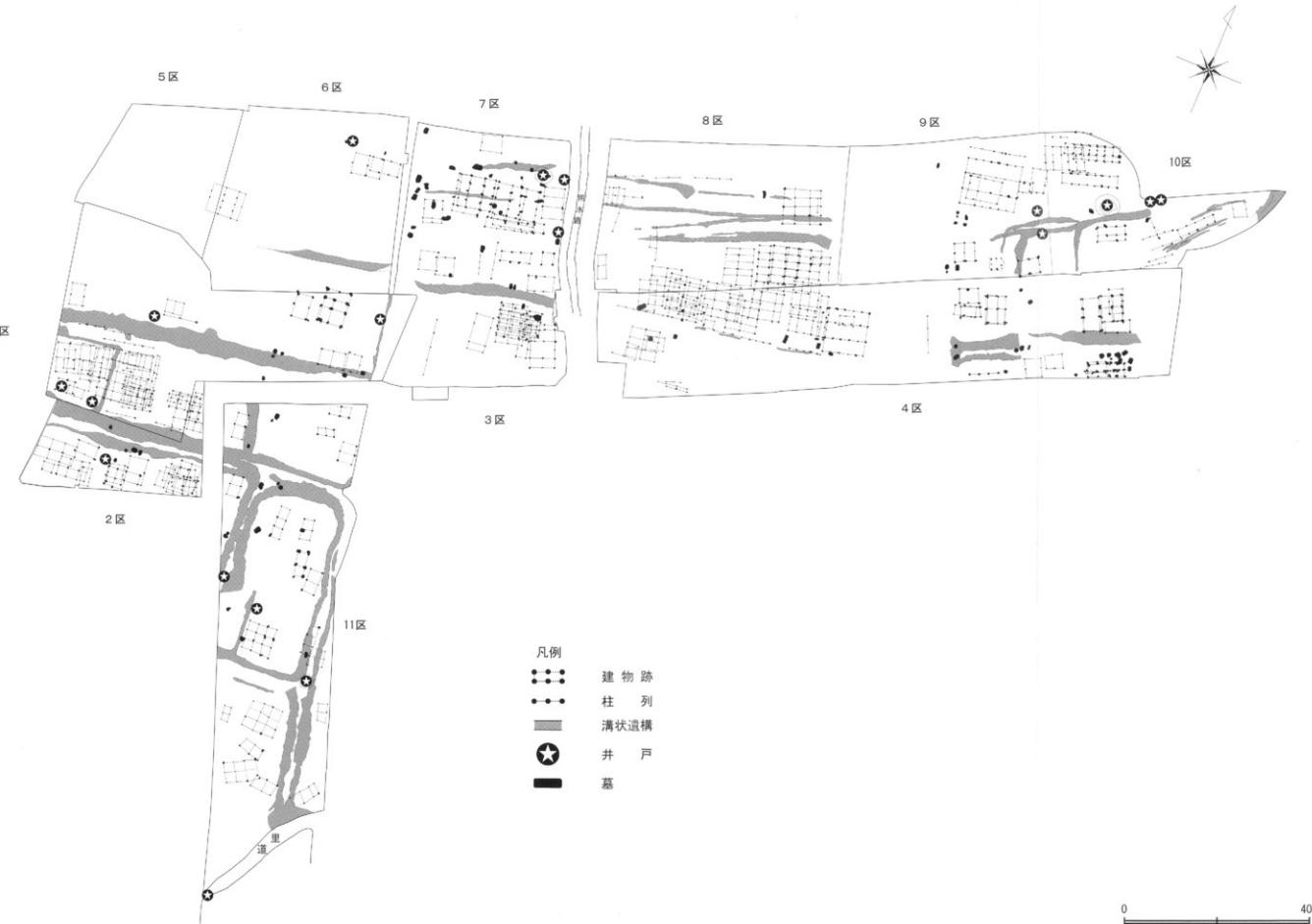
沖手遺跡は道路によって区画された複数の屋敷地によって構成され、成立の段階で計画的な地

割りが行われた。船着きの遺構は確認されていないが、その立地から、日本海や益田川の水運を利用して益田平野や内陸部と、さらに国内遠隔地とを結ぶ交易、流通の拠点として寺院と一体となって成立し、機能した遺跡と考えられる。

沖手遺跡の衰退と連動するかのように、土砂流出の影響がより少ない下流の中須地域の海岸砂丘後背に新たな港湾遺跡が成立する。平成19年度に調査された中須西原遺跡からは多くの掘立柱建物、鍛冶炉などとともに、船着き場と考えられる堅固な礫敷き2面が検出された。貿易陶磁からみた遺跡の時期は、12・13世紀から一定のまとまりがあり、14世紀から徐々に増加し、15世紀前半が最盛期、15世紀後半から減少する傾向にある。東に接するほぼ同時期と考えられる中須東原遺跡も大規模な港湾遺跡で、ここでも旧河道に重なる位置で船着きの礫敷き面が確認されている。

湯瀬への土砂流出によって沖手遺跡の機能が次第に低下すると、下流域に成立した中須西原遺跡や東原遺跡に拠点が移り、さらに益田本郷域の再整備に伴い16世紀に成立した今市にその機能が移った。沖手遺跡の衰退とその後の港湾機能の変遷の背景には、パリア海退が与えた大きな影響があったと推測されている。

今後も引き続き沖手遺跡の全容の解明と、中世益田地域における都市構造のなかで重要な位置を占める益田川下流域の港湾遺跡群の変遷に関する調査研究を継続する必要がある。



第138図 沖手遺跡中世の遺構全体図 (S=1/800)

## 参考文献

- 岩崎仁志 2007 「山陽西部における中世の土製煮沸具－周防・長門を中心にして－」『中世土器の基礎的研究』21 日本中世土器研究会
- 岩本正二 1993 「西日本の井戸－広島県草戸千軒町遺跡の井戸をめぐって－」『考古論集－瀬見浩先生退官記念論文集－』 潮見浩先生退官記念事業会編
- 近江俊秀 1993 「第5節 道路状遺構の構造に関する検討」『鴨神遺跡』奈良県文化財調査報告書第66集 奈良県権原考古学研究所
- 鹿島町立歴史民俗資料館 2003 「海の記憶－波濤を超えた人々－」
- 御香取郡市文化財センター 1999 「栗山川流域遺跡群 烏ノ間遺跡」
- 木戸雅寿 1993 「石鍋の生産と流通について」『中世土器の基礎的研究』 日本中世土器研究会
- 橋田正徳 2004 「中世前期の墓制－墓地・屋敷跡からみた中世前期の家・集落・社会－」『考古学の語る「中世墓物語」』 第5回大谷女子大学文化財学科公開講座資料
- 京都府都埋蔵文化財調査研究センター 2001 「浦入遺跡群」 京都市遺跡調査報告書第29刷
- 古賀信幸 1991 「大内氏遺跡出土上師器の編年」『大内氏館跡Ⅳ』『大内氏関連町並遺跡Ⅰ』 大内遺跡発掘調査報告書 X
- 柳原博英 2001 「浜田・古市遺跡における中世前半の土器について」『松江考古』第9号 松江考古学談話会
- 滋賀県教育委員会 1966 「近江八幡市・水茎町遺跡調査概要」
- 滋賀県教育委員会 1984 「長命寺湖底遺跡発掘調査概要」
- 重根弘和ほか 2008 「山陰地方出土の備前焼」『山陰地方における備前焼』 第7回山陰中世土器検討会資料集 山陰中世土器検討会
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1989 「大谷川Ⅳ」 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第20集
- 鳥根県教育委員会 2007 「浜寄・地方遺跡－1H・II・2B・2D・2E・2A 各区の調査－」一般国道9号（益田道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 4
- 鳥根県教育委員会 2007 「沖手遺跡－1区の調査－」一般国道9号（益田道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 3
- 鳥根県教育委員会 2008 「沖手遺跡 専光寺脇遺跡」一般国道9号（益田道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 5
- 鳥根大学埋蔵文化財調査研究センター 1997 「鳥根大学構内遺跡第1次調査（橋繩手地区）」
- 出土銭貨研究会中国ブロック大会事務局 2004 「山陰の出土銭貨」
- 常松幹雄 1988 「井戸」「東アジアの国際都市博多」よみがえる中世 1 平凡社
- 永井久美男編 1994 「中世の出土銭」 兵庫埋蔵銭調査会
- 永井久美男編 1996 「中世の出土銭 補遺」 兵庫埋蔵銭調査会
- 中森 桑 2007 「中国地方の様相」「日本の中世墓を深める」中世墓資料集成研究報告会資料集 中世墓資料集成研究会
- 西尾克己・目次謙一 2004 「島根県下の無文銭について」『中近世以降の無文銭』出土銭貨研究会中国ブロック大会事務局
- 西ノ島町教育委員会 2000 「外浜遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書」
- 東 和幸 2004 「清状遺構の一性格」『繩文の森から』第2号 鹿児島県立埋蔵文化財調査センター
- 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1996 「草戸千軒町遺跡発掘調査報告書」 V
- 浜田市教育委員会 1995 「伊古上・地区画整理事業に伴う発掘調査概報」
- 福部村教育委員会 1989 「栗谷遺跡発掘調査報告書」 II
- 藤澤典彦 1998 「死者のまつり－「入棺作法」を中心に－」『日本の信仰遺跡』金子裕之編
- 北条町教育委員会 1983 「島遺跡発掘調査報告書」第1集
- 本多博之 2004 「中国地方における低品位銭貨について」『中近世移行期の無文銭』出土銭貨研究会中国ブロック大会事務局
- 三方町教育委員会 1996 「ユリ遺跡」三方町文化財調査報告書第14集
- 森田 稔 1995 「中世初忠器」「慨説 中世の土器・陶磁器」中世土器研究会
- 山本信夫 2007 「山陰の出土貿易陶磁と傾向－集落における消費形態及び北部九州と日本海流通に関する基礎的検討－」『波原遺跡・森広遺跡・片山遺跡』下関市教育委員会
- 神木子市教育文化事業団 2003 「鳥取県米子市日久美遺跡」 VII

第2表 沖手遺跡建物跡一覧表

遺跡名	調査区	グリッド	規模	主軸	面積(af)	備考
建物跡77	6区		3間(7.3)×4間(6.1)	N-5°-W	44	
建物跡78	6区		2間(6.3)×2間(4.4)	N-80°-E	27.7	
建物跡79	6区		1間(3.0)×3間(6.1)	N-83°-E	18.3	
建物跡80	7区		1間(3.4)×2間(4.3)	N-72°-E	14.6	
建物跡81	7区		1間(5.0)×2間(4.4)	N-17°-W	19.5	
建物跡82	7区		1間(3.8)×2間(4.2)	N-15°-W	16.4	
建物跡83	7区		1間(3.8)×2間(3.9)	N-20°-W	15.2	
建物跡84	7区		1間(3.2)×3間(5.6)	N-70°-E	17.6	
建物跡85	7区		1間(2.2)×3間(6.4)	N-68°-E	13.4	
建物跡86	7区		1間(2.7)×2間(3.4)	N-70°-E	19.2	
建物跡87	7区		1間(1.9)×6間(10.5)	N-76°-E	20.1	
建物跡88	7区		1間(2.0)×4間(10.9)	N-77°-E	25	
建物跡89	7区	1×	1間(4.4)×3間(6.8)	N-12°-W	28.6	
建物跡90	7区		2間(5.7)×5間(8.2)	N-10°-W	47.6	
建物跡91	7区		3間(9.2)×5間(7.9)	N-12°-W	72.7	
建物跡92	7区		3間(7.5)×4間(6.8)	N-14°-W	49.6	
建物跡93	8区		1間(1.4)×2間(3.7)	N-70°-E	5.2	
建物跡94	8区		3間(7.4)×5間(7.9)	N-18°-W	59	
建物跡95	8区	2×	2間(5.4)×5間(7.8)	N-20°-W	42.6	
建物跡96	8区		1間(2.4)×5間(7.8)	N-18°-W	19.5	
建物跡97	8区		2間(6.7)×5間(8.0)	N-17°-W	53.8	
建物跡98	8区		3間(7.1)×3間(5.7)	N-15°-W	40.5	
建物跡99	8区		3間(7.2)×4間(7.0)	N-11°-W	49	
建物跡100	8区		3間(7.1)×3間(5.7)	N-15°-W	40.5	
建物跡101	8区		2間(6.4)×4間(8.3)	N-15°-W	53	
建物跡102	8区		2間(6.5)×4間(7.8)	N-11°-W	50	
建物跡103	8区		2間(6.1)×4間(8.0)	N-10°-W	49	
建物跡104	8区		2間(3.8)×3間(6.6)	N-17°-W	25	
建物跡105	8区		1間(1.8)×2間(5.2)	N-20°-W	9.4	
建物跡106	8区		1間(2.7)×1間(3.3)	N-18°-W	8.9	
建物跡107	8区		1間(2.0)×1間(4.1)	N-16°-W	8.2	
建物跡108	8区		3間(8.2)×4間(7.6)	N-24°-W	59	
建物跡109	9区	3×	3間(4.8)×4間(6.8)	N-80°-E	33.3	
建物跡110	9区		3間(10.0)×7間(11.8)	N-78°-E	116.8	
建物跡111	9区		2間(3.3)×2間(6.7)	N-78°-E	22.4	
建物跡112	9区		2間(3.2)×3間(5.0)	N-17°-W	16.0	
建物跡113	9区	1×	1間(2.1)×1間(3.0)	N-20°-W	6.1	
建物跡114	9区		2間(4.0)×2間(4.3)	N-27°-W	17.2	
建物跡115	9区		2間(3.2)×2間(4.4)	N-33°-W	14.08	
建物跡116	9区		3間(5.0)×5間(8.4)	N-72°-E	42.8	
建物跡117	9区		1間(2.2)×7間(12.0)	N-72°-E	26.4	
建物跡118	9区		1間(2.3)×7間(12.0)	N-72°-E	27.8	
建物跡119	9区		1間(3.1)×6間(9.8)	N-74°-E	30.4	
建物跡120	9区		2間(3.0)×3間(6.0)	N-64°-W	18.0	
建物跡121	10区		1間(1.5)×4間(8.3)	N-44°-E	14.1	
建物跡122	10区		1間(2.9)×2間(2.9)	N-58°-W	9.3	

沖手遺跡柱列一覧表

遺構名	調査区	グリッド	規模	主軸	備考
柱列 24	7 区		5 間 (10.3m)	N - 19° - W	
柱列 25	7 区		3 間 (4.1m)	N - 17° - W	
柱列 26	7 区		4 間 (7.9m)	N - 13° - W	
柱列 27	8 区		3 間 (4.96m)	N - 15° - W	
柱列 28	8 区		2 間 (15.0m)	N - 15° - W	
柱列 29	8 区		3 間 (8.0m)	N - 20° - W	
柱列 30	8 区		3 間 (6.24m)	N - 35° - W	
柱列 31	8 区		3 間 (7.84m)	N - 68° - W	
柱列 32	8 区		2 間 (5.28m)	N - 65° - W	
柱列 33	8 区		3 間 (6.08m)	N - 65° - W	
柱列 34	8 区		4 間 (8.08m)	N - 70° - E	
柱列 35	9 区		4 間 (11.9m)	N - 78° - E	
柱列 36	9 区		2 間 (3.4m)	N - 65° - E	
柱列 37	9 区		2 間 (3.3m)	N - 70° - E	
柱列 38	9 区		3 間 (4.9m)	N - 70° - E	
柱列 39	9 区		4 間 (6.8m)	N - 47° - E	
柱列 40	9 区		3 間 (5.2m)	N - 45° - E	
柱列 41	9 区		3 間 (5.2m)	N - 45° - E	
柱列 42	9 区		4 間 (5.5m)	N - 50° - E	
柱列 43	9 区		2 間 (4.6m)	N - 45° - W	

第3表 沖手遺跡井戸一覧表

遺構名	調査区	グリッド	構造	井戸内法寸法(cm)	井筒規模(cm)	掘り方規模(cm)	備考
井戸7	6 区		方形木組	70	不明	110 × 110	13 c 以降に廃絶
井戸8	7 区		方形木組	90	不明	200 × 200、深さ 200	
井戸9	7 区		方形木組	90	不明	202 × 200、深さ 200	
井戸10	7 区		方形木組	90	不明	340 × 320、深さ 200	14 c に廃絶か
井戸11	9 区		方形木組	90	不明	230 × 230	
井戸12	9 区		石組 植綱	70	当物 規模不明	150 × 150、深さ 150	15 c に廃絶
井戸13	10 区		方形木組	90	不明	530 × 450、350	16 c に廃絶
井戸14	10 区		—		不明	180 × 180 × 170	竹筒 15 c に廃絶か
井戸15	10 区		方形木組	105	不明	170 × 170	

第4表 冲手遗跡墓一览表

遺跡名	遺物名	遺跡名	遺物名	墓葬				棺	棺内方向	棺内	出土遺物	人骨	時間	備考	
				主室	副室	附属室	天井								
龜39 6区	2SK01	9b	円形	65	63	15								15c後半?	
龜40 6区	2SK08	10b	円形	80	60	30	不明								
龜41 6区	2SK05	10b	楕円形	110	80	25	椭小								
龜42 6区	2SK02	10b	楕円形	63	50	10	扁								
龜43 7区	2SK07	13b	圓形	60	50	10	不明								
龜44 7区	2SK13	12b	圓形	90	70	25	扁								
龜45 7区	2SK12	13b	長方形	140	55	20	扁小								
龜46 7区	2SK25	14b	長方形	115	50	10	扁								
龜47 7区	2SK26	13b	長方形	115	65	20	扁								
龜48 7区	2SK38	11b	小短方	165	95	25	不明								
龜49 7区	2SK39	12b	不整方	165	100	17	不明								
龜50 7区	2SK42	11b	不整方	70	70	扁	不明								
龜51 7区	2SK43	11b	楕圓形	110	70	20	扁								
龜52 7区	2SK44	11b	楕圓形	135	100	27	扁								
龜53 7区	2SK45	11b	楕圓形	135	80	25	扁								
龜54 7区	2SK46	11b	楕圓形	115	80	25	扁								
龜55 7区	2SK47	11b	長方形	145	35	30	扁								
龜56 7区	2SK56	12b	圓形	75	75	35	扁								
龜57 7区	2SK52	12b	圓形	215	100	33	扁								
龜58 7区	2SK61	12b	圓形	82	85	26	扁								
龜59 7区	2SK65	13b	圓形	95	80	25	扁								
龜60 7区	2SK50	10b	圓形	140	95	18	扁								
龜61 7区	2SK58	14b	圓形	120	105	18	扁小								
龜62 7区	2SK60	11b	楕圓形	115	65	13	不明								
龜63 7区	2SK61	13b	不整圓形	175	70	15	不明								
龜64 7区	2SK62	13b	不整圓形	0	80	15	不明								
龜65 7区	2SK63	13b	不整圓形	0	75	20	不明								
龜66 7区	2SK65	14b	長方形	140	80	20	扁								
龜67 8区	2SK17	21b	楕圓形	0	62	20	不明								
龜68 9区	2SK01	21b	楕圓形	105	55	20	不明								
龜69 9区	2SK02	22b	不整圓形	80	50	20	不明								
龜70 9区	2SK03	22b	方形	130	85	20	扁								
龜71 9区	2SK04	22b	長方形	114	88	0	不明	N-A'W							
龜72 9区	2SK06	22b	圓形	72	57	69	扁								
龜73 9区	2SK07	22b	圓形	80	70	37	扁								
龜74 9区	2SK08	22b	圓形	100	65	27	扁	N-G'E							
龜75 9区	2SK09	22b	圓形	47	45	25	扁	N-T'E							
龜76 9区	2SK10	22b	圓形	70	70	35	扁	N-T'E							
龜77 10区	2SK25	24d	楕圓形	140	85	25	不明								
龜78 10区	2SK13	26c	楕圓形	165	105	20	不明								

第5表 沖手遺跡出土遺物観察表

測定番号	年次	出土地點	種別	器種	型式・特徴	寸法(㎜)			内面			外側		割合	色調	備考
						上幅	中幅	下幅	内面	外面	内面					
39-1	26	6区 番39 P15 3P-15	土師器	瓶		114	68	24	圓輪ナデ	圓輪ナデ、底部圓輪各切り	青	青褐色				
39-2	38	6区 番42	土師器	瓶		126	30	22	圓輪ナデ	圓輪ナデ						
39-3	39	7区 番44 No4 SK-45	陶器	瓶		107	50	40	圓輪	圓輪	青	青褐色	輪郭土銀陶瓶			
39-4	39	7区 番45 SK-45	土師器	杯		126	63	47	圓輪ナデ	圓輪ナデ、底部圓輪各切り	圓輪包含む	灰白色				
39-5	39	7区 番45 SK-45 No2	土師器	皿		76	61	13	圓輪ナデ	圓輪ナデ、底部圓輪各切り	1mm程度の砂粒含む	灰白色				
39-6	39	7区 番45 SK-45 No3	土師器	皿		74	64	11	圓輪ナデ	圓輪ナデ、底部圓輪各切り	圓輪包含む	灰白色				
39-7	39	7区 番45 SK-45 No4	土師器	瓶		65	51	17	圓輪ナデ	圓輪ナデ、底部圓輪各切り	1mm程度の砂粒含む	灰白色				
39-8	39	7区 番45 SK-45 No4	土師器	皿		71	52	16	圓輪ナデ	圓輪ナデ、底部圓輪各切り	圓輪包含む	灰白色				
39-9	40	7区 番47 SK-47	土師器	杯		134	55	54	圓輪ナデ	圓輪ナデ、底部圓輪各切り	2mm程度の砂粒含む	にふい青褐色				
39-10	40	7区 番49 SK-49	土師器	瓶		85	56	14	圓輪ナデ	圓輪ナデ、底部圓輪各切り	圓輪包含む	にふい青色				
39-11	40	7区 番49 SK-49	土師器	瓶		75	56	18	圓輪ナデ	圓輪ナデ、底部圓輪各切り	青	にふい青色				
39-12	40	7区 番49 SK-49	土師器	皿		77	47	11	圓輪ナデ	圓輪ナデ、底部圓輪各切り	圓輪包含む	灰白色				
39-13		7区 番49 SK-49?	土師器	皿			38		圓輪ナデ	圓輪ナデ、底部圓輪各切り	砂粒含む	にふい青色				
39-14	41	7区 番51 SK-43	土師器	杯		152	60	44	圓輪ナデ	圓輪ナデ、底部圓輪各切り	2mm程度の砂粒含む	にふい青褐色				
40-1		7区 番51 SK-47 新編セット	土師器	皿		76	49	11	圓輪ナデ	圓輪ナデ、底部圓輪各切り	2mm程度の砂粒含む	青褐色				
40-2		7区 番51 SK-47 新編セット	土師器	皿		76	56	15	圓輪ナデ	圓輪ナデ、底部圓輪各切り	2mm程度の砂粒含む	青褐色				
40-3	42	7区 番58 IP 1603	土師器	瓶		135	77	24	圓輪ナデ	圓輪ナデ、底部圓輪各切り	青	青褐色				
40-4	42	7区 番58 IP 1603	土師器	瓶		136	60	29	圓輪ナデ後ナデ	圓輪ナデ、底部圓輪各切り	青	青褐色				
40-5	42	7区 番58 IP 1603	土師器	皿		121	54	24	圓輪ナデ	圓輪ナデ、底部圓輪各切り	2mm程度の砂粒含む	青白色				
40-6	42	7区 番58 IP 1603	土師器	皿		69	38	15	圓輪ナデ							
40-7	41	7区 番60 SK-50	土師器	瓶		136	72	19	圓輪ナデ	圓輪ナデ後ナデ	圓輪包含む	灰白色				
40-8		7区 番64 SK-63	土師器	瓶		92	67	16	圓輪ナデのちナデ	圓輪ナデ、底部圓輪へア起こし	2mm程度の砂粒含む	にふい青色				
40-9	42	7区 番65 SK-64	土師器	瓶		122	70	30	圓輪ナデのちナデ	圓輪ナデ、底部圓輪各切り	2mm程度の砂粒含む	にふい青褐色				
40-10	43	6区 番77 SK-62	土師器	杯		151	72	44	圓輪ナデ	圓輪ナデ、底部圓輪各切り						
40-11	43	6区 番77 SK-62	土師器	杯		145	76	42	圓輪ナデ	圓輪ナデ、底部圓輪各切り						
40-12	43	6区 番77 SK-62	青磁	瓶	丁型	110			鶴文	鶴文	青	淡オリーブ	龍鳳彌足			
40-13	43	6区 番77 SK-62	青磁	瓶	丁型	58			片空窓の花文	裏台内に墨書きあり			龍鳳彌足			

H9(5)	引脚数	引上物	地図	名様	形式名	寸法(mm)	外形・諸形			記号	色質	使用
							100	高さ	幅			
41-1	41	7足 50P SK-52	上の番	1号		120	60	42	1962ナメ	円柱ナメ、両面粗面各部分	2m程度の浮遊度も に応じ得る色	
41-2	41	7足 50P SK-52	他の (本機用)	2号		190	70	54	同上ナメ	円柱ナメ、外側粗面小部分	1m程度の浮遊度も に応じ得る色	
41-3	41	7足 50P SK-52	右側	3号		174			同上	同上	青	オーバーブル
41-4	41	7足 50P SK-52	中間	4号		176			同上	△印の選考式	青	オーバーブル
41-5	41	7足 50P SK-52	左側	5号		40			△印の花文	表面粗面で凸凹	青	オーバーブル
41-6	44	7足 50P SK-52	右側	6号		40			△印のみにステンレス	表面粗面で選択	青	オーバーブル
41-7	7足 50P SK-52	右側	7号	1-5號		120			菱形文	菱形	青	オーバーブル
41-8	41	7足 50P SK-52	右側	8号	V型	60			菱形と斜めに複数あり	菱形斜面で複数	青	オーバーブル
41-9	41	7足 50P SK-52	右側	9号	1-5號	50			菱形のみに花文	菱形	青	オーバーブル
41-10	41	7足 50P SK-52	右側	10号	1-5號	58			菱形文、両面粗面で凸凹	菱形文、両面粗面で凸凹	青苦	オーバーブル
41-11	41	7足 50P SK-52	右側	11号		52			菱形文面	菱形	青	オーバーブル
41-12	41	7足 50P SK-52	右側	12号		70			△印ナメ	△印ナメ	青	オーバーブル
42-1	45	SK08	右側	13号		84			△印ナメ	△印ナメ、両面粗面にV字溝	菱形面を含む	深灰色
42-2	45	611-P460	右側	14号					ナメ	ボタン穴のつまみ	菱形面を含む	深灰色
42-3	45	SK460240	右側 (裏側)	15号		250			ナメ	ナメ	2m程度の浮遊度も に応じ得る色	
42-4	45	P119	右側	16号			228		△コハク。絶縁による遮断	△コハク	2m程度の浮遊度も に応じ得る色	黒色
42-5	45	P140	上部番	17号		85	56	14	円柱ナメ	円柱ナメ、両面粗面で凸凹	菱形面を含む	に応じ得る色、空洞
42-6	46	P2017	4.5番	18号					ナメ	ナメ、逆三角状の面を張り付ける	菱形面を含む	深灰色
42-7	45	P1149	左翼二番	19号		250			ナメ	ナメ、鋼製の突起が強く	2m程度の浮遊度も に応じ得る色	
42-8	45	P184	瓦葉十番	20号		260			ハサミ型底スリット	ナメ	1m程度の浮遊度も に応じ得る色	
43-1	45	P5.5	右側	21号		274			同上	同上		
43-2	45	P9.5	右側	22号		270			同上、表面に光澤	同上	銀色	
43-3	45	P1388	右側	23号	正方形	170			菱形、四隅花形の面を削ぐ	菱形	銀色	口火色
43-4	45	P567	右側	24号	2脚	66			菱形と斜めの線で複数あり	斜面のみは鏡面	青	黒芯色
43-5	45	SK08	右側	25号	V型	60			菱柱	菱柱	銀色	深白色
43-6	45	P7-P1195	右側	26号	1-1b號	122	50	27	菱形のみにステンレスの花文あり	裏面を削いて底計	銀色	深白色
43-7	45	P7-P1195	右側	27号	2脚	116			菱柱、上端部の斜面を削ぐ	菱柱	銀色	黒芯色

測定番号	年月日	出力位置	種別	基準	盤式、時間	計測距離 (cm)	文様・測量		粘土	色調	備考
							内面	外面			
43-6	45	P108t	青磁	鏡	I-4盤	16.0	墨文	施釉	繊密	灰オリーブ色	織目盛系
43-9	45	7区 P946	青磁	鏡	II1盤	16.0	見込みと落別の間に段あり	模造介文	繊密	灰オリーブ色	織目盛系
43-10	45	P1462	青磁	鏡	II1盤	16.0	施釉	模造介文	繊密	灰オリーブ色	織目盛系
43-11	45	P1371	青磁	鏡		16.0	施釉	ハク書き墨文	繊密	灰オリーブ色	織目盛系
43-12	45	P462	青磁	鏡		16.0	施釉	施釉	青	灰緑色	
43-13	45	P332	青磁	鏡		16.0	施釉	施釉、口縁下に墨文有	繊密	灰オリーブ	織目盛系
43-14	45	P1258	青磁	鏡		13.4	施釉	施釉、口縁は施釉無	青	暗緑灰色	織目盛系
43-15	45	P136	青磁	皿		4.0	施釉、模造文	施釉、底部下には落拓	繊密	灰緑色	同安風承
43-16	45	P557	青白磁	合子(鏡)		5.0	天井部 施釉	表面 模造文	青	灰白色	
43-17	45	陶器	鏡			3.5	施釉	施釉			胡麻玉網陶器
45-1	45	5区	須恵器	低鉄高環		10.4	円軋ナデ、自然釉(鉢脚)	凹軋ナデ	1mm程度の砂粒を含む	暗灰色	鋸部分
45-2	45	5区	須恵器	高脚碗			円軋ナデ	凹軋ナデ、凹削文2条、自然釉	1mm程度の砂粒	灰毛	
45-3	45	7区	土壘器	耳		17.6	7.6	6.7 ナデ	ナデ	3mm以下の鉢底、 石突、微量に含む	灰黄褐色
45-4	45	7区	土壘器	皿		2.0	施釉により不明瞭	凹軋ナデ、凹削み切り	青		
45-5	46	6区	陶器 (削滑底)	鏡		31.0	ナデ	凸筋輪	微砂粒を含む	灰緑色	
46-1	46	7区	瓦質土器	皿			ハケ調整、ナデ、微削底直	ハケ調整、ナデ	3mm程度の鉢底、 露骨、底面に含む	暗灰色	スス付着
46-2	46		瓦質土器	鏡		27.0	ヨコハケ	ナデ	微砂粒を含む		スス付着
46-3	46	7区	瓦質土器	鏡		11.4	削減削しい	ナデ、底部に削状の圧痕	3mm程度の鉢底、 露骨含む	暗灰色	
46-4	46	6区	瓦質土器	鏡		28.0	ヨコハケ	ナデ	微砂粒を含む	灰褐色	
46-5	45	7区	瓦質土器	鏡		24.0	ハケ調整	表化物が多量に付着		灰褐色	スス付着
46-6	46	7区 No.104	瓦質土器	鏡		29.0	ヨコナデ、ハケ調整、 微削底直	ヨコナデ、微削底直	4mm程度の鉢底、 露骨含む	淡灰色	
47-1	46	7区	白磁	鏡	V鏡	17.0	施釉、底部上半に沈堆、 足込みに段あり	施釉	繊密	灰白色	
47-2	46		白磁	鏡		19.4	施釉	施釉	繊密	灰白色	
47-3	46		白磁	鏡	III鏡	18.7	5.8	6.4 施釉、模造文	裏台盤まで施釉	繊密	灰白色
47-4	46	7区 5層	白磁	鏡		4.0	施釉	底部下半は露底、 3分割に際が付く	繊密	白色	焼化粧
47-5	46	6区 5層	青白磁	鏡		4.4	施釉、印文	表台盤まで施釉	繊密	青白色	
47-6	46	5区 3層	白磁	皿	縦縞	13.0	見込みにスタンプ文	施釉	繊密	灰白色	

登録番号	名前	性別	年齢	学年	学年・性別			性別	名前	性別
					上級	中級	下級			
47-7	田中 駿	男	4歳	山形	城	三歳	3歳	男	田中 駿	男
47-8	田中 大也	男	1歳	山形	小城	1歳	1歳	男	田中 大也	男
47-9	田中 祐太	男	1歳	山形	城	1歳	1歳	男	田中 祐太	男
47-10	田中 晴夏	女	2歳	山形	城	2歳	2歳	女	田中 晴夏	女
47-11	田中 航	男	3歳	山形	城	3歳	3歳	男	田中 航	男
47-12	P2020	田中	4歳	山形	城	4歳	4歳	男	田中	男
47-13	田中 真緒	女	4歳	山形	城	4歳	4歳	女	田中 真緒	女
47-14	田中 瑞穂	女	5歳	山形	城	5歳	5歳	女	田中 瑞穂	女
47-15	田中 優希	女	1歳	山形	城	1歳	1歳	女	田中 優希	女
47-16	田中 美音子	女	2歳	山形	城	2歳	2歳	女	田中 美音子	女
47-17	田中 真理	女	3歳	山形	城	3歳	3歳	女	田中 真理	女
47-18	田中 瑞穂	女	3歳	山形	城	3歳	3歳	女	田中 瑞穂	女
47-19	田中 晴香	女	3歳	山形	城	3歳	3歳	女	田中 晴香	女
48-1	田中 真理	女	4歳	山形	城	4歳	4歳	女	田中 真理	女
48-2	田中 瑞穂	女	4歳	山形	城	4歳	4歳	女	田中 瑞穂	女
48-3	田中 瑞穂	女	5歳	山形	城	5歳	5歳	女	田中 瑞穂	女
48-4	田中 瑞穂	女	5歳	山形	城	5歳	5歳	女	田中 瑞穂	女
48-5	田中 瑞穂	女	5歳	山形	城	5歳	5歳	女	田中 瑞穂	女
48-6	田中 瑞穂	女	5歳	山形	城	5歳	5歳	女	田中 瑞穂	女
48-7	田中 瑞穂	女	5歳	山形	城	5歳	5歳	女	田中 瑞穂	女
48-8	田中 瑞穂	女	5歳	山形	城	5歳	5歳	女	田中 瑞穂	女
48-9	田中 瑞穂	女	5歳	山形	城	5歳	5歳	女	田中 瑞穂	女
48-10	田中 瑞穂	女	5歳	山形	城	5歳	5歳	女	田中 瑞穂	女
48-11	田中 瑞穂	女	5歳	山形	城	5歳	5歳	女	田中 瑞穂	女
48-12	田中 瑞穂	女	5歳	山形	城	5歳	5歳	女	田中 瑞穂	女
48-13	田中 瑞穂	女	5歳	山形	城	5歳	5歳	女	田中 瑞穂	女
48-14	田中 瑞穂	女	5歳	山形	城	5歳	5歳	女	田中 瑞穂	女

登録番号	品種名	出所・位置	群別	官能評価	方式・品種	平均株高(cm)	茎葉	花色	果実・果梗	特徴・特長		熟度	色調	備考			
										1月	2月	3月	4月	5月			
49-1	SK05 トカラジョン 1号	鹿児島 県	純			125		白	弱酸						成形の特徴をもつ 底少	実用・工具用	
49-2	6.5 東北地区6号	青森 県	強			48		薄紅、洋紅	全開結果						成形	軽量・熱伝導	
49-3	7.0 JGJ-09 重慶	鹿児島 県	純	7.0-3		40		薄紅、土紅色に星状	強酸、土紅色に星状						成形の特徴をもつ 底少	軽量・耐熱性	
49-4	47 SK-3種	石垣島 県														苦い緑色	草葉味
49-5	47 JGJ-08	吉野 県	小粒														
49-7	47 GL-20H	青森 県	分離														
49-8	47 7.0	石垣島 県	二													赤茶色	
60-1	SK-40H	上野屋 市				300	—	—	ナゲ		さわやかさのナゲ				甘味優先も	に高い熟度	
60-2	SK-40H	上野屋 市				50			弱酸ナゲ		酸味ナゲ 酸味酸味入り				酸味起立も	に高い熟度	
60-3	SK-70H	十村郡 村			—	50	—	—	弱酸ナゲ		酸味ナゲ 酸味酸味入り				成形の特徴をもつ 底少	高酸味	
60-4	SK-70H	十村郡 村			80	44	10	酸味ナゲ		酸味ナゲ 酸味酸味入り					酸味酸味も	に高い熟度	
60-5	SK-70H	上野屋 市			72	58	10	弱酸ナゲ		酸味ナゲ 酸味酸味入り					酸味酸味も	に高い熟度	
60-6	SK-72H	上野屋 市			70	58	10	弱酸ナゲ		酸味ナゲ 酸味酸味入り					酸味酸味も	に高い熟度	
60-7	SK-72H	芦原 市	三		—	30	—	無味		酸味 酸味は物足かない					苦味	苦味色	
60-8	SK-70H	吉野 市			—	50	—	酸味		酸味 酸味は物足からない					酸味色	酸味系	
60-9	SK-70H	二の谷 市	三		260	—	—	ナゲ		ナゲ					成形の特徴をもつ 底少	高酸味	
60-10	SK-70H	上野屋 市		(共)	(共)	53	(共)	(共)	12		さわやかさのナゲ				成形の特徴をもつ 底少	高酸味	
60-11	SK-70H	一泊郡 上野		(共)	(共)	50	(共)	(共)	12		さわやかさのナゲ				酸味酸味も	高酸味	
60-12	SK-70H	上野屋 市		(共)	(共)	70	(共)	(共)	11		さわやかさのナゲ				酸味酸味も	高酸味	
60-13	SK-70H	二の谷 市	二		—	54	—	弱酸ナゲ		酸味ナゲ 酸味酸味入り					成形の特徴をもつ 底少	に高い酸味	
60-14	SK-70H	上の谷 市	五			70	48	12	弱酸ナゲ		酸味ナゲ 酸味酸味入り				成形の特徴をもつ 底少	高酸味	
60-15	SK-70H	宝篋系 外				260			弱酸ナゲ		弱酸ナゲ				成形の特徴をもつ 底少	高酸味	二の谷が高酸味
60-16	SK-70H	十村郡 一	四		(共)	63	(共)	(共)	12		さわやかさのナゲ				酸味酸味も	高酸味	高酸味
60-17	SK-70H	上野屋 市	三		(共)	52	(共)	(共)	12		さわやかさのナゲ				酸味酸味も	高酸味	
60-18	SK-70H	二の谷 市	五		—	60	—	—	弱酸ナゲ		弱酸ナゲ 酸味酸味入り				成形の特徴をもつ 底少	に高い酸味	
60-19	SK-70H	吉野 市	生葉			298	—	—	ナゲナゲ		ナゲナゲ				成形の特徴をもつ 底少	高酸味	外観にスリガラ
60-20	SK-70H	吉野 市	生葉			260	—	—	無味		無味				苦味	苦味色	

測定番号	平均直径	上部口径	種性	等級	型式・特徴	寸法(単位:mm)			工具・形状			測定	色調	備考
						内径	外径	高さ	内面	外面				
65-4	85.4 P420	上部器	正			74	38	69	内面ナラ	内面ナラ 外面同軸丸み	直	白い緑		
65-5	85.4 P431	上部器	正			31.4	32	50	内面ナラ	内面ナラ	直	白い緑		
65-6	50.8 P430	上部器	次			—	38	—	内面ナラ	内面ナラ 外面同軸丸み	low以下	白い緑		
65-7	85.4 P28	上部器	好			—	54	—	内面ナラ	内面ナラ 外面同軸丸み	側面や少な	白色		
65-8	85.4 P431	上部器	次			96	38	29	内面ナラ	内面ナラ 外面同軸丸み	low以下の側面含む	緑色		
65-9	50.8 P28	上部器	好			104	60	30	内面ナラ	内面ナラ 外面同軸丸み	low以下の側面含む	白色		
65-10	50.8 C P24	上部器	正			89	40	17	内面ナラ	内面ナラ 外面同軸丸み	側面含む	深緑灰色		
65-11	30.8 C P451	上部器	好			128	56	39	内面ナラ	内面ナラ 外面同軸丸み	側面や少な	黒色	黒化する	
65-12	85.4 P451	上部器	一端			209	—	—	ナラ	スピナスのちナラ	low以下の側面含む	紅ぶき質感	外芯にスヌ付番	
66-1	85.4 S201	上部器	好			—	64	—	内面ナラ	内面ナラ 外面同軸丸み	直	白い緑		
66-2	85.4 S201	上部器	好						ハナダ	ケヌリ	側面含む	褐色		
66-3	85.4 S201	内筒	佳	新透		158	—	—	端面	端面	直	深褐色		
66-4	85.4 S200-31	内筒	良	新透	内筒	166	—	—	X端	X端	直	褐色		
66-5	85.4 S201	内筒	佳	新透	内筒	160	—	—	端面	端面	直	褐色		
66-6	85.4 S202-29	内筒	良			—	70	—	X端	端面下半まで体積	直	褐色		
66-7	85.4 S203	内筒	良			—	50	—	端面	端面	直	褐色		
66-8	85.4 S202	内筒	良	新透	内筒	160	—	—	X端	端面X端	直	褐色	褐色化	
67-1	50.8 E 667	上部器	好			122	48	58	内面ナラ	内面ナラ 外面同軸丸み	low以下の側面含む	深褐色	黒化する	
67-2	50.8 E 667	上部器	正			76	48	15	内面ナラ	内面ナラ 外面同軸丸み	側面含む	褐色		
67-3	50.8 E 667	上部器	好			20	58	13	内面ナラ	内面ナラ 外面同軸丸み	low以下の側面含む	深褐色		
67-4	51.8 E 667	上部器	新透		(5.2) 94	(5.5) 61	(4.6) 17	—	—	—	—	—	硝の部分失火	
70-1	85.4 667	標準器	標準器	標準		112	—	—	内面ナラ	内面ナラ	直	褐色		
70-2	85.4 667	標準器	標準器	標準		120	—	—	内面ナラ	内面ナラ	側面含む	褐色		
70-3	85.4 667	標準器	標準器	標準		—	64	—	内面ナラのちナラ	内面ナラのちナラ	側面含む	褐色		
70-4	85.4 667	標準器	標準器	標準		—	80	—	ナラ	ナラ	側面含む	褐色		
70-5	85.4 667	標準器	標準器	標準		122	—	—	内面ナラ	内面ナラ	直	褐色		
70-6	85.4 667	標準器	標準器	標準		140	—	—	内面ナラ	内面ナラ	直	褐色		

測定点	分類別	位置	形状	岩種	模式・判斷	計測値(cm)			文部・葉葉	地土	色調	備考
						(A)	(B)	(C)				
71-1	8区 3層上面	上端部	正			136	—	—	葉葉ナデ	1m以上の砂利含む 表面凹凸あり	苔綠色	
71-2	8区 4層上面	中端部	正			140	70	45	葉葉ナデ	1m以下の砂利含む 表面凹凸あり	淡青色	
71-3	8区 4層上面	中端部	正			80	40	19	葉葉ナデのちナデ	葉葉ナデ 葉葉凹凸あり	青	複合
71-4	8区 3層	上端部	正			92	54	21	葉葉ナデのちナデ	葉葉ナデ 葉葉凹凸あり	褐色含む	に赤い斑塊化
71-5	8区 3層	上端部	正			70	38	23	葉葉ナデのちナデ	葉葉ナデ 葉葉凹凸あり	1m以下の砂利含む	苔綠色
71-6	8区 4層上面	上端部	正			80	62	10	葉葉ナデのちナデ	葉葉ナデ 葉葉凹凸あり	青	淡青色
71-7	8区 4層上面	上端部	正			76	55	12	葉葉ナデ	葉葉ナデ 葉葉凹凸あり	1m以下の砂利含む	淡青色
71-8	8区 3層	上端部	正			294	—	—	—	—	—	
71-9	8区	上端部	正			250	—	—	—	—	—	
71-10	8区 4層上面	上端部	斜傾			366	—	—	ハケナデ	ナデ	青	灰白色、 黒斑点
71-11	8区	上端部	上端			(A) 30	(B) 23	(C) 05	—	—	—	灰綠色
71-12	8区 3層	上端部	上端			(A) 32	(B) 09	(C) 24	—	—	—	に赤い斑塊色
71-13	8区	上端部	上端			(A) 36	(B) 12	(C) 04	—	—	—	に赤い斑塊色、 基盤
71-14	8区 3層	中端部	正			(A) 38	(B) 13	(C) 05	—	—	—	に赤い斑塊色
71-15	8区 4層上面	中端部	正			(A) 47	(B) 11	(C) 04	—	—	—	黒灰色
71-16	8区 3層	上端部	上端			(A) 42	(B) 12	(C) 04	—	—	—	黒灰色
71-17	8区 3層	上端部	上端			(A) 24	(B) 11	(C) 04	—	—	—	黒灰色
71-18	8区 3層	中端部	正			(A) 42	(B) 10	(C) 05	—	—	—	淡青色
71-19	8区 3層	上端部	上端			(A) 45	(B) 13	(C) 04	—	—	—	黒灰色
71-20	8区 3層	上端部	上端			(A) 48	(B) 12	(C) 03	—	—	—	淡青色
71-21	8区 4層上面	上端部	上端			(A) 45	(B) 12	(C) 04	—	—	—	淡青色
71-22	8区 3層	中端部	正			(A) 48	(B) 15	(C) 06	—	—	—	に赤い斑塊
71-23	8区 4層	中端部	正			(A) 49	(B) 14	(C) 04	—	—	—	淡青色
71-24	8区	中端部	上端			(A) 51	(B) 13	(C) 04	—	—	—	黒灰色
71-25	8区 3層上面	上端部	上端			(A) 48	(B) 32	(C) 13	—	—	—	黒灰色
71-26	8区 3層上面	中端部	中端			(A) 63	(B) 30	(C) 12	—	—	—	淡青色の砂利含む
72-1	8区 3層	基部	上端			260	—	—	ハケのちナデ	ハケのちナデ	灰	付茎にスズ付茎

測定番号	年令(生後)	性別	種類	性別・特徴	計測値(cm)			平均	標準偏差	範囲	性別	色調	備考
					頭長	頭幅	頭高						
72-2	8ヶ月	雌	成年	個体	27.1	—	—	ハサウ ヌリヨウ海鷺	ユビヅメのちナギ	青	灰色	淡灰色	
72-3	8ヶ月	雄	成年	上綱	26.0	—	—	ナゲ	スギ津波のちナギ	青緑	灰白色	外側にスジ有り	
72-4	8ヶ月	雄	成年	個体	26.4	—	—	ハケ日鷹	ユビヅメのちナギ	赤	灰白色	灰色	
72-5	8ヶ月	正型	成年	上綱	28.0	—	—	ナゲ	スギ津波のちナギ	青緑	灰白色	灰色	
72-6	8ヶ月	異常	成年	上綱	26.8	—	—	ナゲ	スギ津波のちナギ	赤	灰白色	外側にスジ有り	
72-7	8ヶ月	異常	成年	上綱	27.6	—	—	ナゲ	ナゲ	青緑	灰白色	黑色	
72-8	8ヶ月	異常	成年	上綱	27.6	—	—	ナゲ	ナゲ	青	灰白色	外側にスジ有り	
72-9	8ヶ月	異常	成年	上綱	27.2	—	—	ナゲ	スギ津波のちナギ	赤	灰白色	黑色	
72-10	8ヶ月	異常	成年	上綱	—	—	—	ナゲ	ナゲ	青	灰白色	黑色	
72-11	8ヶ月	正常	成年	上綱	25.0	—	—	ナゲ	ナゲ	青	灰白色	灰色	
72-12	52	8ヶ月	正常	火傷	30.8	—	—	ナゲ	ナゲ	青	深褐色	外側に白帯を有する	
72-13	52	8ヶ月	正常	火傷	26.0	—	—	ナゲ	ナゲ、ハラ脱毛	赤	灰白色	外側に墨斑を有する	
73-1	8ヶ月(上部 火傷)	変性者	雄	成年	21.0	—	—	頭輪ナギ	藍青ナギ	青	灰色		
73-2	8ヶ月	変性者	雄	成年	26.0	—	—	頭輪ナギ	頭輪ナギ	青	灰白色	青灰色	
73-3	8ヶ月	変性者	雄	成年	26.6	—	—	頭輪ナギ	頭輪ナギ	青	灰色		
73-4	8ヶ月	変性者	雄	成年	26.0	—	—	頭輪ナギ	頭輪ナギ	青	灰色		
73-5	52	8ヶ月	変性者	雄	—	—	—	頭輪ナギ	頭輪ナギ	青	深褐色	上部前面に白斑有	
73-6	8ヶ月	変性者	雄	成年	27.6	—	—	ナゲ ヌリヨウ海鷺	ナゲ	青	灰白色	灰色	
73-7	8ヶ月	變性	雄	成年	23.4	—	—	ナゲ ヌリヨウ海鷺	ナゲ	青	深褐色		
73-8	8ヶ月	變性	雄	成年	23.0	—	—	ナゲ ヌリヨウ海鷺	ユビヅメのちナギ	青	深褐色	青灰色	
74-1	8ヶ月	火傷	雄	成年	11.8	—	—	頭輪ナギ	頭輪ナギ	青	深褐色	黑色	
74-2	8ヶ月	火傷	雄	成年	—	—	—	—	—	—	—	—	
75-1	8ヶ月	火傷	雄	成年	15.0	—	—	頭輪	頭輪	青	灰色		
75-2	8ヶ月	火傷	雄	成年	15.4	—	—	頭輪	頭輪	青	灰白色		
75-3	8ヶ月	火傷	雄	成年	16	—	—	頭輪	頭輪上半まで脱毛	青	灰白色		
75-4	8ヶ月	火傷	雄	成年	15.8	—	—	頭輪	頭輪	青	灰白色		
75-5	8ヶ月	火傷	雄	成年	17.0	—	—	頭輪	頭輪	青	灰白色		

4月8日	4月9日	ルート番号	登場	登場	2. 計算 (cm)			回数	支度・活動	回数	過半	名簿	備考
					前回	後回	移動						
75-6	82	398	白鷺	後	♀繁殖	160	—	—	飛翔	飛翔	男	過半数	
75-7	83	399	白鷺	後	V繁殖	160	—	—	飛翔	飛翔	男	過半数	
75-8	84	—	山鳩	後	♂繁殖	160	—	—	飛翔	飛翔	男	過半数	
75-9	85	—	山鳩	後	V繁殖	160	—	—	飛翔	飛翔	男	過半数	
75-10	86	398	白鷺	後	♂繁殖	160	—	—	飛翔	飛翔	男	過半数	
75-11	87	418	白鷺	後	♂繁殖	120	—	—	飛翔	飛翔	男	過半数	白鷺の糞を撒き散る
75-12	88	—	白鷺	後	繁殖	120	—	—	飛翔	飛翔	男	過半数	白鷺の糞を撒き散る
75-13	89	398-418	内鶴	後		160	—	—	飛翔	飛翔	男	過半数	
75-14	90	398	白鷺	後		156	—	—	飛翔	飛翔	男女皆少	過半数	
75-15	91	398	白鷺	後	♂繁殖	—	74	—	飛翔	飛翔	男	過半数	
75-16	92	398	白鷺	後	♂繁殖	—	78	—	飛翔	飛翔	男女皆少	過半数	
75-17	93	418	白鷺	後	♂繁殖	—	60	—	飛翔	飛翔	男	過半数	
75-18	94	398	白鷺	後	♂繁殖	—	20	—	飛翔	飛翔	男女皆少	過半数	
75-19	95	—	白鷺	後	♂繁殖	—	52	—	飛翔	飛翔	男	過半数	
75-20	96	398	白鷺	後		62	—	—	飛翔	飛翔	男女皆少	過半数	
76-1	97	418	白鷺	後	♂繁殖	—	120	—	飛翔	飛翔	男	過半数	
76-2	98	398	白鷺	後	♂繁殖	94	40	23	飛翔	飛翔	男女皆少	過半数	
76-3	99	398	白鷺	後	♂繁殖	98	—	—	飛翔	飛翔	男	過半数	
76-4	100	—	白鷺	後		—	46	—	飛翔	飛翔	男女皆少	過半数	
76-5	101	—	白鷺	後	繁殖	92	52	36	飛翔	飛翔	男女皆少	過半数	白鷺の糞を撒き散る
76-6	102	—	白鷺	後	繁殖	88	58	28	飛翔	飛翔	男女皆少	過半数	白鷺の糞を撒き散る
76-7	103	398	白鷺	後		250	—	—	飛翔	飛翔	男女皆少	過半数	
76-8	104	398	白鷺	後		115	—	—	飛翔	飛翔	男	過半数	
76-9	105	398	白鷺	後	♀育成	—	—	—	飛翔	飛翔	男	オーバーアク	
76-10	106	398	白鷺	後	♀育成	—	63	—	♂繁殖	♂繁殖	男	過半数	
76-11	107	398	白鷺	後	♀育成	—	65	—	飛翔	飛翔	男	過半数	
76-12	108	398	白鷺	後	♀育成	—	60	—	飛翔	飛翔	男	過半数	希望一か月以内白鷺がかかる

測定番号	測定地	計上空門	鉛錠	鉛錠	鉛錠	鉛錠	鉛錠	鉛錠	表面性状 (C)		表面性状 (C)		鉛錠	鉛錠	鉛錠
									表面性状	表面性状	表面性状	表面性状			
77-1	8区	青緑	緑	緑	1-100	158	-	-	無様	凹凸不平に溝、深溝、へり波と発達した突起	無様	無	荒山系	河床底名	
77-2	8区	青緑	緑	緑		148	-	-	無様		細かい微細な	無	オリーブ系	河床底名	
77-3	8区	青緑	緑	緑	1-25	164	-	-	無様	方針葉茎葉	無様	無	オリーブ系	河床底名	
77-4	青緑	青緑	緑	緑	3-10	258	-	-	無様		無様	青	荒地系	河床底名	
77-5	8区 30m	青緑	緑	緑	3-10	158	-	-	無様		無様	青	荒地系	河床底名	
77-6	8区 30m	青緑	緑	緑	2-10	180	-	-	無様		無様	青	オリーブ系	河床底名	
77-7	8区 30m	青緑	緑	緑	2-10	20	-	-	無様		無様	青	オリーブ系	河床底名	
77-8	8区 30m	青緑	緑	緑	C-25	150	-	-	無様		無様	青	オリーブ系	河床底名	
77-9	8区 1-2層	青緑	緑	緑	C-25	118	-	-	無様		無様	青	荒地系	河床底名	
77-10	8区 20m	青緑	緑	緑	D-10	62	-	-	無様	表面が砂まで塗膜	無	オリーブ系	河床底名		
77-11	8区 20m	青緑	緑	緑		64	-	-	無様	無様が(凸凹)及び	青	オリーブ系	河床底名		
77-12	8区 40m	青緑	緑	緑	D-10	-	-	-	無様	表面に花沫の状文があり、内側には無いかない	無	無様	河床底名		
77-13	8区	青緑	緑	緑	1-10	98	-	-	無様		無	無様灰色	河床底名		
77-14	8区 3層	青緑	緑	緑	1-10	-	18	-	無様	無様	無様には無いかない	青	荒山灰化	河床底名	
77-15	8区	青緑	緑	緑	1-10	110	-	-	無様		無	オリーブ系	河床底名		
77-16	8区 20m	青緑	緑	緑	1-10	-	30	-	無様	無様	無様には無いかない	青	オリーブ系	河床底名	
77-17	8区 3層	青緑	緑	緑	1-10	-	-	-	無様		無	オリーブ系			
77-18	8区	青緑	緑	緑	1-10	114	-	-	無様		無	オリーブ系	河床底名		
78-1	8区	青緑	緑	緑	正-30	40	-	-	無様		無	初期灰化	河床底名		
78-2	8区 30m	青緑	緑	緑		-	54	-	無様	表面にまで塗料	無	初期灰化	河床底名		
78-3	8区 30m	8区青灰	緑	緑		128	-	-	無様		無	河床底名	中國		
78-4	8区 3層	青緑	青子緑	緑		120	-	-	無様	無様	無	オリーブ系	河床底名		
78-5	8区 3層	青緑	青子緑	緑		56	-	-	ナゲ	ナゲ	微少粒状	灰白色	中国灰化		
78-6	8区	青緑	青緑	緑		90	-	-	ナゲ	ナゲ	無	無	中国	中国	
78-7	8区 3層	青緑	青緑	緑		250	-	-	ナゲ	ナゲ	無	無	中国	中国	
78-8	8区 3層	青緑	青緑	緑		252	-	-	無様ナゲ	無の落葉樹林	無以下の林地苔む	灰白色	中国	中国	
78-9	8区 3層	青緑	青緑	緑		252	-	-	無様ナゲ	無の落葉樹林	灰白色	灰白色	中国	中国	

件名	年月日	地名	種子	品種	品式・特徴	生长期 (日)			栽培・選定	性状	粒形	色調	備考
						日付	霜降	霜解					
78-10		福岡 3号	開花	年		120	—	—	耐寒	白	丸子形	細粒	
78-11		大分	開花	種		—	46	—	速生 早咲みに特徴	白	丸子形	粗粒	
78-12	56	福岡 3号	穀質	実業品種		140(20)	内蔵 70	—					人気 非常に 栽培率高い
78-13	66	NK20	低温	直射通性		適温(24)	内蔵 60	—					少産況 栽培率 111.4%
103-1	64	福岡 22 SG26	半耐寒	種		125	66	30	小粒タケ	圓柱形で、細長い身	3mm程度の落葉を含む	丸子形	
104-1	57	10K #113 SK-01	半耐寒	丸						タネ	1mm程度の粒を含む	丸子形	
104-2	57	10K #113 SK-01	直射	スリ体		264			ハナド説明	ハナド良品、ナゲ	1mm程度の身を含む	圓柱形	スリットを有する
104-3	57	10K #113 SK-01	直射	種		320			ハナド説明	ハナド良品	1mm程度の身を含む	丸子形	スリットを有する
104-4	57	10K #113 SK-01	直射	種					ハナド説明	ハナド良品	圓柱形	丸子形	小粒、スリットを有する
104-5	57	10K #113 SK-01	直射	種			64	36		圓柱形で粒身			圓柱形
104-6	57	10K #113 SK-01	直射	丸					回転ナゲ、薄粒	圓柱形		丸子形	小粒
104-7	57	10K #113 SK-01	直射	種		91			1mm以下に集結あり	1mm以下に集結あり	圓柱形	丸子形	粒間に空隙的
104-8	57	10K #113 SK-01	直射	種			50		1mm以下に集結あり	1mm以下に集結あり	圓柱形	丸子形	粒間に空隙的
105-1	58	9K 石川	直射	種		320			ハナド説明	ナゲ	1mm程度の粒を含む	圓柱形	スリットを有する
105-2	58	9K 石川	直射	種		140	300		ナゲ	ナゲ、表面凹凸感	1mm程度の粒を含む	圓柱形	スリットを有する
105-3	58	9K 石川	直射	種		140	322		ナゲ	ナゲ	1mm程度の粒を含む	圓柱形	スリットを有する
105-4	58	9K 石川	直射	種					ナゲ	ナゲ	2mm程度の粒を含む	圓柱形	
105-5	58	9K 石川	直射	種			126		ナゲ、丸粒状である	ナゲ	1mm程度の粒を含む	圓柱形	に深い空氣孔
105-6	58	9K 石川	直射	種					ナゲ、1mm程度ある	自然粒から	2 ~ 1mm程度の身を含む	圓柱形	
106-1	58	10K 仁科	直射	種					1mmナゲ	回転ナゲ	細粒粒身	丸子形	
106-2	58	10K 仁科	直射	種					スタンダードあり	スタンダードあり	圓柱形を含む	圓柱形	
106-3	58	10K 仁科	直射	種					ナゲ	ナゲ	1mm程度の粒を含む	丸子形	
106-4	58	10K 仁科	直射	種					ナゲ	ナゲ	1mm程度の粒を含む	丸子形	
106-5	58	10K 仁科	直射	種					ナゲ	ナゲ	1mm程度の粒を含む	丸子形	
106-6	58	10K 仁科	直射	種					ナゲ	ナゲ	1mm程度の粒を含む	丸子形	
106-7	58	10K 仁科	直射	種					ナゲ	ナゲ	2mm程度の粒を含む	圓柱形	
106-8	58	10K 仁科	直射	種					ナゲ	ナゲ	2mm程度の粒を含む	圓柱形	

品種名	原产地	品種名	形態	特徴	株高(cm)			花色	花期	特徴	株高	花期	特徴
					丈	幅	葉質						
127-9	56	95K-7式	脚部 (茎部)	強健		26.4		ナゲ	ナゲ	3cm程度の株立ちも	赤褐色	スリットなし	
127-10	56	10K-7式	脚部 (茎部)	強健		26.0		ナゲ	ナゲ		赤褐色	スリットなし	
127-11	56	10K-7式	脚部 (茎部)	強健		27.8		ナゲ	ナゲ	3cm程度の株立ちも	赤褐色	スリットなし	
127-12	58	10K-7式	脚部 (茎部)	強健		25.1		ナゲ	ナゲ	3~4cm程度の株立ち	赤褐色	スリットなし	
128-1	59	95K-7式	脚部	強健	76	52	14	玉代ナゲ	脚部ナゲ、茎部開裂性花序	3cm程度の株立ちも	赤褐色	スリットなし	
128-2	59	95K-7式	脚部	強健	74	50	12	玉代ナゲ	脚部ナゲ、茎部開裂性花序	4cm程度の株立ち	赤褐色	スリットなし	
128-3	59	95K-7式	脚部	強健	70.4			玉代	脚部ナゲ	3cm程度の株立ち	赤褐色	スリットなし	
128-4	59	95K-7式	脚部	中		64		脚部ナゲ	脚部ナゲ	脚部ナゲ	赤褐色	スリットなし	
128-5	59	95K-7式	脚部	中				脚部ナゲ、茎部開裂性花序	脚部ナゲ	3cm程度の株立ち	赤褐色	スリットなし	
128-6	59	95K-7式	脚部	中	26.3	67	21	玉代ナゲ(茎部) 玉代ナゲ(全頭)	脚部ナゲ、茎部開裂性花序	3cm程度の株立ち	赤褐色	スリットなし	
128-7	59	10K-7式	脚部	中	11.4	30	10	玉代ナゲ、茎部開裂性花序	脚部ナゲ、茎部開裂性花序	4cm程度の株立ち	赤褐色	スリットなし	
128-8	59	10K-7式	脚部	中	11.4	59	12	玉代ナゲ	玉代ナゲ、茎部開裂性花序	3cm以下の株立ち	赤褐色	スリットなし	
128-9	59	10K-7式	脚部	中	7.8	58	16	脚部ナゲ、根脚開裂性	脚部ナゲ、根脚開裂性	2cm程度の株立ち、 茎部開裂	赤褐色	スリットなし	
128-10	60	10K-7式	脚部	中		60		脚部ナゲ	脚部ナゲ、茎部開裂性花序	3cm程度の株立ち	赤褐色	スリットなし	
128-11	59	95K-7式	脚部	中		41.2		ナゲ	ナゲ	4cm程度の株立ち、 茎部開裂性花序	赤褐色	スリットなし	
129-1	60	95K-7式	葉質	濃		34.0		ナゲ、ハケ複型	ナゲ、脚部をつくりだす	3cm程度の株立ち、 葉質開裂	赤褐色	スリットなし	
129-2	60	10K-7式	葉質	濃		28.2		ナゲ、ハケ	ナゲ	3cm程度の株立ち	赤褐色	スリットなし	
129-3	60	10K-7式	葉質	濃	21.0	19.6	12.8	ハケ複型、茎部(4葉)重複	ナゲ	脚部ナゲを含む	赤褐色	スリットなし	
129-4	60	10K-7式	葉質	濃	29.0			ナゲ、ハケ複型	ナゲ、ハケ複型	脚部ナゲを含む	赤褐色	スリットなし	
129-5	60	95K-7式	葉質	濃	32.0			ナゲ	ナゲ	3cm程度の株立ち	赤褐色	スリットなし	
129-6	60	95K-7式	葉質	濃				ナゲ	ナゲ	3cm程度の株立ち	赤褐色	スリットなし	
129-7	60	95K-7式	葉質	濃		34.0		ナゲ、ハケ複型	ナゲ	脚部ナゲを含む	赤褐色	スリットなし	
130-1	60	10K-7式	葉質	中		32.0		ナゲ、ハケ複型	ナゲ	脚部ナゲを含む	赤褐色	スリットなし	
130-2	60	10K-7式	葉質	中		31.0		ナゲ	ナゲ	脚部ナゲを含む	赤褐色	スリットなし	
130-3	60	10K-7式	葉質	中		14.0		脚部ナゲ	ナゲ	3cm程度の株立ち	赤褐色	スリットなし	
130-4	60	10K-7式	葉質	中				脚部ナゲ	ナゲ	4cm程度の株立ち	赤褐色	スリットなし	
130-5	60	95K-7式	葉質	中				ハケ複型	ナゲ	4cm程度の株立ち	赤褐色	スリットなし	



ID	年月日	測定地名	測定場所	測定日	測定時間	測定者	測定方法	測定結果		結果	備考	備考
								測定値	標準値			
113-9	02/10/08	花園二葉	花園		210		イダ、瀬瀬江美	一括認定報告文、シダ	四輪駆動車も	良好		
113-10	02/10/08	高能牛沼	牛沼		310		ナガ	シダ、スチーフ	高齢駆動車も	良好		
114-1	02/09/08	高能苔(大草部)	大草				ナガ	シダ	50cm以上の草も含む	良好		
114-2	02/09/08	高能苔	スチーフ		236	122	31	ハラモ奈良原(大草部)ナガ	ナガ	2m程他の野草を含む	良好	
114-3	02/09/08	高能(高木畠)	木				ハラモ	草木のナガ	駆動車を含む	良好		
114-4	02/09/08	高能	木		108		駆動車によるナガ	シダ	駆動車を含む	良好		
114-5	02/10/08	高能(高木畠)	木				ナガ	シダ	駆動車のナガ	良好		
114-6	02/09/08	高能	木		160		ナガ、草木(7条1の他)	駆動車での草がかかる、駆動車に水を含む	50cm以上の草も含む	良好	水を含む	
114-7	02/10/08	高能	木		38		14種シダ	駆動車	駆動車	良好	水・青斑色	
114-8	02/10/08	高能(高木畠)	木				ナガ、自然物の小石	ナガ、草がかかる	駆動車の草を含む	良好		
114-9	02/09/08	高能	木				ハラモ	ハラモ	否	良好		
115-1	02/10/08	高能(高木畠)	木				駆動	駆動(草木下に草)		良好	青斑色	
115-2	02/10/08	高能(高木)	木		160		ナガ、駆動	駆動シダ、駆動	駆動車を含む	良好	駆動色	
115-3	02/09/08	高能(高木)	木		52		ナガと木	駆動木と、各種トドリ草	木	良好		
115-4	02/09/08	高能(高木)	木		254		ナガ、自然物の小石	ナガ	50cm以上の草を含む	良好		
115-5	02/09/08	高能(高木)	木				ナガ	ナガ(自然物の小石)	2m以上の草を含む	良好		
116-1	02/09/08	高能	木		120		駆動	駆動	駆動	良好	駆動青斑色	
116-2	02/09/08	高能	木		125	60	53B	駆動	全駆動車、駆動の駆動車	木	青斑色	駆動青斑色
116-3	02/09/08	高能	木		124	61	52	駆動、ナガ(青斑色)	駆動、ナガ(青斑色)	駆動	駆動青斑色	駆動・青斑色
116-4	02/09/08	高能	木				駆動	駆動	駆動車を含む	木	良好	駆動青斑色
116-5	02/09/08	高能	木				駆動	駆動	駆動車を含む	良好	駆動青斑色	
116-6	02/09/08	T-高能	木				駆動	駆動	駆動車を含む	良好	青斑色	
117-1	03/09/08	山道	木	計測	150		駆動	駆動	駆動車	良好	青斑色	
117-2	03/09/08	山道	木	V-駆	60		駆動	駆動	木	良好	青斑色	
117-3	03/09/08	山道	木	計測	74		駆動、駆動木(木)	駆動(木下に青斑)	木	良好	青斑色	
117-4	03/09/08	山道	木	計測	56		駆動	駆動	木	良好	青斑色	
117-5	03/09/08	山道	木	V-駆	59		駆動、駆動木(木)	駆動(木下に青斑)	木	良好	青斑色	

登録番号	出土地点	保有者	基盤	石灰+灰	内灰	外灰	鉱物	年月日	地質・風化・表面			活用	保護	備考
									内灰	外灰	鉱物			
117-6	60	10区	千葉	灰		120	30kg		ハサシカヌ	手	又角色			
117-7	60	10区	千葉	灰		125	30kg		伊豆下平まで深掘	手	又角色			
117-8	60		千葉	灰		130	30kg		風化	手	又角色			
117-9	60		千葉	灰		142	30kg		風化	手	又角色			
117-10	60		千葉	灰		140	60	20	風化	手	又角色			
117-11	60	10区	千葉	灰		150	80	20	風化	手	又角色			
117-12	60	10区	千葉	千葉市					風化ナダ、薄野	手	又角色			
117-13	60	10区 石巻丸	千葉	千葉市					風化ナダ、薄野	手	又角色			
117-14	60		千葉	千葉市					風化ナダ、薄野	手	又角色			
117-15	60	10区	千葉	千葉市		72	30kg		手	手	又角色			
117-16	60	10区	千葉	千葉市					風化を除き風化	手	又角色			
117-17	60		千葉	千葉市					風化を除き風化	手	又角色			
117-18	60		千葉	千葉市					風化	手	又角色			
118-1	64	10区	青崎	灰		150	30kg		ハサシカヌ	手	オリーブ灰	新発見		
118-2	64	10区	青崎	灰		154	30kg		ハサシ上部支承	手	又角色	新発見		
118-3	64		青崎	灰					ハサシ上部支承	手	又角色	新発見		
118-4	64	10区	青崎	灰					ハサシ、青崎市ヘラ骨	手	又角色	新発見		
118-5	64	10区	青崎	灰		160	30kg		ハサシ	手	又角色	新発見		
118-6	64	10区	青崎	灰		172	30kg		ハサシ	手	又角色	新発見		
118-7	64		青崎	灰		182	30kg		ハサシ、又角色の筋を含む	手	又角色	新発見		
118-8	64	10区	青崎	灰	194	30kg			ハサシ	手	又角色	新発見		
118-9	64		青崎	灰		202	30kg		ハサシ	手	又角色	新発見		
118-10	64	10区	青崎	灰		216	30kg		ハサシ、又角色の筋を含む	手	又角色	新発見		
118-11	64	10区	青崎	灰		224	30kg		ハサシにクレバ文様あり	手	又角色	新発見		
118-12	64	10区	青崎	灰		232	30kg		ハサシ	手	又角色	新発見		
118-13	64	10区	青崎	灰					ハサシ、支承あり	手	又角色	新発見		

登録番号	学年	性別	種類	品種	形式・名前	石高(株)			支店・営業			名前	色調	備考
						上社	中社	下社	内閣	外閣				
118-20	64		紫花	房			44							
118-21	66		白花	房			220		浅紅	深紅		青	青灰色	
118-22	64		紫花	房			200		ナツ	ナツ		朱色	桃色	
118-23	64		白花	房			104		紫紅	鉛色		桃色	黄灰色	
118-24	64	男	白花	房			130		ナツ	鉛色		淡沙青色向心	淡オリーブ	
118-25	64		白花	房			60		白輪ナツ	白輪ナツ		淡青色		
118-26	64		紫花	房					白輪	白輪		淡青色		
118-27	67	10品種 紫 SK-13	上輪藤	絲		128	60	31	内輪ナツ	内輪ナツ、浅紅の輪糞色切引	2mm程度の粉粒立ち	淡褐色		
118-28	67	10品種 紫 SK-11	上輪藤	絲		122	63	26	内輪ナツ	内輪ナツ、淡紅の輪糞色切引	1mm程度の粉粒立ち	淡褐色		
118-29	67	10品種 SK-03	開花(崩角)	木子網		253			ナツ	ナツ	2mm程度の粉粒立ち	淡褐色	スリット有	
118-30	67	10品種 SK-03 盆下藤	上輪藤	一連					ナツ				淡さ 5.5cm、幅 4.9cm	
118-31	67	10次郎 2TD SK-05	白輪	小(2)	重輪作代		39		鉛色	薄青緑葉を抱き鉛色	淡青	明緑灰色		
118-32	67	10品種 紫 SK-03	紫花	房			38		白輪	青紅下平は薄青	青	淡青		
118-33	65	10品種 SK-03	白輪藤	丁子網		256			黒成	ノコギ				
118-34	65		白輪藤	口										
118-35	66		白輪藤	口										
118-36	66		白輪藤	白輪房										
118-37	66		白輪藤	白輪房										
118-38	67		白輪藤	白輪房										

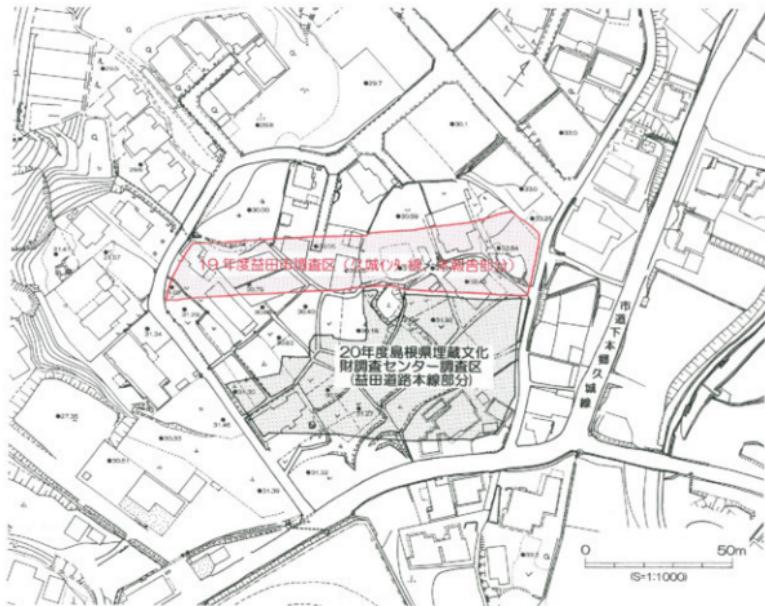
## 第4章 久城東遺跡

### 第1節 調査の概要

#### 1. 事業計画及び調査の経緯

例言及び第1章と内容的に重複すると思われるが、本遺跡に係る経緯として以下、詳述する。一般県道久城インター線は、国道9号線バイパスとして建設省（現国土交通省）により計画された益田道路を活用・補完するために、平成10年3月に都市計画決定されたもので、高津・久城インター・エンジン間（総延長2,520m）を結ぶ道路として平成13年度から事業に着手している。平成19年3月には、久城インター線の一部区間（約1,700m）が、益田道路の角井高津間及び市道中吉田久城線と同時に供用して、国道9号・191号の交通渋滞が大幅に緩和されるに至っている。また残区間（約850m）については、益田道路の久城・遠田間とともに、平成20年代初頭の全線開通を目指して事業が進められている状況であった。

こうした計画の事業化にあたって、建設予定地内の遺跡の有無についての照会を受け、平成10年度からの分布調査では24か所の遺跡および遺跡推定地の存在が判明するに至り、そのうちの1遺跡である久城東遺跡は既に石圓墓などの近世遺構が確認されていたほかに、平成17年度の島根県埋蔵文化財調査センターによる試掘調査では、溝状遺構の検出とともに古墳時代～飛鳥時代の須恵器高杯（脚部小片）なども確認されたことから、概ね古墳時代から江戸時代にかけて



第139図 久城東遺跡調査区位置図

の集落跡として推定されていたものである。

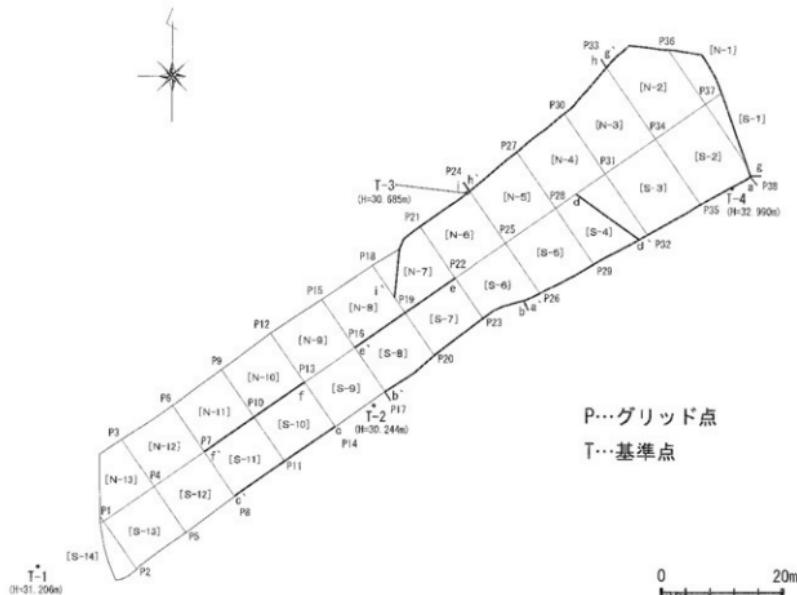
また本発掘調査については、国道は県、県道は市町の調査担当が多い通例も鑑みて、このたびも基本的には益田道路部分は島根県教育委員会、久城インター線部分は益田市教育委員会が担当するといった経緯を踏まえ、各々の対象となる遺跡について平成 16 年度から調査を開始している。

まず益田市教育委員会は、先に報告した益田川の東岸にあたる沖手遺跡に着手し、平成 16 ~ 18 年度までの 3 カ年で調査を完了している。翌 19 年度には久城町の丘陵部に移り、本報告する久城東遺跡の調査を平成 19 年 12 月には完了している。

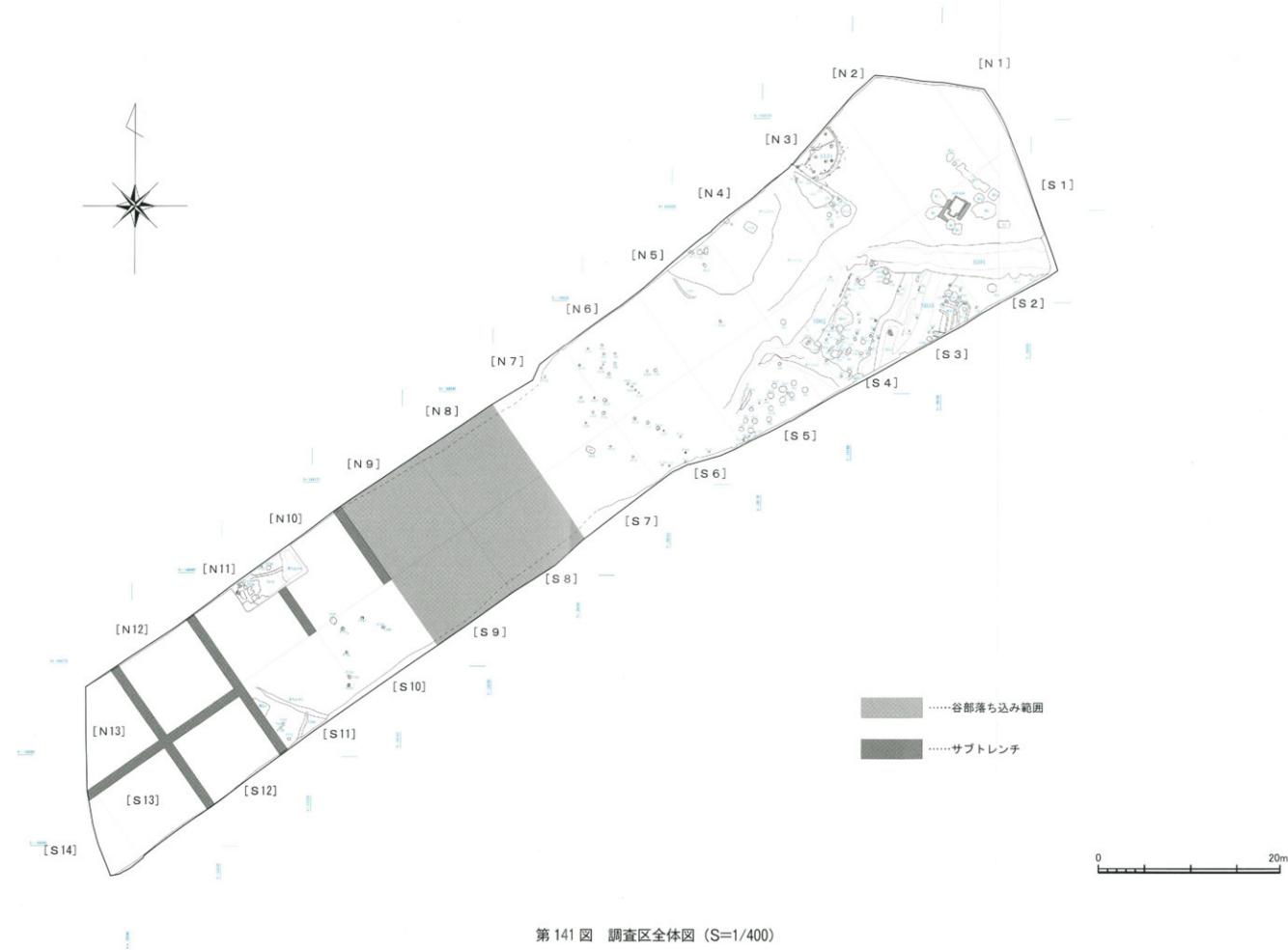
一方、島根県教育委員会の調査域推移も概ね市と同様であり、平成 16 ~ 17 年度には沖手遺跡、平成 18 年度からは久城町の丘陵・段丘上に着手して、専光寺脇遺跡と久城西 I 遺跡の一部、原浜遺跡の一部の調査を実施している。

また 19 年度からは、久城町の丘陵・台地上に着手し、原浜遺跡、久城西 I 遺跡、久城西 II 遺跡、若葉台遺跡、堂ノ上遺跡の調査を平成 21 年度までにはほぼ完了して、合わせて堂ノ上遺跡の久城インター線部分を平成 19、20 年度に実施して、終了している。

こうして益田道路及び県道久城インター線に係る本発掘調査はほぼ完了を迎える、平成 22 年 3



第 140 図 グリッド割全体図 (S=1/800)



第141図 調査区全体図 (S=1/400)

月には暫定供用を開始する予定となっている。

一方、所定の事務手続きについては、平成 18 年 12 月 11 日付け益整第 4428 号の調査費用書の作成依頼書に伴う回答提示の後、平成 19 年 4 月 1 日付け益整第 5263 号の契約依頼書をもって、平成 19 年 4 月 1 日付けで委託契約書を締結している。また調査終了後の平成 20 年 1 月 28 日には、減額措置に係る委託変更契約を締結した。

そして文化財保護法関係では、事業主体者から平成 19 年 4 月 27 日付け益整第 1210 号で埋蔵文化財発掘の通知（第 94 条第 1 項）が提出されて、島根県教育委員会からは平成 19 年 5 月 8 日付け島教文財第 2 号の 6 で発掘調査の勧告が出されている。これを受け益田市教育委員会からは平成 19 年 5 月 10 日付け益教文第 33 号で埋蔵文化財発掘調査の通知（第 99 条第 1 項）を提出して、調査前の諸手続きを終了している。

## 2. 調査組織

県道久城インター線建設に伴う久城東遺跡の埋蔵文化財発掘調査の体制は下記のとおりである。

調査主体 益田市教育委員会

平成 19 年度 現地調査

〔事務局〕 文化振興課

安達正美（課長）、野村正樹（課長補佐）、河野敏弘（課長補佐）、  
木原 光（課長補佐兼文化財係長）

〔調査員〕 山本浩之（主任）

〔調査補助員〕 寺戸淳二、池本篤（平成 19 年 8 月まで）

平成 20 年度 資料整理

〔事務局〕 文化振興課

木原 光（課長）、河野敏弘（課長補佐兼文化財係長）

〔整理調査員〕 山本浩之（主任）

〔整理調査補助員〕 寺戸淳二

〔整理作業者〕 大谷浪江、岡崎敦子、中村康恵、横山秀美、渡辺聰、齊藤ゆかり

平成 21 年度 資料整理

〔事務局〕 文化財課

木原 光（課長）、河野敏弘（課長補佐）

〔整理調査員〕 山本浩之（主任）

〔整理調査補助員〕 寺戸淳二、世良 啓

〔整理作業者〕 齊藤ゆかり

また発掘作業員については、益田市登録者及び新規募集者の地元の方々を中心としたもので、雇用者名は例言に列記したとおりである。

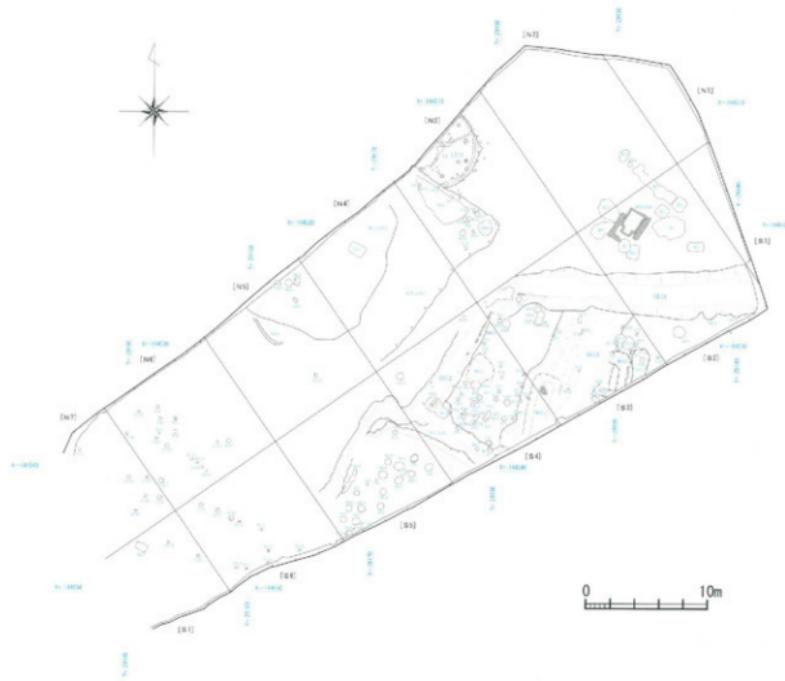
## 3. 調査の経過

久城東遺跡は益田市久城町 1305-5 ほかに所在し、益田川の東側に広がる台地上に位置している。当該地は、現地表面標高 33m ~ 30m を測り、北東側から南西側の中央域に向かい緩やか

に傾斜して、そこから南西方向へは平坦面を形成する。周囲には南東方向に旧島根県立益田工業高校が望見でき、また北方向約500m地点には国指定史跡スクモ塚古墳がみられる。またほぼ同時期に県教委によって実施されていた堂ノ上遺跡は南西方向に、若葉台遺跡や久城西II遺跡は北東方向に所在して、本遺跡はその中ほどに位置している（第2図）。

本発掘調査は一般県道久城インター線工事に伴い実施されたもので、その対象範囲は約2,500m<sup>2</sup>を測るもので、北東・南西方向に約125m、北西・南東方向に18～26mを測った細長い形状を呈して、現況は宅地・雑種地・墓等のみられる住宅地といえる場所であった（第139図）。なお当初の協議段階では約2,100m<sup>2</sup>とされていたが、資料整理に係る計測の結果、2,513m<sup>2</sup>と判明している。また平成20年度には益田道路工事に伴い、県教委によって隣接する南東域の調査が行われている。

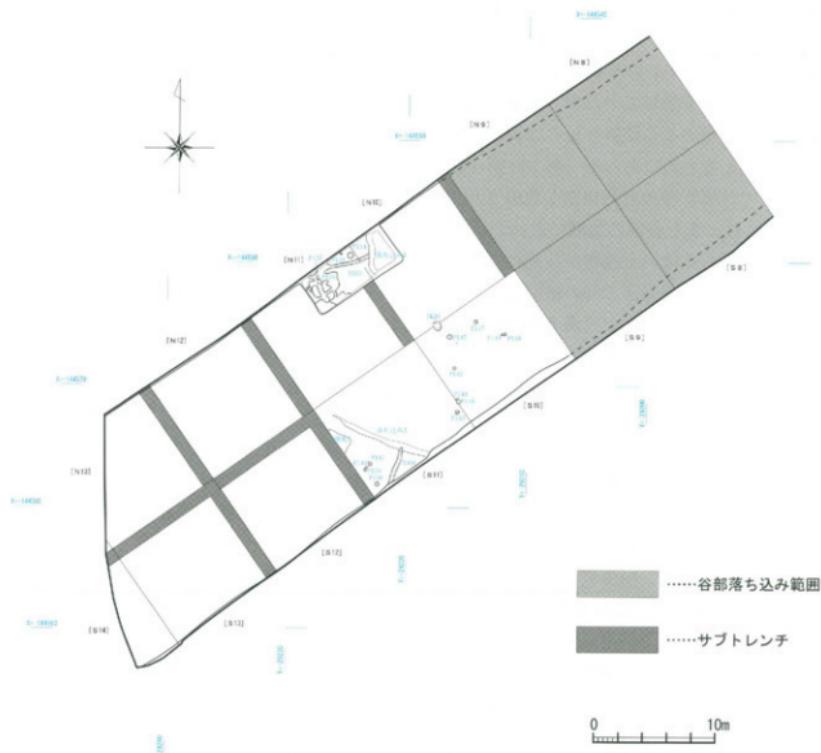
調査前には、既に住宅の撤去されたコンクリート基礎部や舗装道・排水溝などが北東域から南西域にかけて散在しており、その他は雑草が繁茂するといった状況を呈していた。とくに北東端域は一部に雑木林もみられて小高い丘状地を形成し、大型の根株は地下に根差したものが多く、平成17年度の試掘調査成果を参考としながら、まずは機械による表土掘削工事を平成19年5月中旬に実施した（図版71-1・2）。その後の同月下旬には、測量作業を実施して4級基準点を



第142図 調査区北東域の遺構検出状況図 (S=1/400)

4箇所設置し、北東－南西方向中央線を主軸として、それに直行する各交点や境界内線との接点にグリッド杭を打設している。これらは世界測地系座標を採用しており、南西端グリッド杭P1（X座標 - 144583.595、Y座標 - 29243.597）から北東端P38（X座標 - 144523.877、Y座標 - 29138.913）までを中心とした調査区割りを行っている（第140図）。

こうした諸準備を経て、実際の発掘作業に着手したのは同年6月1日からであり、人力作業を主体として、時には小型重機も併用しながら進めて、最終的には12月1日に調査を完了している。



第143図 調査区南西域の遺構検出状況図 (S=1/400)

#### 4. 平成19年度の本発掘調査

調査区の設定については第140図のとおりで、グリッド杭P1～P37を結ぶ主軸線を基線として北（北西）側をN（= North）区、南（南東）側をS（= South）区と大別している。また基線を10m間隔で直交して区画する北東端区から南西区へと順次数字を配して計27区画の調査区

を設定し、それぞれN-1区…、S-1区…と称名することとした。

合わせて、基線の南東側に幅1mの中央トレンチ(ST-1~13)を、及びN-1・2・4・6・8・9区、S-1~4・8・9・14区を除いた調査区の南西側に同幅のサブトレンチを設けて、調査区名の-(ハイフン)前にトレンチの頭英文字Tを付けて識別することとした(cf N-3区のものであればNT-3)。なおS-5区のみST-5A・5Bの2つを設けている。また中央トレンチ(ST)の北西側、及び直交する各区の境界線の北東側には基本的に幅50cmのセクションベルトを設けて土層の把握に努めている。

調査はまず、トレンチによって北東域の遺跡状況から確認することとし、STを主として、調査の進捗をみながら、基本的には北東域から南西方向のNT及びSTへと着手していったものである(第141図)。

調査中盤以降のトレンチ成果も含めると、当初は住宅地ということもあり、ある程度は近代以前の削平状況を予想していたが、北東端域と南西域はその傾向が顕著であり、とくに南西域の1層直下は固く締まる基盤層もしくは現代の搬入埋め土層で構成されていて、過度の削平が行われた状況を窺えるものであった(第160図・図版73-2・3)。また中央域には、大きく深まりをもった谷もしくは溝状の地形的梯相も看取されて現代の埋め立て覆土された状況であり(第163図・図版73-1)、また谷部の周域においては、とくに北東域には平坦面と数条の溝状遺構が検出されるなど、恐らくは出土遺物から近世以降に係る地形的な改変を受けたものと推察している。

こうした中で、調査区ごとの掘削はトレンチ精査がある程度進行した段階で、同様に北東域から調査を進めることとした。調査期間の中盤までは、区内でも比較的高位となる北東域から中央域手前までを完了して、途中成果を現地説明会で公表し、後半以降は南西域を主体とするといった全体計画の中、まずはN-1・2区から着手して、順次南西区へと推移していく、終盤にはS-10・11区を精査して完了となっている(第142・143図)。

また調査中の排水は、低位となるS-8区に集水池を設置して対応し、発掘土砂は隣接地の県教委調査西区端辺に集積処理するなど、周囲の住宅街に配慮した処置を行っている。なお作業用重機の搬入出や住宅隣接調査区の土砂崩壊の防止のため、現代の埋立造成地上に位置するN-8・9区、S-9区は掘削を行っていない。

この調査において、中央域までにはN-3区に弥生時代中期末～後期にかけての竪穴住居が1棟検出されたほか(巻頭図版7-1・図版76-3)、S-2~5区にかけて数列の大溝が検出されている(巻頭図版7-2・図版72-2)。その間隙には地割りされた2~3面の平坦地がみられて、掘立柱痕や土坑、石組状遺構、井戸などが検出されている(図版77-3・78-1)。また中央域には前述の谷部も検出されて、隣接する南東域の県教委調査区へと接続し、そこでは溝状遺構や加工段、ため池跡なども検出されている。

北東端部のN-S-2区には近代墓の一群が検出されたほか(図版79-1)、N-4・5区は皿状に落ち込み、弥生土器・土師器、須恵器などが混在して出土し、時期不詳の土坑なども確認されている(図版72-1・75-3)。また中央へと接続するN-S-6・7区は小径の柱穴群もみられるほか、須恵器片なども多く確認されている(図版76-2)。



第144図 遺構全体配置図 (S=1/400)

このように、北東域に遺構が集中する様相を窺える反面、南西域は弥生土器や土師器の出土や柱穴・土坑・杭列などが検出されたS-10区以外には少なく、N-10・11区やS-11区には近・現代と想定する遺構が確認されている(図版75-1・76-1)。結果としては、竪穴住居跡(SI)1棟・柱穴状遺構(P)149基・土坑状遺構(SK)26基・溝状遺構(SD)6条・不明遺構(SX)15基・近代墓13基(墓5とみなした墓跡は4基に分別して扱っている)・納骨堂跡1基・木材片・瓦溜り跡1基・石組状遺構1基が検出されていて、また竪穴住居関連遺構は、柱穴・土坑などさらに細分できるものであった。

なお、トレーニング調査と調査進捗の成果を総合すると、前述のとおり南西域は表土直下に基盤層もしくは搬入造成土が看取されている。これは隣接する県教委調査西区も概ね同様であり、広範に過度の削平を受けている状況であると判断された。したがって、該当区については掘削の縮小を検討することとし、最終的な調査面積は1,750m<sup>2</sup>を測るものとなった。

一方、出土遺物の総数は3,700点余り(コンテナ16箱)を数え、うち約59%を国産陶磁器類、13%を須恵器、9%を弥生土器、7%を土師器、2%を瓦質土器で占め、その他は10%である。国産陶磁器類は江戸中期から明治期までのものが多く、調査区の全域に亘って出土しているが、北東域に多い反面、南西域はやや減少していく傾向がみられている。須恵器についても同様といえる中で、弥生土器はN-3区とS-10区に集中し、土師器はN-5区に多くみられている。このことから、中央域谷部の縁辺に広がる小集落の形成を窺えるとともに、少なくとも弥生時代・古代に加えて、近世という3時期の文化期の存在が本調査によって明らかになっている(第142図)。

なお、調査後半の9月22日には、若葉台遺跡(県教委調査)との合同現地説明会を開催して、約120人が見学に訪れている(図版74-3・図版4-3)。調査終盤の11月28日にはラジコンヘリによる空中写真撮影を行い、調査終了後には速やかに埋め戻しを行って地区的安全を図っている。また調査の指導・助言については、同年6月6日と7月27日、調査終了後の平成20年2月21日に元島根大学教授田中義昭氏から(図版74-1)、8月7日には奥田元宗・小由女美術館館長の村上勇氏、島根県立三瓶自然館指導員中村唯史氏にそれぞれ貴重なご意見を頂くとともに、調査中には県教委職員(丹羽野裕・池淵俊一・柳浦俊一・宮本正保・東山信治・是田敦・田中裕貴の各氏)にも来足の上、助言及び参考資料を提供頂くなどお世話になっている。

普及・活用事業としては、同年10月~11月には益田市立歴史民俗資料館で発掘速報展を開催し、また平成20年2月17日には、NPO法人久城伝承文化顕彰会の主催による遺跡調査報告会を実施して、県・市各調査担当者からの成果発表を行い、会場の旧県立益田工業高校体育館には約210人の入場者を迎えることができた。

なお調査終了後の平成20年1月22日付け益教文第135号をもって、県教委と遺跡の取り扱いについて協議を図り、平成20年2月5日付け益教文第149号で回答を事業者宛に通知している。

また沖手遺跡も合わせた調査報告書の刊行に係る資料整理については、平成20・21年度に実施しており、その期間には遺物指導も頂くなどして多くの方々のご協力を得、平成22年3月31日付けで刊行するに至っている。

次節では各調査区の遺構検出状況を中心に詳述し、出土遺物は別節を設けて述べることとする。

## 第2節 調査の結果

### 1. はじめに

前節で述べたとおり、本地は中央域までは緩い丘陵地を呈して緩傾斜し、それより南西側は平坦地を形成している。但し、一帯は住宅地であり、近・現代においての開発行為などから削半も進んでいたと思われ、部分的には平坦面も散見されるなど、僅少の高低差をもった凹凸状況を看取できるものであった。

土層の堆積状況については、擾乱を呈する様相を層位的に散見できるが、土質及び色調差により分層したところ、実に100種類近くに及んで、中には重複する部分も若干みられる。色調差に乏しく、また同一層内から時期の異なる遺物の伴出するものも多かったことから、一部に誤測の可能性も窺えるが、一応の指標として示しておきたい。

本遺跡における基本的層序は、調査区間で多少の差異はあるものの、1層は黒褐色～灰褐色土（表土層）で、表上掘削時の残土部分も含み、概ね全域の上位層にみられる。また中央域から南西域にみられる造成土下層の一部も同義としての耕土層として捉えている。2層は暗灰色～淡茶灰色土で、北東域上位層のみにみられるもの。3層は暗灰色～暗灰褐色土で、北東側の中城（N-4・5区、S-4～6区）及び南西側中央寄り（S-10・11区）の上位層にみられる。4層は淡黄灰色土～茶褐色シルトで、北東端域（S-2区の上位層）及び中央周辺（N-4・5区の上位層、S-10区の中位層）にみられ、本層までには比較的多くの国産陶磁器類や瓦・窯道具・瓦質土器などが出土している。

また5層は灰褐色土～青緑灰色粘土で北東域（N-4～6区、S-2・3・7区）の中位～下位層に、6層は灰黄褐色砂質土～茶灰褐色シルトで北東域中央寄りのN-7区下位層及び中城のS-3・4区中位層に、7層は淡黄灰褐色シルト～茶褐色粘質土で北東域中城のS-3・4区下位層及び中央域（S-N-7区下位層及びS-10区中位層）に、7層は茶黃褐色粘質土でN-7区の下位層のみにそれぞれみられるもので、本層までには比較的須恵器・土師器などが多く確認されている。

そして8層は暗黄灰色土～灰黒褐色粘質土で北東端域（N-1～3区）の下位層及び中城（S-4・5区）の中位～下位層、また中央域（S-10区）の中位層にみられる。続く9層は暗橙灰色粘質土～茶灰褐色シルトで、北東域のN-1・3区とS-1・4～6区の下位層（～中位層）、及び中央域（S-10区）の下位層に、10層は淡茶灰色土～黄褐色砂質土で、中央周域の南側（S-5～7区の下位～中位層、S-10区の下位層）にみられている。この8～10層までのいずれかを弥生期の遺物包含層と推定するもので、竪穴住居（SI01）面上の炭化層覆土である橙灰色土（第149図の土層注記28）に類似するものと捉えている。

以降は暫時、無遺物層へと推移するもので、11層は淡茶灰色土～淡黄褐色粘質土で、S-5・7区及び10区の下位層に、12層は明灰褐色土～黄褐色砂質土で、S-6・7・10区の下位層にみられる。そして13層の黄褐色砂質土、14層の黄茶褐色砂質土、15層の黄褐色粘質土～砂質土は南西域中央寄りのS-10・11区の下位層のみにみられ、それより下位は地山層として捉えたもので、これらの鍵層は、掲載した土層堆積状況図中には①層～⑯層として表記している。

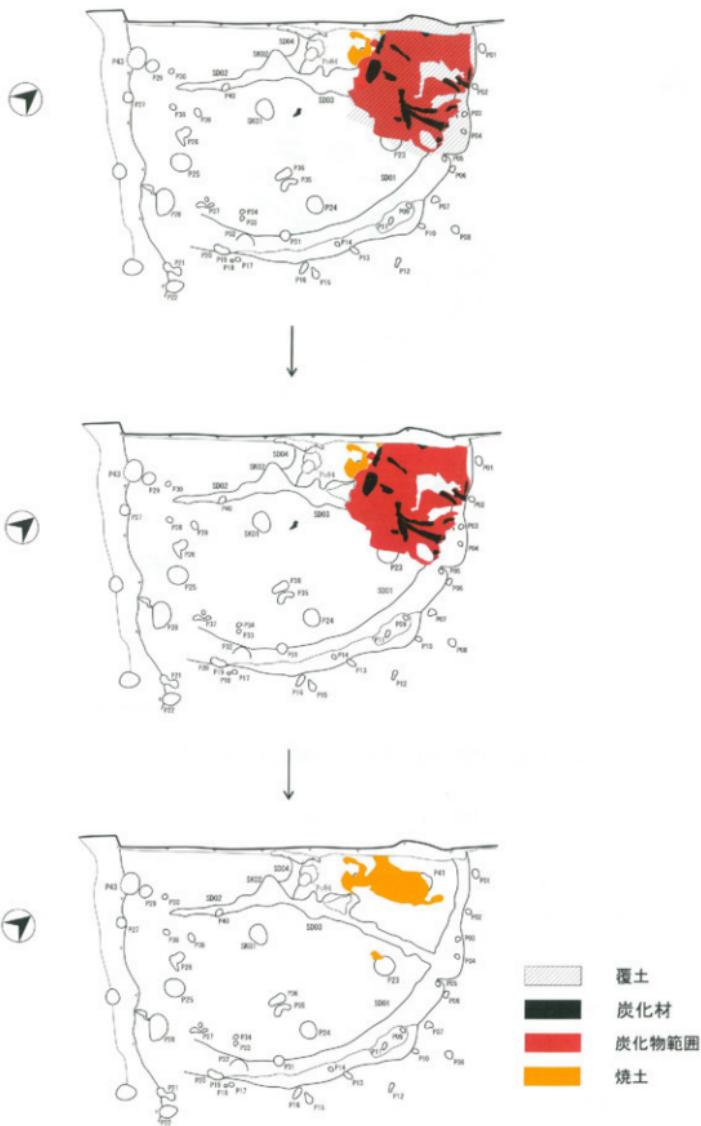
なお、この層序は遺物の出土状況を主体として判断しているが、後世における造成等に係る削



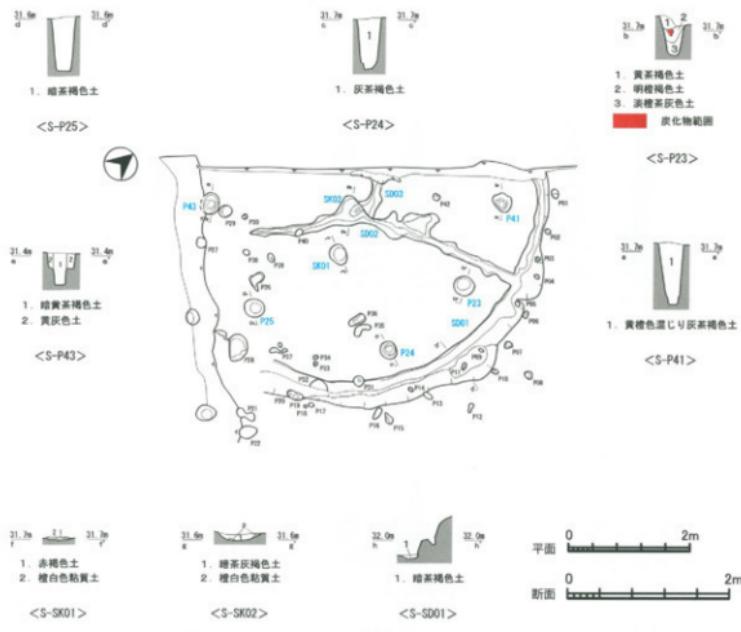
第145図 壇穴住居(SI01)の検出状況図(S=1/60)

平の影響からか、同一層内でも時期幅のある遺物の混在した併出状況も窺えて判然としないものであった。それは遺構についても同様で、多半は地山とした面上に検出され、その本来の構築面はさらに上位であったと推定されるが、該当する層位は確認できていない。そして区壁については、便宜上、北西壁を北壁、南東壁を南壁、北東壁を東壁、南西壁を西壁として取り扱っている。

また検出された遺構は、おもに北東域の調査区を中心として、全体で213基が確認されており、その内訳は壇穴住居跡(SI)1棟・柱穴状遺構(P)149基・土坑状遺構(SK)26基・溝状遺構(SD)6条・不明遺構(SX)15基・近代墓13基(墓5とみなした墓跡は4基に分別して扱っている)・納骨堂跡1基・木材片・瓦溜り跡1基・石組状遺構1基となり、一方、壇穴住居跡については関連遺構として柱穴状43基・土坑状2基・溝状4条が検出されていて、遺構名の最初にS-を付加して他遺構との分別を図っている。以降、調査区ごとに詳述していくこととする。



第146 図 穂穴住居 (SI01) の精査変遷図 (S=1/80)



第147図 穫穴住居(S101)の完掘状況図(平面S=1/80、断面S=1/60)

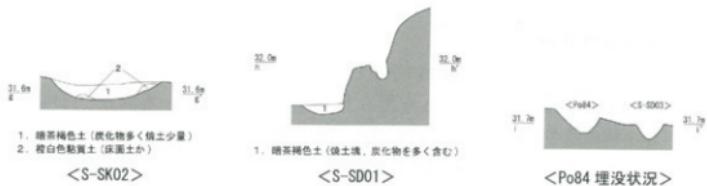
## 2. N-3区の調査状況

本区は北東端北西域の緩やかな丘陵地に位置して、頂部よりやや下った該地点は2段の平坦地を形成する。地表面標高31.0m～32.8mを測る上段面の北西端には、本調査では唯一の竪穴住居跡(S101)が1棟確認されており、その形態や共伴遺物などから弥生中期後葉から後期にかけてのものと推定している。また下段面は近代以降の宅地造成に伴って形成された場所で、上段面の竪穴住居を一部削り取った状況を呈し、そこにはSX01をはじめとする遺構群が確認されて、いずれも宅地に伴う可能性を窺えるものであった。

S101(第142・145～149図、巻頭図版7-1、図版71-3・76-3・77-1、表6)

当初は、遺構面上層に2.黒褐色土(腐植土)と3.暗灰色土(=②)が覆土し、それと混在して一面に近代の廃棄物処理土が広がっている状況であった。それらを取り除くと、肌理の細かい28.橙灰色土がほぼ住居範囲を覆うようなかたちで確認され、さらに掘削の段階で、地山土(淡黄橙色粘土)とはっきり区別される状況で、半円状を呈する輪郭が姿を現したのだった(第149図・図版71-3)。

内部の埋土(28.橙灰色土)を丁寧に取り除くと、北端域にのみ焼土・炭化物層の面状に広がる様子を看取でき、南域はS-SD01～04を除いては確認されず、また床面は黄橙白色粘土で地山層と類似するものであった(第145図・図版76-3)。まずは、この検出範囲から着手す



第148図 積穴住居(SI01)に伴う遺構図(S=1/20)

32.0m

32.0m

31.0m

31.0m

30.0m

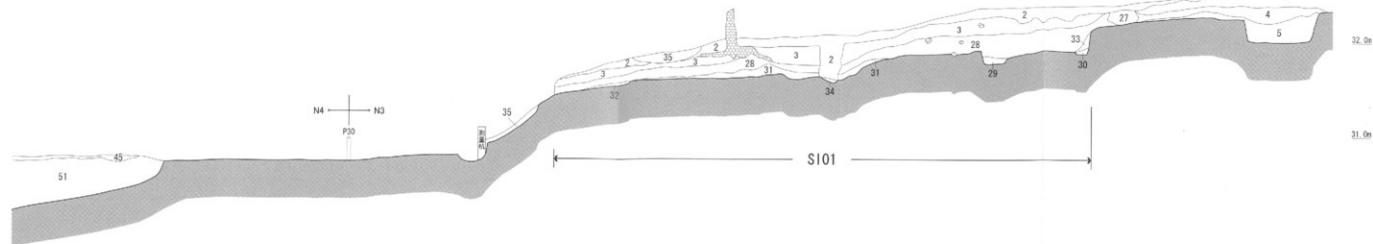
P13 33.0m  
h

32.0m

31.0m

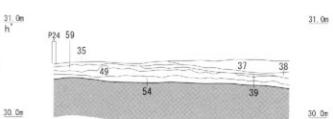
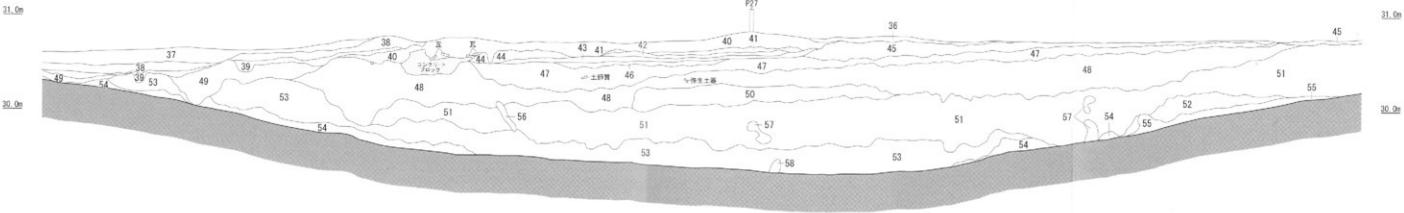
31.0m

30.0m



NS → N4

P27



- 2 黒褐色土
- 3 暗灰色土(=②層)
- 4 暗黃灰色土(=⑧層)
- 5 暗黃灰色粘質土(=⑨層)
- 27 明灰褐色土(木根等による腐植土か)
- 28 橙灰色土
- 29 暗褐色土(淡土、炭化物含む)
- 30 暗褐色粘質土(S101間帯溝、炭化物多く含み粘性強い)
- 31 赤褐色泥じり黒灰色土(炭化層)
- 32 暗褐色粘質土
- 33 暗褐色粘質土(地山ブロック含む)
- 34 淡灰褐色土(S101間仕切りか?汚れなくしまり弱い)
- 35 灰褐色土(表土) = (①層)

- 36 淡橙灰色小礫土(真砂土)
- 37 淡青灰色小礫土(碎石)
- 38 橙褐色小礫土
- 39 暗青灰色土
- 40 明灰褐色土(地山ブロックの再造成層)
- 41 淡青灰色小礫土(真砂土系)
- 42 明黄灰色土(真砂土系)
- 43 橙褐色粘質土(地山ブロックの再造成長)

- 44 明茶灰色土
- 45 淡茶灰色土(=②層)
- 46 茶灰色土
- 47 暗灰褐色土(=③層)
- 48 淡灰褐色土(=④層)
- 49 淡(黄)灰色土(=④層)
- 50 灰褐色土(=⑤層)
- 51 暗青灰色土

- 52 黃灰色真砂土
- 53 淡黃褐色粘質土
- 54 黄灰褐色砂質土(真砂土系)
- 55 淡黃灰褐色砂土(真砂土)
- 56 暗茶灰色土
- 57 暗灰色土
- 58 黄褐色粘質土
- 59 淡じり黒灰色土

0 2m

第149図 N-3~5区北壁の土層堆積状況図 (S=1/40)

ることを念頭に、該当する中央部に観察用のセクションベルト（第 145 図）を設け、段階的に精査を試みたところ、焼上面は炭化物と混在するものの、概ね炭化物層の直上に覆土し、また炭化物の同一層には炭化した木材塊も多く散在する状況を窺えたのである（第 145 図は検出状況のまとめ、第 146 ~ 147 図はその精査変遷を示すものである）。なぜ北端域のみに遺るのかは不詳であるが、この状況から焼失住居であることは推定されるもので、恐らく火災は南から北に向かって炎上したものと想定している。焼土は部分的な上乗せ屋根の覆土、また炭化木材塊はやや放射状に配置される状況から天井梁が焼け落ちたものと考えられ、炭化層はその他住居部材の焼失に係るものと推測している。

こうして半地下の床面まで表出した時点で、一応の全体像に触れておきたい。まず堅穴住居は円形状を呈し、直径は約 6.7m で、検出面積は約 76m<sup>2</sup>を測っている。外周端の地山面から半地下底面（床面）までの高低差は、北端域は 40cm 前後であるのに対して、南端域は 30cm 未満を測って徐々に差は縮まっていく。床面も水平ラインに対して南方向に 20 ~ 35cm を測って緩傾斜する状況を看取できた（第 149 図）。要するに、南西方向に緩傾斜する立地条件にしたがって、堅穴住居は斜面に対して掘り込んで築造されており、それも水平ではなく、ある程度の傾斜をもって形成された状況を窺えるものであった。併し、南西端は破壊されていることから、南域は後世における削平等も念頭に置くべきかと思われた。なお本来の構築面はさらに上位（数十cm 程度か）にあったと推定されることから、以下に述べる一部遺構群の測定値や住居直径などの推定値も若干の差異が生じるものと考えられる。

最初に確認された遺構は、壁帶溝と考えられる S - SD01 である。用途は不詳だが、排水用の溝とする説や板壁を設置するための溝とする説などの諸説があり、後者が有力とされる。検出時には北東側から南東側に、また北域の炭化層除去後にはさらに北西側に向かっており、床面の外周端に沿って帯状に延びていた（第 145・147 図）。幅は 20cm 前後、深さは 5cm 程度を測って周辺し、炭化物は多量・焼土は少量を含む暗茶褐色～黒茶灰色土が陷入して南西端付近で尖滅している。

これに接続するものとしては S - SD03 がみられて、S - SD02 と S - SD04 とで床面を少なくとも 3 区画するもの。ほぼ同類の陷入土は、炭化物は中量の暗茶褐色～暗灰色を呈し、幅は 20cm 前後だが、深さは 11 ~ 20cm と比して深みを帯び、S - SD02 は南端付近で尖滅する。この 3 条の溝の用途については、排水用とも考えられたが、むしろ作業場・寝床・調理調査場のように部屋を区分けするための（間）仕切り溝と推測している。

その 3 方に延びる S - SD02 ~ 04 の中心には S - SK02 が位置している。浅い中央ピットで炭化物・焼土を多く含んだ暗茶褐色土が陷入し、長径 70cm・短径 56cm・深さ 21cm を測るもので、推定する復元住居の中心地点に正確に配置されている。機能的な用途について、恐らくは炉の役割も兼ねた火廻（ひどころ）と推定される。また至近の南東方向には S - SK01 が確認できて、長径 34cm・短径 30cm・深さは浅く 3cm を測り、第 148 図のとおり、被熱した赤褐色土が覆土してよくしまり、恐らくは暖を取るか、もしくは照明用施設としての機能を考えられるものである。

また床面内外周の壁帶溝内部には、住居の主柱痕と想定されるものが確認されている（第 145・147 図）。それは北端から時計回りに S - P41・P23・P24・P25・P43 の 5 基であり、柱間は S - P41・P23 間は約 1.5m、S - P23・P24 間は約 1.6m、S - P24・P25 間は約 2.4m、S - P25・P43 間は約 1.9m を測り、中心となる S - SK02 からはそれぞれ 2.3 ~ 2.5m の間隔をもって配置

されていた。

これらの主柱痕は概ね長径30cm強・短径30cm前後を測ってほぼ円状に均一化するが、S-P23のみ長径約38cm・短径約36cmを測って一回り大型となる。また深さは第146図に示すように、大半は70cm前後を測って深めに掘り込められるが、S-P43のみ41cmと浅めであり、これは前述の南域部分の後世における削平の可能性によるものと思われた。陥入土は炭化物を中心とする多量・焼土を少々含んだ黄茶褐色～暗茶褐色土が多く、S-P43のみ柱補強のための埋土が施され、それは部分的に地山ブロックを含む黄灰色土が陥入されていたもので、こうした主柱は復元時には7～8本を配置していたものと推定された。

一方、南～南東域にはS-P26・P28・P31～39などの小～中孔が多く、本域端部に出入り口が設けられていたと推定されるもので、とくにS-P26・P28・P32などはその施設に係る主柱痕とも想像されるものであった。

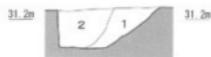
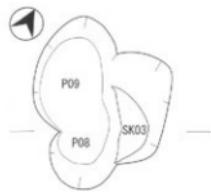
なお、こうした弥生期の住居址には地山土を再造成して貼床を施す例も多いようであるが、貼床と地山層との層界は確認されなかったため、本住居の床面上は地表面（淡黄橙色粘土）として扱うこととしている。

さて外周縁端には、多数の小孔が確認されている。S-P01～P20が該当し、うちS-P08・P12を除くものは、屋根の支柱もしくは側板を止める横木止め孔と推測され、また除外した2基は垂木尻の可能性をもつものである。いずれも長径は10cm強・短径は10cm前後・深さは16cm未満を測るものが多いが、なかにはS-P07・P13・P15・P16のように長径20cm前後・短径20cm未満のもの、またS-P05・P08・P15・P16・P19・P20のように深さが16～41cmを測るものも散見できる。陥入土はいずれも炭化物を少量含んだ茶灰色～暗黄灰色土であり、S-P09には腐植した木材痕の混入も窺うことができた。

ここで出土遺物に着目すると、S-SK02からS-SD04を挟む北方向至近に、住居内で唯一の遺物である弥生土器の甕(Po84)が確認されている(図版75-2)。検出当初はやや小高い土塊頂部に下半部が据え付けられ、破壊された上半部の残片が周間に散在して、器内には地山ブロックを含む28.黄灰色～橙灰色土が陥入している状況であり、また設置地点は床面から比高差約6cm、S-SK02底部から約30cmを測るものであった(第148図)。恐らくは、その土塊は住居焼失後に盛土して据え付けられた祭祀的意味合いの強いものとして推測されて、また火災も意図的とする可能性を完全には払拭できないものであった。

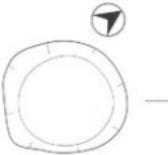
なお検出された甕は、器厚は薄く、上げ底を呈するもので、弥生時代中期後葉ごろと推定されるものであった。また第5章第4節の自然化学分析に係る炭化材の樹種鑑定及び年代測定からは、ほぼ同時期(IV期の終わりに近い)の年代であり、また樹種鑑定ではツブラジイの結果も出ているなど、総合的にみて、本竪穴住居は弥生中期後葉から後期にかけて築造されたと推定できるものであった。

周囲では、堂ノ上遺跡から弥生時代中期末頃の竪穴住居跡、同遺跡・久城西I遺跡・原浜遺跡からは同時代後期のものがそれぞれ発見されていることからみると、本竪穴住居跡は現時点では久城台地で古い段階に位置付けられるものであり、また集落の始まりを考察する上で好資料と考えられるものである。



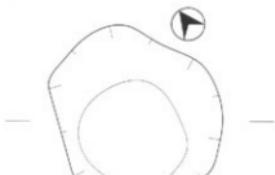
1. 灰黄褐色土  
2. 暗灰褐色土

<SK03>



1. 暗淡褐色土

<SK04>



1. 灰褐色砂質土

<SK05>



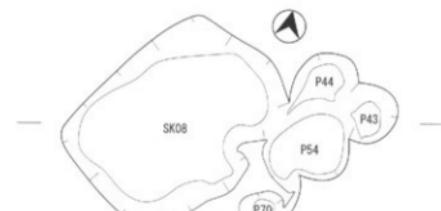
1. 黄褐色混じり茶灰褐色粘質土

<SK06>



1. 黄褐色混じり褐色シルト  
2. 灰色シルト

<SK07>

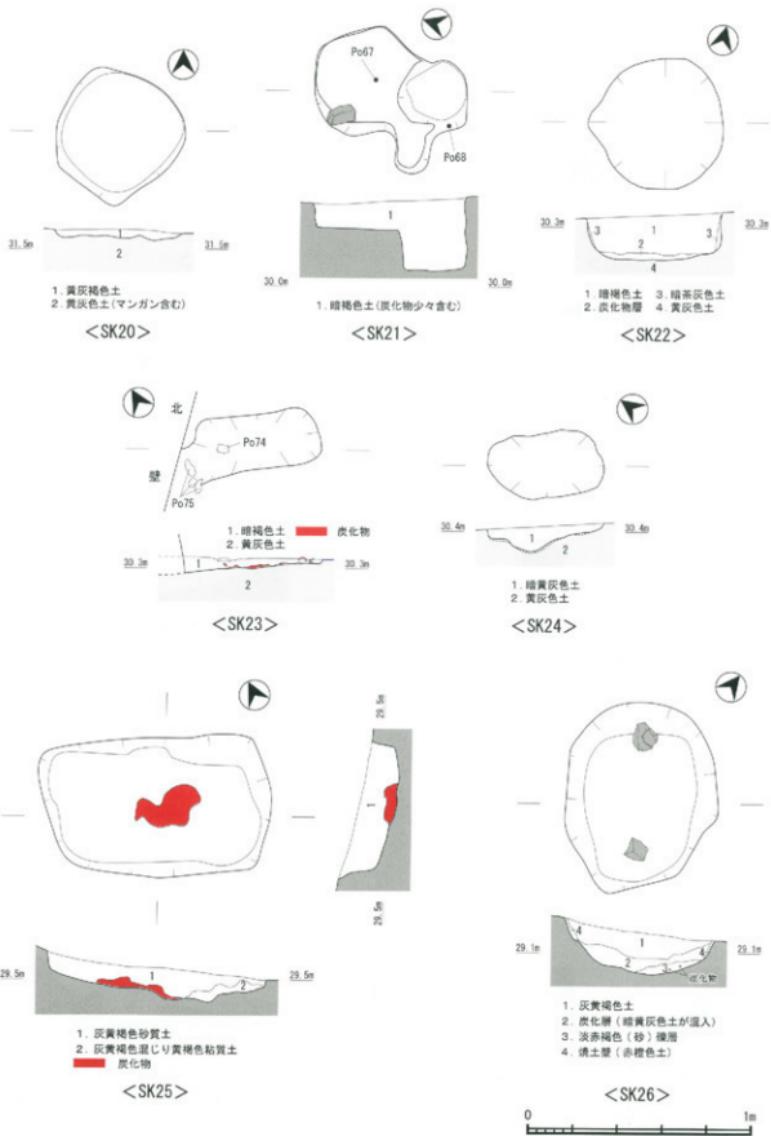


1. 灰黄褐色砂質土  
2. 黄褐色混じり灰褐色土  
3. 黄褐色混じり灰褐色シルト  
4. 灰褐色シルト

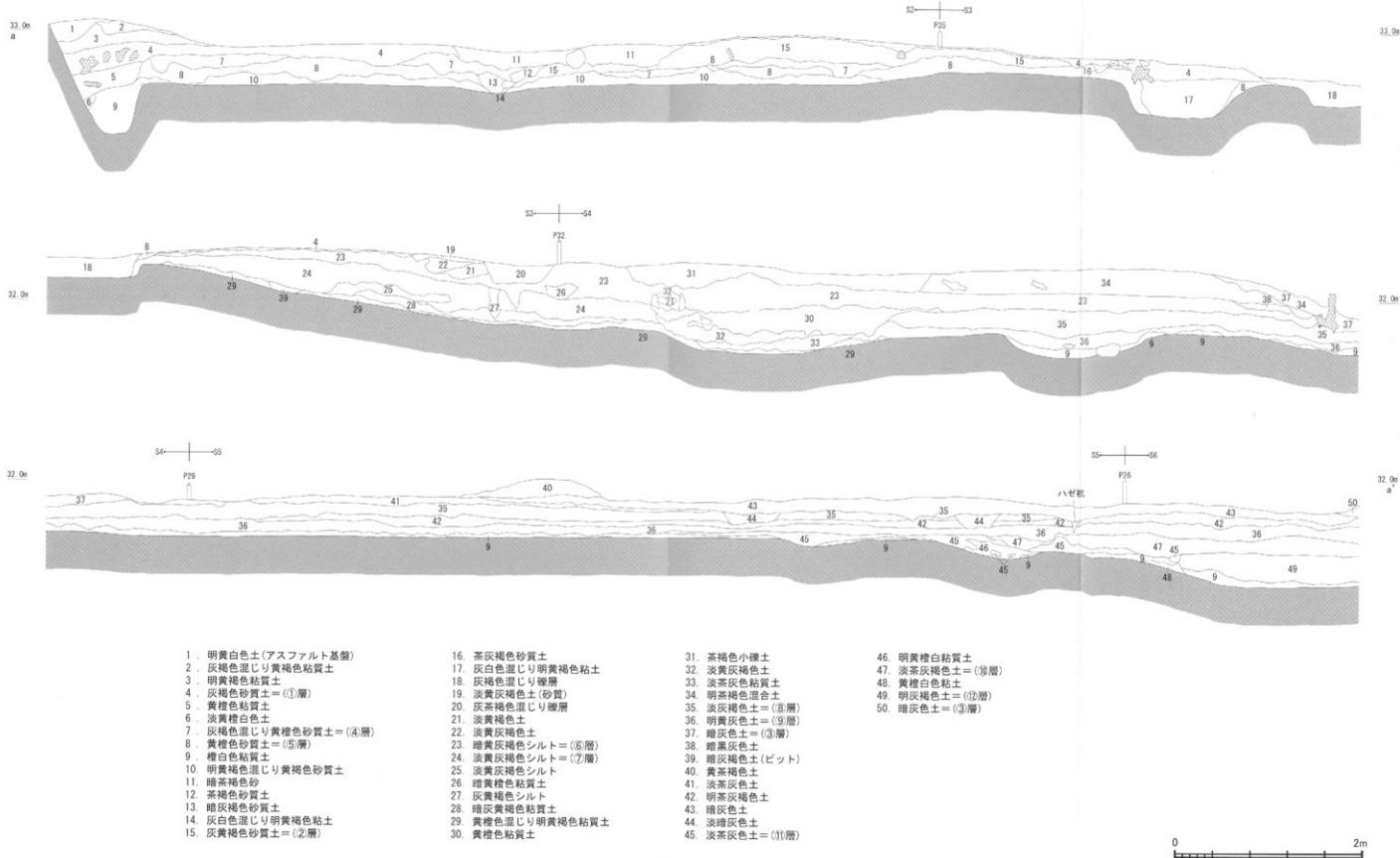
<SK08>



第150図 遺構断面状況図① (S=1/20)



第151図 遺構断面状況図② (S=1/20)



第152図 S-2～5区南壁の土層堆積状況図 (S=1/40)

下段面の検出遺構（第142・149・150図、図版77-1、表6） 本区域は地表面標高31.0m前後を測り、その地山面上には15基の遺構が確認されて、柱穴11基、土坑2基、特殊遺構2基という内訳をみることができた。

SX01は不整形を呈する大型遺構で、長径約5.0m・短径約4.0mを測り、端部にP04・05・62・63・64などの柱穴を含むもの。深さは約18cmを測って、腐植土と思われる黒褐色土が陥入し、そこから国産陶磁器5点・鉄製品1点が出上している。またSX02は、長径約1.3m・短径約1.2mを測って皿状を呈するもの。深さは43cmを測って、国産陶磁器10点・炭化物7点・ガラス製品1点が共伴するが、いずれも用途は不詳である。

柱穴は上述したSX01に切り合うもの他に、P06～10・12が確認される。いずれも暗灰色～灰色土が陥入して、長・短径とも20cm強のものが半数を占め、P05・07～09・12などは30cmを超えて、比べてやや大径となる。共伴遺物はP05からのみ国産陶磁器6点・須恵器1点が確認されて、時期幅をもって混在する状況がみられ、恐らくは搅乱による混入かと思われる。柱穴列は仮に推測すれば、北西及び南西方向に鍵状の復元を窺えて、その間隔は1.6～2.0mと想像されるもの。

なおP08・09はSK03を切り取り、その土坑は長径約46cmを測って灰黄褐色土が陥入し、遺物はみられないもの。またSK04は柱穴と同質の暗灰褐色土が陥入し、台形状に掘り込まれて、長・短径は約50cm前後を測るもの（第150図）。いずれも性格は不明で、共伴遺物はみられない。

本区域の遺構群は、おもに共伴遺物からみて、また近年住宅が所在・移転し、その水道施設はSX02沿いに造っていたことから、恐らくは近代以降の宅地造成に伴う関連遺構と推測している。

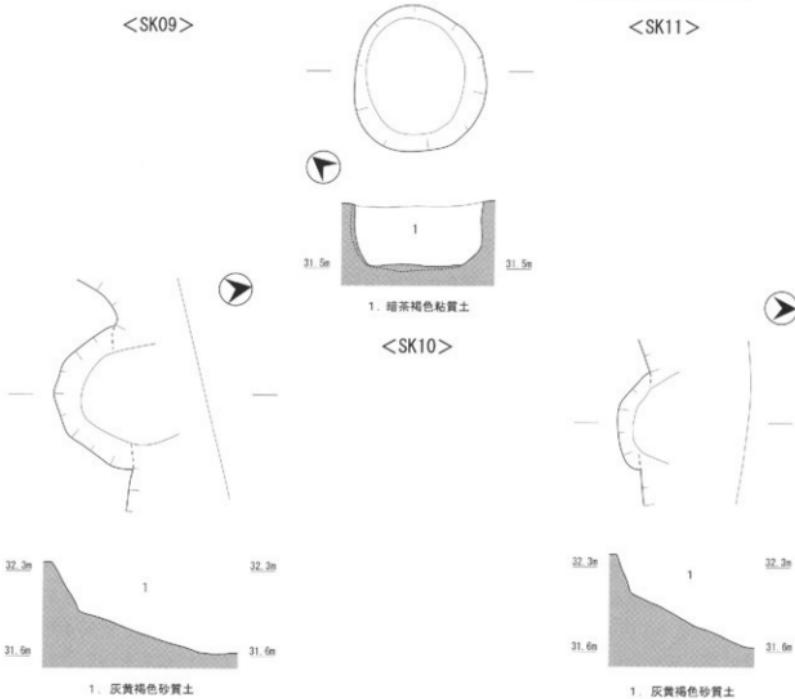
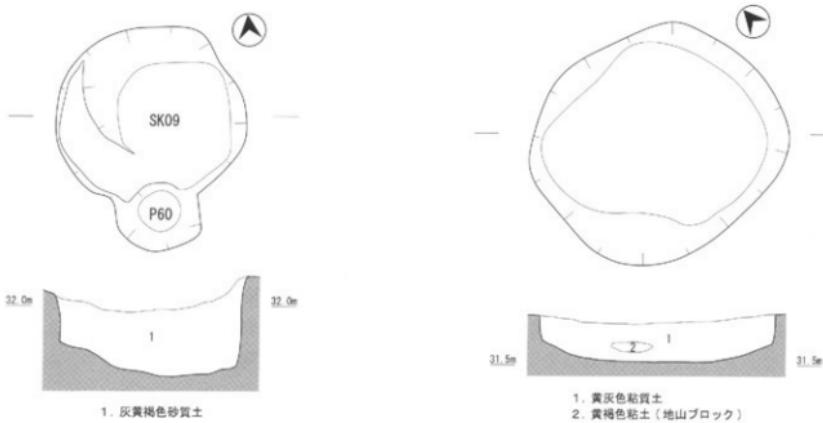
### 3. N-4・5区の調査状況（第142・149図、図版72-1・80-1、表6）

本区はN-3区の南西側に隣接して、調査前は宅地造成に係る平坦面を形成し、その地表面標高は30.6m～30.8mを測る場所であった。調査の結果、N-3区下段面の平坦状の落ち込み2に加えて、中ほどでは不整円状を呈し、N-4・5区間の北壁境を中心に擂鉢状に落ち込む（落ち込み3）状況を看取できたもので、全体的に南北方向に緩やかに傾斜する状況を呈している。

遺構はN-4区で特殊遺構1基、N-5区では柱穴1基、土坑5基、溝状遺構1条の6基が確認されている。また落ち込み3では累積する多くの層位が確認されるが、おもに表層は近代以降の造成に係るものであり、遺物は上層～中層を中心に土師器・須恵器・弥生土器などが混在して出土し、下位へは序々に減少するといった傾向を窺うことができたもので、図示すると第144図の破線範囲となる。

とくに上層～中層は遺物包含層であり、それは暗灰褐色土～暗褐色土を呈するもので、原始・古代に係る遺物の混出状況からは、自然的流れ込みに加え、当該層の搅乱状況を推測させるものであった。またN-5区の同層位では炭化材片（SK23）も検出されていて、第5章第4節の自然化学分析に係る炭化物の年代測定からは、江戸時代後期～昭和初頭の年代結果も報告されていることから、後世に係る地形の変化に伴う搅乱を予想させるものであった。

SX10（表6） 長径約1.4m・短径約1.0m・深さ約40.0cmを測り、形状は長方形を呈して台形状に掘り込まれたもの。検出面標高は30.5mを測り、黄褐色もしくは灰褐色粘質土が陥入され



第153図 遺構断面状況図③ (S=1/20)

る坑内表層には炭化物・地山土を含む暗灰褐色土で覆土されていた。10~20cmの大の礫を少量含み、多量の国産陶磁器類や瓦、少量の鉄滓・須恵器・土師器を含んでいた。底面には炭化した初殻層が1cmの厚みをもって敷設されていて、居住者の話では、サツマイモなどの貯蔵穴と教示されたもの。

SK21(第151図、表6) 坑形は不整形を呈して、検出面標高は30.4mを測り、遺構の南側を1基もしくは2基の柱穴によって切られる可能性をもつ。長径は約70.0cm・短径約50.0cm・深さ10.0~30.0cmを測って、地山の黄灰色ブロックや焼土・炭化物を含む黒灰色~暗褐色土が陥入する。

坑内には須恵器片1点(Po67)、柱穴には土師器片1点(Po68)が共伴し、方形に掘り込まれた底部は平面を呈して浅く、また柱穴部は一段と深まる様子を看取できる。性格は不明である。

SK22(第151図、表6) 円形を呈する本坑の検出面標高は30.4m前後を測って、暗褐色土が陥入し、地山の黄灰色ブロックや焼土・炭化物を少量含んで、土質は柔らかいもの。長・短径とも約60.0cm・深さ約20.0cmを測るもので、共伴遺物は土師器が3点ほど確認されている。

坑底にはSX10と同様に2~3cmの厚みをもった炭化物層が確認されて、それはある一定の規則目をもつことから墓蓋などの敷物と判断されるが、用途については不明である。

SK23(第151図、図版75-3、表6) 楕円形状を呈する本坑は北壁に接するもので、検出面標高は30.35m前後を測り、しまりはなく焼土・炭化物を多量に含んだ暗褐色土が陥入する。長径は約67.0cm・短径約30.0cm・深さ6.0cmを測って浅く、須恵器片1点(Po74)、弥生土器片3点(Po75)が共伴遺物として確認されるもの。

なお炭化物は上層のほか、底面に多く面状に敷設された状況が窺えたもので、この一部を年代鑑定に出している。その結果、やや新らしい江戸時代後期~昭和初頭という報告を受けたのは前述の通りである(参照: 第5章第4節の自然化学分析に係る炭化物の年代測定)。

性格は不明であるが、共伴する遺物は上層からの搅乱した搬入分であり、構築は近世以降に伴うものと思われる。

SK24(第151図、表6) 検出面標高は30.4m前後を測り、楕円形状を呈するもの。長径は約70.0cm・短径約30.0cm・深さ10.0cmを測り、しまりのある暗黄灰色が陥入する。

断面は不整形を呈し、中火が窪むことから、やや浅いが柱穴の可能性も捨て切れないもの。

#### 4. S-2~5区の調査状況

(第142・150~156・158図、図版72-2・3、77-2・3、78、79-2・3、80-1、表6)

本区域は、調査区ではもっとも遺構や遺物が多く検出された範囲となる。調査前はおもにS-4・5区では宅地であった平坦面を形成し、全体として北東側~南西側へと暫時緩やかに傾斜する平坦地であって、その地表面標高は33.0m~30.2mを測る場所であった。

本区は、とくに後世においての地形変容が行われた場所として着目できるが、その痕跡として



第154図 S-4区サベルト東壁の土層堆積状況図 (S=1/60)

S-2・3区を縦断する大溝（SD01）が確認されて（図版72-2）、それはS-2区東端からS-3区の西端まで伸び、その端部底付近には土留め用と想定される石組状遺構や柵列杭等（図版77-2・3）も2箇所に検出されている。そこから、地形的に落ち込む北東側へと延びることも予想されたが、調査の段階ではその痕跡は検出されていない。

また連結するSD02は、S-4・5区の北西半部を北東-南西方向に段状に横断し、途中S-5区南西端の落ち込み1にも連結して、南東側の県教委調査区へと続いている。そしてS-3区の南東半部では、SD01と落ち込み1に連結する様相をみて、地形的に区画されている状況を看取できた。

これらは共伴する多量の国産陶磁器（巻頭図版7-2）により、江戸時代後期以降に築造されたものと判断でき、また県教委調査区には大池なども検出されていることから、この水域の利用を前提とした灌漑用水路の可能性が高いもので、ある種の地割り計画にしたがって施工されたものと推測している。

こうした溝を境界として形成される区割り面は、S-2区では北域に近代以降の墓域面、南域にSK11～13を伴う平坦面がみられて、これはS-3区のSD03東側の遺構検出面に接続するものである。比較的大径の円形土坑・少量の特殊遺構と小径の柱穴・溝状に走る長方形状遺構2基を伴い、なかでもSX03・04と周域の柱穴は井戸施設とするもの。多くの面上には地山再造成土を確認できることから、恐らくは近世以降に係る造成によるものと推測しており、地形的にみれば2面とも検出面標高32.0～32.5mを測ってやや高位に位置している。

また四方をSD01～03・落ち込み1に開まれる平坦面は、S-3・4区のほぼ中央域にみられて、長方形状を呈し、縦径約12m・横径5m前後を測って北東-南西方向に形成されている。なお本面は多数の遺構が検出されているが、その検出面標高は32.1～32.2mを測って僅かに低まり、須恵器・国産陶磁器などを伴い掘立柱建物などに関わると想定される多数の柱穴がS-4区に集中してみられ、径20～30cmを測るものが大半を占める。そのほかに便所的機能もしくは水桶と想定される木桶の埋設するSX05～07（図版79-2）、先述の灌漑用水路に伴い土留め的機能をもつ石組状遺構や柵列杭、井堰と想定される木材片（SX13北上方：図版77-2）、また貯水用と想定される大壺の埋没するSX08・09（図版79-3）などの特殊なものもみられている。

なお掘立柱建物跡としての柱穴群は、時期の混在する遺物の共伴状況から一概に奈良期を中心とするものとは断定できない。近世以降のものも多分に散在し、柱列・柱間にはある程度の規則性を窺えるものの、敢えて復元プランは図示せず、仮説として止めることとした。

まず須恵器3点・土師器2点を共伴するP69を起点として、P39・P74を結び柱間約1.8mを測る1ライン、P74・P79・P45・P48を結び柱間1.0～1.5mを測る1ライン、またP48からP59を延長する1ライン、P69からP37を延長する1ラインを組み合わせると、北東-南西方向に凡そその建物が復元できそうである。但し、それ以外の柱穴は三方の溝状遺構に切り取られた可能性が非常に高いものと思われて定かではない。

さてS-5区の南半部には、SD02と落ち込み1によって区画される平坦面がみられ、検出面標高は31.6m前後を測って、僅かに低位となる状況を看取できた。本面には径60～80cm強・深さ20cm未満を測る柱穴や土坑が約20基検出されていて、坑内には須恵器・土師器・国産陶磁器・鉄器などが共伴し、あるいは混在して出土する。また柱列としての規則性もある程度は散見でき

ることから、掘立柱建物もしくは某かの施設に伴うものと仮定するが、大径もあり、時期・性格とも判断できないものであった。

このS-3～5区に段状に形成される区画2面は、再述すると須恵器や土師器が比較的多く検出されていて、遺構も後世の削平などによる搅乱を伴いながらも、奈良期を中心に推量し得る可能性をもつ区域であったといえる（第152図：23・24・35・36の（黄）灰褐色土に類する層位）。一方、南東側に隣接する県教委調査区にみられる掘立柱建物群は、ある程度の拠点性をもった集落跡の可能性も指摘されていることから、同じ性格をもつ可能性が高いと思われる。

なおS-6区～S-7区にかけては中央部に向かい、暫時地形的に地表面標高が下がっていく様相が窺えるもので、32.0m前後から30.0m台へと推移していく（第157図）。この2区については中央域の項で述べることとして、以上の概略をふまえ、特徴的なものについて述べていく。

**納骨堂跡及び墓1～13**（第142図、図版79-1） 検出面標高は32.8m前後を測るもので、コンクリート基礎を遺す納骨堂跡のほか、土葬跡である墓を13基確認している。墓の形状は方形・円形・不整形を呈して、黄橙白色粘質土の地山造成土が陥入していた。長径は1.0～3.0mと様々であり、いずれも近代以降のものと考えられることから掘削は止めている。

**SD01**（第142・164図、図版72-2、表6） 長さ約20.0m・幅約3.6m・深さ約1.4mを測り、東端からS-3区の西端まで延びる溝状を呈する遺構である。第164図のとおり、断面形は蒲鉾状を呈し、表層土は道路造成層、それ以下は暗黄灰色～暗灰色土が陥入して、地山土の黄褐色土も部分的にみられ、下位面には須恵器とともに窯道具・ビニールなども多く確認されている。

主体は18世紀後半～19世紀の国産陶磁器であることから、同時期ごろに造成され、埋め戻しは比較的新しい時期の少なくとも2期は行われたのではないかと想像できるもので、用途は先述のとおり灌漑用水路と推定されるもの。

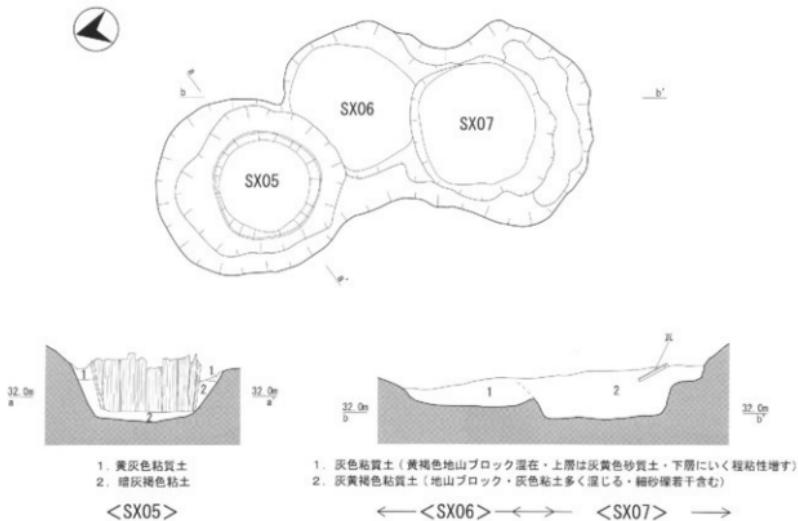
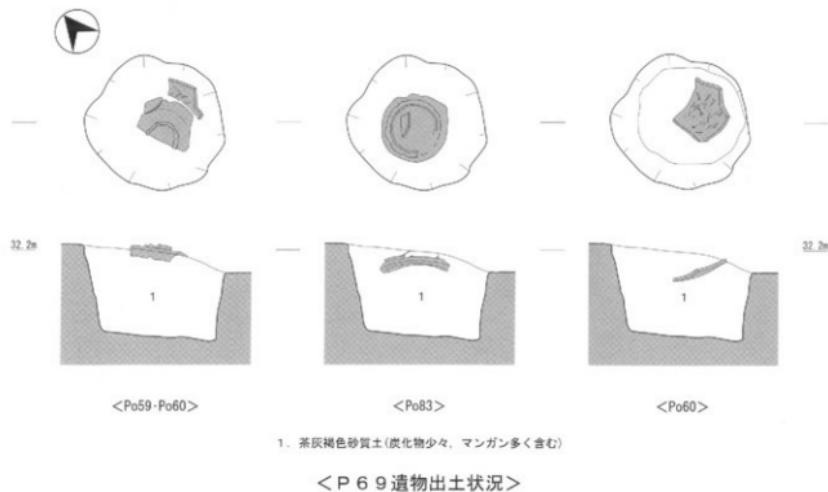
なお、西端には木材片・瓦溜り・石組などがみられて、恐らくは用水路に伴う水量調整用の井堰ではないかと思われる（図版77-2）。

**SD02**（第142・154図、巻頭図版7-2、表6） 用途はSD01と同様と考えられるもので、長さ約20.0m・幅約2.4m・深さ約0.5mを測って、北東端から段状にS-5区の南西端まで延びている。土層の堆積状況も類似するが、やや地山造成土の含有が多くみられ、近世後期以降と考えられるものであった。

共伴遺物も多く、18世紀後半～19世紀の国産陶磁器を主体として、須恵器などが混在して出土しており、SDとする溝のなかでは最も遺物量の多い遺構であった。

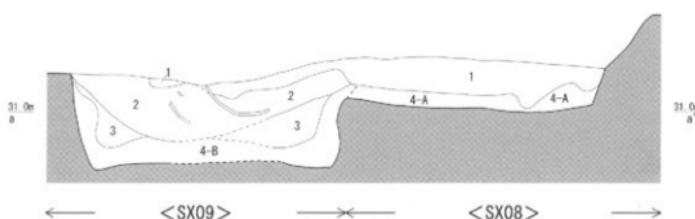
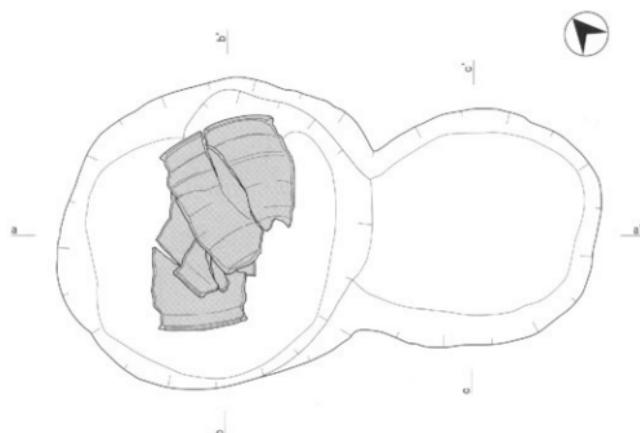
なお、北東端には3mに亘る石組状構造が検出されて、灌漑用の土留め機能を有すると推定されるもののほか（図版77-3）、中位置の底面下には大甕の埋設された遺構（SX08・09）も確認され、これについては後述する。

**SD03**（第142・154図、表6） 用途はSD01・02と同様と考えられるもので、長さ約10.0m・幅約3.6m・深さ約0.6mを測ってSD01に接続し、南北方向に延びるもの。土層の堆積状況も類

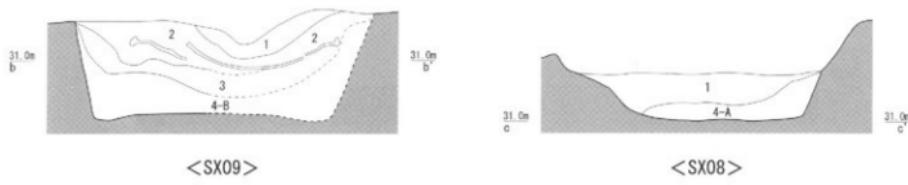


0      1m

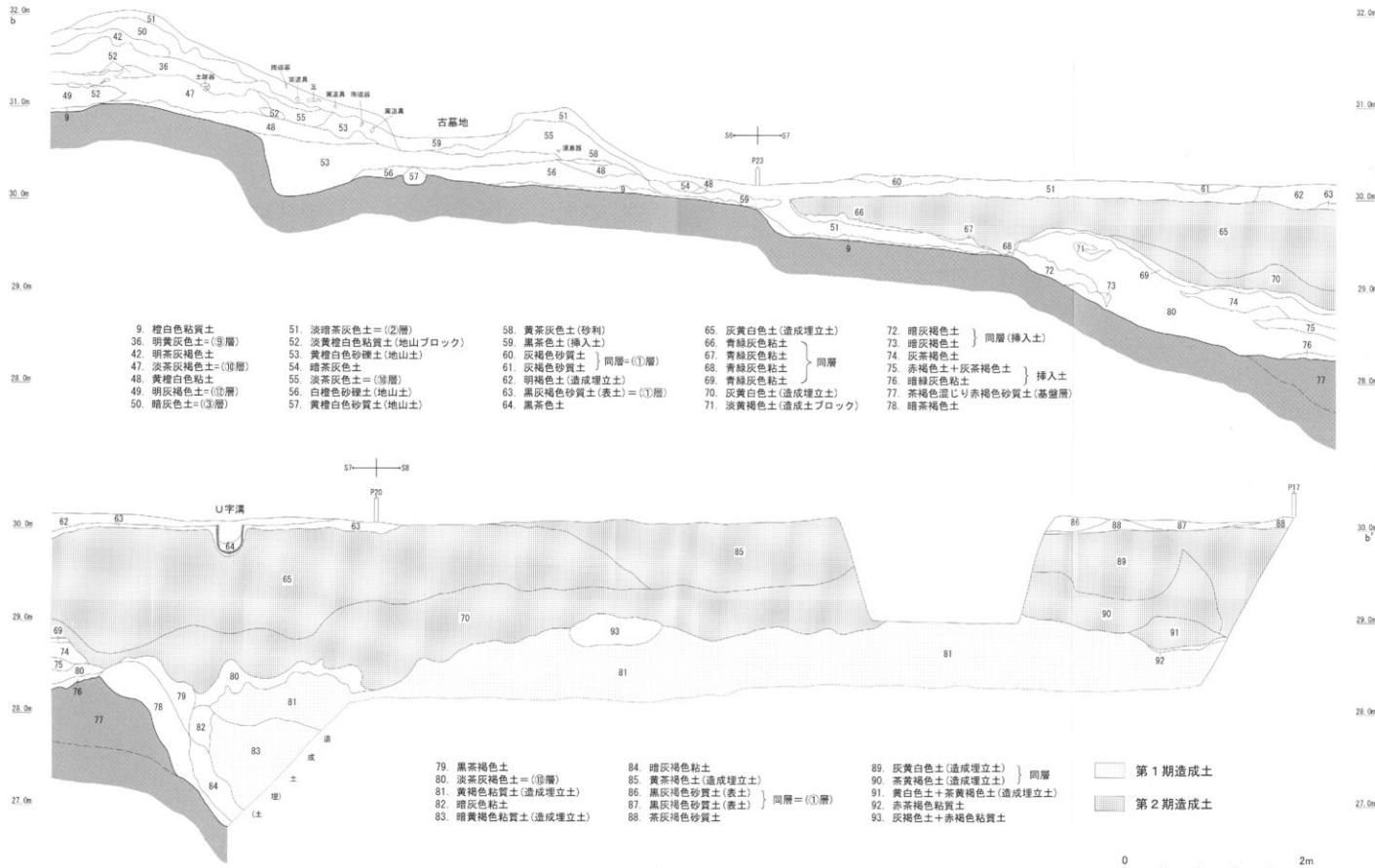
第155図 遺構断面状況図④ (S=1/20)



1. 黄灰褐色土（撲乱層）
2. 灰色～灰黃色シルト（粘性あり・部分的に地山ブロック混在・燒土少量）
3. 茶灰黄色粘質土（強い粘性あり・地山ブロック少量）
- 4-A. 黄灰褐色粘質土（やや強くしまる・地山ブロック混在）
- 4-B. 黄灰褐色粘質土（4-A 層と同層だが、しまり弱い）



第 156 図 遺構断面状況図⑤ (S=1/20)



第157図 S-6~8区南壁の土層堆積状況図 (S=1/40)

似して、近世後期以降のものと考えられた。

なお沿縁東側には、井戸（SX04：図版78-1）が検出されている。坑内の深度は高く砂が充填して、完掘は出来ないでいる。周縁には柱穴が取り囲み（P14～20）、恐らくは汲み上げ施設に伴うものと想像されて、時期もSD03と同時期か、それ以降のものと推測している。

SK11・12・13（第142・153図、表6）3基ともSD01の沿縁に接するもしくは近接するもので、検出標高は約32.4mを測り、またSK12・13は溝に切られている。SK11は径約1.0m・深さ約16.0cmを測り、黄灰色土が陷入するが、部分的に黄褐色粘土（地山ブロック）を含むもの。またSK12・13の残存径はそれぞれ約1.4m・約0.8mを測り、灰黄褐色（砂質）土を陷入している。

いずれも地山造成土に類似する土質をもつことから、その構築時期はSD01に伴うか、それ以降かと想像している。用途は不明である。

SX05・06・07（第142・155図、表6）検出標高は約32.1m強を測り、3基の土坑が切り合って直列に配置するもの。中ほどの遺構（SX06）は両端の遺構（SX05・07）に切られるかたちで検出されたもので、SX06は灰色粘質土、SX05・07は灰黄褐色粘質土～暗灰褐色粘土がそれぞれ陷入する。いずれの径も75.0cm前後を測り、また深さはSX06の12cm、その他は20cm程度を測り、SX06よりもSX05・07は比して新しいと考えられるが、共伴する遺物（瓦など）からみて近世以降のものと推測している。

なおSX05には、木枠の桶組が1基検出されている（図版78-2・79-2）。後世の削平などにより上半部が飛ばされたと想定されるもので、やや腐食する長方形形状の小板片が隙間無く円状に配置されて桶枠を形づくり、内底部には青灰色粘土が平坦に敷設する状況であった。これを取り除くと底蓋はなく、小砾が充填する様相がみられて、埋土の2.暗灰褐色粘土には僅かな異臭を伴うといった状況であった。

さらに周縁には多くの小径の柱痕も遺されて、恐らくは建物を伴う水桶あるいは便所的機能を有するものと推定している。

SK05（第142・150図、表6）検出標高は約32.3m前後を測り、長径約75.0cm・短径約67.0cm・深さ約30.0cmを計測する。坑径は不整円状、断面は台形状を呈して、坑内には灰褐色砂質土が陷入し、その用途は不詳である。

SK06（第142・150図、表6）SD03南東側の沿縁内斜面に位置し、黄褐色混じり茶灰褐色粘質土が陷入する。検出標高は約32.3m～32.1mを測り、長径約66.0cm・短径約50.0cm・深さは約8.0cmを計測して、浅く皿状に落ち込むもの。用途は不明である。

P69（第142・155図、図版76-2、表6）S-4区平坦面の東端に位置するもので、検出標高は32.2m前後を測るもの。長・短径とも約30.0cm・深さ約22.0cmを測って、炭化物は少量、マンガンを多く含む茶灰褐色砂質土が陷入する。

坑内には、上部から上半部にかけて須恵器壺蓋・胴部・底部片が陷入し、いずれも8Cの奈良

時代のもので、また土師器も 2 点共伴するものであったことから、当該期に係る可能性の高いものと想定している。

**SK07** (第 142・150 図、表 6) S - 4 区平坦面の東端中ほどに位置するもので、検出面標高は約 32.1m を測る。長径約 56.0cm・短径約 50.0cm・深さ約 22.0cm を測って、黄褐色混じり褐色シルトが陷入し、内側壁には灰色シルトがブロック状に混在するもの。用途は不明である。

**SK09** (第 142・153 図、表 6) S - 4 区平坦面の西側に位置するもので、検出面標高は約 32.1m を測る。長径約 78.0cm・短径約 68.0cm・深さ約 40.0cm を測って、灰黄褐色砂質土が陷入し、用途は不明のもの。なお南端部には柱穴 (P60) によって、切り取られて連結する。

**SK08・P43・44・54・70** (第 142・150 図、表 6) S - 4 区平坦面の南端域に位置するもので、検出面標高は約 32.05m 前後を測り、大径の土坑を複数の柱穴で切りあつた状態で検出されたものである。SK08 の長径は約 1.0m・短径約 90.0cm・深さ約 42.0cm を測り、上層の灰黄褐色砂質土のほか、下位には黄褐色混じり灰褐色土が混入している。その東端には、いずれも時期の新しくなる柱穴群によって切り取られる状況を看取でき、4 基の柱穴を確認することができる。

まず P70 は土坑内に収まるもので、長・短径・深さとも 20.0cm 未満を測り、淡黄褐色土が陷入する。土坑に接する P44 は、長径約 34.0cm・短径約 23.0cm・深さ約 24.0cm を測るもので、坑内には須恵器 1 点・土師器 1 点・焼土 1 点が共伴して、灰黄褐色土が陷入する。また P43 は長・短径とも約 25.0cm・深さ約 18.0cm を測るもので、陷入土は灰褐色土を呈する。そして P54 の断面は台形状を呈して、黄褐色混じり灰褐色シルトが陷入し、長径約 40.0cm・短径約 30.0cm・深さ約 26.0cm を測るもので、こうした柱穴群は数度の建て替えを予想させるものであった。

なお SK08 の用途は不明であるが、P44 は奈良期のものと想定されるため、同時期かそれ以前のものの可能性がある。また P43 から P54 へと新しくなるが、その土質的な特徴により大きな時期幅はないものと考えている。

**SK10** (第 142・153 図、表 6) SD02 西側の平坦面に検出されたもので、その標高は 31.8m 前後を測る。形状は円形状を呈し、長・短径とも約 60.0cm・深さ約 16.0cm を測るもので、断面はやや腰の張る台形状を呈して、底面は平坦なもの。暗茶褐色粘質土が陷入して、用途は不明である。

**SX08・09** (第 142・156 図、図版 78 - 3・79 - 3、表 6) 本遺構は SD02 の南西端でも底面に検出されたものである。2 基は切り合い、SX09 が SX08 を切り取ると観察されたもので、検出面標高は約 31.7m 前後を測っている。

SX08 は長径約 1.1m・短径約 92cm・深さは約 20cm、また SX09 は長径約 1.4m・短径約 1.2m・深さは約 38cm を測るもので、それぞれ台形状に掘り込まれて、SX09 は一段と深くなる状況を看取できる。2 坑とも地山ブロックの混在する茶灰黄色粘質土や、底面には黄灰褐色粘質土が混入することから、構築時期の近いものと推察される。

なお SX09 の坑内には、大甕片が重なり合う状況を確認することができた。当初は底部に轍 (わ

だち) 状の浅い落ち込みも確認されたことから埋設されていたものと推定でき、また復元すると口径 38.0cm・底径 24cm・器高 57cm を測って、恐らくは肥前系の影響を受けた地元産で近世後期以降と考えられるものであった。その様形から水甕などの機能を有すると想定されるが、なぜ溝の底から検出されたのかは疑問とするところである。

SK14 (第 142・158 図、表 6) S-5 区の SD02 と落ち込み 1 に区画された平坦面上に位置するもので、黄灰色土の地山面上に検出されている。その標高は 31.5 ~ 31.6m を測ってやや大径を呈し、柱穴とは想定できずに用途は不明であり、以降の SK20 までは同様といえるもの。

長径は約 65cm・短径約 61cm・深さは約 10cm を測り、灰褐色土が陥入する。

SK15 (第 142・158 図、表 6) 長径は約 87cm・短径約 66cm・深さは約 18cm を測り、灰褐色土が陥入する。焼土ブロックを多く含んで、鉄製品 1 点を共伴するもの。

SK16 (第 142・158 図、表 6) 長・短径とも約 55cm 前後・深さは約 26cm を測るもの。焼土ブロックを少量含んで、暗灰褐色土が陥入する。断面は台形状を呈して、底面は平坦となる。

SK17 (第 142・158 図、表 6) 長径は約 73cm・短径約 60cm・深さは約 16cm を測り、暗灰褐色土が陥入する。焼土ブロックを多く含んで、断面は台形状を呈するが、底面は不整面となる。

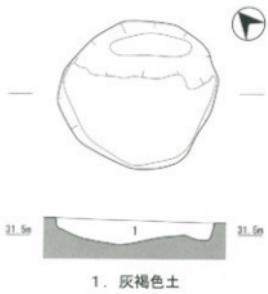
SK18 (第 142・158 図、表 6) 長径は約 75cm・短径約 67cm・深さは約 8cm を測って浅いもの。底面はほぼ平坦面を形成し、また焼土ブロックを多く含む灰褐色土が陥入して、土師器 2 点・国産陶磁器 1 点が共伴する。

SK19 (第 142・158 図、表 6) 長径は約 60cm・短径約 50cm・深さは約 12cm を測って浅く、底面は不整面を呈する。坑内には灰褐色土が陥入して、国産陶磁器 1 点が共伴するもの。

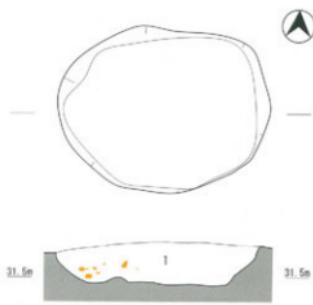
SK20 (第 142・151 図、表 6) 坑形は円状を呈し、長・短径とも約 60cm・深さは約 4cm を測つて非常に浅く、また底面は不整面を呈するもの。坑内には黄灰褐色土が陥入して、須恵器 1 点・国産陶磁器 2 点が共伴する。

以上の SK14 ~ 20 までは、某かの施設に伴うと想定されるものの、その詳細は不明である。全体的に遺構深度の浅いことから、後世に過度の削平を受けたと思われ、またその際に新しい時期の遺物が混入したものと考えられる。

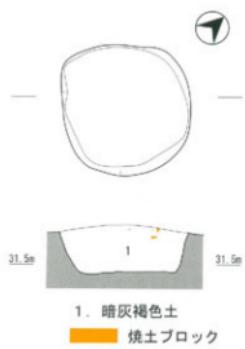
古代に係るものは須恵器・土師器などが散見できて、灰褐色土を中心とする土壤に包含されていた様相を窺えたことから、断定はできないが、この層土が奈良期を主体とする層位の可能性をもつものと推量している。



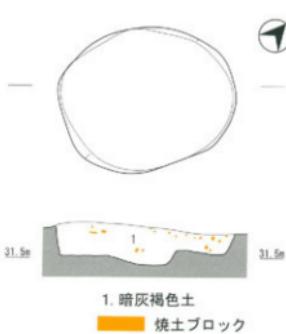
<SK14>



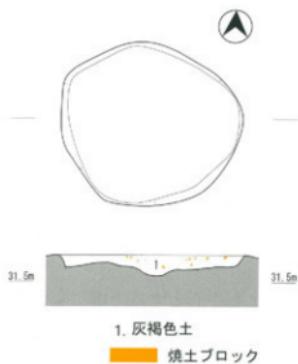
1. 灰褐色土  
焼土ブロック



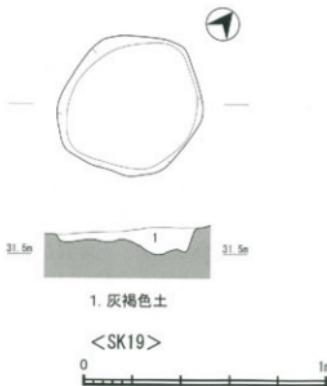
<SK16>



<SK17>



<SK18>



第 158 図 遺構断面状況図⑥ (S=1/20)

## 5. S - 10 区の調査状況（第 143・151・159～161 図、図版 75-1・80-2、表 6）

本区域は、地形的に谷部を形成する中央域へと傾斜する様相が窺える地点であり、また調査区の中ではもっとも弥生土器が出土した場所で、表層部は中央から南西端区へと続く造成土で覆われている状況であった（第 160・161 図）。

現地の地表面標高は 30.0m～30.1m を測るもので、表層の造成土までを取り除く標高は南西から北東に向かい 29.8m～29.0m を測って緩やかな起伏を伴って傾斜する。また基盤層は同方向に 29.6m～27.6m を測って傾斜していく地形的な状況を看取できた。

遺物は、第 160 図の中位（12・38・57 の茶灰褐色土）から下位（15・60・64 の茶黄褐色粘質土）にかけて、少量の須恵器とともに弥生土器がほぼ中央域に群状にみられるものだった（図版 76-1）。また遺構は 40 黄褐色砂質土と上層との層界面に検出されたものが大半であり、総数は 7 基を数えて、1 基の土坑（SK26）のほかは柱穴（P）という状況であった。

なお扇状に落ち込んでいく北東端域には、38 茶灰褐色土や 60 茶黄褐色粘質土から 40 黄褐色砂質土にかけての層位に、集中して十数基の柵列杭が検出されている（図版 75-1）。第 5 章第 4 節の自然化学分析に係る樹種鑑定及び炭化材の年代測定によれば、樹種はクリであり、年代は江戸時代中期～明治期のものと判明している。

のことから近世以降に上方から嵌入された杭であるとともに、合わせて N - 5 区の SK23 にみられた炭化物と同年代であることが判明できたもので、これは恐らくは後世の地形の改変に伴って施工された可能性を含み、SD01・02 にみられる土留めや井堰などと同質の灌漑用施設に伴う性格のものと推測している。

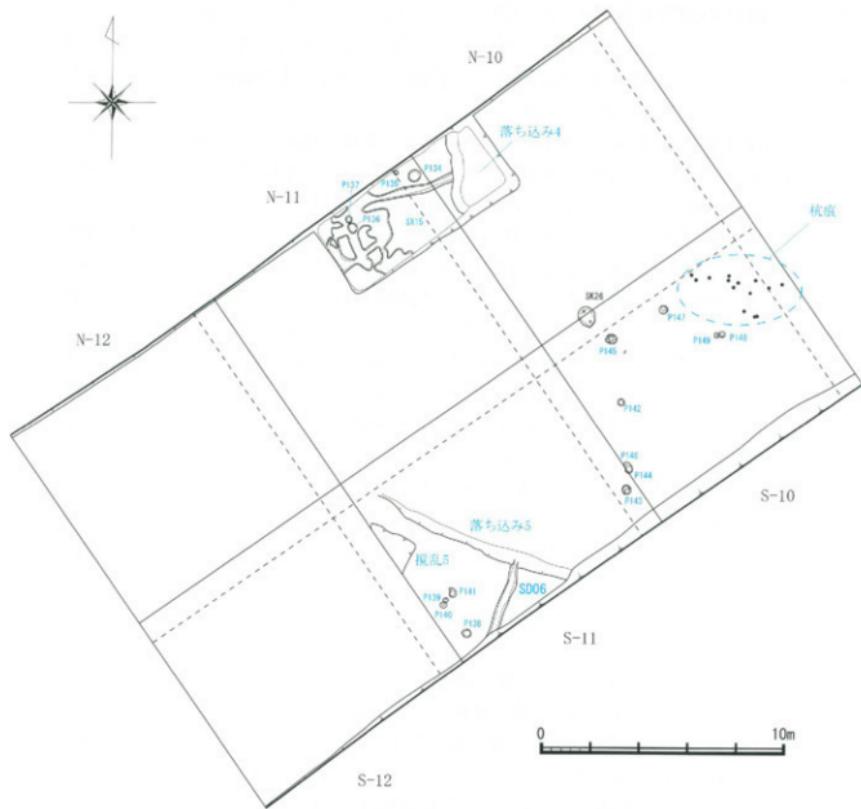
以降は特徴的な遺構について述べてみたい。

柱穴群 7 基（第 159 図、表 6） 検出標高 28.0m～29.3m に検出されたもので、P142～148 が該当し、うち 1 基は S - 11 区にかかるが同質のものと判断し、含めてみていくこととする。

大半は長・短径とも 30cm 前後・深さは 23cm 未満を測るものであるが、うち P145 は長径約 45cm・短径約 39cm・深さは約 13cm を測るもの。

陥入土は暗灰褐色～黄灰褐色土を呈して、共伴遺物はみられない。径状から S - 3・4 区及び斜面地となる S - N - 6・7 区のものと類似すると思われたが、須恵器などの混入がみられないために判然としないものである。

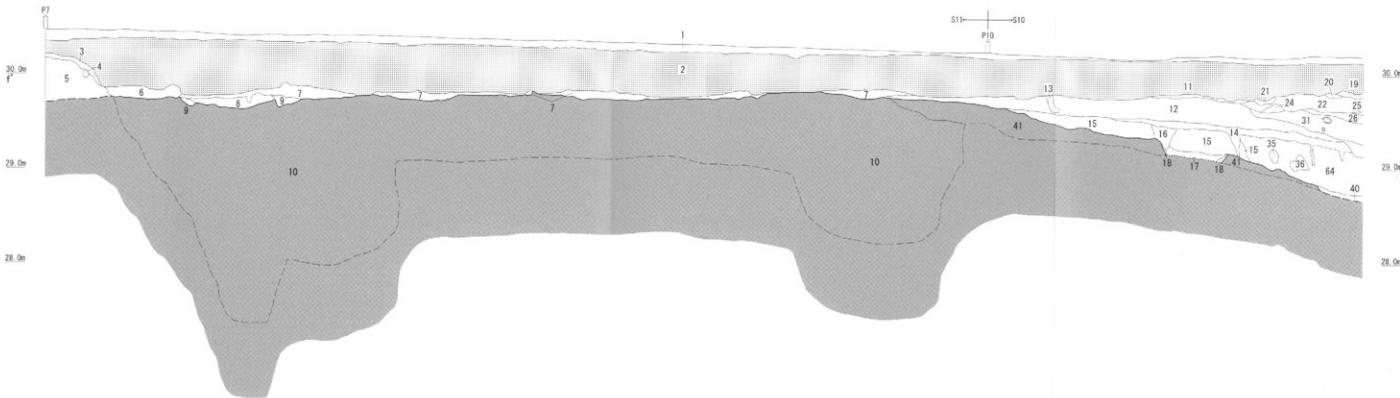
但し P145-P142、142-P146・144、P145-P147、147-P149・148 などは柱間 2.6m～2.8m を測って、部分的には列状にも見受けられるもの。この斜面地において、ある程度の規則性は窺えるが、性格は不明であり、恐らくは某かの建物・施設に伴うものだろう。



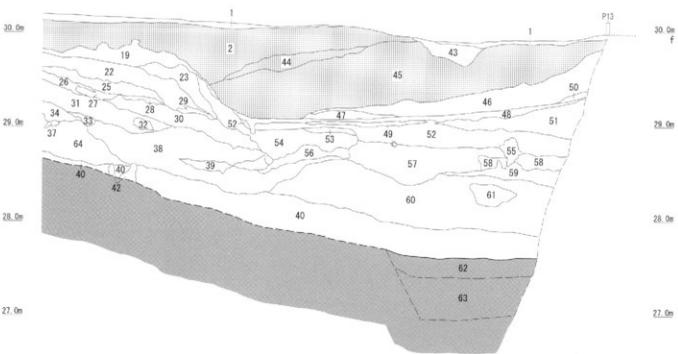
第159図 S-10区を中心とした遺構配置図 (S=1/200)

SK26（第151・159図、表6） 坑形は楕円状を呈して、長径約87cm・短径約70cm・深さは約18cmを測るもの。断面はかまぼこ状を呈して、坑内には灰黄褐色土が陥入する。側壁には赤褐色を呈する焼土壁、底部には暗黄灰色土が混入する炭化層、そして底部境には被熱する淡赤褐色砂礫土が確認されている。

共伴遺物は2点の割石（角砾）のみで、その用途は不明であるが、火を扱った施設には違いないものと推定する。



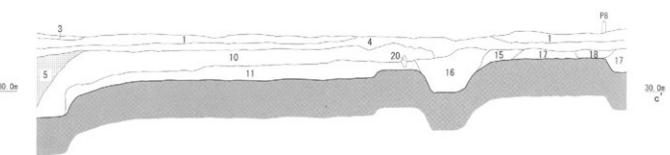
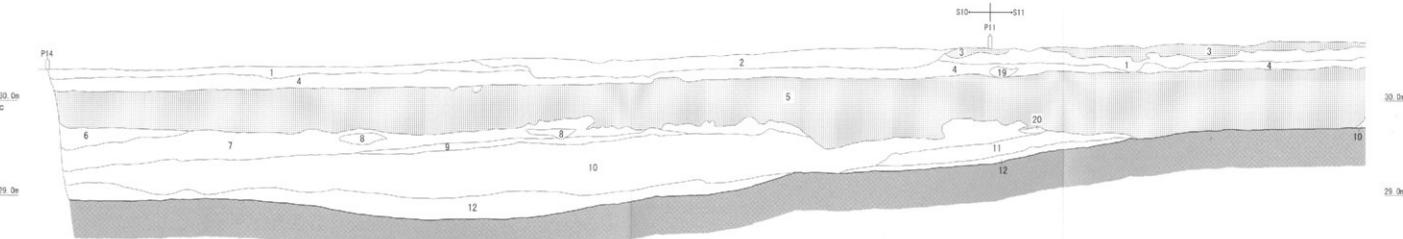
1. 暗灰褐色砂質土 = (①層)  
 2. 茶灰白色土 (造成埋立土)  
 3. 淡灰白色混じり灰褐色砂質土  
 4. 黄茶褐色砂質土 (ブロック層)  
 5. 黄褐色混じり淡灰白色砂質土  
 6. 茶褐色砂質土  
 7. 茶褐色粘質土  
 8. 淡黄褐色砂土 (地山)  
 9. 淡黄褐色粘土 (地山アロック層)  
 10. 茶褐色混じり茶褐色砂質土 (基盤層、下層確認の為掘削)  
 11. 淡灰褐色砂質土 = (①層)  
 12. 暗茶褐色砂質土 = (⑥層)  
 13. 灰色粘質土  
 14. 暗灰褐色シルト  
 15. 茶褐色シルト = (⑤層)  
 16. 暗茶褐色シルト  
 17. 淡茶褐色粘質土  
 18. 茶褐色粘質土  
 19. 淡茶褐色砂質土 = (③層)  
 20. 暗茶褐色混じり暗灰褐色土  
 21. 淡灰褐色砂質土  
 22. 茶褐色混じり淡灰白色砂質土 (造成埋立土)  
 23. 混じ茶褐色混じり茶灰褐色砂質土  
 24. 茶褐色砂質土  
 25. にじい黄褐色混じり灰褐色砂質土  
 26. 混じ茶褐色混じり茶褐色砂質土  
 27. 淡灰白色砂質土  
 28. 淡灰白色砂質土  
 29. 淡灰白色砂質土  
 30. 淡灰白色混じり茶灰褐色砂質土  
 31. 反褐色砂質土 = (④層)  
 32. 茶褐色土 (33と同層)  
 33. 赤茶褐色土 (32と同層)  
 34. 暗茶褐色混じり茶灰褐色砂質土  
 35. 暗茶褐色粘質土 } 同層  
 36. 暗灰褐色粘質土  
 37. 赤茶褐色土  
 38. 茶灰褐色シルト = (⑥層)  
 39. 混じ茶褐色シルト  
 40. 淡茶褐色粘質土 = (特層)  
 41. 黄褐色粘質土 (基盤層)  
 42. 灰褐色粘質土  
 43. 茶褐色混じり暗灰褐色砂質土  
 44. 混じ茶褐色砂質土 (造成埋立土)  
 45. 波状灰白色土 (造成埋立土)  
 46. 茶褐色混じり灰=黑褐色粘質土  
 47. 混じ茶褐色粘土  
 48. 黑褐色粘質土  
 49. 黄褐色粘土  
 50. 淡灰褐色土  
 51. 灰褐色土  
 52. 淡茶褐色シルト = (④層)  
 53. 淡茶褐色砂質土  
 54. 茶褐色シルト = (④層)  
 55. 明茶褐色粘質土  
 56. 明茶褐色砂質土  
 57. 茶褐色シルト = (⑥層)  
 58. 灰褐色シルト = (⑦層)  
 59. 暗茶褐色粘質土 = (⑧層)  
 60. 混じ茶褐色混じり灰褐色粘質土 = (⑨層)  
 61. 灰褐色粘土 (ブロック層)  
 62. 淡茶褐色粘土 = (⑩層)  
 63. 黄灰褐色砂質土 = (⑪層)  
 64. 茶灰褐色シルト = (⑫層)



第2期造成土



第160図 S-10・11区北壁の土層堆積状況図 (S=1/40)



1. 黒褐色砂質土(表土)=(①層)
2. 茶黃褐色砂質土(造成埋立土)
3. 灰褐色土(造成埋立土)
4. 明灰褐色砂質土(耕土)=(③層)
5. 淡灰褐色土(造成埋立土)

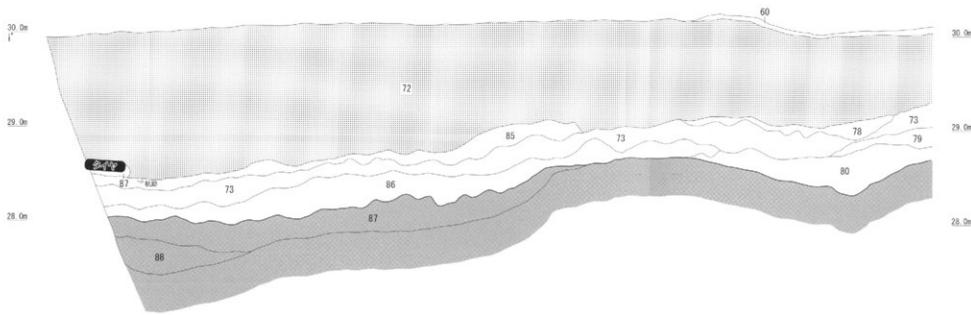
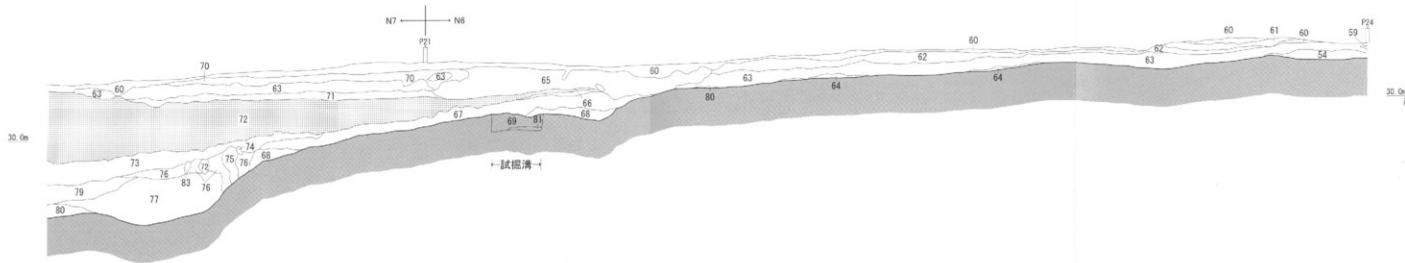
6. 淡灰褐色砂質土=(⑧層)
7. 茶灰褐色シルト=(⑩層)
8. 灰褐色砂質土
9. 明灰褐色砂質土
10. 黄褐色砂質土=(⑫層)

11. 黄茶褐色砂質土=(⑪層)
12. 黄褐色粘質土=(⑯層)
13. 灰褐色砂質土
14. 暗灰褐色砂質土
15. 黄褐色砂質土=(⑮層)

■ 第2期造成土



第161図 S-10 · 11区南壁の土層堆積状況図 (S=1/40)



60. 黒灰色土（耕土）  
61. 淡黄褐色土（造成埋立土）  
62. 脳灰褐色砂質土（耕土）  
63. 灰褐色土=（5層）  
64. 黄褐色粘質土  
65. 黄褐色混じり灰褐色砂質土（耕土搅乱層）  
66. 灰褐色粘質土  
67. 茶褐色混じり淡黄褐色土  
68. 淡白色混じり黄褐色砂  
69. 淡黄褐色混じり灰白色粘質土

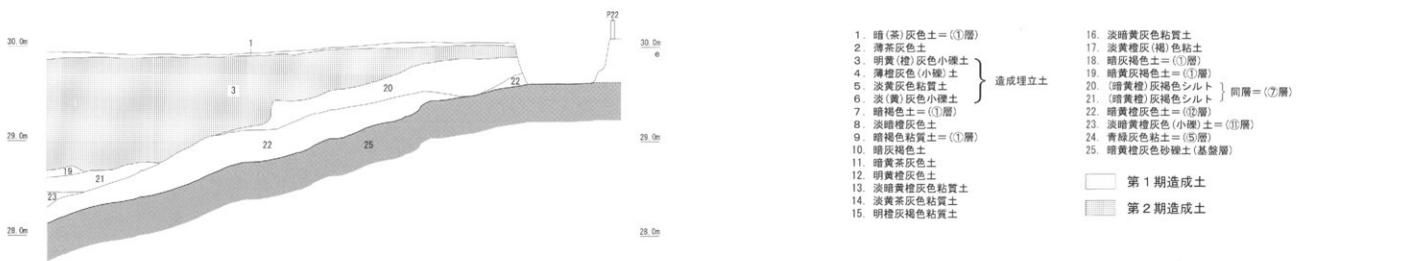
70. 晴茶褐色混じり淡黄褐色土  
71. 淡灰褐色土  
72. 明灰褐色土（造成土）  
73. 淡黄褐色砂質土=（6層）  
74. 灰褐色砂質土  
75. 黄褐色混じり暗灰褐色土  
76. 灰褐色土=（7層）  
77. 淡黄褐色砂質土  
78. 淡灰褐色シート  
79. 茶黃褐色粘質土=（7）層

80. 黄茶褐色粘質土  
81. 灰白色混じり黄褐色砂  
82. 茶褐色混じり黄灰白色土  
83. 淡灰褐色粘質土  
84. 棕灰色粘土  
85. 其他色土  
86. 淡茶褐色土  
87. 棕褐色壤土（基盤層）  
88. 黄褐色壤土（基盤層）

■ 第2期造成土

0 2m

第162図 N-6・7区北壁の土層堆積状況図 (S=1/40)



1. 暗(茶)灰色土 = (①層)  
 2. 薄灰色土  
 3. 明黄(桔)灰色小礫土  
 4. 薄橙灰色(小礫)土  
 5. 淡黄灰色粘質土  
 6. 淡黄灰色砂礫土  
 7. 暗灰褐色土 = (①層)  
 8. 淡暗黃褐色土  
 9. 暗褐色粘質土 = (①層)  
 10. 暗灰褐色土  
 11. 淡黄茶灰色土  
 12. 明黄橙灰色土  
 13. 淡暗黃褐色粘質土  
 14. 淡黄茶灰色粘質土  
 15. 明棕紅褐色粘質土  
 16. 淡暗黃褐色粘質土  
 17. 淡黃褐色(褐)色粘土  
 18. 暗灰褐色土 = (①層)  
 19. 暗黃灰褐色土 = (①層)  
 20. (淡黃桔)灰褐色シルト } 同層 = (⑦層)  
 21. (淡黃)灰褐色シルト } 同層 = (⑦層)  
 22. 淡暗黃褐色土 = (⑥層)  
 23. 淡暗黃褐色(小礫)土 = (⑤層)  
 24. 青綠灰色粘土 = (⑤層)  
 25. 暗黃褐色砂礫土(基盤層)

■ 第1期造成土  
 ■ 第2期造成土



第163図 S-7・8区北壁の土層堆積状況図 (S=1/40)

## 6. 中央域の調査状況（第144・150・152・157図、図版73-1、表6）

本区域は、本来は地形的に谷部を形成する痕跡が確認されて、それは南東側の県教委調査区の中ほどから発生し、北西方向に落ち込んでいく状況を看取できた。当初は大溝と想定してみたが、調査の結果こうした規模の落ち込みが確認されたことにより、地形的な谷部として捉えたもので、第163図を参照にすると、地表面標高は30.0m前後で、そこから掘削可能地点の標高は約26.3mを測ることから、谷底部までは最低でも5m以上は測るものと推測された。

調査時には消滅するものとして捉えられたが、恐らくはSD02から本域に向かって接続する溝的な存在も考えられ、また上述した石組状遺構や柵列杭などの検出により、確実なところでは近世以降に係る周域開発に伴う自然排水路的な機能を有していたものかもしれない。

坑内には多種類の土層を確認できるが、大部分は現代に係る搬入造成土で、底部側辺にはそれ以外の時期と想定される層位、そして底部辺には基盤層に近づく層位とに大別することができる。その搬入造成土は2期に分類でき、第163図では12～17の黄橙灰色粘質土を第1期造成土、3・5・6のよくしまる淡黄灰色小礫土を第2期造成土とし、その境界には7・9・19などの暗褐色粘質土（腐植土）が陥入していた。そうした搬入時期については不明であるが、地元住民からは昭和58年の災害年度というご教示も頂いている。

また、それ以外の時期と想定される層位とは20・21の（暗黄橙）灰褐色シルトを指してS-6区から部分的に続くもので、須恵器・土師器などの出土も多いものである。そして22・23の暗黄橙灰色小礫土は、基盤層に類似する無遺物層となる。

なお、N-8区は隣接家屋の安全保持、N-S-9区は調査に係る機材の搬入出路の確保、またS-8区では安全深度以下は土砂崩壊による危険防止を目的として、掘削を止めている。

一方の周域では、中央に向かう傾斜地面が形成され、既述したS-10区も含んで柱穴を中心に散見できる状況を窺えた。とくにN-S-6区からN-S-7区の地表面標高は、30.0m～32.0mへと推移し、また基盤層は27.0m～31.0mを測って、さらに下降していく状況が窺われた（第157図）。

この4区に係る出土遺物については、国産陶磁器のほか須恵器が多く、次いで土師器がみられるといった状況であった。その層位は第160図では63や73の灰褐色土～灰黄褐色砂質土、第155図では47・55・80の淡茶灰褐色土、第161図では（暗黄橙）灰褐色シルトといった状況で、こうした灰褐色土に類する層位によくみられたことから、奈良期を中心とする時期に相当する可能性を窺えるものと推測している。以降は、N-S-6・7区の遺構を中心に述べることとする。

### 柱穴群34基（第142図、表6）

斜面地に検出された小径の柱穴群で、ある程度の規則性をもるものと思われるが判然としないもの（図版80-1）。大半は長径40cm未満・短径30cm未満のものであり、P116・127のように径が40cmを超えるものもある。また深さは20cm台未満のものが多く、P113・114・127のように40cmを超えるものも散見できる。

陥入土は、焼土や炭化物を少量伴った暗灰褐色～黄灰褐色土が多く、P112には須恵器1点、P114には土師器1点、P116には国産陶磁器1点、P126には鉄滓2点がそれぞれ共伴する。

性格・時期は不明であるが、某かの施設に伴うものだろう。

SK25(第142・151図、表6) S-7区に検出され、その標高は29.6m前後を測って、坑形は長方形を呈するもの。長径約1.0m・短径約70cm・深さ約14cmを測って浅く落ち込み、坑内には炭化物を含む灰黄褐色砂質土のほか灰黄褐色混じり黄褐色粘質土が陥入する。

底部中央には、2~5cmの厚みを伴い炭化物が張り付くようなかたちで検出されていて、土師器が2点共伴する。用途は不明であるが、時期は恐らく古代のもので、火を扱った施設跡と思われる。

## 7. 北東端域の調査状況(第142・164図、図版71-2・80-1)

本区域は地形的に高位であり、その地表面標高は33.0m前後を測る区域である。但し、表土掘削後の標高がそれであり、とくに北東端は小丘状を呈して、雜木が繁茂していたのは先述のとおりである。

本域は墓域や宅地であったためか過度の削平を受けたと捉えられたもので、下層までの遺物は混在して出土しており、須恵器や土師器を僅かに伴いながら、国産陶磁器が大半を占めるといった状況であった。

また遺構は近代以降の納骨堂跡及び墓13基のみで、これについては既述のとおりであり(参照:4. S-2~5区の調査状況)、そのほかには検出されていない。

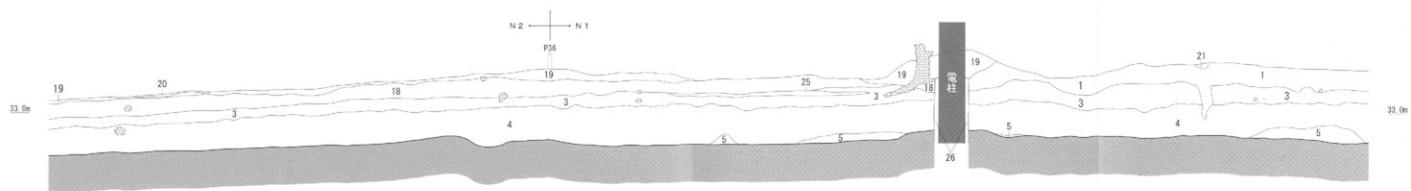
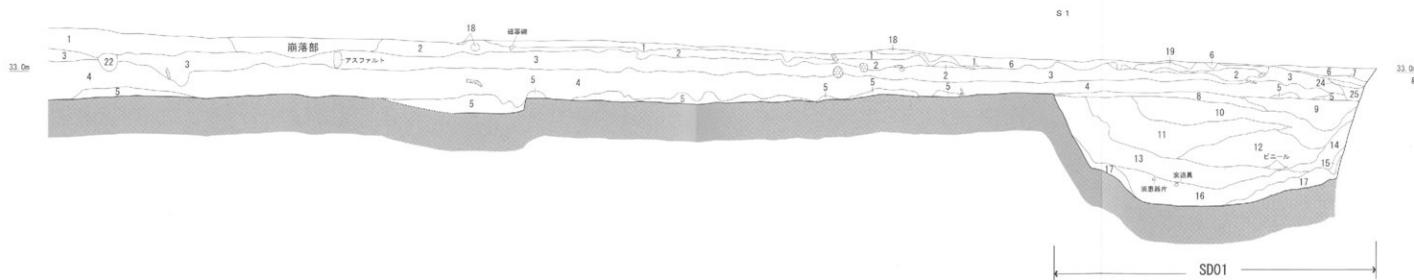
## 8. 南西域の調査状況(第143・159~161・164図、図版73-2・3・80-3、表6)

調査前の本区域は宅地や倉庫地であり、過度の削平を予想していた場所でもあった。地形的に平坦であって南西方向に僅かに微高し、その地表面標高は30.0m~30.6mを測っている(第160・161図)。

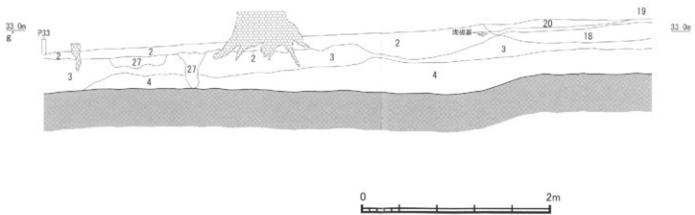
土層堆積状況図のとおり、中央域の谷部から続く第2期造成土が上層に厚く堆積し(第160図の2など)、その直下は旧耕土層(第160図の6・7など)、その下層には基盤層(第160図の10・41など)が確認されたもので、後世に係る過度の削平状況が明らかとなっている。このことにより、検討の上で掘削を縮小することとし、トレンチ掘削成果にしたがってS-10・11区及びN-10・11区北西端域の中央部を調査することとした。

その結果、S-10区については既述のため除くが(参照:5. S-10区の調査状況)、S-11区には柱穴(P)5基(うちP143は説明済み)・溝状遺構(SD06)1条・落ち込み1ヶ所(落ち込み5)など、またN-10・11区は柱穴(P)4基・不明遺構(SX15)1基・落ち込み1ヶ所(落ち込み4)が検出されている(第159図)。

これらの用途は不明であり、中には土師器を僅かに含む柱穴(P134)もみられたが、大半は炭化物を少量伴う近代以降の国産陶磁器のみの伴出であった。このことにより、その遺構形態・共伴遺物などから判断して、近代以降の住宅建設や造成などに関わるものではないかと推測している。



- 1. 黒～暗褐色土(練土) = (①層)
- 2. 黒褐色土
- 3. 淡灰褐色土(透質)
- 4. 暗黄灰色土(透質) = (⑧層)
- 5. 暗棕褐色粘質土 = (⑨層)
- 6. アスファルト層(2層構造)
- 7. 明黄灰色土
- 8. 黄灰色小礫土
- 9. 灰褐色砂質土
- 10. 明～暗茶灰色砂土
- 11. 緑灰色砂土
- 12. 明灰褐色砂質土
- 13. 綠黃灰色粘質土
- 14. 淡黃灰色粘質土
- 15. 綠黃灰色土
- 16. 暗灰褐色+暗青(緑)灰色粘土
- 17. 明黄褐色粘質土
- 18. 深褐色山ノブロック
- 19. 黃茶褐色土
- 20. 淡黄灰色泥成土
- 21. 棕灰色土(造成土か)
- 22. 黄灰褐色土(木根による浸食か・ブロック状)
- 23. 茶褐色砂土
- 24. 黄茶灰色砂土
- 25. 淡灰色土
- 26. 暗棕褐色土(地山ブロック混合)
- 27. 明灰褐色土(木根等による腐植土か)



第 164 図 調査区北東端辺の土層堆積状況図 (S=1/40)

## 遺跡調査報告会

(平成20年2月17日 於：旧島根県立益田工業高校体育館)



会場風景



展示ブース



統括・座談会

第6表 久城東遺跡遺構計測一覧表(1)

豊穴住居 (SI01)

構造名	グリッド	寸法(cm)		測定員	測定日	測定者	切合	省考
		奥行	幅延					
S-P04		14.0	22.0	13.0				炭化物少量
S-T02		12.0	10.0	9.0				炭化物少量
S-P03		9.0	6.0	6.0				炭化物少量
S-T04		10.0	8.0	9.0				炭化物少量
S-T05		12.0	9.0	20.0				炭化物少量
S-P06		13.0	10.0	13.0				炭化物少量
S-P07		18.0	17.0	7.0				炭化物少量
S-P08		16.0	12.0	29.0				炭化物少量
S-P09		12.0	8.0	11.0				測量した木村倉の侵入
S-P10		12.0	9.0	8.0				炭化物少量
S-P11		14.0	8.0	6.0				炭化物少量
S-P12		12.0	8.0	8.0				炭化物少量
S-P13		18.0	9.0	15.0				炭化物微量
S-P14		9.0	8.0	7.0				炭化物少量
S-P15		22.0	16.0	28.0				
S-T06		28.0	16.0	11.0				
S-T07		9.0	7.0	13.0				炭化物微量
S-P16		8.0	7.0	10.0				炭化物微量
S-T08		10.0	9.0	16.0				
S-P19		10.0	8.0	15.0				
S-P20		29.0	16.0	5.0				
S-T01		34.0	22.0	15.0				未開発分で、S-P28の至近西方向に堆出
S-P22		38.0	36.0	7.0				未開発分で、S-T08の至近東西方間に堆出
S-T03		32.0	31.0	6.0				土柱痕、炭化物少量・焼少・藍含む
S-T05		32.0	28.0	6.0				土柱痕、炭化物・焼少・藍を多く含む
S-P26		31.0	24.0	22.0				土柱痕、炭化物中量・焼少・藍含む
S-P27		22.0	18.0	6.0				未開発分で、S-T43の右隣・東方向に突出
S-T08		44.0	38.0	12.0				炭化物微量
S-P29		23.0	21.0	8.0				炭化物微量
S-T30		8.0	6.0	6.0				
S-P31		21.0	20.0	12.0				
S-P32		20.0	-	1.0				炭化物多量・焼少・藍含む
S-T33		10.0	8.0	14.0				炭化物多量
S-P34		11.0	8.0	8.0				炭化物微量
S-T35		20.0	14.0	18.0				炭化物微量
S-P36		30.0	15.0	4.0				炭化物少量
S-P37		5.0	2.0	1.0				炭化物微量
S-T38		14.0	10.0	16.0				
S-P39		14.0	12.0	21.0				
S-T40		16.0	10.0	17.0				炭化物中量・板上少量
S-T41		34.0	25.0	7.0				土柱痕、炭化物・焼少を多く含む
S-T42		16.0	10.0	5.0				柱痕あり
S-T43		34.0	32.0	4.0				柱痕、炭化物・焼少を多く含む 青灰色土の墻入
S-SZ01		34.0	30.0	3.0				断面用透体か、溝土層
S-SK02		20.0	56.0	21.0				中央ビット、炭化物・板上を多く含む
S-SI01		70.0	28.0	6.0				縦空溝、炭化物・焼少を多く含む 壁は厚さ20cm
S-SD02		14.0	26.0	11.0				S-SK02
S-SD03		25.0	38.0	11.0				S-SK02-S-SI01
S-SD04		8.0	20.0	20.0				S-SK02

第6表 久城東遺跡遺構計測一覧表(2)

調査区 (SI01 以外)

遺構名	グリッド	寸法(cm)		深さ (cm)	性 調	測量用具	切 台	備 考
		長辺	短辺					
P02	N-3	-	-	-	-	-	-	消滅
P02	S-3	-	-	-	-	-	-	消滅
P03	N-3	-	-	-	-	-	-	消滅
P04	N-3	25.7	22.1	15.8	灰褐色	-	SX01	
P05	N-3	22.8	25.6	15.6	灰褐色	測量206.6m、底面古1.1m	SX01	
P06	N-3	21.3	19.6	7.4	灰褐色	-	-	
P07	N-3	41.5	36.3	19.6	灰褐色	-	-	
P08	N-3	28.5	16.8	23.0	灰灰褐色	-	SX03-T09	
P09	N-3	48.3	34.5	18.0	灰褐色	-	SX03-P08	
P10	N-3	22.8	19.1	11.8	灰褐色	-	-	
P11	N-3	-	-	-	-	-	-	消滅
P12	N-3	31.6	28.6	9.8	灰褐色	-	-	
P13	S-3	26.7	22.9	7.2	灰褐色	-	-	上面積土の高さか?
P14	S-3	34.8	27.5	26.4	灰青褐色	-	SX03	
P15	S-3	26.0	19.3	13.8	灰青褐色	-	-	
P16	S-3	19.3	29.4	22.8	暗灰褐色	-	SX03	上部側面
P17	S-3	23.4	19.1	15.4	灰青褐色	-	SX03+P08	上部側面
P18	S-3	27.6	23.4	27.6	灰灰褐色	-	-	上部埋れれた
P19	S-3	42.2	27.0	9.4	灰褐色	-	SX12-P20	
P20	S-3	30.4	23.5	6.0	灰青褐色	-	SX03-T19	
P21	S-3	16.0	10.8	8.4	灰褐色	-	-	
P22	S-3	38.9	35.1	13.0	灰褐色表面に灰褐色斑点	-	SX12	
P23	S-3	20.8	19.8	9.6	灰褐色	-	SX03+P08	
P24	S-3	17.5	14.7	8.4	灰褐色	-	SX03+P08	
P25	S-3	24.8	19.9	18.0	灰褐色	-	SX03+P08	
P26	S-3	15.8	13.9	12.6	灰褐色	-	SX03+P08	
P27	S-3	19.3	18.9	12.8	灰褐色	-	SX03+P08	
P28	S-3	17.8	13.9	5.4	青灰褐色	-	SX03+P08	マンガン片-文化物類少
P29	S-3	41.6	28.4	8.4	青灰褐色	-	P30	
P30	S-3	12.1	12.2	3.0	青灰褐色	-	P29	
P31	S-3	21.3	18.9	9.0	灰青褐色	-	SX03+P08	
P32	S-3	15.3	11.0	7.2	灰青褐色	-	SX03+P08	
P33	S-3	21.1	18.4	5.6	灰褐色	-	-	
P34	S-3	-	-	-	-	-	-	消滅
P35	S-3	-	-	-	-	-	-	消滅
P36	S-4	25.8	22.5	15.0	青灰褐色	-	-	
P37	S-4	19.8	17.1	8.1	灰褐色	-	-	
P38	S-4	20.8	20.1	13.4	暗褐色	-	-	
P39	S-4	33.6	27.7	17.4	深茶褐色	-	-	
P40	S-4	31.3	30.6	43.4	灰褐色	測量204.4m	-	
P41	S-4	36.1	31.6	35.8	灰褐色	-	-	炭化物少々
P42	S-4	48.2	42.6	56.8	灰褐色	-	P47-P78 P79	龜山ブロック隕
P43	S-4	25.3	24.2	18.4	灰褐色	-	P44-P54	
P44	S-4	34.4	23.1	24.0	灰褐色	測量21.5m、土井器1.5m、前2.1m	SX08 P43-P54	壁土-瓦少々
P45	S-4	31.0	28.7	23.0	淡灰青褐色	-	P47	
P46	S-4	36.2	32.6	34.8	灰褐色	-	P58	炭化物少々
P47	S-4	31.5	23.3	12.4	黄褐色表面に灰褐色	-	P45-P75	
P48	S-4	28.8	22.8	8.4	灰褐色	-	-	
P49	S-4	21.2	20.4	12.5	灰褐色	-	-	
P50	S-4	24.7	18.1	8.5	灰褐色	-	SX03+P08	
P51	S-4	29.4	26.0	16.4	灰褐色	-	SX03	
P52	S-4	32.3	26.2	20.0	灰褐色	-	SX03	
P53	S-4	25.6	22.8	52.8	茶褐色	壁土器1点	-	炭化物
P54	S-4	38.5	29.0	25.8	青褐色表面に灰褐色	-	SX08 P43-P54	
P55	S-4	23.8	18.2	13.8	暗褐色	-	-	
P56	S-4	26.3	24.3	21.6	灰褐色	-	-	
P57	S-4	20.2	15.7	10.8	灰褐色	-	-	
P58	S-4	22.1	18.5	6.7	灰褐色	-	P46	
P59	S-4	28.8	26.7	47.8	系灰褐色	-	P65	
P60	S-4	93.0	78.9	49.2	深褐色	-	SX09	炭化物少々
P61	S-4	45.7	42.0	20.4	灰褐色	上部20.1m	-	
P62	N-3	26.9	20.9	11.0	灰褐色	-	SX01	
P63	N-3	18.0	14.0	10.2	灰褐色	-	SX01	
P64	N-3	28.6	19.8	11.4	灰褐色	-	SX01	
P65	S-4	20.0	16.7	47.2	淡灰褐色	-	P59	
P66	S-4	29.8	26.0	32.0	淡青褐色	-	-	
P67	S-4	36.6	36.8	26.0	青褐色表面に灰褐色	-	P42-P79	
P68	S-5	68.6	61.0	17.2	淡青褐色	-	-	

第6表 久城東遺跡遺構計測一覧表(3)

調査区 (SI01 以外)

施設名	グリッド	寸法(cm)		深さ (cm)	色	総面積	記号	備考
		幅	奥行					
P69	S-4	29.5	29.0	22.2	茶灰褐色	17.0		
P70	S-4	18.6	16.1	19.8	淡灰褐色	17.0	SK08	
P71	S-4	-	-	-	灰褐色			液化物・幾十箇に亘り、消滅
P72	S-4	-	-	-	灰褐色			消滅
P73	S-5	-	-	-	灰褐色	初期1点、後期1点		消滅
P74	S-4	48.7	37.0	3.6	黄褐色にじり灰褐色	1.0		
P75	S-4	29.2	25.5	4.8	灰褐色	1.0	T47	
P76	S-4	54.7	43	7.0	淡灰褐色	1.0		灰
P77	S-4	21.3	14.6	10.2	淡灰褐色	1.0		
P78	S-4	21.9	10.1	-	淡灰褐色	2.0	242-279	
P79	S-4	39.3	31.8	26.4	淡灰褐色	1.0	142-178	
P80	S-4	28.4	27.6	18.0	灰褐色	1.0		灰
P81	S-4	32.2	26.0	14.0	灰褐色	1.0		
P82	S-4	34.2	23.3	20.6	灰褐色	1.0	SD02	
P83	S-5	65.4	43.0	3.0	茶灰褐色	1.0		
P84	S-5	61.0	50.8	23.8	灰褐色	1.0		
P85	S-5	56.2	49.9	20.0	茶灰褐色	1.0		
P86	S-5	16.9	15.6	17.2	淡灰褐色	1.0		
P87	S-5	19.3	14.6	17.8	淡灰褐色	1.0	116-C	
P88	S-5	39.4	36.8	9.0	茶灰褐色	1.0		
P89	S-5	65.4	47.3	17.0	茶褐色	1.0		
P90	S-5	22.4	27.5	10.8	淡灰褐色	1.0		
P91	S-5	65.9	16.3	18.6	淡灰褐色	1.0		
P92	S-3	22.8	22.4	9.1	淡灰褐色	1.0	SD03-上層	
P93	S-5	36.8	31.4	2.0	淡灰褐色	1.0		
P94	S-5	19.0	15.2	20.6	茶褐色	1.0	218A	
P95	S-6	29.4	26.9	7.1	暗灰褐色	1.0		液化物多・植生なし
P96	S-6	28.5	27.7	11.4	暗灰褐色	1.0		液化物少
P97	N-6	27.9	23.8	4.8	灰褐色	1.0		液化物少・上面高台にて複数
P98	N-6	33.0	32.8	7.0	暗灰褐色	1.0		液化物多
P99	N-6	18.6	15.8	15.6	暗灰褐色	1.0		液化物多
P100	N-6	26.7	25.0	11.7	暗灰褐色	1.0		液化物少・堆土多く含む
P101	N-6	33.2	30.7	13.6	暗灰褐色	1.0		液化物多・植生
P102	N-6	25.4	23.4	9.2	暗灰褐色	1.0		液化物多・植生
P103	N-6	21.6	18.1	7.2	暗灰褐色	1.0		液化物多
P104	N-6	24.4	19.8	9.4	暗灰褐色	1.0		液化物多
P105	N-6	24.7	22.0	9.6	暗灰褐色	1.0		液化物少・施山・施ロック多
P106	N-5	37.8	21.9	21.0	暗灰褐色	1.0		液化物少・堆土多く含む
P107	N-6	39.0	36.3	19.8	暗灰褐色	1.0		液化物少
P108	N-6	14.9	12.6	4.4	暗灰褐色	1.0		液化物多
P109	S-5	20.7	15.1	-	黄灰褐色	1.0		
P110	S-6	24.1	15.8	24.0	暗灰褐色	1.0		
P111	S-6	20.6	23.2	30.4	暗灰褐色	1.0		
P112	S-6	22.2	23.5	7.2	暗灰褐色	1.0		
P113	S-6	29.2	22.4	42.0	暗灰褐色	1.0		
P114	S-6	22.2	20.0	40.2	暗灰褐色	1.0		
P115	S-6	20.8	21.3	16.4	暗灰褐色	1.0		
P116	S-6	65.2	41.8	27.6	淡灰褐色	1.0		
P117	S-6	37.4	35.8	21.8	暗灰褐色	1.0		
P118	S-6	37.8	33.6	13.8	暗灰褐色	1.0		
P119	S-6	26.1	20.0	4.0	暗灰褐色	1.0		
P120	S-7	27.8	27.6	13.8	暗灰褐色	1.0		液化物多・食入・施山・ロック多
P121	S-7	39.6	36.9	31.2	暗灰褐色	1.0		液化物少・施山・ロック多く重じる・上部砂礫層二重層に亘り粘性土
P122	N-7	24.1	22.1	28.6	暗灰褐色	1.0		液化物少
P123	S-5	17.4	16.6	12.6	暗灰褐色	1.0		施山・ロック施山
P124	S-5	22.1	21.7	16.6	暗灰褐色	1.0		
P125	S-5	17.0	15.5	17.6	暗灰褐色	1.0		
P126	N-7	28.7	23.5	27.1	淡灰褐色	1.0		
P127	N-6	98.7	38.2	43.8	暗灰褐色	1.0		
P128	N-7	30.2	28.8	22.6	黄灰褐色	1.0		下層にいくほど軟弱
P129	K-7	31.2	23.6	27.0	灰褐色	1.0		液化物少
P130	N-7	23.6	22.4	20.8	灰褐色	1.0		液化物少
P131	N-6	25.6	23.9	-	灰褐色	1.0		経年・地山アソート
P132	N-6	24.2	17.9	26.6	暗灰褐色	1.0		
P133	S-7	21.4	17.8	9.2	灰褐色	1.0		液化物少
P134	N-11	31.6	48.7	15.8	黄褐色	1.0		
P135	N-11	39.2	15.3	7.2	灰褐色	1.0		
P136	N-11	42.4	36.5	8.1	灰褐色	1.0		液化物・透水・マンガン
P137	N-11	29.2	26.4	8.4	暗灰褐色	1.0		液化物・マンガン

第6表 久城東遺跡遺構計測一覧表(4)

調査区 (SI01 以外)

遺構名	グリッド	寸法(m)	面積	高さ	測定結果		結合	備考
					色	周一體度		
P136	S-11	38.1	26.3	15.0	黒褐色	-	-	炭化物少々
P139	S-11	28.3	24.5	25.0	赤褐色	-	-	汚れ多い炭化物
P140	S-11	23.6	13.4	13.2	黒褐色混じり灰褐色	-	-	汚れ多い
P141	S-11	49.5	30.1	7.0	灰褐色	-	-	健ナシ
P142	S-10	29.4	27.4	19.6	浅褐色	-	-	-
P143	S-11	36.0	25.0	22.6	深灰色	-	-	炭化物少々・斑点・ゴック風
P144	S-10	35.9	30.7	12.4	黄灰褐色	-	P146	杣門少々・瓦疋・ゴック風
P145	S-10	45.4	38.6	13.4	灰色	-	-	炭化物少々・マンガン含む
P146	S-10	26.6	23.7	29.4	灰褐色	-	P144	杣門少々
P147	S-10	35.2	34.2	21.0	灰褐色	-	-	炭化物少々
P148	S-10	26.5	23.7	29.4	灰褐色	-	-	炭化物少々
P149	S-10	21.8	20.4	15.8	暗灰褐色	-	-	炭化物少々
SK04	X-3	-	-	-	-	-	-	汚滅
SK02	N-2	-	-	-	-	-	-	汚滅
SK03	N-3	40.0	27.5	16.0	灰青褐色	-	P08-P09	-
SK04	N-3	57.4	49.6	16.0	灰褐色	-	-	-
SK05	S-3	75.6	67.6	21.0	暗褐色	-	-	-
SK06	S-3	66.0	50.0	8.0	黒褐色混じり灰褐色	-	SD03上/R	-
SK07	S-3	66.0	50.0	22.0	黃褐色混じり褐色	-	-	-
SK08	S-4	100.4	89.2	20.0	灰青褐色	-	P04-P04	-
SK09	S-4	78.0	68.4	40.0	灰青褐色	-	P00	-
SK10	S-4	60.0	59.2	16.0	暗褐色	-	-	-
SK11	S-2	102.0	90.0	16.0	暗灰褐色	-	-	-
SK12	S-2	136.0	56.0	-	灰青褐色	-	SD01	-
SK13	S-2	78.0	22.0	-	灰青褐色	-	SD01	-
SK14	S-5	65.2	61.2	10.0	灰褐色	-	-	-
SK15	S-5	87.2	66.8	19.0	灰褐色	後上7.5、鉢製場1点	-	-
SK16	S-5	56.4	54.4	25.0	暗灰褐色	-	-	-
SK17	S-5	72.8	60.0	16.0	暗灰褐色	-	-	-
SK18	S-5	78.2	66.8	8.0	灰褐色	土角器2点、鉢製場1点 後上4.5	-	-
SK19	S-5	58.8	58.4	12.0	深褐色	鉢製場1点	-	-
SK20	S-5	61.6	57.6	4.0	暗灰褐色	角型器1点、灰褐色2点	-	-
SK21	N-5	70.8	48.8	30.0	暗褐色	-	P07-P07	一特異心形(P07-P07)
SK22	N-5	34.6	66.6	20.0	暗褐色	-	-	1.2、鉢形
SK23	N-5	67.6	28.0	6.0	暗褐色	佛手・鉢形器(P07-P07)	-	底裏2点(P07-P07)
SK24	N-5	71.6	71.2	10.0	暗褐色	-	-	-
SK25	S-7	106.4	70.8	14.0	深褐色混じり灰褐色	炭化物多め、上海器小2点	P00-P02	-
SK26	S-10	86.8	70.4	18.0	灰褐色	-	P00-P02	-
SK27	N-2	96.3	39.0	17.4	早褐色	陶器器底点、新製品点	P04-P05	P02-P03-P04
SK28	N-3	131.3	115.9	43.0	深褐色	陶器器底点、灰褐色点	-	-
SK29	S-3	110.8	92.7	-	灰褐色	-	SX04-SX11	右者9
SK30	S-3	91.2	75.0	-	灰褐色	-	SX03-SX03	-
SK31	S-3	72.0	61.0	22.0	暗灰褐色	-	SX06	-
SK32	S-3	75.2	62.0	12.0	灰色	-	SX06-SX07	-
SK33	S-3	76.4	61.6	20.0	灰褐色	-	SX06	-
SK34	S-4	109.6	92.0	20.0	灰褐色	陶器器底点、茶葉器1点 後上4.5点、茶葉器1点	SX09-SD02	-
SK35	S-4	140.0	126.4	38.0	灰褐色	上斜面2点、陶器器底点 陶器器底点、茶葉器1点	SX08-SD02	-
SK36	N-4	142.6	96.8	50.0	暗褐色	陶器器底点、茶葉器1点 陶器器底点、茶葉器1点	SX08-SD02	前面に炭化物の散在、茶葉穴か
SK37	N-3	16.8	26.8	-	灰褐色	-	SX03上/R	-
SK38	S-3	22.5	13.3	43.8	白灰褐色	-	P19-P22	-
SK39	S-3	49.9	44.0	55.6	灰褐色	陶器器底点、灰褐色点	SD01上/R	-
SK40	N-2	137	105	7.2	灰褐色	(自走)	-	-
SK41	N-10	441.2	17.7	36.6	灰褐色	陶器器底点(P08-P08)	P136-P137	-
SK42	N-11	-	-	-	-	-	-	-
SD01	S-2-3	約200.0	360.0	180.0	黄褐色・紺褐色	陶器多点、鐵器石少点	S702-03-P03	-
SD02	S-4-5	約200.0	240.0	56.0	灰褐色・時灰褐色	陶器多点、鐵器石少点	SD01落ち込みと海藻	-
SD03	S-3	約100.0	360.0	60.0	灰褐色・時灰褐色	陶器多点、鐵器石少点	SD01落ち込み	-
SD04	S-5	200.0	40.0	14.0	灰褐色	-	-	-
SD05	N-5	220.0	20.0	12.0	灰褐色	-	-	-
SD06	S-1	300.0	40.0	30.0	灰褐色	落ち込みと地槽	-	-

## 第3節 出土遺物

### 1. はじめに

本遺跡から出土した遺物は、合計して3,757点（コンテナ16箱）を数えている。その内訳は国産陶磁器類2,204点の約58.7%、須恵器478点の約12.7%、弥生土器332点の8.8%、土師器260点の6.9%、窯道具119点の3.2%、瓦93点の2.5%、瓦質土器77点の2.0%であり、その他が鉄製品・鉄滓・石製品・石器・ガラス製品などはいずれも1%未満となっている。

時期については、判別できる範囲で弥生土器は後期が主体であり、須恵器は奈良時代を中心とするもの、また国産陶磁器については近世後半以降が多半を占めるといった状況であった。

種別に調査区からの出土状況をみると、弥生土器はS-10区が約250点でもっとも多く、次いでN-3区は73点でSI01検出の土器壺1点に係る細片と捉えるもの、そしてN-4区は7点となり、壺や壺が主体となる。須恵器はS-5区で90点、N-5区・S-6区に各70点、S-3区に46点、N-7区に44点、S-4区に25点、N-4区に19点、S-7・10区に各17点、N-3区に16点であり、別途SD02は12点、SD03は10点、SD01は5点という順で確認されたもので、壺・壺に関わるもののが大半を占める。

また土師器はN-5区に55点、S-11区に35点、S-6区に26点、N-4区に24点、S-5区の21点、N-7区の17点、S-3・4区に各11点が確認されて、それ以外は概ね10点未満という状況であり、壺を主体とするもの。

そして国産陶磁器類はS-3・4区で各230点、N-S-5区で各200点、N-3・4・6区で各100点、N-2・11区で各80点前後を数え、別途SD02は450点、SD01は76点、SD03は49点を確認できた。器種は多様で、碗や皿・壺などといった生活雑器に加え、窯道具や仏具・硯・紅皿（化粧用具）などといったものもみられる。また他に、瓦質土器では火鉢類、石製品には石臼や砥石、石器類では石斧もしくは石核と想定されるもの、ガラス製品では薬小瓶なども散見されている。

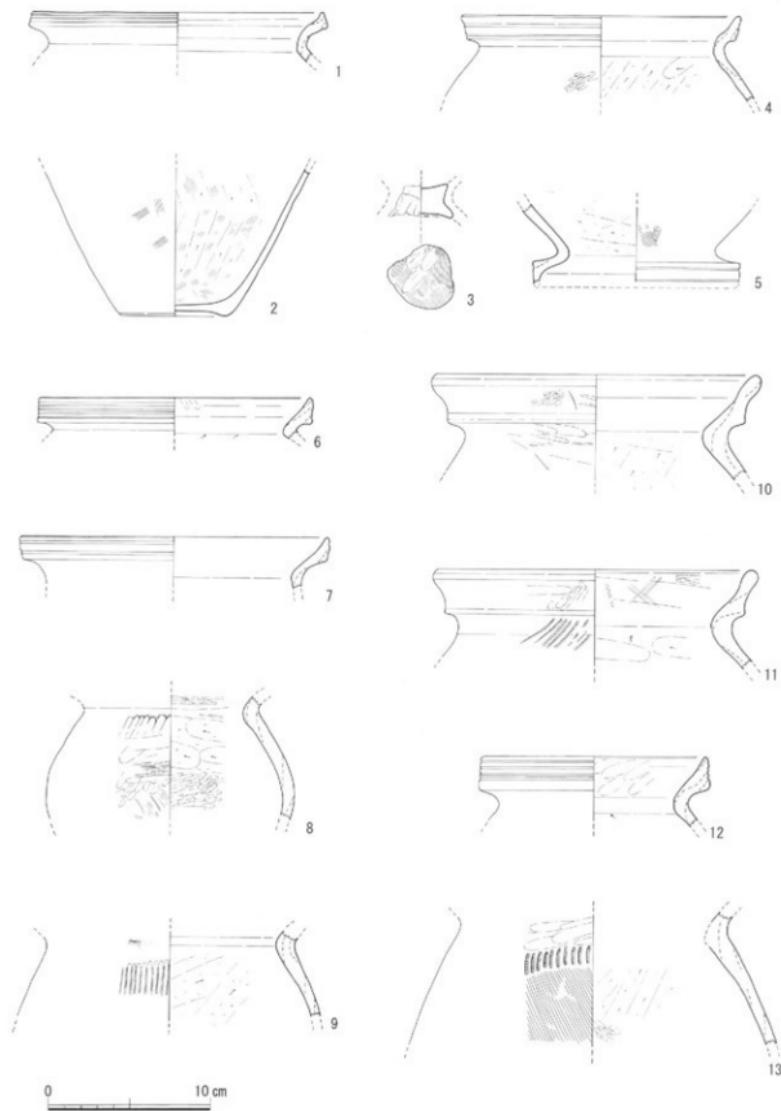
各出土域を概述すると、弥生土器は北東域調査区でも北西寄りと南西調査区の中央寄りに集中し、また須恵器と土師器は端部を除く北東全域と南西調査区の中央寄りにみられるが、土師器はその範囲が狭まるもの。そして国産陶磁器類は須恵器・土師器の範囲に類似して、中央域寄り以南西へは減少していくといった様相が窺えた。

以降は種別ごとに抽出した遺物の中から、特徴的なものを中心にみていくことにするが、土器の分類及び編年観について、弥生土器は松本岩雄氏による編年、須恵器は久本奥窓跡編年及び石見空港編年を参考としている。

### 2. 実測遺物

**弥生土器（第165・166図、図版81、表7）** 弥生土器とする1～21のうち、2はN-3区、それ以外のものはS-10区から出土したもので、時期は後期を主体とするものである。また器種は、3は台付鉢、8は鉢、14・15は壺、16・19は鼓形器台で、それ以外のものは壺であり、17は不明となる。

このうち1は、口縁部は短く外反して大きく開き、端部を内傾気味に上方に引き出すもの。頸



第 165 図 弥生土器①実測図

部は「く」字状に屈曲し、体上部は「ハ」字状に開く。内外とも風化が著しいが、外面の口縁端部に凹線3条を微かに認めることができる。色調は淡黄褐色を呈して、復元口径は17.8cmを測り、IV-2期に相当するもの。2はSI01に埋設されていたもので、手法・色調・胎土とともに1に類するが、内面はケズリのち、両面ともに僅かにハケ目が遺る(図版75-2)。底部は浅い上げ底状を呈して復元底径は6.6cmを測り、体部は外傾して開くもの。器厚は0.1~0.5mmを測って薄く、時期はIV-2期に相当する。また3は台付の鉢もしくは甕で、手づくねによる底部・台部間の詰め物と想定するもの。台内の上面に位置する部分には3方向に走るハケ目が遺り、IV期の可能性を窺える。

4は、口縁部は短く、少し外傾して開くもの。頸部は弓状に強く湾曲し、体上部は「ハ」字状に開いている。外面には口縁部に沈線(擬凹線)2条が認められ、頸部にヨコナデがみられるか。内面は口・頸部の風化が顕著で、体部にケズリ、一部ナデもみられるもの。復元口径は17.0cmを測り、V-1期に相当する。5の口縁部は大きく短く逆「ハ」字状に開き、端部は高く屈折して高く直立する。頸部は「く」字状に強く屈曲して、体上部は「ハ」字状に大きく開く。全身が風化するが、口縁端部に微かに凹線が2条認められるほか、体部には斜めハケが施されるか。IV-2期もしくはV-1期に相当する。

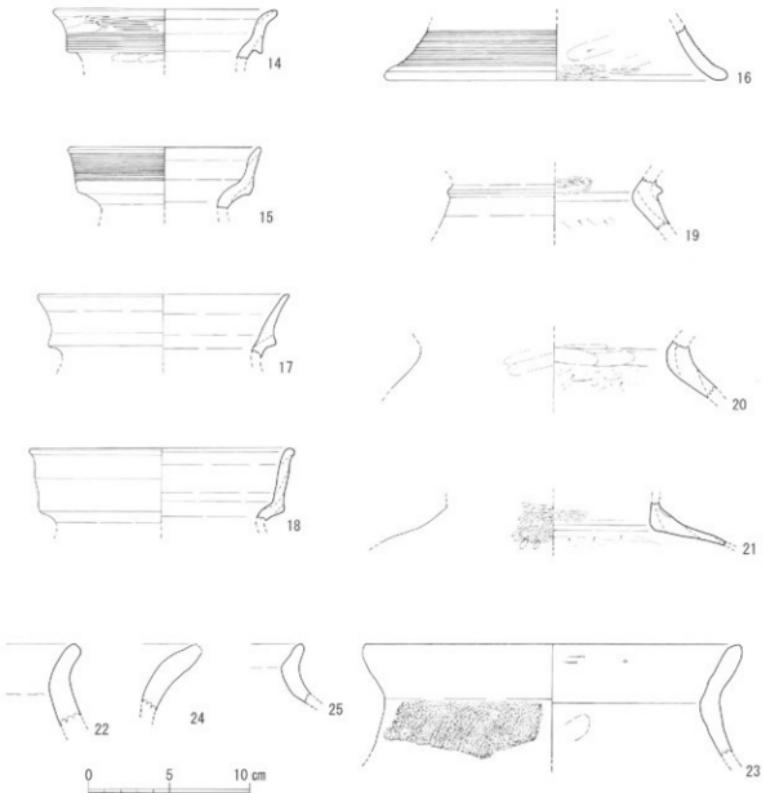
5と同時期に想定される6は、擬口縁状を呈し、端部は高く立ち上がる。端部外面に5条の平行凹線(沈線)が認められるほか、頸部はナデがみられるか。また口縁部内面には、指頭様を含むナデ、頸部以下はケズリが認められる。7の口縁部はやや高く、小さく外傾し、頸部は「く」字状に屈曲する。風化が顕著で、口縁部には擬凹線2条を微かに認めて、V-1~2期に相当する。

鉢となる8は煤が付着し、頸部は「く」字状に屈曲して、体部は横扁球状に膨らむもの。外面の頸部にナデ、体上部に板状工具の角を連続的に押引きする連続刺突文、体中~下部にヨコナデ、指頭様ナデ、斜めハケが認められる。また内面には、口縁下部にミガキ、頸部にナデ、体部上方にケズリ、下方にミガキが施される。胎土には1.0~2.0mmの砂粒を含んで、V-1期に相当するもの。

9~13は甕で、うち9はV-1期もしくは2期、ほかはV-2期に相当するもの。体上部がナデ肩状に開く9は、8と同様に外面に連続刺突文がみられ、内面は頸部以下斜めにケズリが認められて、風化の顕著なもの。10は擬複合口縁を呈して、外反して逆「ハ」字状に開く。端部は肥厚気味で、複合部は直角に屈折し、頸部は湾曲して、体部は「ハ」字状に開いている。口縁・体部の外面はナデ、内面は口縁はナデ、体部はケズリが認められて、復元口径は19.8cmを測る。

11も10と同様の形態を呈して、胎土に1.0~3.0mmの砂粒を含み、上胴部は「ハ」字状に開くもの。口縁部の外面は斜めミガキのちヨコナデ、内面は斜め・ヨコミガキ、ナデがみられ、頸部以下の内面はケズリ、外面にはクシ状工具による連続刺突文、ナデが認められる。12も擬複合口縁を呈し、口縁部はほぼ直立し、甘い稜をなして直角に折れて頸部に移行する。頸部は逆「コ」字状に屈曲して、胎土に0.5~1.0mmの砂粒を含むもの。風化が著しく、口縁部の外面には平行沈線4条、頸部以下の内面にはケズリが認められて、復元口径は13.5cmを測る。

13はやや風化するもので、頸部は小さく弓状に屈曲し、体上部はナデ肩状に開く。外面は頸部にナデ、体上部に斜めハケ及び歯の太いクシ状工具による上下方向の連続刺突文が認められ、内面は頸部が欠失して、体上部に斜め方向にケズリ、下方にミガキ部がみられる。



第166図 弥生土器②・土師器実測図

14～16はV-3期に相当するもので、14・15は複合口縁を呈する壺、16は鼓形器台である。そのうちの14は、胎土に微砂粒を含み、口縁部は僅かに開いて立ち上がり、上方で大きく屈折してさらに開くもの。複合部は下垂し、頸部は口斗状を呈する。口・頸部の内面にはナデがみられるとともに、口縁部の外面にはクシ状工具による多条の平行細沈線、頸部はナデかを認められる。

15はやや風化して、口縁部は高く、小さく外反する。複合部は甘い稜をなし、頸部は大きく湾曲するものだろう。口縁部の外面に、恐らくはクシ状工具による11条以上の平行沈線が認められて、復元口径は11.6cmを測っている。また16は台部の先端片で胎土に微砂粒を含み、僅かに反り気味で「ハ」字状に開いて、端部は小さく肥厚する。風化を呈し、外面はクシ状工具による多条の平行沈線、端部は恐らくナデが認められるもの。内面は緩いRLのケズリのほか、端部

にミガキが施される。

17～19はV-4期に相当して、17・18は複合口縁を呈する甕、19は鼓形器台となる。このうち17の口縁部は長く外反し、端部を尖り気味におさめるもの。複合部は突出せずに甘い稜をなして頸部に移行する。恐らく頸部は弓状に屈曲するものだろう。文様・手法については風化のため不明であり、復元口径は15.4cmを測る。18の口縁部は高く、僅かに外傾する。端部は逆「L」字状に小さく肥厚して、複合部は突出せずに直角に屈折する。頸部は強く湾曲するものだろう。風化が著しく、外・内面にヨコナデが施されるものと思われ、復元口径は15.8cmを測っている。

19は筒部～台部上部片で、胎土は微砂粒を含む。筒部は短く、台部は「ハ」字状に開いて、下段複合部は太く短く水平方向に突出する。風化を呈し、台部外面には恐らくヨコナデ、内面の受部にはミガキ、台部にはケズリを認められるもの。

20～21はV期に分類したもので、21についてはV-3～4期の可能性もあるもの。このうち20は甕で、頸部は弓状に屈曲し、体上部は「ハ」字状に開いている。風化が顕著で、外面の体上部はナデ、内面は頸部に指頭様ナデのほか、体上部にケズリが認められて、胎土には0.5～1.0mmの砂粒を含んでいる。

21は器種・器形ともに不明のもの。倒「L」字状の器形を呈し、下方は「ハ」字状に大きく開くと推定する。胎土は密で、内面の上方にミガキ、下方にケズリが認められ、また外面にはミガキが施され、焼成後に小孔を2ヶ穿っている。

外面の断面には赤色顔料が付着することから、祭祀用土器の可能性も窺えるものである。

**土師器（第166図、図版81-1、表7）** 土師器の22～25は単純口縁を呈する甕で、22・24はN-7区、23・25はN-5区から出土したもの。このうちの22は風化が著しく、口頸部の外・内面ともにヨコナデ、内面の体上部にケズリと想定される痕跡が認められる。色調は茶灰色で、胎土には微砂粒を含み、古墳時代でもやや古手のものと思われる。23の胎土は密で、色調は明橙灰色を呈するもの。口頸部の外面にヨコナデ、体上部に斜めハケのちナデがみられ、また内面は口頸部にナデ、体上部の上下方向に僅かにケズリのちナデが認められる。古墳時代後期のもので、復元口径は23.0cmを測る。

24は風化が顕著なもので、胎土に砂粒を含み、色調は淡黄橙色を呈する。口頸部の外・内面ともにヨコナデ、体上部の外面に斜めハケが認められて、奈良時代のものと思われる。25の胎土は緻密で、色調は灰橙色を呈する。風化は著しく、口頸部の内面には、恐らくはケズリののちヨコナデ、体上部は上下方向のケズリののちナデが施される。また外面は口頸部にヨコナデ、体上部に斜めハケが認められて、奈良時代のものと思われる。

**須恵器（第167・168図、図版82、表7）** 26～32は坏蓋で、いずれも色調は灰白色を呈して、胎土は緻密、焼成は良好であり、概ね回転ヘラケズリやナデが認められるもの。

このうち26はN-5区から出土した坏蓋天井部で、宝珠つまみとするもの。つまみは扁平で、上面は平坦であり、中央がやや窪んでいる。端部の一部が欠失し、回転ナデが認められて、上面に自然釉がかかる。8世紀前半のものかと思われる。N-7区に出土した27の内面は回転ナデ、外面には回転ヘラケズリとナデが認められて、灰釉が付着し、径は17.8cmを測るものである。

28～32は輪状つまみを呈する（30は想定）もの。このうち28（N-2区）の天井は広く平坦で、肩部にかけてなだらかに屈曲し、またつまみはやや外反して聞くもの。端部は欠損し、つまみ内側及び肩部に回転ヘラケズリ、つまみ部と内面には回転ナデが認められて、つまみ径は7.8cmを測っている。29はS-4区に出土したもので、体部へはやや強く屈曲して移行し、「ハ」字状に聞いたのち、下垂する鳥嘴状口縁でおさめる。恐らくは8世紀後半でも古手のものと思われる。また30（N-7区）の大井部は欠失するが、内湾して強く「ハ」字状に聞くもので、端部と肩部に稜線が1条ずつみられる。口縁部はやや外方へ下垂して鳥嘴状におさまり、平安初期（石見空港Ⅲ期）のものと推定される。

N-3区に出土した31も30と同時期と推定されるもので、つまみは強く外反するもの。体部は、やや内湾しながら強く屈曲して移行し、「ハ」字状に聞いたのち、下垂する鳥嘴状口縁でおさまる。外面の端部には1条の棱線がみられるとともに、体下部には過度焼成により、重ねた上物の端部（重ね目跡）が付着する。またつまみの欠失する32（S-3区）は30に形態・文様とも類似するが、体部はなだらかに内湾し、また口縁部はやや内傾しておさまる。

33～37は壺であり、いずれも色調は灰白色を呈して、胎土は緻密、焼成は良好なもの。このうち33はN-3・4区間ベルトから出土したもので、体上部に2条・下部には1条の太い沈線、また下部には沈線に挟まれて波状文が上部とともに認められる。沈線間と内面には回転ナデが施されて、6世紀ごろのものと想定する。

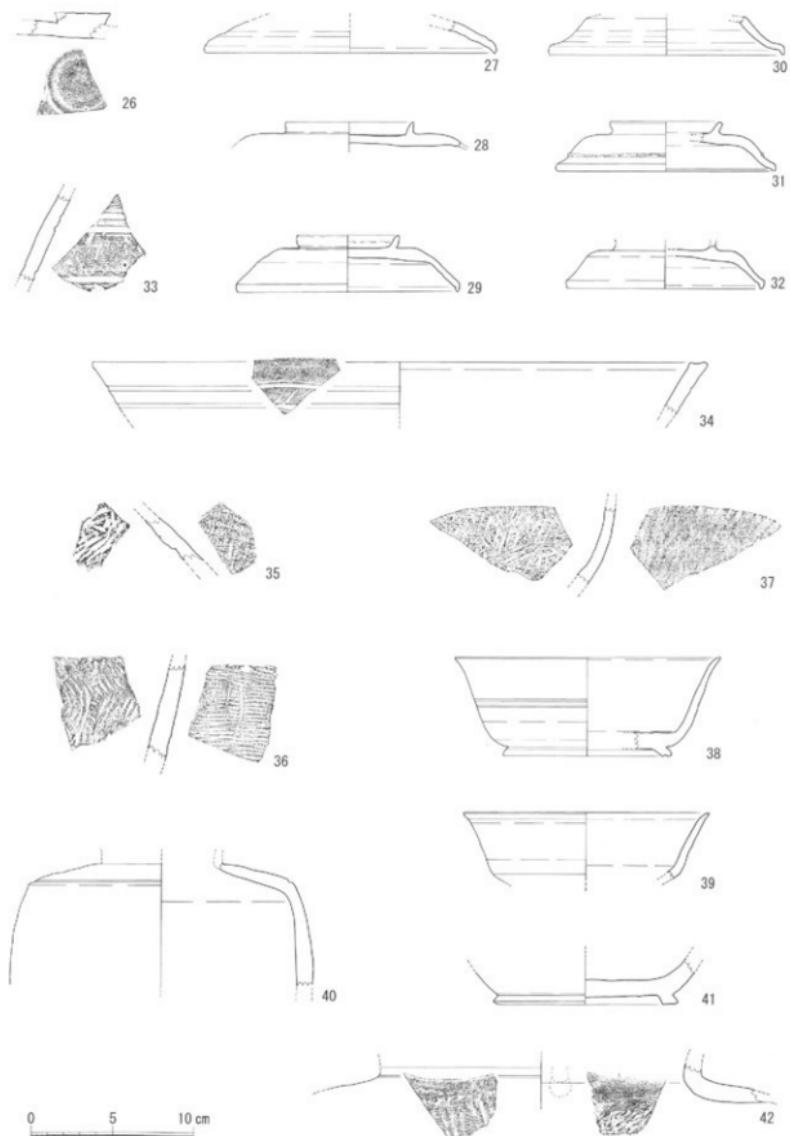
34（N-7区）は口径37.7cmを測るもので、口縁下部に2条の太い沈線、その間にヘラ状工具による斜め方向の短い刻み目が認められる。口縁部は逆「ハ」字状に開き、大壺と想定されるもの。

35はN-5区から出土した肩部と想定されるもので、外面には数条単位のカキ目のはかナデもみられて、灰釉が付着する。内面にも灰釉がかかり、当て具による叩き日が認められる。S-10区に出土した36は恐らくは体下部と想定するもので、外面には平行叩目文、内面には同心円文が認められる。37はS-7区からで、壺もしくは壺の胴部片と想定する。内面には同心円文、外面には平行叩目文とカキ目が認められ、灰釉が付着して深緑色を呈する。

なお以降の須恵器も色調・胎土・焼成は概ね同様と捉えられるもので、38はS-5区から出土した壺身であり、金属器模倣品と推定できるもの。口径は18.3cm・底径は10.1cm・器高は8.1cmを測って、高台は低く広縁よりやや内側に付き、疊付は浅く凹んでいる。体部は逆「ハ」字状に直線的に聞いて立ち上がり、薄厚となって口縁端部に至るもので、その端部はやや外反する。外・内面とも丁寧なナデが施されて、体中部には2条の沈線が認められる。寺品などの金属器を模倣したと考えられ、8世紀末ごろのものと推定される。

39（S-7区）も壺身であり、口径は15.1cmを測るもの。高台は欠失し、体部は逆「ハ」字状に僅かに内湾して立ち上がり、やや外反する端部に移行する。外・内面とも丁寧なナデを施し、口縁下部及び体下部には沈線1条ずつが認められる。

40（N-5区）・41（S-4区）は回転ナデを施される壺で、前者は長頸壺と考えられるもの。この40は胴部から逆「く」字状に屈折して頸部へと移行する。屈折する肩部には1条の沈線が認められて、また灰釉が付着し、時期は7世紀末～8世紀初頭ごろと思われるもの。また41は底部辺である。高台は低くしつかりしたもので、広縁よりやや内側に付き、疊付は平坦となる。体部は弓状に立ち上がる推測されるもの。



第167図 須恵器①実測図

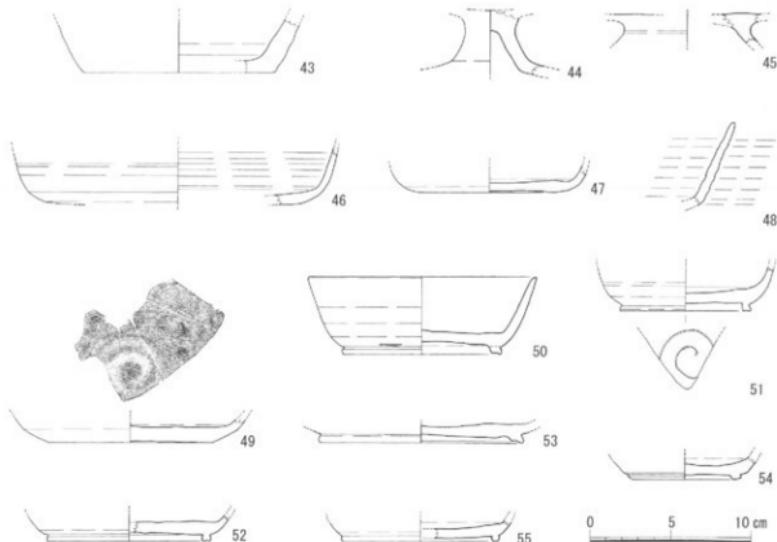
42 (N - 2 区) は大甕の頸部～肩部片であり、体部は「L」字状に大きく開くもの。内面には体上端部に同心円文のほか、体上部に指頭痕を伴う回転ナデがみられ、また外面には頸部に回転ナデのほか、1 条と 2 条の細稜線が認められる。そして体上部には平行叩きののちにカキ目が施される。また 43 は S - 5 区から出土したもので、壺か鉢と想定されて、胎土は密である。色調は茶灰色を呈し、外・内面に回転ナデ、また底部内面に 2 条の稜線を認められるもの。底部は平面で、体部は緩く逆「ハ」字状に開いて立ち上がるもので、恐らくは中世須恵器（東播系）と思われる。

44 (N・S - 5 区間) は高杯である。脚基部の外・内面ともナデが認められ、脚部は「ハ」字状に開いて、さらに外方に屈曲するもの。45 は S - 6 区から出土した高台付坏身である。受部は平坦で、高台は「ハ」字状に開くもので、7 世紀末～8 世紀初頭のもの。

46 (N - 7 区)・47 (N - 5 区) は高台を伴わない坏身で、いずれも回転ナデを施すもの。このうち 46 は深身で、体中部外面に工具などで浅い段状の凸凹を付け、そのために 2・3 条の稜線が認められるもの。また体下部には 1 条の稜線が確認されて、時期は 7 世紀ごろと想定するもの。47 は底部に回転ヘラケズリも認められて、時期は 8 世紀ごろのものと考えられる。

N - 5 区から出土する 48・49 は回転ナデが施されて、前者は体上部、後者は底部片となる。48 は外・内面とも成形時の凸凹による数条の稜線が認められ、体下部は屈折して直線的に逆「ハ」字状に開いて立ち上がる。8 世紀末～9 世紀初頭のもの。また 49 は外底面に回転ヘラケズリ、内底面にはヨコナデが認められて、時期は 8 世紀ごろと推定するもの。

50～55 は高台付坏身で、順に S - 6 区・N - 5 区・S - 5 区・N - 5 区・S - 7 区・S - 5



第 168 図 須恵器②実測図

区から出土したもの。概ね高台内面及び内底面は回転ヘラケズリやその後にナデが加えられ、それ以外にはナデが加えられている。

50は統の可能性も窺えるもので、高台は低く広縁より僅か内側に付いてやや開き、豊付は浅く凹むもの。体部は逆「ハ」字状に直線的に開き、口縁端部に至る。体下部に回転ケズリのほか、全体に回転ナデも認められて、時期は8世紀ごろのものと推定される。

51は形態・調整・時期とも50に類似するが、体部は湾曲しながら立ち上がるもの。高台内面には、ヘラによる成形もしくは切り取り痕が渦巻き状に認められて、高台は端部が外に張り出している。52・53も50に類似するが、前者の内底部は厚みをもって体部は薄手となり、豊付は横方向に丸みを帯びる。また後者は内底部の中央がやや薄手となるなどの違いがみられる。

54は、体部が逆「ハ」字状に湾曲して立ち上がるが、体下部にはヘラケズリによって角度をもち、それが稜線として明確に認められる。高台は低く、豊付は摩滅してやや丸みを帯びている。また内底中心部はやや器厚が増すもの。一方で55は、体部は同様に緩やかに立ち上がるもので、高台断面は摩滅して丸み帯びる算盤玉状を呈して、いずれも時期は8世紀ごろと推定できるものであった。

**国産陶磁器類（第169・170図、図版83、表7）** 56から86までを国産陶磁器類として分類するにおいては、概ね近世後期以降のものが主体であり、また生活雑器としての陶器が多く認められる傾向にあったことが窺えた。その中には人間の精神文化に関わるもの（第170図の76～80：仏具関係品）や照明具（第170図の81・82）、嗜好品（第170図の83～85）なども含まれて、また第169図の56などは喫茶に関わる可能性もみられるなど、当該期の地方に及ぶ生活文化の多様な広がりの一端を窺えるものであった。

なお、第169図においては56～72、第170図は73～86までを図示し、遺物観察については表7に掲載している。また近世以降の窯元の増加にしたがい、地元窯までも含めると特定は困難であることから○○系としての表記を部分的に使用し、時期についても広範に捉えたものが多いことを付記しておきたい。

56はS-4区から出土した底径6.3cmを測る碗である。胎土は密で焼成は良好、外・内面には藁灰釉がかかり、釉調は淡灰褐色を呈する。高台は削り出しのしっかりしたもので、内部中央はやや突出する。豊付は1.0cm程度を測って接地面は広く、体下部から高台にかけては無釉である。また体部は弓状に緩やかに開いて立ち上がるもので、体下部にはヘラケズリ成形が顕著であり、器面には調整痕が稜線として残る。体中部には鉄釉で絵付けが施されていて、16世紀末～17世紀初頭（桃山時代）の唐津焼（鉄絵碗）と思われる。

57も同区からのもので、口径は19.7cmを測る片口鉢である。やや質味がかる淡灰褐色を呈して、胎土は緻密なもので、全面に透明釉が施釉されて貯入も認められる。器厚は薄手で、口縁端部は玉縁状を呈する。恐らくは唐津焼の系統で、19世紀以降のものだろう。

58～61はいずれも肥前系の陶磁器で、順にN-5区・N-1区・S-4区・N-1区から出土したもの。このうち58は釉調が乳白色を呈する染付碗である。碗としたが、大振りのために鉢と云うべきかもしれない。体部は逆「ハ」字状に開いて立ち上がり、体上部で外方に屈曲して端部は垂直に短く立ち上がる。高台は高くやや内傾して、また器厚は薄手である。染付は全身に

みられて、外面には体中部に恐らくは草花文、体下部から高台に1条と2条の条線が認められる。内面の条半部に草花文、その下方に2条線がみられている。時期は不詳だが、新しいものか。59～60は陶胎染付の碗である。このうち59・60は同類のもので、外面にオリーブ色の青磁釉、内面に染付が施されて、見込み内の端部や底面周り及び中央に条線や格子目文などが施されるもの。ともに口径約11.0cm・底径約4.0cm・器高6.0cm前後を測り、59には外面に粗い貫入が認められる。また60の高台内面には印判が認められるが、判読はできないもの。また高台は59がやや内傾して付くのに対し、60はやや外傾している。いずれも18世紀以降のものと思われる。

61は口径10.4cm・底径4.1cm・器高7.4cmを測る碗である。体部は湾曲して「ハ」字状に立ち上がり、口縁部へは垂直に移行するもの。釉調はオリーブ色を呈し、全身に細かい貫入が認められて、また高台は低く、内部は深いものである。外面の体上・下部には条線、体中部には恐らくは自然の情景を模した絵付けがみられるもので、17世紀以降のものと思われる。

擂鉢である62～64は、順にS-4区・S-2区・N-2区から出土したもので、体部は大きく逆「ハ」字状に立ち上ると推定するもの。うち62は、胎土に砂粒を含み、色調は淡褐色を呈して、焼成はやや不良である。外面の口縁直下には、浅い凸凹に伴う2条の太い沈線が認められ、内面の溝幅はやや広く、1.0mm程度の深い鉤目が連続する。口縁端部は稍円状を呈して、外方に僅かに張り出している。恐らくは、北部の越前の辺りでつくられた19世紀付近のものと思われる。

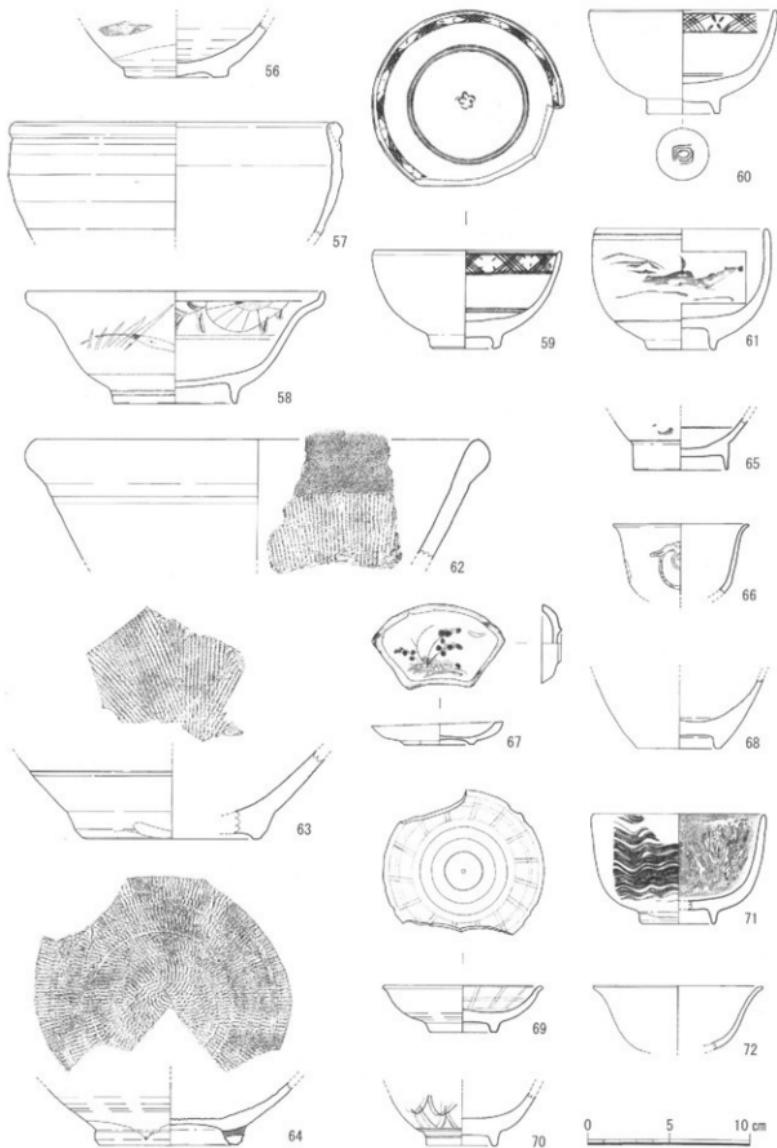
63・64は高台片で底径10.7cmと8.4cmを測り、いずれも九州系の可能性が高いもの。63の体下部～高台はヘラケズリによる成形痕がよく残り、高台の境界に稜線1条のほか、高台底辺にケズリ痕が認められる。また体中部には2条の細い沈線もみられる。高台内は浅く、また鉤目は16～17条単位のまとまりをもって、中心から放射状に連続して延びていく。一方の64は、鉄釉が内面及び外面の体下部辺りまでかかり、また高台には1箇所の穿孔のほか、外端部は面取りが施されている。内面の鉤目は比較的浅いもので、クシ状工具によって重複させた痕跡が目立つものであった。

S-4区から出土した65は、1820年代に盛行したカントン（廣東）焼で高い高台を特徴とするものの。提携は5.7cmを測り、また釉調は灰白色を呈し、胎土は緻密で、焼成は良好である。器面は染付が施されて、内底面に円状文、中心にも僅かに文様が、また外面の体下部に文様、高台脇に1条線が認められる。体部は逆「ハ」字状に、胸部はあまり張らずに立ち上るもの。

66はN-2区からのもので、薄手の小壺である。色調は茶白色、胎土は密で、焼成は良好である。全身に施釉されて、外面の体中部には白泥を搾り出して文様を描く「いっちゃん」という技法が施される。67はN-5区出土の小皿である。扁状の形状を呈して、最大幅は8.1cmの小型のもの。土みせを除き白釉が施され、内面には具須により風物画を染付している。恐らくは食器もしくは化粧道具かと想像している。

68（S-7区）は壺と想定されるもので、内面は無釉、外面は土みせを除き青白釉を施釉する。高台はみられずに基筒底を呈し、地元産の可能性の高いもの。69はN-5区から出土した小皿で、口径9.6cm・底径4.1cm・器高2.9cmを測る小皿である。土みせを除き全身に青白釉を施釉して、内面には2条線ずつが放射状に染付される。また内底面には、輪状に釉剥ぎ（搔き取り）が認められる。

またN-2区から出土した70は体部に波状模様を染付した碗で、土みせを除いて全身に施釉



第169図 国産陶磁器類①実測図

する。底径は4.3cmを測り、江戸末期のものと推定される。71（S-4区）は口径10.5cm・底径4.4cm・器高6.8cmを測る碗である。胎上は暗茶灰色で緻密であり、焼成は良好である。白釉と暗茶色釉とが層状に重なって外・内面とも刷毛目模様を呈するが、外面は波状、内面は綻方向に肩降り状模様が認められる。肥前系の可能性が高いもので、恐らくは須佐唐津かと思われる。

N-2区から出土した72は、薄手の小杯で国産青磁と云えるもの。口径は10.4cmを測り、淡青緑釉を腰部まで施釉して、外面全体に貫入が認められる。恐らくは江津～須佐にかけての日本海側でつくられたものと推定する。同区から出土の73は土みせを除いた外面のみ施釉する碗であり、胎土は緻密で、釉調は灰白色を呈し、焼成は良好なものである。恐らくは地元の白上焼で昭和10年代につくられたものだろう。

74（S-4区）・75（S-2区）は磁器の壺と碗で、底径はそれぞれ6.8cm・6.6cmを測り、内面は無釉、外面は土みせを除き施釉するもの。74の底部は甚筒底を呈し、また75は高台に2つの条線を染付する。いずれも地元窯産と想定するもの。

76～80は仏具とみられるもの。順にS-2区・N-2区・N-3区・S-4区・S-4区から出土したもので、76・77は小皿、78は仏花器、79・80は仏具となる。まず76は口径7.5cm・底径3.0cm・器高2.9cmを測る完形品である。色調は灰オリーブ色を呈し、胎土は密、焼成は良好なもの。外面は体上部に施釉し、以下は露胎となる。ヘラケズリ痕は顯著で、ケズリ口は稜線として多く認められ、底部には回転糸切り痕が、また内底面には4箇所に目跡が確認される。

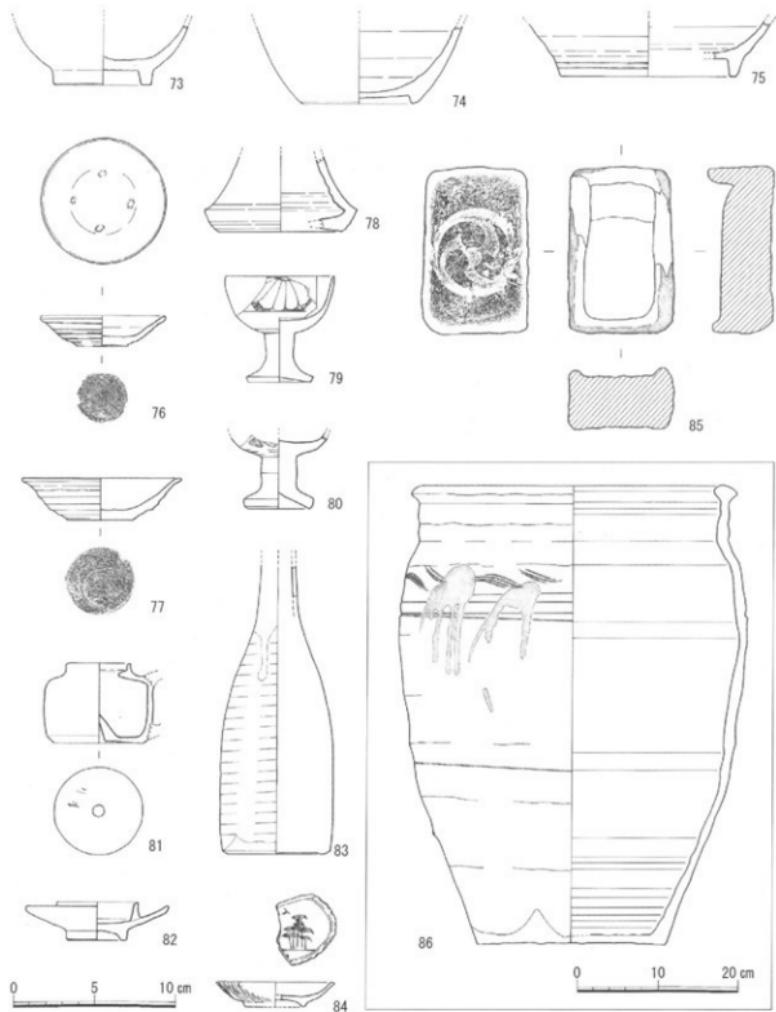
77は形態・特徴とも76にするもので、一回り大型品となる。口径9.7cm・底径4.0cm・器高2.6cmを測り、目跡はみられない。萩焼の可能性をもつ。78は底径7.6cmを測るもので、恐らくは懸立などに使用されたものだろう。外面には底面を除き鉛釉がかかり、九州もしくは地元窯産で、明治時代後半のもの。

79・80は仏具としての仏瓶器で、壺（受部）に脚が付くもの。いずれも全身に白釉を施釉するが、脚部底面にはかからず、また底径は3.8cmと共に、79は器高6.6cm・口径6.7cmを測っている。それぞれ受部に施文されるが、79は染付で花弁模様・条線、80は印判（コンニャク判か）による草花文が認められる。79は18世紀以降、80は江戸時代末期の文化・文政期ごろのものと思われる。

81・82はN-5区から出土した、いわゆる照明具である。81は灯火器かと思われ、また82は灯明受皿であり、淡オリーブ色を呈するもの。とくに81は内底中心に円錐状の突起物があり、それに伴う孔が裏面に認められる。また同面には二文字の墨書があるが判読はできていない。当初は蠅燭立の機能をもつと考えたが器内に蠅の付着痕はなく、また文献等で調べる限り、灯火器の項で類似品は散見できるものの未だ使用法は不明である。また82は灯蓋（とうさん）または灯明受皿であり、小皿の内面に輪状に仕切りを施される。灯蓋は上皿=油皿に灯油を入れ、灯心を油に浸して火を灯すもの。芯から滴る油は、下皿に落ちて溜り、この下皿に該当するのが本遺物である。いずれも江戸時代以降のものと想定する。

83はN-5区から出土した瀬德利である。外面には透明釉が施釉されて、頸部には白釉による流しがけも認められる。成形痕は顯著で、ほぼ全身に右上りに稜線が確認される。地元窯産の可能性が高いもので、19世紀以降のものだろう。

84（S-4区）は化粧具の紅皿である。形状は柿円状を呈する小皿で、外面は貝殻状に凸凹を



第170図 国産陶磁器類②実測図

有するもの。内面には自然風景を染付する。

85はN-5区から出土した小型の硯である。硯面を除いて、側面・底面に施釉されるもので、

内部には墨が部分的に付着する。底（裏）面中央には、印刻で巴文を施している。

86はS-4区のSX09に検出された大甕である（図版84-3）。十以上の大きさの片を接合し、その復元口径は38.0cm・底径は24.0cm・器高は57.0cmを測る。体部は逆「ハ」字状にやや内湾して立ち上がり、僅かな肩曲をもって肩部に移行する。頸部はやや窄んで立ち上がり、楕円状の口縁端部に接続する。外面には底辺を除いて鉄（サビ）釉がかかり、口縁端部上面及び肩部付近に飴釉による流しがけが数ヶ所に認められる。また肩部にクシ状工具による不連続の波状文、肩部及び胴部に平行する複数の沈線が確認できる。地元でいう「はんど」の可能性をもち、恐らくは肥前もしくは備前地方の影響を受けてつくられた地元窯産と思われて、時期は江戸時代中期以降のものだろう。

#### 石製品・石器・瓦質土器・土製品・窯道具・鉄製品

（第171図、図版84-1・2、表7）石器は88、石製品は87・89、瓦質土器は90～94、土人形は95・96、窯道具は97～101、鉄製品は102となり、以降説明を加えていきたい。

87はN-13区から出土した石臼で、石材は不明であるが、砂岩質と看取できるもの。上臼と推定されて、表面には上縁部分と窪みが確認でき、裏面には凹状のふくみをもち、粉砕臼も数種が認められる。主溝は6分画と推定されることから製粉用の粉砕臼と考えられるもので、反時計方向に回転させて使用したと思われる。江戸時代以降のものと推定する。

88（S-4区）は打製石斧もしくは石核と想定されるもの。石材は安山岩で、長さ11.9cm・幅4.9cm・厚み2.1cmを測る。表面は左側に原石面が遺り、上・右・下側に剥離調整がみられて、とくに側面と下位面は刃部の成形を意図した痕跡を窺える。それは裏面にも窺えるもので、また使用痕はみられないという視点からは未完成の可能性も考えられる。断定はできないが、縄文時代もしくは弥生時代の可能性が強いと想定される。

89は同区からの砥石である。長さ6.7cm・幅4.9cm・厚み0.8cmを測るもので、軟質で細粒の石材が使われている。表面の上部には使用による窪みとともに、縱・斜め方向に使用痕が遺る。また裏面には左右方向に多数の成形加工痕が遺り、上下方向に使用痕もみられるもの。時期は不明である。

90～94は瓦質土器で、90は不明地点、91はN-5区、92はS-4区、93はN-3区、94はS-2区から出土したもの。いずれも回転ナデが施されて炭素が吸着し、残存状況や形態から比較的新しい時期のものと判断している。

そのうちの90は容器の蓋で、径は10.3cmを測る。表面には陽刻で草花文が看取され、台形状のつまみを有し、恐らくは江戸時代以降のものだろう。91は火鉢と想定するもの。径は12.4cmを測り、外面の口唇から下部にはナデのうちミガキも施される。内面体部には、調整痕としての平行条線が遺る。体下部に向かい器肉は薄くなり、恐らくは江戸時代以降のもの。

92は器種不明である。摩滅は顯著で、体中部に1.0cm以下の穿孔が認められる。93は窓部に煤が顯著に付着することから、火鉢と想定するもの。硬質の土器で、恐らくは江戸時代以降のものだろう。94は炉型土器で、焼炉もしくはコタツのオトシの類だろうか。丁寧なミガキが施され、鉛（つば）表には、製造元かと想定する刻印を認めるが、判読できないもの。江戸時代以降のものだろう。



第171図 石製品・石器・瓦質土器・土製品・窯道具・鉄製品実測図

95・96は土人形で、それぞれN-11区・N-6区から出土したもの(図版84-2)。胎土は緻密で、焼成は良好、色調は95は淡黄橙色、96は淡赤褐色を呈する。95が衣(裾部)であるのに対し、96は頭部となり、鼻・鼻溝・口部の精緻で明確なものとなる。いずれも素焼きの型合わせ品(中は空洞)で、江戸時代~明治期にかけてのものと思われ、当時の民間信仰や風習に結びついたものかもしれない。

97~101は窯道具で、順にS-4区、S-7区、S-3区、S-4区、S-5区から出土したものである。このうち97はトチンで、容器を重ねて焼成する場合に密着しないよう間にれるもの。底面を除き鉄(サビ)釉を施釉し、体部から底部に至る一部分に灰釉や白濁した釉の熔着が認められる。98はモミツチで、瓦を窯に固定する道具である。無釉だが部分的に鉛釉・鉄釉などが付着し、表面には平行する規則的な窪み部が3箇所にみられる。

99はスケで、甕などの大型焼成品を乗せるのに使用する円柱である。無釉で回転ナデを施し、内面下端には太い1条の沈線が認められ、また外側面は褐色に被熱するもの。99・100はハセの完形品で、瓦間に挟んで熔着を防ぐもの。両者とも熔け出した鉛釉や鉄釉が付着し、また頭部下端に剥離陶土の付着もみられる。

こうした窯道具の出土は、遺跡の近くに窯場もしくは瓦工場などが存在していたことを示すものと思われ、時期は比較的新しい近代以降ではないかと考えている。

102は角釘である。重さは8.9gを量り、サビが多く付着する。素材は鉄で、恐らくは近世以降の頭巻釘と思われる。

なお本節の執筆にあたり、弥生土器・須恵器・土師器については、元島根大学教授 田中 義昭氏と島根県立埋蔵文化財調査センター 丹羽野 裕氏に、また国産陶磁器類については、奥田 元宗・小由女美術館館長 村上 勇氏にそれぞれご教示を賜っている。ここに記して謝意を表するものである。

第7表 久城東遺跡実測遺物観察表(1)

第7表 久城東遺跡 実測物很察表(2)

第7表 久城東遺跡実測遺物観察表(3)

## 第4節 総括

本遺跡は、近世以降と想定する地形的改変及び近年に係る宅地の造成に伴う削平を受けた場所と確認されて、全体的に時期差のある遺物が混在して出土するなどの搅乱した様相を確認できたとともに、検出遺構においても、時期の特定し難いものが多く見受けられた。とくに北東調査区やS-10区は頗著であり、弥生土器・土師器・須恵器などの遺物の包含する堆積状況は、開発行為による搅乱に加え、自然堆積（流れ込みなど）による可能性も含めて窺うことができた。

地形的な状況について、中央域においては昭和58年（水害年度）以降と推定する整地化に係る搬入造成土を除去したところ、高い深度（谷底部まで5m以上と推定）を測る谷部であったことが確認されている。また、そこを挟む両調査域の削平状況などから考えると、原地形は現代よりも高低差があったと推測されて、周域の安定した場所に集落が形成されたと考えられる。

谷部自体の形成時期は不詳であるが、現地形と大きくは変わらないと仮定した上で、本調査成果と合わせて考察を加えたもので、時期は出土遺物の観点から、おもに3期（弥生時代・古代・近世）に大別して検討してみた。

弥生時代については、中期後葉～後期に係る堅穴住居1棟と後期を主体とする土器が確認されているが、北東域でも中央部から離れたやや高位となる北西端区と南西域でも中央寄りのN-10区に検出されている。南西域は大きく削平を受けた区域であり、その中にあってこのN-10区は斜面地を形成し、また出土遺物はもっとも多い調査区となる。このことにより、南西域一帯には北東検出区よりもやや低位の丘陵地が以前は存在して、小集落を形成していた可能性が強いものと推測している。

また対岸となるN-3区の堅穴住居跡は平面ほど検出された唯一のもので、島根県教育委員会によって実施された南東側の隣接調査区域には未検出で、後世の削平のために消滅したとも考えられるが、恐らくは検出地点から北西側に広がりをもった小集落が形成されていたと推定できるもので、現在は住宅地でその痕跡は確認できない。なお、北東方向には県教委による久城西I遺跡から弥生後期の集落、南西方向の大きな谷の対岸に位置する堂ノ上遺跡からは中期後葉～後期の集落、専光寺脇遺跡から中期後半の貼り石墓が確認されるなど、こうした久城台地上の指呼範囲に同時期以降の集落の点在が判明したもので、台地上では堂ノ上遺跡とともに古段階に属するものと扱うことができる。この中期後半という時期は弥生人の活動を示す画期とみられ、集落の始まりを検証する上での貴重な資料と考えている。

一方で眼下に望む益田平野では、中期後半には水田開発が始まっていたことが沖手遺跡（県教委調査区）の調査で判明しているが、台地上でも小規模な水田耕作は行われていたと考えている。その痕跡は未検出だが、本遺跡を含む指呼遺跡は概ね谷もしくは山裾の周辺に所在し、比較的安定した場所（やや高位地）に集落を形成することから、水田耕作は水の供給しやすい周域の斜面地などを利用して展開したものと推察される。

古代については、須恵器・土師器などの分布はさらに拡大して、おもに端部を除く北東区全域とS-10区に確認でき、観察からは奈良時代を中心とするものと捉えられた。また遺構は柱穴が多半で、後世のものとの重複も多く考えられるが、S-3～5区の溝に区画された2段の平坦面及び周域に集中すると考えられ、その中に、恐らくは奈良期に係る某かの掘立柱建物跡の柱列

を微かに推定する。

隣接する県教委調査区では、多数の掘立柱建物跡や加工段の検出から、ある程度の拠点性をもつ朱落跡の可能性を指摘しており、接続する端部とみられる本域は、同じ性格をもつものと理解している。

なお本調査では、古墳時代のはか後代の中世に係る痕跡はほとんどみられないものであった。全く人跡が絶えるとは考え難いので、開発などの活動の縮小または一時的に衰えた期間に相当するものかと推測している。

近世については遺物・遺構とも増大する。遺物はおもに18～19世紀を主体とする国産陶磁器(生活雑器)が多半を占め、遺構は柱穴・土坑・井戸・便所・貯水施設(大甕)と想定する一般生活遺構のはか、溝(灌溉用水路: SD01～03)・土留め用施設(石組状遺構)・井堰(石組状遺構)・横列杭などの恐らくは農耕地関連のものも検出されている。とくに溝は土地を区画する機能を有して、県教委調査区ではこの溝のはか、溜め池なども検出されている。

のことにより、本域一帯はかなり広範に土地の改変が行われて、農耕地を主体とする再開発が進められたものと考えている。

そして近代以降は、人口の増加に伴い、徐々に住宅地としての整備が加えられていったのであろう。

こうして弥生集落の黎明から近世の農地開発までを中心みてきたが、改めて長い期間に亘る人類の骨みを窺えることに気付かされる。このことは環境的に生活していくには充分な地域であったことが推定されて、時には開発などの手を加えながらも集落地として形成される変遷の一端を窺い知ることができたのは有意義であったと考える。但し、古墳時代や中世などの時期についてはほとんどが欠落して、そうした変遷過程なども含めて多く課題は遺ることから、今後の研究・調査に期待するものである。

## 参考文献

- 池淵俊一・丹羽野裕 2008「益田市スクモ塚古墳の測量調査」「大垣大塚古墳(附編)スクモ塚古墳」島根県古代文化センター調査研究報告40]
- 島根県教育委員会 2007『浜寄・地方遺跡』－1H・1I・2B・2D・2E 各区の調査－
- 島根県教育委員会 2008『沖手遺跡・専光寺脇遺跡』
- 島根県教育委員会 1992『石見空港建設予定地内遺跡 岛藏文化財発掘調査報告』
- 島根県教育委員会 1995『埋蔵文化財発掘調査報告書1』(鹿伏山・半田浜西・二宮C遺跡・久本奥窓跡)
- 江戸遺跡研究会 2001『江戸考古学研究事典』柏書房
- 島根県教育厅理藏文化調査センター 2001『石見焼内遠遺跡調査I』
- 浜田市教育委員会 2008『史跡・周布古墳・藏地宅後古墳・市史跡 金田1分墳』
- 松本岩雄 ほか 1992『石見地域』『弥生土器の様式と編年』－山陽・山陰編－

# 第5章 自然科学分析ほか

## 第1節 県道久城インター線8区における出土遺物の数値化報告 (2007.01.31)

桝口 英行

### 1. はじめに

本報告は、沖手遺跡内の県道久城インター線8区の発掘調査によって出土した遺物を数値化し、若干の検討を加えたものである。数値化にあたっては、3ミリよりも大きな破片を対象として行い、発掘作業中に破損して生じた破片以外は、すべて数え上げた。

また、貿易陶磁については、中世前半については、山本信夫・森田レイ子・宮崎亮一 2000 を参考し、中世後半については小野正敏 1982、森田勉 1982、上田秀夫 1982 の分類・編年を参考としておこなった。

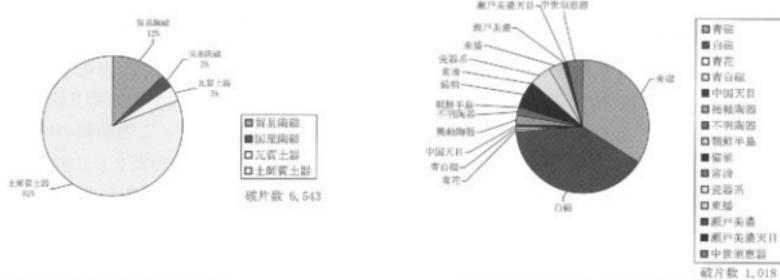
### 2. 傾向の分析

#### (1) 遺物の組成 [第1図・第2図]

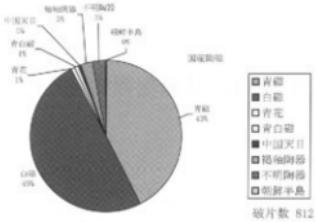
全体的な傾向、及び陶器の組成を示したものが第1図の円グラフである。総破片数は 6,543 点で、全体的な傾向では、圧倒的に土師質土器が多く 82% を占める。次に貿易陶磁が 12% と続き、国産陶器と瓦質土器は、3% という低い割合である。貿易陶磁の比率が、国産陶器と瓦質土器よりも多い傾向にある。

陶磁器だけでもみると、8割近くを輸入陶磁が占めている。貿易陶磁に着目すると、破片数は 812 点である。そのうち白磁が最も多く 403 点で、49%。次いで青磁が 346 点で、43% と高い数値を持つ。褐釉陶器・不明陶器がそれに続くが、いずれも 22 点と 21 点で 3% と極端に少ない。青花は 1% である。産地別では、中国製品が圧倒的に多く 94% で、産地不明の陶器、朝鮮半島産のものがそれに続く。

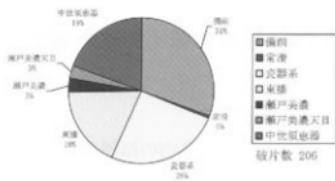
国産陶器は、31% の備前が最も多く、次いで瓷器系が 26%。中世須恵器・東播の順で続き、瀬戸美濃が 6%、常滑は 1 点の出土で、ほとんど組成に加わらない。多くの割合を、備前と瓷器系・東播系・中世須恵器のみが占めている<sup>1</sup>。



第1図 久城インター線8区出土の土器・陶磁器の組成



沖手遺跡(久城インター線8区) [貿易陶磁]



沖手遺跡(久城インター線8区) [国産陶器]

第2図 久城インター線8区出土の土器・陶磁器の組成

## (2)出土傾向 [第1表・第2表]

型式細分及び編年の進んでいる貿易陶磁を中心に、出土内容を概観していく。白磁では碗がもっとも多く、228点である。型式に注目すると、IV類が圧倒的に多く56点で、他のII類・V類・VI類・VII類・IX類は1桁代の出土数である。皿は168点で、型式不明のものが多い。判断のつくものは、IX類が28点でもっとも多く、III類・IV類・VI類・VII類・VIII類・X・I類がわずかに確認できる。碗・皿以外では、壺・壺がある。壺は、D群が1点で、壺は4点である。

青磁では、同安窯系青磁が30点、龍泉窯系青磁が314点で、龍泉窯系青磁は同安窯系青磁の10倍以上の出土量である。同安窯系青磁は、碗・皿のみで、碗26点と皿4点である。龍泉窯系青磁は、碗277点で、多くが碗で占められる。碗のうち、割花文碗は80点、蓮弁文碗は93点、雷文碗8点、無文碗25点で、割花文・蓮弁文碗が多くを占める。皿は、I類が18点で、稜花皿は3点であった。この他には、壺・盤・鉢が出土している。

青花は、6点確認でき、碗4点、皿2点の食膳具のみである。

青白磁は、7点出土しており、器種は合子のみである。陶器類では、天目茶碗が4点出土している。褐釉陶器は、壺が21点で、水注1点の22点が認められる。产地不明のものでは、陶器壺18点と陶器鉢2点、陶器瓶1点が認められ、陶器類の多くは壺で占められている。また、高麗青磁碗1点と朝鮮王朝産の製品として、碗が2点のみ確認できた。

## (3)時期別 [第3図]

前節で陶磁器の型式を概観したように、遺物から示される遺跡の時期は、11世紀中頃から16世紀代までの時間幅を有する<sup>23</sup>。貿易陶磁の時期と出土遺物の数を示したものが第2図である<sup>4</sup>。そのうち、最も中心となる時期は、11世紀後半から13世紀中葉である<sup>5</sup>。この期間の中でも12世紀中頃から13世紀前葉にかけての時期に出土点数が多くなっている。ただし、これは白磁の型式を同定できたものが403点中128点(31.8%)であるのに対し、青磁は344点中253点(73.5%)であることから、白磁は青磁の倍以上の型式不明品となっている。このような状況を勘案すると、11世紀から12世紀中葉にかけての破片数は、さらに増えるものと思われ、時期の中心もそれに伴い、さかのはるものだろう。

13世紀中葉以降は、15世紀前葉までは25点前後の一定の出土数があるが、15世紀中葉以降は、出土破片数は1桁台程度で極端に少なくなる。

このように、11世紀中葉から活動がわずかに確認でき、11世紀後半から13世紀中葉までの間、突如として多くの遺物が廃棄される状況が続くこととなる。その後、13世紀後半から15世紀前葉にかけては、前代のピーク時の1/3程度の規模となり、15世紀中葉から16世紀にかけて、わずかに廃棄活動が行われるような状況である。

### 3. 中吉田久城線部分との出土傾向の比較

久城インター線8区の南西に位置する中吉田久城線部分では、遺物の数量化が完了しているため、近地点の遺物組成の比較を行い、地点による出土傾向の異同を概観してみる。

#### (1) 遺物の組成 [第4図]

総破片数では、中吉田久城線では14,551点であり、久城インター線8区の6,543点の倍以上の数が出土している。出土遺物の総数を面積で割った出土密度は、中吉田久城線で約5.8点/m<sup>2</sup>で、久城インター線8区では3.9点/m<sup>2</sup>である<sup>6</sup>。このことから、中吉田久城線のほうが、単位面積当たりの出土点数が多い事がわかる。

各遺物についてみると、土師質土器が80%代と最も多く、次いで貿易陶磁が10%代で続く傾向は同じである。中吉田久城では、瓦質土器のほうが国産陶器よりも多いのに対し、久城インター線8区では、ほぼ同数である。

第1表 久城インター線8区器種別破片数

#### 器種別破片数

貿易陶磁	久城インター 線8区	中吉田 久城線	酒器陶磁	久城インター 線8区	中吉田 久城線	その他の 瓦質土器	久城インター 線8区	中吉田 久城線
白磁	228	612	酒戸丸窓	3	19	32	69	
青磁	168	89	皿	3	9	21	89	
灰	1	7	梅瓶		1	6	9	
鉢		3	瓶		5	4	2	
帶・衣注	5	6	天目系碗	6	7	31	82	
小物	1	20	擂鉢		1	7	3	
西安青磁	26	46	東播	34	25	足盤	12	15
青磁	4	7	打鉢			火鉢	1	33
黒		1	金	3		香炉		6
不明			像前	31	42	不明	113	503
龍泉窑系	277	356	加鉢			十加賀 士器	4949	11596
青磁	29	57	盤		3	环・皿	18	46
灰	3	1	壺	6	29	擂鉢	83	17
金		2	便利	4	3	説	44	29
金	2	2	小皿		4	柱状高台	4	13
鉢	2	2	不転	22	24	足湯	2	1
盤	2	1	常滑		16	火鉢	1	2
香炉		1	壺	1	3	その他	1	4
不明	3	11	壺		12	不明	168	227
青花	4	9	常滑	1	10	破片数(点)		
紅			青花	12	8			
白	2	3	青磁		2			
青花	7	9	灰	1				
青花		3	体					
その他			不明	12	21			
青磁	40	62	中世					
灰		1	灰	1				
鉢	2	2	須恵器	5	13			
天目系碗	4	4	鉢	4				
高麗青磁	1		壺	1	25			
朝鮮青磁	2	7	青磁	29	27			
			石製品	9	13			

第2表 貿易陶磁の分類破片数

貿易陶磁の分類破片数

	品種	片数(点)		
		中吉田 久城線 機区	中吉田 久城線	古市遺跡
白磁碗	II類	2	8	71
	IV類	56	154	208
	V類	5	17	42
	VI類	1		
	直口縁	19	20	34
	外反口縁	14	40	92
	唇折口縁	9	19	38
	曲縁	4	12	17
	D類	7	6	2
	不明	111	336	480
白磁皿	II類			19
	III類	4	3	12
	IV類	1	4	3
	V類			3
	VI類	1	10	35
	W類	5	1	4
	Y類	9		6
	Z類	28	16	11
	X類			1
	X I類	1	2	
白磁その他	D類			
	E I類	4	8	
	皿不明	115	32	76
	环D群	1	7	
	鉢		3	23
青白磁	盤・水注	4	6	15
	合子	7	9	15
	不明	1	20	
				18
同安窯系青磁	I類	16	31	
	Ⅱ類	6	11	
	不明	4	4	
	Ⅲ類	4	7	28
	不明		1	
龍泉窯系青磁	龍泉I類	80	115	
	龍泉Ⅳ類	2	1	
	龍泉B I類	62	59	
	龍泉B II類	21	14	
	龍泉I V類	3	3	
	龍泉B A類		13	
	龍泉C I類	1		
	龍泉C II類	7	7	
	龍泉D類	21	26	
	龍泉E類	4	11	
	碗不明	71	107	
	龍泉I類	18	17	
	龍泉後化型	3	18	
	龍泉不明皿	8	22	
	龍泉その他・不明	8	17	
越州窯系青磁				3
	高麗青磁	1		9
	不明青磁碗	2	31	
青花	碗	4	9	2
	皿	2	12	2
陶器類		47	67	179
朝鮮半島		2	7	2
合計		811	1359	1853

陶磁器だけでは、中吉田久城線では1,670点で久城インター線8区は、1,018点である。組成の全体的な傾向は非常に良く似ている。

貿易陶磁のみの組成では、中吉田久城線で青磁の割合が若干少ないと、青花や朝鮮半島産の割合が1%程度異なる事など、わずかな違い以外は、傾向が非常に似ている。

国産陶器は、久城インター線8区で備前・瓷器系・東播・中世須恵器が、多くの割合を占めていたのに対し、中吉田久城線では、東播系の占める部分が減り、瀬戸美濃が12%とある程度の出土量が確認できる。また、常滑については、久城インター線では、1%以下の数値であったが、中吉田久城線部分は6%もみられる。

## (2)出土傾向 [第1表・第2表]

貿易陶磁の型式に注目すると、IV類が最も多く、その他の型式では一定数の破片がみられる傾向は一致している。白磁皿についても、碗ほど多くはないが、各型式に一定数の出土数が確認できる。ただ、中吉田久城線では、D群の皿が13点出土しているのに対し、久城インター線8区では差がある。碗・皿以外の器種については、中吉田久城線で坏が多かったり、久城インター線8区では鉢が見られないなどの違いがある外は、ほとんど同じ傾向である。

同安窯系青磁では、碗は中吉田久城線で、久城インター線8区の倍に近い数が出土している。皿はそれほど日立った、違いは認められない。

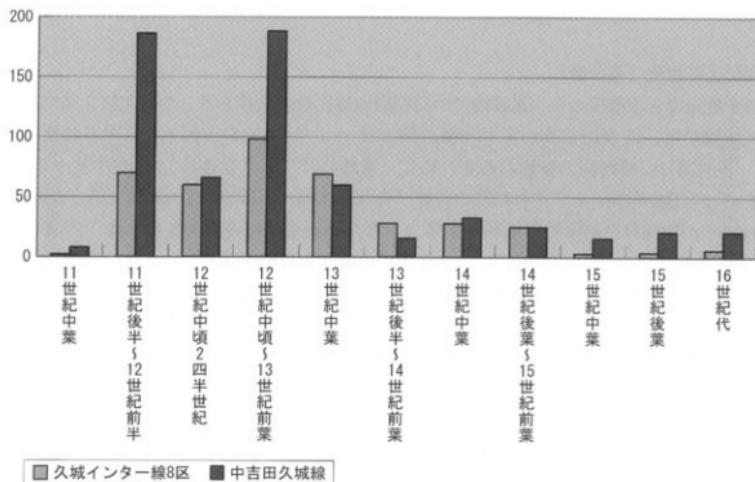
龍泉窯系青磁は、分類別にみると、

よく似た傾向を示す。しかし、蓮弁文碗B4類は、中吉田久城線で13点出土しているのに対し、久城インター線では確認できていない。器種では、中吉田久城線で壺・香炉が確認できるが、久城インター線8区にはない。逆に久城インター線で鉢はあるが、中吉田久城線にはないなど、特殊な器種の有無に微妙な差がある。このような傾向は、青白磁梅瓶や高麗青磁碗についても言える。

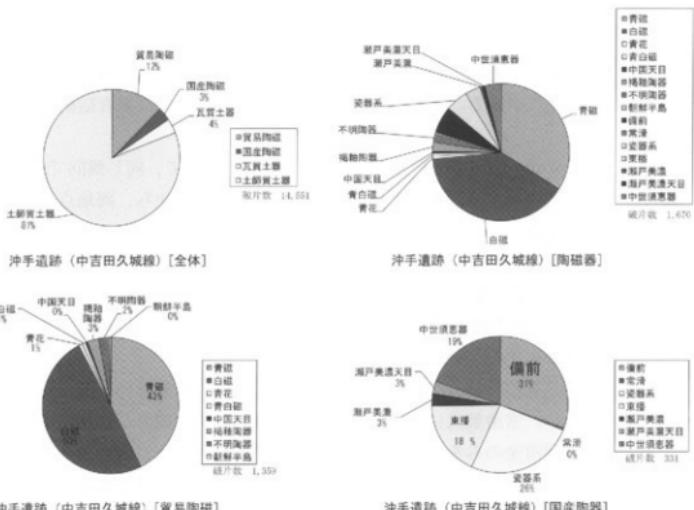
輸入陶器では、天目茶碗・不明陶器壺・水注・瓶など両地点において、同じ傾向で出土している。不明陶器鉢のみが、久城インター線8区で出土している。このことから、両地点の構成は、よく似た傾向を示す事がわかる。

次に、国産陶器に着目する。もっとも大きな差は、瀬戸美濃製品に現れており、中吉田久城線で6器種42点を確認できているのに対し、久城インター線8区では、碗・皿・天目茶碗の3器種12点のみの出土である。中吉田久城線では、久城インター線の3倍近い破片数があり、且つ梅瓶・瓶のような特殊な器種が出土している。

備前・瓷器系・中世須恵器では、少数片が出土している器種の有無という差はあるが、それほど大きな差はみられない。常滑製品については、堺が久城インター線で、出土していないこととなっているが、明確な常滑産のみを分類しているため、瓷器系のうちに常滑焼片が含まれている可能性がある。瓷器系のうちから、常滑産のみを抽出して検討する必要があるため、今後の課題として残る。



第3図 久城インター線・中吉田久城線時期別破片数



第4図 中吉田久城線遺物組成図

陶磁器のうち、特殊な器種に注目すると、両地点とも青磁盤や白磁壺・水注類が出土しており、特にどちらが多く富の象徴としての陶磁器を所持していたかという違いは明確ではない。ただし、青磁香炉や青白磁梅瓶、瀬戸美濃梅瓶・瓶など若干、中吉田久城線のほうが多いようである。

### (3)時期による比較 [第3図]

時期を特定できる破片から、遺跡内の時期別の破片数の推移を示したのが第3図である。中吉田久城線では、11世紀後半から13世紀前葉にかけて、150点以上出土する中心時期を迎えている<sup>7</sup>。各期間に、時間幅の多寡があるために、遺跡のピークを含める11世紀中葉から13世紀中葉まで（約200年間）と、それ以降の時期（約350年間）の破片数を比較すると、508:132で、前者のほうが圧倒的に陶磁器の廃棄量が多いことがわかる。中吉田久城線では、11世紀後半から13世紀中葉にかけて中心時期があり、13世紀中葉から規模が縮小してゆき、13世紀後半以降は、地点内での活動は確認できるものの、ピーク時に比べると細々としたものであったと思われる。

久城インター線8区と比較してみると、中吉田久城線では、11世紀後半から12世紀中葉まで中心時期であるのに対し、久城インター線では11世紀後半から13世紀中葉が中心時期となるので、中吉田久城線のほうが13世紀前葉から中葉にかけての衰退が著しい傾向にある<sup>8</sup>。13世紀中葉から15世紀前葉までは両地点とも、ほぼ同様な規模であり、15世紀中葉以降に、再び地点での活動に差が生じてくる。久城インター線8区では、わずかしか陶磁器が出土しないのに対し、中吉田久城線では、コンスタントに一定の出土数が確認できる。中吉田久城線と久城インター線

8区の時期別の破片数の比較をしてみると、14世紀中葉から15世紀前葉では58:53、15世紀中葉から15世紀後葉では37:7、16世紀代では21:6という破片数となっている。ことからも、15世紀中葉以降は、久城インター線8区よりも、中吉田久城線部分での活動が、相対的に活発となっていたことがわかる。

また、このように15世紀中葉以降に両地点で消費活動に差が生じていることは、貿易陶磁の細かな異同や、瀬戸美濃製品が中吉田久城線部分で多く確認できるという状況を生み出す原因と考えられ<sup>9</sup>、ひいては単位あたりの出土点数が、中吉田久城線で多いことの要因の一つとなる可能性がある。

#### 4. おわりに

以上、久城インター線8区における出土遺物の数値化を通じて、出土傾向や時期について整理し、沖手遺跡内の久城インター線8区と中吉田久城線との比較を行った。以下、簡単に要点をまとめてみる。

- ① 両地点の単位面積当たりの、遺物の出土点数には差異があり、中吉田久城線のほうが高い。
- ② 全体的な遺物の組成は、非常に良く似ているが、器種の細かい部分では差異がみられる。また、大きな違いは中世後半の陶磁器の様相にあり、時期差から組成差が生じた可能性がある。
- ③ 遺跡の中心時期は、久城インター線8区で、11世紀後半から13世紀中葉に求められるが、中吉田久城線部分では11世紀後半から13世紀前葉であり、中吉田久城線のほうが早くに衰退はじめる。
- ④ 13世紀中葉から15世紀前葉までは、ほぼ同規模の廃棄活動を行うが、15世紀中葉以降は、中吉田久城線部分の方で活動が活発となる。しかし遺跡の中心時期となった、11世紀後半から13世紀前葉のような状況ではない。

このように、近地点での比較であるがゆえに、かなり似た傾向をみてとることができると同時に、大小の差を拾い上げる事ができた。大きな違いは、時期差に由来することが指摘でき、小さな差は、場の機能や陶磁の嗜好など様々な要因が考えられる。

また今後の検討課題として、今回の時期別破片数の変化は、貿易陶磁の破片数のみで割り出したために、他の遺物を除外視してしまった変遷図となってしまっている。当然、陶磁器のみで生活が成り立っていたわけではなく、土師質土器・瓦質土器の使用があり、遺物全体を眺め、トータルに各期の土器様相を明らかにして、遺跡の動向を改めて作成する必要がある。この作業によって、今回は組成の単純な比較に終始してしまったためにできなかった、食膳具・貯蔵具・遊興具など、土器・陶磁器の機能分担に踏み込んで分析を進めていく必要性がある。

## 【脚注】

- <sup>1</sup> 明確に常滑と判断のつくものみを分類したため、瓷器系の中には常滑窯が含まれる可能性がある。
- <sup>2</sup> ここで使用する年代は、廃棄された年代である。しかし、鈴木廉之が指摘しているように、陶磁器は土器に比べて強い耐久性を持つがゆえに、生産から廃棄にいたるライフヒストリーは長いものと考えられる。ゆえに、廃棄された年代が必ずしも、使用年代を示すものではない可能性がある。
- 鈴木康之 2002「考古資料からみた中世集落における消費活動草戸千軒町遺跡における資料形成過程の分析」『国立歴史民俗博物館研究報告 第92集』、国立歴史民俗博物館
- <sup>3</sup> 各時期と山本編年との対応は次のとおりである。
- |               |   |                   |
|---------------|---|-------------------|
| 11世紀中葉        | ・ | 山本編年C期古段階         |
| 11世紀後半～12世紀前半 | ・ | 山本編年C期            |
| 12世紀第2四半期頃    | ・ | 山本編年C期新段階～D期      |
| 12世紀中頃～13世紀前葉 | ・ | 山本編年D期            |
| 13世紀中葉        | ・ | 上田編年青磁碗B0類、B1類など  |
| 13世紀後半～14世紀前葉 | ・ | 上田編年青磁碗B2類        |
| 14世紀後葉～15世紀前葉 | ・ | 上川編年青磁碗B3類、C2類、D類 |
| 15世紀中葉        | ・ | 上田編年青磁碗E類、森田編年D群  |
| 15世紀後葉        | ・ | 上田編年青磁碗B4類        |
| 16世紀代         | ・ | 小野編年青花            |
- 山本編年のD期以降は、上田編年の青磁碗を基準に時期を分けた。
- <sup>4</sup> 11世紀中葉から13世紀中葉までは、山本信夫・森田レイ子・宮崎亮一 2000を参考にし、13世紀後半以降は、森田勉 1982・上田秀夫 1982・小野正敏 1982の年代観を参照している。
- <sup>5</sup> 山本編年C期からE期にかけての時期にある。
- <sup>6</sup> 各地点の面積は、測量図面より算出した概数であり、正確な面積ではない（中吉田久城線：2474.6m<sup>2</sup>・久城インター線4区：1690.7m<sup>2</sup>）。また、中吉田久城線は、單道よりも北側の遺構の密集している地図のみの面積と遺物数である。
- <sup>7</sup> 各期間の時間幅の分配は、陶器器の編年によるため、均等ではない。そのため、12世紀第2四半期ごろは、時間が非常に短いために、見かけ上遺跡の規模が縮小したように感じられるが、それ以前の時期が約100年、その後の時期が約80年をスパンとしていると考えると、遺跡の中心時期に含めてよいものと考えられる。
- <sup>8</sup> ただし、久城インター線4区は、白磁の型式不明のものが、分類できたものより多いために、この不明数を考慮に入れると、中心時期が13世紀前葉よりもさかのばる可能性を有する。
- <sup>9</sup> 白磁皿D群やE1群、青磁碗B4類、青花などの分類にみられる数量的な差異や、青磁香炉や、朝鮮半島産陶磁などに有無などの違い。

## 参考文献

- 山本信夫・森田レイ子・宮崎亮一 2000『太宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－』太宰府市の文化財第49集、太宰府市教育委員会
- 森田勉 1982「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2、日本貿易陶磁研究会
- 上田秀夫 1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2、日本貿易陶磁研究会
- 小野正敏 1982「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2、日本貿易陶磁研究会
- 樺原博英 1995『古市遺跡発掘調査概報』、浜田市教育委員会
- 樺原博英 1998「島根県古市遺跡・横路遺跡と出土陶磁」『貿易陶磁研究』No.18、日本貿易陶磁研究会
- 日本貿易陶磁研究会 2002『中世後期における貿易陶磁器の様相』、日本貿易陶磁研究会中岡大会資料集、日本貿易陶磁研究会
- 榎原博英 2006「中世前期の貿易陶磁器の様相」『山陰における中世前期の諸様相・伯耆・出雲を中心として』、第5回山陰中世土器検討会資料集、山陰中世土器研究会

## 第2節 益田市沖手遺跡出土の中世人骨

松下 孝幸<sup>1</sup>・松下 真実<sup>2</sup>

【キーワード】：島根県、中世人骨、桶棺、箱棺、土塚墓、保存不良

### 1. はじめに

島根県益田市久城町に所在する沖手遺跡の発掘調査が益田道路建設に伴って、2005年度（平成17年度）におこなわれた。沖手遺跡の調査は、島根県埋蔵文化財調査センターと益田市教育委員会の両組織で調査範囲を分けて実施された。島根県埋蔵文化財調査センターが調査をおこなった調査区からは合計27箇所の遺構から27体の人骨が検出された。この調査区から検出された人骨は副葬品などの考古学的所見から、中世と近世に属する人骨であった。遺構の中には中世としては珍しい桶棺が含まれており、この桶棺からも人骨が検出されている。なお、島根県埋蔵文化財調査センターが調査をおこなった範囲から出土した人骨についてはすでに報告した（松下・他、2008）。

今回報告を行う人骨は、益田市教育委員会が調査を行った調査区から出土した人骨である。

筆者が調査や鑑定を行った島根県の中世人骨は少なく、津和野町の高田遺跡と喜時雨遺跡（松下、2000b）の他に山・美濃郡美都町（現益田市）の東仙道土居遺跡の例と沖手遺跡のうち島根県埋蔵文化財調査センターが調査を行った調査区の例ぐらいしかない。東仙道土居遺跡からは2個の壺からそれぞれ1体分の火葬骨が検出された。

その他に島根県では、油坪古墳群（安来市）、清水大日堂裏古墓（安来市）、二反田古墓（松江市）、中竹矢遺跡（松江市）、谷ノ奥遺跡（八雲村）、鳥坊古墓群（玉湯町）、蔵小路西遺跡（出雲市）、姫原西遺跡（出雲市）、坂灘遺跡（仁摩町）、殿屋敷遺跡（匹見町）、白枝本郷遺跡（出雲市）から中世人骨が出土している。

今回出土した人骨の保存状態は決して良好なものではなかったが、大部分は現場で、人骨の検出や人骨の観察・同定をおこない、埋葬姿勢などを確認した。また、一部は計測も可能だったので、人類学的観察や計測をおこなった。その結果を報告しておきたい。

### 2. 資 料

本遺跡からは合計24基の墓坑から24体の人骨が検出された。表1に示すとおり、24体のうち成人骨は20体で、残りの4体は幼児骨である。成人骨のうち、男性骨は6体、女性骨は2体で、その他に性別を明らかにできなかつたものが12体あった。なお、この性別不明人骨の1体は火葬骨である。この24基の墓のはかに2ヶ所で人骨が検出されたので、今回の発掘調査で出土した人骨は総計で26体である。各人骨の性別・年令などは表2のとおりである。なお、年齢区分に関しては表3を参考にされたい。

<sup>1</sup> Takayuki MATSUSHITA

<sup>2</sup> Masami MATSUSHITA

The Doigahama Site Anthropological Museum [土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム]

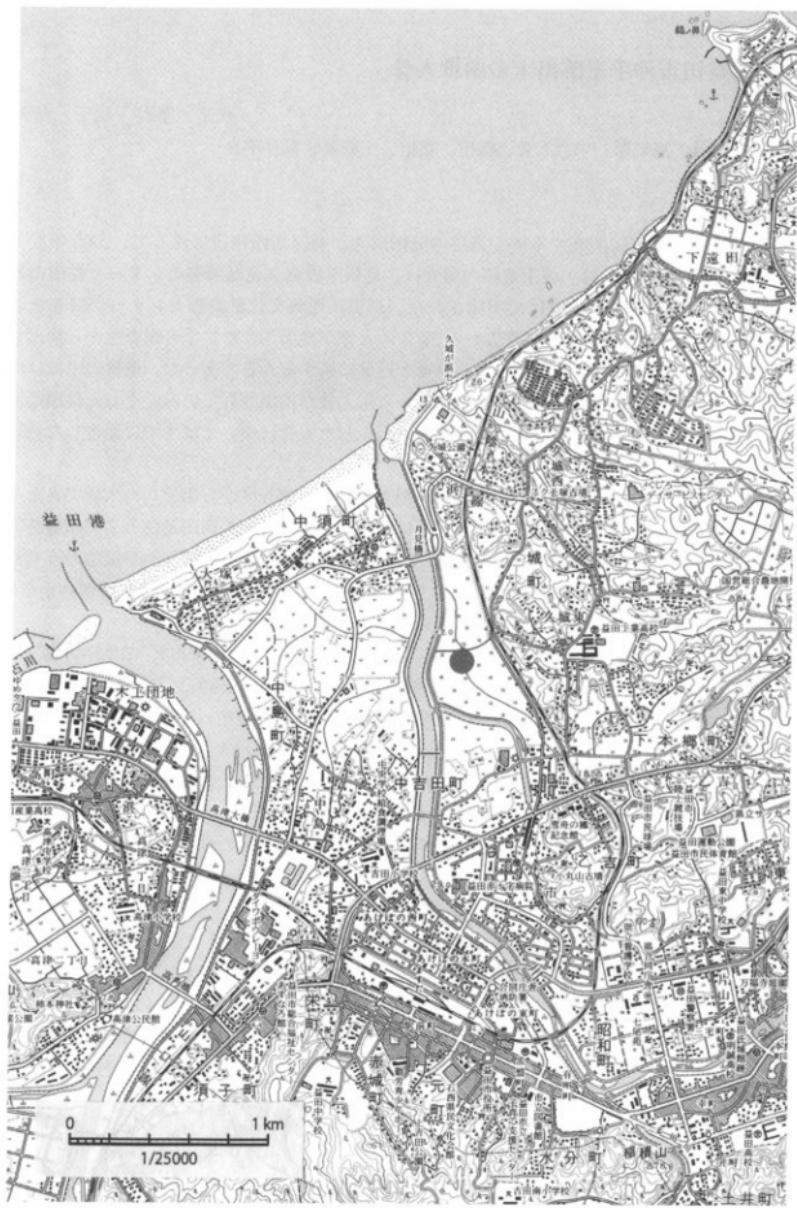


図1 遺跡の位置 (1/25,000)

(Fig.1 Location of the Okite site,Masuda City,Shimane Prefecture)

表1 資料数 (Table 1. Number of materials)

		成 人			幼 小 児	合 計
		男 性	女 性	不 明		
埋葬跡出土	非火葬骨	6	2	11	4	23
	火葬骨	0	0	1	0	1
その他	非火葬骨	0	0	0	1	1
	火葬骨	1	0	0	0	1
合 計		7	2	12	5	26

表2 出土人骨一覧 (Table 2. List of skeletons)

区	人骨番号	埋葬遺構	性別	年齢	時代	埋葬姿勢	備考
6区	P-13	土壙墓	不明	不明	中世	不明	
6区	P-344	土壙墓	不明	不明	中世	不明	
7区	SK-03	土壙墓	不明	不明	中世	不明	
7区	SK-12	土壙墓	不明	不明	中世	仰臥・北頭位	
7区	SK-25	箱棺墓	不明	不明	中世	不明	
7区	SK-42	桶棺墓	男性	熟年	中世後期	坐位・顔南向き	数珠、塔婆
7区	SK-43	土壙墓	男性	不明	中世	仰臥・東頭位	
7区	SK-45	箱棺墓	男性	不明	中世	仰臥・北頭位	
7区	SK-46	箱棺墓	男性	不明	中世	側臥(右を下)・北頭位	
7区	SK-47	土壙墓	男性	不明	中世	仰臥・北頭位	皿、刀子
7区	SK-50	土壙墓	不明	不明	中世	側臥(右を下)・北頭位	土師皿
7区	SK-58	土壙墓	不明	不明	中世	不明	皿
7区	SK-61	土壙墓	女性	不明	中世	仰臥・東頭位	
7区	SK-62	土壙墓	不明	不明	中世	仰臥	
7区	SK-63	土壙墓	-	幼児	中世後期	不明	2~3歳
7区	SK-65	箱棺墓	不明	不明	中世	不明	歯のみ
9区	SK-01	火葬墓	不明	壮年	中世	不明	火葬骨
9区	SK-02	土壙墓	-	幼児	中世	仰臥	4~5歳、五輪塔部材

9区	SK-03	箱棺墓	女性	不明	中世	仰臥・北頭位	
9区	SK-04	土壙墓	男性	不明	中世	仰臥・北頭位	
9区	SK-06	桶棺墓	-	幼児	中世	不明	2歳、土師皿
9区	SK-07	桶棺墓	不明	老年	中世	坐位・顔北向き	
9区	SK-08	箱棺墓	不明	不明	中世	仰臥・北頭位	銅錢
10区	SK-13	箱棺墓	-	幼児	中世後期	不明	2~3歳、皿、鉄滓
7区	P-1400 HI7SK-42	-	-	幼児	中世	-	7区 SK-42 の上層
7区 (ピット上部)	-	男性	不明	中世	-	-	火葬骨 (東、西)

埋葬遺構は主に土壙墓で、その他に桶棺、箱棺（木棺）がみられた。埋葬姿勢は、桶棺墓では坐位で、箱棺墓と土壙墓では仰臥と側臥（2例）がみられた。仰臥の例では頭位はほとんどが北であった。坐位で埋葬された被葬者の顔の向きは北と南がみられた。

この26体の人骨は、考古学的所見から中世に属する人骨群である。人骨の保存状態は著しく悪く、計測や観察ができたものは少ない。計測方法は、Martin-Saller（1957）によったが、脛骨の横径はオリビエの方法で計測した。

人骨の発掘調査は、筆者らの他に当館の職員の磯部美恵子、松下玲子、中野江里子がおこない、人骨の整理・復元などもこの3人が担当した。

表3 年齢区分 (Table 3. Division of age)

年齢区分		年齢	
未成人	乳児	1歳	未満
	幼児	1歳	~ 5歳 (第一臼歯萌出直前まで)
	小児	6歳	~ 15歳 (第一臼歯萌出第二臼歯根完成まで)
	成年	16歳	~ 20歳 (蝶後頭軟骨結合癒合まで)
成人	壮年	21歳	~ 39歳 (40歳未満)
	熟年	40歳	~ 59歳 (60歳未満)
	老年	60歳	以上

注) 成年という用語については上井ヶ浜遺跡第14次発掘調査報告書(1996)を参照されたい。

### 3. 所 見

#### 6区 P-13 (性別・年齢不明)

現場で実見していない。頭蓋、歯および胸椎の一部と肋骨などが残存していた。頭蓋の保存状態は著しく悪く、骨種の同定ができない。比較的保存状態がよかったのは下頬骨と歯および肋骨である。肋骨は左側のみである。下頬骨は、右側の下頬枝と下頬体差側部が残存していた。前者の幅はやや広いが、後者の高さは低そうである。

上下両顎の歯が残存していた。残っていたのはほとんど歯冠のみである。残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

/	7	6	5	4	3	2	1		1	2	3	4	5	6	7	8
/	7	6	5	4	3	2	1		1	2	3	4	5	6	7	/

〔●：歯槽閉鎖 ○：歯槽開存 ／：不明 △：先天性欠損、番号は歯種〕

(1: 中切歯、2:側切歯、3:犬歯、4:第一小白歯、5:第二小白歯、6:第一大臼歯、7:第二大臼歯、8:第三大臼歯)

咬耗度は Broca の 1 度（咬耗がエナメル質のみ）で、咬耗は弱い。歯の径は小さい。

性別・年齢は不明である。

#### 6 区 P-344 (性別・年齢不明)

現場で実見していない。頭蓋、歯および右側上腕骨が残存していた。頭蓋は泥化しており、同定できないが、下顎体は形を保っている。右側上腕骨も泥化しており、骨質がわずかに確認できる程度である。

上下両顎の歯冠が残存していた。残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

/	/	/	5	/	/	2	1		2	3	/	5	/	/	/	/
/	7	6	5	4	3	2	1		1	2	3	4	5	6	7	8

咬耗度は Broca の 1 度（咬耗がエナメル質のみ）で、咬耗は弱い。本例も歯の径は小さい。

性別・年齢は不明である。

#### 7 区 SK-03 (性別・年齢不明)

下顎骨の小片と歯冠が残存していたにすぎない。歯冠は大部分が破碎しており、同定が困難である。

同定できた歯は次のとおりである。

/	/	/	/	/	/	/	/		/	/	/	/	5	/	7	8
/	7	/	/	/	/	/	/		1	2	3	4	5	6	7	8

咬耗度は Broca の 1 度（咬耗がエナメル質のみ）である。

性別・年齢は不明である。

#### 7 区 SK-12 (性別・年齢不明)

埋葬遺構は土壌で、埋葬姿勢は仰臥である。土師器が副葬されていた。そのうちの 1 枚は、下顎骨の下に、まるで下顎骨を容器に収めるかのようにして置かれていた。右側の肘関節はほぼ伸展状態であったが、左側は不明である。左側の膝関節は約 60 度曲げられた状態で右側に倒れていた。残存していたのは頭蓋、右側上腕骨、右側の前腕の骨、両側の寛骨、左側の大腿骨と脛骨、腓骨である。この墓穴の南端から大腿骨と思われる骨が検出されたが、検出位置から、これは本墓坑の被葬者のものとは考えられない。その他にも別個体の骨と思われるものが左側脛骨のそばからも検出された。

取り上げることができたのは脳頭蓋と歯および四肢骨の一部である。頭蓋は脳頭蓋の右側部分の一部にすぎない。歯の同定をおこなうことができた。残存歯は次のとおりである。

/	7	6	5	/	3	/	/		2	/	/	/	/	/	/	/
/	1	2	3	/	4	/	/		5	/	/	/	/	/	/	/

咬耗度は Broca の 1 度（咬耗がエナメル質のみ）である。

四肢骨の保存状態は著しく悪く、その特徴を把握することはできない。

性別・年齢は不明である。

#### 7区 SK-25 (性別・年齢不明)

埋葬遺構は箱棺である。棺材の保存状態は良好であったが、人骨の残りはきわめて悪く、頭蓋片と遊離歯を検出したにすぎない。頭位は北。

頭蓋と遊離歯冠を取り上げることができた。頭蓋は痕跡に近い状態で、同定ができない。上下両顎の歯冠が残存していた。残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	4	/	/	/	8
/	7	6	/	4	/	2	/	/	/	4	/	/	/	8

咬耗度は Broca の 1 度（咬耗がエナメル質のみ）である。歯の径はやや大きい。

性別・年齢は不明である。

#### 7区 SK-42 (男性・熟年)

埋葬遺構は桶棺（坐棺）。埋葬姿勢は坐位。顔の向きは南。棺材はよく残っていたが、人骨の残りは必ずしも良好ではない。残存していたのは、頭蓋、右側の大腿骨と脛骨、左側の大脛骨、右側の膝蓋骨、左側寛骨の一部、肋骨、椎骨、鎖骨の一部などであったが、取り上げることができたのは頭蓋、右側の大脛骨と脛骨などである。頭蓋は両脚の間に落下し、頭頂部を下にした状態で検出された。また、左側の膝は立った状態で検出された。

頭蓋は脳頭蓋と下顎骨を取り上げることができた。頭蓋壁は薄い。外後頭隆起の様態は不明である。脳頭蓋の径はあまり大きいものではなさそうである。ラムダ縫合の観察ができたが、左側は内外両板ともほぼ癒合している。遊離歯冠が残存していた。遊離歯冠と下顎の歯槽の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

/	/	/	/	/	3	/	/	/	/	/	/	/	/	/
8	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/

咬耗度は Broca の 1 ~ 2 度（咬耗が部分的に象牙質まで及ぶ）である。歯の径はやや大きい。

大腿骨は右側の骨体と骨頭を取り上げることができた。骨頭は大きく、粗線は隆起しているが、骨体の両側面は窪んでおり、矢状径よりも横径が大きい。

計測値は、骨体中央矢状径が 26mm（右）、横径は 29mm（右）で、骨体中央断面示数は 89.66（右）となり、粗線の発達は良好であるが、骨体両側面の後方への発達がみられない。骨体中央周は 88mm（右）で、骨体は太い。また、上骨体断面示数は 89.66（右）となり、骨体上部には扁平性は認められない。

脛骨は右側骨体を取り上げることができた。径はそれほど大きいものではない。現場で観察したところ、ヒラメ筋線の発達はきわめて良好で、ヒラメ筋線は隆起していた。

計測値は、中央最大径が 26mm（右）、中央横径は 22mm（右）で、中央断面示数は 84.62（右）となり、骨体には扁平性は認められない。骨体周は 73mm（右）で、骨体はやや太い。

四肢骨の径がやや大きく、ヒラメ筋線の発達がきわめて良好であったことから、性別を男性と推定した。年齢はラムダ縫合の左側が内外両板とも癒合していることから、熟年と推定した。

#### 7区 SK-43 (男性・年齢不明)

埋葬遺構は土壙で、埋葬姿勢は仰臥である。頭位は東。右側の肘は強屈状態、左側の肘関節は

約60度曲げた状態で出土した。右側大腿骨は立った状態で検出された。左側膝関節は屈曲状態で、左側大軀骨は内側を下にした状態で倒れていた。すなわち埋葬状態は仰臥で、右側膝は立膝、左側は屈曲の姿勢である。

ほぼ全身の骨が残っていたが、保存状態はきわめて悪く、取り上げることが困難な状態であった。残存していたのは、頭蓋、両側の上腕骨、左側の桡骨と尺骨、右側の尺骨、両側の寛骨と大腿骨および脛骨であるが、右側の脛骨は一部しか残存していなかった。また、左側の腓骨も残存していた。肋骨も残存していたが、椎骨は残っていなかった。人骨を取り上げる際に、右側の鎖骨と両側の肩甲骨が残存しているのを確認することができたが、これらはかろうじて形を残しているといった状態で、骨を取り上げることはできなかった。

頭蓋は潰れた状態ではあるが、頭蓋としての形状をほぼ保っていた。眉上弓の隆起は弱い。頭蓋の径も大きくなかった。鼻根部は扁平で、顎の高さは低そうである。脳頭蓋は変形しているが、観察によれば頭型は中頭型か、長頭型だったと思われる。

上下両顎には歯が釘植していた。残存歯を歯式で示すと、次のとおりである。

8	/	6	5	4	/	/	/	/	/	4	5	6	7	/	
	/	7	6	5	4	/	/	1	/	/	4	/	/	7	/

咬耗度は Broca の 1 ~ 2 度（咬耗が部分的に象牙質まで及ぶ）である。

四肢骨はほとんど取り上げることができなかつたが、現場で観察や計測をおこなうことができた。大腿骨の径は大きく、現場で計測したところ骨体中央矢状径は 30mm もあり、粗線や骨体両側面の後方への発達も良好であった。

大腿骨は径が大きく、粗線や骨体両側面発達も良好であることから、性別を男性と推定した。年齢は不明である。

#### 7 区 SK-45 (男性・年齢不明)

埋葬遺構は箱棺である。埋葬姿勢は仰臥。頭位は北。左側肘関節は約 120 度で、ゆるく曲げていたが、右側は不明である。膝関節は両側とも強屈状態で右側に倒れていた。残存していたのは、痕跡的な状態の頭蓋、歯冠、左側の上腕骨と前腕の骨、左右の大軀骨、脛骨、腓骨である。人骨は原形を保った状態では取り上げることができなかつた。遊離歯冠を歯式で示すと、次のとおりである。

/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	5	6	/	/
/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/

咬耗度は Broca の 1 度（咬耗がエナメル質のみ）である。歯の径はやや大きい。

現場で観察したところ大腿骨、脛骨の径は大きいようである。

下肢骨の径が大きいことから、性別を男性と推定したが、年齢は不明である。

#### 7 区 SK-46 (男性・年齢不明)

埋葬遺構は箱棺である。埋葬姿勢は右を下にした側臥である。頭位は北。肘関節は両側とも伸展状態。膝関節および股関節は強く屈曲している。比較的人骨の残存状態は良好であるが、骨自体はもろくなつておらず、取り上げることができなかつた。残存していたのは、頭蓋、左右の上腕骨と前腕の骨、左右の寛骨、左右の大軀骨、脛骨、腓骨であるが、その他に肋骨と椎骨も確認できた。

頭蓋は潰れており、保存状態は著しく悪く、特徴は不明である。下顎骨と遊離歯を取り上げることができた。遊離歯冠と下顎の歯槽の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

8	⑦	⑥	⑤	④	③	/	/		①	②	③	④	5	6	7	/
---	---	---	---	---	---	---	---	--	---	---	---	---	---	---	---	---

咬耗度は Broca の 2 度（咬耗が部分的に象牙質まで及ぶ）である。

四肢骨も形状を保った状態では取り上げることはできなかった。現場で観察したところ大腿骨体の径は大きく、粗線の発達も良好であった。左側大腿骨は現場で最大長を計測できた。最大長は 425mm もあり、長さは長い。左側大腿骨最大長から推定身長値を算出してみたところ、161.21cm (Pearson 式)、159.81cm (藤井式) となり、Pearson 式では 160cm を超え、身長が高い。脛骨も骨体の径はかなり大きく、上腕骨、前腕の骨の径も大きい。

四肢骨の径がかなり大きいことから、性別を男性と推定したが、年齢は不明である。

#### 7 区 SK-47 (男性・年齢不明)

埋葬遺構は土壙である。埋葬姿勢は仰臥。頭位は北。右側の肘関節は約 90 度に曲げていたが、左側は伸展状態である。膝関節は、右側は約 90 度、左側は約 60 度くらい曲げられていた。残存していたのは、頭蓋、左右の上腕骨、左右の前腕骨、左右の寛骨と仙骨、左右の大腿骨および脛骨、左側の腓骨である。人骨は比較的よく残っていたが、やはり骨質はもろく、ほとんど取り上げることができなかった。頭蓋は右側を下にした状態であったが、保存状態は悪く、潰れており、復元はできない。従って、頭蓋の特徴は不明である。歯が釘植していた。残存歯を歯式で示すと、次のとおりである。

/	/	/	/	/	/	/	/		/	/	/	/	4	5	6	7	8
/	/	6	5	/	/	/	/		/	/	/	/	6	7	8		

咬耗度は Broca の 1 度（咬耗がエナメル質のみ）である。

四肢骨の保存状態も悪く、取り上げることができなかったが、左側大腿骨と右側上腕骨の最大長を現場で計測することができた。右側上腕骨最大長は 315mm～320mm、左側大腿骨最大長は 415mm であった。この最大長から推定身長値を算出したところ、大腿骨からは 159.33cm (Pearson 式)、157.31cm (藤井式)、上腕骨からは 161.80cm～163.25cm (Pearson 式)、161.13cm～162.52cm (藤井式) となり、中世人としては身長は低くない。

大腿骨、脛骨、上腕骨の径がかなり大きいことから、性別を男性と推定したが、年齢は不明である。

#### 7 区 SK-50 (性別・年齢不明)

埋葬遺構は土壙である。埋葬姿勢は SK-46 と同じように右を下にした側臥である。頭位は北。保存状態がかなり悪いので、肘関節の様態は不明であるが、膝関節および股関節は強く屈曲していた。残存していたのは、頭蓋、下顎骨、左側の前腕の骨、左側大腿骨の近位部、左右の脛骨、左側腓骨で、痕跡的に左側寛骨、肋骨、椎骨が残っていた。保存状態が著しく悪いので、性別・年齢ともに不明である。

#### 7 区 SK-58 (性別・年齢不明)

埋葬遺構は土壙である。残存していたのは頭蓋冠の一部で、右側の頭頂骨と前頭骨の一部に過ぎない。保存状態は悪く、頭型などは推測もできない。性別・年齢は不明である。

#### 7 区 SK-61 (女性・年齢不明)

埋葬遺構は土壙である。埋葬姿勢は仰臥。頭位は東。右側の肘関節は強屈状態であるが、左側は不明である。膝関節は両側とも伸展状態である。残存していたのは、頭蓋片、右側の上腕骨、前腕の骨、右側寛骨、右側大腿骨および左右の脛骨と腓骨であるが、ほとんど取り上げることができなかった。現場で右側寛骨の大坐骨切痕の観察できたが、この角度は広い。埋葬後に墓坑は柱穴などによって、かなり破壊を受けていた。

大坐骨切痕の角度が大きいことから、性別を女性と推定したが、年齢は不明である。

#### 7区 SK-62 (性別・年齢不明)

埋葬遺構は土壙である。埋葬姿勢は仰臥と思われる。肘関節の状態は左右とも不明であるが、右側の膝関節は強屈状態であった。残存量は少なく、残っていたのは左側鎖骨、右側上腕骨、右側大腿骨、脛骨および腓骨であるが、保存状態も著しく悪く、ほとんど取り上げることができなかつた。大腿骨の粗線の発達はよさそうであるが、その他の特徴は不明である。

性別・年齢は不明である。

#### 7区 SK-63 (幼児)

埋葬遺構は土壙である。人骨の残存量が少なく、埋葬姿勢は不明である。残存していた骨は頭蓋と肋骨のみであったが、永久歯と乳歯も残存していた。残存歯を歯式で示すと、次のとおりである。永久歯冠の形成状態から年齢を2~3歳と推定した。

<永久歯>

/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	2	/	/	/	/	/	/
/	/	6	/	/	/	/	/	/	/	/	/	2	/	/	/	6	/	/

<乳歯>

/	IV	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	V						
/	IV	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	IV	V					

(I: 乳中切歯、II: 乳側切歯、III: 乳犬歯、IV: 第一乳臼歯、V: 第二乳臼歯)

#### 7区 SK-65 (性別・年齢不明)

埋葬遺構は棺槨。棺材が残存していた。棺の東側隅に遊離歯が残存していたにすぎない。残存歯を歯式で示すと、次のとおりである。

8	7	6	5	4	3	2	/	1	2	3	4	5	6	7	8			
/	7	6	/	4	/	/	/	/	/	/	/	4	/	/	/	/	/	/

咬耗度はBrocaの1度(咬耗がエナメル質のみ)である。性別・年齢は不明である。

#### 9区 SK-01 (性別不明・壮年)

現場で実見していない。火葬骨である。人骨には火葬骨特有の捻れ、変形、亀裂がみられる。残存していたのは頭蓋と四肢骨である。頭蓋は右側頭頂骨と後頭骨が残存していた。骨壁はやや薄い。ラムダ縫合、矢状縫合、冠状縫合の観察ができたが、三縫合とも内外両板はまだ閉離していたようである。四肢骨は両側の上腕骨と大腿骨の他に左側膝蓋骨、寛骨と肩甲骨の一部、頸椎などを同定することができた。四肢骨は変形が著しく計測はできないが、観察したところ、あまり大きいものではなさそうである。

年齢は三主縫合が内外両板とも閉離していることから、壮年と推定したが、性別は不明である。

## 9区 SK-02 (幼児)

埋葬遺構は土壙墓か。墓坑の中に投げ込まれた墓石（砂岩製）の直上に骨が乗っていた。現場で確認できたのは頭蓋と四肢骨であるが、その他に下頸骨と釘植している乳歯を確認した。埋葬姿勢は、下頸骨の位置から推測して仰臥だったようである。四肢骨の保存状態は著しく悪く、現場で左右の尺骨と左側桡骨を同定できただけにすぎない。頭蓋は右側半分が残存していた。上下両顎には乳歯が釘植していた。残存歯を歯式で示すと、次のとおりである。乳歯の他に上下両顎の右側の第一大臼歯冠が残存していたが、下顎は歯槽内に埋伏状態であった。永久歯冠の形成状態から年齢を4～5歳と推定した。

### ＜乳歯＞

V	IV	III	/	/	/	/	III	IV	V
V	IV	/	II	I	/	II	/	IV	V

(I：乳中切歯、II：乳側切歯、III：乳犬歯、IV：第一乳臼歯、V：第二乳臼歯)

## 9区 SK-03 (女性・年齢不明)

埋葬遺構は箱棺。棺材が残存していた。埋葬姿勢は仰臥。頭は北。残存量は少なく、保存状態は悪い。残存していた人骨のうち同定できたのは、頭蓋、下頸骨、歯、左側の大脛骨のみであった。肘関節の様態は上肢骨が残存していないかったので、不明である。膝関節は両側とも屈曲していた。観察したところ下頸骨の径は小さい。遊離歯を歯式で示すと、次のとおりである。

8	/	6	5	/	3	2	/	/	/	/	/	/	8
/	7	6	5	/	/	/	/	/	/	/	/	6	/

咬耗度はBrocaの1度（咬耗がエナメル質のみ）である。

下頸骨が小さいことから、性別を女性と推定したが、年齢は不明である。

## 9区 SK-04 (男性・年齢不明)

埋葬遺構は土壙で、埋葬姿勢は仰臥。頭蓋は北。残存していたのは、頭蓋片、遊離歯、左右の上腕骨、左右の前腕の骨、左右の大腿骨と脛骨であるが、取り上げて観察や計測をおこなうことはできなかった。肘関節は左右とも強屈状態。膝関節は左右とも屈曲していた。本人骨は後世の搅乱を受けており、頭蓋は大部分が破壊され、散逸したものと思われる。また、下肢骨にも乱れがみられるが、これも搅乱によるものと思われる。現場で観察したところ大腿骨の径は大きい。遊離歯冠3個が残存していた。すべて上顎歯で、歯式で示すと、次のとおりである。咬耗度はBrocaの1度（咬耗がエナメル質のみ）である。

8	7	6	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

大腿骨の径が大きいことから、性別を男性と推定したが、年齢は不明である。

## 9区 SK-06 (幼児)

埋葬遺構は桶棺である。現場で出土状況を実見していないので、埋葬姿勢は不明である。残存していたのは同定不能の骨片と下顎の乳歯のみである。残存していた遊離歯を歯式で示すと、次のとおりである。

### ＜乳歯＞

V	IV	/	/	/	/	/	/	/	IV	V
---	----	---	---	---	---	---	---	---	----	---

(I：乳中切歯、II：乳側切歯、III：乳犬歯、IV：第一乳臼歯、V：第二乳臼歯)

歯根は形成されているが、歯冠には顕著な咬耗が認められないので、年齢を2歳程度と推定した。

#### 9区 SK-07 (性別不明・熟年)

埋葬遺構は桶棺。底板が残存していた。埋葬姿勢は坐位。残存量は少なく、保存状態は悪い。残存していたのは頭蓋、左右不明の上腕骨、左右不明の前腕の骨、左右の人腿骨と脛骨であるが、ほとんど取り上げることができなかつた。保存状態が著しく悪く、骨の特徴はつまびらかではないが、頭蓋は薄く、頭型は明らかに長頭型である。冠状縫合の観察が可能で、外板は開離していたが、内板には癒合が認められる。左右の人腿骨の位置から顔は北に向かっていたようである。

性別は不明である。年齢は冠状縫合の内板が癒合し、外板が開離していることから、熟年と推定した。

#### 9区 SK-08 (性別・年齢不明)

埋葬遺構は箱棺であるが、木材を半分しか使用しておらず、残り半分は竹を編んだもので構成されていた。上半身は材木部分に、下半身は編み竹の上から出土した。埋葬姿勢は仰臥。頭位は北。保存状態は著しく悪く、現場で確認できたのは頭蓋、おそらく左右の大腿骨と思われる長骨2本である。下肢骨部分から銅錢が3枚検出された。性別・年齢は不明である。

#### 10区 SK-13 (幼児)

埋葬遺構は箱棺である。遊離歯冠が残存していたにすぎない。残存していた遊離歯は永久歯と乳歯で、歯式で示すと、次のとおりである。

〈永久歯〉



〈乳歯〉



(I : 乳中切歯、II : 乳側切歯、III : 乳犬歯、IV : 第一乳臼歯、V : 第二乳臼歯)

乳歯冠には顕著な咬耗が認められないが、永久歯冠の形成状態から、年齢を2~3歳と推定した。

#### 7区 P-1400 H17.SK-42 (幼児)

SK-42の上唇から検出された下頸左側第一大臼歯の歯冠1個である。咬耗が認められることから、未萌出か萌出完了直後ぐらいと思われる。おそらく幼児の歯冠であろう。

#### 7区 (ピット上部) (男性・年齢不明)

この地点から検出されたのは下頸体の右側半分のみである。火を受けた痕跡がみられ、危険が認められるが、火力が弱かったとみられ、大きな変形は生じていないので、計測もできた。径はやや大きく、オトガイは隆起している。歯は釘植していないが、歯槽の観察ができた。歯槽の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

下頸骨の径が大きいことから、性別を男性と推定したが、年齢は不明である。



(● : 歯槽閉鎖 ○ : 歯槽開存 / : 不明 △ : 先天性欠損、番号は歯種)

[1: 中切歯、2: 齒切歯、3: 犬歯、4: 第一小臼歯、5: 第二小臼歯、6: 第一大臼歯、7: 第二大臼歯、8: 第三大臼歯]

## 4. 考 察

計測ができた男性の大腿骨と脛骨および推定身長値について検討をおこなっておきたい。

### 1. 大腿骨

表4は男性大腿骨の比較表である。SK-42の中央周は88mmで、島根県埋文センターが調査をおこなった地区的SK-03の87mmと大差ない計測値である。中世人大腿骨の骨体中央周の平均値的な大きさは、愛媛県七反地の84.00mm(2例)、神奈川県鎌倉市山比ヶ浜南の84.90mm(81例)、材木座の84.50mm(64例)のように、だいたい84mm前後である。SK-42の中央周は島根県埋文センター調査区出土のSK-03、小倉城代米御蔵跡K-3、広島県の月見城、古母浜の平均値に近く、骨体がやや大きい大腿骨である。骨体中央断面示数は89.66となり、この示数値は表4では小倉城代米御蔵K-3に次いで小さく、骨体両側面の後方への発達はまったくみられない。上骨体断面示数は89.66となり、この値は表4では最大値を示し、骨体上部には扁平性は認められない。

表4-1 大腿骨計測値比較表(男性、右、mm)

(Table 4-1. Comparison of measurements and indices of male right femora)

	沖手		沖手(1)		小倉城代米御蔵跡			
	中世人	中世人	中世人	中世人	中世人	中世人	中世人	
	島根県	島根県	島根県	島根県	福岡県	北九州市	(松下)	
	益田市	益田市	益田市	益田市	北九州市	北九州市	(松下)	
	(松下・他)	(松下)	(松下)	(松下)	(松下)	(松下)	(松下)	
	SK-42	SK-03	SK-25	1号	2号	K-2	K-3	
6.	骨体中央矢状径	26	28	-	25	30	26	(左)
7.	骨体中央横径	29	28	-	22	28	27	(左)
8.	骨体中央闊	88	87	-	73	90	85	(左)
9.	骨体上横径	29	29 (左)	28 (左)	26	31	30	(左)
10.	骨体上矢状径	26	22 (左)	19 (左)	22	25	23	(左)
6/7	骨体中央断面示数	89.66	100.00	-	113.67	107.14	96.30	86.67 (左)
10/9	上骨体断面示数	89.66	75.86 (左)	67.86 (左)	84.62	80.65	76.67	83.87 (左)
小倉城二の丸	萩城跡	吉丹浜	中ノ浜	土井ヶ浜	見島	高野		
中世人	中世人	中世人	中世人	中世人	中世人	中世人		
福岡県	山口県	山口県	山口県	山口県	山口県	山口県		
北九州市	萩市	下関市	豊前町	豊前町	萩市	豊前町		
(松下)	(松下)	(中筋・他)	(松下)	(松下)	(松下)	(松下)	(松下)	
1号	2号	ST-118	n M	ST-01	1402	No.1	1BST080	
30	28	29 (左)	19 27.7	28 (左)	24	28.0	25	
26	26	31 (左)	19 27.5	29 (左)	26	31.0	28	
89	85	95 (左)	19 87.5	89 (左)	79	95.0	84	
32	30	35 (左)	19 32.1	-	33	35.0	32	
26	24	27 (左)	19 24.6	-	23	26.0	22	
115.38	107.69	93.55 (左)	19 100.6	96.55 (左)	92.31	90.32	89.29	
8125	80.00	77.14 (左)	19 76.5	-	69.70	74.29	68.75	

\*沖手(1): 島根県埋蔵文化財調査センター調査地区出土人骨

表4-2 大腿骨計測値比較表（男性、右、mm）

(Table4-2.Comparison of measurements and indices of male right femora)

	瑞瑞光寺		原		寄食		月見城		駿平	
	中世人		中世人		中世人		中世人		中世人	
	山口県	山口県	広島県	広島県	広島県	広島県	広島市	広島市	東広島市	東広島市
	(松下・他)		(松下)		(池田)		(松下)		(松下・他)	
n	M	ST1	n	M			SK3		1号人骨	
6.	骨体中央矢状径	6	29.50	34	1	29	29	(左)	31	
7.	骨体中央横径	6	27.00	27	1	28	27	(左)	28	
8.	骨体中央周	5	88.60	97	1	91	87	(左)	93	
9.	骨体上横径	5	31.80	-	1	36	33	-	-	
10.	骨体上矢状径	5	24.40	27	1	27	22	-	-	
6/7	骨体中央断面示数	5	109.88	125.93	1	103.6	107.41	(左)	110.71	
10/9	上脛体断面示数	5	77.16	-	1	75.0	66.67	-	-	

七反地	由比ヶ浜南		鎌倉材木座			
	中世人		中世人			
	愛媛県	播奈川郡	神奈川県	鎌倉市		
	(松下)	(松下)	(松下)	(香原)		
n	M	n	M	n	M	
2	27.00	81	27.32	65	27.27	
2	26.00	81	26.27	65	26.50	
2	84.00	81	84.90	61	81.50	
2	29.50	80	31.01	57	31.31	
2	22.50	80	23.95	57	24.20	
2	103.71	81	104.49	65	104.94	
2	76.27	79	77.68	57	77.86	

## 2. 脛骨

表5は男性脛骨の比較表である。SK - 42 の骨体周は73mmで、島根県坪文センター調査地区 SK - 03 の71mmに近く、表5では沖手SK - 3に次いで小さい。中央断面示数は84.62となり、表5では最大値を示し、骨体には扁平性はまったく認められない。

表5-2 大脛骨計測値比較表（男性、右、mm）

(Table5.Comparison of measurements and indices of male right tibiae)

	沖手		沖手(1)		小倉城代系御葬跡		小倉城二の丸		秋城跡	
	中世人		中世人		中世人		中世人		中世人	
	島根県	鳥取県	福岡県	福岡県	福岡県	福岡県	北九州市	北九州市	糸島市	糸島市
	(松下・他)		(松下)		(松下)		(松下)		(松下)	
	SK - 42		SK - 03		2号	Y - 1	1号	2号	ST - 118	
8.	中央最大径	26	24	(左)	30	29	31	(左)	28	(左)
9.	中央横径	22	19	(左)	20	21	21	(左)	19	(左)
10.	骨体周	73	71	(左)	80	77	83	(左)	75	(左)
10b.	最小周	-	-		74	70	76	(左)	71	(左)
9/8	中央断面示数	84.62	79.17	(左)	66.67	72.41	67.74	(左)	67.86	(左)

※沖手(1)：島根県埋蔵文化財調査センター調査地区出土人骨

下井ヶ浜		吉母浜	高野	道瑞光寺		原	寄倉		七反地		山比ヶ浜南	
中世人	中世人	中世人	中世人	中世人	中世人	中世人	中世人	中世人	中世人	中世人	中世人	
山口県	山口県	山口県	山口県	山口県	山口県	山口県	広島県	広島県	愛媛県	愛媛県	神奈川県	
豊北町	下関市	豊浦町	山口市	防府市	防府市	防府市	松山市	松山市	錦糸町	錦糸町	鎌倉市	
(松下)	(中橋・他)	《松下》	(松下・他)	(松下)	(松下)	(松下)	(池田)	(池田)	(松下)	(松下)	(松下)	
1402	N M	1BST080	N M	ST1	N M							
29	20	29.4	29	4	29.75	33	1	33	2	28.50	(左)	
19	20	21.5	19	4	21.00	22	1	22	1	19	(左)	
75	20	80.2	75	4	81.00	87	-	-	1	76	(左)	
68	20	74.2	-	2	73.00	(左)	76	-	1	69	68	
65.52	20	73.3	65.52	4	70.58	66.67	1	66.7	1	65.52	(左)	
										73	72.12	

### 3. 推定身長値

表6は、大腿骨最大長からPearson式を用いて算出した男性の推定身長値の比較表である。SK - 46は161.21cm、SK - 47は159.33cmで、2例の平均値は160.27cmとなる。前者は七反地に近く、後者は吉母浜、材木座、由比ヶ浜南の平均値に最も近い。また、2例の平均値は七反地に近い値である。本例も中世人の平均と推測される160cm前後の値であった。

表6 推定身長値（男性、右、cm）(Table6.Comparisonofestimatedmalestatures)

遺跡名・人骨番号	所在地	身長値	
		N	M
沖手中世人 SK - 46	(島根県・益田市)	151.21	
沖手中世人 SK - 47		159.33	
平均		2	160.27
原中世人	(山口県・防府市)	1	167.79
吉母浜中世人	(山口県・下関市)	18	159.7
下井ヶ浜中世人 (ST1402)	(山口県・下関市)	1	157.45
寺ヶ浜中世人 (ST0001)	(山口県・下関市)	1	169.67
寺ヶ浜中世人 (ST0002)	(山口県・下関市)	1	156.51
萩城跡中世人	(山口県・萩市)	1	158.91 (上腕骨からの推定値)
小倉城二の丸	(福岡県・北九州市)	1	161.58
小倉城代宗御城	(福岡県・北九州市)	1	156.69
尼塗中世人	(熊本県・城南町)	5	158.44
立石守財人	(人分郷・宇佐市)	1	158.01
七反地中世人	(愛媛県・松山市)	2	160.36
材木座中世人	(神奈川県・鎌倉市)		159.72
由比ヶ浜南	(神奈川県・鎌倉市)	41	159.64

表7 下顎骨 (mm、度) (Table7.Mandibula)

		冲手	14区	ビット上部	男性
65	下顎関節突起幅	-			
65(1)	下顎筋欠起幅	-			
66	下顎角幅	-			
67	前下顎幅	-			
68	下顎長	-			
68(1)	下顎長	-			
69	オトガイ高	30			
69(1)	下顎体高	(右) 28 (左) -			
69(2)	下顎体高	(右) 24 (左) -			
70	枝高	(右) - (左) -			
70(1)	前枝高	(右) - (左) -			
70(2)	最小枝高	(右) - (左) -			
70(3)	下顎切痕高	(右) - (左) -			
71(1)	下顎切痕幅	(右) - (左) -			
71	枝幅	(右) - (左) -			
71a	最小枝幅	(右) - (左) -			
79	下顎枝角	(右) - (左) -			
66/65	下顎側小数	-			
68/65	幅長示数	-			
68(1)/65	標長示数	(右) -			
69(2)/69	下顎高示数	(右) 80.00 (左) -			
71/70	下顎枝示数	(右) - (左) -			
71a/70(2)	下顎枝示数	(右) - (左) -			
70(3)/71(1)	下顎切痕示数	(右) - (左) -			

表8 腿骨 (mm) (Table8.Femur)

	冲手	3区	SK - 42	男性	右
1.	最大長	-			
2.	自然位全長	-			
3.	最大転子長	-			
4.	自然位転子長	-			
6.	骨体中央矢状溝	26			
7.	骨体中央横径	29			
8.	骨体中央周	88			
9.	骨体上横徑	29			
10.	骨体上矢状溝	26			
15.	頭部直徑	-			
16.	頭矢状溝	-			
17.	頭周	-			
18.	頭垂直徑	-			
19.	頭橫徑	-			
20.	頭周	-			
21.	上顎幅	-			
8/2	長厚示数	-			
6/7	骨体中央断面示数	89.66			
10/9	上骨体断面示数	89.66			

表9 胫骨 (mm) (Table9.Tibia)

	冲手	3区	SK - 42	男性	右
1.	胫骨全長	-			
1a.	胫骨最大長	-			
1b.	胫骨長	-			
2.	髕距間距離	-			
3.	最大上端幅	-			
3a.	上内關節面幅	-			
3b.	上外關節面幅	-			
4a.	上内關節面深	-			
4b.	上外關節面深	-			
6.	最大下端幅	-			
7.	下端矢狀溝	-			
8.	中央最大径	26			
8a.	榮養孔位最大径	-			
9.	中央横徑	22			
9a.	榮養孔位橫徑	-			
10.	骨体周	73			
10a.	榮養孔位周	-			
10b.	最小周	-			
9/8	中央断面示数	84.62			
9a/8a	榮養孔位断面示数	-			
10b/1	長厚示数	-			

表10 推定身長値(cm) (Table10. Estimated Stature)

		沖手 3区	沖手 3区
		SK - 46	SK - 47
		男性	男性
Pearsonの式	上腕骨 (右)	-	161.80 ~ 163.25
	(左)	-	-
	桡骨 (右)	-	-
	(左)	-	-
	大腿骨 (右)	-	-
	(左)	161.21	159.33
	胫骨 (右)	-	-
	(左)	-	-
藤井の式	上腕骨 (右)	-	161.13 ~ 162.32
	(左)	-	-
	桡骨 (右)	-	-
	(左)	-	-
	大腿骨 (右)	-	-
	(左)	159.81	157.31
	胫骨 (右)	-	-
	(左)	-	-

#### 4. 要 約

島根県益田市久城町にある沖手遺跡の発掘調査が益田道路建設に伴って、2005年度（平成17年度）におこなわれ、中世人骨が多数出土した。沖手遺跡からは島根県埋蔵文化財センターが調査した地区からも中・近世人骨が出土している。人骨の保存状態は必ずしも良好なものではなかつたが、人類学的観察や計測をおこなうことができた。その結果は次のように要約することができる。

1. 埋葬遺構から出土した人骨は24体である。そのうち成人骨は20体が成人骨で、4体が幼児骨である。成人骨のうち男性は6体、女性は3体で、残りの12体は性別を推測することができなかつた。24体のほかに2体の人骨が検出されているが、そのうちの1体は火葬骨で、もう1体は幼児の歯である。従つて今回出土した人骨の体数は26体である。
2. 埋葬遺構は土壙墓が13基、桶棺墓が3基、箱棺墓が7基、火葬墓が1基である。
3. この26体の人骨は、考古学的所見から、中世に属する人骨と推測されている。
4. 埋葬姿勢は、土壙墓と箱棺墓では仰臥と側臥で、膝関節を屈曲していた。桶棺墓では坐位であった。
5. 頭蓋は保存状態が悪く、計測できるものはなかつたが、観察によって頭型を推測することができるものが2例存在した。1例は長頭型（5区SK-07、性別不明）で、もう1例（3区SK-43、男性）は中頭型もしくは長頭型であった。
6. 顔面頭蓋は計測できなかつたが、1例のみ観察所見が得られた。この1例（3区SK-43、男性）は、顔面の高径が低く、鼻根部は扁平であったが、歯槽性突顎の有無は不明である。
7. 男性の大腿骨と脛骨について計測と観察ができた。大腿骨の骨体中央周は88mm（右）（1例）で、骨体は太いが、骨体中央断面示数は89.66（右）（1例）となり、骨体両側面の後方への発達は認められない。上骨体断面示数は89.66（右）（1例）となり、骨体上部には扁平性は認められない。脛骨は、ヒラメ筋線の発達がきわめて良好で、骨体周は73mm（右）で、骨体は細く、中央断面示数は84.62（右）となり、骨体には扁平性は認められない。
8. 男性2例の推定身長値を算出することができた。1例は161.21cm（Pearson式）（SK-46）で、もう1例は159.33cm（Pearson式）（SK-47）で、平均値は160.27cmとなるが、2例とも中世人としては高い方である。
9. 本遺跡では土壙、箱棺、桶棺が存在し、埋葬遺構に多様性が認められたことは注目される。土壙と箱棺では埋葬姿勢は仰臥のほかに側臥もみられ、膝関節は屈曲状態であった。桶棺では坐位の姿勢で埋葬されていた。保存状態は悪かったが、観察によれば、被葬者の頭型は長頭型に傾いており、低頚で、鼻根部は扁平であったが、歯槽性突顎の有無は確認できなかつた。本例にも中世人的特徴のうち、長頭性と鼻根部の扁平性を認ることができた。男性の大腿骨と脛骨は、島根県埋蔵文化財センター調査地区出土人骨の場合と同じように、大腿骨は太く、脛骨は細い方であった。

## 謝辞

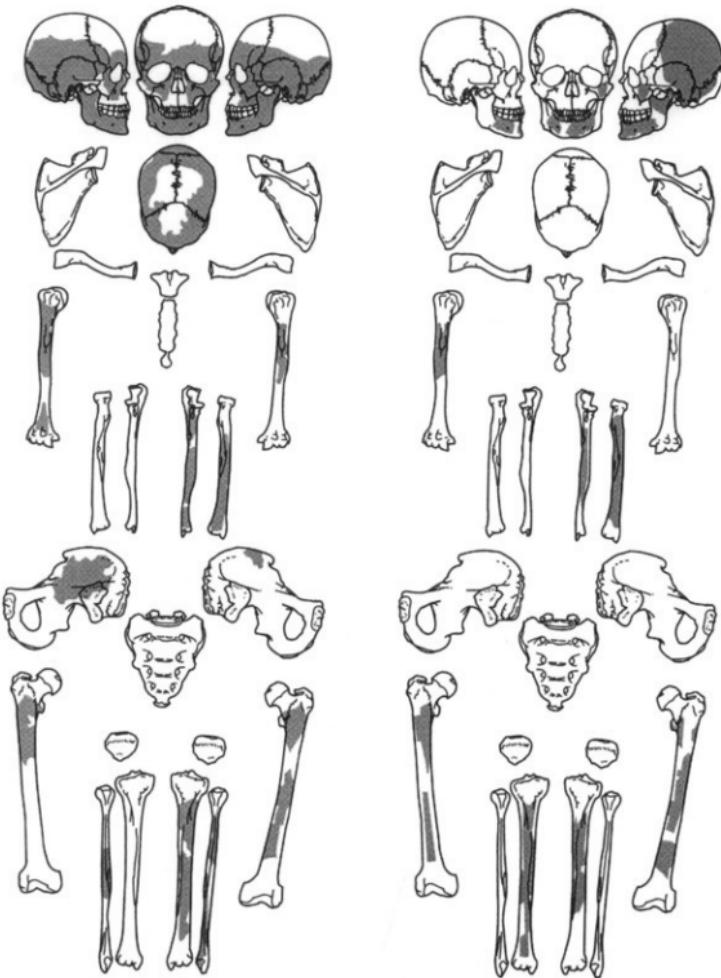
く擲筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた島根県益田市教育委員会の皆様に感謝致します。>

## 参考文献

(山口県の中世人骨)

1. 松下孝幸・他、1983a：山口県豊浦郡豊北町土井ヶ浜遺跡出土の人骨。土井ヶ浜遺跡第7次調査報告概報（豊北町埋蔵文化財調査報告2）：19 - 30。
2. 松下孝幸・他、1983b：山口県防府市玉祖遺跡出土の平安・中世人骨。玉祖遺跡・西小路遺跡（山口県埋蔵文化財調査報告第70集）：147 - 148。
3. 松下孝幸・他、1986：山口県豊浦町汐汲遺跡出土の古墳時代・中世人骨。汐汲遺跡（豊浦町埋蔵文化財調査報告第7集）：75 - 102。
4. 松下孝幸・他、1988a：宇部市末信遺跡出土の中世人骨。末信遺跡（宇部市文化財資料第10集）：20 - 25。
5. 松下孝幸・他、1988b：山口市瑞穂光寺遺跡出土の中世人骨。瑞穂光寺跡遺跡－中世墳墓の調査。（山口市埋蔵文化財調査報告第28集）：397 - 436。
6. 松下孝幸・他、1988c：東隆寺経塚出土の人骨。東隆寺一宇一石経塚（伝南嶺和尚墓）（宇部市文化財資料第9集）：33 - 36。
7. 松下孝幸・他、1992：山口県下関市市場遺跡第II地区出土の中世人骨。市場遺跡II・宮添遺跡（山口県埋蔵文化財調査報告第149集）：23 - 25。
8. 松下孝幸、1996：土井ヶ浜遺跡第14次発掘調査出土の中世・弥生時代人骨。土井ヶ浜遺跡第14次発掘調査報告書（山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第12集）：24 - 50。
9. 松下孝幸、1997：山口県美東町植島遺跡出土の中世人骨。植島遺跡（山口県埋蔵文化財調査報告第183集）：38 - 40。
10. 松下孝幸、1998：土井ヶ浜遺跡第16次発掘調査出土の弥生時代・中世人骨。土井ヶ浜遺跡第16次発掘調査報告書（山口県農北町埋蔵文化財調査報告書第14集）：付1 - 39。
11. 松下孝幸、1999a：山口県豊浦町高野遺跡出土の中世人骨。高野遺跡（南地区）（平成7・8・9年度県営は場整備事業にともなう発掘調査報告書）（豊浦町の文化財第15集）：226 - 233。
12. 松下孝幸、1999b：山口県豊浦町吉永遺跡出土の中世人骨。吉永遺跡（Ⅲ-西地区）（平成10年度県営は場整備事業に伴う発掘調査報告書）（豊浦町の文化財第16集）：21 - 25。
13. 松下孝幸、1999c：山口県豊浦町吉永遺跡出土の中世火葬人骨。吉永遺跡（Ⅲ-東地区）（平成10年度県営は場整備事業に伴う発掘調査報告書）：51 - 54。
14. 松下孝幸、2000a：山口県豊浦町川棚条里跡出土の中世人骨。川棚条里跡1（大浦・台地区）（平成11年度経営は場整備事業に伴う発掘調査概報）（豊浦町の文化財第17集）：64 - 68。
15. 松下孝幸、2001a：山口県防府市原遺跡出土の中世人骨。原遺跡（山口県埋蔵文化財調査センター調査報告第23集）：41 - 56。
16. 松下孝幸、2001c：山口県三隅町湯免遺跡出土の中世人歯冠。湯免遺跡（三隅町埋蔵文化財調査報告第1集）：付篇
17. 松下孝幸・他、2003b：山口県農北町中平尾遺跡出土の中世人骨。中平尾遺跡・上今宮遺跡（山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第23集）：160 - 163。
18. 松下孝幸、2003c：山口県豊北町神田口遺跡出土の中世人骨。土井遺跡群二刀遺跡・丸山遺跡・神田口遺跡（山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第24集）：85 - 87。
19. 松下孝幸、2004a：山口県豊北町東正寺遺跡出土の中世人骨。東正寺遺跡・谷ノ迫遺跡（山口県農北町埋蔵文化財

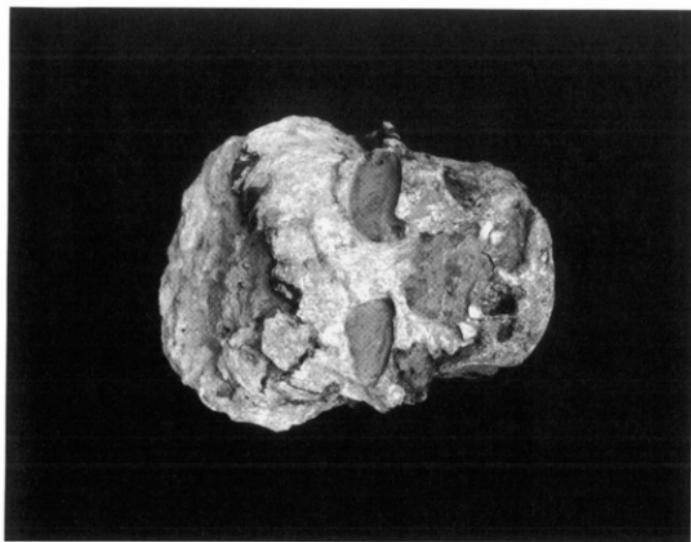
- 調査報告書第 25 集) : 29 - 31.
20. 牛島陽一・他、1960: 山口県阿武郡見島村出土の中世時代の人骨について。人類学研究、7 (3 ~ 4) : 52 - 56.
21. 中橋孝博・他、1985: 人骨 (山口県下関市吉母浜遺跡出土人骨)。吉母浜遺跡: 154 - 225.  
(島根県の中世人骨)
22. 松下孝幸、2000b: 島根県津和野町喜時雨遺跡出土の中世人骨。喜時雨遺跡 (津和野町埋蔵文化財報告書) : 46 - 47.
23. 松下孝幸、2006: 益田市沖手遺跡出土の中世人骨。沖手遺跡 - 1 区の調査 - (一般国道 9 号号線 (益川道路) 建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 3) : 117 - 122.  
(広島県の中世人骨)
24. 池田次郎、1980: 帝积寄倉岩陰遺跡出土の中世人骨について。広島大学文学部帝积峡遺跡群発掘調査室年報Ⅲ : 99 - 105.
25. 松下孝幸・他、1985: 東広島市大槻 3 号遺跡出土の古墳時代・中世人骨。大槻遺跡群 (広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第 38 集) : 117 - 122.
26. 松下孝幸、1987: 広島県月見城出土の中世人骨。月見城遺跡 (広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第 54 集) : 97 - 106.
27. 松下孝幸、1997: 広島県豊平町地徳古墓出土の中世人骨。国営広島北部土地改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 (広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第 152 集) : 51 - 59.  
(その他の中世人骨など)
28. 香原志勢、1956: 四肢骨特に大腿骨の形質。鎌倉材木座発見の中世遺跡とその人骨、岩波書店 : 149 - 154.
29. Martin - Saller, 1957: Lehrbuch der Anthropologie Bd. I. Gustav Fischer Verlag, Stuttgart : 429 - 597.
30. 松下孝幸、2000: 愛媛県松山市七反地遺跡出土の中世人骨。道ヶ谷古墳・池の奥遺跡・平田七反地遺跡 (- 一般国道 196 号松山北条バイパス埋蔵文化財調査報告書 II) (埋蔵文化財発掘調査報告書第 86 集) : 391 - 422.
31. 松下孝幸、2001: 小倉城御普請所跡出土の中世人骨。小倉城御普請所跡 - 街路事業城内大手町線道路改築工事に伴う埋蔵文化財調査報告書 - (北九州市埋蔵文化財調査報告書第 258 集) : 139 - 143.
32. 松下孝幸、2002a: 神奈川県鎌倉市由比ヶ南遺跡出土の中世人骨。神奈川県・鎌倉市由比ヶ南遺跡 (第 3 分冊・分析編 II) : 1 - 99.
33. 松下孝幸、2002b: 鎌倉市由比ヶ南遺跡集骨墓出土人骨の埋葬と個体数および受傷人骨。神奈川県・鎌倉市由比ヶ南遺跡 (第 3 分冊・分析編 II) : 101 - 134.
34. 松下孝幸、2003: 北九州市小倉城代米御蔵跡出土の中世人骨。小倉城代米御蔵跡 III (北九州市埋蔵文化財調査報告書第 293 集) : 109 - 136.
35. 松下孝幸、2004b: 「自然人類学」『環境考古学ハンドブック』: 444 - 454. 朝倉書店
36. 鈴木尚・他、1956: 頭骨の形質。鎌倉材木座発見の中世遺跡とその人骨 : 75 - 148. 岩波書店、東京。
37. 鈴木尚、1963: 日本人の骨。岩波書店、東京。



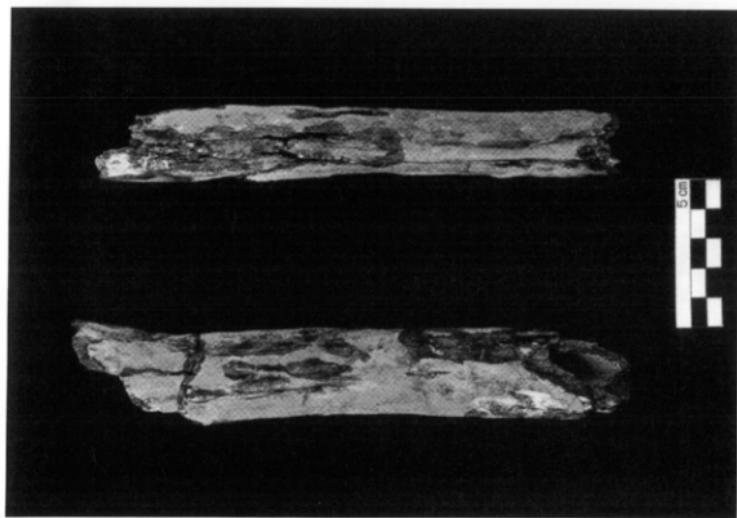
沖手遺跡・SK-43（男性・年齢不明）

沖手遺跡・SK-43（男性・年齢不明）

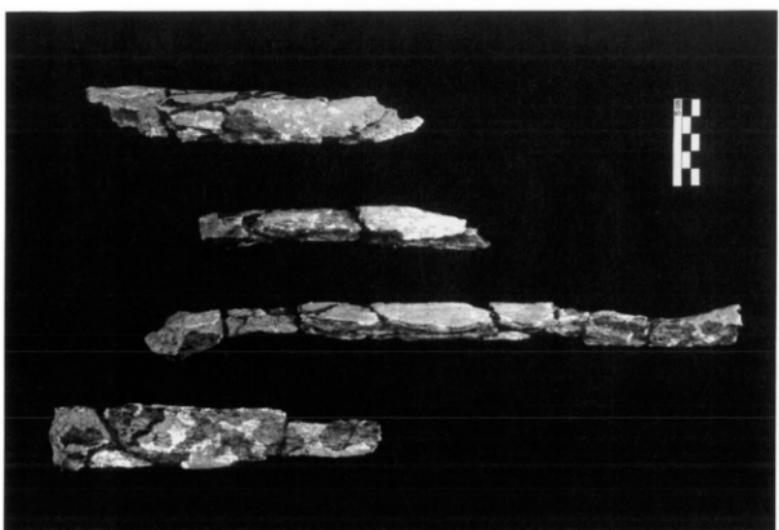
図2 人骨の残存図（アミかけ部分）  
 (Fig. 2 Regions of preservation of the skeleton. Shaded areas are preserved.)



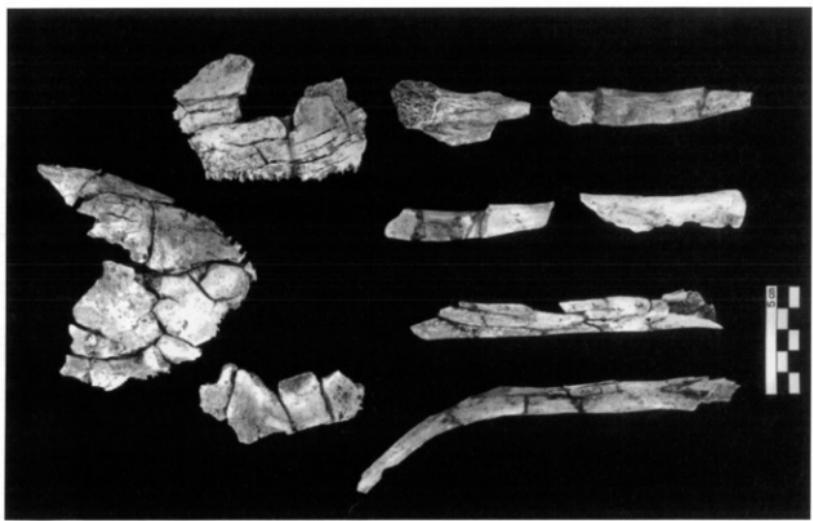
頭蓋正面 (Frontal view of the skull)  
沖手3区SK-43人骨 (男性)  
(The Okite 3-SK-43, male)



四肢骨 (The limb bones)  
沖手3区SK-42人骨 (男性、老年)  
(The Okite 3-SK-42, mature male)



四肢骨 (The limb bones)  
冲手3区SK-46人骨 (男性)  
(The Okite 3-SK-46, male)



火葬骨  
冲手5区SK-01人骨 (性别不明、壮年)  
(The Okite 5-SK-01, unknown sex, young adult)

## 第3節 沖手遺跡の理化学的分析

文化財調査コンサルタント株式会社

### 1. はじめに

当委託業務は、沖手遺跡発掘調査に伴って検出された木片及び貝を対象に年代測定を行い、各堆積層年代を解明する目的で委託された業務の調査報告書である。

#### 1-1 調査位置（発掘地点）

益田市久城町地内（沖手遺跡）



図1-1 発掘地点位置図

## 1 - 2 分析試料の数量

益田市教育委員会文化振興課より提供を受けた試料を対象に年代測定および種実同定を実施した。分析試料数を表1-1に示す。

表1-1 分析試料数量表

	AMS 年代測定	種実同定
実施数	6	1
計画数	6	1

## 2. 分析試料について

平面図、ボーリング柱状図は益田市教育委員会より提供を受けた原図をもとに作成した。又、分析試料は、益田市教育委員会より提供を受けたものである。

### 2-1 調査位置（発掘地点）

図2-1に、MKI-1～4、種実同定試料を採取した地点を示す。

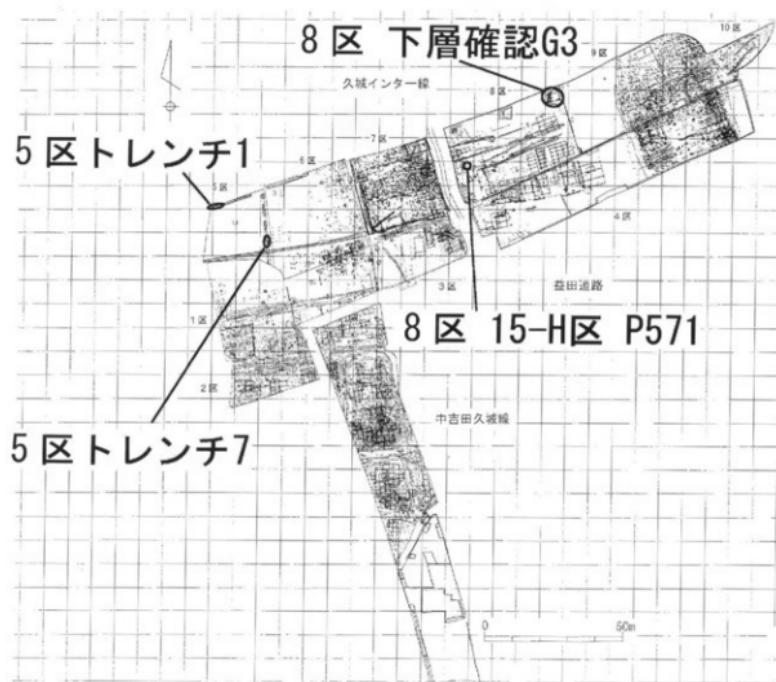


図2-1 試料採取地点（調査区の配置）

## 2-2 試料採取地点（ボーリング試料）

### (1) ボーリング地点

図2-2に、MKI-5, 6を採取したボーリング（BP No 1）地点を示す。

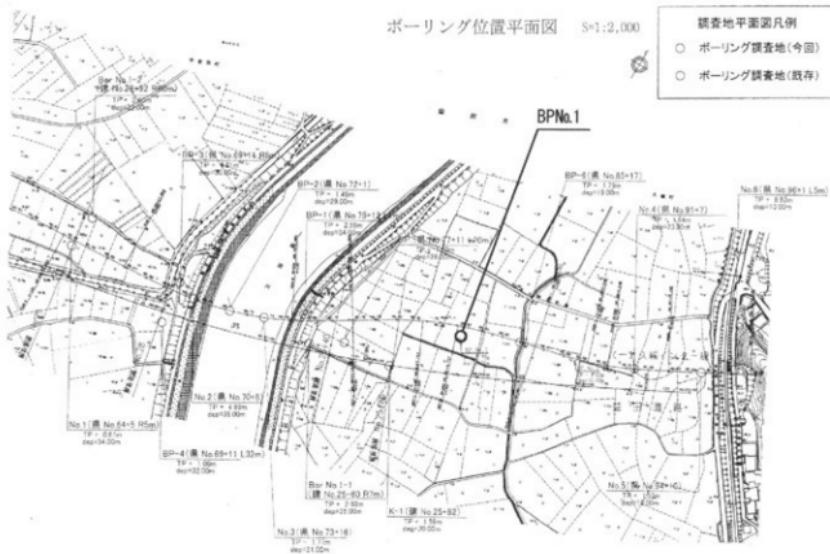


図2-2 ボーリング地点（BP No. 1）

(2) ポーリング柱状図

図2-3のポーリング柱状図中に、MK11-5、6を採取した層準を示す。

ポーリング柱状図

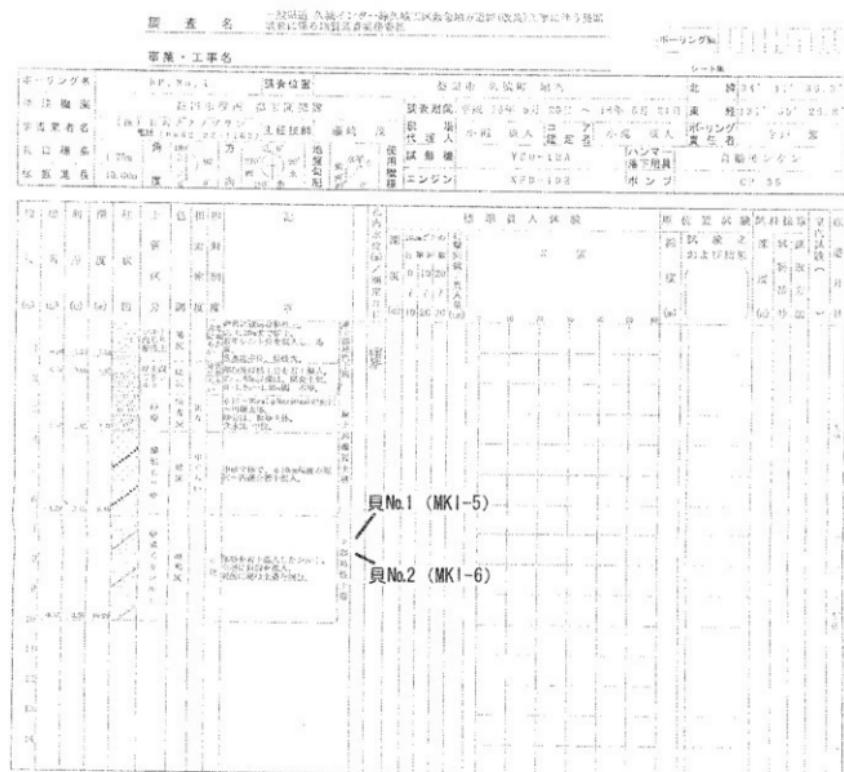


図2-3 ポーリング柱状図（試料採取層準）

## 2 - 3 年代測定試料



### 試料の概要

試料名：MKI - 1

記載：8 区 下層確認 G3 木サンプル①

重量：13.447g

試料の種類：木片

図 2 - 4 年代測定試料 (MKI - 1)



### 試料の概要

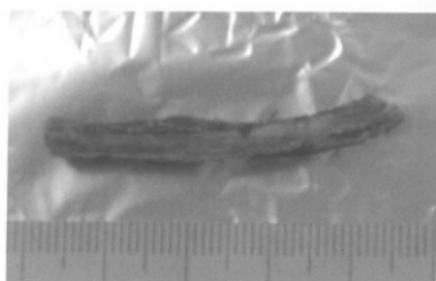
試料名：MKI - 2

記載：8 区 下層確認 G3 木サンプル⑧

重量：14.603g

試料の種類：木片

図 2 - 5 年代測定試料 (MKI - 2)



### 試料の概要

試料名：MKI - 3

記載：7 区 トレンチ 1 サンプル 1

重量：0.268g

試料の種類：木片

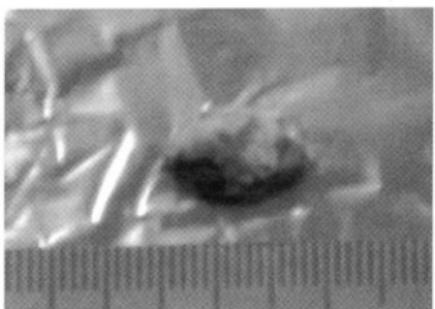
図 2 - 6 年代測定試料 (MKI - 3)



#### 試料の概要

試料名：MKI - 4  
記載：5 区 トレンチ 7 サンプル 2  
重量：3.733g  
試料の種類：木片

図 2-7 年代測定試料 (MKI - 4)



#### 試料の概要

試料名：MKI - 5  
記載：BP № 1 コア 貝№ 1 (- 7.25m)  
重量：0.505g  
試料の種類：貝

図 2-8 年代測定試料 (MKI - 5)



#### 試料の概要

試料名：MKI - 6  
記載：BP № 1 コア 貝№ 2 (- 7.72m)  
重量：1.874g  
試料の種類：貝

図 2-9 年代測定試料 (MKI - 6)

### 3. 分析方法

#### 3-1 AMS 年代測定方法

##### (1) 原理

大気圏上層で熱中性子化した宇宙線が、窒素原子と原子核反応 ( $^{14}\text{N} + \text{n} \rightarrow ^{14}\text{C} + \text{H}$ ) を起こして放射性炭素 ( $^{14}\text{C}$ ) が生成される。この放射性炭素 ( $^{14}\text{C}$ ) は、 $\text{CO}_2$  として炭素リザーバー（大気 1.6%、腐食 2.6%、生物圈 0.8%、浅海 2.0%、深海 93%）に貯蔵され、一方では 5568 (5730) 年の半減期で  $\beta^-$  壊変をおこす。光合成等の生命活動を通じて生物体に固定される。

$^{14}\text{C}$  の初期量は、それぞれの生命活動の行われたりザーバーにおける  $^{14}\text{C}$  の平衡状態における量と同じと考えられ、生物体の死滅とともに、閉じた系の中で減衰していくと考えられる。つまり、生物遺体中の  $^{14}\text{C}$  濃度を測定し、現在の  $^{14}\text{C}$  濃度と比べることにより、その生物が死んでから現在（ただし、1950 年を現在とみなす）までの経過年数がわかる。

##### (2) 前処理及び測定方法

###### 1) 前処理

塩酸による酸洗浄（試料により、水酸化ナトリウムによるアルカリ処理）。

###### 2) 試料の調整

酸化銅とともに加熱し、二酸化炭素を生成。

精製ラインにおいて水、二酸化硫黄等の不純物を除去。

精製した二酸化炭素を水素と鉄とともに加熱し、グラファイトに調整。

アルミ製ターゲットホルダーにプレス圧入。

###### 3) 測定

AMS（加速器質量分析）法による。

タンデム型イオン加速器を用い  $^{14}\text{C}$  濃度を測定する。

###### 4) 年代計算

年代計算を行う際には、 $^{14}\text{C}$  の半減期を 5568 年として行う。

###### 5) 補正計算

$\delta^{13}\text{C}$  を測定・算出し、4) で得られた年代値を補正する。

###### 6) 曆年代較正

OxCal ver. 3.1 を用い、INTCAL04 データを利用して算出する。

#### 3-2 種実分析方法

##### (1) 処理方法

湿润重量で 0.5 ~ 1kg 程度の資料を 0.25mm 目の篩で水洗し細粒物を除去する。

肉眼あるいは実体顕微鏡を用い、残渣（0.25mm 以上の粒径もの）より同定可能な植物遺体を選別する。今回の業務では、選別し終わった乾燥状態の種子 1 粒の提供を受けた。

##### (2) 同定・計数

肉眼及び実体顕微鏡にて、現生標本および図鑑類との対比により同定し同時に計数を行う。

試料ごとに、分類群別、部位別に計数し、同定・計数結果を表形式にまとめる。

### (3) 標本作製

同定後の試料を、調査地点毎に分類群別にガラス瓶に入れ、60%エタノールにて液侵標本とする。

## 4. 分析結果

### 4-1 AMS 年代測定結果

AMS 年代測定結果を表 4-1 に示す。また、巻末資料に曆年較正結果を示す。表 4-1 には、4 種類の年代と、 $\delta^{13}\text{C}$  値を示している。

測定年代は、従来は実年代として用いられてきた値である。 $^{14}\text{C}$  濃度が環境、時代に関わらず常に一定であるという仮定の下に、リビーの半減期（5568 年）を用いて計算した値である。

補正  $\delta^{14}\text{C}$  年代は、 $^{14}\text{C}$  濃度が環境により変動することから、 $\delta^{13}\text{C}$  を測定し、 $\delta^{13}\text{C} = -25\text{‰}$  に規格化した $^{14}\text{C}$  濃度を求め、年代値を算出したもの（曆年較正用年代）を 5 年単位で丸めた値である。

上記の年代は、いずれも西暦 1950 年からさかのぼった年代値で示してある。

一方曆年代は、時代（時間）とともにランダムに変化している大気中二酸化炭素の $^{14}\text{C}$  濃度を、樹木の年輪や海底堆積物のしま状粘土、サンゴの年輪から明らかにして得られた曆年較正修正データ（MKI-1～4 は INTCAL04、海洋性試料の MKI-5、6 は Marine04）を用いて、較正したものである。較正には OxCal ver. 3.1 を用いている。

また、較正に必要な補正年代値として補正  $\delta^{14}\text{C}$  年代ではなく、曆年較正用年代を用いている。

表 4-1 AMS 年代測定結果

試料No 記載	測定年代 (yrBP)	$\delta^{14}\text{C}$ (‰)	補正 $^{14}\text{C}$ (yrBP)	曆年較正用年代 (yrBP)	曆年代 <sup>a</sup> (cal yr.)	測定番号 (PLD-)
MKI-1 8区 下層地盤 Gサンプル①	6250 ± 30	-30.47 ± 0.12	6160 ± 30	6160 ± 28	5220BC(95.4%) 5020BC	7083
MKI-2 6区 下層地盤 G サンプル⑥	3655 ± 25	-28.12 ± 0.13	3605 ± 25	3603 ± 25	2030BC(95.4%) 1890BC	7084
MKI-3 7区 レンガ:サンプル①	2585 ± 25	-30.76 ± 0.13	2490 ± 25	2490 ± 23	770BC(95.4%) 520BC	7085
MKI-4 3区 レンガ:サンプル②	1790 ± 25	-33.98 ± 0.13	1640 ± 25	1642 ± 23	330AD(85.9%)450AD 480AD(9.5%)540AD	7086
MKI-5 BPM1コア Hn6 (- 7.25m)	6730 ± 30	-0.16 ± 0.17	7135 ± 30	7135 ± 30	Marine04:5730BC(95.4%)5390BC	7087
MKI-6 BPM1コア Hn2 (- 7.72m)	6690 ± 30	-0.42 ± 0.14	7090 ± 30	7088 ± 29	Marine04:5690BC(95.4%)5540BC	7088

\*1 : 2 sigma, 95% probability

## 4-2 種実同定結果

提供を受けた試料は、ウリ科カラスウリ属（キカラスウリ or モミジカラスウリ）と同定できた。ただし、種オーダーで特定することは出来なかった。特徴は以下の通りである。また、図4-1に、試料の写真を示す。また、図4-2に牧野（1989）の該当部分を示す。

記載：狭楕円形で扁平。背腹両面の縁に浅い帯状の溝が一周する。内側は溝より高く、テープル状。種子は平滑。



図4-1 カラスウリ属：種子（スケールバーは5mm）



### 1881. キカラスウリ

*Trichosanthes kirilowii* Maxim. var. *japonica*  
(Miq.) Kitamura (*T. japonica* Regel)

〔うり科〕

種としては東アジアの暖、温帯に分布し、北海道奥尻島、本州～九州奄美大島の山野にはえるものは変種として分ける。多年生のつる植物で纏葉異株。地下には肥厚した長い根がある。茎は細く長いつるとなり、巻ひげがある。葉は互生し、柄があり、葉身は広心臓形で3～7浅裂、下部のものはしばしば深裂、上面に短毛があるくらいですべすべしており、カラスウリよりも黄味の強い緑である。8～9月ころ白花が開き、がく筒の長さ約3cm、花冠裂片のへりは糸状に細裂するがカラスウリより短かい。雄花はふつう腋生の長さ10～20cmの總状花序につき、葉状の緑色の包葉があるが、雌花は葉腋に単強につく。果実は広楕円体で長さ約4cmにもなり、熟れると果柄は短く約2～3cmである。塊根から纏粉をとり天瓜粉を作り、またその根の皮層をはいだものを瓜呂根といって薬用にする。〔日本名〕黄カラスウリの意味で果実の黄色を指す。括縦は中国、朝鮮半島、インドシナに分布する基本変種にあてる漢名である。

### 1882. モミジカラスウリ

*Trichosanthes multiloba* Miq.

〔うり科〕

九州から紀伊半島にかけて分布し、山地にはえる。多年生のつる植物で、根は肥大し、ねじれるが、ふつうは分枝しない。茎には葉とともに幼時に褐色の軟毛がある。葉は広卵形または五角状卵形で、基部は深い心形となり、両面には短い毛を散生し、点状の突起があり、5～9の裂片に中裂または深裂する。裂片は倒披針形、先は鋭尖形または鋭形で、ふちにはまばらにきょ歛がある。巻ひげは2分枝する。花は6～8月に咲く。雄花序は長さ10～25cmになり、広卵形または倒卵形で、長さ10～15mmほどの苞がある。がく筒は長さ2～2.5cm、がく裂片は狭三角形で、長さ5～6mmになる。花冠は白色で、裂片は広線形または楕円形で、上方は細裂する。雌しべは花冠筒部よりも短い。果実は卵円形で、長さ10cmに達し、長さ7～25cmの柄がある。種子は広楕円形で、長さ10～11mmあり、黒褐色である。〔日本名〕紅葉カラスウリで、掌状に5～9裂する葉が、モミジを連想させることにより名付けられた。



図4-2 カラスウリ属の諸種（牧野、1987）

## 5. 測定年代について

MKI - 5、6は、ボーリングから得られた試料であり、 $\delta^{13}\text{C}$ の値が低いことから海洋性の貝であることが推定される。得られた補正年代、較正年代は上下逆転するが、誤差の範囲ではほぼ重なる。GL - 7 ~ 8mが、およそ 7100yrBP 頃に堆積したものと推定される。

MKI - 1 ~ 4は、採取地点が異なるものの「黒褐色粘質土」から採取されたものである。MKI - 5、6を採取したボーリング柱状図では、GL - 1.55 ~ 1.85mが腐植土状とされており、「黒褐色粘質土」に対応する可能性がある。4試料ともに同じ層内から採取されたもので、同様の測定年代が予想されたが、得られた年代値は  $6160 \pm 30\text{yrBP}$  から  $1640 \pm 25\text{yrBP}$  までと、幅広いものであった。上記の地層対比が正しいとすれば、 $6160 \pm 30\text{yrBP}$  という年代は、やや古い値である。古い値については、試料が2次堆積したものである可能性が指摘できる。最も新しい年代である  $1640 \pm 25\text{yrBP}$ （古墳時代中期）が、妥当な年代である可能性が高い。

## 6. まとめ

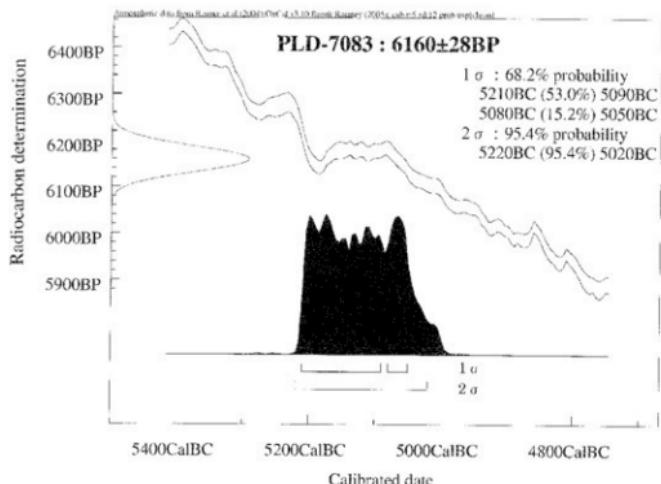
年代測定により、ボーリングで得られた「砂混じりシルト層」上部が、7100yrBP 頃に堆積したことが明らかになった。「黒褐色粘質土」からは幅広い年代が得られたが、 $1640 \pm 25\text{yrBP}$ （古墳時代中期）が、妥当な年代であると考えられる。

出土種子については、ウリ科カラスウリ属（キカラスウリ or モミジカラスウリ）と同定できた。

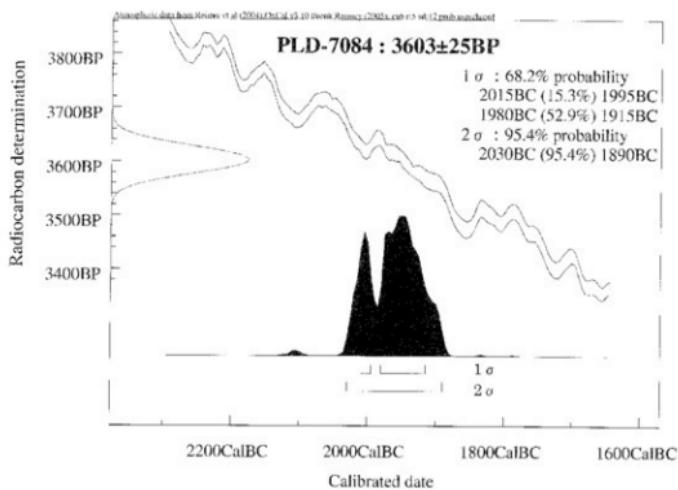
## 引用文献

牧野富太郎（1989）キカラスウリ、モミジカラスウリ、改訂増補牧野新日本植物図鑑 471.

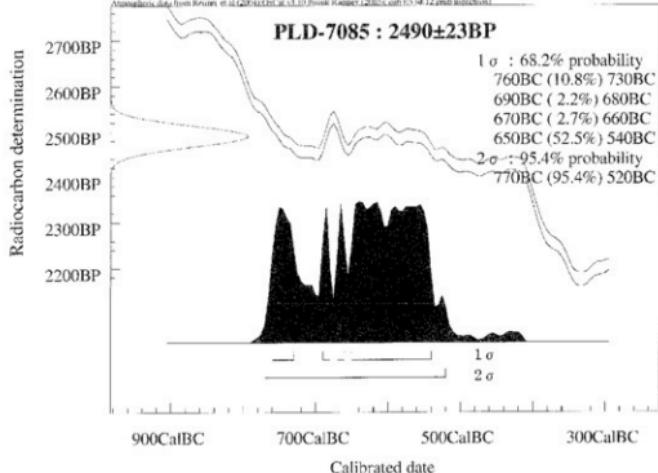
## 曆年較正結果



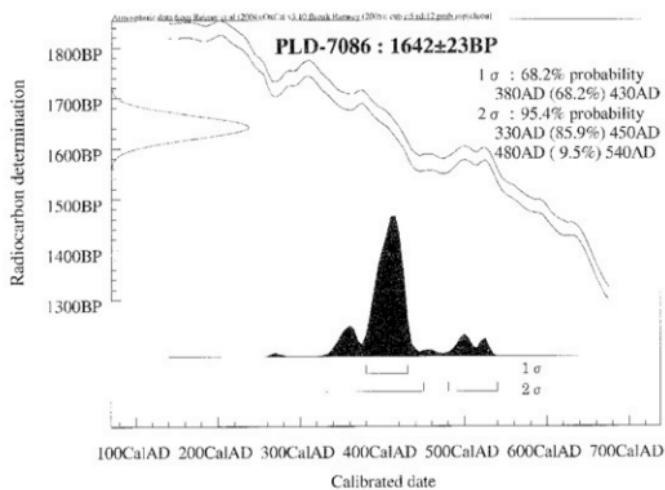
曆年較正結果：MKI – 1



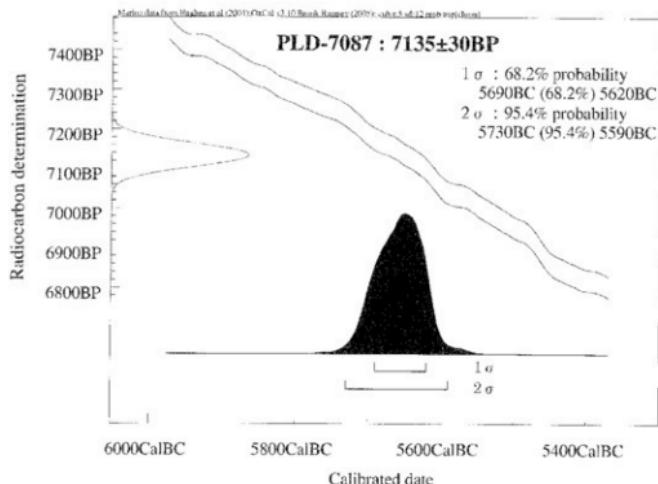
曆年較正結果：MKI – 2



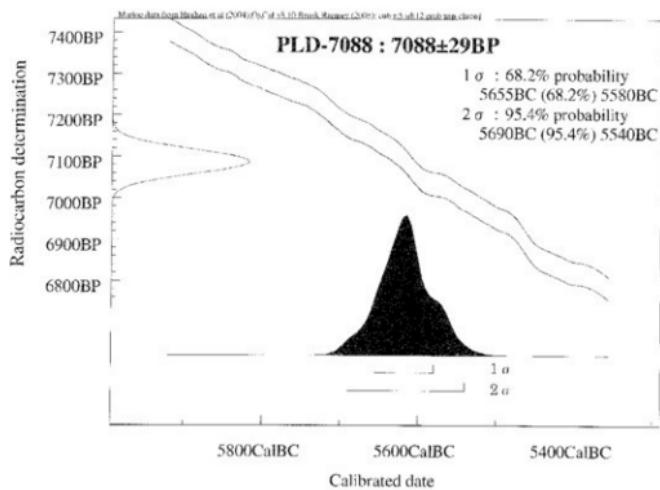
曆年較正結果：MKI – 3



曆年較正結果：MKI – 4



曆年較正結果：MKI - 5



曆年較正結果：MKI - 6

## 第4節 久城東遺跡の自然科学分析

渡辺正巳・古野 育（文化財調査コンサルタント株式会社）

### 1.はじめに

久城東遺跡は、島根県西部の益田市久城町久城東に位置する。本報告では、発掘調査に伴って検出された遺構の年代及び用材確認のために、AMS年代測定及び樹種同定を実施した。

### 2. 分析試料について

図1に示した各遺構で、益田市教育委員会文化振興課により採取・保管されていた試料（表1）の御提供いただいた。また、各遺構内の試料の位置を図2～4に示す。

### 3. AMS年代測定

#### (1) 測定方法

試料に酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去した後、石墨（グラファイト）に調整し、加速器質量分析計（AMS）を用いて測定を行った。

#### (2) 測定結果

測定結果として、表2に $\delta^{13}\text{C}$ 値、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正年代、曆年較正用年代、曆年較正年代を示した。 $\delta^{13}\text{C}$ 補正年代は、実年代として用いられてきた値にはほぼ等しい。測定した $\delta^{13}\text{C}$ から $\delta^{13}\text{C} = -25\%$ に規格化した $^{14}\text{C}$ 濃度を求め、リビーの半減期（5568年）を用いて年代値を算出したもの（曆年較正用年代）を5年単位で丸めた値である。また、西暦1950年からさかのぼった年代値で示してある。

一方曆年較正年代は、時代（時間）とともにランダムに変化している大気中二酸化炭素の $^{14}\text{C}$ 濃度を、樹木の年輪や海底堆積物のしま状粘土、サンゴの年輪から明らかにして得られた曆年較正データ（INTCAL04）を用いて、較正したものである。較正にはOxCal ver. 4.05を用いた。また、較正に必要な補正年代値として補正 $\delta^{14}\text{C}$ 年代ではなく、曆年較正年代を用いている。

### 4. 樹種同定

#### (1) 観察方法

樹種同定に当たり、切片作成が可能な試料については、渡辺（2000）に従って顕微鏡観察用永久プレパラートを作成した。作成した永久プレパラートには整理番号を付け、文化財調査コンサルタント㈱にて保管管理をしている。顕微鏡観察は、光学顕微鏡下で4倍～600倍の倍率で実施した。炭化した試料については3断面の割断面を作製し、アルミ合金製試料台にカーボンテープで固定する。顕微鏡観察は、走査型電子顕微鏡を用いて実施した。同定した分類群ごとに最も特徴的な試料について、3断面の顕微鏡写真撮影を行うとともに、鳥地ほか（1985）の用語に基本的に従い、記載を行った。

## (2) 樹種の同定結果と記載

分類群ごとに記載を行った。また、表3に同定結果を示し、下線試料の顕微鏡写真を図版に示した。

### (1) マツ属（複維管束亜属） *Pinus* (sub. *Diploxylon*) sp.

試料 No. : MK - 3 (W08012801)

記載：構成細胞は仮道管、放射仮道管、放射柔細胞、垂直樹脂道及び水平樹脂道を開むエビセリウム細胞からなる。早材から晩材への移行は急で、晩材の幅は広い。放射組織は単列であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を示す。垂直樹脂道は早材から晩材の移行部に孤立して存在し、チロソイドが見られる。劣化が激しいため（歯系が多数認められる）不鮮明であるが、分野壁孔は窓状である。以上の組織上の特徴から、マツ属（複維管束亜属）と同定した。

### (2) クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc.

試料 No. : MK - 1 (W08012802)

記載：大きい円形ないし梢円形の道管がほとんど単独で多列（5～6）に配列する環孔材である。孔圈部の幅は広いが、道管の分布はやや疎である。孔圈外への移行はやや緩やかで、孔圈外の小道管は角張っており、単独ないし2～3個集まって放射状ないし火炎状に配列しているが、余り目立たない。道管せん孔は単せん孔である。道管内腔にチロースが発達している。孔圈道管のまわりに周囲仮道管が存在している。軸方向柔組織は周開状のほかに短接線状が顕著に認められる。放射組織は単列同性である。以上の組織上の特徴から、クリと同定した。

### (3) ツブラジイ (*Castanopsis cuspidata* (Thunberg) Schottky)

試料 No. : MK - 4, MK - 5, MK - 7

記載：環孔性放射孔材で、孔圈部は3～4列、孔圈外でやや急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管の穿孔板は基本的に單穿孔であるが、晩材部の小道管にはまれに階段穿孔が認められる。道管内壁の壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと集合～複合放射組織とがある。以上の組織上の特徴から、ツブラジイと同定した。

## 5. 測定年代について

年代測定を行った6試料の内、3試料は近世以降現代までの間を示し、明確な年代が分からなかった。

得られた年代の内、MK-4とMK-5で得られた曆年較正年代は、弥生時代後期ごろのAD80～AD140の間で $2\sigma$ の範囲が重なる。MK-4,5ともにSI01内の建築部材の可能性があり、SI01が弥生時代後期ごろの住居であった可能性が高い。

一方、MK-3もSI01に関連した柱と考えられていたが、その値から竪穴住居とは別の時代（中世末から近世前半）の柱であると考えられる。

## 6. 用材について

### (1) 建築材

SI01内からMK-3,4,5,7が採取された。柱根（MK-3）、焼失建築部材（MK-5,7）、用途不明（MK-4）であった。

柱根（MK-3）はマツ属（複維管東亜属）であった。島根県下で記載されている柱材の内、最も多い樹種はクリであり、マツ属（複維管東亜属）は5%程度にすぎない。したがって今回の発見は、柱の用材として貴重な例である。

建築部材の記載は少ないものの、島根県下ではクリ、スキが多い傾向にある。今回建築部材としてツブラジイが記載されたことは、島根県下では恐らく初めてのことである。シノノキ属まで広げると、益田市内沖手遺跡では柱材としての記載があり、松江市では燃料材としての記載もある。

### (2) 杭

S-10区の杭がクリであった。島根県下で記載された杭のうち、およそ半分がクリであった。クリは代表的な陽樹であり、生育が早いことなどから杭として用いられることが多いようである。クリの外ではマツ属（複維管東亜属）の記載が多いが、マツ属（複維管東亜属）は杭材全体の20%程度にすぎない。

## 7. まとめ

久城東遺跡におけるAMS年代測定及び樹種同定結果から、以下の事柄が明らかになった。

- (1) SI01は弥生時代後期ごろの竪穴住居跡であった。住居跡から得られた建築部材、あるいは建築部材の可能性のある炭片は、いずれもツブラジイであった。
- (2) SI01と関連した柱と考えられていたMK-3は、中世末から近世前半のものと分かった。
- (3) 木柵杭（MK-1）を始め、MK-2、MK-6は近世から現代の間のものと考えられ、時期が特定できなかった。

## 引用文献

- 鳥地 謙・佐伯 浩・原田 浩・塙倉高義・石田茂雄・重松賴牛・須藤彰司（1985）木材の構造、276p.、文水堂、東京。  
渡辺正巳（2000）長原遺跡東北地区東調査地出土木質遺物の樹種鑑定、長原遺跡東部地区発掘調査報告Ⅲ－1997年度  
大阪市長吉東部地区土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書－、247－249、財團法人大阪市文化財協会。

## 久城東遺跡図表一覧

- 図1 調査グリッドの配置（遺構の分布）
- 図2 S - 10 区での試料採取位置
- 図3 N - 3 区堅穴住居跡（SI01）内での試料採取位置
- 図4 N - 5 区での試料採取位置

表1 分析試料一覧

表2 AMS 年代測定結果

表3 樹種同定結果

図版 顕微鏡写真

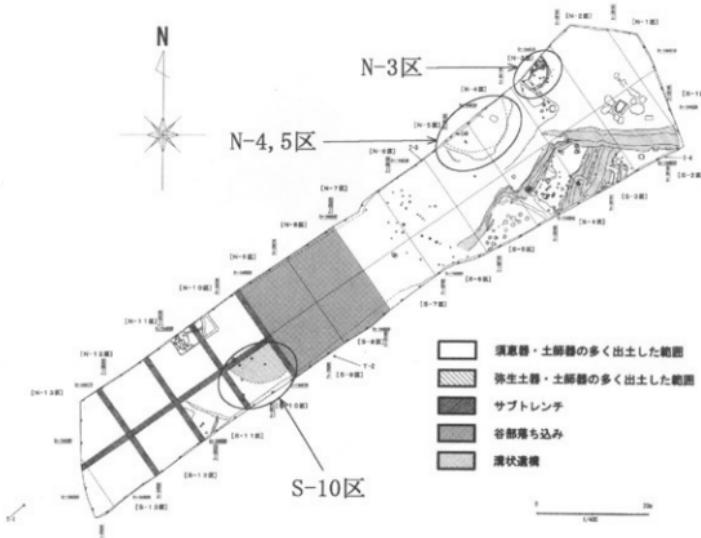


図1 調査グリッドの配置（遺構の分布）

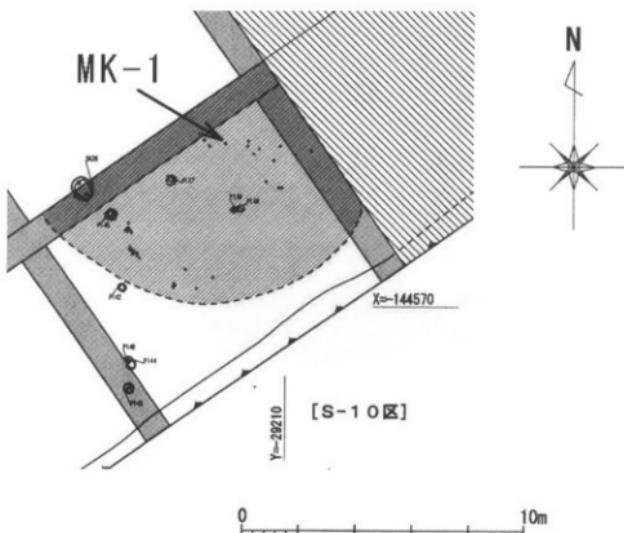


図2 S-10区での試料採取位置

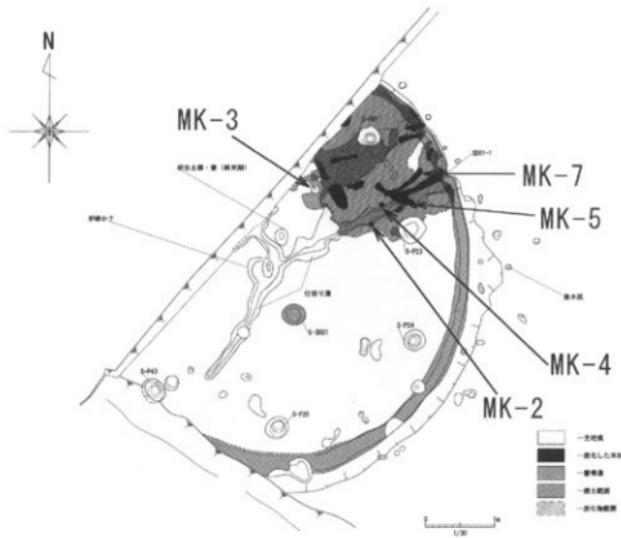


図3 N-3区竪穴住居跡(SI01) 内での試料採取位置

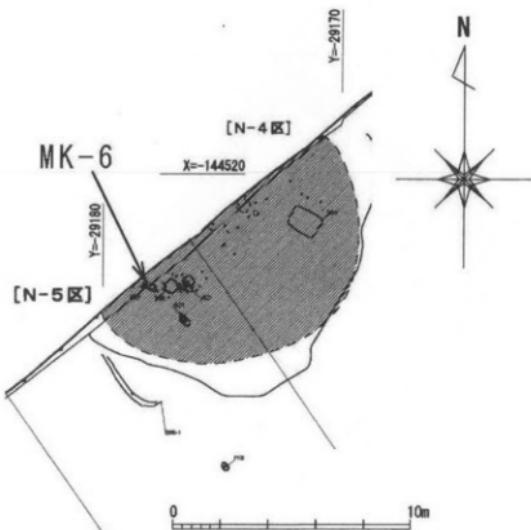


図4 N-5区での試料採取位置

試料名	種類	記号	測定年 S-10区 底質表面(露出)木柵板	測定年 S-10区 底質表面(露出)木柵板	樹種同定	℃年代測定
MK-1	木片				○	○
MK-2	木片				○	○
MK-3	木片	木片① S-P2 木柵板サンプル 07.11.23			○	○
MK-4	木	底質サンプル 07.11.15 取參			○	○
MK-5	木	S101内底化物 C-4 07.11.19			○	○
MK-6	木	N-DE5 SK23 底化物サンプル 07.09.11			○	○
MK-7	木	S101 底化物 C-16 (07.11.20)		○		

表1 分析試料一覧

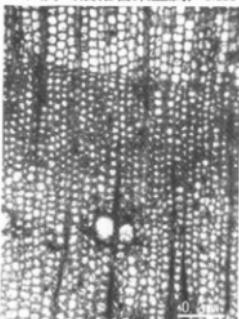
試料名	記号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	修正 温度 (yrBP)	修正 年代 (yrBP)	$^{14}\text{C}$ 年代測定年代に較正した年代(緯度 1 σ 範囲)		測定番号 (PLD)
					1 σ 範囲(緯度)	2 σ 範囲(緯度)	
MK-1	S-10区 底質表面(露出)木柵板	28.02 ± 0.13	85 ± 20	84 ± 20	AD690 - 1720 (18.1%) AD1810 - 1840 (13.1%) AD1870 - 1920 (37.0%)	AD690 - 1730 (23.9%) AD810 - 1920 (59.5%)	10010
MK-2	木片①サンプル	-27.13 ± 0.17	35 ± 20	37 ± 20	AD1890 - 1957 (48.1%) AD1950 - 1965 (20.1%)	AD1810 - 1840 (14.9%) AD1870 - 1920 (16.7%) AD1950 - 1959 (22.6%)	10011
MK-3	S101 S-P2 木柵板サンプル	-27.35 ± 0.12	285 ± 20	283 ± 20	AD1520 - 1560 (35.9%) AD11630 - 1600 (32.1%)	AD520 - 1600 (53.2%) AD1630 - 1660 (21.1%)	10012
MK-4	底質サンプル	-27.02 ± 0.11	195.5 ± 20	190.4 ± 22	AD75 - 125 (68.2%) AD120 - 40 (1.4%)	AD75 - 120 (68.2%) AD50 - 140 (94.0%)	10013
MK-5	S101内底化物 C-4	-26.05 ± 0.15	186.0 ± 20	182 ± 22	AD180 - 140 (9.6%) AD190 - 180 (42.5%) AD190 - 220 (16.1%)	AD80 - 220 (95.4%)	10014
MK-6	N-DE5 SK23 底化物サンプル	-26.39 ± 0.14	110 ± 25	111 ± 23	AD1630 - 1720 (16.1%) AD1810 - 1880 (47.1%) AD1900 - 1920 (5.0%)	AD690 - 1740 (27.0%) AD1800 - 1940 (57.8%)	10015

表2 AMS 年代測定結果

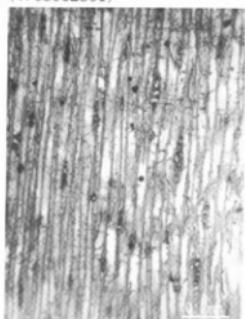
試料名	樹種名	測定年 S-10区 底質表面(露出)木柵板	備考
MK-1	W(OH)2802	マツ属 マツ	木片
MK-3	W(OH)2801	マツ属 マツ	木片
MK-4		ツブツヅジイ	炭化材
MK-5		ツブツヅジイ	炭化材
MK-7		ツブツヅジイ	炭化材

表3 樹種同定結果

マツ属（複維管束亞属）MK-3 (W08012801)



横断面



接線断面



放射断面

クリ MK-1 (W08012802)



横断面



接線断面



放射断面

ツブライジ MK-4



横断面



接線断面



放射断面

# 写 真 図 版

図版1 沖手遺跡

北  
N

沖手遺跡調査区全景



図版2 沖手遺跡



調査区全景（上空北東から）



調査区全景（上空南東から）

図版3 沖手遺跡



5·6区 全景（上空から）



6区 柱穴群（北から）

図版4 沖手遺跡

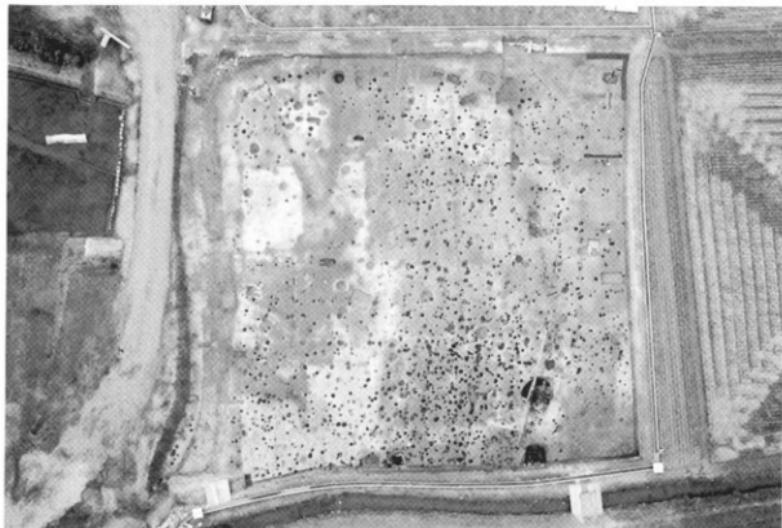


6区 建物77（北から）



6区 建物78・79（東から）

図版5 沖手遺跡



7区 全景（上空から）



7区 全景（西から）

図版6 沖手遺跡



7区 柱穴群（東から）



8区 全景（東から）

図版 7 沖手遺跡



8区 全景(上空南から)

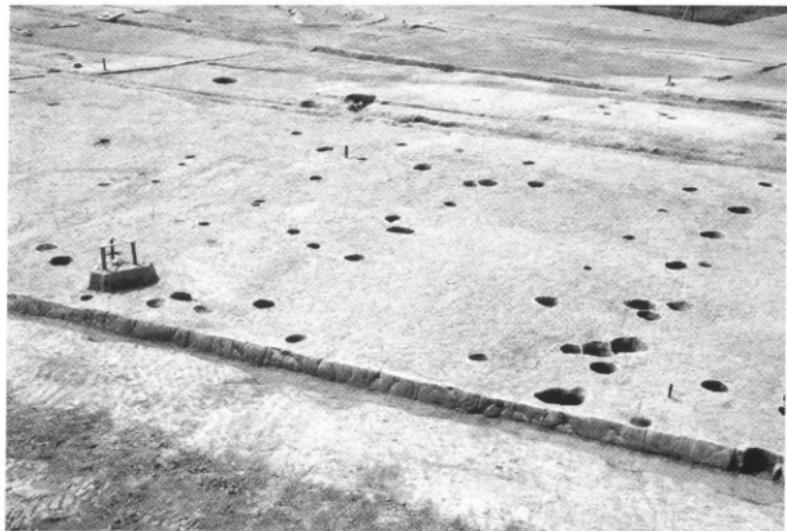


8区 全景(上空から)

図版8 沖手遺跡



8区 建物（南から）



8区 建物（南東から）

図版9 沖手遺跡

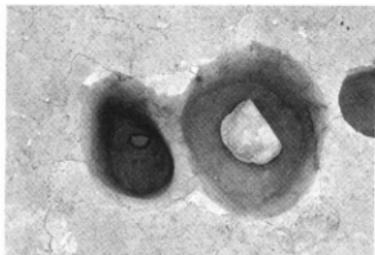


8区 遺構検出状況全景（西から）



8区 南東部の建物群検出状況（東から）

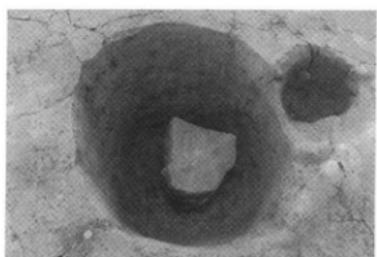
図版 10 沖手遺跡



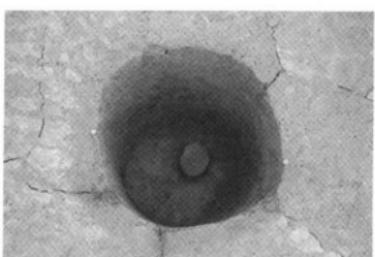
建物跡 94 P438



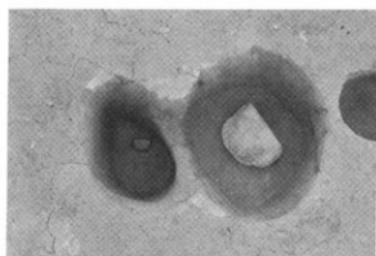
建物跡 94 P472



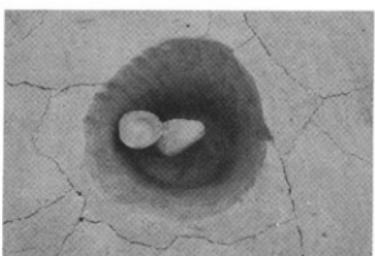
建物跡 94 P478



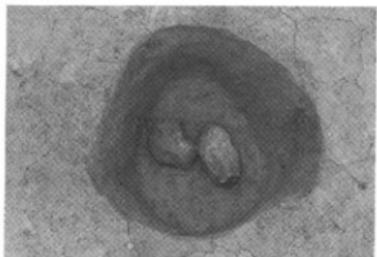
建物跡 95 P412



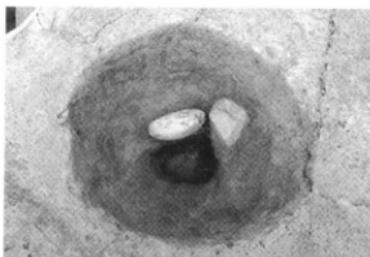
建物跡 95 P439



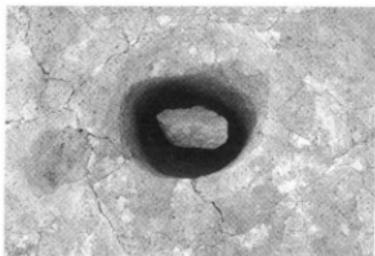
建物跡 96 P340



建物跡 96 P350



建物跡 96 P556



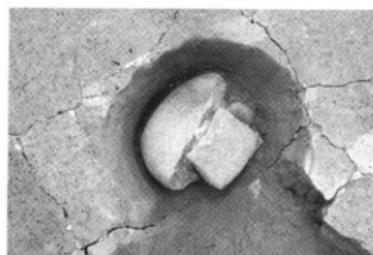
建物跡 97 P420



建物跡 99 P326

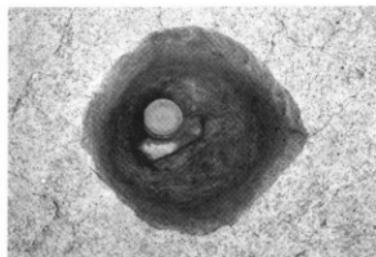


建物跡 99 P433

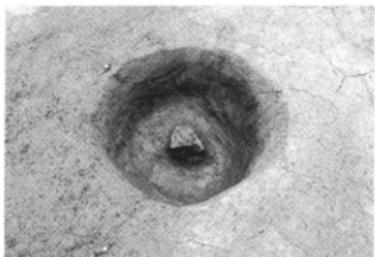


建物跡 99 P640

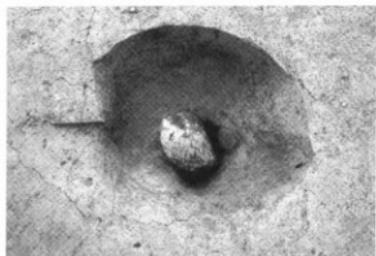
図版 12 沖手遺跡



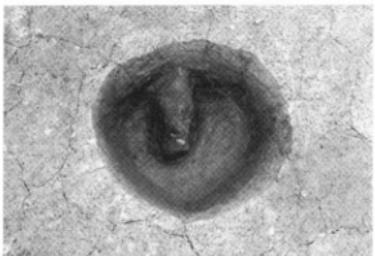
建物跡 101 P244



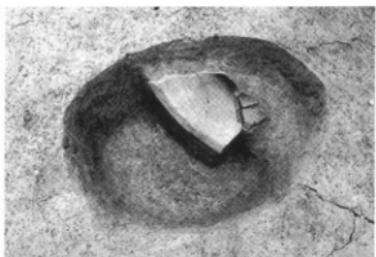
建物跡 102 P232



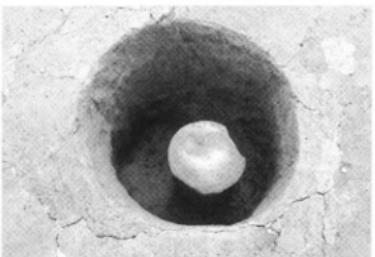
建物跡 102 P246



建物跡 103 P241



建物 108 P451



建物 108 P454

図版 13 沖手遺跡



9・10区 全景（西から）



9・10区 全景（東から）

図版 14 沖手遺跡



9区 全景（北から）



10区 全景（北から）

図版 15 沖手遺跡



9区 柱穴群（西から）



9区 柱穴群（北から）

図版 16 沖手遺跡

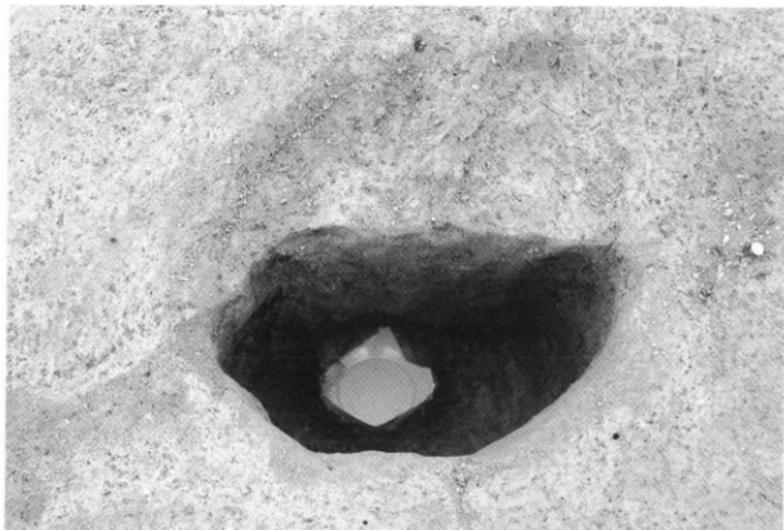


9区 柱穴群（北から）



9区 柱穴群（北西から）

図版 17 沖手遺跡



9区 柱穴 P67 (111-3)



10区 建物 120 周辺 (北から)

図版 18 沖手遺跡



10 区 東側（上空から）



10 区 東側（西から）

図版 19 沖手遺跡

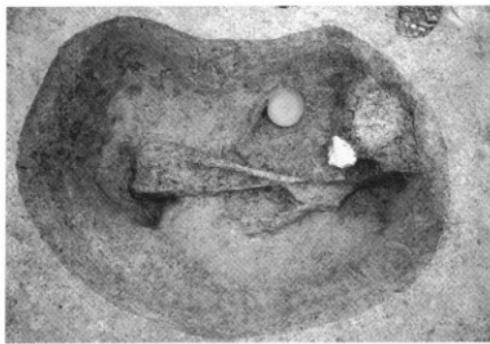


9・10 区 全景（南西から）

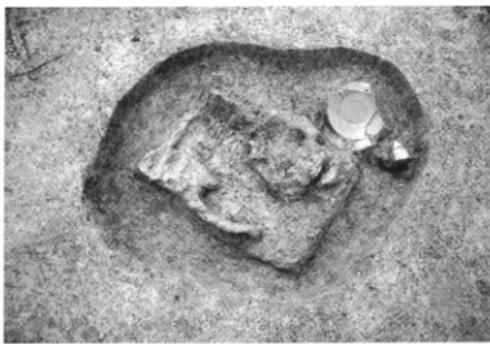


9・10 区 落ち込み（北から）

图版 20 冲手遺跡



6区 墓 41



6区 墓 42



6区 墓 45

図版 21 沖手遺跡



7区 墓46(右)・47(左)



7区 墓50



7区 墓51

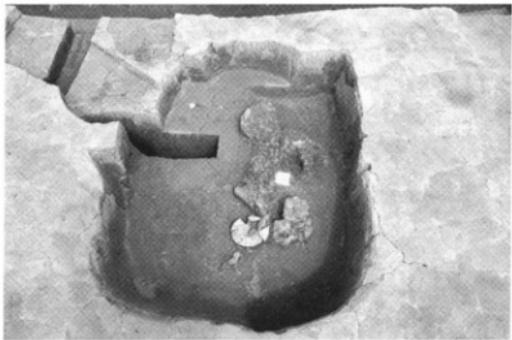
図版 22 沖手遺跡



7区 墓 54



7区 墓 55



7区 墓 60

図版 23 沖手遺跡



7区 墓 63



7区 墓 66 棺蓋出土状況

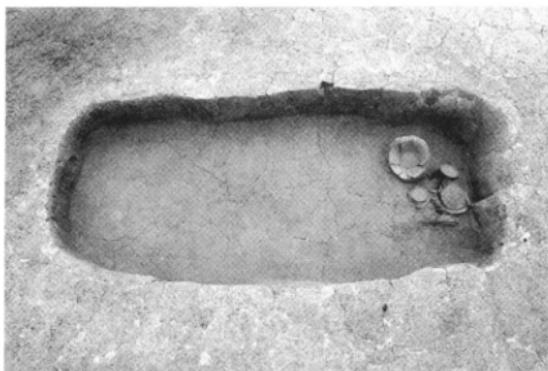


7区 墓 66

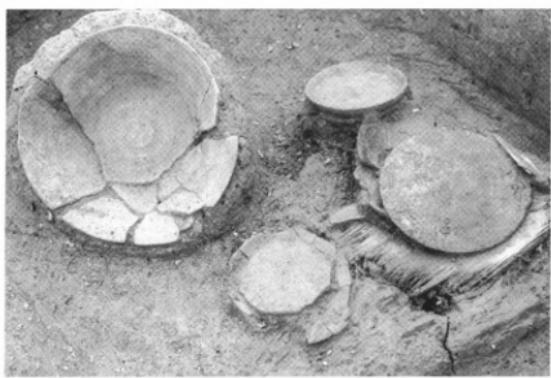
図版 24 沖手遺跡



8区 墓67の検出



8区 墓67の墓壙と遺物の出土位置（東から）

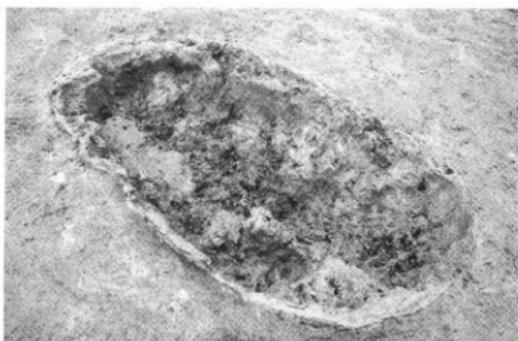


墓67の土師器壺・皿・柄鏡・木棺材の出土状況（南東から）

図版 25 沖手遺跡



7区 墓65



9区 墓68



9区 墓70

図版 26 沖手遺跡



9区 墓 71



9区 墓 72



9区 墓 73

図版 27 沖手遺跡



9区 墓74



10区 墓78 棺蓋・土師器皿出土状況（西から）



10区 墓78 人骨・土師器皿出土状況（西から）

図版 28 沖手遺跡



9区 墓76



6区 井戸7



7区 井戸8

図版 29 沖手遺跡



7区 井戸 9



7区 井戸 10



9区 井戸 11

図版 30 沖手遺跡



9区 井戸 12



10区 井戸 13 掘出状況



10区 井戸 13

図版 31 沖手遺跡



10区 井戸 14



6区 溝状遺構 24



7区 溝状遺構 8・25・26

図版 32 沖手遺跡



8 区 溝状遺構 28 ~ 30

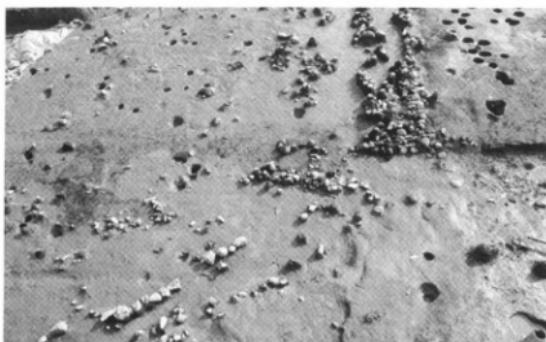


9 区 溝状遺構 40 ~ 42 (西から)

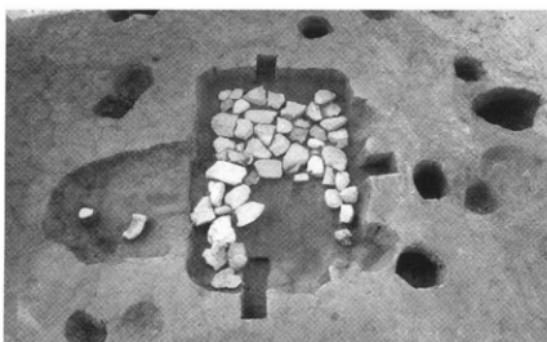


9 区 石列 7

図版 33 沖手遺跡



10 区 石列 8・9



7 区 SK51 (東から)



9 区 竪穴建物

図版 34 沖手遺跡



10 区 鋳造関連遺構 (SX04 周辺)



10 区 鋳造関連遺構 (南から)



発掘調査風景



溝跡 34 に重なる近世の集石（西から）



8 区 下層確認グリッド 1 の状況（北から）



8 区 下層確認グリッド 2 の状況（北から）

図版 36 沖手遺跡



8 区 下層確認グリッド 3 の状況（北から）



8 区 下層の倒木の大きさ



平成 18 年 5 月 18 日開催調査指導会

図版 37 沖手遺跡



平成 18 年 6 月 23・24 日開催調査指導会



平成 18 年 7 月 5・6 日開催調査指導会



平成 18 年 7 月 9 日開催現地説明会

図版 38 沖手遺跡



39-1

6 区 墓 41 出土遺物（土師器皿）



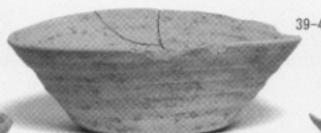
39-2

6 区 墓 42 出土遺物（土師器皿）



39-3

7 区 墓 44 出土遺物（朝鮮王朝碗）



39-4



39-5



39-7



39-6



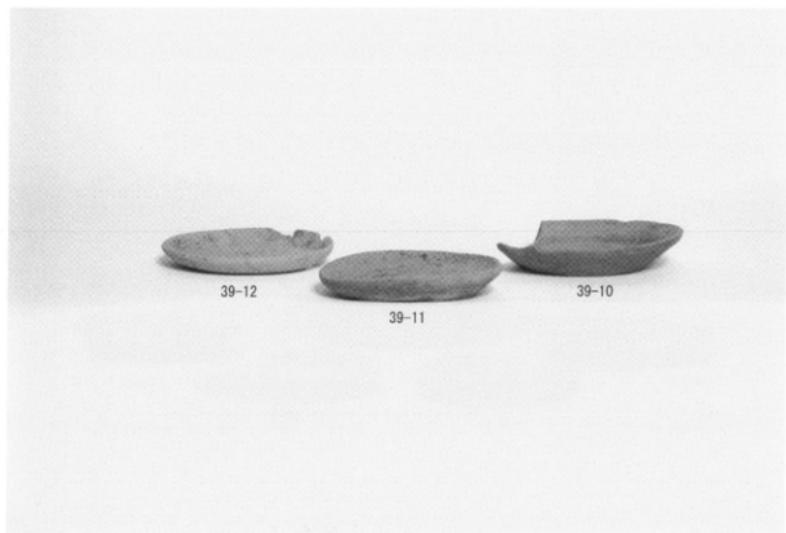
39-8

7 区 墓 45 出土遺物（土師器坯・皿）

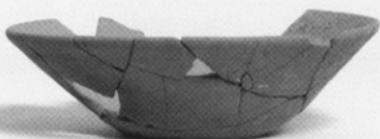
图版 40 沖手遺跡



7 区 墓 47 出土遺物（土師器坏）



7 区 墓 49 出土遺物（土師器皿）



39-14

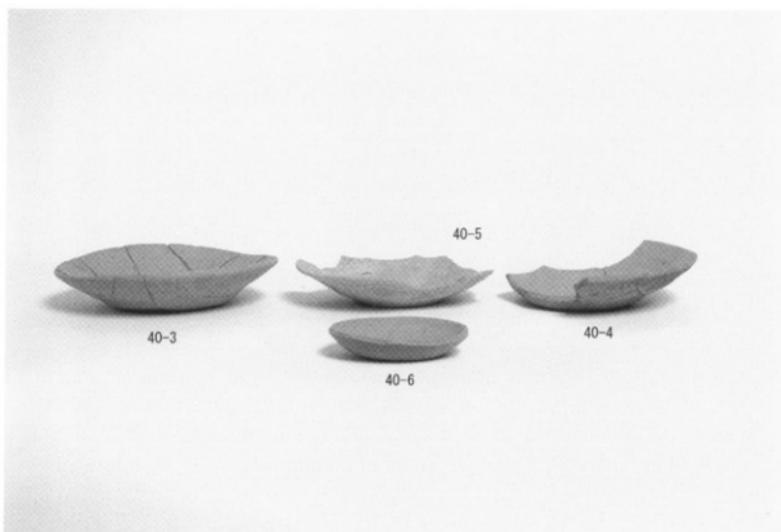
7区 墓 51 出土遺物（土師器坏）



40-7

7区 墓 60 出土遺物（土師器皿）

図版 42 沖手遺跡



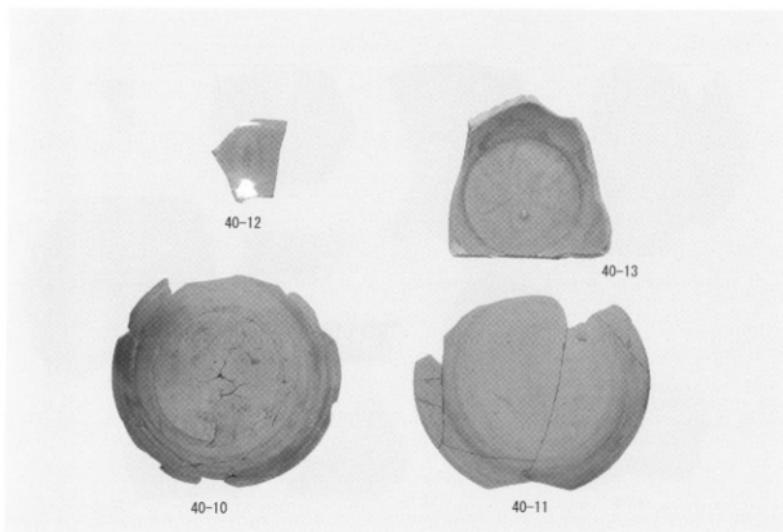
7 区 墓 61 出土遺物（土師器皿）



7 区 墓 65 出土遺物（土師器皿）



6 区 井戸 7 出土遺物（土師器坏）

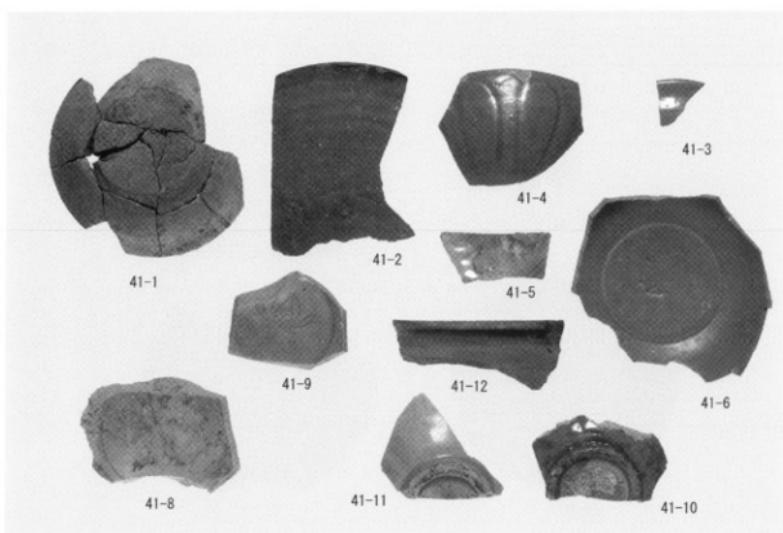


6 区 井戸 7 出土遺物

圖版 44 沖手遺跡

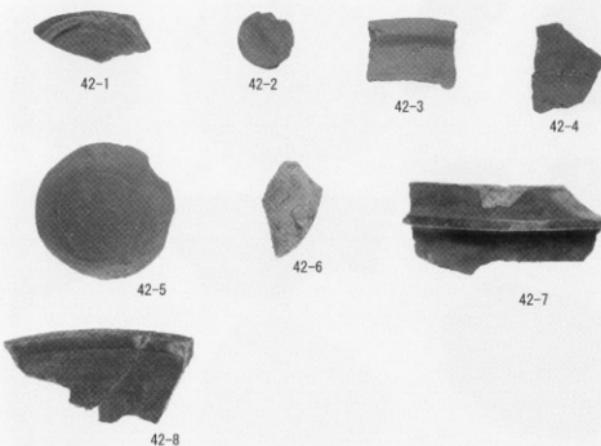


7 区 墓 57 出土遺物（土師器坏）

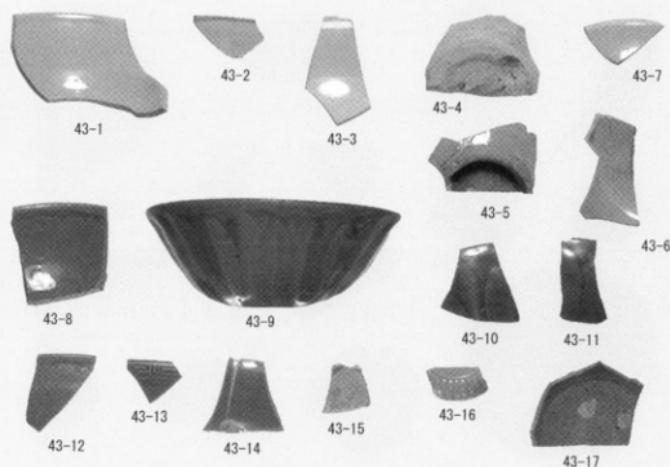


7 区 墓 57 (1 ~ 6) · 井戸 10 (8 ~ 12) 出土遺物

図版 45 沖手遺跡

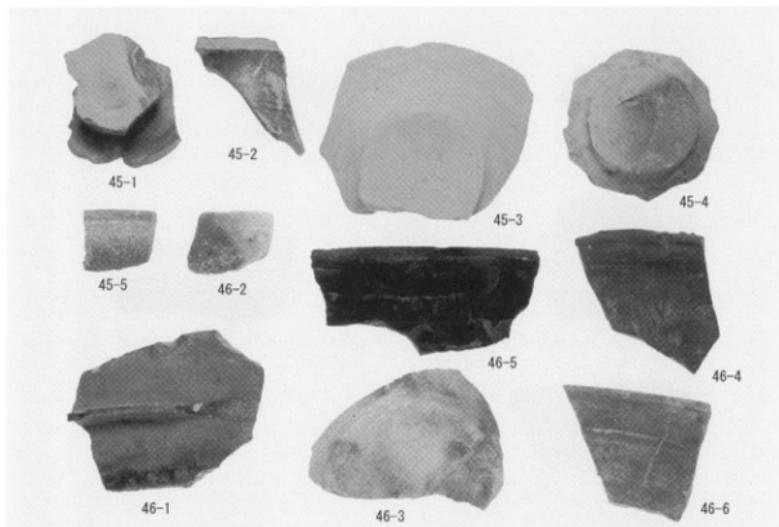


5～7区 遺構出土遺物（須恵器・土師器・瓦質土器・陶器）

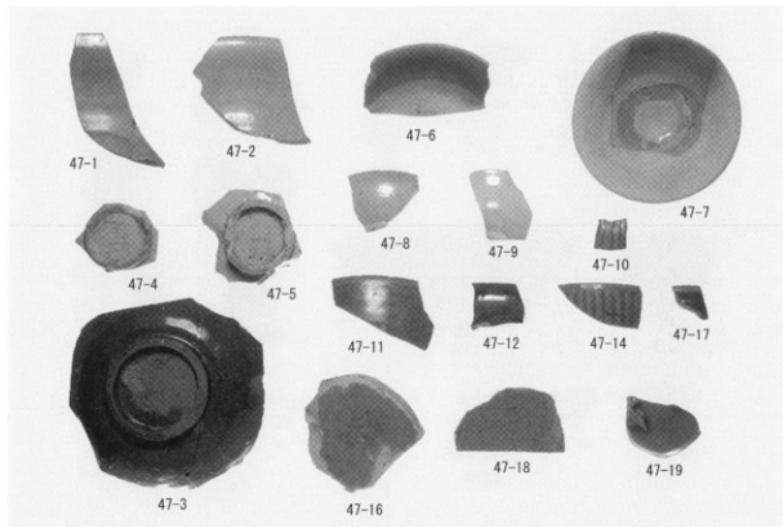


5～7区 遺構出土遺物（貿易陶磁）

図版 46 沖手遺跡

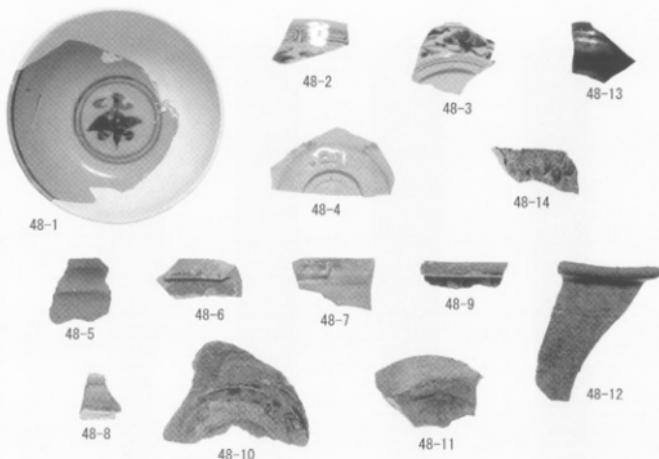


5～7区 包含層出土遺物（須恵器・土師器・瓦質土器・陶器）

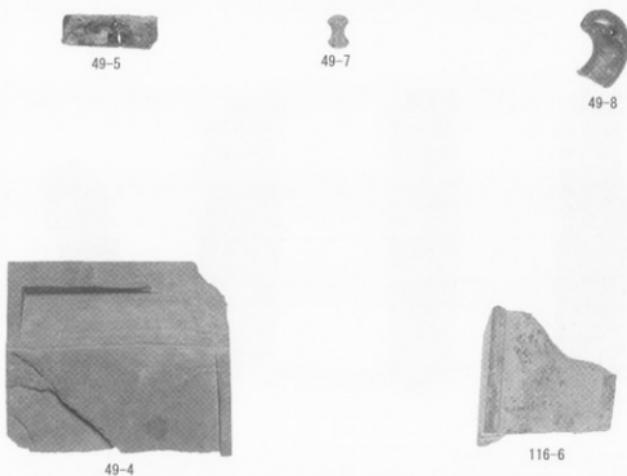


5～7区 包含層出土遺物（貿易陶磁）

図版 47 沖手遺跡

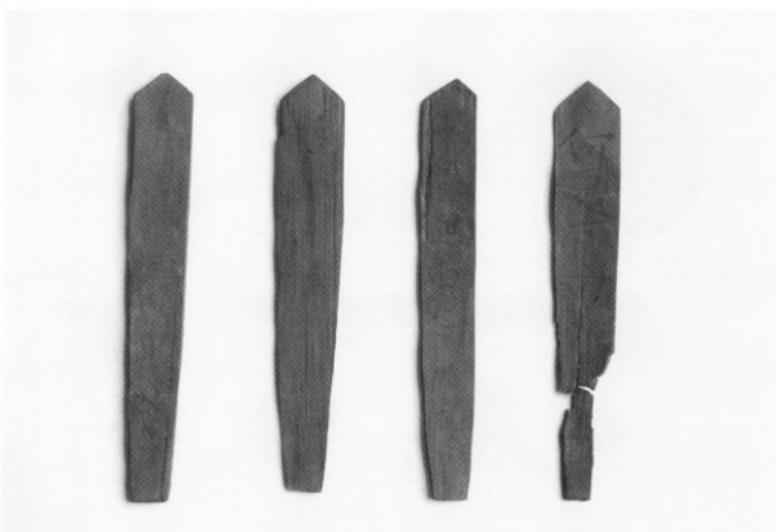


5～7区 包含層出土遺物（貿易陶磁）

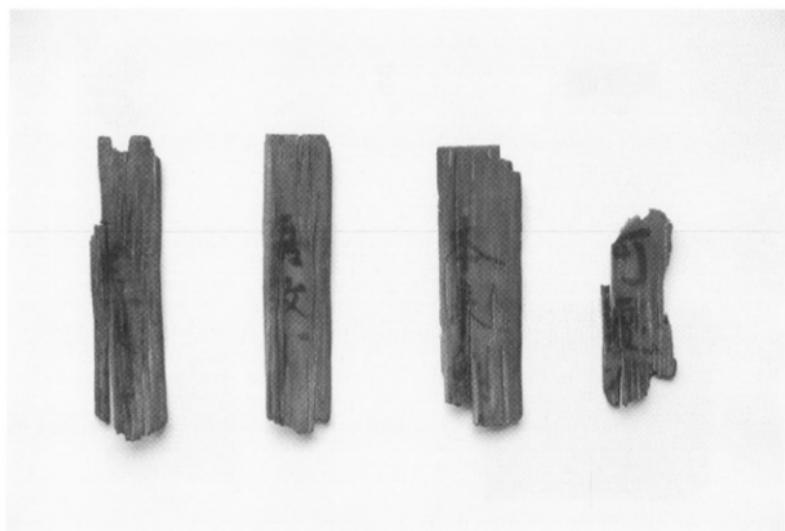


5～7区 包含層出土遺物（その他）

図版 48 沖手遺跡



7 区 墓 50 出土遺物（卒塔婆）



9 区 墓 76 出土遺物（卒塔婆）

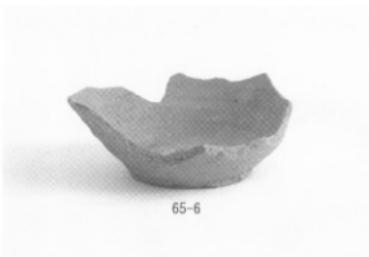


7 区 墓 50 出土遺物（数珠）



井戸 10 出土遺物（貝）

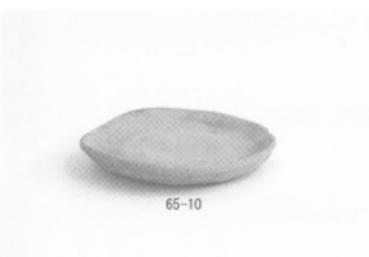
図版 50 沖手遺跡



65-6

65-9

8 区 建物跡 99 出土遺物（土師器坏）



65-10

65-11

8 区 建物跡 101 出土遺物（土師器皿）

8 区 建物跡 108 出土遺物（土師器坏）



67-1

67-2

墓 67 出土遺物（土師器坏）

墓 67 出土遺物（土師器皿）



67-3

8区 墓67出土遺物（土師器皿）



67-4

8区 墓67出土遺物  
(柄鏡 背面)



67-4

8区 墓67出土遺物  
(柄鏡 鏡面)

図版 52 沖手遺跡



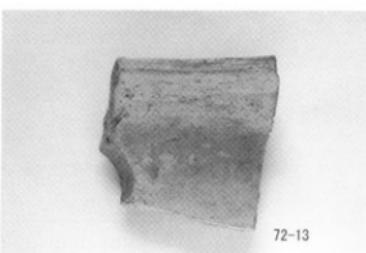
瓦質火鉢（外面）



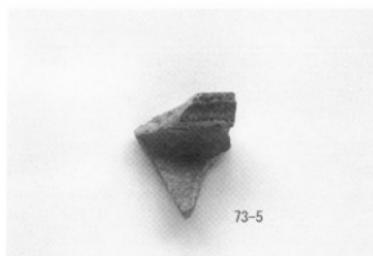
（内面）



瓦質火鉢（外面）



（内面）



越前（外面）



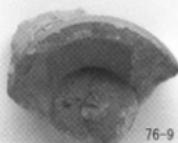
（内面）

8 区 包含層出土遺物



76-9

白磁四耳壺（内面）



76-9

(底面)



76-10

青白磁合子蓋（外側）



76-10

(内面)



76-11

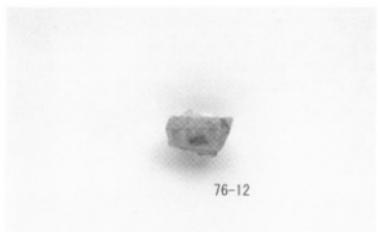
青白磁合子蓋（外側）



76-11

(内面)

图版 54 冲手遗跡



76-12



76-12

青白磁合子身（外面）

（内面）



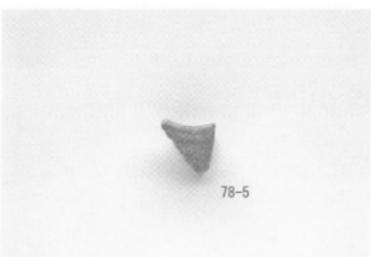
78-4



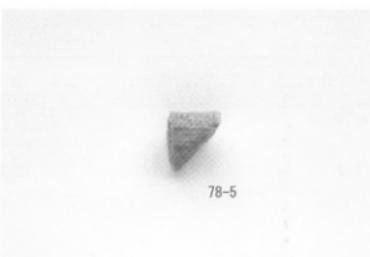
78-4

越州窑系青磁合子蓋（外面）

（内面）



78-5



78-5

中国陶器 壺（外面）

（内面）

8 区 包含層出土遺物



78-6

中国陶器 小壺（外面）



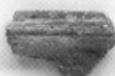
78-6

（内面）



78-7

中国陶器 鉢（外面）



78-7

（内面）



78-8

中国陶器 壺（外面）

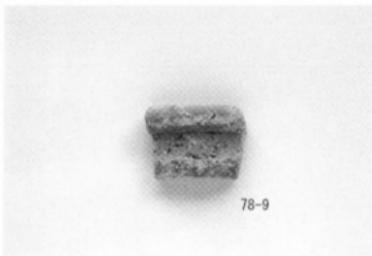


78-8

（内面）

8 区 包含層出土遺物

図版 56 沖手遺跡



中国陶器　甕（外面）



（内面）



中国陶器　鉢（外面）



（内面）



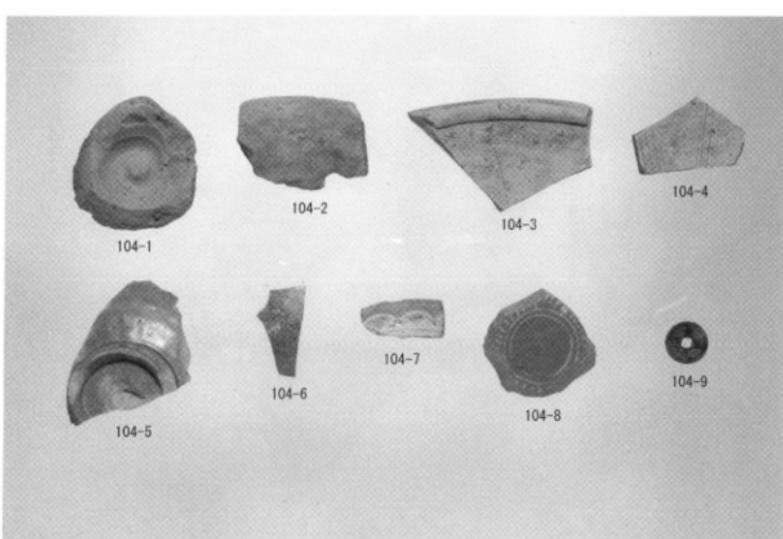
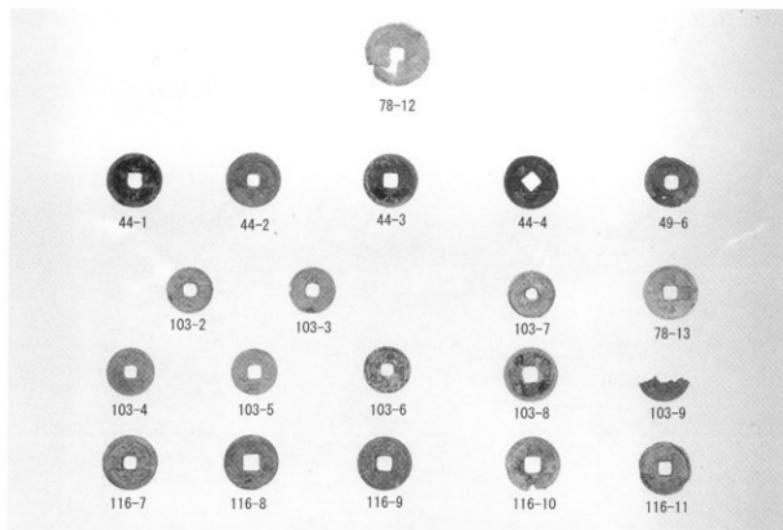
元豊通寶



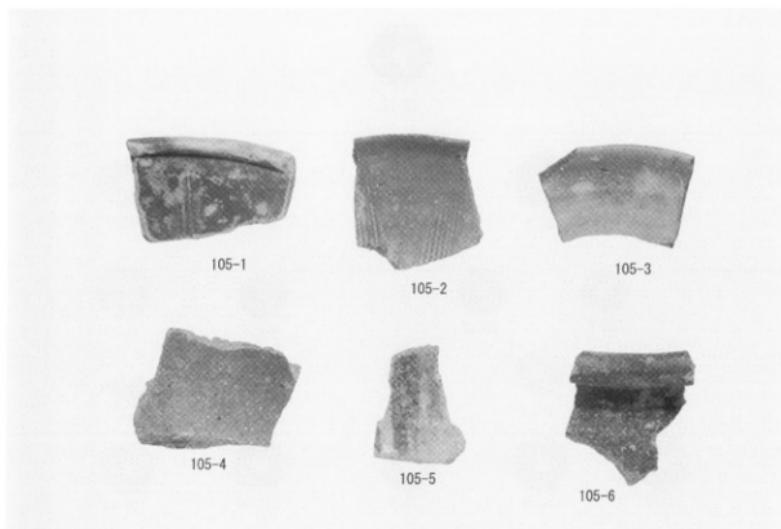
政和通寶

8 区　包含層出土遺物

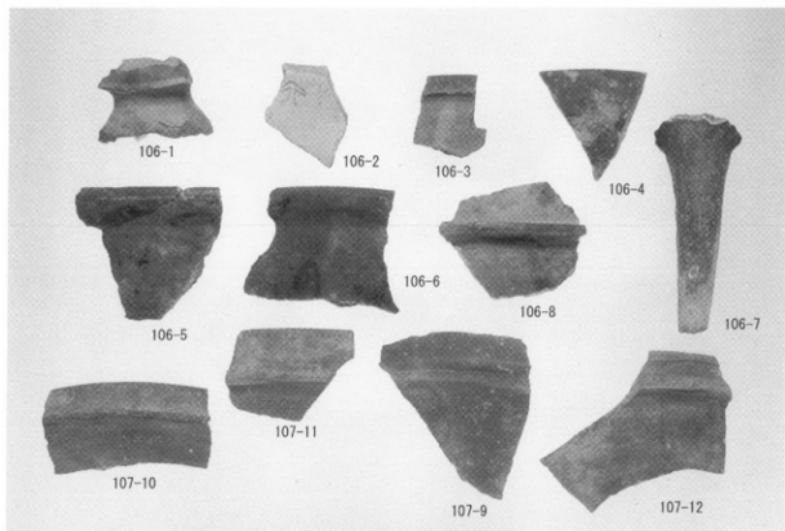
図版 57 沖手遺跡



図版 58 沖手遺跡

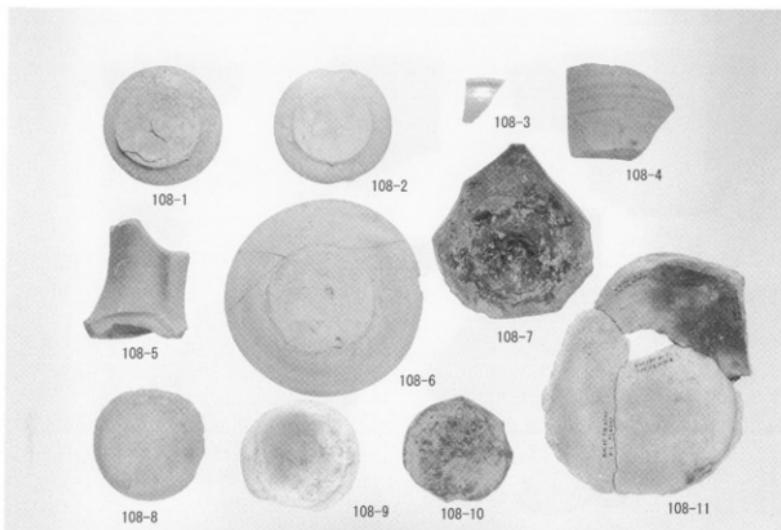


9区 石列7出土遺物



10区 石列8出土遺物

図版 59 沖手遺跡

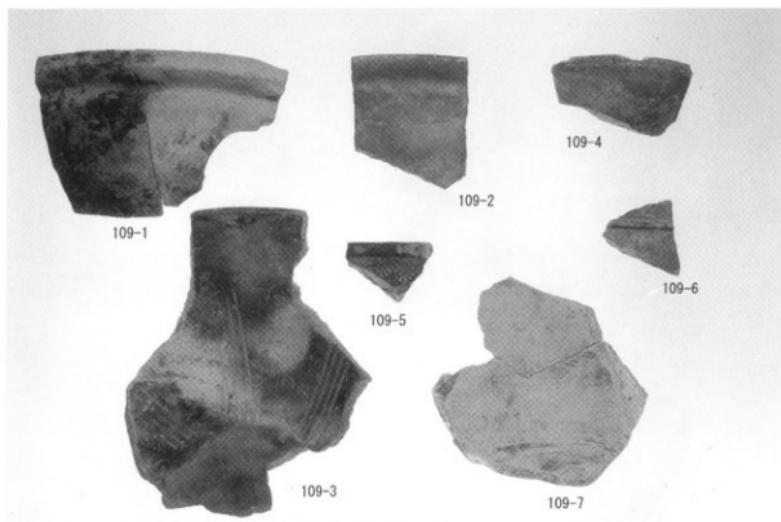


9・10 区 西側遺構出土遺物

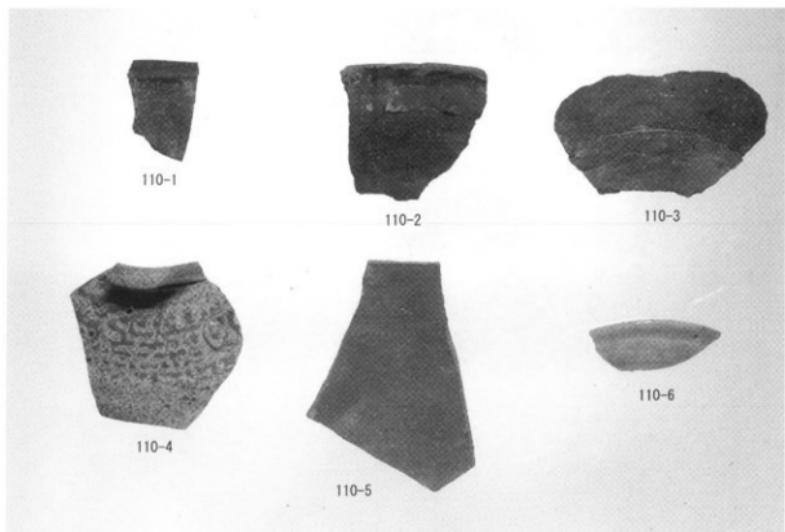


9・10 区 西側遺構出土遺物

図版 60 沖手遺跡

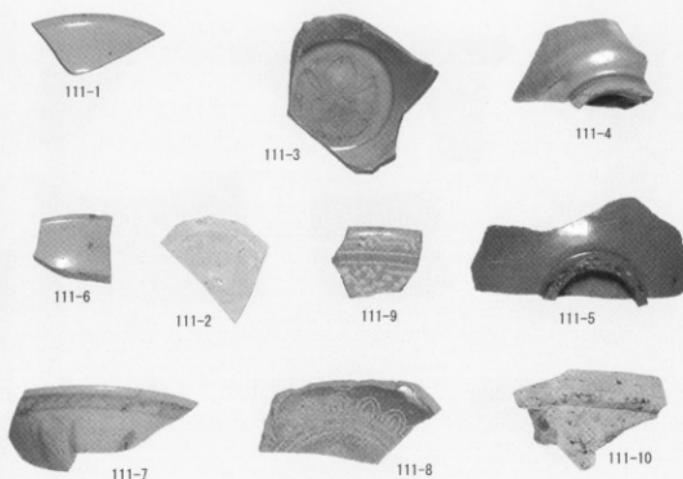


9・10 区 西側遺構出土遺物（瓦質土器）

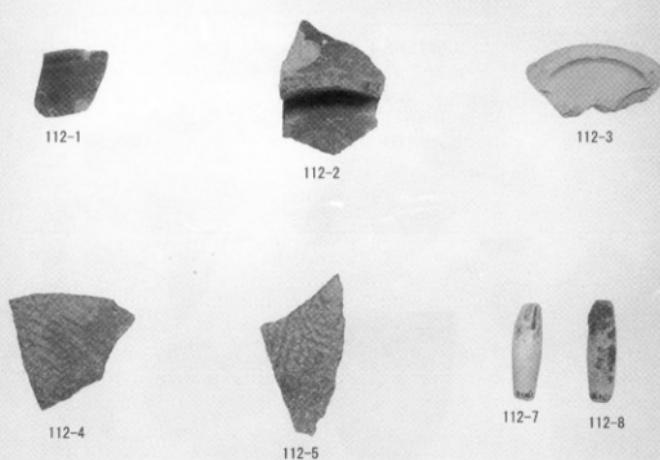


9・10 区 西側遺構出土遺物（国産陶器）

図版 61 沖手遺跡

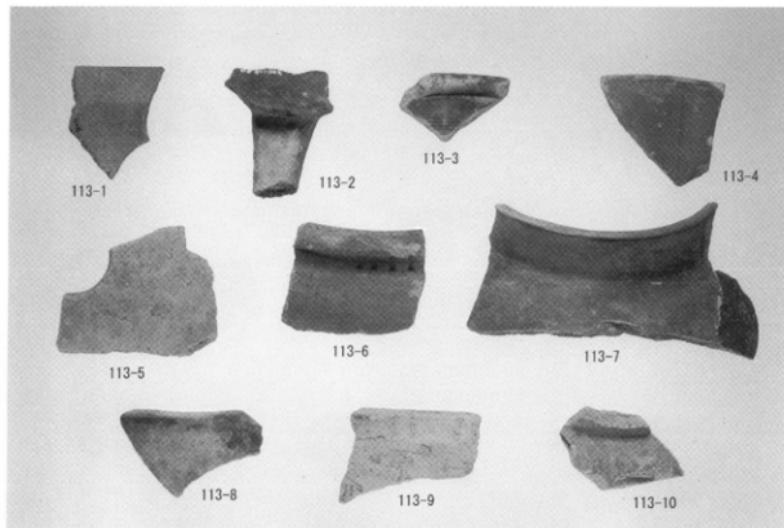


9・10区 西側遺構出土遺物（貿易陶磁・その他）

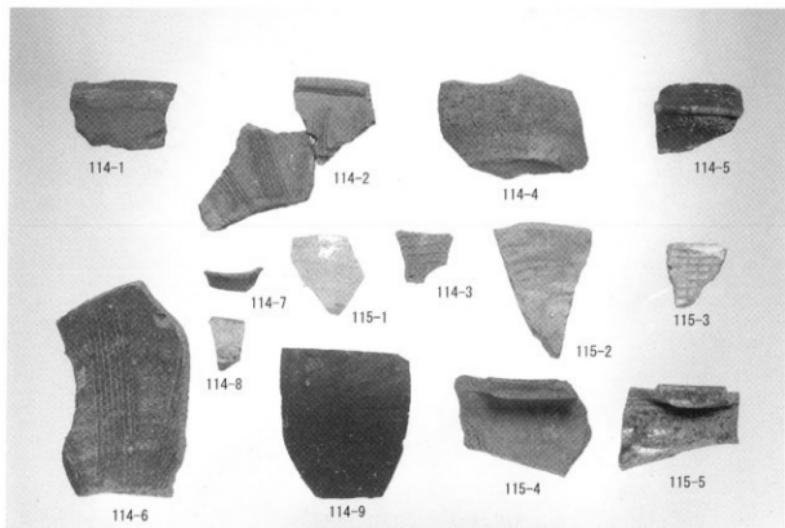


9・10区 西側包含層出土遺物（須恵器・土師器）

図版 62 沖手遺跡

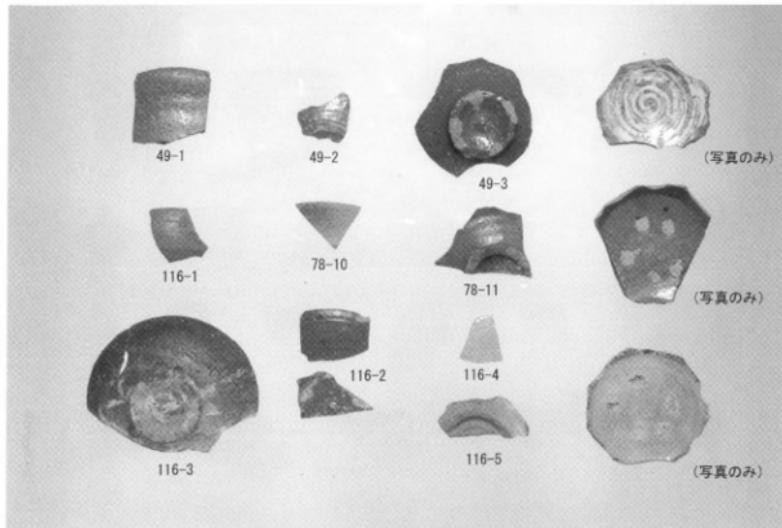


9・10区 西側包含層出土遺物（瓦質土器）

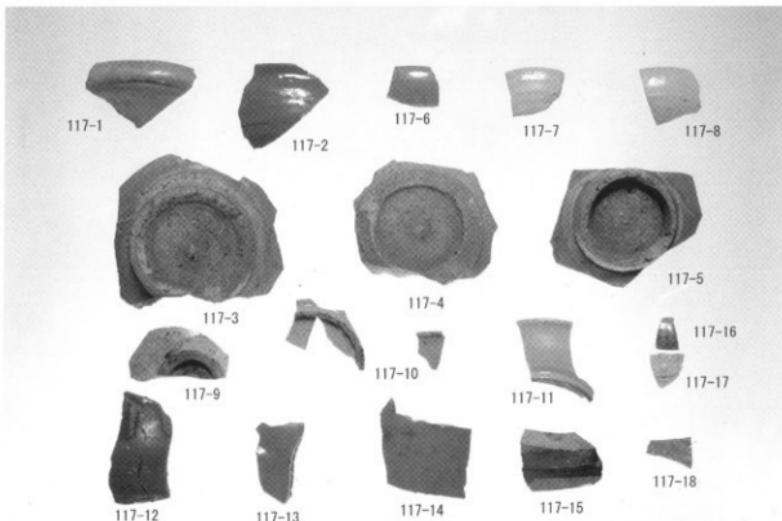


9・10区 西側包含層出土遺物（国産陶器）

図版 63 沖手遺跡

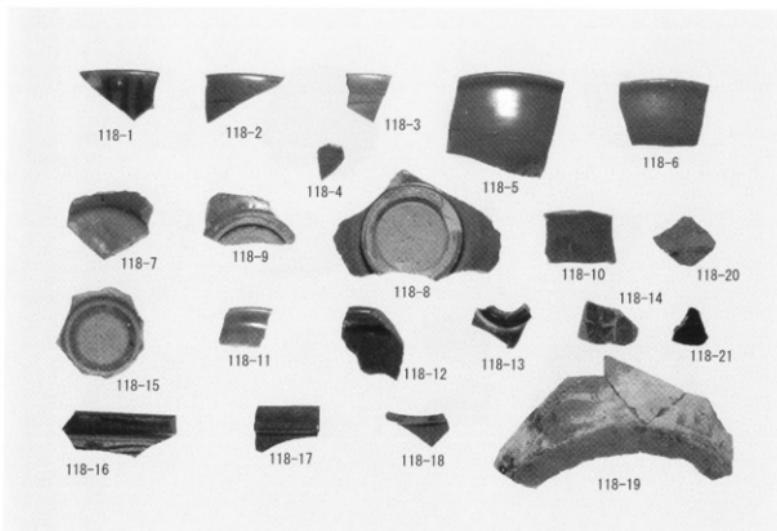


出土遺物（朝鮮王朝陶磁）

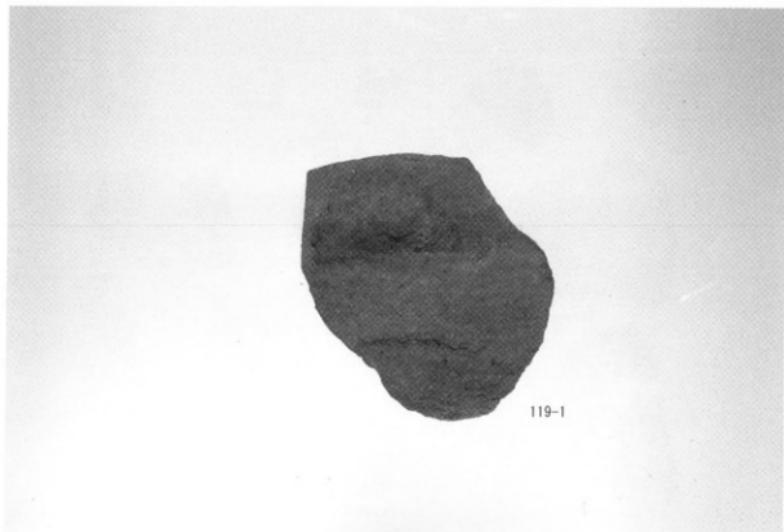


9・10 区 西側包含層出土遺物（貿易陶磁）

図版 64 沖手遺跡



9・10 区 西側包含層出土遺物（貿易陶磁）



石製品

圖版 65 沖手遺跡



119-2



石製品



119-3

石製品

圖版 66 沖手遺跡



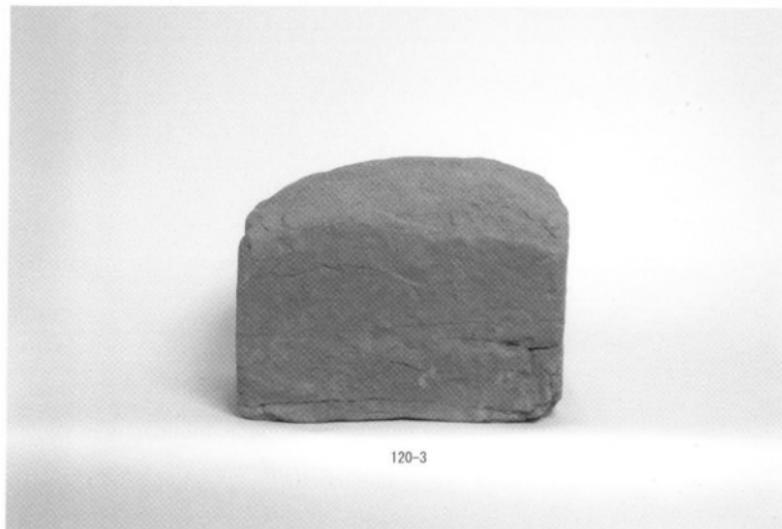
120-1

石製品



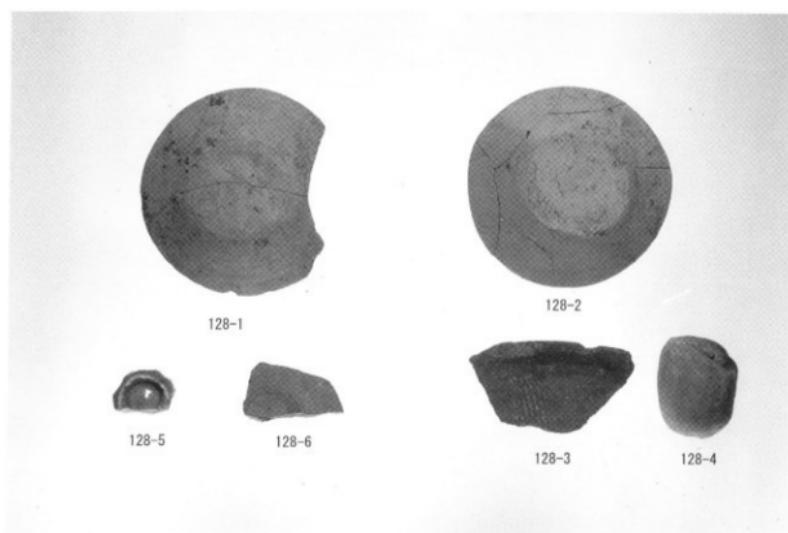
120-2

石製品



120-3

石製品



128-1

128-2

128-5

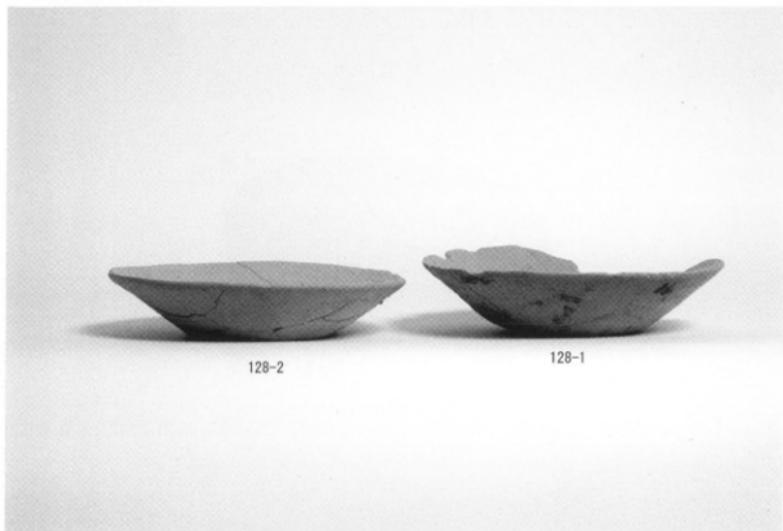
128-6

128-3

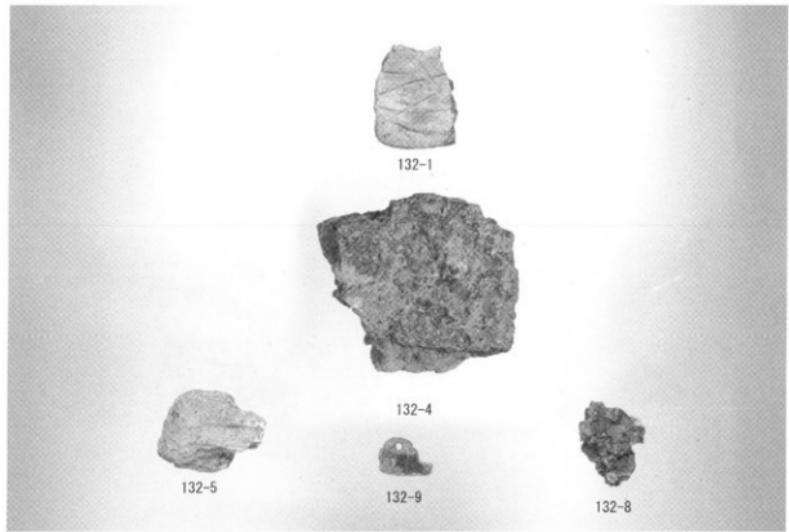
128-4

10 区 東側出土遺物

圖版 68 沖手遺跡

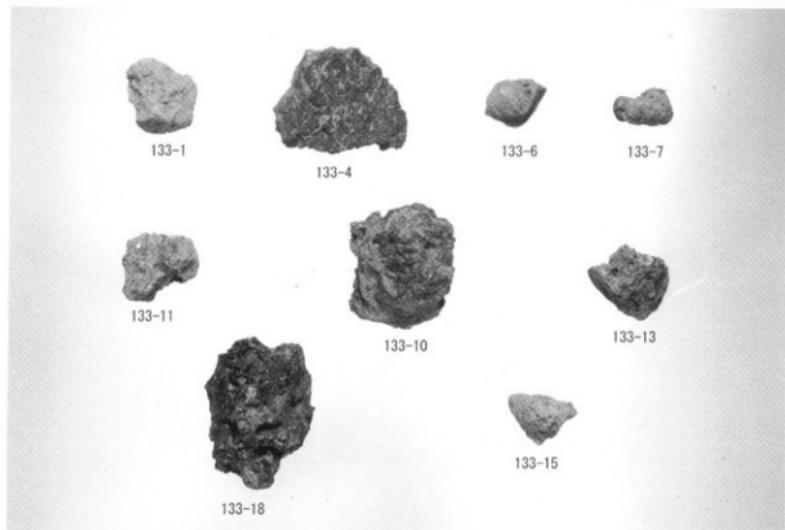


墓 78 出土遺物

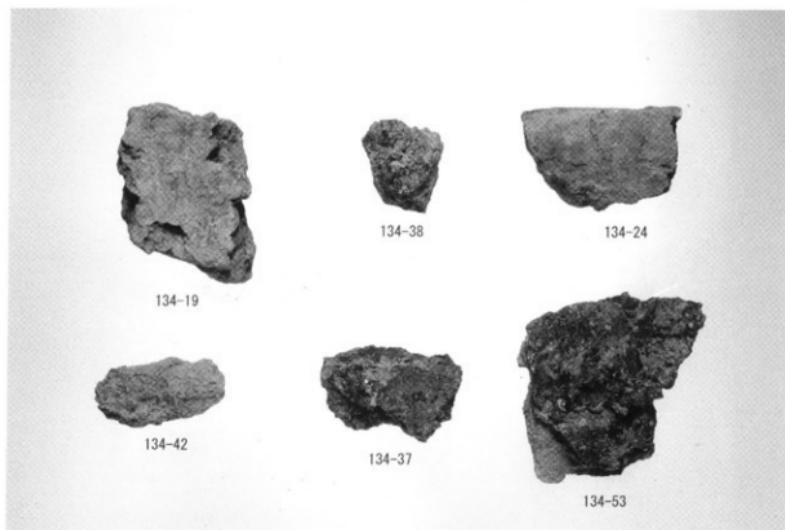


鑄造関連遺物①

図版 69 沖手遺跡

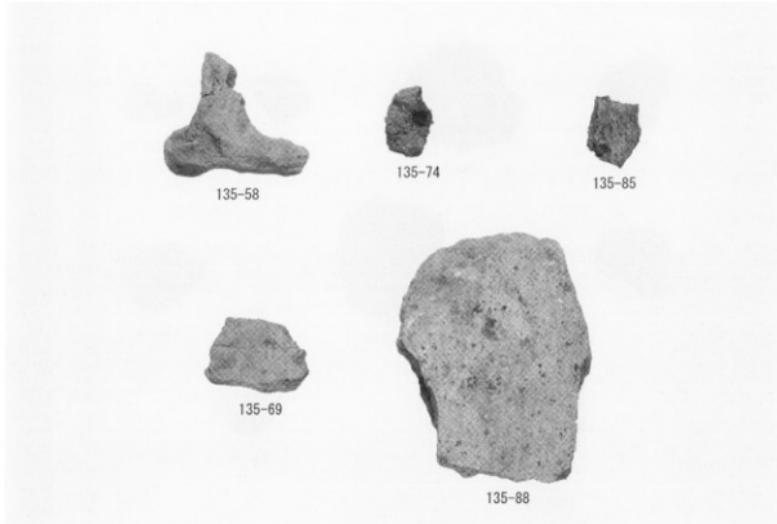


鋳造関連遺物②

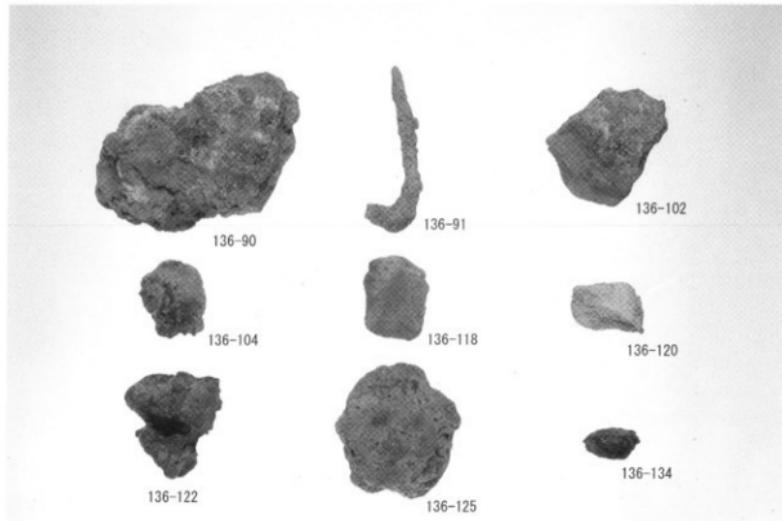


鋳造関連遺物③

図版 70 沖手遺跡



鋳造関連遺物④



鋳造関連遺物⑤

図版 71 久城東遺跡



1. 調査前状況（南西から）



2. 調査区北東域の表土掘削前状況（南西から）



3. 土層堆積状況（N-3 区・北壁）

図版 72 久城東遺跡



1. 土層堆積状況 (N-4・5区・北壁)



2. 土層堆積状況 (S-3区・SD01・東壁)



3. 土層堆積状況 (S-5区・南壁)

図版 73 久城東遺跡



1. 土層堆積状況（調査区中央域・北壁及び西壁）



2. 土層堆積状況（S-11 区・北壁）



3. 土層堆積状況（S-13 区・北壁）

図版 74 久城東遺跡



1. 調査指導・助言風景



2. 発掘作業風景



3. 現地説明会風景



1. 土層堆積状況及び杭列の検出状況 (S-10 区)



2. 弥生土器 Po84 の検出状況 (N-3 区・S101 内中央部)



3. 土師器・須恵器の出土状況 (N-5 区)

図版 76 久城東遺跡



1. 弥生土器の出土状況 (S-10 区)



2. 須恵器壺蓋 Po59・60 の出土状況 (S-4 区)



3. 竪穴住居 SI01 の検出状況 (N-3 区・北東から)

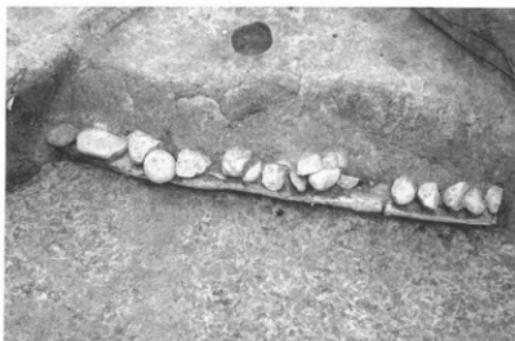
図版 77 久城東遺跡



1. 竪穴住居 SI01 の精査状況 (N-3 区・東から)

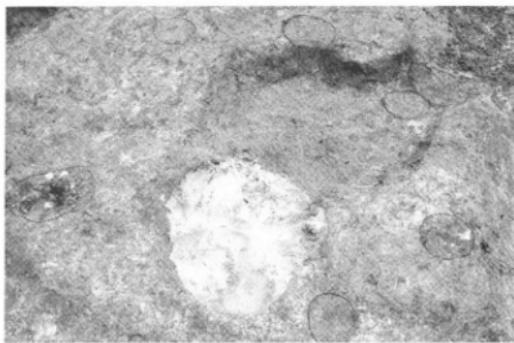


2. 木材片・瓦溜り検出状況 (S-3 区・北から)

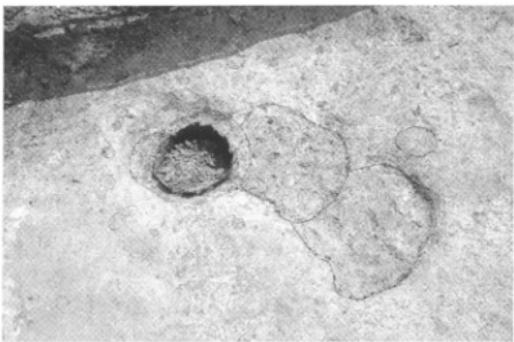


3. 石組状遺構の検出状況 (S-4 区・北西から)

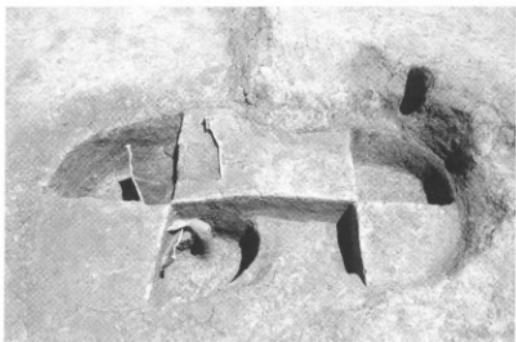
図版 78 久城東遺跡



1. 井戸 SX04 の表出状況 (S-3 区・北西から)



2. 水桶 SX05 の表出状況 (S-3 区・西から)



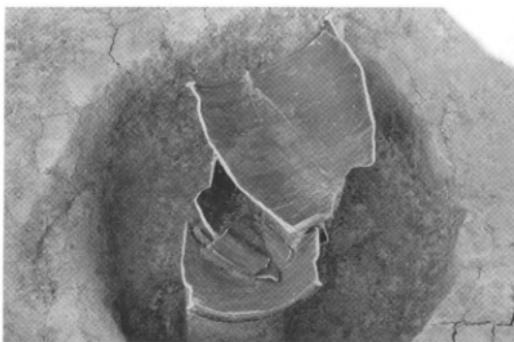
3. 大甕 SX09 の精査状況 (S-4 区・南西から)



1. 近代墓等の検出状況 (S-2 区・南東から)



2. 水桶 SX05 の検出状況 (S-3 区・西から)



3. 大甕 SX09 の検出状況 (S-4 区・南西から)

図版 80 久城東遺跡



1. 調査区北東域の完掘状況（南西から）



2. 調査区南西域の完掘状況（北東から）



3. 調査区全域の完掘状況（南西から）

図版 81 久城東遺跡

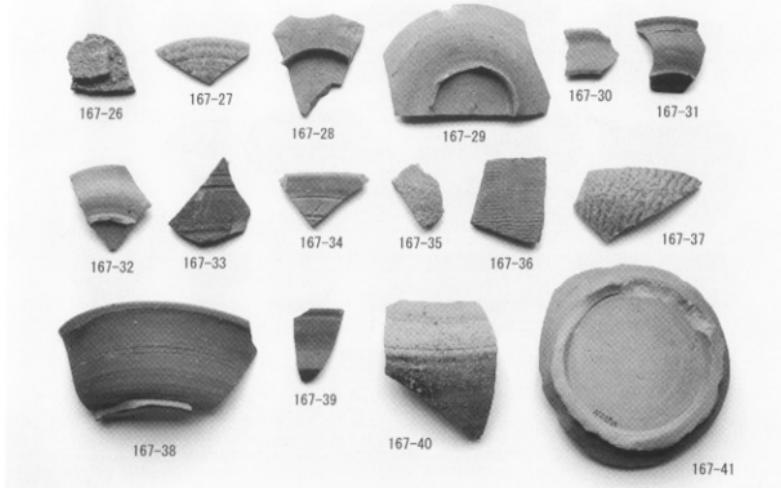


1. 弥生土器・土師器

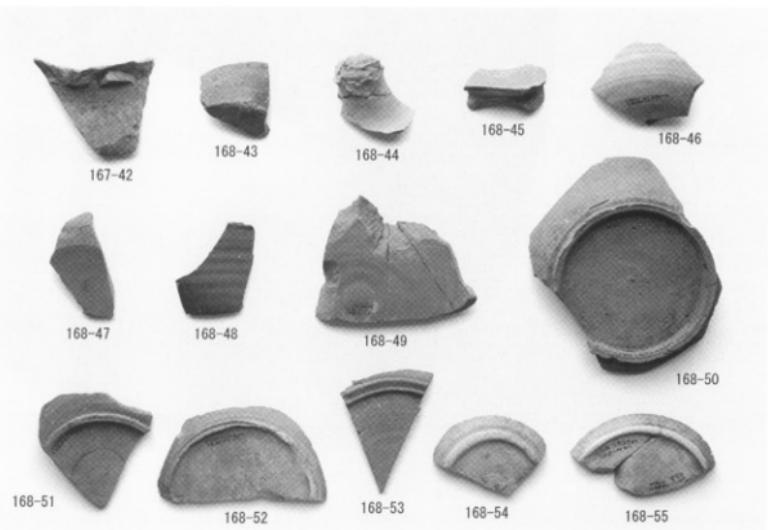


2. 弥生中期末土器の底部

図版 82 久城東遺跡

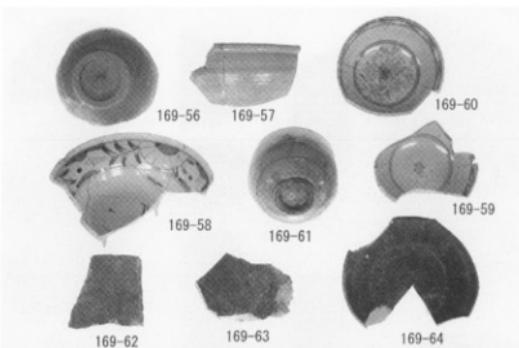


1. 須恵器(1)

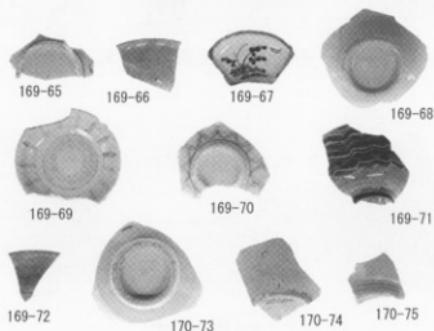


2. 須恵器(2)

図版 83 久城東遺跡



1. 国産陶磁器類(1)



2. 国産陶磁器類(2)

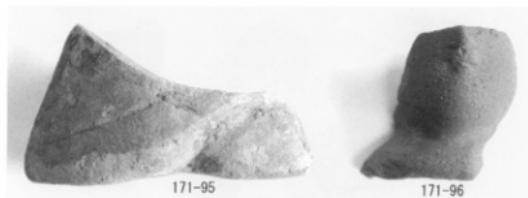


3. 国産陶磁器類(3)

図版 84 久城東遺跡



1. 石製品・石器・瓦質土器・窯道具・鉄製品



2. 土人形（拡大）



3. 復元された大甕

## 報告書抄録

ふりがな	おきていせき・くしろひがしいせき							
書名	沖手遺跡・久城東遺跡							
副書名	一般県道久城インター線久城工区地方道路交付金(改良)工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	山本 浩之、大野 芳典							
編集機関	益田市教育委員会							
所在地	〒698-0033 島根県益田市元町11番15号 Tel0856-31-0623							
発行年月日	2010年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
		市町村	遺跡番号					
沖手遺跡	島根県 益田市 久城町	32204	Q271	34°41'36"	131°50'29"	2004.5.14 ～2005.2.28 2005.7.11 ～2006.3.24 2006.4.10 ～2006.7.3	7,160m <sup>2</sup>	県道
久城東遺跡	島根県 益田市 久城町	32204	Q269	34°41'48"	131°50'52"	2007.6.1 ～2007.12.1	1,750m <sup>2</sup>	県道
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
沖手遺跡	集落跡	縄文時代 ～ 江戸時代	掘立柱建物跡、柱列、溝状遺構、井戸、墓、土坑		弥生土器、石器、土師器、須恵器、中世土師器、瓦質土器、陶磁器、金属製品、鍛冶、鑄造、閉連遺物、木製品		中世の大規模集落遺跡	
久城東遺跡	集落跡	弥生中期 後葉～後期、奈良時代、近世	竪穴住居跡（弥生）、柱穴、土坑、溝状遺構など		弥生土器、土師器、須恵器、国産陶磁器類、石器、石製品、土製品、瓦質土器、窯道具など		焼失住居（弥生）、古代・近世の集落遺跡	

## 沖手遺跡・久城東遺跡

一般県道久城インター線久城工区地方道路交付金（改良）工事  
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成 22 年 3 月発行

編集・発行 益田市教育委員会

島根県益田市元町 11 番 15 号

印刷 有限会社 原 印刷